

西新町遺跡 V

—福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第13次調査報告2—

福岡県文化財調査報告書 第178集

2003

福岡県教育委員会

西新町遺跡 V

—福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第13次調査報告2—

福岡県文化財調査報告書 第178集

2003

福岡県教育委員会



西新町遺跡第13次調査出土朝鮮半島系土器

序

福岡県は三方を海に囲まれ、古くから海上交通の要地として我が国の発展に大いに寄与してまいりました。中でも玄界灘に面した福岡市は、我が国の海の玄関口として古来より大いに栄え、先人達の広範な交流を示す貴重な文化財も数多く残されています。

福岡県教育委員会では、福岡県立修猷館高等学校の校舎改築事業に係る埋蔵文化財の発掘調査を平成10年度より進めております。この高校が位置する福岡市早良区西新には西新町遺跡と呼ばれる著名な遺跡があり、弥生時代から古墳時代に玄界灘を往来した人々の足跡、特に朝鮮半島との盛んな交流を物語る国際色豊かな遺跡として、国内のみならず海外からも注目を浴びています。

本書は平成12年度に実施した西新町遺跡第13次発掘調査の成果のうち、古墳時代の竪穴住居跡以外の遺構・遺物、そして近世以降の遺構・遺物について報告したもので、昨年度刊行の『西新町遺跡』Ⅳの続編にあたります。

今回報告する中にも古墳時代の国際交流を如実に示すもの、近世黒田藩窯の実態が垣間見れるものなどが見られ、福岡県の歴史を紐解く上で重要な資料を提示することができました。

本書が県内外、また国際的な交流史研究、あるいは学校教育、生涯学習の資料として活用され、文化財愛護思想普及の一助となれば幸いに存じます。

最後に発掘調査および整理作業、報告書の作成に当たりまして御協力いただきました多くの方々に対し、深甚の謝意を表します。

平成15年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 森山 良一

例 言

1. 本報告書は平成12年度に福岡県教育委員会が実施した、福岡県立修猷館高等学校改築事業に係る埋蔵文化財の発掘調査報告書であり、同高等学校敷地内での埋蔵文化財発掘調査報告の5冊目にあたる。
2. 本書に掲載した遺跡は福岡市早良区西新6-1-10に所在する西新町遺跡で、福岡市教育委員会実施分も含めて第13次の調査にあたる。福岡市教育委員会の調査番号は0066である。
3. 本報告書では、第13次調査の成果のうち竪穴住居跡以外の古墳時代の遺構・遺物と近世以降の遺構・遺物について報告したものである。なお、古墳時代の竪穴住居跡とその出土遺物については、西新町遺跡Ⅳ（福岡県文化財調査報告書第168集）において既に報告済みであり、本書はその続編にあたる。
4. 本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が、遺物写真の撮影のうち巻頭図版は石丸洋が、その他は北岡伸一が行った。空中写真は（有）空中写真企画に委託し、気球による撮影を行った。
5. 本書に掲載した遺構図の作成は、調査担当者の他、大谷周平、木村友宏、河野牧子、坂元雄紀、銀鏡佳、中山圭、榑崎直子、藤原史彦、船越陽、古澤義久、横溝舞、吉田浩之、和久田憲吾らの協力を得た。
6. 出土遺物の整理・復元作業は九州歴史資料館で行った。
7. 出土土器の実測は吉田東明の他、坂元雄紀、平田春美、棚町陽子、久富美智子、坂田順子、若松三枝子、堀江圭子、中村洋子、中川真理子、橋之口雅子、荒川妙、西亜彩子が行った。土器以外の出土遺物の実測は吉田、坂元が行った。
8. 遺構・遺物の製図は豊福弥生、原カヨ子、江上佳子が行った。
9. 第12次調査2号土坑出土イヌ遺体の分析については鹿児島大学獣医学科解剖学教室の西中川駿・小山田和央の両氏に、また第13次調査出土土器の胎土分析については大谷女子大学理学博士 三辻利一氏に依頼し、併せて報告を頂いた。記して感謝の意を表す次第である。
10. 本書の執筆は、第4章-1を西中川駿・小山田和央の両氏、第4章-2を三辻利一氏、土器以外の遺物を坂元が行い、他を吉田が行った。
11. 本書の編集は坂元・宮地の協力を得て吉田が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 整理の経過	1
第2節 整理の関係者	1
第2章 位置と環境	2
第1節 遺跡の地理的環境	2
第2節 遺跡の歴史的環境	4
第3章 調査の内容	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	13
第3節 古墳時代の遺構と遺物	14
1. 古墳時代の土坑と出土土器	14
2. 古墳時代のその他の遺構と出土土器	17
3. 包含層・遺構面・攪乱等出土土器	36
4. 古墳時代の石器・鉄器・土製品	109
第4節 古墳時代以外の遺構と遺物	116
1. 弥生時代の土坑と出土土器	116
2. その他の弥生時代・古墳時代後期の遺物	116
3. 近世・近代の遺構と遺物	119
4. ピット、遺構面、攪乱出土の近世・近代陶磁器等	133
5. その他の近世・近代遺物	147
第4章 自然科学系の分析	164
第1節 西新町遺跡第12次調査出土のイヌ遺体	164
第2節 西新町遺跡第13次調査出土土器の蛍光X線分析	168
第5章 西新町遺跡第13次調査のまとめ	177
第1節 古墳時代の遺構と遺物	177
1. 集落について	177
2. カマドについて	178
3. 半島系土器について	181
4. まとめ	189
第2節 近世の遺物について	191
第6章 おわりに	200

図 版 目 次

- 巻頭図版 西新町遺跡第13次調査出土朝鮮半島系土器
- 図版1 1. 調査区遠景（南西から）
2. 調査区全景（南から）
- 図版2 1. I区全景空中写真（南から）
2. II区全景空中写真（東から）
- 図版3 1. 1号土坑（南から）
2. 2号土坑（南から）
3. 3号土坑（西から）
- 図版4 1. 4号土坑（東から）
2. 5号土坑（北から）
3. 6号土坑（南から）
- 図版5 1. 7号土坑（東から）
2. 8号土坑（北から）
3. 9号土坑（北から）
- 図版6 1. 10号土坑（南東から）
2. 11号土坑（東から）
3. 12号土坑（北西から）
- 図版7 1. 13号土坑（東から）
2. 1号溝（南から）
3. 1号溝断面土層（東から）
- 図版8 1. 1号埋甕（東から）
2. 1号落ち込み（上空から）
3. 1号落ち込み I区東5西壁土層（東から）
- 図版9 1. 1号旧校舎基礎（南から）
2. 2号旧校舎基礎（西から）
3. 3号旧校舎基礎（北から）
- 図版10 土坑、溝出土土器
- 図版11 溝、I区南9西壁トレンチ出土土器
- 図版12 溝、落ち込み、ピット、I区包含層出土土器
- 図版13 I区包含層出土土器①
- 図版14 I区包含層出土土器②
- 図版15 I・II区包含層出土土器
- 図版16 I区遺構面出土土器
- 図版17 I・II区遺構面、攪乱等出土土器
- 図版18 攪乱等出土土器①

- 図版19 攪乱等出土土器②
- 図版20 攪乱等、弥生時代土坑出土土器
- 図版21 1. 土坑、溝、落ち込み出土半島系土器
2. 落ち込み出土半島系土器
- 図版22 1. ピット出土半島系土器
2. I区包含層出土半島系土器①
- 図版23 1. I区包含層出土半島系土器②
2. I区包含層出土半島系土器③
- 図版24 1. I区包含層出土半島系土器④
2. I区包含層出土半島系土器⑤
- 図版25 1. I区包含層出土半島系土器⑥
2. I区包含層出土半島系土器⑦
- 図版26 1. I区包含層出土半島系土器⑧
2. I・II区包含層出土半島系土器
- 図版27 1. I区遺構面出土半島系土器①
2. I区遺構面出土半島系土器②
- 図版28 1. I・II区遺構面、攪乱等出土半島系土器
2. 攪乱等出土半島系土器①
- 図版29 1. 攪乱等出土半島系土器②
2. 攪乱等出土半島系土器③
- 図版30 1. 攪乱等出土半島系土器④
2. 攪乱等出土半島系土器⑤
- 図版31 1. 攪乱等出土半島系土器⑥
2. 攪乱等出土半島系土器⑦
- 図版32 1. 石製品①
2. 石製品②
3. 石製品③
4. 鉄製品
- 図版33 1. 土製品①
2. 土製品②
3. 弥生時代の石製品
- 図版34 土坑出土陶磁器等①
- 図版35 土坑出土陶磁器等②
- 図版36 土坑、ピット出土陶磁器等
- 図版37 ピット出土陶磁器等
- 図版38 ピット、その他出土陶磁器等
- 図版39 その他出土陶磁器等①
- 図版40 その他出土陶磁器等②

- 図版41 その他出土陶磁器等③
- 図版42 その他出土陶磁器等、埋甕、近世の土製品
- 図版43 1. 窯道具①
2. 窯道具②
3. 窯道具③
4. 窯道具④
- 図版44 1. 窯道具⑤
2. 古墳時代、近世以降の石製品
3. 近世以降の金属製品①
- 図版45 1. 近世以降の金属製品②
2. 近世以降の土製品①
3. 近世以降の土製品②
4. 近世以降の土製品③
- 図版46 1. 貨幣①
2. 貨幣②
3. ガラス瓶①
4. ガラス瓶②
- 図版47 1. ガラス瓶③
2. ガラス瓶④
3. 硯

挿 図 目 次

第1図	西新町遺跡の位置	2
第2図	主要遺跡分布図 (1/50,000)	3
第3図	発掘調査区の位置と周辺調査地 (1/4,000)	9
第4図	明治三十五年 陸軍測量部発行 周辺地形図 (1/20,000)	10
第5図	調査区周辺地形図 (1/1,500)	11
第6図	調査区区割図 (1/500)	12
第7図	西新町遺跡13次近世以降遺構配置図 (1/250)	折り込み
第8図	西新町遺跡13次古墳時代遺構配置図 (1/250)	折り込み
第9図	西新町遺跡第13次調査基本層序 (1/60)	13
第10図	8・10～12号土坑実測図 (1/30)	15
第11図	8・10・12号土坑出土土器実測図 (1/3)	16
第12図	1号溝断面土層図 (1/30)	17
第13図	1号溝実測図 (1/100)	18
第14図	1号溝出土土器実測図① (1/3)	19
第15図	1号溝出土土器実測図② (1/3)	21
第16図	1号溝出土土器実測図③ (1/3)	23
第17図	I区南9西壁トレンチ出土土器実測図 (1/3)	25
第18図	1号落ち込み実測図 (1/100)	27
第19図	1号落ち込み断面土層図 (1/50)	28
第20図	1号落ち込み出土土器実測図① (1/3)	30
第21図	1号落ち込み出土土器実測図② (1/3)	32
第22図	ピット出土土器実測図 (1/3)	34
第23図	I区包含層出土土器実測図① (1/3)	37
第24図	I区包含層出土土器実測図② (1/3)	39
第25図	I区包含層出土土器実測図③ (1/3)	41
第26図	I区包含層出土土器実測図④ (1/3)	43
第27図	I区包含層出土土器実測図⑤ (1/3)	45
第28図	I区包含層出土土器実測図⑥ (1/3)	47
第29図	I区包含層出土土器実測図⑦ (1/3)	49
第30図	I区包含層出土土器実測図⑧ (1/3)	51
第31図	I区包含層出土土器実測図⑨ (1/3)	53
第32図	I区包含層出土土器実測図⑩ (1/3)	55
第33図	I区包含層出土土器実測図⑪ (1/3)	57
第34図	II区包含層出土土器実測図 (1/3)	59
第35図	I区遺構面出土土器実測図① (1/3)	62

第36図	I区遺構面出土土器実測図② (1/3)	64
第37図	I区遺構面出土土器実測図③ (1/3)	66
第38図	I区遺構面出土土器実測図④ (1/3)	68
第39図	I区遺構面出土土器実測図⑤ (1/3)	70
第40図	I区遺構面出土土器実測図⑥ (1/3)	72
第41図	II区遺構面出土土器実測図① (1/3)	74
第42図	II区遺構面出土土器実測図② (1/3)	75
第43図	攪乱等出土土器実測図① (1/3)	77
第44図	攪乱等出土土器実測図② (1/3)	79
第45図	攪乱等出土土器実測図③ (1/3)	81
第46図	攪乱等出土土器実測図④ (1/6,1/3)	83
第47図	攪乱等出土土器実測図⑤ (1/3)	85
第48図	攪乱等出土土器実測図⑥ (1/3)	87
第49図	攪乱等出土土器実測図⑦ (1/3)	89
第50図	攪乱等出土土器実測図⑧ (1/3)	91
第51図	攪乱等出土土器実測図⑨ (1/3)	93
第52図	攪乱等出土土器実測図⑩ (1/3)	95
第53図	攪乱等出土土器実測図⑪ (1/3)	97
第54図	攪乱等出土土器実測図⑫ (1/3)	99
第55図	攪乱等出土土器実測図⑬ (1/3)	101
第56図	攪乱等出土土器実測図⑭ (1/3)	105
第57図	攪乱等出土土器実測図⑮ (1/3)	107
第58図	石製品実測図① (1/2)	110
第59図	石製品実測図② (1/2,1/3)	111
第60図	石製品実測図③ (1/2)	113
第61図	土製品実測図 (1/2)	114
第62図	鉄製品実測図 (1/2)	115
第63図	13号土坑実測図 (1/30)	116
第64図	13号土坑出土土器実測図 (1/3)	117
第65図	その他の弥生時代・古墳時代後期土器実測図 (1/3)	118
第66図	弥生時代の石製品実測図 (1/1)	119
第67図	1~3号土坑実測図 (1/30)	120
第68図	1~4号土坑出土陶磁器等実測図 (1/3)	121
第69図	4~6号土坑実測図 (1/30)	123
第70図	5号土坑出土陶磁器等実測図① (1/3)	124
第71図	5号土坑出土陶磁器等実測図② (1/3)	125
第72図	6号土坑出土陶磁器等実測図① (1/3)	127
第73図	6号土坑出土陶磁器等実測図② (1/3)	128

第74図	7・9号土坑実測図 (1/30)	130
第75図	7号土坑出土陶磁器等実測図 (1/3)	131
第76図	1号埋甕実測図 (1/10)	132
第77図	1号埋甕・出土土器実測図 (1/4,1/3)	133
第78図	1・2号旧校舎基礎実測図 (1/40)	134
第79図	3号旧校舎基礎実測図 (1/40)	135
第80図	ピット出土陶磁器等実測図① (1/3)	137
第81図	ピット出土陶磁器等実測図② (1/3)	138
第82図	その他出土陶磁器等実測図① (1/3)	139
第83図	その他出土陶磁器等実測図② (1/3)	141
第84図	その他出土陶磁器等実測図③ (1/3)	142
第85図	その他出土陶磁器等実測図④ (1/3)	143
第86図	その他出土陶磁器等実測図⑤ (1/3)	145
第87図	その他出土陶磁器等実測図⑥ (1/3)	146
第88図	その他出土陶磁器等実測図⑦ (1/3)	148
第89図	窯道具実測図① (1/3)	149
第90図	窯道具実測図② (1/3)	150
第91図	近世以降の石製品実測図 (1/2,1/3)	151
第92図	近世以降の金属製品実測図 (1/2)	152
第93図	近世以降の土製品実測図 (1/2)	154
第94図	貨幣実測図① (1/1)	156
第95図	貨幣実測図② (1/1)	157
第96図	ガラス瓶実測図① (1/2)	159
第97図	ガラス瓶実測図② (1/2)	160
第98図	硯実測図 (1/3)	161
第99図	第12次調査 2号土坑実測図 (1/60)	164
第100図	西新町遺跡第12次調査出土イヌ遺体	167
第101図	第13次調査出土布留系土器の両分布図	169
第102図	第13次調査出土在地系土器の両分布図	169
第103図	第13次調査出土半島系土器の両分布図	169
第104図	第13次調査出土山陰系・吉備系・庄内系土器の両分布図	169
第105図	第12次調査出土布留系土器の両分布図	170
第106図	第12次調査出土在地系土器の両分布図	170
第107図	第12次調査出土半島系土器の両分布図	170
第108図	第12次調査出土山陰系・吉備系・庄内系土器の両分布図	170
第109図	西新町遺跡第13次調査出土 胎土分析対象土器① (1/6)	174
第110図	西新町遺跡第14次調査出土 胎土分析対象土器② (1/6)	175
第111図	西新町遺跡第15次調査出土 胎土分析対象土器③ (1/6)	176

第112図	西新町遺跡東半部 竪穴住居跡変遷図 (1/1,000)	折り込み
第113図	西新町遺跡のカマド分類	179
第114図	西新町遺跡のカマド・炉の推移	179
第115図	カマドの方位	180
第116図	西新町遺跡のカマド付竪穴住居跡変遷図 (1/1,000)	折り込み
第117図	カマド類型別分布図 (1/1,000)	折り込み
第118図	西新町遺跡第13次調査区出土半島系土器分布図	182
第119図	西新町遺跡第13次調査区出土半島系土器① (1/6)	183
第120図	西新町遺跡第13次調査区出土半島系土器② (1/6)	184
第121図	朝鮮半島の類似例 (1/6)	186
第122図	生産された可能性の高い製品 (1/4)	192

表 目 次

第1表	西新町遺跡調査次数一覧	9
第2表	西新町遺跡第13次調査出土土器の分析データ	172・173
第3表	西新町遺跡第13次調査竪穴住居跡一覧	194・195
第4表	西新町遺跡 カマド付設竪穴住居跡一覧	196
第5表	西新町遺跡第13次出土石製品・土製品・金属製品一覧	197～199

第1章 はじめに

第1節 整理の経過

西新町遺跡第13次調査の整理並びに報告書作成は、教育庁総務部文化財保護課が教育庁企画部施設課から執行委任を受け、平成13年度、14年度の2ヶ年に分けて実施することとなった。

平成13年度には福岡県文化財調査報告書第168集として『西新町遺跡』Ⅳを刊行し、古墳時代の竪穴住居跡とその出土遺物を報告したが、本年度はそれ以外の遺構と遺物について整理を行い、その報告を行う。

第2節 整理の関係者

平成14年度の西新町遺跡第13次調査報告書作成にかかる整理事業関係者は次のとおりである。

西新町遺跡第13次 整理関係者

総括

福岡県教育委員会	教育長	森山 良一
	教育次長	三瓶 寧夫
総務部	部長	松本 通憲
	課長	井上 裕弘
文化財保護課	参事兼課長技術補佐	橋口 達也
		川述 昭人
	参事兼課長補佐	久芳 昭文
	参事補佐兼管理係長	古賀 敏生
	主任主事	秦 俊二
整理・報告書作成	参事補佐兼調査第一係長	佐々木 隆彦
	主任技師	岸本 圭 (整理担当)
		今井 涼子 (整理担当)
		宮地 聡一郎 (報告書作成)
	技師	坂元 雄紀 (報告書作成)
甘木歴史資料館	副館長	吉田 東明 (報告書作成)

整理・報告書作成作業中には下記の機関・方々から有益な御教示を頂いた。(敬称略)

九州大学 (株) 小林製薬 (株) パイロット (株) フェキ 防衛研究所図書館 陸上自衛隊第104不発弾処理隊 朴天秀 (慶北大学) 鄭桂玉 (国立昌原文化財研究所) 武末 純一 (福岡大学) 宮本 一夫 (九州大学) 寺井 誠 (大阪市文化財協会) 高田 貫太 (慶北大学)

無事報告書を刊行することができたのも、修猷館高等学校、福岡市教育委員会埋蔵文化財課をはじめ、発掘調査から整理作業にいたるまで多くの皆様の誠意と努力、そして暖かな心遣いをいただいたお陰である。調査・整理担当者一同、皆様に心から感謝申し上げます。

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の地理的環境

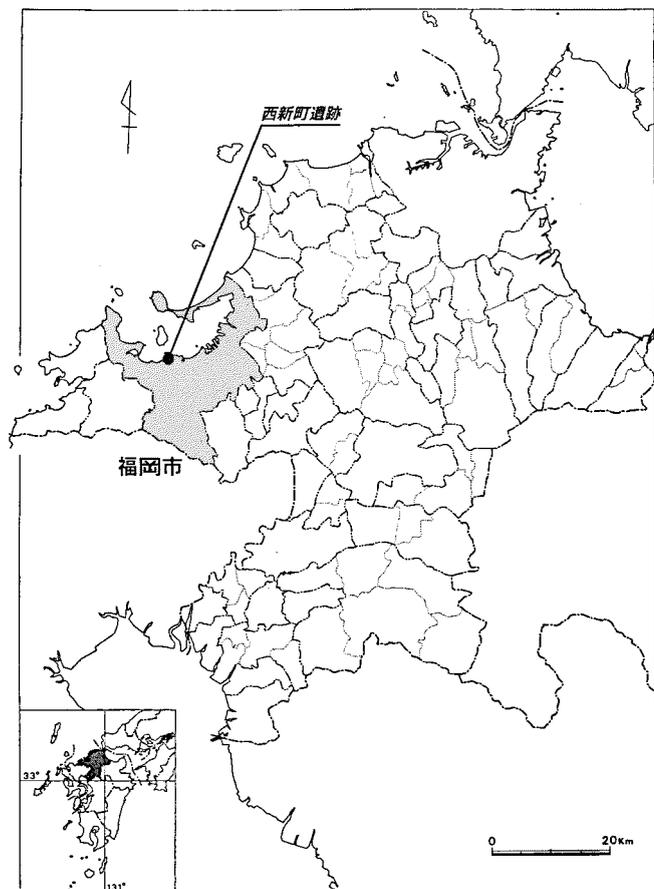
福岡市は福岡県の西北に位置する政令都市である。福岡県の県庁所在地であるとともに、九州の情報発信地として大都市圏を形成し、古来より我が国の海上交通の門戸として栄え、現在でも我が国とアジア各地とを繋ぐ国際都市として大きな役割を担っている。

早良区はこの福岡市の西側に位置し、東は飯倉丘陵を境に福岡市城南区・筑紫郡那珂川町と接し、南は背振山系を境にして佐賀県神埼郡と接し、西は背振山地から南に派生した飯盛山を境に前原市と接し、北は博多湾に面して能古島、志賀島などを望む。早良平野は早良区の北側に広がり、背振山系に始まりほぼ平野の中央を流れる室見川の沖積作用と、海浜部の海岸砂・風成砂の堆積作用により形成された平野である。

古くからこの肥沃な平野を利用した各種農業を生活基盤として発展してきたが、近世以降は唐津街道筋を中心に商業も発展し、さらに近年では海浜部の埋め立てにより陸地化した一帯に高層ビルや高級マンションなどが建ち並び、過密化を遂げた福岡市の新たな副都心として大きく変貌しつつある。

西新町遺跡のある早良区西新は、早良平野の北東にあり、唐津街道沿いの商業地として近世以降に栄えた町である。西新町遺跡は西新のほぼ中央に位置する福岡県立修猷館高校を中心に、東西約800m、南北約300mの規模で楕円形状に広がる遺跡である。今回報告する西新町遺跡第13次調査区はこの修猷館高校の敷地内東端に位置する。調査区の地番は福岡市早良区西新6丁目1番10号。

西新町遺跡は、完新世に形成された海岸砂丘砂層上に立地する。この砂層は箱崎砂層と呼称され、博多湾南岸に展開する福岡市街地の主要な部分を占めている。主体は石英質あるいはマサ質の砂層で粗粒砂の場合が多い。この砂層は海岸線に平行する方向に、少なくとも3列の微高地からなる砂丘と砂丘間低地を構成する。このうち西新町遺跡の一角は、中央の砂丘上と、その北側に位置する砂丘の間に形成された砂丘間低地上に立地する。中央の砂丘の主軸は西新から藤崎方面に連続し、長さは2.5km、最も発達のない中央区鳥飼神社付近で幅約170m、高度8mに達する。この砂丘上には西新町遺跡では弥生時代の住居跡が、藤



第1図 西新町遺跡の位置



----- 縄文海進ピーク時の
推定海岸線



- | | | | | | |
|-------------|-------------|------------|-----------|------------|-----------|
| 1. 西新町遺跡 | 7. 五島山古墳 | 13. 梅林古墳 | 19. 金武古墳群 | 25. 野芥遺跡 | 31. 鳥越古墳群 |
| 2. 藤崎遺跡 | 8. 拾六町ツイジ遺跡 | 14. 野方久保遺跡 | 20. 都地遺跡 | 26. 山崎古墳群 | 32. 能古焼窯跡 |
| 3. 元冠防塁 | 9. 橋本一丁目遺跡 | 15. 野方中原遺跡 | 21. 四箇遺跡群 | 27. クエソノ遺跡 | |
| 4. 西皿山窯跡推定地 | 10. 有田遺跡 | 16. 羽根戸古墳群 | 22. 重留遺跡 | 28. 七隈古墳群 | |
| 5. 東皿山窯跡推定地 | 11. 原遺跡 | 17. 吉武遺跡群 | 23. 東入部遺跡 | 29. 大谷古墳群 | |
| 6. 姪浜遺跡 | 12. 飯倉遺跡群 | 18. 田村遺跡 | 24. 重留古墳群 | 30. 倉瀬戸古墳群 | |

第2図 主要遺跡分布図 (1/50,000)

崎遺跡では甕棺が分布する。砂丘間低地は主として海浜砂から構成され、風成砂はほとんど分布していない。また、最も海浜側に位置する砂丘は西公園から百道にかけての元寇防塁線に沿って分布し、高度6m、幅は狭く50m未満である。この砂丘より北側は江戸時代以降に海浜が陸化した地域である。

この3列の砂丘のうち、最も内陸側に位置する砂丘は縄文海進の最大海進期に形成されたものと推察される。なお祖原から西新にかけての一带はこの縄文海進最盛期においても半島状に陸地を形成する。中央の砂丘は遺跡の存在から少なくとも弥生時代前期以前に陸化したものであるが、一部は弥生時代後期まで海浜の状態にあったことが指摘されている。最も海浜側の砂丘は中世以降に形成されたものである。

第2節 遺跡の歴史的環境

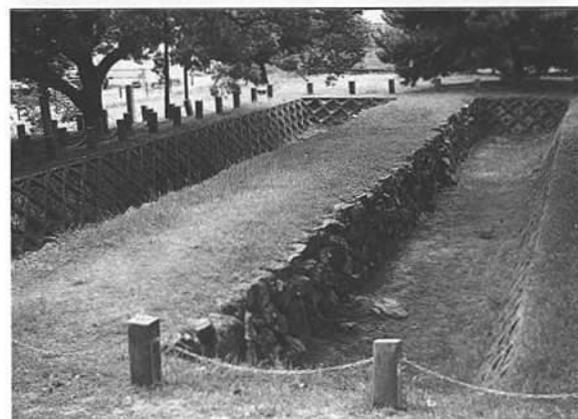
西新町遺跡の考古学的環境については既に『西新町遺跡』Ⅱ～『西新町遺跡』Ⅳで詳細に述べられている。ここではこれらを補足する意味も含め、その他の歴史事象を中心に述べることにする。

古代・中世

早良（サワラ）という地名は、延喜式二十二に「民部上、西海道筑前國上管、早良」とあり、また和名抄西海部第十七、筑前國部に「早良（佐波良）」とあるのが文献への初出である。付近の地に比してこの一帯がよく乾燥していたので、「さわらぐ（乾くこと）」からこの地名の起源があるともいい、また一説には武内宿禰がこの地に来訪した際、壱岐直真根子の女豊子姫を娶り、それが平群都久宿禰を生み、その子孫に河内國皇別早良臣という者がいることから名付けられたともいう。

博多湾沿岸地域はその地理的利便性から、古来より現在に至るまで我が国における国際交流の重要な地位を示し続けてきた。博多湾沿岸地域にはこうした国際性を示す遺跡が新旧を問わず少なからず見られるが、今回報告する西新町遺跡についても、発見される遺構・遺物に見られる国際性の豊かさはかねてより注目されているところである。商都博多の発展にこの地理的要因が大きく関わっていることは言うまでもないが、一方で大陸から日本を見た場合、その侵略の窓口でもあるという悲劇的側面をも有している。

寛仁三年（1019）の刀伊の襲来の際には対馬・壱岐より怡土郡に入り、志麻郡、早良郡を進んで那珂郡能古島から博多に上陸、警固所や宮崎宮において戦闘が行われた。文永十一年（1274）には蒙古軍が対馬・壱岐・肥前北岸を攻めた後、現在の福岡市西区今津に上陸、その後早良川口に至り、祖原・百道・赤坂山で激戦が行われた。日本軍は各所で敗退して水城まで引き上げ、宮崎宮、



国指定史跡 元寇防塁

博多の町は焼きつくされた。その夜暴風雨が吹き荒れ、蒙古軍の大船団は大破沈没し、引き上げていったという、いわゆる「神風」の話はよく知られている。

この出来事がきっかけで鎌倉幕府は九州各国の御家人に呼びかけ、博多湾沿岸に元寇防塁が築かれることとなる。現在では福岡市西区今津ほか十ヶ所が国指定史跡として指定されている。西新町遺跡の北隣にある西南学院大学では、大正13年12月に防塁を横断する道路建設に先立ち断面確認調査が行われその結果が報告されている。近年では平成11年に西南学院大学第1号館の新設に先立ち、福岡市教育委員会により行われた発掘調査でも元寇防塁跡が確認され、建設された校舎内で復元・展示されている。因みに箱崎・博多・赤坂にあった防塁の石は慶長六年の福岡築城の際に石垣用に取り去られたと「筑前国続風土記」には記される。また明治29年より開始された修猷館高校建設の際、校舎の基礎石として防塁の石が使用された可能性も指摘されている。



大学校舎内で復元・展示される元寇防塁

近世

江戸時代、黒田の治世においては早良郡は上触・下触に分けられ、西新町は下触に属した。この西新町という名称は、黒田藩三代藩主光之治世の寛文六年（1666）、早良郡壹岐村橋本にあった紅葉八幡宮をこの地に移したところ、次第に家屋が立ち並んで市街地化したため、福岡の西町に続く新たな市街という所から西新町と称されるようになったといわれ、元文四年（1739）には鳥飼・祖原・荒江三ヶ所を分けて西新町村が成立する。尚、修猷館高校のある一帯は新屋敷と称されているが、これは明和六年（1769）、七代藩主治之の夫人が輿入れする際、付き人に海岸一帯の土地を与え、その付き人が新たに屋敷を営んだことによるという。

ところで、近世の西新近郊で行われていた諸産業のうち、注目すべきものに窯業生産がある。高取焼と呼ばれる陶器がそれである。

筑前高取焼は文禄・慶長の役の際、黒田長政が朝鮮半島より陶工の八山（高取八蔵重貞）を連れ帰り、中津より転封後の慶長十二年（1607）、手塚水雪の居城であった鷹取城の西麓、現直方市永満寺の永満寺宅間窯にて黒田藩御用窯として作陶させたのが始まりと言われる。慶長十九年（1614）、一国一城令による鷹取城廃城と同時期に同じく直方市の内ヶ磯に窯を移した。寛永元年（1624）に八山の長男八郎右衛門が朝鮮への帰国を願い出ると、当時まだ若かった黒田第三代藩主光之の怒りにふれ、一同は山田市木城唐入谷へと閉居させられる。この時築かれたのが山田窯である。前二者とこの山田窯で作られたものは俗に「古高取」と呼ばれている。



内ヶ磯窯出土品

寛永七年（1630）八山親子は赦されて再び藩

窯に召し抱えられ、飯塚市幸袋に白旗山窯を築いた。この時代のものは「遠州高取」と呼ばれている。寛文五年（1665）、二代八山は小石原村鼓に移住しここに窯を築いた。これが小石原鼓窯であり、作られた焼物を新高取と云う。初代八山の孫八之丞は同村中野に移り、ここに小石原中野窯を開いた。小石原鼓窯が藩窯で主に御用品が焼かれていたのに対し、小石原中野窯では主に民間用の販売品が焼かれていた。



紅葉八幡宮

その後、貞享年間から元禄年間には小石原から御城下に移動し大鋸谷窯が作られるが、この大鋸谷窯の時代と場所は今もってはつきりしていない。

宝暦年間（1704～11）の初期、四代藩主綱政の時代に早良郡祖原村（西新町）上の山に御用窯が築かれた。これが東皿山窯である。ここでは主として茶入・茶碗・水指などの御用品が作られた。この東皿山窯は西新町遺跡の南側、現在の西新五丁目付近に比定されている。享保三年（1718）には五代藩主宣政の命により、東皿山の御用品に対する一般民用品の焼成・販売を行う西皿山窯が築かれた。これは東皿山の西方、現在紅葉八幡宮のある高取一丁目から二丁目付近に比定されている。

この東皿山窯・西皿山窯はともに明治4年（1871）の廃藩置県まで150年以上続き、廃藩置県の後藩窯としての役目を終えたが、その後も一般用の陶器生産が続けられた。明治・大正期には国内は無論のこと中国・朝鮮へも輸出されるという活況ぶりであったが、近年ではわずかな生産量に過ぎず、かつて窯場だった所も宅地化しており以前の面影はほとんど残されていない。

近代以降

明治4年（1871）の廃藩置県の後、福岡藩は福岡県となり、翌5年には大小区制が実施され、早良郡は第十四大区となった。この大区の下には17の小区が置かれ各村がこれに編成されたが、当時の資料に西新の名前は見られない。明治9年には怡土郡・志摩郡を併せて第九大区として再編成されるが、この下に置かれる第二小区には西新の名が記載されている。行政単位としての西新の起点である。明治11年には郡区町村制により早良郡が成立、22年の町村制の施行により西新・祖原を併せ、西新町として編成されるに至る。明治29年の郡制により怡土・志摩が糸島郡として成立し早良郡は独立することとなるが、成立当初の郡役所は西新町新屋敷に置かれていた。明治33年には福岡県立尋常中学修猷館（後の修猷館高校）が福岡市の大名から西新町新屋敷へと移転する。

明治42年には福岡工業株式会社による西新町祖原での大規模な石炭採掘を始め、明治43年には北筑軌道株式会社により西新町から糸島郡加布里まで軌道が敷設されるなど町は益々活況を呈して行く。大正11年西新町は福岡市に編入され、以降他の早良郡町村も福岡市へと編入、以降西新の地は福岡市の西の副都心として繁栄を続け、現在に至っている。

修猷館の歴史

修猷館は黒田藩の藩校として創設され、以来二百年を超える歴史を有しており、県内でも最も歴史の古い学校の一つとして知られる。また現在では県下有数の進学校として幾多の人材を輩出し、福岡県の教育史を知る上でも修猷館の存在は欠かすことが出来ない。ここではその修猷館の歴史について若干述べておきたい。

江戸時代、幕府の文治主義政策を背景に諸藩でも学問重視の傾向が強まり、藩士教育の必要性が叫ばれるようになった。天明四年（1784）第九代藩主斉隆の時、儒教教育を根幹とした藩体制の建て直しのため、藩校開設を行うこととなった。藩は貝原益軒の流れをくみ藩士教育の主流であった朱子学の竹田定良、そして新勢力で徂徠学派の民間学者亀井南冥の二人に、それぞれ藩士教育を命じ藩校を設立した。これが東学問所の修猷館、西学問所の甘棠館である。二校併立の目的は両者競合による好学意識の向上を狙ったものであり、全国的にも希有な例である。

東学問所修猷館は福岡城東門の外、大名町堀端に築かれた。館名は『尚書』の「微子之命」の章句「踐修厥猷」から採用された。教育理念においては益軒の遺訓を遵守し、『修猷館学規』を掲げ、朱子学を中心とした学問の他寛政十年には武芸稽古所も建築され、武術、兵学、礼法も併せて教育が行われた。

当初の目論見通り両学問所は切磋琢磨しあったが、八年後の寛政四年（1792）、甘棠館の亀井南冥は突如罷免されてしまう。寛政十年には火災焼失のせいもあり甘棠館は廃止され、以降藩校は修猷館へと一本化されることとなる。

福岡藩の学問・武芸における統轄機関として藩士教育が続けられた修猷館であったが、維新後、明治新政府が発布した廃藩置県により藩学校は廃止が決定、教員は罷免、藩校としての修猷館の歴史は幕を閉じた。

廃校より十年後の明治14年（1881）、学習希望の青年を広く集め教育する学校として、旧藩主黒田家の援助のもと私学藤雲館が天神町に開校された。これは法学教育施設として福岡最初のものであった。明治18年には、旧藩士の生活困窮を見かねた黒田長溥侯爵が、金子堅太郎ら旧藩士が提言する学校教育による旧藩士救済策を採用、金子らの奔走の結果、藤雲館の校舎等を黒田家が購入し藤雲館を廃して修猷館を再興することとなった。当初の校名は英語専修修猷館で、その名のとおり全教科を英語で教えるという徹底ぶりであった。明治26年に県費補助となるまで費用は全額黒田家が負担した。明治22年には福岡県立尋常中学修猷館と改称、同年に天神町からかつて藩校修猷館があった大名町堀端へと移転した。

明治28年（1895）、敷地拡大の必要性から移転新築の意見が挙がり、検討の結果早良郡西新町字一番丁、二番丁から浜の町にかけて、即ち広く新屋敷と呼ばれる土地が選定された。敷地購入後早速校舎新築が行われ、明治30年（1897）には二棟が完成、33年には西新町新校舎へと移転、授業が開始された。明治35年には寄宿舎も竣工され、大名町の寄宿舎より移転することとなった。尚、32年には福岡県中学修猷館と改称、33年に黒田家の補助を離れ、県費支弁の中学校となっている。

昭和11年には老朽化が目立った木造校舎改築工事が始まり、翌12年には本館新築第1期工事が完成、14年には第2期工事が完成した。これと同時に正門は南側へと移り、従来の正門は東門として残された。この頃には校内も戦時体制化し、物資の節約が励行され、また勤労奉仕も行われている。昭和16年には報告団が結成され校友会も



旧校舎本館

戦時体制化し、昭和18年頃には勤労奉仕の日数も増加するとともに学業の時間も削減されていった。昭和20年6月19日には福岡市は米軍機の大空襲を受け、西新町から今川橋にかけての電車道の両側は焼夷弾のため火の海となった。修猷館の運動場にも十数個の焼夷弾が落下したが、校舎には何の被害もなかったという。

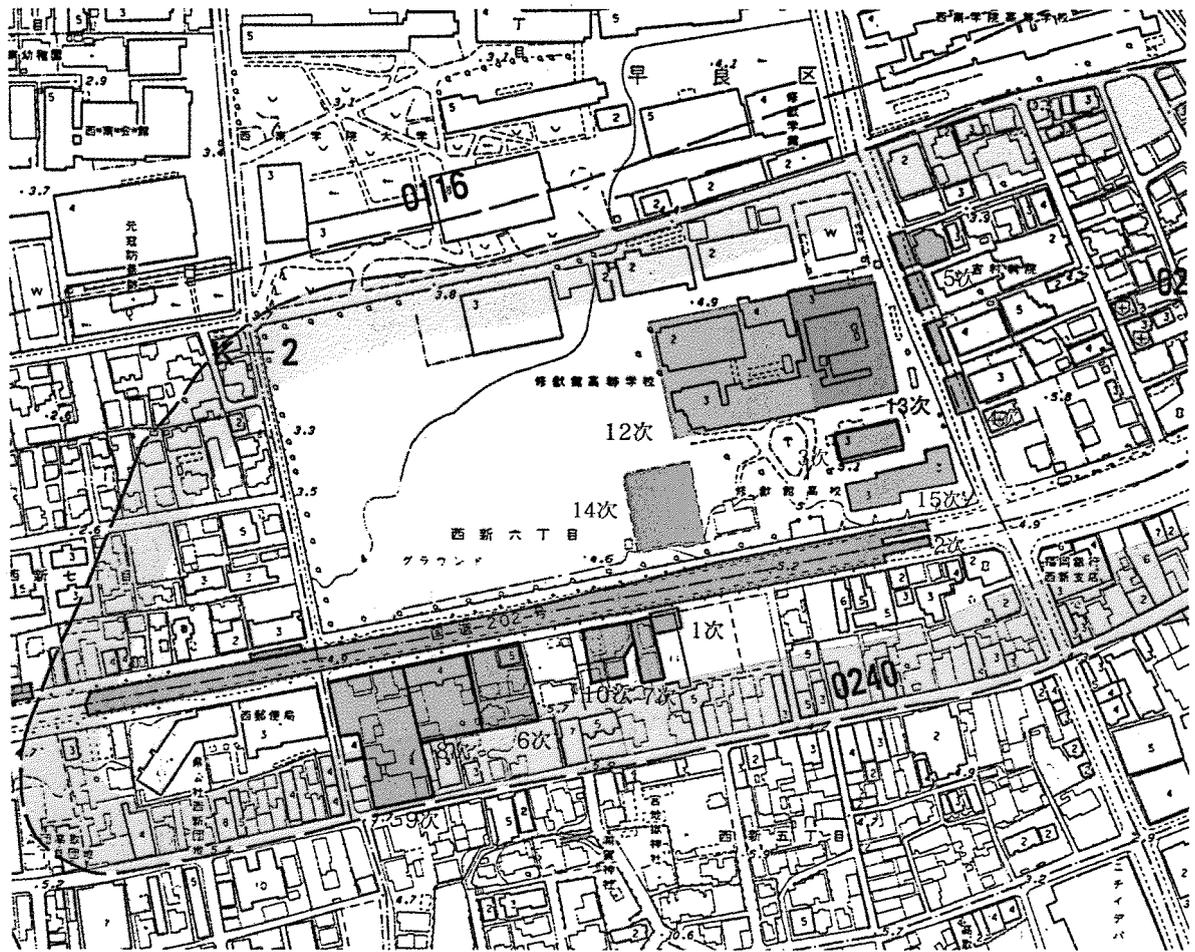
終戦後の昭和20年9月1日からは中止されていた授業も再開され、昭和23年には六・三・三制の実施により中学修猷館は新制高等学校へと移行し、名称も福岡県立高等学校修猷館となった。翌24年には福岡県立修猷館高等学校と改称され、現在に至っている。



新築された校舎本館

参考文献

- 小林茂・磯望・佐伯弘次・高倉洋彰編 1998 『福岡平野の古環境と遺跡立地』 九州大学出版会
福岡県早良郡役所編 1923 『早良郡志』 名著出版
貝原益軒編 1943 『筑前国続風土記』『福岡県史資料 続第四輯』 福岡県
加藤一純・鷹取周成共編 1977 『筑前国続風土記附録(中巻)』 川添昭二・福岡古文書を読む会校訂 文献出版
青柳種信 1993 『筑前国続風土記拾遺(下)』 福岡古文書を読む会校訂 文献出版
平野邦雄・飯田久雄 1974 『福岡県の歴史』 県史シリーズ40
島田寅次郎 1925 「西新町(百道原)新発掘元寇防塁の横断面」『筑紫史談』第参拾四集 筑紫史談会
修猷館二百年史編集委員会 1985 『修猷館二百年史』 西日本新聞社開発局出版部
(財)西日本文化協会編 1992 『福岡県史 文化資料編 筑前高取焼』
アンディー・マスキ 1994 「東皿山物原の試験的な調査」『法哈噠』第3号 博多研究会
小畑弘己 1994 「〈補説〉アンディー・マスキ氏採集遺物について」『法哈噠』第3号 博多研究会

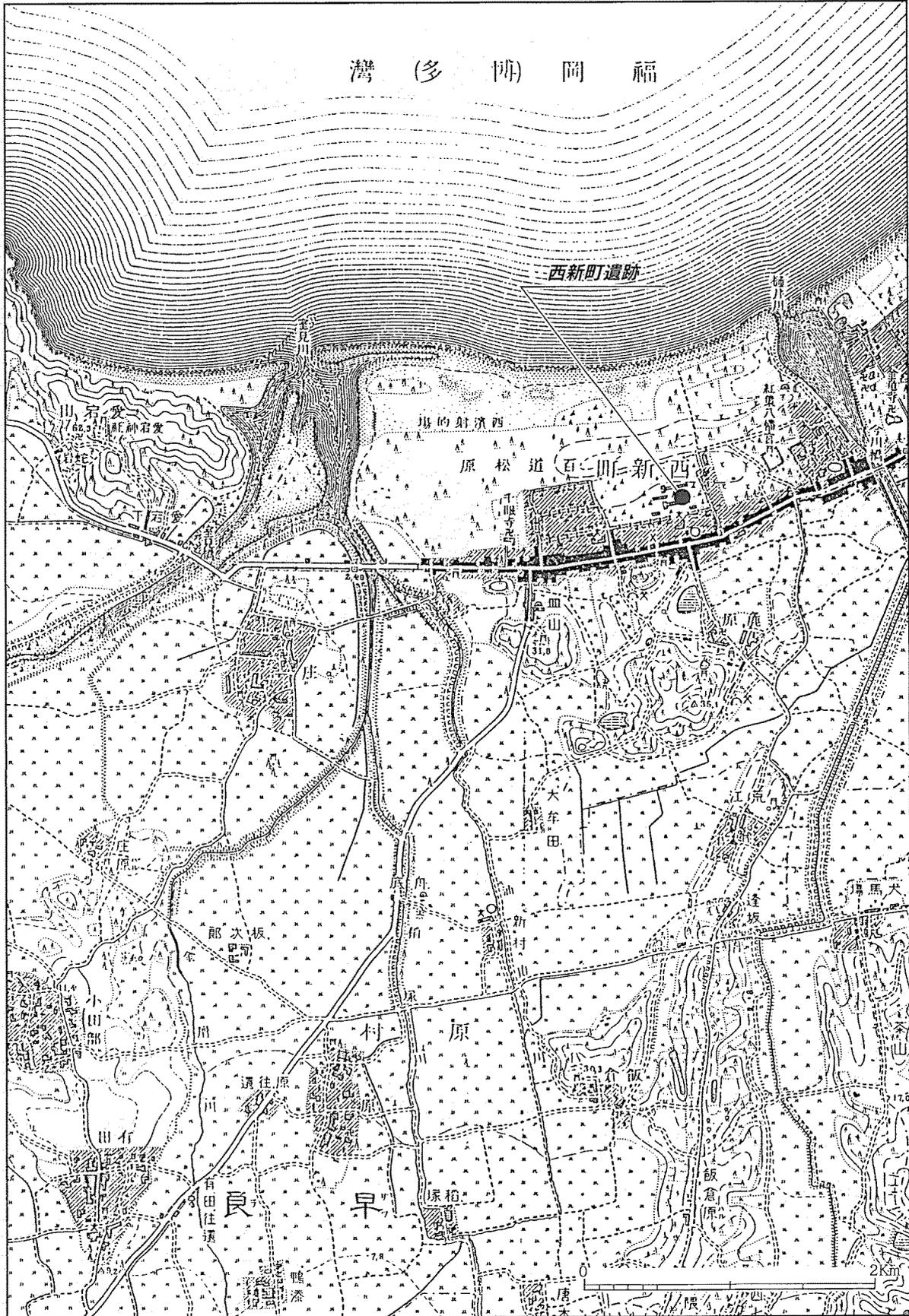


第3図 発掘調査区の位置と周辺調査地 (1/4,000)

第1表 西新町遺跡調査次数一覧

調査次数	住所	調査原因	調査主体	調査面積 (m ²)	調査年月日	報告書名	報告書発行年月日
1		民間開発					
2	早良区西新6丁目6-10	高校改築	県教委	700	1984.8.6.-8.27	福岡県文化財調査報告書第72集	1985.3.31
3	早良区西新6丁目	地下鉄建設工事	市教委	6230	1976.8.-1978.4	福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集	1982.3.31
4	早良区西新3丁目	道路拡幅工事	市教委	800	1986.6.29.-10.3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第204集	1989.3.31
5	早良区西新3丁目606-4	病院増築	市教委	303	1992.11.2.-11.14	福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集	1994.3.31
6	早良区西新5丁目643-4他	民間開発	市教委	1041	1994.3.31-6.15	福岡市埋蔵文化財調査報告書第483集	1996.3.31
7	早良区西新5丁目638-9	民間開発	市教委	368.96	1994.4.16-5.22	福岡市埋蔵文化財調査報告書第483集	1996.3.31
8	早良区西新5丁目644-1・644-2	民間開発	市教委	610	1994.9.6-11.18	福岡市埋蔵文化財調査報告書第484集	1996.3.31
9	早良区西新5丁目594他6筆	民間開発	市教委	920	1995.1.9-4.24	福岡市埋蔵文化財調査報告書第505集	1997.3.31
10	早良区西新5丁目641-3他	共同住宅建設	市教委	462	1995.10.28-1996.2.3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第683集	2001.3.30
11	早良区西新5丁目632-6	店舗建設	市教委	52	1997.10.13-10.15	福岡市埋蔵文化財年報Vol.12	1999.3.31
12	早良区西新6丁目6-10	高校改築	県教委	5214	1998.4.22-1998.12.28	福岡県文化財調査報告書第154集 福岡県文化財調査報告書第157集	2000.3.31 2001.3.30
13	早良区西新6丁目6-10	高校改築	県教委	2800	2000.7.3-2001.2.16	福岡県文化財調査報告書第168集 福岡県文化財調査報告書第178集	2002.3.29 2003.3.31
14	早良区西新6丁目6-10	高校改築	県教委	1500	2001.10.1-2002.3.11		
15	早良区西新6丁目6-10	高校改築	県教委	1800	2002.9.2-10.29		

福岡博多灣



第4圖 明治三十五年 陸軍測量部発行 周辺地形図 (1/20,000)

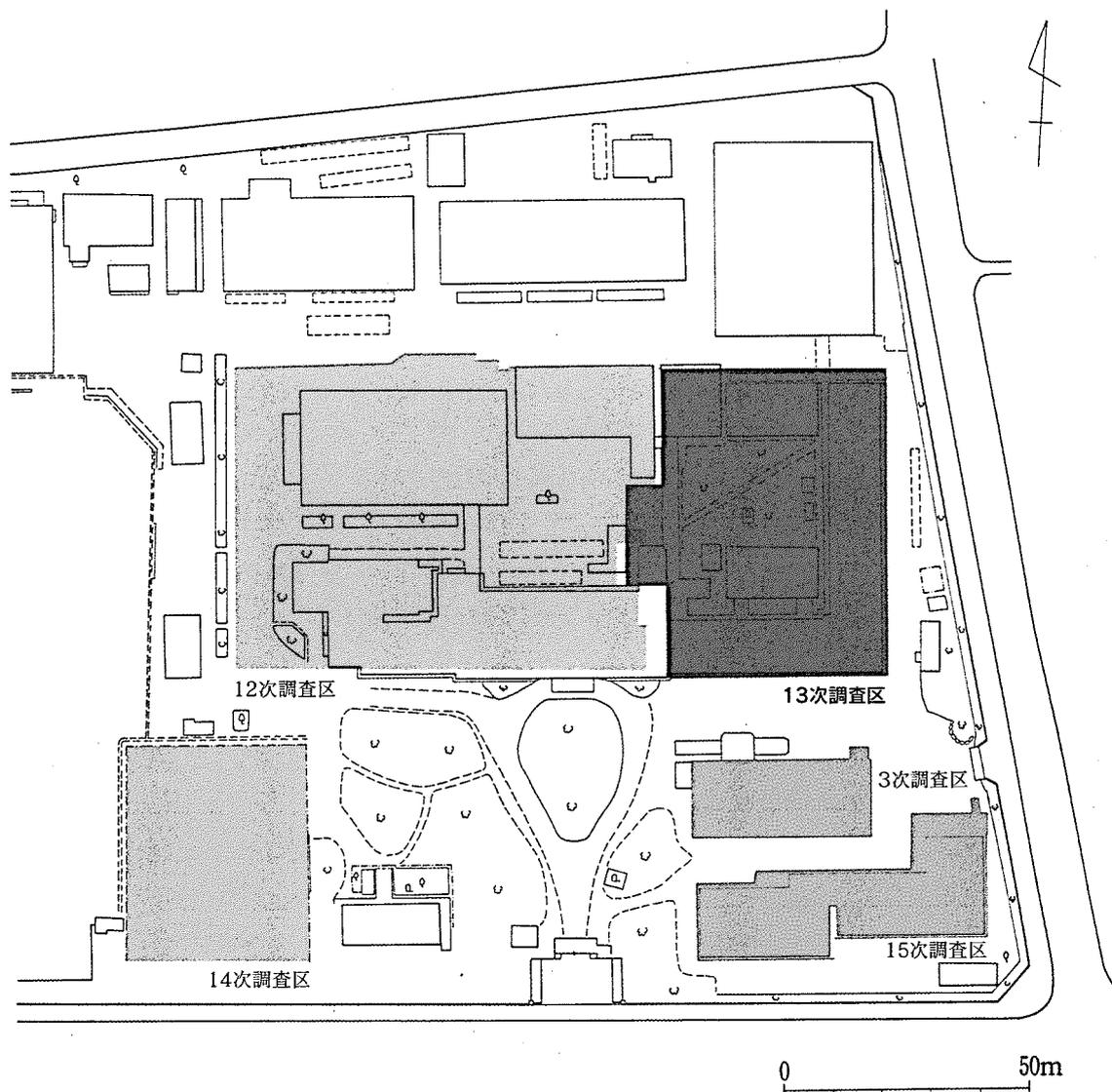
第3章 調査の内容

第1節 調査の概要

今回実施した第13次調査で検出した遺構は、主として古墳時代前期の竪穴住居跡を中心とする遺構、江戸時代後期の廃棄土坑等、及び明治～昭和期にかけての修猷館中学・高校に関連すると思われる遺構に分かれる。本書はこのうち竪穴住居跡以外の遺構と遺物について報告をおこなう。

発掘調査対象面積は約2,800m²。しかしほぼ全面において旧高校校舎の基礎が確認され、この基礎の下及びその周辺は既に攪乱を受け破壊されていたため、実際に表土の掘削を実施し遺構を確認し得た面積は2,043.9m²に過ぎない。その上特に調査区中央付近からは数多くの攪乱坑が検出された。従って純粋に遺構面を検出し得た面積は、これよりさらに少なくなる。

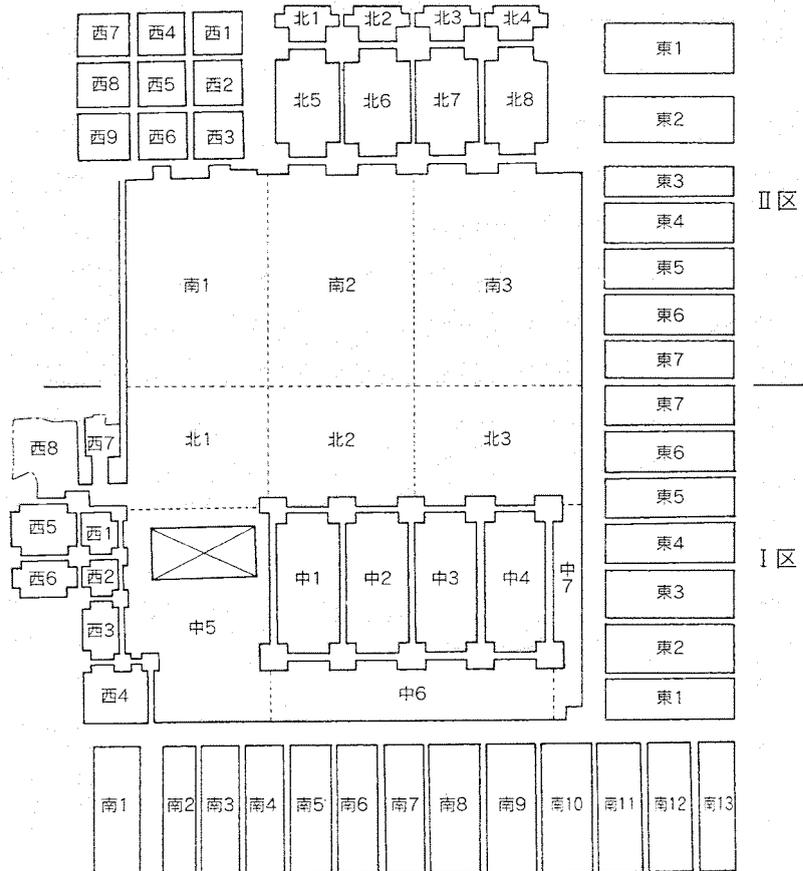
にもかかわらず、古墳時代前期の竪穴住居跡は総数86棟を数える。前回の第12次調査の成果も含め、付近一帯がいかに遺構密度が高いか推し量られる。これに対し、竪穴住居跡以外の古墳時代の遺構は、土坑4基、溝1条、ピット数10基しか検出されておらず相対的に少ない。ほとんど竪穴住居跡のみで構成される集落遺跡である。



第5図 調査区周辺地形図 (1/1,500)

調査を開始するにあたり、まず調査区を中央から南北に二分し、南側をⅠ区、北側をⅡ区と呼称した。これは調査区内での廃土処理を考えてのことである。さらに縦横に張り巡らされた校舎基礎を利用し、第6図のように細分調査区割を行った。これは包含層出土遺物を取り上げる際のグリッド代わりに利用し、またこれ以外の場合においても文章中必要に応じて適宜使用している。

今回の調査区は第12次調査区と位置的に連続しており、当然のことだが古墳時代前期の遺構・遺物についてもほぼ共通した内容である。既往の調査成果も含め、該期集



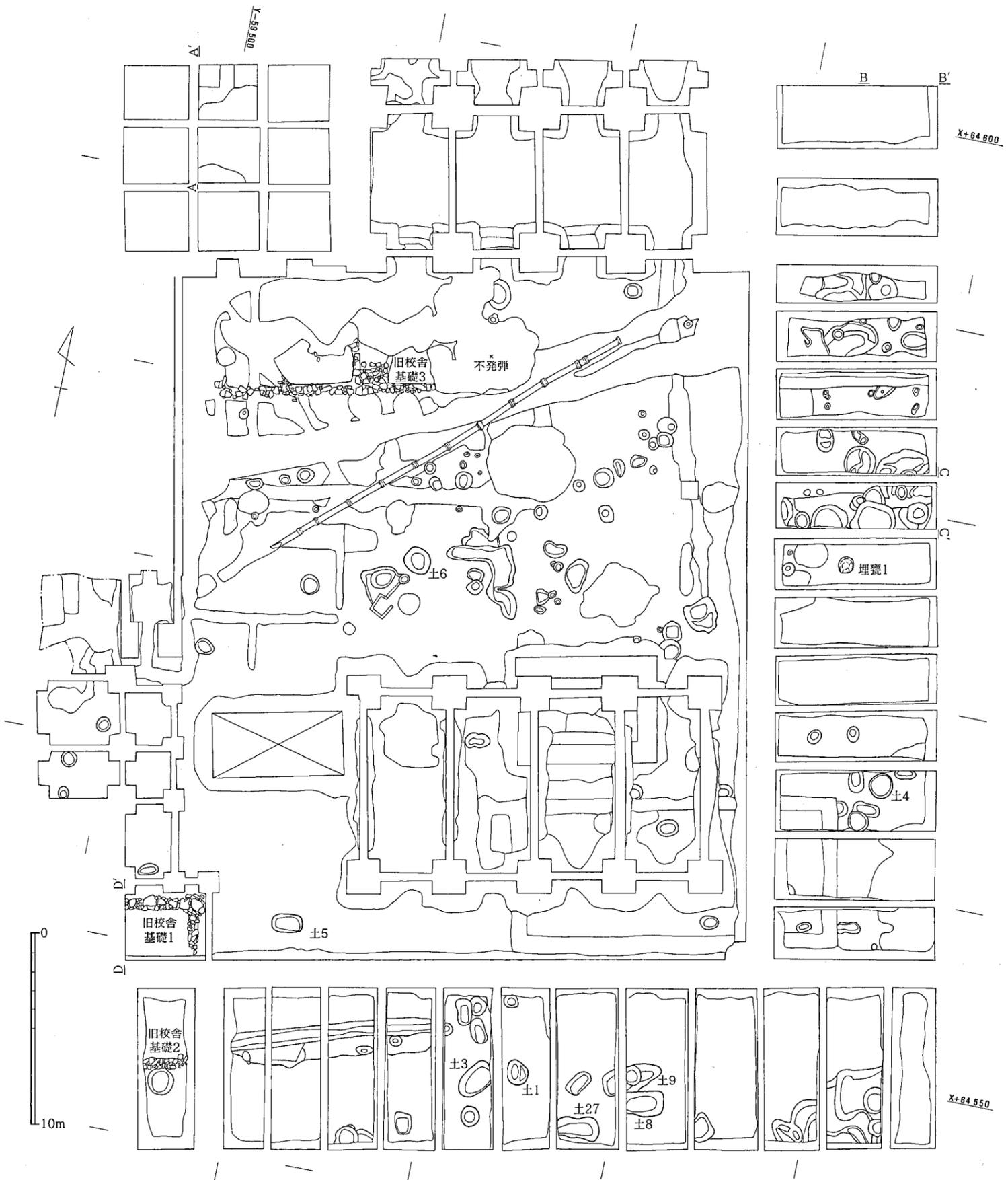
第6図 調査区区割図 (1/500)

落のほぼ中央にあたるものと思われるが、その中でも特に第12次調査区の東半部から第13次調査区の西半部にかけてはかなり高密度で竪穴住居跡が分布しており、集落の中心域をなすと思われる。竪穴住居跡の特徴の一つとして、古墳時代前期のものとしては全国的にも稀少なカマド付き住居跡の存在がまず第一に挙げられる。比較的早い段階にカマドが採用されるこの福岡県においても、一般に普及するのは5世紀に入ってからであり、当遺跡の特異性を最も顕著に示すものである。ただし、すべての住居跡にカマドが付設されている訳ではなく、依然として伝統的な地床炉を配した同時期の住居跡も、少なからず遺跡内に存在するという事もまた興味深い事実である。

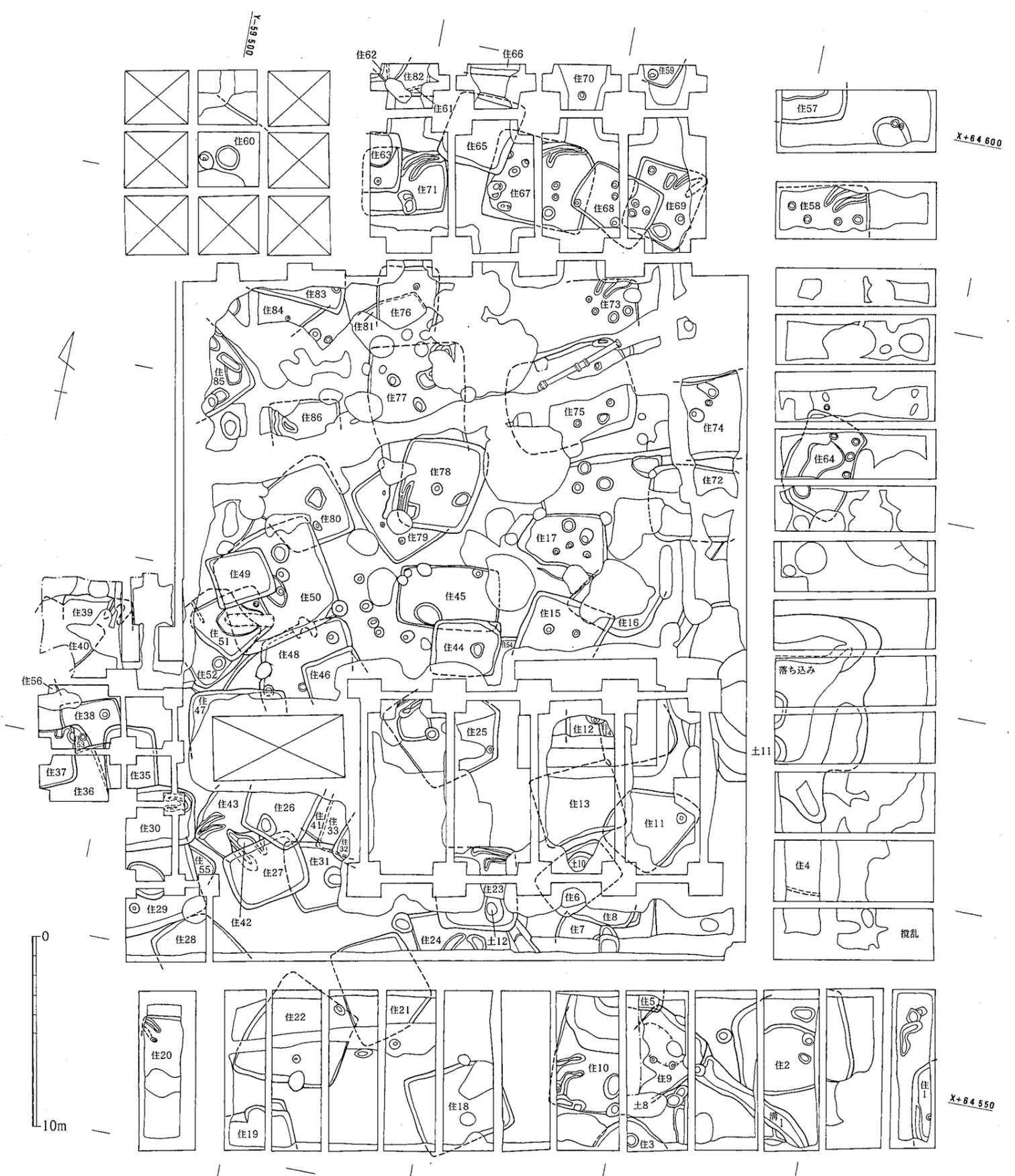
この古墳時代の竪穴住居跡からは、土器を中心とする多くの遺物が出土している。出土土器は土師器が9割以上を占めるものの、朝鮮半島に由来する陶質土器、瓦質土器、軟質土器等もまた少なからず出土しており、当遺跡の一つの大きな特徴と言える。その他玉生産に関する遺物、漁労具なども前回同様出土しており、前述のカマドも含めて朝鮮半島との活発な交流、玉生産、漁労といった、当時の生業の一側面をこれらの遺構・遺物から窺い知ることができる。

この古墳時代前期に遡る遺構として、弥生時代後期の土坑を1基ではあるが検出している。この一帯では弥生土器は散見されるものの、該期の遺構は発見されただけに貴重である。また出土遺物の中には突帯文土器が含まれており、遺跡の形成時期を考える上で貴重である。

近世以降の遺構は、土坑8基、埋甕1基、旧校舎基礎3基を検出している。近世の遺物の中には日常生活関連の遺物に混ざって竈道具も出土しており興味深い。また出土遺物ではその他旧制修猷館中学校に関連すると思われるものも多く見られる。



第7図 西新町遺跡13次近世以降遺構配置図 (1/250)

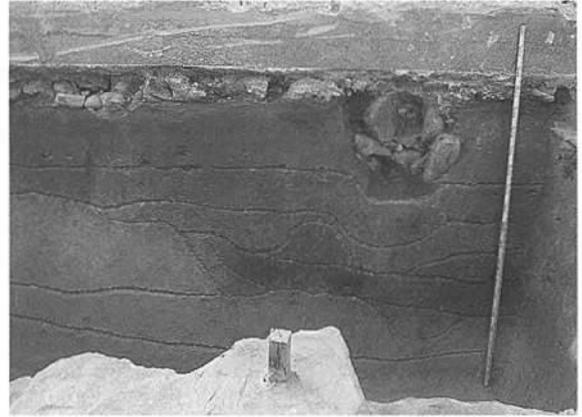


第8図 西新町遺跡13次古墳時代遺構配置図 (1/250)

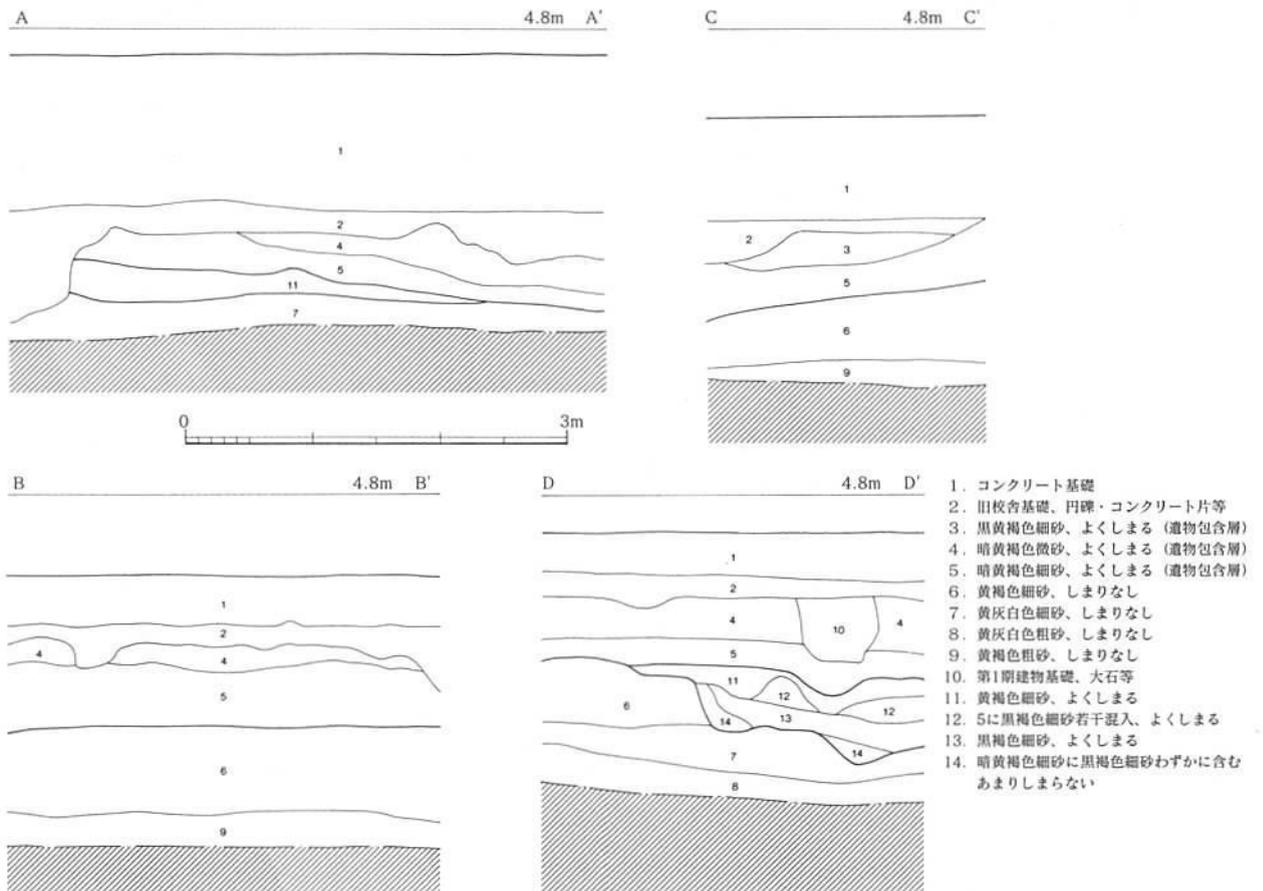
第2節 基本層序

第9図は第13次調査区の基本土層図である。A—A'は調査区の北西端にあたる。付近は校舎の基礎によって大きく攪乱を受け、遺構面が残っていたのはわずか一部分に過ぎない。土層図を見ると、最上層は4.6mから3.4mのレベルにわたり、約120cmの厚さの基礎コンクリートが占める。その下層は10cm～50cmの厚さで基礎底部の捨て石が見られる。その下層、第4層の暗黄褐色微砂層・第5層の暗黄褐色細砂層はともに古墳時代の遺物包含層である。第11層黄褐色細砂層は遺構覆土だが、攪乱が著しく遺存状況はあまり良くない。第7層は黄灰白色細砂層で遺物を全く含まない。従ってこの11層上面を遺構検出面とした。遺構面のレベルは2.6m前後である。

B—B'は調査区北東端にあたる。最上層の基礎コンクリートはそれほど厚くはなく、25cm程度である。その下層の捨て石は約20cmの厚さを測るが、部分的に深くなる。第4層暗黄褐色微砂層・第5層暗黄褐色細砂層はともに遺物包含層である。第6層黄褐色細砂層は無遺物層で、この上



I区西4西壁土層



第9図 西新町遺跡第13次調査基本層序 (1/60)

面が遺構検出面となる。遺構面のレベルは2.9m前後。さらにこの第6層の下層には第9層黄褐色粗砂層が堆積する。

C—C'は調査区東端の中央付近にあたる。最上面にはやはり基礎のコンクリートが認められ、約60cmの厚さを測る。その下層は基礎の捨て石で、厚さは10cm～30cm。第3層は黒黄褐色細砂層で、この付近にのみ認められる層である。これもまた遺物包含層である。その下層は第5層暗黄褐色細砂層となり、第4層は認められない。第6層は無遺物層の黄褐色細砂層で、この上面を遺構検出面とした。遺構面のレベルは2.6m～2.8m。さらにその下層には第9層黄褐色粗砂層が堆積する。



Ⅱ区東6東壁土層

D—D'は調査区南西端にあたる。最上面は基礎コンクリート、第2層は基礎の捨て石である。第4層・第5層は古墳時代の遺物包含層。これらを切り込む第10層は高校校舎以前の建物の基礎で、比較的大きな砂岩割石を使用している。第6層の上面を遺構検出面とした。遺構面のレベルは3.5m前後。その下層は第7層黄灰色細砂・第8層黄灰白色粗砂が堆積する。これらも遺物は全く含まれていない。第6層に切り込む第11層～第14層は29号竪穴住居跡の覆土である。

遺構面のレベルは調査区の西側が最も高く3.5m前後を測り、東側に向かうにしたがって徐々に低くなる。北端のレベルは2.8m、東端のレベルは2.6m、南端のレベルは2.6mを測る。最も高い位置にある調査区の西側に遺構が集中する。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

1. 古墳時代の土坑と出土土器

8号土坑 (図版5、第10図)

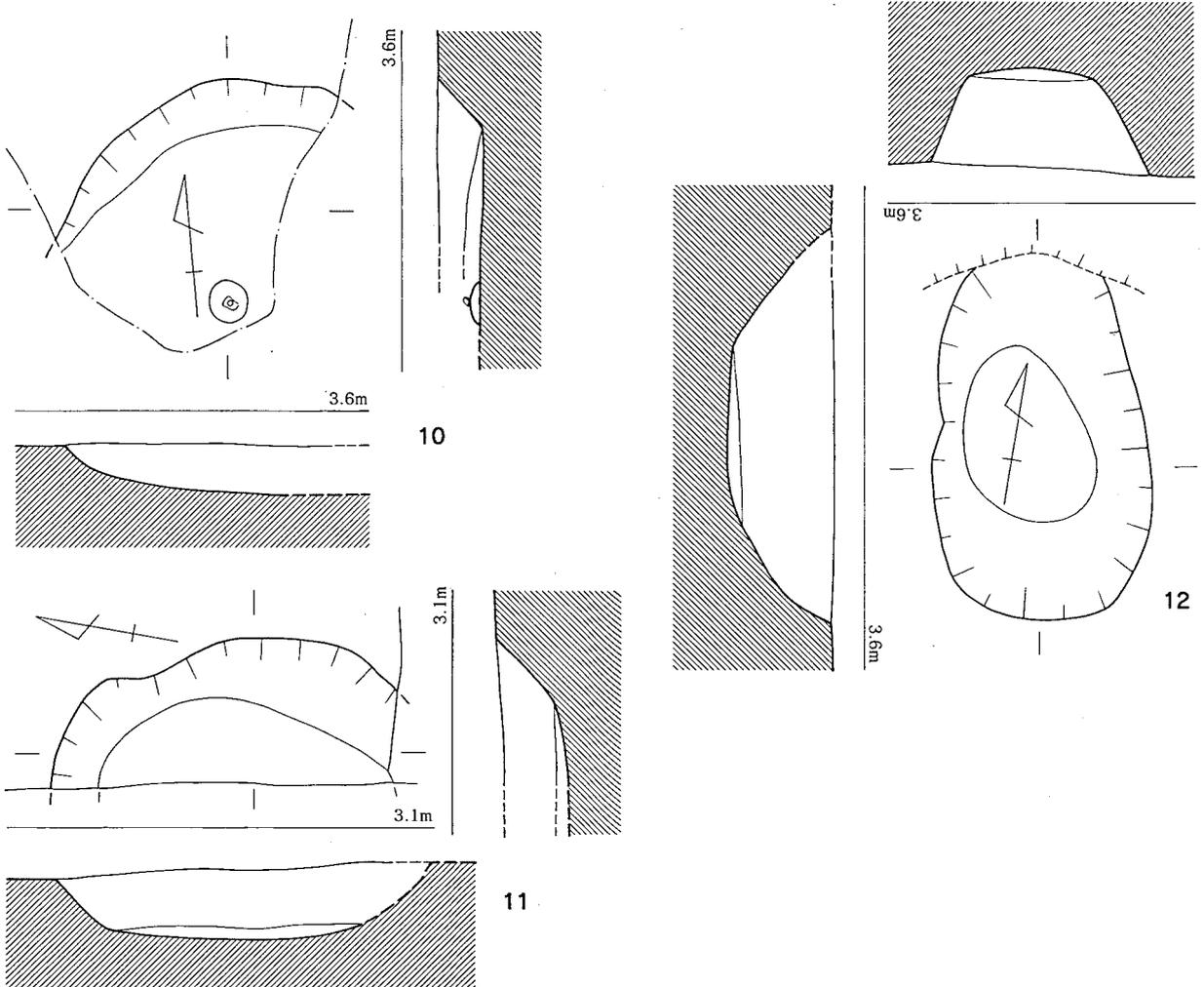
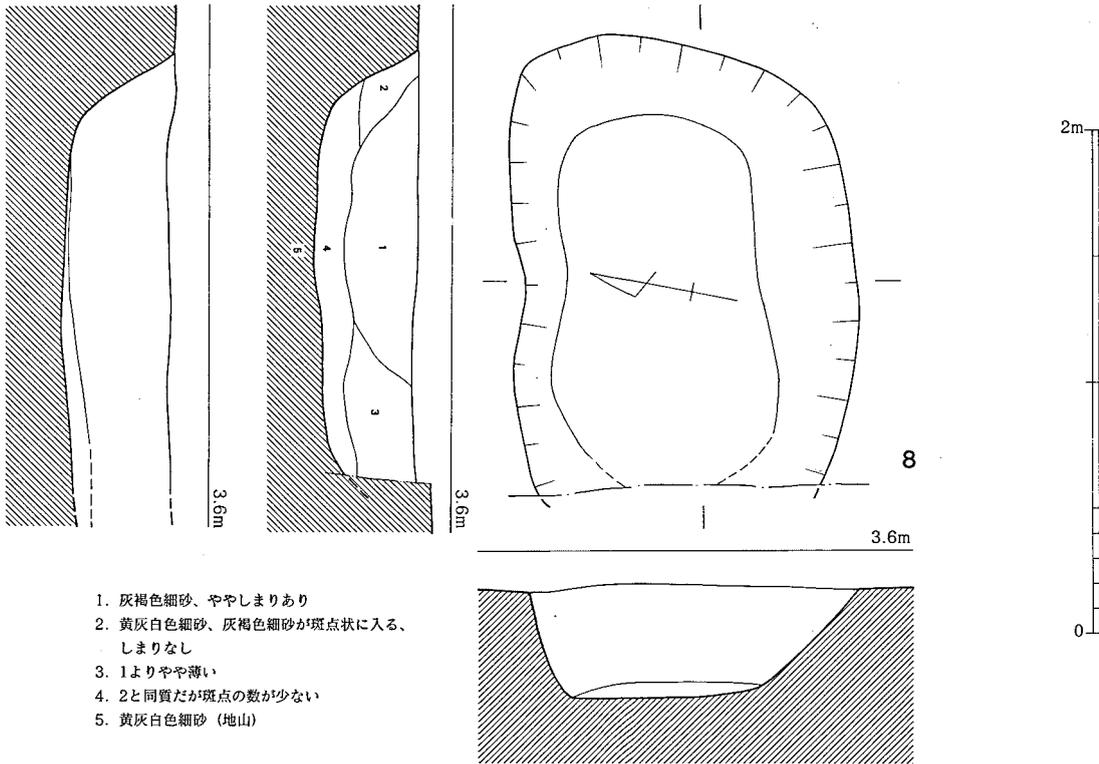
I区南9で検出した土坑である。9号土坑と重複しており、新旧関係では当土坑の方が古い。また西側が校舎基礎によって攪乱を受ける。平面形は東西に長い楕円形プランで、長軸180cm、短軸130cmを測る。壁は南側は緩やかに、北側はそれに比べてやや急に立ち上がる。底面は平面形同様東西に長い楕円形プランをなし、長軸150cm、短軸90cm、深さは45cmを測る。

覆土は基本的に灰褐色細砂層からなる。遺物はそれほど多くない。

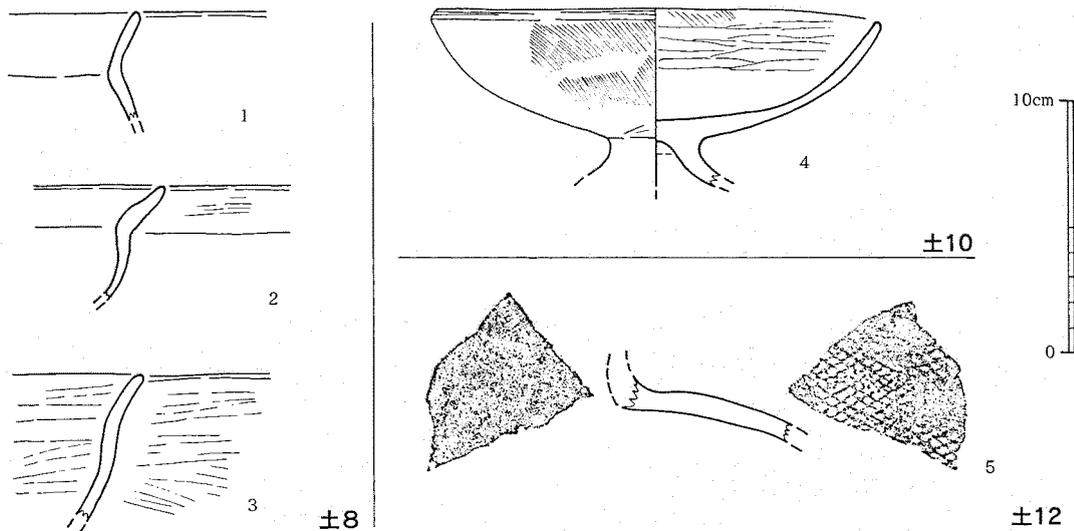
出土土器 (第11図)

1は在来系の小型の甕か、もしくは鉢であろう。体部はやや内傾し、口縁部はあまり開かず立ち上がる。口縁端部は丸くおさめている。調整は内外面とも横ナデを行い、胎土に砂粒を若干含む。色調は肌灰色を呈す。

2・3は鉢である。2は粗製の中型鉢で、胎土に砂粒を若干含む。体部上方は直立して口縁部は短く内傾する。端部は丸くおさめる。全面ナデ調整を行うが、口縁部外面には先行するハケ目が見られ、作りも雑である。色調は黄灰色を呈す。3も粗製の中型鉢である。口縁部は緩く外反し、体部との境は稜をなさない。口縁端部は丸くおさめる。調整には内外面とも板状工具による粗い擦過を行う。胎土には砂粒を若干含む。色調は黄灰褐色を呈す。



第10図 8・10~12号土坑実測図 (1/30)



第11図 8・10・12号土坑出土土器実測図 (1/3)

10号土坑 (図版6、第10図)

I区中3の6号竪穴住居跡床面で検出した土坑である。校舎基礎によって大きく攪乱を受けており、遺存するのはわずか一部に過ぎない。本来の形状は不明だが、遺存する範囲では長軸110cm、短軸90cmを測る。北側に残る壁の立ち上がりは比較的緩やかである。底面は西壁際がやや浅く、南側が最も深くなり、深さは西側で10cm、南側で20cmを測る。南側の底面直上から脚付鉢の鉢部が出土している。

出土遺物は若干見られたが、図示できたのは底面直上から出土した1点のみであった。

出土土器 (図版10、第11図)

4は脚付鉢である。体部は浅く、口縁部付近は緩やかに開き、端部は丸くおさめる。内面には幅の広いヘラミガキが施され、これに先行するハケ目も見られる。外面は最終調整にナデを行うが、先行するハケ目が明瞭に残る。脚部は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄茶色を呈す。

11号土坑 (図版6、第10図)

I区東4で検出した土坑である。落ち込みに切り込んでおり、時期的にはこれよりも新しい。西側全体と南側の一部が校舎基礎により大きく攪乱を受けており、旧状は知り得ない。遺存する範囲では長軸140cm、短軸60cmを測り、南北に長い。壁は比較的緩やかに立ち上がる。底面は長軸120cm、短軸35cm、深さは30cmを測る。

出土遺物は土師器片が若干見られたが、図示できるものはなかった。

12号土坑 (図版6、第10図)

I区中6で検出した土坑である。1号溝の底面で確認したものであり、これよりも古い事は確かだが23・24号竪穴住居跡との先後関係は重複関係では確認できない。

軸をほぼ南北にとる楕円形プランの土坑で、長軸150cm、短軸90cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面は平面形に沿って不整楕円形を呈し、長軸70cm、短軸50cmを測る。検出面からの深さは45cmを測る。

出土遺物はあまり多くない。図示できたのは1点のみである。

出土土器 (図版21、第11図)

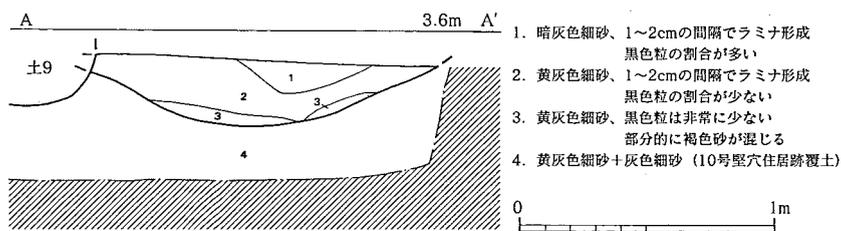
5は半島系の壺肩部片。肩はほぼ水平位にまで大きく張る。内面の調整は縦方向のナデ、外面は大きめの斜格子タタキを施し、頸部付近は横ナデを施す。胎土には砂粒を若干含み、色調は内面肌茶色、外面黄灰褐色、軟質焼成である。

2. 古墳時代のその他の遺構と出土土器

1号溝 (図版7、第12・13図)

I区南8~11、中6で検出した不整形の溝である。古墳時代の遺構である2・9・10・23・24号竪穴住居跡及び12号土坑と重複しており、これら全てを切って営まれる。主軸を北西-南東方向にとり、南東側は調査区外へと続き、北西側は校舎基礎によって攪乱を受ける。延長線上を精査したものの溝の続きは確認されなかったため、本来I区中1の当たりで終わっていたものと思われる。

溝の幅は南東隅で100cm、中央付近の最も幅広い所で330cm、北西側で130cmを測る。深さはそれぞれ60cm、50cm、40cmを測り、南東側が最も深く、北西側に進むにつれて徐々に浅くなる。南東側はほぼ直線的だが、中央付近は他の住居跡と重複して検出が困難であったこともあり、かなり歪んだプランとなっている。特にI区南8では大きく北側にカーブするが、校舎基礎を挟んでI区中6の部分とは直線的にはつながらない。



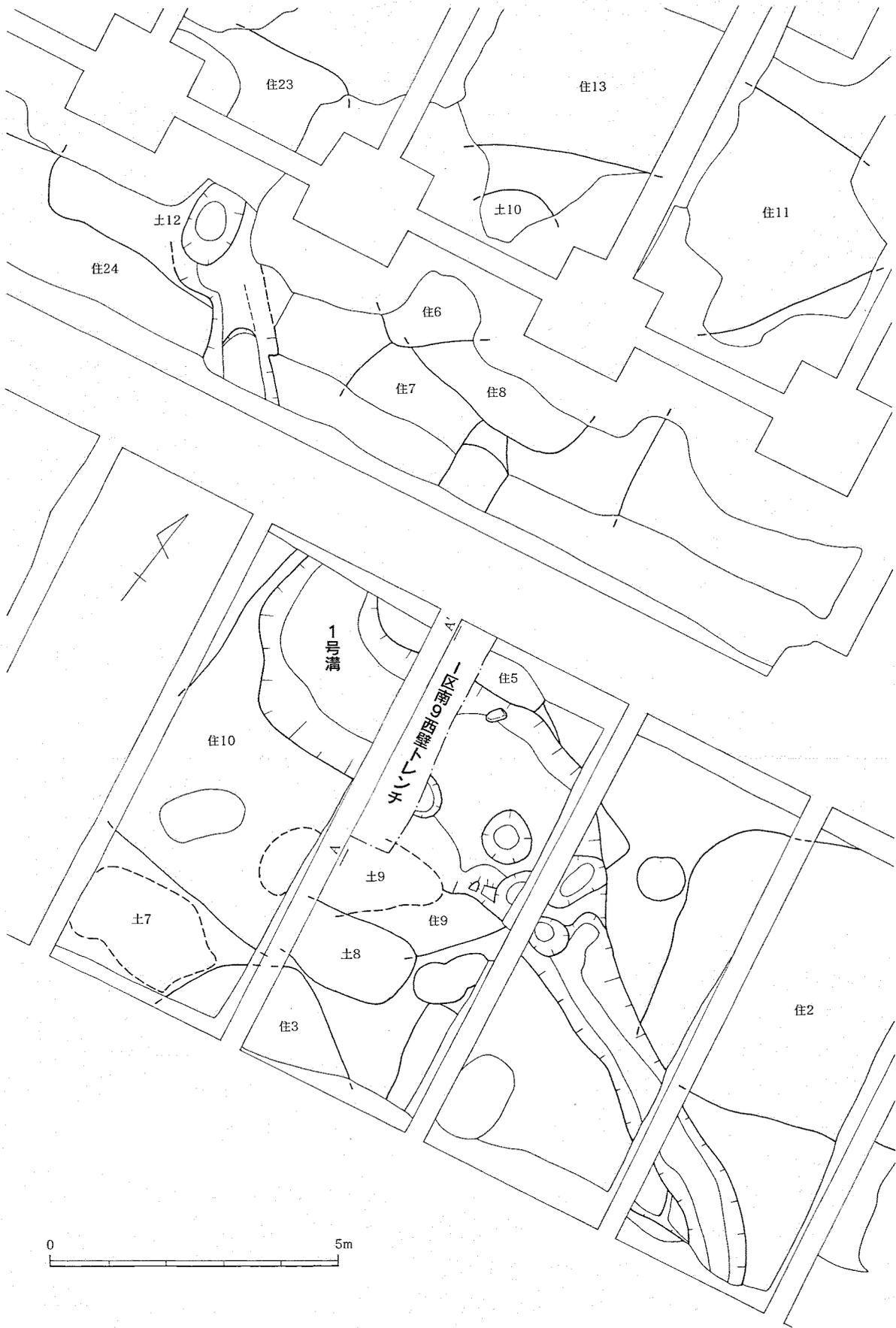
第12図 1号溝断面土層図 (1/30)

遺構検出当時、重複する9・10号竪穴住居跡との新旧関係が把握出来ず、I区南9の西壁にトレンチを設定し、断面観察からの把握を試みた。その結果10号竪穴住居跡の覆土に切り込んでいることを確認することができた。このトレンチの土層観察では溝の覆土は第1層~第3層からなる。上層の第1層は暗灰色細砂層で、1~2cmの間隔でラミナを形成する。また鉄分が集積した黑色粒を多く含む。第2層はこの溝覆土の大部分を占め、黄灰褐色細砂層からなる。やはり1~2cmの間隔でラミナを形成し第1層に比べて黑色粒の割合が少ない。第3層は最下層に薄く堆積する層で、第2層と似た黄灰色細砂からなる。第2層と比べて黑色粒が非常に少なく、また部分的に褐色細砂が混じる。

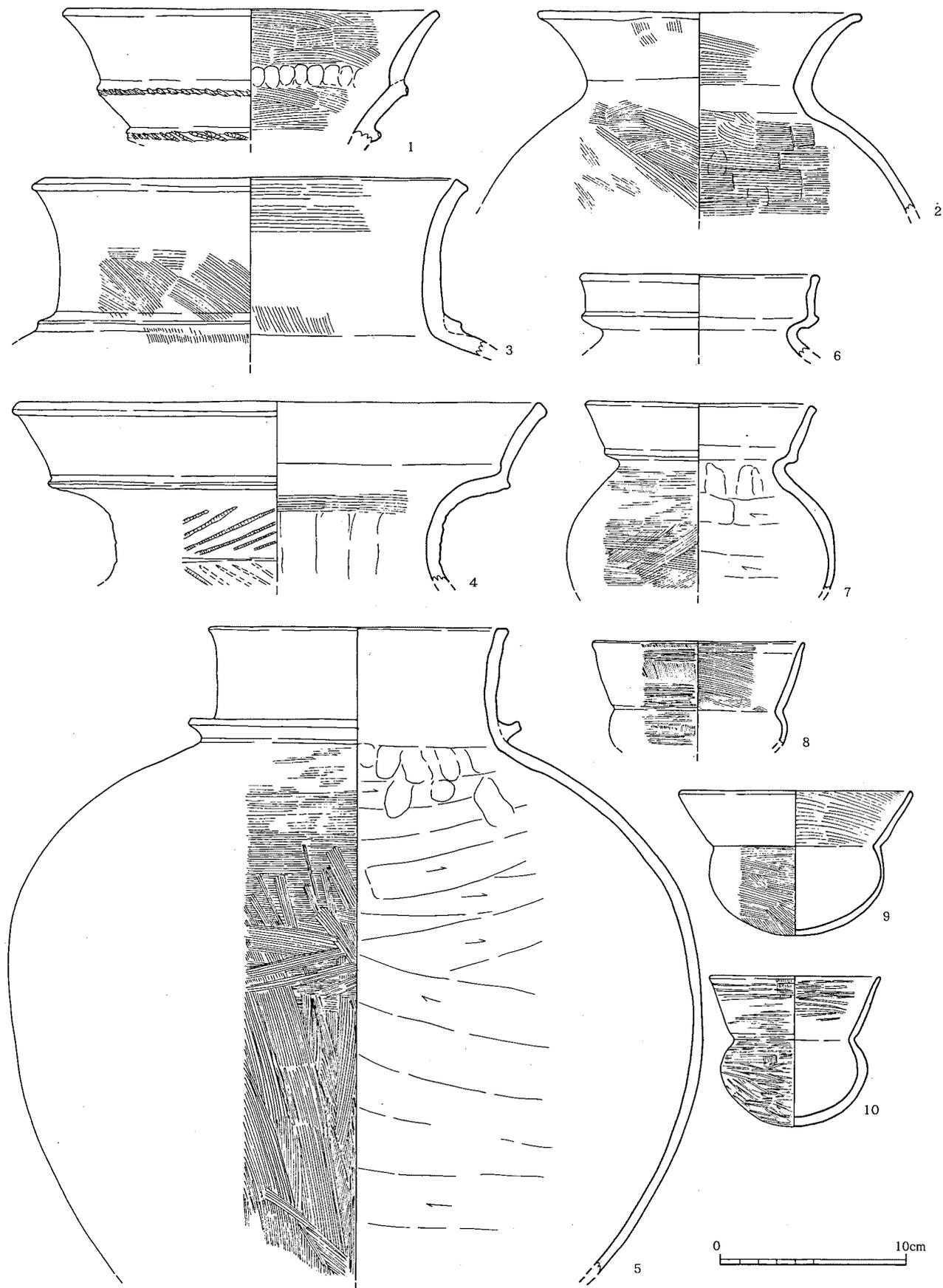
覆土からは多量の土器が出土したが、ほとんどが中央付近、すなわち9・10号竪穴住居跡との重複部分からである。また下層からはほとんど出土せず、大半は上層の第1層から出土している。掘削の際に下層遺構である9・10号竪穴住居跡の土器が混入した可能性もある。

出土土器 (図版10・11・21、第14~16図)

1~10は壺である。1は在来系の二重口縁壺。二次口縁部は大きく開き、端部は丸くおさめる。外面の頸胴境及び口縁屈曲部にそれぞれ一条の刻目突帯を巡らせる。調整には外面横ナデ、内面横ハケ目を行い、口縁接合部には指圧痕が明瞭に残る。胎土には砂粒をやや多く含み、色調は茶褐色を呈す。上層の暗灰色細砂層から出土。2・3は在来系の直口壺。2は球形に大きく張る体部を持ち、口縁部は外反して大きく開き、端部を丸くおさめる。口縁部内面は横ハケ目、外面は横ナデ調整を



第13図 1号溝実測図 (1/100)



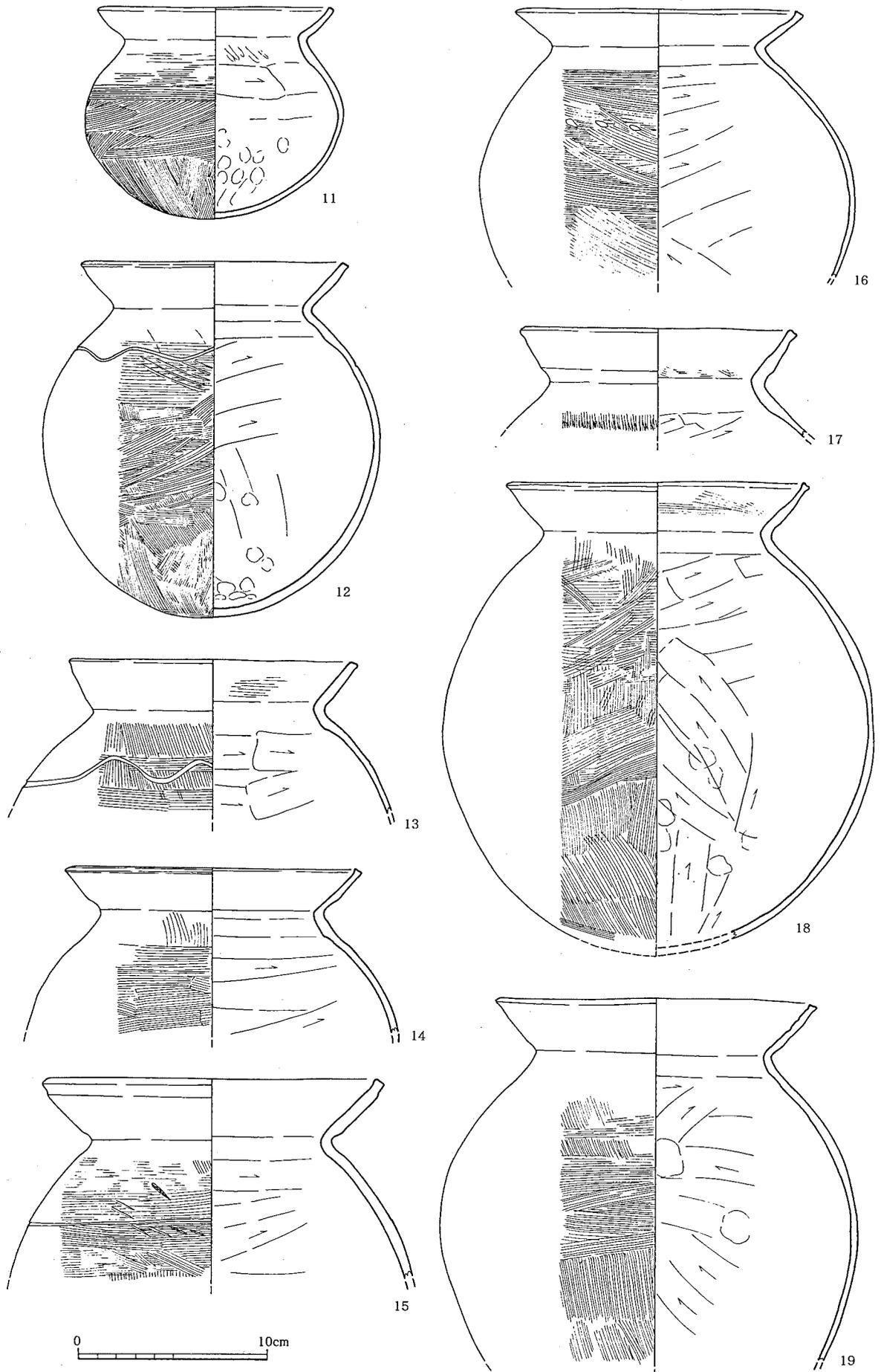
第14图 1号沟出土土器实测图① (1/3)

行うが、外面には先行するハケ目が残る。体部は内面横ハケ目、外面斜ハケ目を行い、外面は部分的にハケ目をナデ消している。胎土に砂粒を若干含み、色調は暗黄灰褐色を呈す。下層の黄灰色細砂層から出土。3は大型品。肩は大きく張り、頸部は直立し、口縁部付近でやや外反する。端部は四角くおさめている。外面の体部と頸部の境には三角突帯を巡らせる。調整は内外面ともハケ目後に横ナデを行うが、内面には先行するハケ目が明瞭に残り、外面の横ナデは口縁端部付近のみで下方までは及んでいない。胎土にはあまり砂粒を含まず、在来系の大型品にしては精良である。色調は黄灰褐色を呈す。下層の黄灰色細砂層から出土。

4～7は山陰系の壺である。4はやや大型の二重口縁壺。頸部は短く直立し、上方で大きく開く。二次口縁部は直線的に開き端部は面をなす。頸部にはハケ状工具の刺突と一条の沈線による綾杉文を巡らせる。調整は全面横ナデを行っているが、頸部内面の上方には先行する横ハケ目が見られ、また下方には縦方向の指ナデが明瞭に見られる。胎土には砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。下層の黄灰色細砂層から出土。5は直口縁の大型壺である。体部は球形に近い形状をなし、最大径は中位よりやや上に位置する。口縁部はほぼ直立し、端部は水平な面をなす。頸部と体部の境には台形状の高い突帯を巡らせる。口縁部の調整は内外面とも横ナデ、体部は内面ヘラケズリ、外面ハケ目。肩部の内面には接合の際の指ナデが明瞭に残り、また外面の横ハケ目はその後施される横ナデにより若干薄くなる。胎土に砂粒を若干含むが粗砂は比較的少ない。色調は黄灰褐色を呈す。上層の暗灰色細砂層、下層の黄灰色細砂層から出土した破片の接合資料である。6は口縁部が短く直立する。器形で壺に含めているが甕となる可能性もある。一次口縁部と二次口縁部の境は突帯状にひき出し、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面とも横ナデ。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。下層の黄灰色細砂層から出土。7は小型の二重口縁壺。体部の最大径はやや下方にあり、肩部は直線的にすぼまる。一次口縁部は強く短く反転し、二次口縁部は直線的に開き端部は面をなす。口縁部は内外面とも横ナデ調整、体部は内面に横ヘラケズリを行うが肩部付近は縦指ナデ、外面は上半が横ハケ目後横ナデ、下半は横・斜ハケ目調整を行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。上層の暗灰色細砂層から出土。

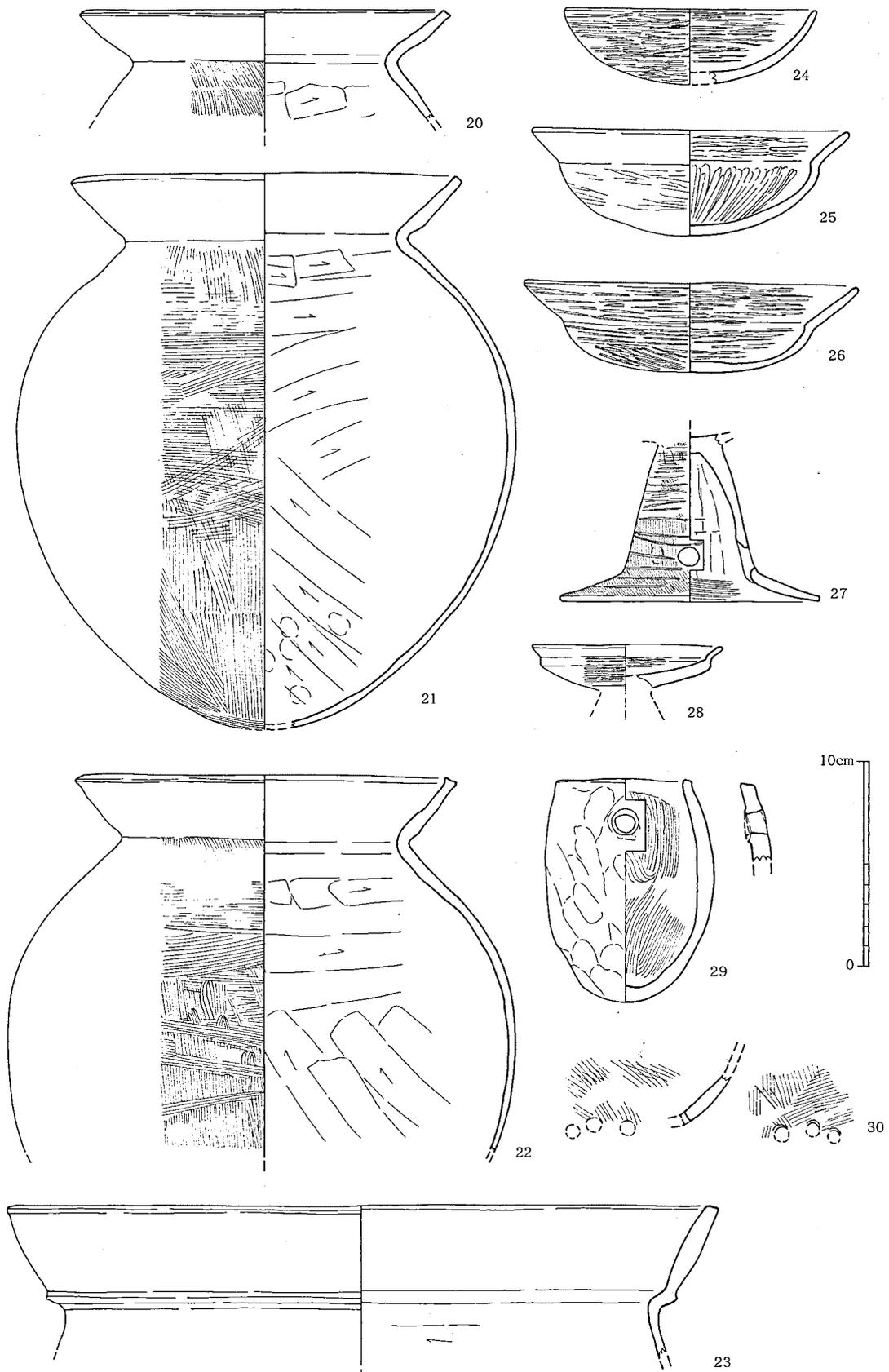
8～10は畿内系の小型丸底壺である。8は体部が浅く鉢に近い。頸部はあまり締まらず、屈曲部は明瞭な稜をなす。口縁部はあまり開かず長く伸びる。口縁部内面は斜ハケ目を最終調整とし、ヘラミガキは行っていない。体部内面はナデ。外面はハケ目後細い横ヘラミガキ。胎土には砂粒をほとんど含まず精良な水漉し粘土を使用し、色調は黄灰色を呈す。上層の暗灰色細砂層から出土。9は半球形の浅い体部を有し、頸部はあまり締まらず内面には明瞭な稜を有す。口縁部は直線的に開く。口縁部内面は粗いハケ目、外面は横ナデ。体部内面はナデ、外面は内面と異なるハケ目工具を使用した細かいハケ目を最終調整とし、ヘラミガキは全く行っていない。胎土は比較的精良な粘土を使用するが、砂粒が若干目立つ。色調は黄灰褐色を呈す。総じてやや雑な作りである。上層の暗灰色細砂層から出土。10の体部は中位よりやや上に最大径が位置する。口縁部は直線的に長く伸び、端部は器壁が薄くなる。体部内面はナデ、それ以外は細かいヘラミガキを行い、外面には先行するハケ目が観察される。胎土は水漉しされた精良な粘土を使用し、ほとんど砂粒を含まない。色調は肌茶色を呈す。上層の暗灰色細砂層から出土。

11～22はいずれも布留系の甕である。11は小型の甕。器高が低く鉢に近い形状で、体部の最大径は中位よりやや上に位置する。口縁部はやや内湾しながら開き、端部は丸くおさめる。口縁部は内



第15图 1号沟出土土器实测图② (1/3)

外面とも横ナデ、体部内面はヘラケズリだが下半には指圧痕が多く残り、また頸部近くは工具痕が認められる。体部外面は上半が横ハケ目後上位のみ横ナデ、下半は縦ハケ目を行う。胎土には砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。体部の最大径の位置から肩部にかけて強く熱を受ける。上層の暗灰色細砂層出土。12は最大径がほぼ中位にあり、球形に近い。口縁部はわずかに内湾しながら開き、端部はシャープな面をなす。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面はヘラケズリで下方には指圧痕が残る。外面は上半が横ハケ目後横ナデを行い、ハケ目に先行するタタキも観察される。下半は縦ハケ目。肩部には一条の波状沈線を巡らせる。胎土には砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。体部は全体的に煤が付着するが、口縁部には付着していない。上層の暗灰色細砂層から出土。13は体部に比べて口縁部の器壁が厚い。口縁部は短く直線的に開き、端部は面をなす。口縁部は内外面とも横ナデ調整を行い、内面には先行する横ハケ目が残る。体部内面は横ヘラケズリ、外面は縦ハケ目の後に横ハケ目を行うが、通常見られる肩部の横ナデは全く行っていない。またこの肩部には一条の波状沈線を巡らせる。色調は暗灰褐色を呈し他とやや異なる。上層の暗灰色細砂層から出土。14は全体的に器壁が薄く、特に口縁部は顕著である。端部は内面をシャープにつまみ出している。口縁部は内外面とも横ナデ調整、体部内面は横ヘラケズリ、外面は縦ハケ目後横ハケ目。色調は茶褐色を呈す。下層の黄灰色細砂層より出土。15は14とは逆に器壁がやや厚い。口縁部の仕上げの際、強い横ナデを加えているため端部下が内外面とも窪んでいる。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面はヘラケズリ、外面はハケ目を行うが、先行するタタキがかすかに認められる。内面のヘラケズリは頸部に近い位置まで及ぶ。外面の肩部には一条の沈線を巡らせ、さらにその上には90°に1つの割合で刺突文が見られる。色調は暗黄灰褐色を呈す。下層の黄灰色細砂層から出土。16は球形に近い体部をもち、頸部は比較的よく締まる。口縁部は直線的に伸び、他のものと比べると開きが大きい。端部は上方をシャープにつまみ出す。器壁は総じて薄いですが特に下半部が薄くなる。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面はヘラケズリ、外面のハケ目は二種類の異なる原体を使用する。肩部には楕円形の列点文が3つ確認できるが、その他の部位には見られない。色調は暗黄灰褐色を呈す。下層の黄灰色細砂層から出土。17は頸部付近から口縁部にかけて器壁がやや厚い。口縁部は直線的に開き、端部は外側に不明瞭につまみ出される。口縁部は内外面とも横ナデを行うが、内面の下半にはハケ目が残る。体部内面はヘラケズリ、外面はハケ目。色調は黄灰褐色を呈す。下層の黄灰色細砂層出土。18はほぼ全体の形状が判る。体部は球形に近く、最大径が中位に位置するが、肩の張りが弱い。頸部は比較的よく締まる。口縁部は短く開き、端部は内外面ともシャープにつまみ出される。口縁部は内外面とも横ナデを行うが、内面には先行する横ハケ目が観察される。体部内面は上半が横・斜ヘラケズリ、下半が縦ヘラケズリを行い、縦ヘラケズリが斜ヘラケズリを切っている。下半には指圧痕が残る。外面は全体に縦ハケ目を施した後、肩部に横ナデを加え、その後に横ハケ目を行う。横ナデ後に横ハケ目を行う点が特異である。色調は黄灰褐色を呈す。上層の暗灰色細砂層から出土。19は倒卵形の長い体部となるだろう。器壁の厚さはほぼ一様で、口縁部も体部も厚さがほとんど変わらない。口縁部はわずかに内湾しながら開き、端部は面をなす。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面はヘラケズリ、外面は縦ハケ目後横ハケ目を行い、肩部付近はその後横ナデを行う。色調は黄灰褐色を呈す。下層の黄灰色細砂層出土。20は口縁部がわずかに内湾しながら開き、端部は上方にわずかにつまみ出される。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面は横ヘラケズリ、外面は縦ハケ目の後に横ナデを行うが、他のものと比べて横ナデの幅が狭い。色調は黄灰色



第16图 1号沟出土土器实测图③ (1/3)

を呈す。上層の暗灰色細砂層出土。21はほぼ全体の形状が判る好例である。体部はやや縦長で、最大径は中位よりやや上に位置し、倒卵形となる。底部は尖底気味となるようである。頸部は比較的よく締まり、口縁部は直線的に開く。端部はシャープな面をなす。口縁部は内外面とも横ナデ調整を行う。体部内面はヘラケズリ調整を行い、底部付近には指圧痕が認められる。外面は縦ハケ目後に上半のみ横ハケ目を行い、その後頸部近くのみ横ナデを行う。色調は黄灰褐色を呈す。上層の暗灰色細砂層出土。22は頸部がよく締まり、口縁部は短くあまり開かない。そのため体部に対して口縁部の径が小さい。口縁端部は内側を明瞭につまみ出す。口縁部は横ナデ。体部内面はヘラケズリ、外面はハケ目後頸部付近のみ横ナデ。色調は黄灰褐色を呈す。上層の暗灰色細砂層出土。

23～26は鉢である。23は山陰系の二重口縁大型鉢である。一次口縁部は短く開き、二次口縁部は直線的に長く伸びる。接合部の外側は三角突帯状につまみ出し、口縁端部は面をなす。口縁部内外面及び体部外面は横ナデ、体部内面は不明瞭だが横ヘラケズリが観察される。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。上層の暗灰色細砂層出土。24は直口縁で浅い体部の精製鉢である。内外面とも緻密な横ヘラミガキを行うが、内底部付近はやや疎らになる。胎土には砂粒を若干含むもの、水漉しした肌理の細かい粘土を使用する。色調は肌灰色を呈す。下層の黄灰色細砂層出土。25・26は外反口縁の鉢。25はヘラミガキの幅が広い。口縁部内外面と体部の外面は横ヘラミガキ、体部内面は縦ヘラミガキを行っている。胎土に砂粒を若干含み、あまり精良ではない。色調は黄肌色を呈す。上層の暗灰色細砂層出土。26は25よりも更に浅い体部となる。調整は内外面とも緻密な横ヘラミガキを行い、底部のみ一定方向にヘラミガキを行う。胎土には砂粒をほとんど含まず、水漉しした精良な粘土を使用する。色調は橙茶色を呈す。上層の暗灰色細砂層から出土。

27は高坏の脚部である。柱部はやや中膨らみとなり、裾は外反気味に大きく開く。屈曲部の稜は内面のみ明瞭である。柱部内面は縦指ナデ、裾部内面は横ハケ目、外面は柱部から裾部にかけて縦ハケ目後疎らな横ヘラミガキを行う。屈曲部のやや上に、3方向に円孔を配置する。胎土には砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は黄肌色を呈す。下層の黄灰色細砂層から出土。

28は小型器台の受部である。立ち上がりは大きく外反する。調整は内画面とも緻密な横ヘラミガキを行うが、立ち上がり部には施されない。胎土には砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は肌色を呈す。上層の暗灰色細砂層出土。

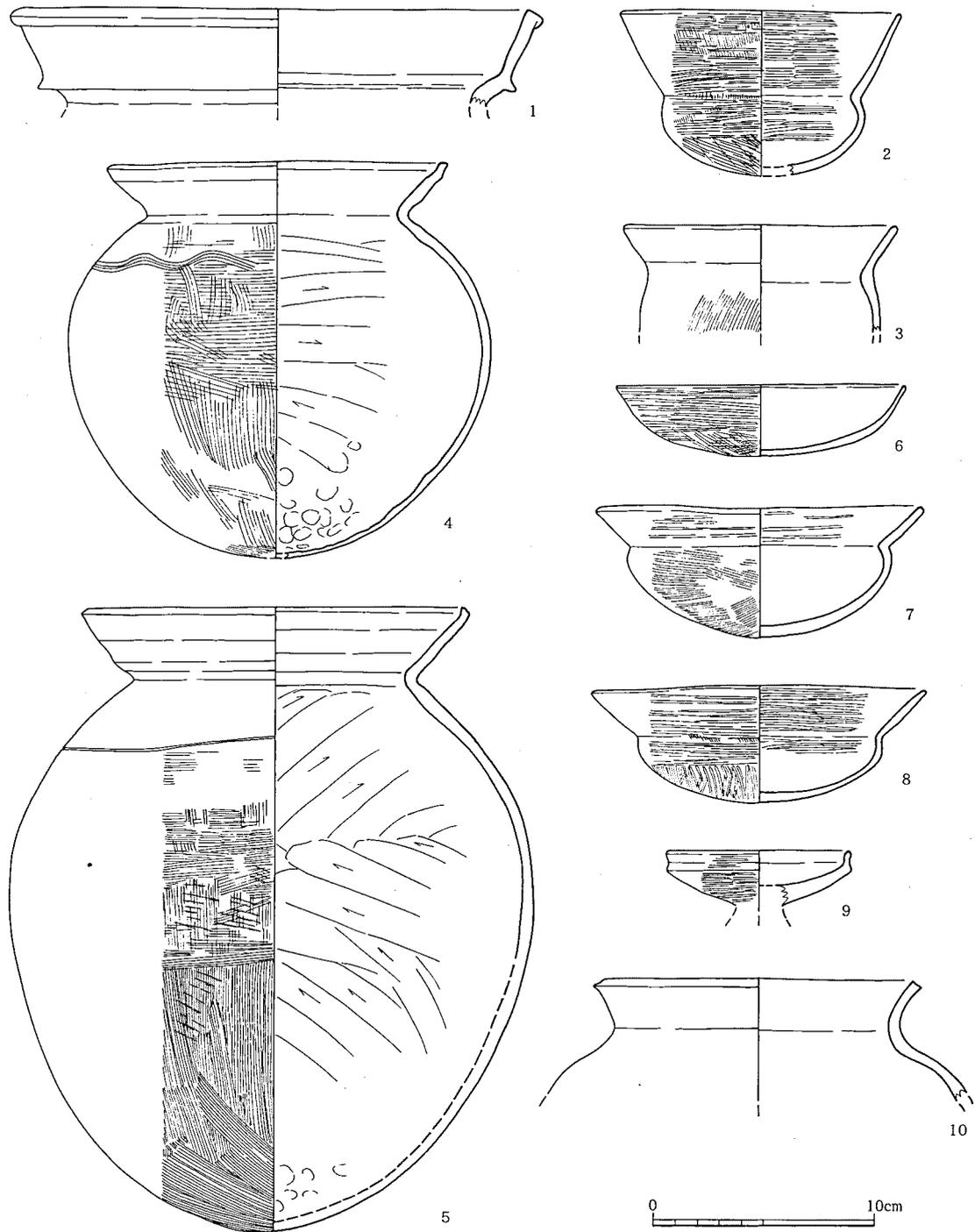
29は飯蛸壺である。他のものと比べると器高が低く、口縁部が締まって楕円形に近い形状となる。外面の調整は指ナデだが内面にはハケ目を使用しており特異である。色調は黄灰褐色を呈す。下層の黄灰褐色細砂層から出土。

30は半島系甌の底部付近片である。現状で3つの蒸気孔が認められ、一つの蒸気孔の径は8mm程度になると思われる。底部と体部の境目には明瞭な稜線を持たず、緩やかに移行している。調整は内外面ともハケ目を使用する。胎土には砂粒を若干含み、色調は黄褐色を呈す。軟質焼成。

I 区南9西壁トレンチ出土土器 (図版11・12、第17図)

I 区南9西壁トレンチは先述したとおり1号溝と10号竪穴住居跡との先後関係を把握するために設定したトレンチであるため、出土土器には双方の土器が含まれる。

1は山陰系の二重口縁壺または甕である。口縁部は直線的に伸びてあまり開かず、端部は面をなす。屈曲部はシャープな三角突帯を巡らせ、口縁端部の外側は丸味を帯びた突帯を巡らせる。全面横ナ



第17図 I区南9西壁トレンチ出土土器実測図 (1/3)

テ調整。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。

2は小型の丸底壺である。体部は浅く、最大径は中位よりやや上に位置する。屈曲部はあまり締まらず、内面の稜はそれほどシャープではない。口縁部は長く直線的に伸びるが高さの比率は体部の二倍までには至らない。調整は内外面とも緻密な横ヘラミガキを行うが、内底部はヘラミガキが及んでおらず、また外面には先行するハケ目が見られる。外底部は一定方向のヘラミガキ。胎土には砂粒を若干含み、精製器種の割には粗い。色調は暗茶色を呈す。

3~5は甕である。3は小型の在来系甕。体部の肩の張りは弱く、頸部はほとんど締まらない。口

縁部はあまり開かず伸び、端部は丸く仕上げている。屈曲部の稜は弱い。口縁部と体部内面は横ナデ、体部外面は縦ハケ目。胎土には砂粒を多く含み、色調は黄灰色を呈す。4・5は布留系の甕である。4は器高が低い。体部の最大径は中位よりやや上に位置し、口縁部は端部のみ上方に立ち上がる。上端は水平な面をなす。口縁部は内外面とも横ナデ調整を行い、体部内面は横ヘラケズリを行う。内底部付近は指圧痕が多く認められる。外面は縦ハケ目後上半のみ横ハケ目を行い、その後に肩部のみ横ナデを行っている。また肩部には一条の櫛描波状文を巡らせる。色調は暗黄灰褐色を呈す。5は長胴の倒卵形に近い体部で、口縁部は直線的に開き端部を上方につまみ上げる。口縁部には横ナデの際に生じた弱い稜線がよく残る。体部内面はヘラケズリを行っており、屈曲部近くにまで及んでいる。底部付近には指圧痕が認められる。外面は非常に細かいハケ目を行っており、肩部には広い範囲で横ナデが及んでいる。またハケ目に先行するタタキもわずかながら確認できる。肩部には一条の沈線を巡らせる。胎土には砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。

6～8は鉢である。6は直口縁の精製鉢。浅い体部のものである。器壁は非常に薄く、特に端部は薄く尖る。内面は風化が進んでおり調整は確認できない。外面は緻密なヘラミガキを行っている。胎土には砂粒をほとんど含まず精良な水漉し粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。7・8は外反口縁の鉢。7は尖底気味の浅い体部で最大径がかなり上位にあり、屈曲部付近で強く内側へと内湾している。屈曲部内面の稜はあまりシャープではない。口縁部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。口縁部は内外面とも横ナデの後に粗い横ヘラミガキを行う。体部内面は風化が著しく調整不明。外面は横ハケ目を最終調整とする。胎土に粗砂を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。8もやはり体部が浅い。肩部は短く上方に立ち上がり、口縁部は直線的に開く。口縁部の内面は横ハケ目後に疎らな横ヘラミガキを行い、体部内面はナデの後に上方のみ横ヘラミガキを行う。外面は口縁部及び体部上半が横ヘラミガキ、下半は一定方向のヘラミガキ。外面には部分的に先行する縦ハケ目が見られる。胎土に微砂を若干含むものの、水漉しした精良な粘土を使用しており、色調は橙茶色を呈す。総じて丁寧な作りである。

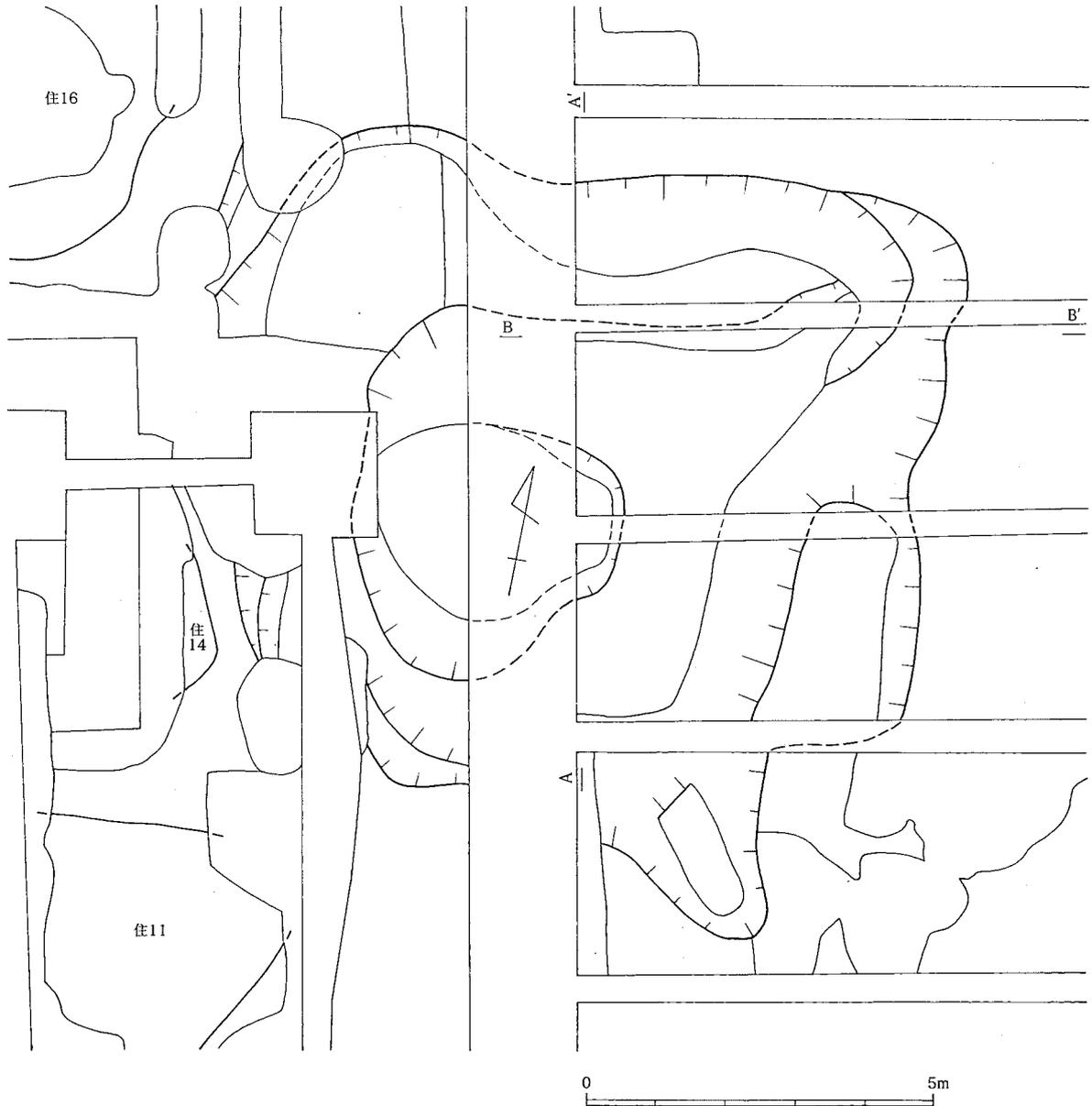
9は小型器台の受部である。立ち上がりは短く直立し、端部は丸い。内面は風化が進み調整は不明だが、外面には細かい横ヘラミガキが観察される。胎土には砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。

10は半島系の陶質短頸壺である。肩は丸く張り、頸部から大きく外反して短く開く口縁部へと至る。屈曲部には稜を持たない。口縁端部は強い横ナデにより沈線状に窪み、また内端・外端とも非常にシャープに仕上げられる。調整は全面回転ナデを行う。胎土には砂粒を含まず極めて精良な水漉し粘土を使用し、色調は暗灰色を呈す。焼成は良好である。

1号落ち込み (図版8、第18・19図)

I区東3～6、中4・7、北3にまたがる大型の遺構である。4号竪穴住居跡、11号土坑と重複しており、これらに切られている。平面形は不整形を呈し、一辺10m～11mを測る。底面は径4m前後の不整形円形を呈しており、壁は不整形のテラス状の段を伴いながら摺鉢状に傾斜している。検出面からこの底面までの深さは約175cmを測る。

覆土は大きく3層に分かれ、上層の第8層は暗褐色細砂層で部分的に黒褐色細砂を含み、全体に黄褐色細砂を少量含む。中層は第9層茶褐色細砂層で8よりやや明るく、黄色・赤色系の細砂を若干含



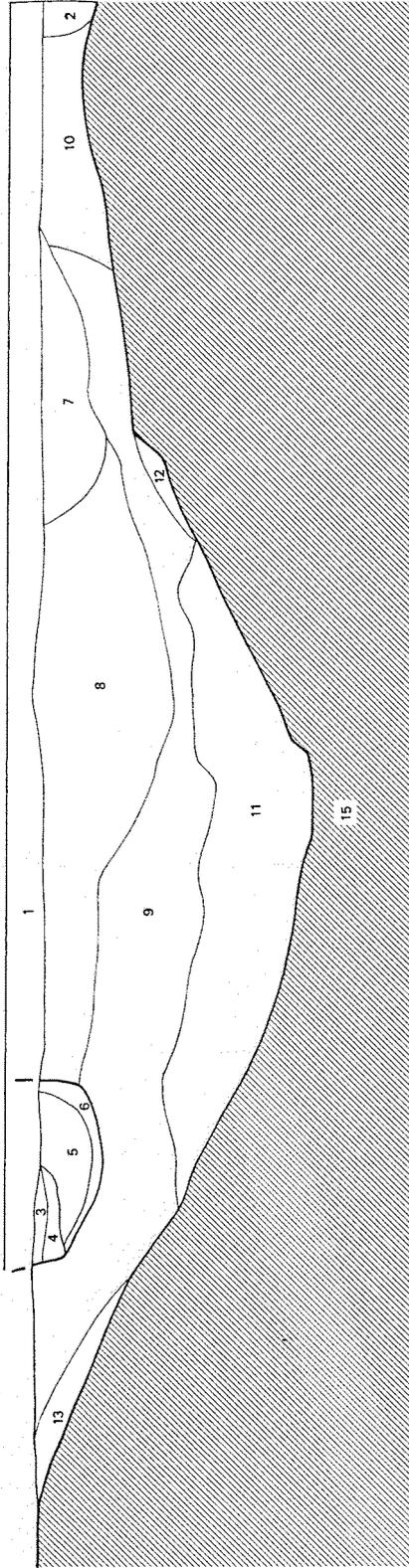
第18図 1号落ち込み実測図 (1/100)

む。下層は第11層暗褐色細砂層で赤色系砂粒を多く含み、第9層よりも砂粒がやや粗い。第15層は白色粗砂からなる地山で、この深度まで掘り進めると水が湧き始める。土坑の性格としては、この深さまで達していることから考慮して井戸と考えるのが妥当であろう。遺跡は海岸から近い位置にあるが、わき出す水は真水である。土器は第8層から最も多く出土し、下層に行くほど出土量も少なくなる。

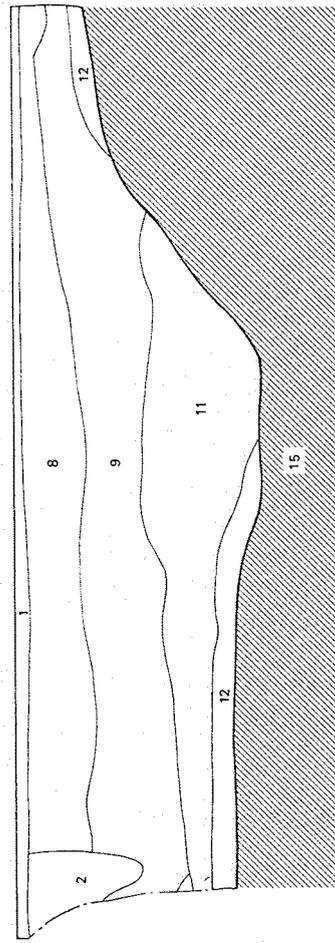
出土土器 (図版12・21、第20・21図)

1・2は在来系の直口壺である。1の口縁部はわずかに外反しながら開き、端部は薄く尖る。調整は内外面ともハケ目を使用する。胎土には砂粒を若干含むものの、緻密で良質な粘土を使用し、色調は黄茶色を呈す。上層からの出土。2は口縁部が短く甕に近い形状である。全体的に器壁が厚い。口縁部は若干外反し、端部は丸くおさめる。調整は内外面とも粗いハケ目を行っており、屈曲部の内面や肩部外面に指圧痕が明瞭に残る。また内面には粘土接合痕が明瞭に観察される。色調は橙茶

3.6m A



1. 旧校舎基礎礎石
2. 粗砂、雑土炭を含み、よくしまる
3. 茶褐色細砂、黒褐色細砂を若干含む
4. 暗茶褐色細砂、3より黒褐色細砂を多く含む
5. 黒褐色細砂、炭を多く含む、あまりしまらない
6. 茶褐色細砂+黒褐色細砂
7. 暗褐色細砂、ややしまる
8. 暗褐色細砂、部分的に黒褐色細砂を多く含む、全体に黄褐色細砂を少し含む、土器多い
9. 茶褐色細砂、8よりやや明るい、黄色赤色系細砂を若干含む
10. 淡茶褐色細砂、地山の砂を多く含む、やや粗い
11. 暗褐色細砂、赤色系砂粒を多く含む、土層より砂粒がやや粗くなる
12. 白色粗砂+茶褐色細砂、あまりしまらない
13. 9+白色粗砂
14. 褐色細砂、黄色系細砂を若干含む
15. 白色粗砂 (地山)



3.6m B



第19図 1号落ち込み断面土層図 (1/50)

色を呈す。

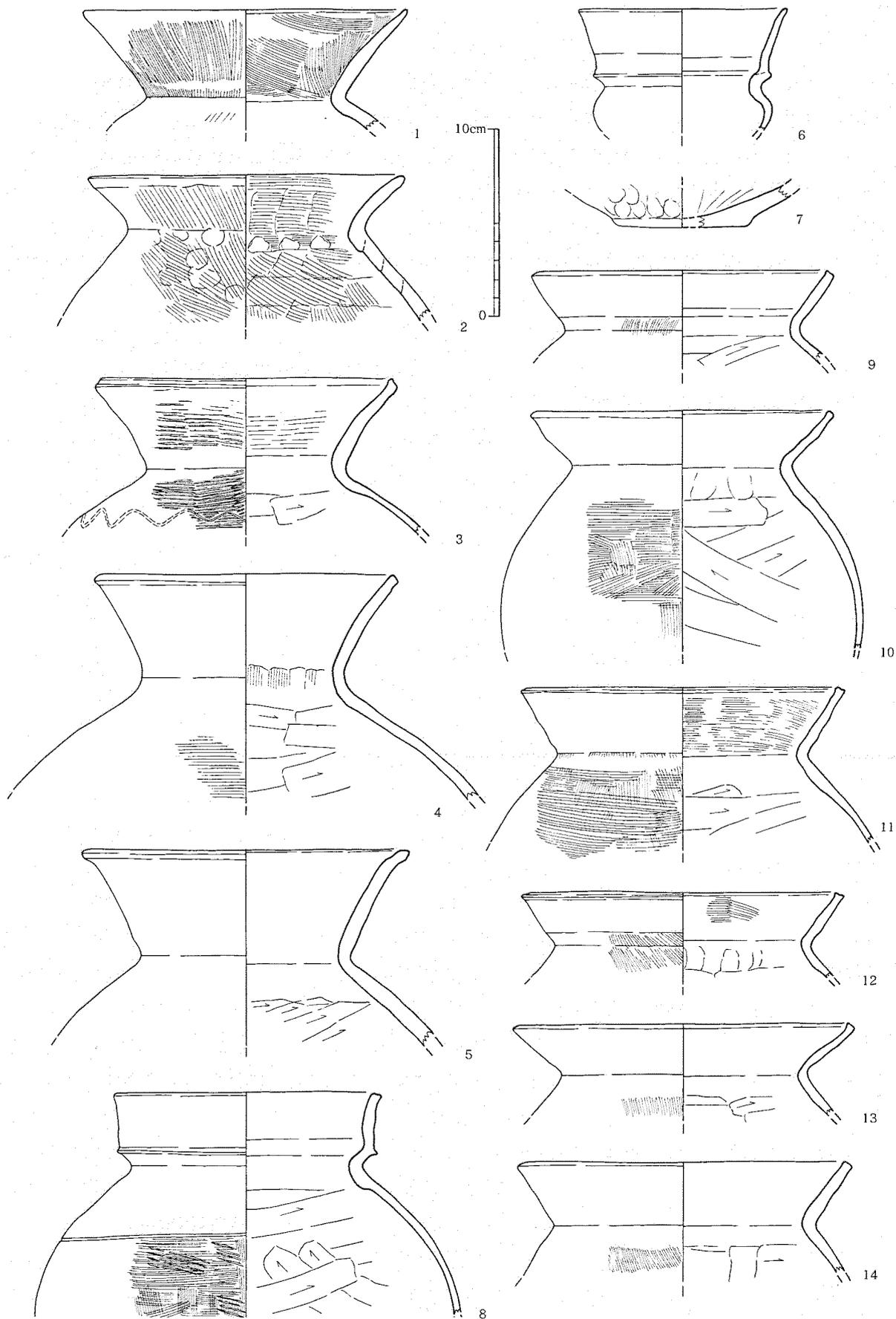
3～5は畿内系の直口壺である。3は頸部が縮まり、口縁部は若干外反して長くのびる。端部は上方に大きくつまみ出される。口縁部は横ナデを最終調整とするが、内面には先行する横ハケ目が、外面には横平行タタキが観察される。体部内面はヘラケズリ、外面はわずかに左下がりの細かい平行タタキを行っており、その上から一条の波状沈線を巡らせる。胎土には砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。上層からの出土。4は頸部が強く縮まり、口縁部は外反しながら開く。頸部の屈曲は緩やかで稜線を持たない。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面は横ヘラケズリ、外面は横ハケ目調整を行う。頸部内面には接合の際付された縦ハケ目が残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。5は器壁が厚い。頸部はよく縮まり、口縁部は直線的に開いて端部付近のみ更に外側へと開く。端部は丸味をおびるが、上端は水平面をなす。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面はヘラケズリ、外面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。上層出土。

6は山陰系の二重口縁小型壺である。一次口縁部は短く強く外反し、屈曲部の外側は明瞭な稜をなす。二次口縁部はあまり開かず立ち上がり、口縁端部は薄く尖る。調整は内外面ともナデを行っている。胎土には砂粒を若干含み、色調は肌茶色を呈す。上層出土。

7は甕の底部。底面はわずかにレンズ状となるが、外面の底部と体部の境は不明瞭ながらも残っており、時期的に遡るものである。内面にはヘラ状工具でナデ上げた際のヘラ痕跡が残る。外面には整形時の指圧痕が多く認められる。色調は肌灰色を呈す。

8は山陰系の二重口縁甕である。肩部は丸味を帯び頸部は比較的よく縮まる。一次口縁部は短く外反し、二次口縁部はほとんど開かず上方に伸びる。端部はやや外傾する面をなす。口縁部の屈曲部外面は三角突帯状にシャープに引き出す。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面はヘラケズリ、外面はハケ目を行うが、先行する右下がりタタキが認められる。また肩部には一条の沈線を巡らせる。色調は薄肌色を呈し、他のものと若干異なっている。上層出土。

9～16は布留系の甕。9は口縁部の内湾がほとんどなく直線的に開く。端部は上端をつまみ出しており、内端部が尖る。口縁部は内外面とも横ナデ調整を行う。体部内面はヘラケズリを屈曲部近くまで行う。外面はハケ目後横ナデ。色調は黄灰褐色を呈す。10は長胴形の体部になるものである。口縁部はわずかに内湾し、上端部をわずかにつまみ上げる。口縁部は内外面とも横ナデ調整、体部内面はヘラケズリ、外面はハケ目。胎土に砂粒を若干含むものの比較的精良な粘土を使用し、色調は黄灰褐色を呈す。11の口縁部はほとんど内湾せずに開き、内端部は丸くつまみ出される。口縁部は内外面とも横ナデを行い、内面には先行する横ハケ目が明瞭に残る。体部内面はヘラケズリ、外面はハケ目後上方のみ横ナデを行うが、他のものと比べて横ナデの幅が狭い。胎土には砂粒を若干含み、色調は肌茶色を呈す。全体的に異質な土器である。12もまた口縁部の内湾がほとんど見られず、直線的に開いている。開きも他のものよりも弱い。端部は内端をシャープにつまみ出す。調整は内外面とも横ナデを最終調整とするが、これに先行するハケ目が認められる。また頸部内面には指圧痕がよく残る。色調は肌茶色を呈す。13は口縁端部付近のみ内湾する。端部は強い横ナデにより内端部がシャープに尖る。調整は他と同様。色調は黄灰褐色を呈す。14は口縁部の開きが弱く、また内湾せずほとんど直線的に伸びている。端部は内端を丸くわずかにつまみ出している。口縁部は内外面とも横ナデ調整、体部内面はヘラケズリ、外面はハケ目後横ナデを行う。胎土には砂粒をやや多く含み、色調は茶灰色を呈す。在来系的色彩の濃い資料である。15は球形に近い体部となる。



第20図 1号落ち込み出土土器実測図① (1/3)

口縁部はほとんど内湾せずに開き、端部はわずかに外端を引き出すがシャープさに欠ける。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面はヘラケズリ、外面は粗いハケ目。頸部近くのハケ目後の横ナデは行っていない。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。上層出土。16は肩部が丸味を帯び、頸部はよく締まる。口縁部はわずかに内湾して開き、内端部を丸くつまみ出す。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面はヘラケズリを屈曲部付近にまで行う。外面はハケ目後肩部上方に横ナデを加える。肩部には3つの刺突文が見られるが、図示した以外の部分には見られない。色調は肌茶色を呈す。外面は二次加熱を強く受け赤変する部分が見られ、また全体的に煤が付着する。

17は吉備系の二重口縁甕である。一次口縁部は大きく開き、二次口縁部は短くわずかに外傾して立ち上がる。端部は丸い。二次口縁部の外面には擬凹線が認められる。胎土には細砂を若干含むものの粗砂が少なく、また色調も暗褐色を呈し、他の土師器と比べ質的にも差がある。

18～20は鉢である。18は直口縁の小型鉢である。底部は不安定な尖底気味で体部は浅く、口縁部付近のみつまみ上げて上方に立ち上がる。端部は丸くおさめられる。調整は内外面とも粗雑なヘラミガキを行い、整形の際の指圧痕も残る。胎土には砂粒を若干含み、あまり良質ではない。色調は黄灰色を呈す。上層から出土。19は屈曲口縁の小型精製鉢である。屈曲部はいずれも不明瞭で、しっかりとした稜をなさない。調整は全面丁寧な横ヘラミガキを行い、底部付近には先行するヘラケズリの稜が見られる。胎土には砂粒をほとんど含まず精良な水漉し粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。

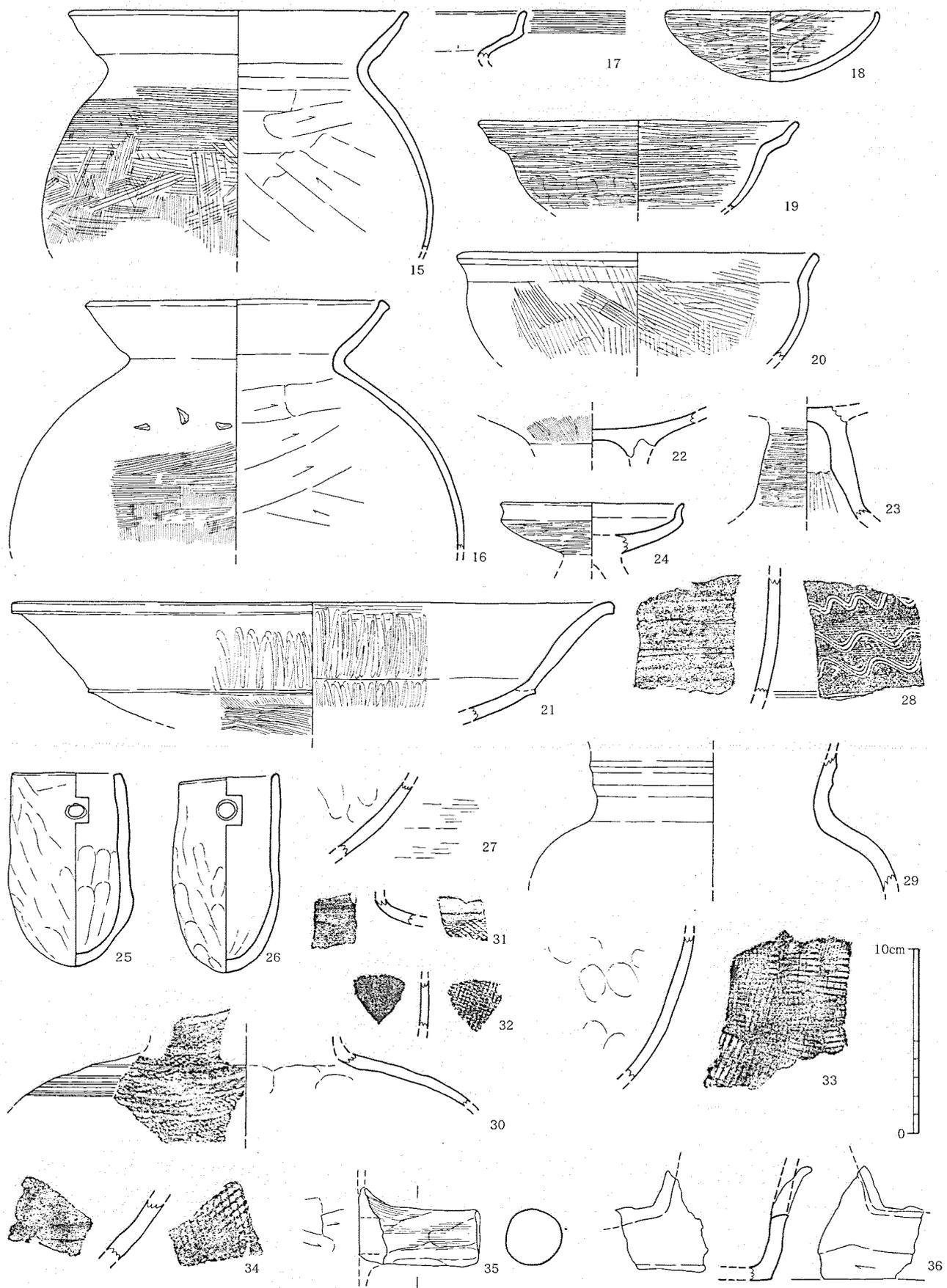
20は粗製の鉢である。体部はそれほど深くなく、上半は立ち上がる。屈曲部は不明瞭で、内面に弱い稜が認められるに過ぎない。口縁部は短く開き、端部は不明瞭な面をなす。内外面とも粗いハケ目を行った後に口縁部付近のみ横ナデを加える。胎土に砂粒を若干含み、色調は橙肌色を呈す。二次加熱を受けており、明らかに煮炊きに使用している。上層から出土。

21～23は高坏である。21は在来系の高坏。口縁部が大きく開き、更に端部を短く折り曲げており上端に水平面を形成する。また外端部にも強い横ナデを加えてシャープな面を形成している。屈曲部の段は明瞭である。内面の調整は縦方向のヘラミガキを行い、屈曲部で分割して行われる。外面の段より上方は、ヘラミガキを暗文状に行う。下方は横方向にヘラミガキを行うが、先行するハケ目が段の近くに認められる。胎土には砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。22もやはり在来系の高坏であろう。内面の調整は不明、外面にはハケ目が見られる。脚部内面はナデ調整を行っている。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。23は高坏の脚柱部。外面には緻密な横ヘラミガキを加える。内面の上半はナデ、下半は横方向にヘラ状工具を移動させて整形している。胎土には砂粒をほとんど含まず、精良な粘土を使用する。色調は橙茶色を呈す。

24は小型器台の受部である。立ち上がりは短く外反し、端部は外側を向いて尖る。立ち上がりは内外面とも横ナデ、内底部はナデ、外面は細かい横ヘラミガキ。胎土は非常に精良で、色調は黄肌色を呈す。

25・26は飯蛸壺である。25は全面に指整形時の圧痕が明瞭に残る。胎土に砂粒を若干含み、色調は暗黄灰色を呈す。上層出土。26は25よりややスリムな形状となる。外面には指ナデの痕跡が明瞭に残るが内面にはほとんど認められない。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。上層出土。

27～36は半島系の土器である。27は陶質焼成の壺体部片である。内面はナデ調整だが当て具の痕跡らしき浅い窪みが見られる。外面は横方向のナデで、ロクロ目跡がよく残っている。胎土は精良



第21図 1号落ち込み出土土器実測図② (1/3)

な粘土を使用するが、細砂粒を若干含む。色調は薄い灰色を呈し、非常に堅緻に焼き上げられる。

28・29は類例が見当たらず、胎土・色調とも他の陶質焼成の土器とは若干異なっており、果たして同時期の所産として良いものか判断に苦しむ。しかし他時期のものが混入する可能性は非常に少ないので、同列に扱うこととする。28は長頸壺の頸部であろうか。外面は弱いカキ目の後に3条の櫛描波状文を施し、下端には2条の沈線を巡らせる。内面は強い回転ナデによるロクロ目跡が明瞭に残る。胎土には砂粒を若干含み、古墳時代中期以降の須恵器の胎土と似る。色調は黒灰色を呈し、堅緻に焼き上がる。黒褐色細砂層から出土。29も長頸壺となろうか。肩は丸味を帯びて張り、頸部はやや開いている。外面にはロクロナデによる低い三角突帯が2条見られる。調整は全面丁寧な回転ナデを行う。胎土には砂粒を若干含み、28ほどではないが他の陶質土器と比較すると良くない。色調は灰色～薄灰色を呈す。焼成は良好で堅緻に焼き上がり肩部には自然釉がかかる。

30・31は壺の肩部である。30は肩が大きく張り、頸部が強く締まる短頸壺。外面は斜格子タタキの後に凹線を巡らせる。内面はナデ調整を行うが、頸部付近には指圧痕が残る。作りは雑で凹線の間隔もまばらである。胎土には砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。軟質焼成。31もやはり外面に小さな斜格子タタキを行う。内面は横ナデ。胎土には砂粒をあまり含まず精良で色調は黄灰褐色を呈す。軟質焼成である。上層から出土。

32は目の細かな正格子タタキを施す瓦質焼成の土器。器壁が薄く、小型品であろうか。内面はナデ。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は灰色を呈す。同一個体と思われる破片が1号溝上層から2片出土している。

33は外面に特徴的な正格子タタキを行う。上方にはわずかに縦方向の平行タタキが見られる。内面は横ナデを行い、指圧痕も認められる。胎土には砂粒を若干含み、色調は内面茶色、外面茶灰色を呈し、黒斑も見られる。焼成は軟質焼成である。

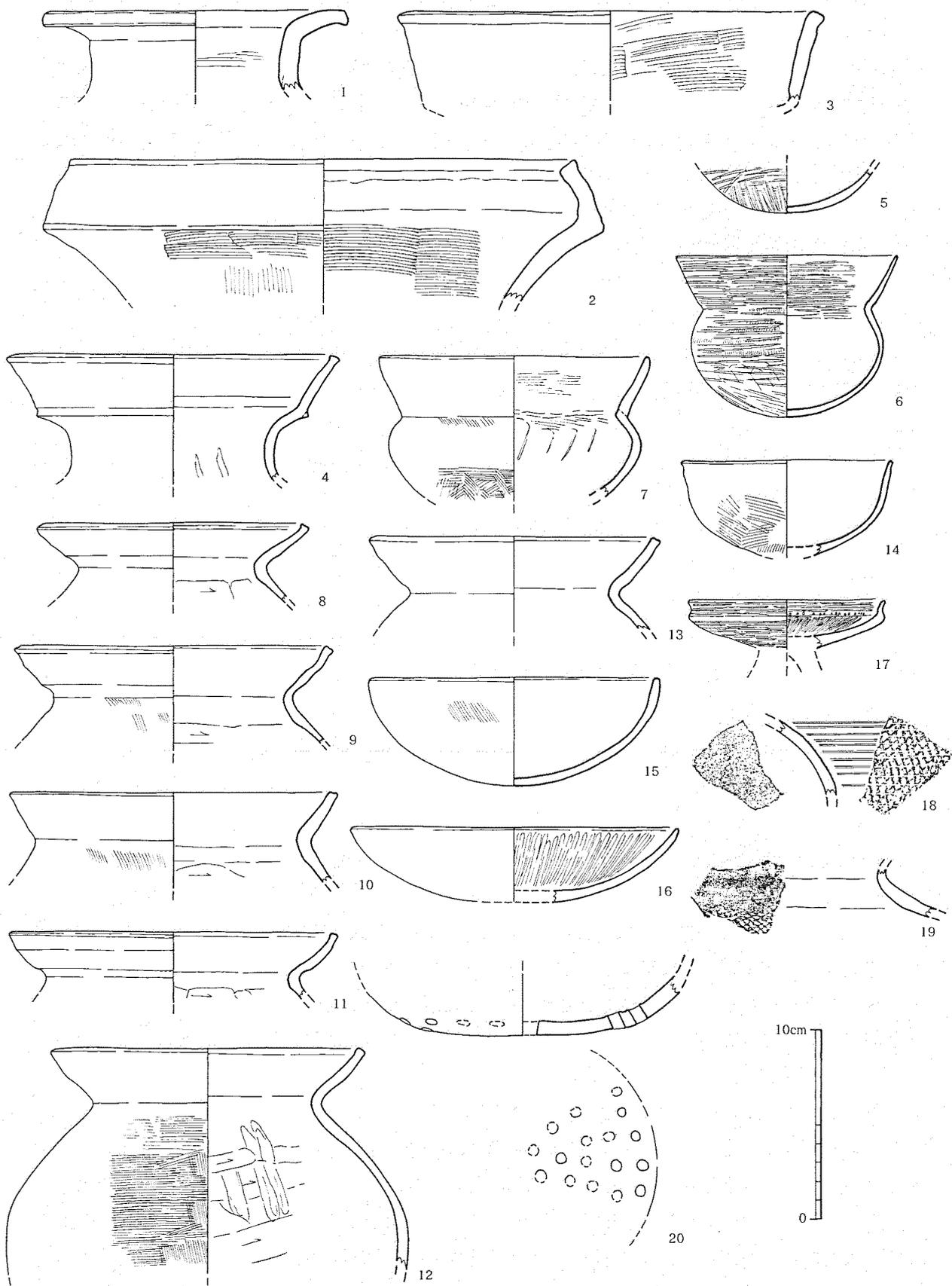
34は器壁が厚く大型品になると思われる。外面には大きめの斜格子タタキが見られ、下方はナデ消している。内面は横ナデを行う。胎土には砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成である。

35は円柱状の甑把手である。整形は指ナデ整形を行い、その後粗いハケ目を行っている。内面はヘラケズリを行う。胎土には砂粒を多く含み、色調は黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成である。

36は底部付近の小片であり全体の形状を知りえないが、体部の下端に横ヘラケズリを加えているので半島系に含めた。底部は平底で、端部はシャープな稜を有す。体部には不整形の透かし孔らしき箇所が認められる。内面は横ナデ調整を行う。胎土には粗砂を若干含みあまり良くない。色調は黄灰褐色を呈し、布留系の甕等と似る。焼成は軟質焼成である。

ピット出土土器 (図版12・22、第22図)

1～6は壺である。1は直口縁の在来系壺。頸部は直立し、口縁部は大きく水平近くまで開き、先端部は下方につまみ出される。器壁はやや厚く、全体的にシャープさに欠ける。全面横ナデ調整を行うが、頸部の内面には先行する横ハケ目が認められる。胎土に砂粒を若干含み、色調は茶灰色を呈す。2は弥生時代後期に見られる複合口縁壺。頸部は大きく開き、口縁部は内傾する。端部は面をなす。口縁部は内外面とも横ナデ、頸部は内面横ハケ目、外面は屈曲部付近が横ハケ目、それより下位は縦ハケ目。胎土に角閃石を多く含む点が特徴的である。色調は黄灰褐色を呈す。3は在来系の



第22図 ピット出土土器実測図 (1/3)

二重口縁壺であろう。口縁部は直立気味に立ち上がり、外端部を丸くつまみ出す。調整は内外面とも横ナデを行うが、内面には先行する横ハケ目が見られる。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。

4は山陰系の二重口縁壺である。頸部は短い円筒状をなし、一次口縁部は緩やかに開く。二次口縁部はわずかに外反しながら開き、接合部の外側は突帯状につまみ出される。口縁部は内端を弱くつまみ出す。調整は内外面とも横ナデ調整を行うが、頸部内面には縦方向の指ナデが認められる。色調は黄灰褐色を呈す。

5・6は畿内系の小型丸底壺である。5の底部は丸底で、内面はナデ、外面は丁寧なヘラミガキを行う。胎土に砂粒をほとんど含まず水漉しした精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。6は体部の最大径が中位よりやや上に位置し、頸部はあまり締まらず口縁部は直線的に開く。屈曲部は明瞭な稜をなす。端部はシャープに尖る。内面の調整は口縁部から屈曲部直下までは横ヘラミガキを行い、一部先行する横ハケ目も見える。外面はハケ目後に横ヘラミガキを行い、底部は一定方向のヘラミガキを行っている。胎土は砂粒をほとんど含まず精良で、色調は肌茶色を呈す。

7は在来系の壺で、鉢に近い形状である。体部は浅く、最大径が上位に位置する。口縁部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。口縁部は内外面とも横ナデを行うが、内面には先行する横ハケ目が見られる。体部内面はナデを行うが、整形時の工具痕が残る。外面はハケ目の後上半のみナデ消す。胎土には砂粒をあまり含まず比較的精良である。色調は暗黄灰色を呈す。

8～13は布留系の甕である。8は口縁端部付近がやや内湾し、内端部をシャープにつまみ出す。体部内面に横ヘラケズリが見られる他は全面横ナデ調整を行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。9は口縁部が弱く内湾しながら開き、端部は外側をつまみ出す。器壁は比較的薄い。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面はヘラケズリ、外面はハケ目後横ナデ。色調は黄灰褐色を呈す。10は在来系との折衷形であろう。口縁部はあまり開かず、上端は水平面をなす。器壁はやや厚い。口縁部は横ナデ、体部内面はヘラケズリ、外面は縦ハケ目後横ナデ。胎土には砂粒をやや多く含み、色調は橙茶色を呈す。11は口縁部が内湾しながら開き、上端は不明瞭な面をなす。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。12は肩部の丸味が少なく、口縁部はやや内湾して端部は丸味を帯びる。器壁は全体的に均一な厚さである。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面はヘラケズリを行うが先行する縦指ナデが明瞭に残る。外面は縦ハケ目後に横ハケ目を行う。色調は暗肌灰色を呈す。13は頸部がやや締まった形となる。口縁部の開きは弱く、端部は内側をわずかにつまみ出す。遺存する部分は全面横ナデ調整である。色調は黄灰褐色を呈す。

14～16は鉢である。14は深い体部の在来系鉢である。体部中位で緩やかに立ち上がり、口縁部へと至る。端部はわずかに外方へつまみ出す。器壁は総じて薄い。内面はナデ、外面はハケ目の後上方のみ横ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は暗褐色を呈す。15は口縁部付近が立ち上がり、端部は上方を向く。内外面ともナデを最終調整とするが、外面には一部先行するハケ目が見られる。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。16は浅い体部の鉢である。内面は放射状のヘラミガキを密に行い、外面はナデ調整を行う。胎土には砂粒を若干含みあまり精良ではない。色調は肌灰色を呈す。

17は精製小型器台の受部である。立ち上がりは短く外反し、端部は外側を向く。内底部は放射状のヘラミガキを行い、その他は横ヘラミガキを密に行う。胎土は砂粒を含まず精良な粘土を使用し、

色調は橙茶色を呈す。

18～20は半島系の土器である。18は壺の肩部。外面に粗い斜格子タタキを行い、その上から平行沈線を密に巡らせる。内面は横ナデ。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用し、色調は茶色を呈す。軟質焼成。19は壺の頸部付近である。外面の上方は横ナデ、肩部には比較的小さな斜格子タタキを行う。内面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成である。

20は甗の底部である。底部は平底だが、体部との境目は稜をなさず、丸く緩やかに移行している。底部の蒸気孔は径6mm前後の大きさで、基本的には5重の配置を意識しているようだが規則的な配置とならない。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成である。

3. 包含層・遺構面・攪乱等出土土器

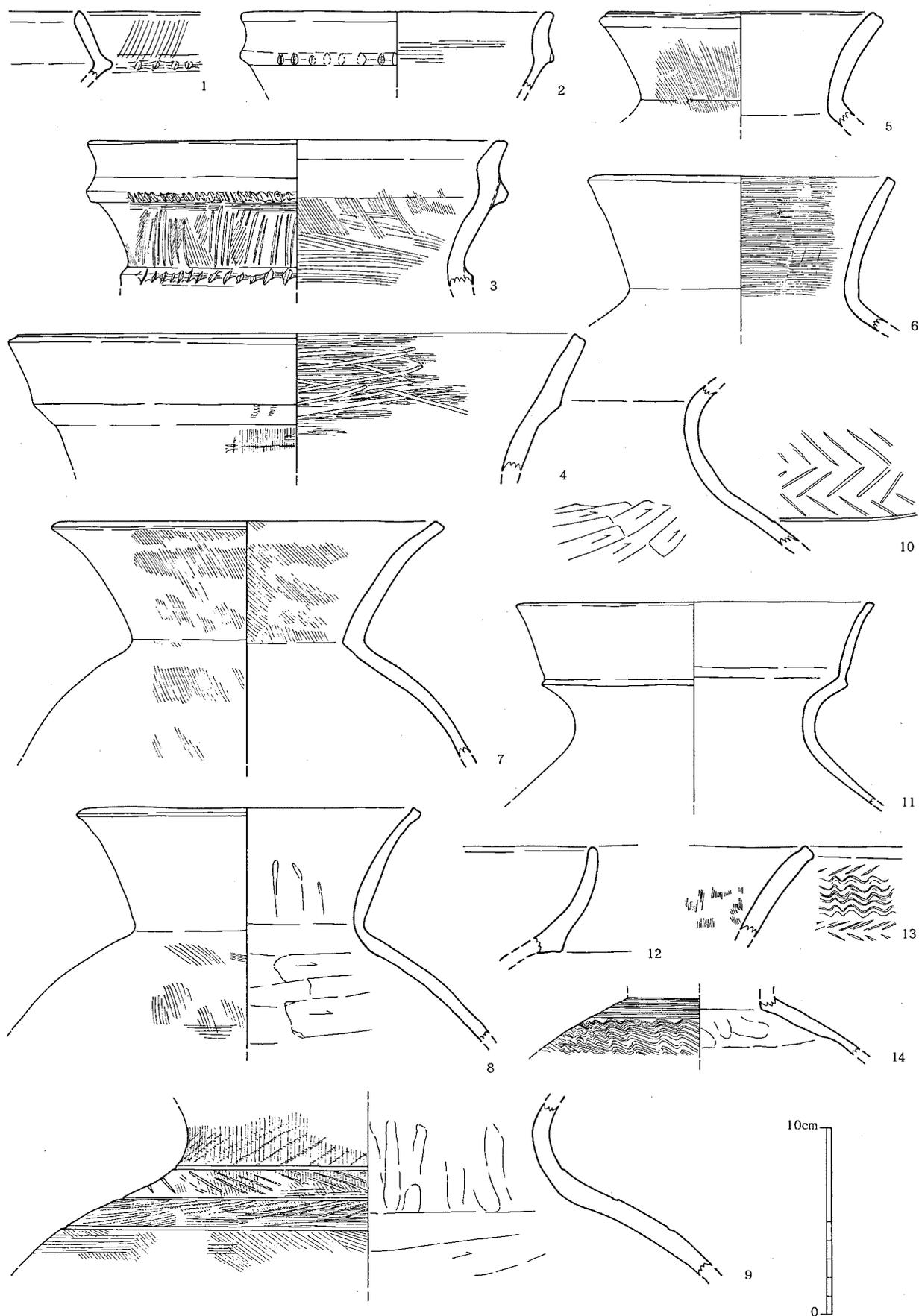
I区包含層出土土器 (図版12～15・22～26、第23～33図)

1～30は壺である。1～4は在来系の二重口縁壺。1は二次口縁部が内傾する弥生後期の複合口縁壺系統のものである。屈曲部外側に刻目突帯を巡らせる。口縁端部は丸くおさめている。内面は横ナデ、外面には粗い縦ハケ目が見られる。胎土に砂粒をやや多く含み、色調は黄灰褐色を呈す。南11から出土。2は口縁部が直立し、さらに端部は丸く外反している。屈曲部外側にはハケ目工具の刺突による不明瞭な刻目突帯を巡らせる。器壁は頸部に対して口縁部が極端に厚い。内面は横ハケ目後に口縁部付近のみ横ナデ、外面は全面横ナデ。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。中1出土。3は締まりのない短い頸部を持ち、二次口縁部は短く直立し、端部は丸く外反する。頸肩境と口縁屈曲部にそれぞれ刻目突帯を巡らせる。口縁部付近は内外面とも横ナデ、頸部内面は粗い横ハケ目、外面は粗い縦ハケ目。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。北2出土。4は二重口縁壺の退化形態のものであろう。口縁部の屈曲はほとんど形骸化し、外面にわずかな段を残すに過ぎない。口縁内端部はわずかに上方につまみ上げられる。内面は横ハケ目後粗くまばらな横ハラミガキを行い、外面の口縁部付近は横ナデ、頸部は縦ハケ目を行う。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。南1出土。

5～8は直口縁の壺である。5～7は在来系の直口壺。5の口縁部は若干外反しながら開き、端部には不明瞭な沈線を巡らせる。体部内面はハラケズリを行っており、屈曲部には稜線が見られる。口縁部内面は風化が著しく調整不明、外面は縦ハケ目。全体的に器壁が厚い。色調は黄灰褐色を呈す。中7の暗褐色細砂層から出土。6は屈曲部に稜を持たず、口縁部はわずかに外反しながら開く。端部には強い横ナデを加え、断面四角形に仕上げる。口縁部内面は細かい横ハケ目、外面は横ナデ。体部は内外面とも横ナデ。色調は黄灰色を呈す。北2出土。7は口縁部が長く外反し、端部は面をなす。屈曲部の内面には明瞭な稜をなす。口縁部は内外面ともハケ目、体部外面もハケ目、内面は器壁の風化が著しく調整不明。色調は肌茶色を呈す。中1出土。

8は頸部が締まり、口縁部は緩やかに外反しながら開く。端部は内端をつまみ出す。肩部は丸味を帯び球形に近い。口縁部は内外面とも横ナデを行い、内面には工具痕が認められる。体部内面は横ハラケズリ、外面は縦ハケ目の後に横ハケ目を行う。色調は黄灰褐色を呈す。東5暗褐色細砂層出土。

9～12は山陰系の二重口縁壺。9は大型品。ハケ目の後ナデを行わず、肩部に沈線とハケ目工具刺突による綾杉文を巡らせる。体部内面は横ハラケズリ、頸部には縦方向の指ナデを行う。色調は灰



第23图 I区包含层出土土器实测图① (1/3)

褐色を呈す。西2出土。10も肩部片。外面に沈線とヘラ状工具の刺突による無軸羽状文を巡らせる。体部内面はヘラケズリ、頸部はナデ。色調は黄灰褐色を呈す。西5・6出土。

11は屈曲部外面を三角突帯状に引きだし、口縁部は緩やかに開く。端部は丸味を帯びる。口縁部は横ナデを行うが、体部は風化が著しく調整不明。色調は橙肌色を呈す。中1出土。12は口縁部が内湾しなから開き、端部は直立する。屈曲部外面は三角突帯状に仕上げる。色調は黄灰褐色を呈す。北1出土。

13・14は櫛描波状文を巡らせる壺である。13はわずかに外反しながら開く口縁部で、端部はシャープな面をなす。外面に櫛描波状文と無軸羽状文を巡らせる。内面は細かいハケ目の後に横ナデを行う。色調は黄灰褐色を呈す。西8出土。14は精製中型壺の肩部片。肩部の上半に櫛描直線文を巡らせ、その下に波状文を配置する。内面は横ナデを行い、頸部付近には接合の際の指ナデが見られる。胎土には砂粒をほとんど含まず水漉しした精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。中7の暗褐色細砂層と東4から出土。

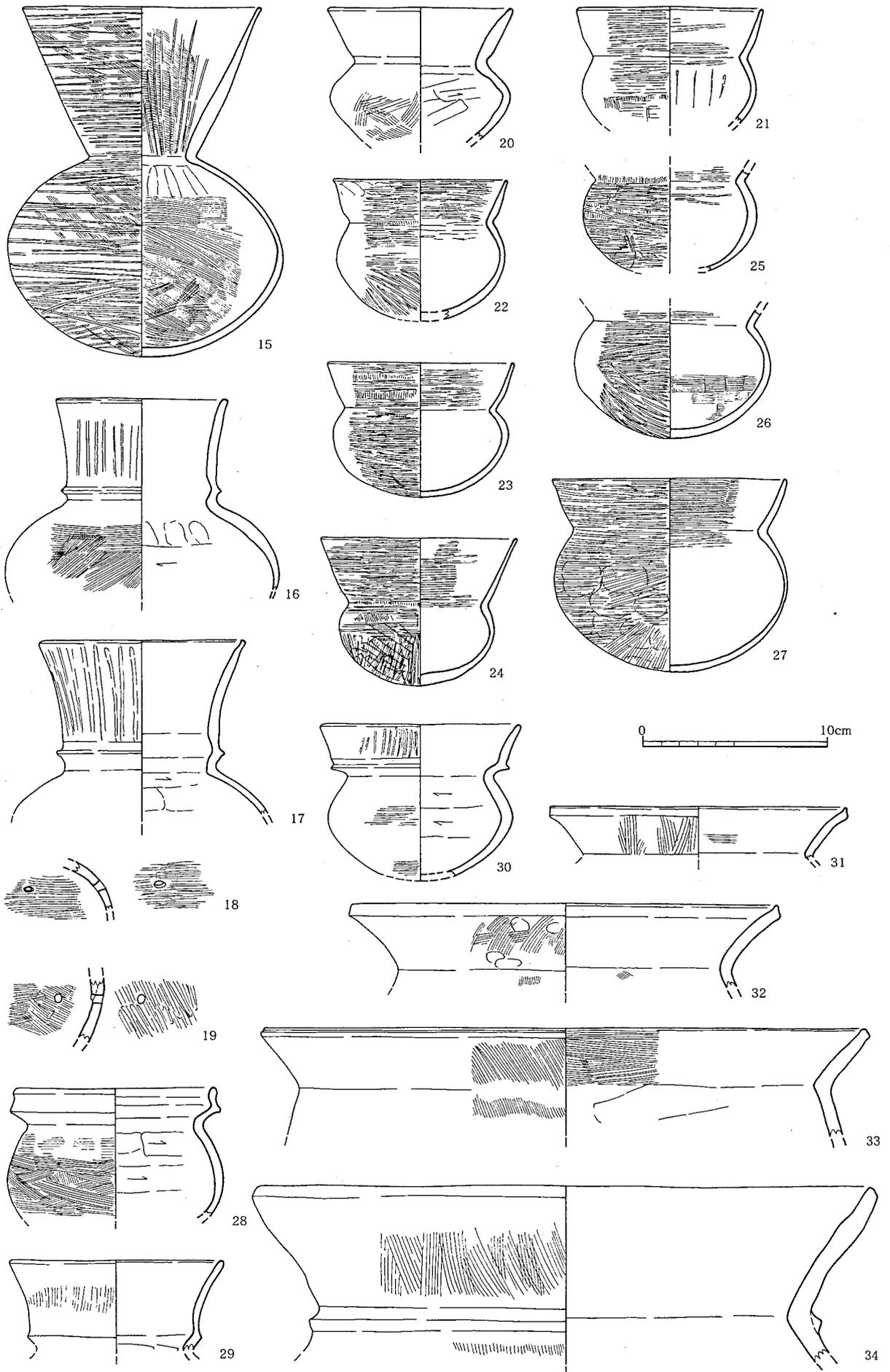
15は畿内系の中型精製直口壺である。体部は球形で頸部は強く締まり、口縁部は直線的に開く。体部内面は細かいハケ目だが肩部付近は縦指ナデを行う。外面は横ヘラミガキを行い、上半には先行するハケ目が見られる。口縁部内面はハケ目後縦方向の放射状ヘラミガキ、外面はハケ目後まばらな横ヘラミガキ。胎土には砂粒をほとんど含まず、色調は黄茶色を呈す。西1出土。

16・17は山陰系の小型二重口縁長頸壺。16は扁球形の体部を有し、一次口縁部は短く外反する。二次口縁部はほとんど開かず立ち上がり、上面には不明瞭な面を有す。一次口縁部と二次口縁部の境にはシャープな三角突帯を巡らせる。内面体部下半は横ヘラケズリ、上半は縦指ナデ、口縁部内面は横ナデ、外面の口縁部は横ナデ後縦方向の暗文を行う。肩部は横ナデ、これより下位はハケ目。胎土には粗砂を含まず細砂を若干含む。色調は茶褐色を呈し他のものとやや異なる。北2出土。17は肩頸境の内面に明瞭な稜を有す。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。一次口縁部と二次口縁部の境の突帯はシャープだが、先端がやや丸味を帯びる。体部内面は横ヘラケズリ、頸部から口縁部にかけてはナデ。体部外面はナデ、口縁部はナデの後に縦方向の暗文を施文する。胎土に砂粒を若干含む、色調は黄灰色を呈す。中1出土。

18・19は精製壺の体部片であろうか。どちらも径4mm程度の焼成後穿孔を行っている。18は肩部片。内面はハケ目、外面は横ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を含まず非常に精良な粘土を使用する。色調は橙茶色を呈す。東5黒褐色細砂層出土。19は内面ハケ目、外面斜ヘラミガキを行う。胎土は非常に精良で、色調は内面灰褐色、外面黒色を呈す。18と同様東5黒褐色細砂層出土。

20～27は小型丸底壺である。20は外反口縁の粗製壺。体部の最大径は中位よりやや上に位置し、頸部は比較的締まり口縁部は直線的に開く。端部は丸い。全体的に器壁は厚い。体部内面はヘラケズリ、外面の肩部は横ナデ、下半はハケ目、口縁部は内外面とも横ナデを行う。胎土に砂粒をやや多く含む色調は黄灰褐色を呈す。

21～27は畿内系の精製小型丸底壺である。21は体部が扁球形で屈曲部内面には稜を有し、口縁部はやや内湾しながら開く。体部内面はナデ調整だがヘラナデの痕跡が残る。口縁部内面は横ヘラミガキ、外面はハケ目後横ヘラミガキ。胎土には砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。22は球形に近い体部を有し、頸部の締まりは弱く、口縁部は緩く内湾しながら開き端部付近のみ外反する。内面のヘラミガキは屈曲部の下まで及び、それ以下はナデ。外面は口縁部から体部



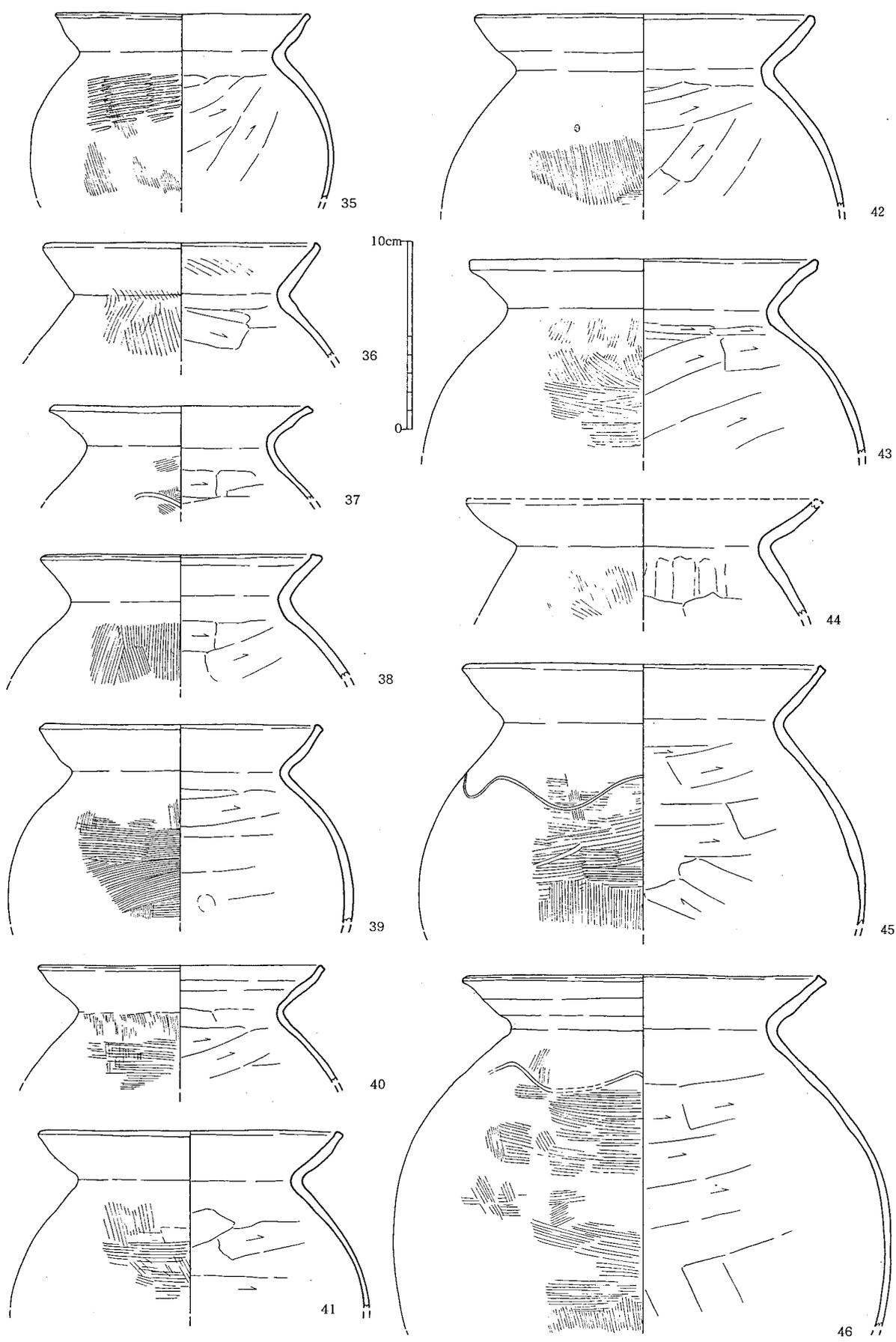
第24图 I区包含层出土土器实测图② (1/3)

中位までが横ヘラミガキ、体部下半は一定方向のヘラミガキ。中1出土。23は扁球形の体部を有し頸部の締まりは22よりも強く、内面に明瞭な稜を有す。口縁部はわずかに内湾しながら開く。体部内面はナデ、口縁部内面は横ヘラミガキ、外面は横ヘラミガキで口縁部には先行する縦ハケ目が観察される。胎土に粗砂を若干含み、精製器種にしては胎土が粗い。色調は橙茶色を呈す。北2出土。24は口縁部が長く直線的に伸びる。頸部の締まりも21～23と比較すると弱い。体部内面はナデ、口縁部内面は横ハケ目後横ヘラミガキ。外面の口縁部から体部上半にかけてはハケ目後横ヘラミガキ、下半は一定方向のヘラミガキ。胎土に砂粒を含まず精良な水漉し粘土を使用し、色調は橙肌色を呈す。東5暗褐色細砂層出土。25は内面のヘラミガキが屈曲部以下にまで及び、口縁部には先行する横ハケ目も残る。外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌色を呈す。東6暗褐色細砂層出土。26は扁球形の体部となる。体部内面のうち上半はナデ、下半はヘラミガキを行う。口縁部内面は横ヘラミガキ。外面はハケ目後ヘラミガキ。砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用し、色調は赤茶色を呈す。北2出土。

27は21～26と比べるとやや大型となる。体部は球形に近く、頸部は比較的締まっており、口縁部はわずかに内湾しながら開く。体部内面はナデ、口縁部内面は横ハケ目後に横ヘラミガキを行っており、このヘラミガキは屈曲部以下にまで及ぶ。外面は非常に丁寧なヘラミガキを行っており、口縁部から体部中位までは横方向、底部付近は一定方向にヘラミガキを行う。体部の下半には先行するヘラケズリの稜線が見られる。胎土には砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は茶色を呈す。

28～30は山陰系の二重口縁小型壺である。28は口縁部が短く内傾し、端部は丸くおさめる。屈曲部の稜はシャープである。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面は横ヘラケズリ、外面はハケ目。胎土には砂粒、特に微砂を多く含み、色調は茶灰色を呈す。胎土・色調とも他の土師器と比べると異質である。29は口縁部が外反しながら長く伸びる。一次口縁部と二次口縁部の境にある稜は鋭い。内面は横ナデ、外面は縦ハケ目後に横ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。北2出土。30は扁球形の体部を有し、一次口縁部は短く外反する。二次口縁部は緩やかに開き、端部を丸くおさめる。一次口縁部と二次口縁部の境にはシャープな三角突帯を巡らせる。体部内面は横ヘラケズリ、外面は横ハケ目後ナデ消し。口縁部内面は横ナデ、外面は横ナデ後に鋸歯状の暗文を施す。胎土には砂粒を若干含み色調は黄灰白色を呈す。北3出土。

31～75は甕である。31～34は在来系の甕。31はやや小型品である。口縁部はわずかに外反しながら開き、端部は上方につまみ上げる。内面は横ハケ目後横ナデ、外面は粗い縦ハケ目。胎土に砂粒を比較的多く含み色調は褐色を呈す。南5暗褐色細砂層出土。32は屈曲部内面の稜が弱く、口縁部はわずかに外反しながら開く。端部は上方へとシャープにつまみ上げる。内面は横ナデを行うが、体部には先行するハケ目が一部残る。外面はハケ目を行い、整形時の指圧痕が認められる。胎土に砂粒をやや多く含み、色調は黄灰褐色を呈す。北1出土。33は屈曲部内面に明瞭な稜を有し、口縁部は短く直線的に開く。端部には浅い沈線を巡らせる。体部内面はヘラケズリ、口縁部内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目。胎土にはあまり砂粒を含まず、在来系の甕にしては精良な方である。色調は橙茶色を呈し、焼成は小型精製器種に似る。中2出土。34はやや大型の甕である。屈曲部内面の稜は明瞭で、外面には三角突帯を巡らせる。口縁部は直線的に長く伸び、端部は面をなす。内面は横ナデ、外面は縦ハケ目を行う。胎土に砂粒を多く含み色調は黄灰褐色を呈す。北3出土。



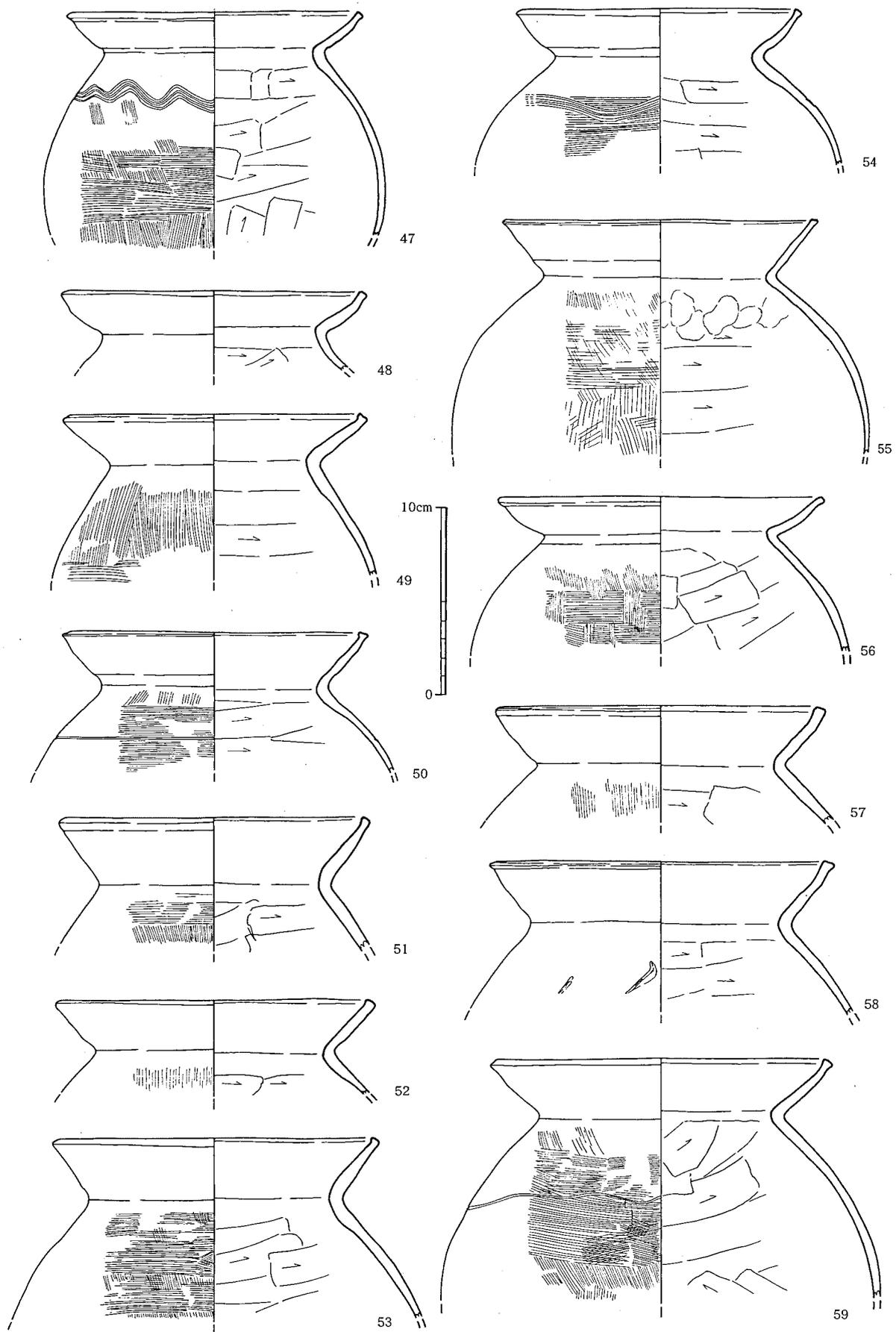
第25图 I区包含层出土土器实测图③ (1/3)

35は外面に平行タタキをもつ庄内系の甕。肩はあまり張らない。口縁部はほとんど内湾せずに関き、端部は丸くおさめる。体部内面のヘラケズリは屈曲部よりも1cmほど下までしか削っておらず、屈曲部内面の稜は弱い。外面の肩部には左下がりの平行タタキを施し、下方には縦ハケ目が見られる。口縁部は内外面とも横ナデ。胎土には砂粒を若干含み、色調は茶灰色を呈しており他の布留系甕と異なる。中7出土。

36～65は布留系の甕である。36は口縁部が内湾せず直線的に関き、上端をつまみ上げる。口縁部内面には横ナデに先行するハケ目が見られる。外面の縦ハケ目は粗く、また肩部の横ナデを行っていない。胎土に砂粒を若干含み、色調は肌茶色を呈す。在来系の要素が窺える資料である。東4暗褐色細砂層出土。37は頸部がよく締まり口縁部は外反しながら開く。端部は外側をつまみ出している。器壁は総じて薄い。肩部には一条の波状文を巡らせる。色調は肌茶色を呈す。北1出土。38は器壁が厚く全体的にシャープさに欠ける。口縁部は短く、やや外反気味に関き。内端部を丸くつまみ出す。肩部には縦方向のハケ目が見られ、その後に横ナデを行っていない。色調は黄灰褐色を呈す。東3暗褐色細砂層出土。39も器壁が厚い。口縁部はわずかに内湾しながら開き、端部は内端をわずかにつまみ出すもののシャープさに欠ける。色調は黄灰褐色を呈す。東5暗褐色細砂層出土。40は器壁が非常に薄い。肩は比較的張っており、口縁部は若干内湾しながら開き、口縁内端部をわずかにつまみ出す。色調は黄灰褐色を呈す。中1出土。41は口縁端部が丸味を帯び肥厚した形となる。色調は黄灰褐色を呈す。中1出土。42は内面のヘラケズリがかなり上方にまで及んでいる。口縁部の内湾は弱く、端部は丸味を帯びる。外面肩部の横ナデはかなり下方にまで及んでおり、その肩部に1点だけ刺突文が見られる。破片資料なので全周するかどうか判らない。色調は黄灰褐色を呈す。東5暗褐色細砂層出土。

43は頸部が締まり口縁部が外反しながら開き、端部は上方に丸くつまみ出されるため外側に垂直な面を有している。体部内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。胎土に粗砂をやや多く含み色調は茶褐色を呈す。他と異なる要素の多い資料である。44は口縁部が比較的大きく開く。端部は欠失するためどのような形状となるのか判らない。頸部内面には縦方向の指ナデが明瞭に残る。外面は風化が著しいがかすかにハケ目が認められる。色調は黄灰褐色を呈す。東3暗褐色細砂層出土。45は肩の張りが弱く、口縁部はわずかに内湾しながら立ち気味に関き。口縁端部は内端をつまみ出し、シャープに尖る。肩部には一条の波状沈線を巡らせる。色調は茶色を呈し、他の布留系甕とやや異なる。南4暗褐色細砂層出土。46はやや大型となる甕である。肩の張りは弱く、頸部は比較的よく締まっている。口縁部はほとんど内湾せず直線的に関き、端部は内端をつまみ出しシャープに尖っている。肩部には一条の波状沈線を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。東7暗褐色細砂層出土。

47は肩があまり張らず、対して口縁部の径が大きい。口縁部は内湾しながら開き、外端部をシャープにつまみ出す。肩部の横ナデはかなり幅広く行われ、その上から櫛描波状文を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。北2出土。48は口縁端部付近が内湾する。端部はやや丸味を帯びた面をなす。胎土の砂粒は比較的少なく色調は黄灰褐色を呈す。東7暗褐色細砂層出土。49は肩の張りが弱く、対して口縁部の径が大きい。口縁部は直線的に大きく開き、上端部を明瞭につまみ出すため外端部は沈線状に窪んでいる。外面はハケ目後に肩部の横ナデを行っていない。胎土には砂粒をやや多く含み色調は肌灰色を呈す。他の布留系甕と異なる要素の多い資料である。西7出土。50は体部の器壁が比較的薄い。口縁部は立ち気味に関き、内端部をつまみ出す。肩部には一条の沈線を巡らせる。



第26图 I区包含层出土土器实测图④ (1/3)

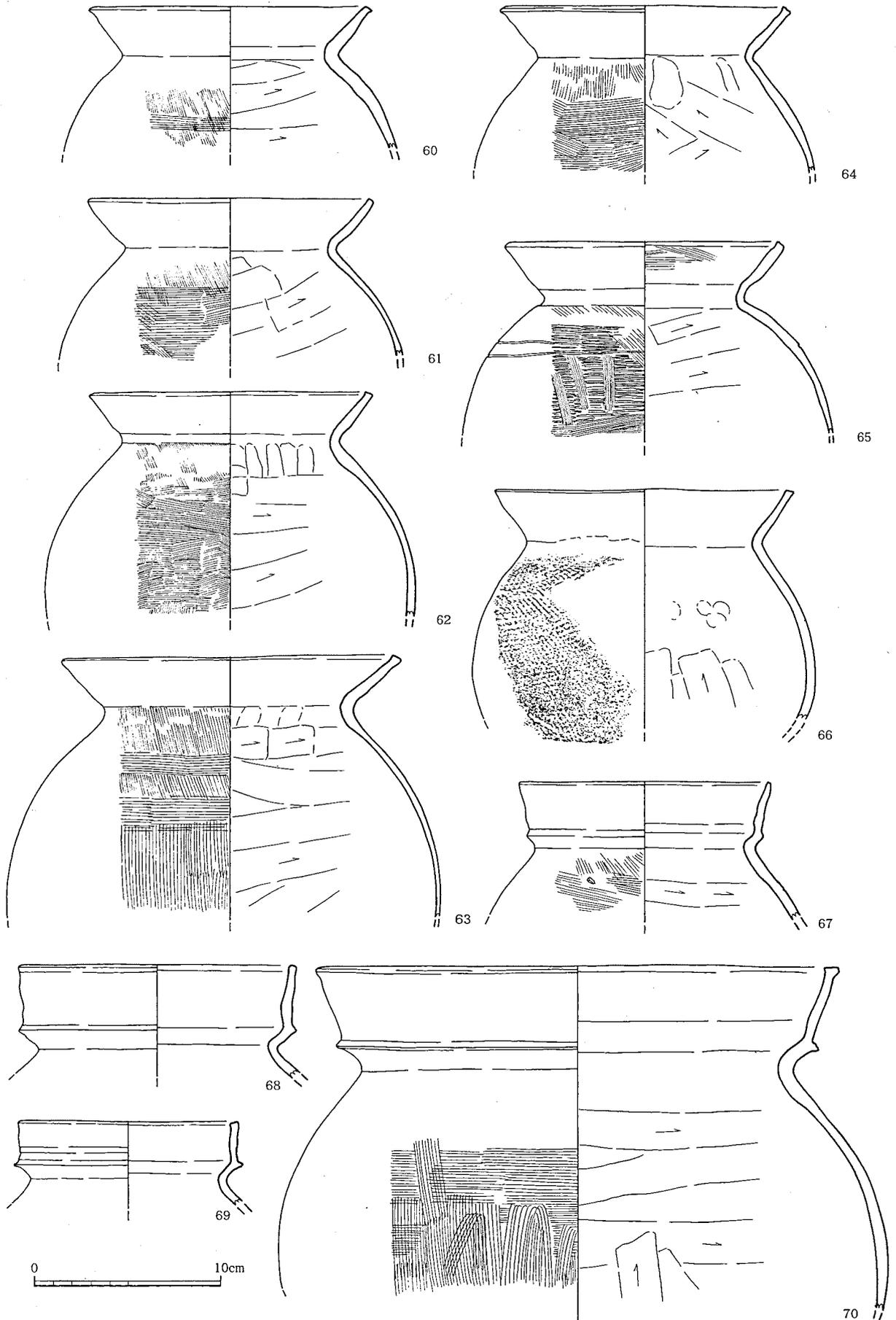
色調は黄灰褐色を呈す。口縁部外面のみ煤が付着し、肩部には見られない。全体的にシャープな作りの土器である。中7暗褐色細砂層出土。

51は器壁が厚い。肩はあまり張らず、口縁部は開きが弱く直線的に伸びる。端部は内端を丸くつまみ出す。色調は暗茶灰色を呈す。器形・色調ともやや特異な資料である。東5暗褐色細砂層出土。52は口縁部の内湾が弱く、端部は内端をつまみ出す。色調は肌灰色を呈す。東7暗褐色細砂層出土。53は肩の張りが弱い。頸部の屈曲も弱く、口縁部はあまり開かず直線的に伸びる。端部は内端をつまみ出す。外面のハケ目は非常に細かいものである。色調は茶褐色を呈し他と異なる。外面の肩部以外に煤が付着する。東5暗褐色細砂層出土。54は肩部が丸味を帯び、頸部は比較的良好に締まる。口縁部は内湾しながら開き端部はわずかに肥厚する。外面の肩部には櫛描波状文を巡らせる。色調は暗褐色を呈す。外面には全面に煤が付着する。東3暗褐色細砂層出土。55は頸部が良好に締まり、口縁部は直線的に開く。端部は内外につまみ出される。全体的に器壁が薄い。頸部内面には指圧痕が多く残る。外面のハケ目には二種類の原体が見られる。色調は黄肌色を呈す。中7暗褐色細砂層出土。56は頸部が比較的良好に締まり口縁部は内湾しながら大きく開く。端部は丸く若干肥厚する。外面肩部の横ナデは幅が狭い。色調は黄灰褐色を呈す。東6暗褐色細砂層出土。57は器壁がやや厚い。口縁部はわずかに内湾しながら開き端部は肥厚気味に仕上げる。色調は茶灰色を呈し他とやや異なる。東5暗褐色細砂層出土。58もまた器壁がやや厚い。口縁部は若干内湾しながら立ち気味に開き、外端部をつまみ出す。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。外面の肩部には二つの斜方向刺突文がある。色調は茶灰色を呈しやや異質である。中7出土。59は頸部が比較的良好に締まり、口縁部は内湾しながら開く。端部は内外端ともシャープにつまみ出す。内面のヘラケズリは屈曲部付近にまで及んでいる。外面のハケ目は非常に細かく、その上から一条の雑な波状沈線を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。西5・6出土。

60は内面のヘラケズリを屈曲部近くまで行っている。口縁部は直線的に伸び、外端部を鋭くつまみ出す。外面のハケ目は細かい。色調は黄灰褐色を呈す。東5暗褐色細砂層出土。61は60同様内面のヘラケズリが屈曲部近くにまで及ぶ。口縁部は内湾しながら開き、端部は面をなす。外面の肩部はハケ目後に横ナデを行わない。色調は黄灰褐色を呈す。外面の口縁部と肩部以下に煤が付着する。北1出土。62は体部の張りが弱く、口縁部はあまり開かずに伸び、端部の内側をシャープにつまみ出している。頸部内面には指ナデが認められる。外面のハケ目は比較的細かい。色調は黄灰褐色を呈す。西7出土。63は口縁部がほとんど内湾せずに関き、端部は内側に肥厚する。外面の横ナデは口縁部のみにとどまり、肩部にまでは及んでいない。色調は黄灰色。西5・6出土。64もまた口縁部がほとんど内湾していない。端部は上方につまみ出され不明瞭な沈線を形成している。色調は黄灰褐色。外面にはほぼ全面に煤が付着する。中7出土。

65は肩が丸く張り、頸部が締まった器形となる。口縁部はわずかに内湾し端部はわずかに上方につまみ出されている。内面のヘラケズリは屈曲部近くまで行われている。口縁部は内外面とも横ナデを行うが、内面には先行するやや粗いハケ目が残る。外面は細かい平行タタキの後に粗いハケ目を行い、その後下方に細かいハケ目を行っている。また肩部には一条の沈線を巡らす、端部が接していないため部分的に二条に見える。胎土に含む砂粒は他の布留系甕と比べると量的に少なく、甕にしては精良な感を受ける。色調は黄灰褐色を呈す。西4出土。

66は斜格子タタキを行う特異な布留系甕である。体部は球形に近く、頸部はあまり締まらず、口



第27图 I区包含层出土土器实测图⑤ (1/3)

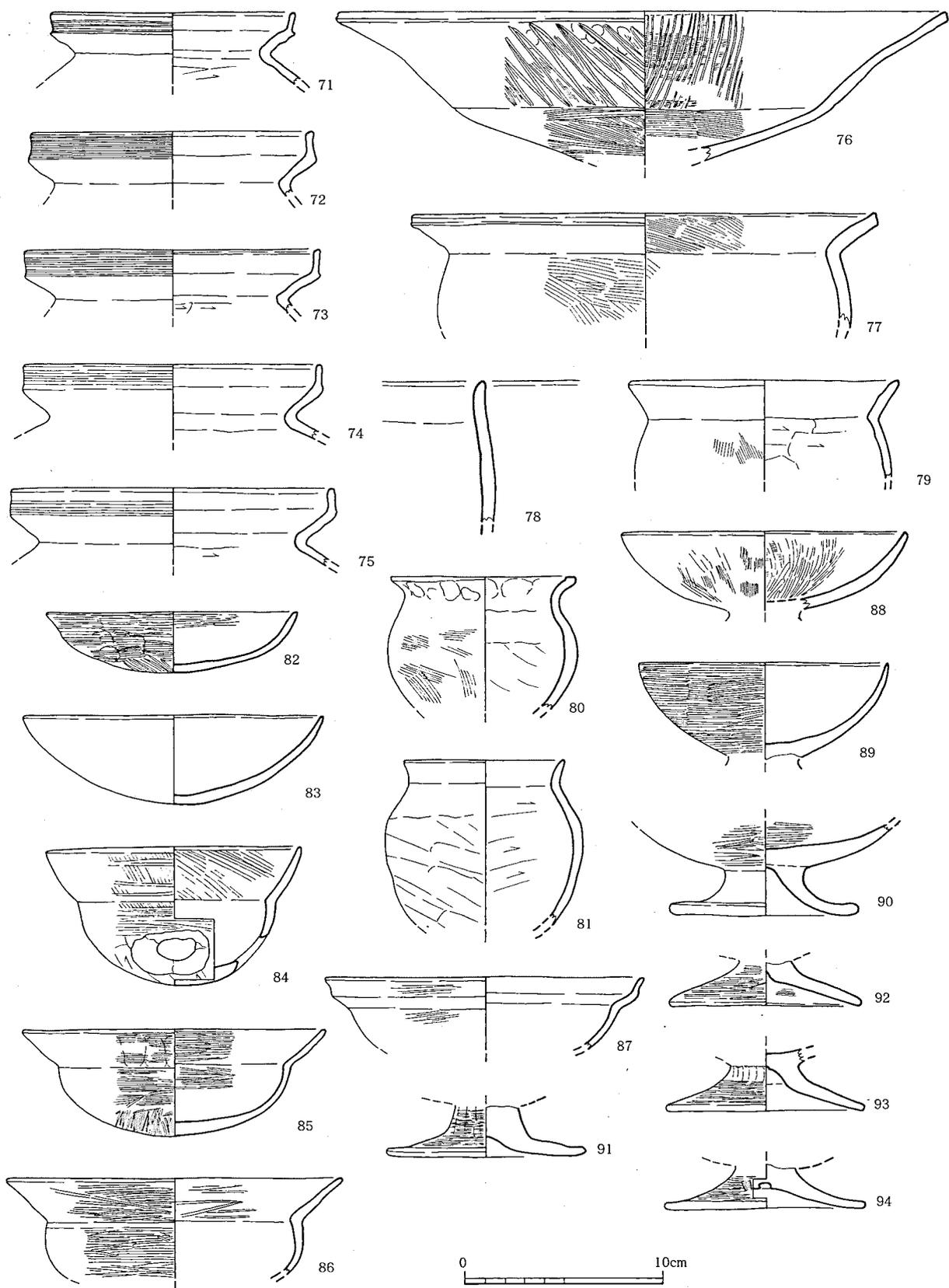
縁部は立ち気味に開く。端部は横ナデ整形によりシャープな平坦面を形成する。内面のヘラケズリは胴部の中位にとどまり、他の布留系甕と大きく異なっている。内面の肩部はナデを行い、指圧痕がいくつか認められる。口縁部は内外面とも横ナデ。外面には半島系軟質土器と同質の斜格子タタキを行う。胎土には多量の石英と若干の長石、角閃石を含み、他の布留系土器と同質である。色調も黄灰褐色を呈し、やはり同質である。肩部以下は二次加熱を受け赤変、器表が剥落する。東5暗褐色細砂層出土。

67~70は山陰系の二重口縁甕である。67は肩の張りが少なく、口縁部はやや開いて立ち上がる。端部は丸くおさめている。屈曲部外面の稜はシャープさに欠ける。外面には刺突文が1点のみ認められるが、小片であるため他の部分については不明。胎土は他の布留系甕と大差ないが色調は肌茶色を呈しており他と異なる。中7出土。68は口縁部がほぼ直立し、端部はわずかに外側に肥厚する。屈曲部の外面は意識的に引き出して三角突帯状にするが、ややシャープさに欠ける。胎土は他の布留系甕と大差なく、色調は黄灰褐色を呈す。東5暗褐色細砂層出土。69はやや小型品。口縁部は直立し、端部は内側に肥厚している。胎土は他の布留系甕と大差なく、色調は黄灰褐色を呈す。中4暗褐色細砂層出土。70はやや大型品。体部は山陰系二重口縁壺と同形で、頸部はあまり締まらず、一次口縁部は短く外反する。二次口縁部は直線的に開き、端部は内外につまみ出され上端が水平面をなす。色調は黄灰褐色を呈す。外面には煤が付着し煮炊きを使用している。西7出土。

71~75は吉備系の甕。71は口縁部がわずかに外反し、端部は丸くおさめる。口縁部の器壁は他と比べて薄い。口縁部の外面には擬凹線を巡らせ、その下の屈曲部はシャープにつまみ出している。外面には口縁部から肩部にかけて煤が付着する。胎土に砂粒をあまり含まず、特に粗砂は全く含まない。色調は黄灰褐色を呈す。東5暗褐色細砂層出土。72は口縁部がわずかに内傾し、端部のみ外側につまみ出す。口縁部の外面には擬凹線文を巡らせる。屈曲部は突帯状に仕上げず稜を持つのみである。胎土には粗砂を含まず比較的良質な粘土を使用し、色調は黄灰褐色を呈す。外面に煤が付着する。北1出土。73は口縁部が直立し、端部は内傾する。外面には擬凹線を巡らす。胎土には粗砂を含まず色調は黄茶灰色を呈す。東6暗褐色細砂層出土。74は口縁部が短く直立し端部は丸くおさめ、外面には擬凹線を巡らせる。屈曲部の稜は不明瞭で全体的にシャープさに欠ける。胎土には粗砂を含まず、色調は黄灰褐色を呈す。外面の口縁部にのみ煤が付着する。東4暗褐色細砂層出土。75も口縁部が直立し端部が内傾する。外面には不明瞭な擬凹線を巡らす。胎土には粗砂を含まず比較的良質な粘土を使用し、色調は茶褐色を呈す。外面の口縁部付近にのみ煤が付着する。東7出土。

76は在来系の高坏である。口縁部は外反しながら大きく開き、端部は面をなす。屈曲部にはわずかに段が認められる。内面は横ハケ目後に縦ヘラミガキによる暗文を施文する。外面もハケ目の後、口縁部は斜方向のヘラミガキによる暗文、下半は横ヘラミガキを行う。胎土には砂粒をあまり含まず、比較的良質である。色調は茶色を呈す。北3出土。

77~97は鉢である。77は在来系の鉢。口縁部は外反し、短く大きく開く。端部は面をなす。体部内面は縦方向のナデ、外面は横方向の短く粗いハケ目、口縁部内面は斜ハケ目、外面は横ナデ。胎土に砂粒をやや多く含み色調は黄褐色を呈す。中4暗褐色細砂層出土。78は口縁部が外反せず、体部から直接立ち上がる特異な形状のもの。口縁部は丸くおさめる。口縁部は横ナデ、体部内面は板状工具小口によるナデ、外面は風化が著しく調整不明。胎土・色調は布留系甕と同質。79は小型甕と称した方が良いかもしれない。口縁部が若干肥厚し、直線的に開く。端部は不明瞭な面をなす。



第28图 I区包含層出土土器実測図⑥ (1/3)

体部内面は横ヘラケズリ、外面はハケ目、口縁部は横ナデ。東7暗褐色細砂層出土。

80・81もやはり甕に近い形状となる。80は体部が球形に近く、口縁部は外反し上端が平坦面をなす。口縁部は指ナデ整形を行い、体部内面は粗い指ナデ、外面はハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。北2出土。81はやや長胴で、口縁部は短く外反する。内外面とも指ナデ整形。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。北1出土。

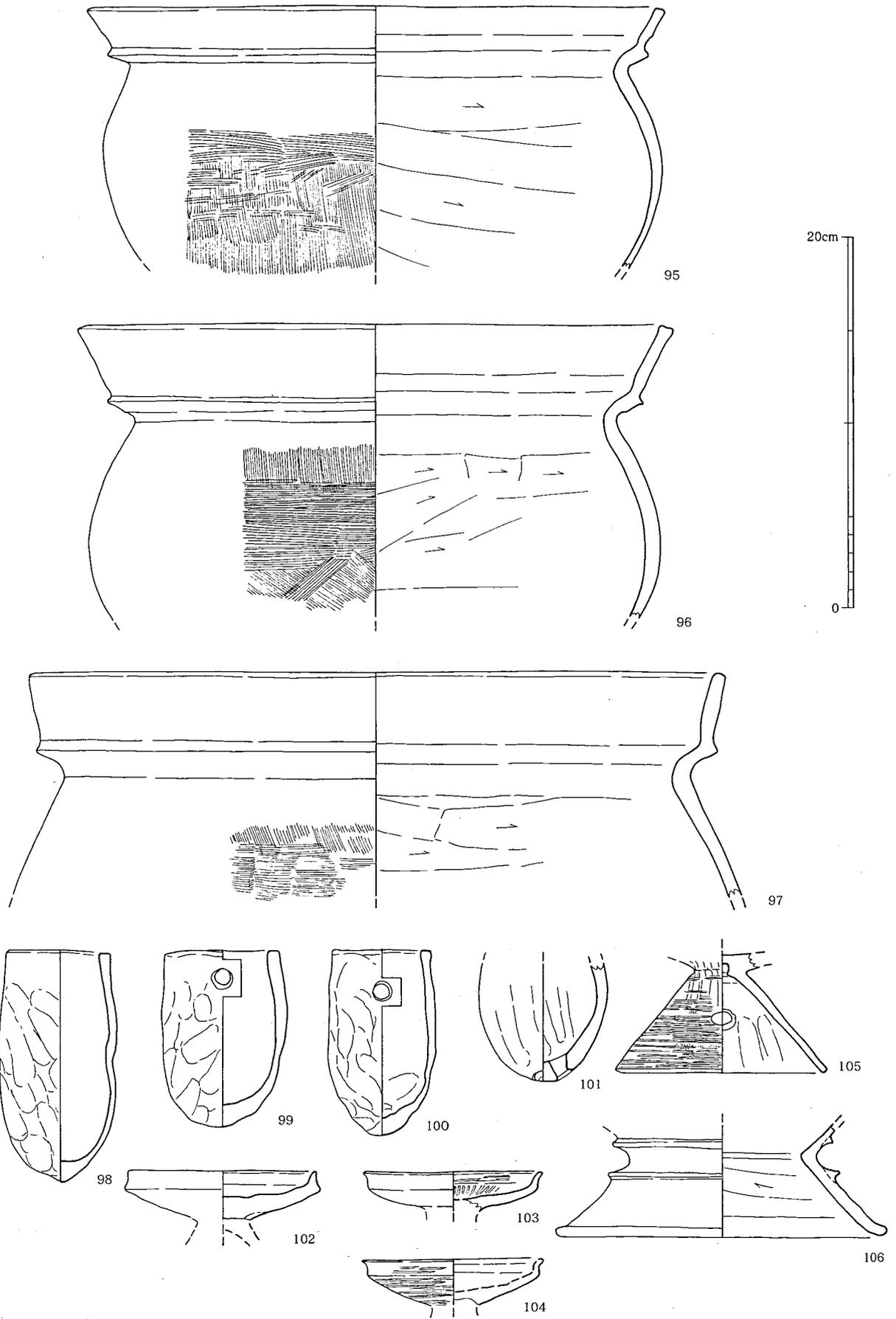
82・83は素口縁の鉢。82は内外面ともにヘラミガキを行う精製品。内底部は風化のため調整不明。色調は黄肌色を呈す。西4出土。83は底部が尖底気味となる。内外面ともナデ仕上げによる粗製品。胎土に砂粒をやや多く含み色調は黄灰褐色を呈す。84～86は外反口縁の鉢。西7出土。84は半球形の体部を有し、口縁部が立ち気味に開く。内面はナデ仕上げを行い口縁部には先行する粗いハケ目が残る。外面の口縁部と体部上半はハケ目後まばらな横ヘラミガキ。底部はヘラケズリを最終調整としている。体部には焼成後の不整形な穿孔が見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。胎土・調整ともに粗雑さが窺える。中4出土。85は体部が浅く、口縁部はわずかに内湾しながら開く。内面の口縁部から屈曲部下までは横ヘラミガキ、内底面はナデ、外面の口縁部から体部上半までは横ヘラミガキ、体部下半は一定方向のヘラミガキ。口縁部には指圧痕が残る。胎土に砂粒を若干含み、精製器種の割には粗い。色調は橙茶色を呈す。西4出土。86は85よりも体部がやや深い。口縁部は直線的に開く。体部内面はナデ、口縁部内面は疎らな横ヘラミガキ、外面は密なヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。西7出土。

87は屈折口縁の鉢。口縁部は短く外反する。全体的に風化が著しいが、外面にはわずかに横ヘラミガキが観察される。胎土には砂粒を含まず精良な水漉し粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。北2出土。

88～94は脚付鉢である。88は浅い坏部のもので口縁部は外傾している。内面はハケ目後太い縦ヘラミガキを密に行う。外面もやはりハケ目後太い縦ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。中1出土。89は深みのある坏部となる。内面はナデ、外面は細かい横ヘラミガキを密に行う。胎土も精良な精製品。色調は橙肌色を呈す。西1出土。90は脚部が大きく外反する。端部は丸くおさめ、やや跳ね上げ気味になる。坏部は内外面とも細かい横ヘラミガキ、脚部は全面横ナデ調整を行う。胎土に砂粒をあまり含まず比較的良質な粘土を使用し、色調は黄灰色を呈す。中7暗褐色細砂層出土。91は裾部が水平近く開き、端部は跳ね上げ気味になる。外面は細かい横ヘラミガキ、内面は横ナデ。胎土は精良で色調は茶色を呈す。北1出土。

92～94は内頂部に軸受孔を有す脚部である。92は付け根付近から直線的に開く。端部は丸くおさめる。内面は横ナデ、外面は細かい横ヘラミガキ。中2出土。93は脚部の上方で緩く屈折し、裾部に向かって直線的に開く。端部は面をなすように仕上げられる。内面は横ナデ、外面は工具による縦方向のナデの後横ヘラミガキ。胎土に砂粒をほとんど含まず比較的精良で、色調は肌茶色を呈す。南7出土。94は付け根から緩やかに外反し、端部はほぼ水平にいたるまで開く。内面は横ナデ、外面は細かい横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。北2出土。

95～97は山陰系の大型二重口縁鉢である。95は最大径が中位よりやや上に位置し、頸部はあまり締まらない。一次口縁部は短く外反し、二次口縁部は短く直線的に開く。屈曲部の外面は三角突帯を巡らせる。端部は外傾する面をなす。体部内面は横ヘラケズリ、外面は縦ハケ目後横ハケ目、口縁部は内外面とも横ナデを行い、外面は肩部にまで及ぶ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を



第29图 I区包含層出土土器実測図⑦ (1/3)

呈す。北2出土。96は95よりも最大径の位置がやや下がる。口縁部は直線的に開き、端部は外傾する面をなし、また若干肥厚する。口縁屈曲部にはシャープな三角突帯を巡らせる。体部外面のハケ目は細かい。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。北2出土。97は大型甕の可能性もある。頸部の湾曲は95・96に比べて弱く、口縁部は開きが弱い。端部は丸味を帯びる。色調は黄灰褐色を呈す。北2出土。

98～101は飯蛸壺である。98は細身で胴長のもの。内面は丁寧にナデており稜線を残さない。外面には指ナデの稜線が明瞭に残る。色調は黄灰褐色を呈す。西5・6出土。99は器高が低い。内外面とも指ナデだが内面には稜を残さない。色調は黄灰色だが部分的に黒色を呈す。中1出土。100の器高は99と変わらないが、ややスリムな形状のものである。口縁部付近はやや内傾している。内外面とも指ナデ調整。色調は黄灰褐色を呈す。東5暗褐色細砂層出土。101は丸味を帯びた器形となる。内外面とも比較的丁寧に縦指ナデを行う。底部の中心からややずれた位置に焼成前穿孔を行う。色調は黄灰色を呈す。西2出土。

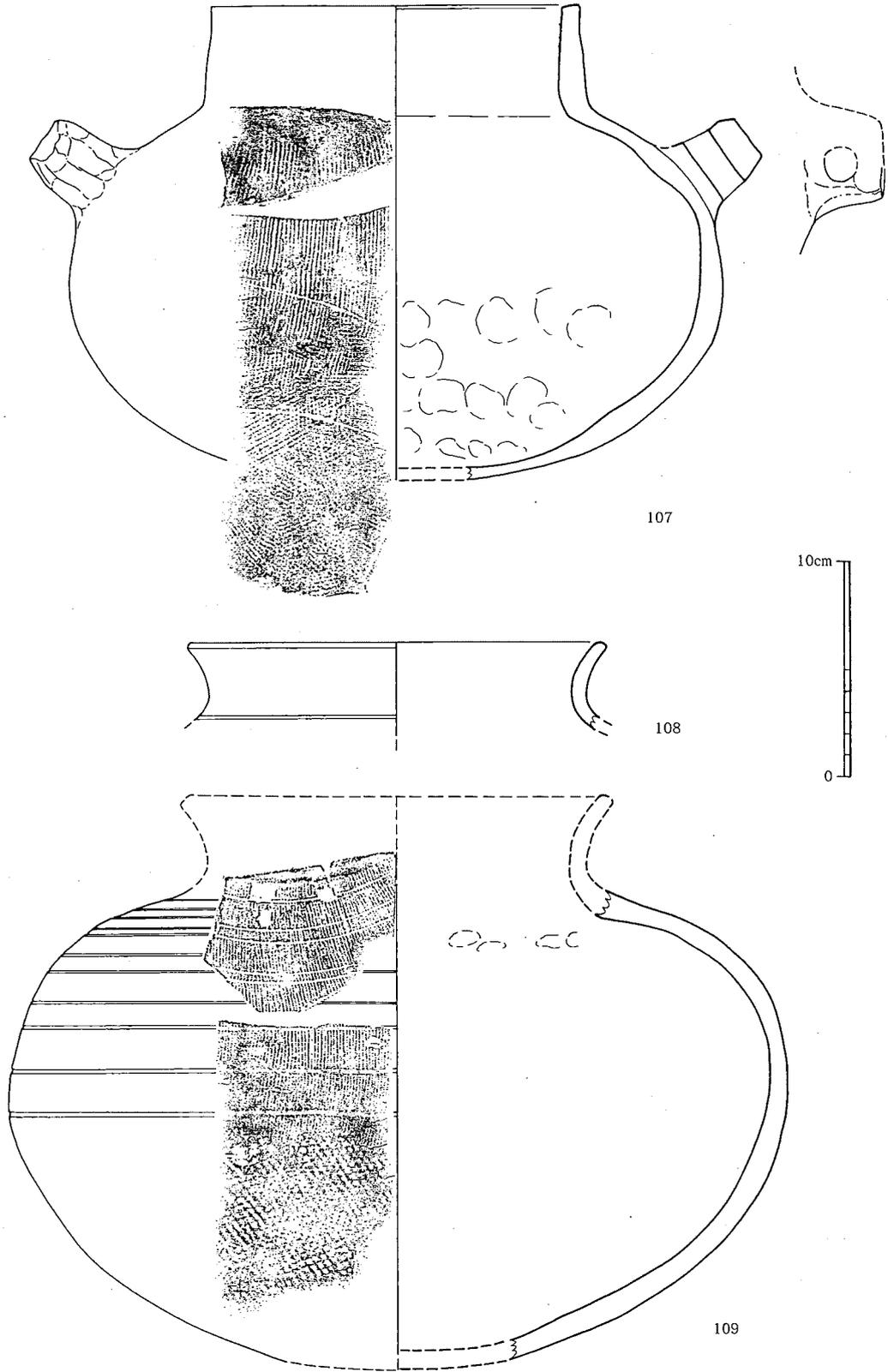
102～105は小型器台である。102は立ち上がりが直立し、先端が尖って断面三角形となる。調整は全面ナデで仕上げる。器壁は他のものよりも厚い。胎土に砂粒を若干含み、全体的に粗雑なものである。色調は黄灰褐色を呈す。北2出土。103は立ち上がりが外反し端部が外側を向く。内底部は放射状のヘラミガキを行い、立ち上がり内面は横ヘラミガキ、外面は風化が著しく調整不明。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用する。色調は橙肌色を呈す。南1出土。104は103に比べてやや深い器形となる。立ち上がりは強く外反し、端部が外側を向く。内面は器表が剥落する。外面は横ヘラミガキを密に行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。北3出土。105は内頂部に軸受孔をもつ裾部である。接合部から直線的に開いた器形となる。端部は面をなし断面四角形に仕上げる。内面は横ナデを行うが整形時の縦指ナデが残る。外面は縦ハケ目後に横ヘラミガキを行う。2ヶ所に円孔を穿孔する。胎土は砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈すが表面に橙肌色の化粧土を塗布している。

106は山陰系の鼓形器台である。裾部が直線的に開き、端部のみ外側に丸く跳ね上げる。突帯はシャープである。胎土には砂粒をやや多く含み、色調は肌色を呈す。

107～166は半島系の土器である。107は把手付短頸壺。東4・5・6・7の暗褐色細砂層及び落ち込みから出土した破片の接合資料である。底部を除き全体が判るように図上復元しているが、実際は体部と口縁部、把手がそれぞれ接合していない。体部と口縁部は径や傾きは間違いないと思われるが、把手の傾きには不確実な点も残る。

体部は扁球形で、最大径はほぼ中位に位置する。その最大径からやや上に截頭形の把手を二つ付ける。把手は上から下に向かって円孔を穿孔しており、体部の器壁に対して垂直に取り付けるため斜め上方を向いている。口縁部はほぼ直立し、端部はわずかに内傾するシャープな面を形成する。口縁部の調整は横方向のナデを行い、ロクロ使用による回転ナデの条線が認められる。体部内面は横ナデを行い、下半には恐らくタタキの当て具痕と思われる径2cm前後の窪みが横方向に連続する。外面の調整は、肩部から最大径のやや下の位置までが縦方向の細い平行タタキ、下半は斜方向の平行タタキ、底部付近はナデ消しを行う。胎土には砂粒をほとんど含まず、精良な水漉し粘土を使用する。陶質の焼成だが硬度に欠け、瓦質に近い質感である。色調は灰色～薄灰色を呈す。

108・109は短頸壺である。108は丸く外反する口縁部。端部は丸くおさめる。口縁部の調整は回



第30图 I区包含層出土土器实测图⑧ (1/3)

転ナデを行い、外面の肩部は斜格子タタキ後に沈線を巡らせている。胎土には砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、瓦質焼成である。色調は表面が黒灰色、断面が明灰色を呈す。西4出土。109は中1・7、東4・5の暗褐色細砂層および東4攪乱から出土した破片の接合資料である。底部と口縁部は同一個体と思われる破片が見当たらなかった。体部は扁球形で最大径が中位よりやや上に位置し、肩が丸く張った器形となる。口縁部の形状は不明。内面の調整は横ナデを行い、底部付近は不整方向のナデを行う。また肩部には指圧痕が残る。外面の調整は上半が縦方向の細い平行タタキの後に螺旋状沈線、下半がやや大振りな斜格子タタキを行っており、先後関係では斜格子タタキの方を後に行っている。胎土にはあまり砂粒を含んでおらず、比較的良質な粘土を使用する。焼成は瓦質焼成で、色調は灰色～黄灰色を呈す。

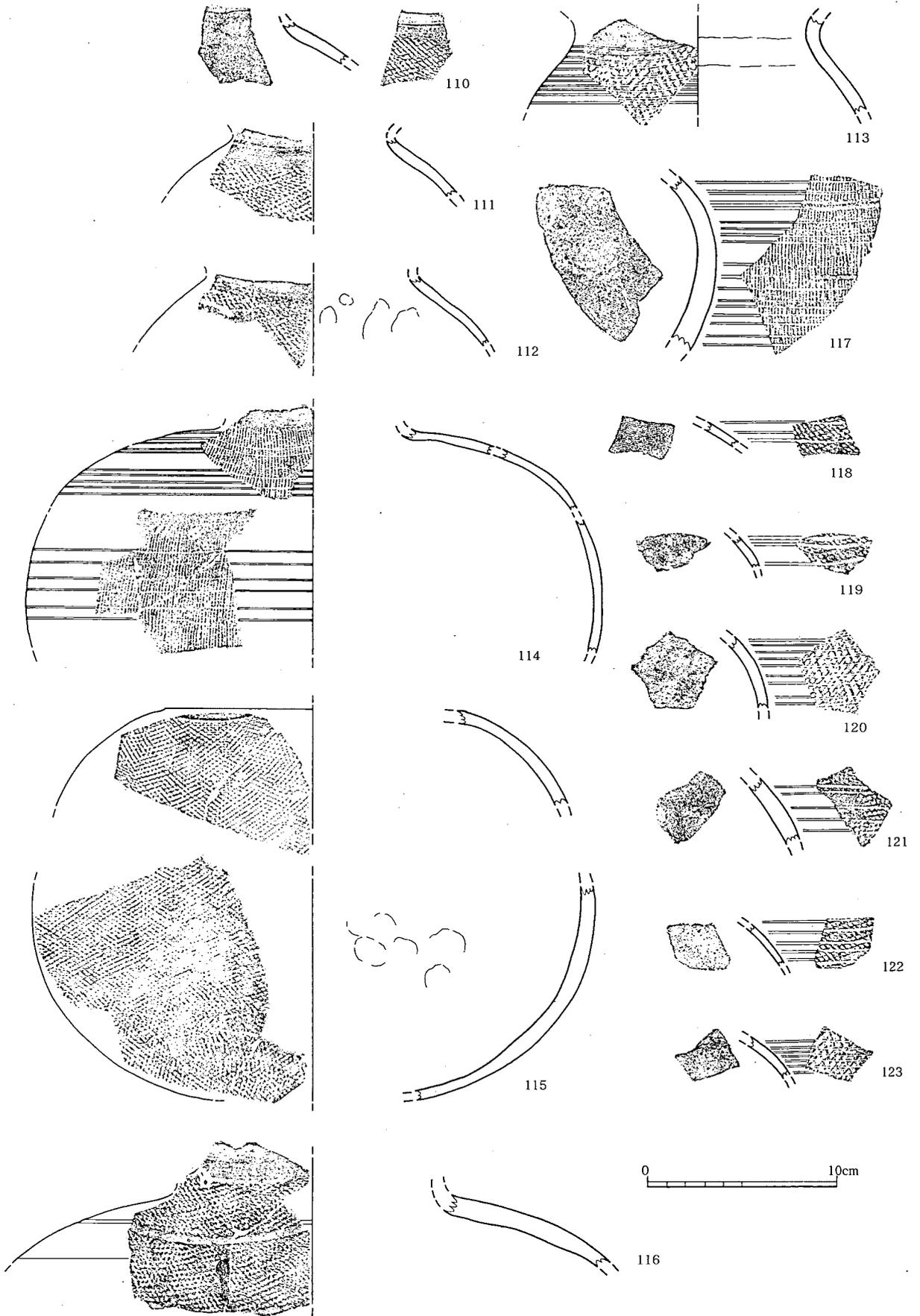
110～113はあまり肩が張らない器形となる壺の肩部片である。110は内面横ナデ、外面は斜格子タタキが強く明瞭に付される。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は黄灰色を呈す。東4暗褐色細砂層出土。111は外面に小さな斜格子タタキを行う。内面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み、軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。北2出土。112もやはり外面に小さな斜格子タタキを行う。内面は横ナデを行い縦方向の指ナデも見られる。胎土に砂粒を若干含み、軟質焼成、色調は灰褐色を呈す。中7暗褐色細砂層出土。113は外面に大きめの斜格子タタキを行った後、平行沈線を密に巡らす。内面は横ナデ。胎土に粗砂を若干含み焼成は軟質焼成、色調は暗茶灰色を呈す。堅く焼き締まっており土師器には見られない質感である。東7暗褐色細砂層出土。

114は接合しないが明らかに同一個体と見られる3つの破片を、図上復元したものである。歪みが大きくまたあまり大きな破片ではないので、径、傾きに不安が残る。肩は丸く大きく張り、頸部は強く締まっている。器壁は比較的薄い。内面は横ナデ、外面は縦方向の細かい平行タタキの後に螺旋状沈線を巡らす。胎土には砂粒を若干含み、焼成は軟質焼成、色調は茶色を呈す。

115は東4・5暗褐色細砂層及び落ち込みから出土した破片の接合資料である。同一個体と思われるが、上半と下半とは接合しない。どちらも丸味を帯びており、全体的な形状としては球形に近い体部となるようである。内面の調整は上半が横ナデ、下半が不整方向のナデを行い、最大径に当たる位置には接合の際の指圧痕が認められる。外面は上半・下半とも細かい斜格子タタキを行っており、特に上半のタタキは明瞭である。頸部には回転ナデによるシャープな面が残る。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用し、焼成は瓦質焼成で焼き上がりも良い。色調は内外面とも表面は黒色、断面は灰色を呈す。

116は肩の大きく張った短頸壺である。頸部は内外面とも横ナデ、肩部内面はナデ、外面は斜格子タタキの後に平行凹線を巡らす。胎土に砂粒を若干含み、焼成は軟質焼成、色調は黄灰色を呈す。接合しない同一個体の小片が他に2点出土している。

117～130は沈線を巡らす破片である。117は壺の肩部片。器壁が比較的厚い。内面は横ナデ、外面は縦方向の細かい平行タタキの後に螺旋状沈線を巡らせる。この沈線は肩部よりやや下まで行っている。焼成は陶質焼成で非常に堅緻な焼き上がりであるが、胎土には砂粒を若干含み陶質土器にしてはあまり精良ではない。色調は灰色を呈す。東6暗褐色細砂層出土。118は内面横ナデ、外面斜格子タタキ後沈線を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は内面灰色、外面茶灰色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。東5黒褐色細砂層出土。119は内面ナデ、外面斜格子タタキ後にやや幅広の沈線を巡らす。胎土にはあまり砂粒を含まず比較的精良である。焼成は軟質焼成で色調は黄褐色を



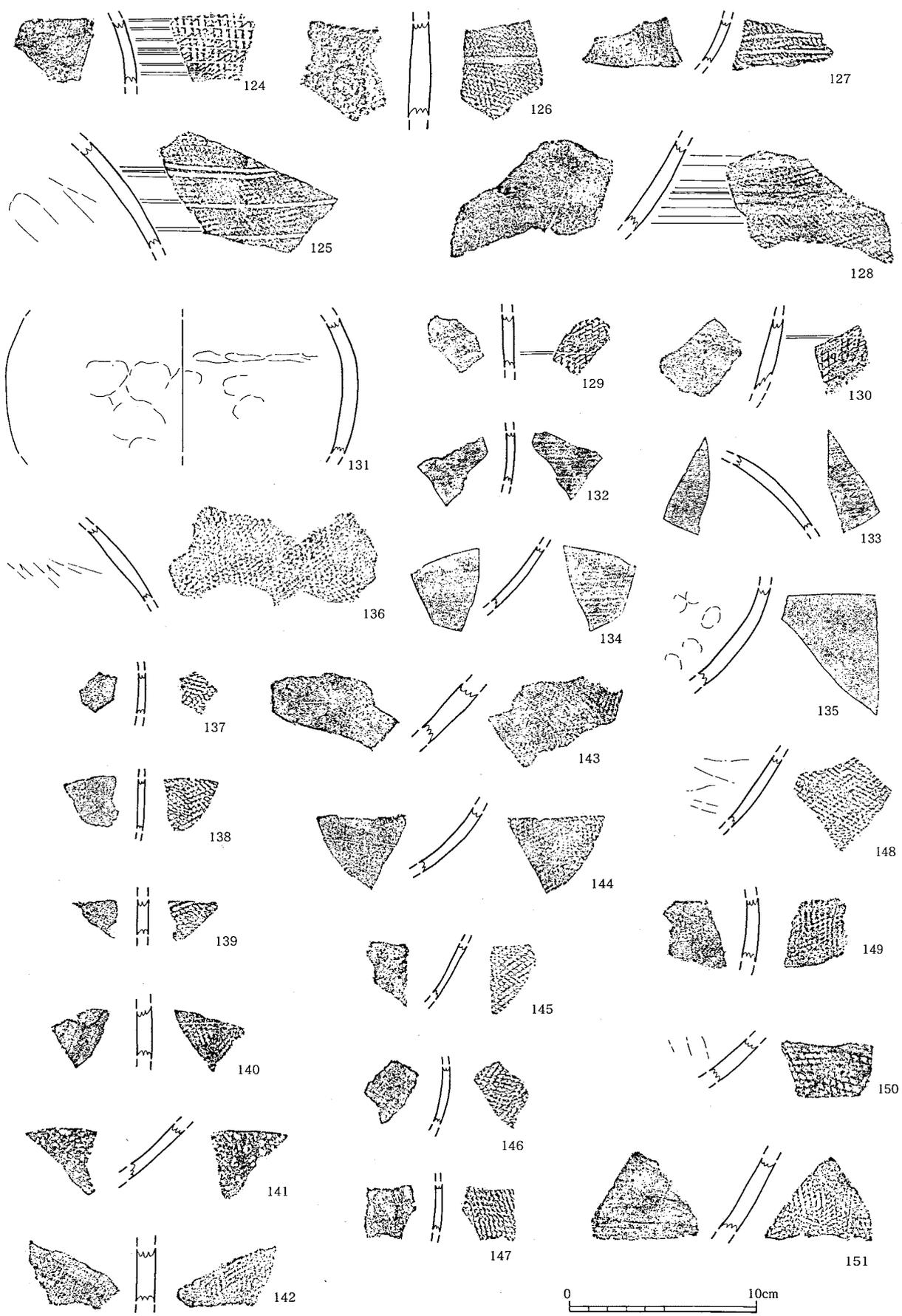
第31图 I区包含層出土土器实测图⑨ (1/3)

呈す。東7暗褐色細砂層出土。120は丸味を帯びた肩部片。内面ナデ、外面は大きめの斜格子タタキ後に沈線を密に巡らせる。胎土には砂粒を若干含み、焼成は軟質で堅く焼き締まる。色調は肌茶色を呈す。東7暗茶褐色細砂層出土。121は器壁が厚く大型品であろうか。内面は縦方向のナデを行っている。外面は小さめの斜格子タタキの後に沈線を巡らす。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は暗黄灰色を呈す。東7暗褐色細砂層出土。122は器壁が薄い。内面横ナデ、外面は斜格子タタキ後沈線。軟質焼成で胎土に砂粒を若干含む。東7暗褐色細砂層出土。123は内面は横ナデ、外面は大きめな斜格子タタキの後に沈線を密に巡らす。胎土に砂粒を少し含むが比較的精良な粘土を使用し、焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は肌茶色を呈す。西4出土。

124は113と同一個体の可能性がある。内面横ナデ、外面は大きめな斜格子タタキの後に沈線を密に巡らす。胎土には粗砂を若干含み焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は暗茶灰色を呈す。東7暗褐色細砂層出土。125は内面ナデ、外面は小さな斜格子タタキ後凹線を巡らす。胎土に砂粒をやや多く含み、焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は黄灰褐色を呈す。126は器壁が厚く、大型品であろう。内面ナデ、外面斜格子タタキ後凹線。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は内面黒褐色、外面黄灰色を呈す。東4暗褐色細砂層出土。127は内面縦方向ナデ、外面斜格子タタキ後凹線。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は暗黄灰褐色を呈す。東6黒褐色細砂層出土。128は内面横ナデ、外面斜格子タタキ後凹線を巡らす。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は内面黄灰褐色、外面茶灰色を呈す。北2出土。129は内面横ナデ、外面やや大きめの斜格子タタキ後沈線。胎土に粗砂を若干含み焼成は軟質で堅く焼き締まる。色調は肌茶色を呈す。東5暗褐色細砂層出土。130は129と同様なタタキを用いており同一個体の可能性がある。内面は横ナデ、外面はやや大きめの斜格子タタキ後沈線。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質で堅く焼き締まる。色調は暗茶灰色を呈す。東7暗褐色細砂層出土。

131～135は内外面ともナデ仕上げの陶質土器である。131は内面の上半が横ナデ、下半がナデ上げを行い、特に接合部とその下に指圧痕が認められる。外面は無文タタキの後にナデ消しており、タタキの稜線が認められる。肩部には自然釉がかかる。胎土に砂粒をわずかに含むが概ね良質な粘土を使用し、焼成は陶質焼成で堅く焼き締まる。色調は薄灰色を呈す。中7暗褐色細砂層出土。132は内外面ともロクロ使用による回転ナデを行う。胎土には砂粒を全く含まず、極めて精良な水漉し粘土を使用する。焼成は陶質焼成で堅緻に焼き上がる。色調は灰色を呈す。東5暗褐色細砂層出土。133も132同様内外面ともロクロを使用した回転ナデを行う。胎土には砂粒を含まず極めて精良な粘土を使用し、色調は灰色を呈す。焼成は陶質焼成で堅緻に焼き上がる。中1出土。134は内面横ナデ、外面ロクロ使用による回転ナデ、胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、焼成は陶質焼成で堅緻に焼き上がる。色調は灰色を呈す。東5暗褐色細砂層出土。135は内面に縦方向のナデを行い、先行する指圧痕も見られる。外面は平行タタキの後に丁寧な横ナデを加えナデ消している。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、焼成は陶質焼成で堅緻に焼き上がる。色調は薄灰色を呈す。中4暗褐色細砂層出土。

136～151は外面に斜格子タタキを施す小片。136は内面ヘラケズリ後ナデ消し、外面斜格子タタキ。胎土に細砂をやや多く含み、焼成は軟質焼成、色調は暗黄灰褐色を呈す。東7暗褐色細砂層出土。137・138は器壁が薄く、小型品であろう。137は内面ナデ、外面の上半は平行タタキ、下半は斜格子タタキを行う。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は内面灰褐色、外面黒色を呈す。北1



第32图 I区包含层出土土器实测图⑩ (1/3)

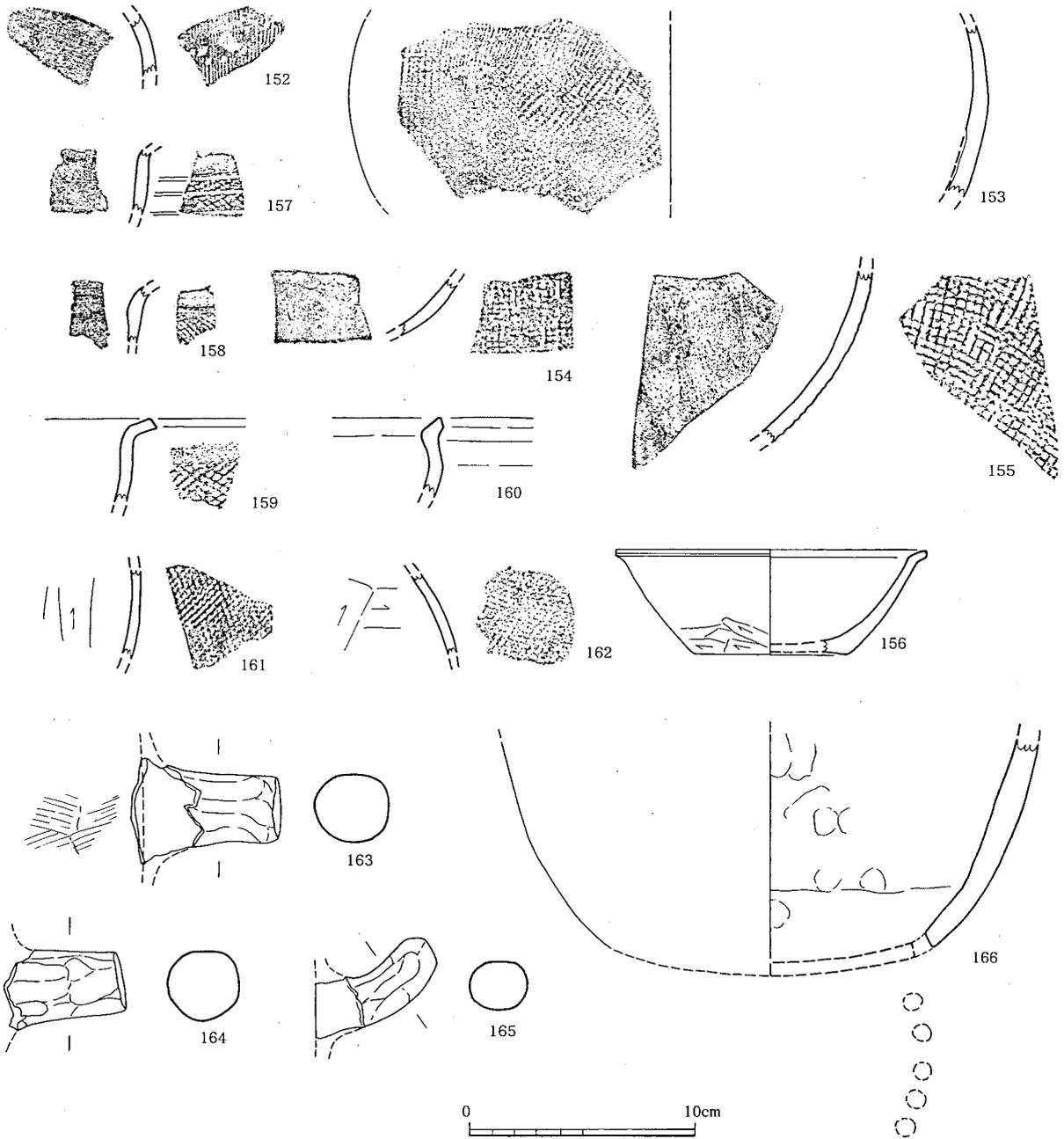
出土。138は内面横ナデ、外面斜格子タタキ。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は内面黒灰色、外面黄茶灰色を呈す。東7暗褐色細砂層出土。139は内面横ナデ、外面は斜格子タタキの後に部分的に横ナデを加えている。胎土に砂粒を若干含み、軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。東5黒褐色細砂層出土。140は内面ナデ、外面斜格子タタキ後部分的に横ナデ。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は黄灰色を呈す。北2出土。141は内面ナデ、外面斜格子タタキ後ナデ消し。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は暗黄灰色を呈す。東7暗褐色細砂層出土。142は内面横ナデ、外面斜格子タタキ後ナデ。胎土に砂粒を若干含み軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。西7出土。

143は内面横ナデ、外面斜格子タタキ。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用し、焼成は軟質焼成だが瓦質に近い。色調は表面暗灰色～暗黄灰色、断面黄灰色を呈す。西1出土。144の内面は丁寧なナデ、外面は斜格子タタキ。胎土に砂粒をほとんど含まず比較的精良な粘土を使用し、焼成は軟質焼成、色調は肌灰色を呈す。東4暗褐色細砂層出土。145～147は器壁が薄く小型品であろう。145は内面横ナデ、外面にはシャープな斜格子タタキ。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。東7暗褐色細砂層出土。146は内面横ナデ、外面斜格子タタキ。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は内面暗灰色、外面黄灰褐色を呈す。北2出土。147は内面横ナデ、外面斜格子タタキ。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は茶褐色を呈す。北2出土。

148は内面に雑な横ナデを行っておりナデの稜線が残る。外面は斜格子タタキ。胎土に砂粒を若干含むが比較的良質な粘土を使用し、焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は灰褐色を呈す。東6黒褐色細砂層出土。149は内面ナデ、外面斜格子タタキ後に弱い横ナデ。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は暗灰褐色を呈す。東7暗褐色細砂層出土。150は内面縦ナデ、外面やや大きめの斜格子タタキ。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は黄灰褐色を呈す。東5黒褐色細砂層出土。151は内面ヘラケズリ後横ナデ、外面斜格子タタキ後一部雑な横ナデ。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は黄灰褐色を呈す。中5出土。

152は内面横ナデ、外面は縦方向の平行タタキ。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、焼成は瓦質焼成、色調は内面黒灰色、外面黒色、断面灰色を呈す。東5暗褐色細砂層出土。他に同一個体がもう一片ある。153は径が復元できる大きめの破片。短頸壺であろう。内面は横ナデ、外面は上半に縦平行タタキ、下半に正格子タタキを行う。胎土に砂粒を若干含み焼成は瓦質焼成、色調は内外面とも黒色、断面は灰色を呈す。東4暗褐色細砂層出土。154は内面横ナデ、外面正格子タタキ。胎土に微砂を若干含むが概ね良質な粘土を使用し、焼成は瓦質焼成で焼き上がりも良い。色調は内面黒色、外面と断面は灰色を呈す。中5暗褐色細砂層出土。155は内面ナデ、外面大きめの正格子タタキを持つ陶質土器。胎土に砂粒を若干含み陶質土器にしてはやや粗い。焼き上がりは良質で堅緻である。色調は黄灰色を呈す。東3暗褐色細砂層出土。

156～160は鉢である。156は瓦質焼成の浅鉢である。底部は平底で、端部はシャープな稜をなす。体部はわずかに内湾しながら開き、口縁部は短く外折する。口縁端部はシャープな稜をなし、また一条の沈線を巡らせる。体部の下端は横方向の静止ヘラケズリを行い、それ以外は内外面ともロクロ使用による回転ナデを行う。胎土には砂粒を少量含み、このタイプのものにしてはやや粗い感を受ける。色調は内外面とも黒色、断面は灰色。西1出土。



第33図 I区包含層出土土器実測図① (1/3)

157～159は深鉢であろう。157・158はどちらも口縁部を欠失する。157は内面横ナデ、外面斜格子タタキ後沈線。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。中7暗褐色細砂層出土。158は内面横ナデ、外面斜格子タタキ。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は暗黄灰褐色を呈す。東7暗褐色細砂層出土。159は体部が直立し、口縁部は短く外反する。口縁端部は強い横ナデを加えてシャープな稜をなす。体部の外面にはやや大きめの斜格子タタキを行い、それ以外は横ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は茶灰色を呈す。東7暗褐色細砂層出土。160は平底浅鉢の口縁部であろうか。体部の口縁部下が短く内湾し、口縁部はまた短く外反している。口縁端部は鋭く上方に尖る。調整は全面ロクロ使用の回転ナデである。胎土には細砂粒を若干含むものの、概ね良質な粘土を使用する。焼成は瓦質焼成で焼き上がりは良い。色調は内

外面とも黒灰色〜くすんだ灰色、断面は灰色を呈す。東7暗褐色細砂層出土。

161・162は内面にヘラケズリ、外面に斜格子タタキをもつ小片で、外面の調整にタタキを使用した布留系甕の可能性ある。胎土・色調とも布留系甕に非常に近い。161は内面縦ヘラケズリ、外面は斜格子タタキ後下方はナデ消しを行う。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は内面黒灰色、外面黄灰褐色を呈す。中1出土。162は内面に横ヘラケズリ後縦ヘラケズリ、外面斜格子タタキ。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。表面は二次加熱を受ける。東3暗褐色細砂層出土。

163～165は把手である。163は円柱形をなし、甑の把手であろう。上面は平坦面をなす。体部の内面に粗いハケ目を行う。把手の整形は全面指ナデによる。剥離痕跡から作業順序が推定でき、最初に体部に把手を挿入、次に内面の接合面をハケ目によってナデ消した後、外面の把手全体を包むように薄く粘土で覆って整形している。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰色を呈し、部分的に黒色の所がある。東6黒褐色細砂層出土。164もやはり円柱状の把手で、甑のものであろう。上面は平坦面をなし、整形は全面指ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黒灰褐色を呈す。東5黒褐色細砂層出土。165は牛角状をなし、他の甑の把手と比べるとやや小型である。壺の把手か。やはり上面に平坦面を形成し、全面指ナデ整形を行う。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。西7出土。

166は円形の小さな蒸気孔を配した甑である。底部は平底に近い丸底となるようで、体部と底部の境に稜をもたない。内面は粗いナデ調整を行い指圧痕が残る。外面は丁寧な横ナデを行っており器表が平滑になる。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。北2出土。

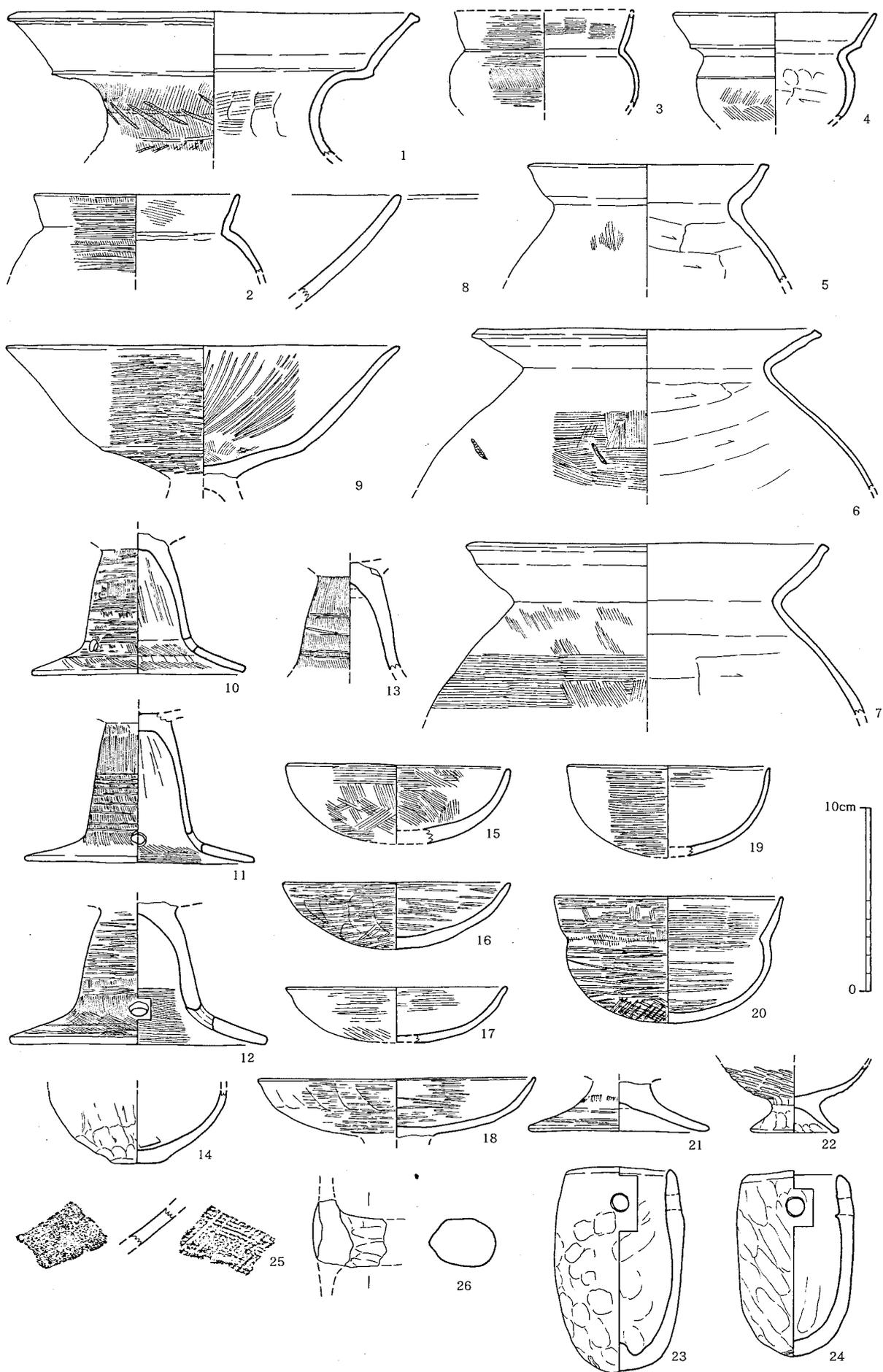
Ⅱ区包含層出土土器 (図版15・26、第34図)

1～4は壺である。1は山陰系二重口縁壺。頸部は大きく外反し一次口縁部はほぼ水平になるまで開く。二次口縁部はやや外反しながら開き、外端部が丸く肥厚する。一次口縁部と二次口縁部の境は小さな三角突帯状をなす。口縁部は内外面とも横ナデ、頸部は内面ハケ目後ナデ、外面ハケ目後沈線とハケ目工具刺突による綾杉文を施文する。色調は黄灰褐色を呈す。南3出土。

2は精製の短頸壺。体部は球形をなすと思われるが肩部はあまり張らない。口縁部は開きが弱く、直線的に伸びる。口縁端部は丸くおさめる。内面はナデ調整を行い、口縁部には先行するハケ目が見られる。外面は縦ハケ目後横ヘラミガキを行う。胎土には砂粒をほとんど含まず精良な水漉し粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。北5出土。3は2よりもやや小型の短頸壺。体部は球形で頸部はあまり締まらず、口縁部はわずかに内湾しながら伸び、ほとんど開かない。口縁端部は欠失している。体部内面はナデ、口縁部内面は横ハケ目、口縁部外面は横ヘラミガキ、体部外面も横ヘラミガキだが先行する縦ハケ目が見られる。胎土には砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。南3出土。

4は山陰系の小型二重口縁壺。口縁部は直線的に開き端部は丸くおさめる。体部内面の上半は横ナデ、下半はヘラケズリを行い、指圧痕も見られる。口縁部と外面の肩部までは横ナデ、下半はハケ目。肩部には一条の沈線を巡らす。胎土には砂粒を若干含み、色調は暗褐色を呈す。南1出土。

5～7は布留系の甕である。5はやや小型の甕である。口縁部が立ち気味に開き、上端が水平に近い面をなす。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。南3出土。6は器壁が薄い。口縁部は内



第34图 II区包含层出土土器实测图 (1/3)

湾せず、他のものよりも大きく開く。端部は外側を丸くつまみ出している。体部内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及んでいる。外面の肩部にはハケ目工具の刺突による列点文を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。口縁部と肩部以下には煤が付着するが、頸部には付着していない。北1出土。7は口縁部がやや内湾しながら開き、端部は面をなす。体部内面のヘラケズリは丁寧に行われており、器壁も薄い。口縁部は横ナデ、肩部はハケ目後ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。北7出土。

8～13は高坏である。8はわずかに内湾しながら開き、端部は小さな水平面をなす。調整は内外面とも横ナデを行う。胎土には砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。南1出土。9は畿内系の高坏坏部である。内面はナデ後に放射状のヘラミガキを行い、内底部はハケ目を行う。外面は横ヘラミガキを密に行う。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。南2出土。10～13はいずれも高坏脚部である。10は柱部が中膨らみの器形をなし、裾部は緩やかに開く。端部はシャープな面をなす。柱部と脚部の境に3ヶ所円孔を穿孔する。柱部内面は縦ハケ目後横ナデ、裾部内面はハケ目、外面は柱部・裾部ともハケ目後疎らな横ヘラミガキを行う。胎土には砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。南1出土。11は柱部の膨らみがほとんどない。裾部は大きく開き端部は丸くおさめる。柱部と裾部の境に2ヶ所円孔を穿孔する。柱部内面は縦方向の工具によるナデの後横ナデ、裾部内面はハケ目。柱部外面は縦ハケ目後疎らな横ヘラミガキ、裾部外面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は肌茶色を呈す。北7出土。12は中膨らみの柱部を有し、他のものに比べて柱部径がやや大きい。裾端部は面をなす。柱部内面は横ナデ、裾部内面はハケ目。外面は柱部・裾部ともハケ目後横ヘラミガキ。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。北6出土。13は内面ナデ、外面粗いハケ目後疎らな横ヘラミガキ。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。南3出土。

14は鉢、または壺であろうか。底部は小さな平底をなす。内面はナデ、外面はヘラケズリ後ナデ。胎土には砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用する。色調は茶灰色を呈す。北5出土。15～21は鉢である。15～19は直口縁の鉢。15は粗製品で、内外面ともハケ目を最終調整とする。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。南3出土。16は精製の鉢である。底部は丸底だがやや尖底気味となる。調整は内外面とも横ヘラミガキを行い外面にはヘラケズリの稜線が見られる。胎土に砂粒を若干含み、精製品にしては粗さが目立つ。色調は橙茶色を呈す。南3出土。17は内外面とも横ヘラミガキ調整を行う精製品。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。北5出土。18は体部が浅い。内外面とも横ヘラミガキ調整を行い、外面には口縁部整形時の指圧痕が残る。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は肌色を呈す。南1出土。19は半球形の深い体部のもので、口縁部は直立する。内外面とも横ヘラミガキを行うが、内面は風化が進んでおり不明瞭である。胎土に砂粒を含まず比較的精良な粘土を使用し色調は肌茶色を呈す。南3出土。

20は外反口縁の鉢。体部は深みを有し壺に近い形状をなす。頸部はあまり締まらず、屈曲部内面にはシャープな稜をもつ。口縁部はわずかに内湾し、あまり開かず短く伸びる。体部内面はナデ後横ヘラミガキ。口縁部内面は横ハケ目のみでヘラミガキを行っていない。外面は縦ハケ目後横ヘラミガキを行い、底部には先行するタタキが認められる。胎土には砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。南1出土。

21は脚付鉢の脚部。裾はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。内頂部には軸受孔を有す。内面

は横ナデ、外面はハケ目後横ヘラミガキ。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。南3出土。

22は製塩土器である。体部は丸味を有しつつ開き、上方へと至る。裾部は付け根から直線的に開き、端部は面をなす。体部内面はナデ、外面は平行タタキ。裾部は内外面とも指ナデ整形。胎土に砂粒を若干含み色調は黄茶灰色を呈す。明らかに2次的加熱を受けている。南1出土。

23・24は飯蛸壺である。23は口縁部付近がやや内湾する。内外面とも指ナデ整形を行い、指ナデの稜線が明瞭に残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄肌色を呈す。南3出土。24は口縁部が直立する。内面は丁寧なナデを行い指ナデ痕が残らない。外面は指ナデの稜線が明瞭に残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。南3出土。

25・26は半島系土器である。25は内面ナデ、外面斜格子タタキを行う小片。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は茶灰色を呈す。北5出土。26は甌の把手であろう。断面形は楕円形に近く、上面は平坦面をなす。整形は全面指ナデ整形を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成。

I 区遺構面出土土器 (図版16・17・27・28、第35～40図)

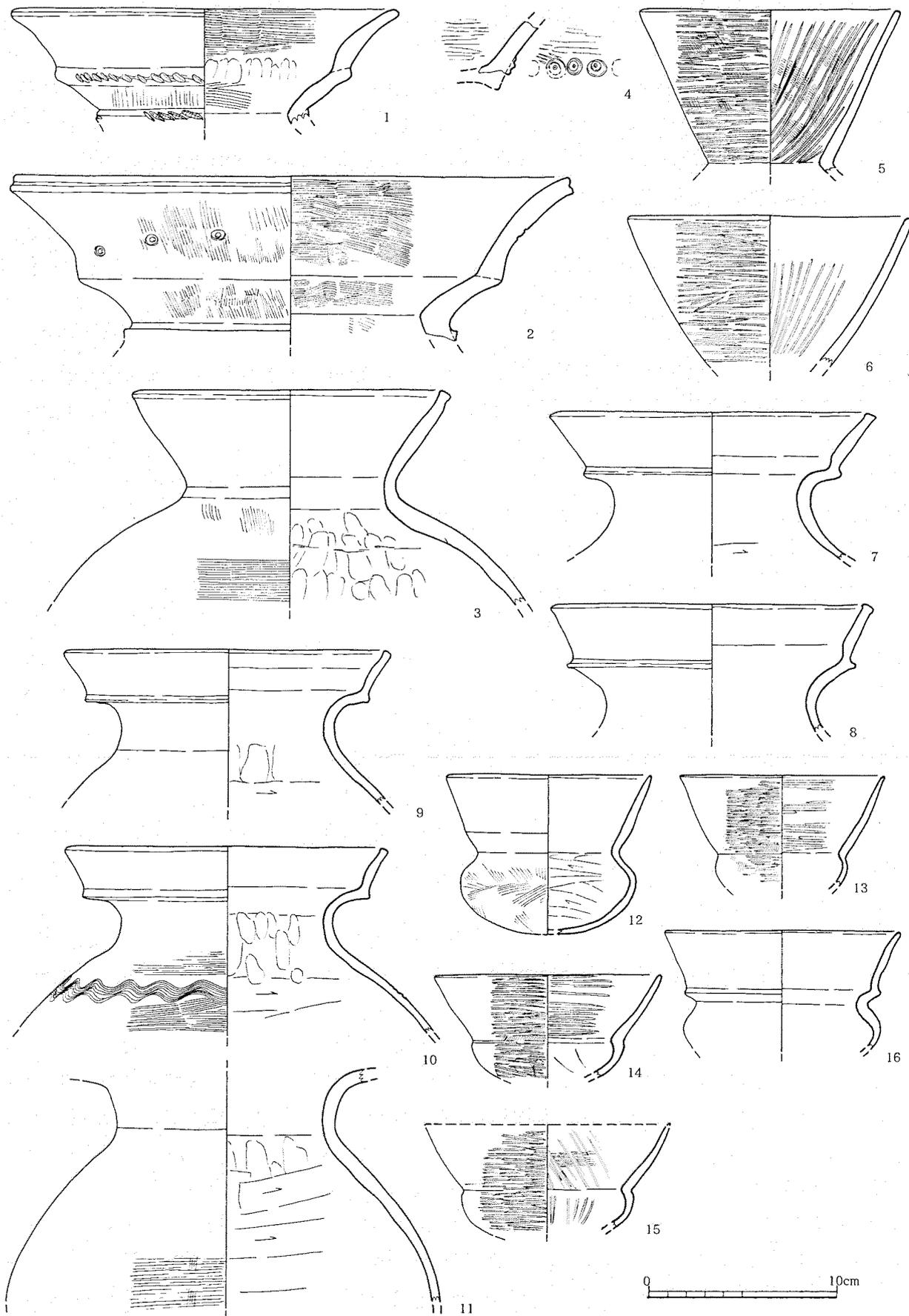
1～16は壺である。1・2は在来系の二重口縁壺。1は口縁部が外反して大きく開く。端部は丸くおさめる。頸部と口縁屈曲部の外面には刻目突帯を巡らせる。内面の調整は横ハケ目を行い、屈曲部内面には接合時の指圧痕が明瞭に残る。外面は横ナデを行うが、一部先行する縦ハケ目も見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は暗茶灰色を呈す。南8出土。2は比較的大型のもの。頸部内面は明瞭な稜を有す。口縁部は外反しながら開き、端部には一条の沈線を巡らす。内面は細かい横ハケ目、外面は縦ハケ目を行う。頸部の屈曲部からやや下がった位置に一条の三角突帯を巡らせ、また口縁部下には竹管文を巡らせる。胎土に砂粒を若干含み色調は橙茶色を呈す。中5出土。

3は畿内系の素口縁壺である。肩は丸く張り、頸部は強く締まる。口縁部はあまり湾曲せずに開き、頸部との境に稜をもたない。口縁端部は面をなす。口縁部は内外面とも横ナデ、肩部内面には接合の際の指ナデ痕が明瞭に認められる。外面はハケ目後上方のみ横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。南3出土。

4は畿内系の精製二重口縁壺である。口縁屈曲部の破片で、外面に円形浮文を巡らせる。調整は内外面とも横ヘラミガキを行う。胎土には砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は内面黒色、外面肌茶色を呈す。西5出土。

5・6は畿内形の精製直口壺である。5は直線的に開く口縁部で、内面はハケ目後に放射状の暗文を施し、外面は縦ハケ目後に細かい横ヘラミガキを密に行う。胎土は砂粒を含まず精良で、色調は肌茶色を呈す。中5出土。6はわずかに内湾する口縁部となる。内面は風化が著しいが、放射状に伸びる暗文がかすかに認められる。外面は細かい横ヘラミガキを密に行う。胎土に微砂を多く含み、精製器種の割にはやや粗い感を受ける。色調は肌茶色を呈す。中5出土。

7～11は山陰系二重口縁壺である。7は口縁部が直線的に開き、端部は外傾する面をなす。屈曲部外面は三角突帯状に引き出す。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。中5出土。8は7よりも一次口縁部が長く伸びる。二次口縁部は直線的に開き、端部を内側にわずかにつまみ出す。外面の三角突帯は高くシャープである。調整は全面横ナデ調整。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色



第35图 I区遺構面出土土器実測図① (1/3)

を呈す。中5出土。9は8よりも一次口縁部の外反度が強く、ほぼ水平にまで開く。口縁端部は四角くおさめる。頸部には縦方向の指ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。東2出土。10は内傾する短い頸部を有す。口縁端部は面をなす。頸部内面には縦方向の指ナデが残る。外面の肩部には櫛描波状文を巡らせる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。東2出土。11は肩があまり張らない体部となり頸部はやや外傾する。内面は横方向のヘラケズリ、外面はハケ目後に横ナデを行うが、通常よりも横ナデの幅が広い。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。南9出土。

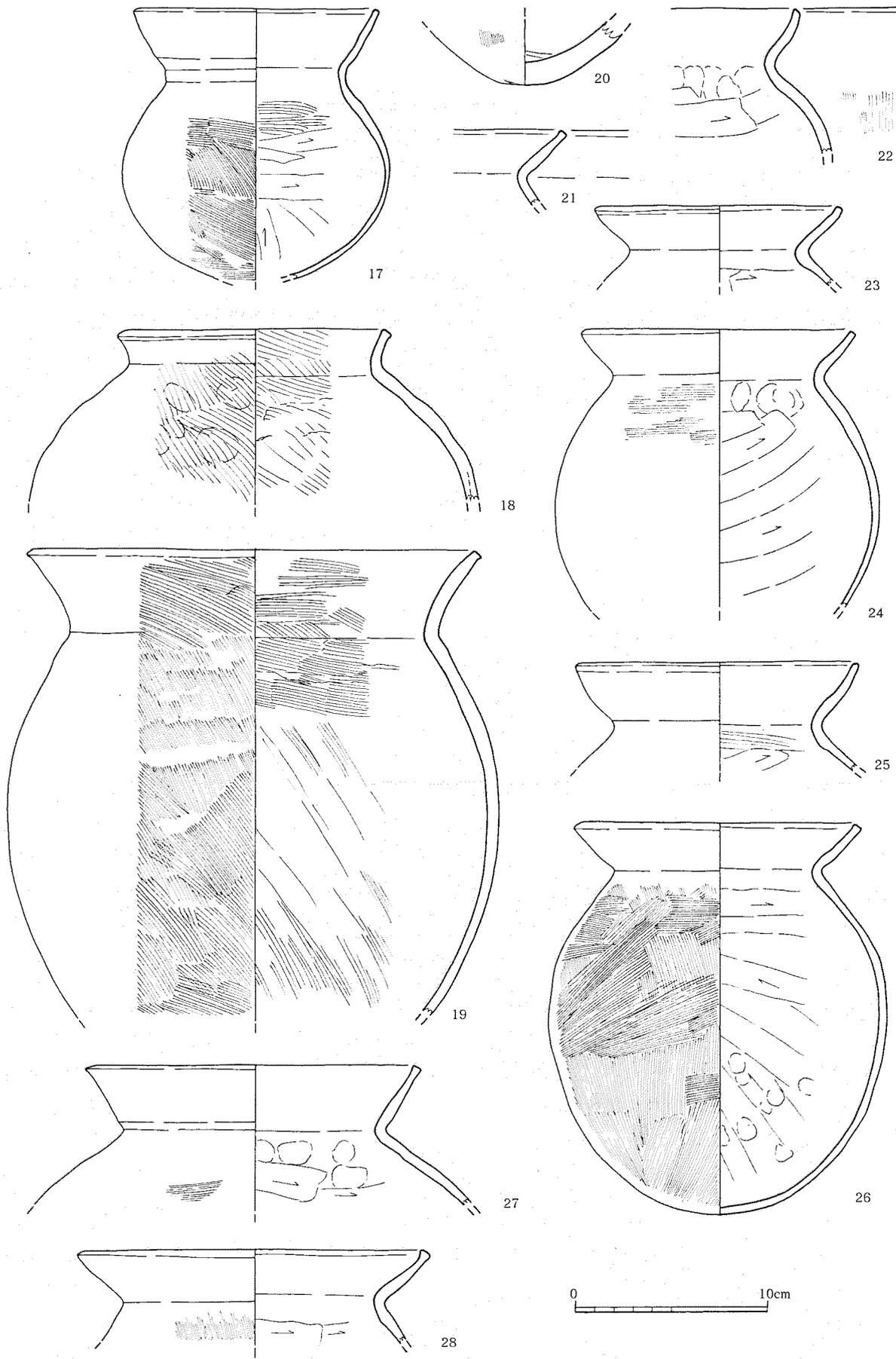
12～15は外反口縁の小型壺である。12は扁球形の体部を有し、頸部は比較的よく締まる。口縁部は直線的に長く伸びる。体部内面は横ヘラケズリ、口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面はハケ目を行う。胎土に砂粒をやや多く含み、色調は黄灰色を呈す。南8出土。13は半球形の小さな体部を有し、口縁部はわずかに内湾して長く伸びる。口縁端部のみ短く外反する。体部内面はナデ、口縁部内面は横ヘラミガキ、外面は縦ハケ目後細かい横ヘラミガキを行う。胎土に砂粒をやや含むが比較的精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。南8出土。14もやはり浅い体部となる。口縁部はわずかに内湾し、大きく開く。体部内面はナデ調整を行うが先行するヘラ状工具の痕跡も残る。口縁部内面は横ヘラミガキ。外面は縦ハケ目後横ヘラミガキを密に行う。体部下方には先行するヘラケズリの稜線も残る。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。南8出土。15もやはり浅い体部であるが、口縁部はあまり長く伸びない。内面は体部、口縁部とも放射状のヘラミガキを行い、口縁部には先行する横ハケ目も見られる。外面は細かい横ヘラミガキを密に行う。胎土は精良で色調は内面肌色、外面は化粧土を塗布しており橙色を呈す。南10出土。

16は山陰系の小型二重口縁壺である。体部は扁球形で一次口縁部は短く強く外反し、二次口縁部はわずかに外反しながら開く。端部は丸くおさめる。体部内面には横ナデが認められるがそれ以外は風化が進み調整不明。胎土に砂粒を若干含み色調は肌茶色を呈す。中4出土。

17は肩部以下に煤が付着しており甕として使用しているが、形状としては壺に近い。体部は球形で頸部はあまり締まらず、口縁部はわずかに内湾して開く。端部は丸くおさめる。体部内面はヘラケズリを行い、先行するハケ目も見られる。口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面はハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。中5出土。18は肩部が丸く張り、口縁部は短く外反する。口縁端部は面をなす。内外面とも非常に粗いハケ目を行う。内面には粘土接合痕が見え、外面には指圧痕が見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は明黄灰褐色を呈す。

19・20は在来系の甕。19は体部が長胴で、最大径は中位にある。口縁部は緩く外反し端部は面をなす。屈曲部の内面は明瞭な稜を持つ。口縁部は内外面ともハケ目、体部は内外面ともハケ目後部分的にナデを行う。胎土には粗砂を多く含みかなり粗さが目立つ。色調は黄灰褐色を呈す。体部の下半には煤が付着する。中5出土。20は尖底となる甕底部。内面はナデ、外面はハケ目。器壁がやや厚い。胎土に粗砂を多く含み、色調は黄灰褐色を呈す。南1出土。

21～40は布留系の甕である。21は口縁部の小片。口縁部は直線的に開き、内端部を鋭くつまみ出す。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。南9出土。22は肩が丸みを帯び、頸部の屈曲は緩く、口縁部は内湾しあまり開かずに伸びる。端部は上方を向く。体部内面は横ヘラケズリ、頸部内面は指ナデ、口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面は縦ハケ目後横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は灰褐色を呈す。全体的に器壁が厚い。南8出土。23は口縁部が直線的に開き、端部付近のみ



第36图 I区遺構面出土土器実測図② (1/3)

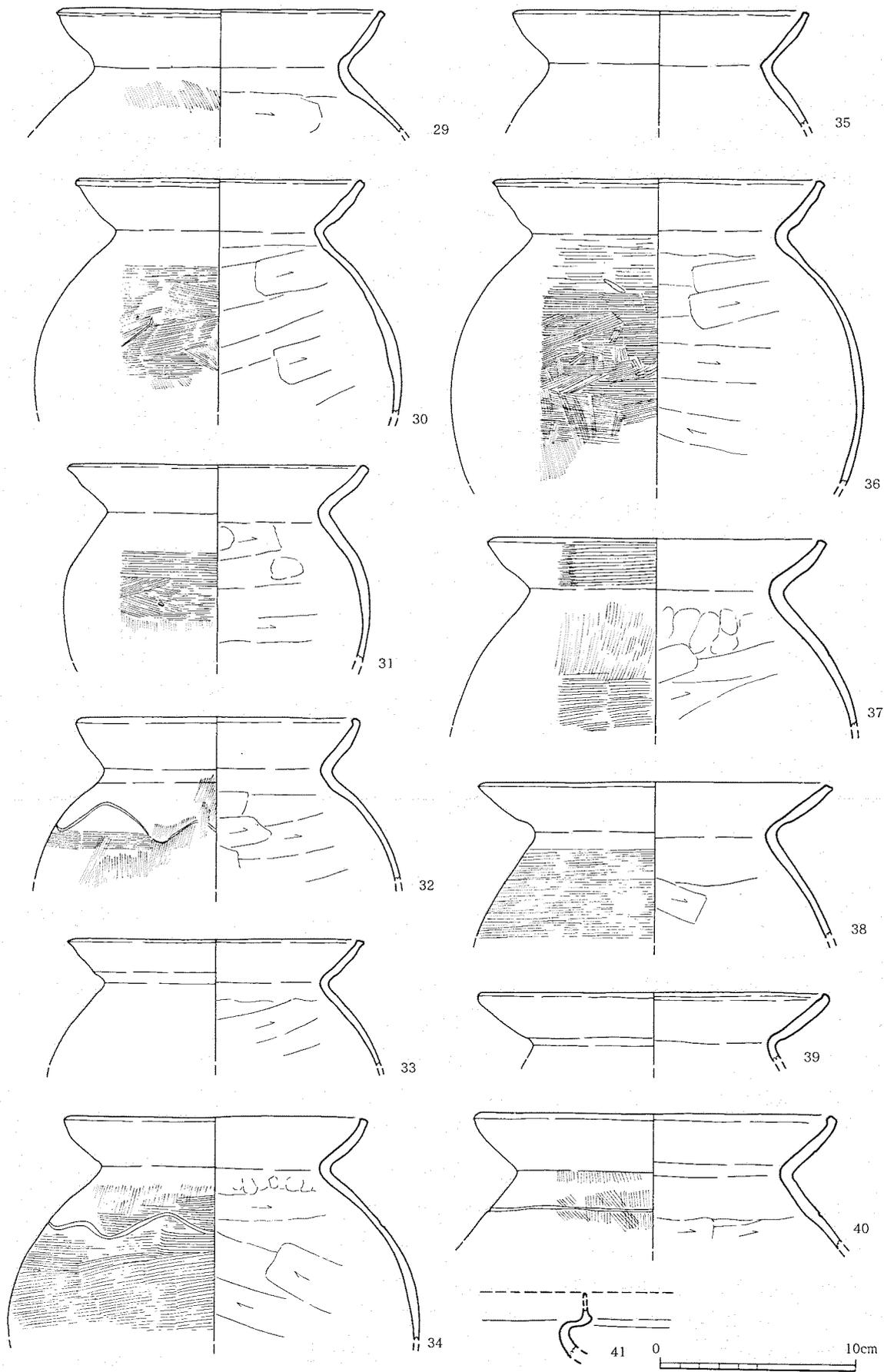
やや起きあがる。色調は黄灰色を呈す。南12出土。24は長胴気味の体部となる。口縁部はわずかに内湾し、端部は面をなす。体部内面は斜ヘラケズリ、屈曲部内面は指オサエ、口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面は肩部のみ横ハケ目後横ナデが観察出来るが、下半は二次加熱による器表剥落のため調整不明。色調は暗褐色を呈す。中5出土。25は口縁部が立ち気味に開き、端部は丸くおさめる。屈曲部内面にはヘラケズリに先行する横ハケ目が観察される。口縁部内面は横ナデ、外面は風化が著しく調整不明。胎土に砂粒をあまり含まず、焼成はあまり良くなく生焼け気味である。色調は灰白色を呈す。南8出土。

26は全形の判る好例である。体部はやや長胴気味で、最大径は中位にある。口縁部はわずかに内湾し、口縁内端をつまみ出す。体部内面は上方の横ヘラケズリが下半の縦ヘラケズリに切られている。下半には指圧痕が認められる。外面は縦ハケ目のみで肩部の横ハケ目を行わない。口縁部は内外面とも横ナデを行うが、外面肩部の横ナデも行っていない。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。体部下半には煤が付着するが、上半や口縁部にはない。中5出土。

27は肩部が丸味を持たず、口縁部は直線的に開く。口縁端部はシャープな面をなす。頸部の屈曲は明瞭である。口縁部は内外面とも横ナデ、肩部内面は浅いヘラケズリ、外面は横ハケ目後横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。南8出土。28は口縁部の開きがあまり強くない。端部は面をなし、内端を肥厚させる。外面肩部の横ナデは狭い範囲にしか行っておらず、その横ナデの下は縦ハケ目を行う。色調は黄灰褐色を呈す。南9出土。

29は口縁部がわずかに内湾して立ち気味に開き、端部はシャープな面をなす。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。北1出土。30は肩が丸みを帯び、頸部が締まった器形となる。口縁部はやや内湾し、口縁内端部をつまみ出す。体部内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。外面のハケ目は細かい。色調は黄灰褐色を呈す。中5出土。31は体部の割に口縁部の径が大きい。口縁部はわずかに内湾し、端部は丸く肥厚する。肩部には刺突文が見られるが、破片なので全周するかどうか判らない。中6出土。32は頸部がやや締まった器形となる。口縁部は立ち気味に開き、端部は丸く内側に肥厚する。肩部には一条の波状文を巡らせる。中5出土。33は器壁が薄い。肩部はやや丸味を帯び、口縁部はほとんど内湾せず直線的に開く。端部はシャープな面をなし、内端をわずかにつまみ出す。外面の横ナデは幅広く行われ、ハケ目は確認出来ない。肩部以下と口縁部にのみ煤が付着する。南9出土。34は頸部がよく締まり、口縁部は内湾して立ち気味に開く。端部は内端をシャープにつまみ出す。屈曲部内面には指圧痕が見られる。外面の横ハケ目は短い単位で行われており、特異である。その上から一条の波状文を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。肩部以下に煤が付着する。中5出土。

35は屈曲部内面に明瞭な稜を有す。口縁部は立ち気味に開き、端部は面をなす。内外面とも風化が著しく調整は不明である。中5出土。36は中位よりやや上に最大径が位置する。口縁部はわずかに内湾し、端部は外側に若干に肥厚する。体部内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで及ぶ。口縁部は内外面とも横ナデ。体部外面はハケ目。外面の肩部にはハケ目工具刺突による列点文を90°に1点の間隔で施文する。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。中5出土。37は器壁が厚い。口縁部はわずかに内湾しながら開き、内端部が丸く肥厚する。屈曲部内面には指ナデが残る。口縁部は内外面とも横ナデを行うが、外面には先行するハケ目が明瞭に残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。中5出土。38は肩が張らず、口縁部の径が大きい。屈曲部の外面に強い横ナデ



第37图 I区遺構面出土土器実測図③ (1/3)

を加えるためこの部分が丸く窪む。口縁部は直線的に開き、端部はシャープな面をなす。体部外面は横ハケ目を行うが、肩部の横ナデは行っていない。中5出土。39は頸部の器壁に比べて口縁部が厚くなる。口縁部はわずかに内湾しながら開き、端部は内端を不明瞭につまみ出す。調整は内外面とも横ナデ。口縁部外面には煤が付着する。40は肩部が直線的で丸味を持たず、口縁部は立ち気味に開く。口縁端部は内側が丸く肥厚する。肩部のやや高い位置に一条の沈線を巡らせる。中5出土。

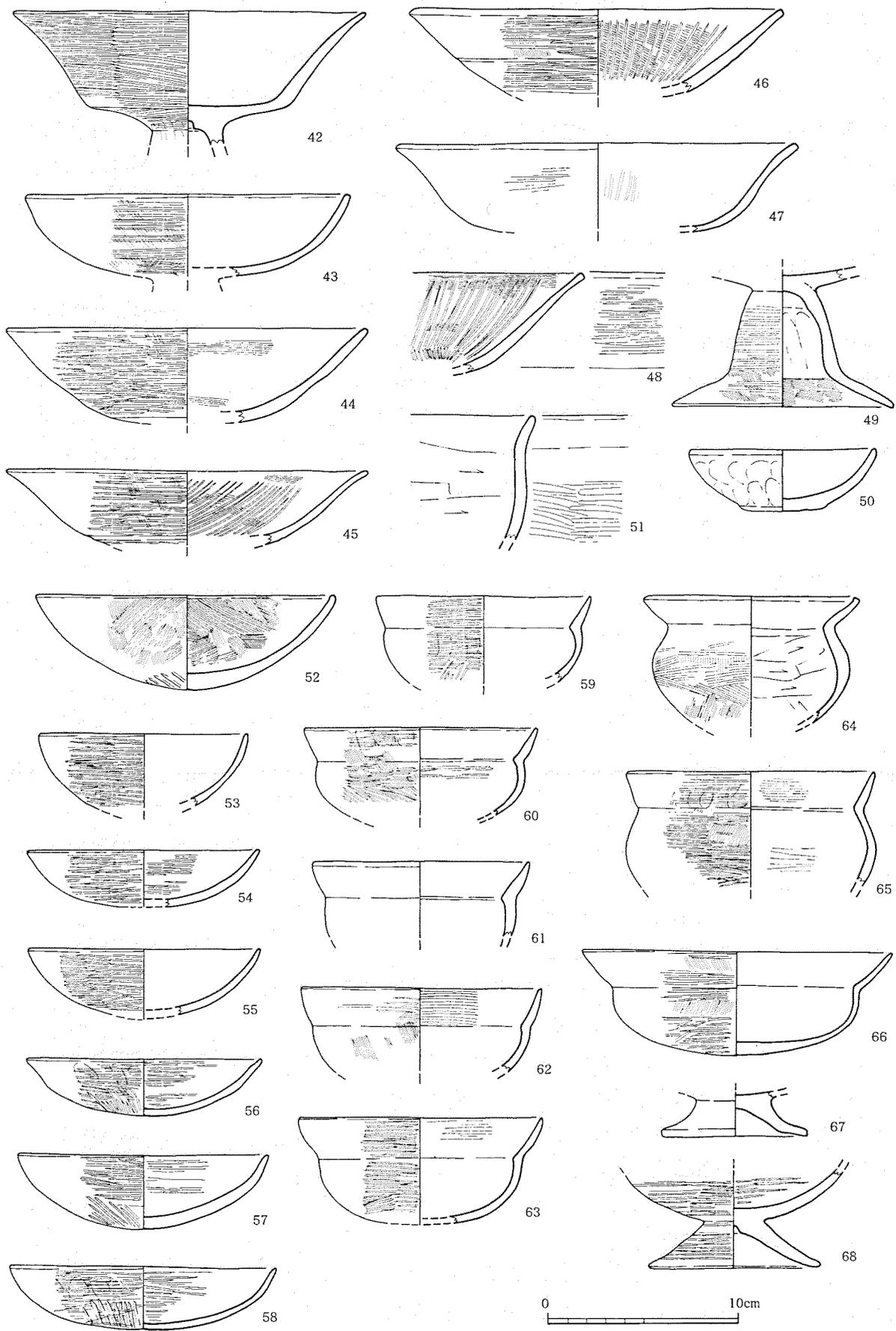
41は吉備系甕の口縁部片である。口縁部は欠損するため形状不明。また風化が著しく調整も不明瞭である。胎土に細砂を含むものの粗砂を含まず、明らかに布留系甕と異なる。色調は黄灰褐色を呈す。南9出土。

42～49は高坏である。42は明瞭な稜をもって屈折し、口縁部が大きく外反する坏部。端部は丸くおさめる。柱部の内頂部には軸受孔を有す。内面は風化が進み調整不明。外面は細かい横ヘラミガキを行う。胎土には砂粒を含まず極めて良質な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。西5・6出土。43は丸く内湾しながら立ち上がる坏部である。内面は器表が剥離しており調整不明、外面はハケ目後横ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰色を呈す。44は外面の段がほとんど消失している。口縁部は直線的に開き端部は丸くおさめる。内面はかすかに横ハケ目が認められる。外面は縦ハケ目後横ヘラミガキを密に行う。胎土は砂粒を含まず精良で、色調は肌茶色を呈す。中4・5出土。45は外面に凹線状の浅い段をもつ。口縁部は緩やかに外反して端部へと至る。内面は横ハケ目後放射状ヘラミガキ、外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。中5出土。46は直線的に伸びる口縁部のもので、端部は面をなす。内面はハケ目後放射状のヘラミガキ、外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ。胎土には砂粒をほとんど含まず精良で、色調は肌茶色を呈す。南9出土。47は屈曲部の段が消失している。口縁部は緩やかに外反し、端部は不明瞭な面をなす。風化が進んでおり不明瞭だが、内面には縦方向のヘラミガキ、外面は横ヘラミガキがかすかに観察される。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。南6出土。48はわずかに外反する口縁部のもので、端部は面をなす。内面は屈曲部を境に上下それぞれ放射状のヘラミガキを行い、口縁部には先行する横ハケ目も見られる。外面は細かい横ヘラミガキを密に行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。中5出土。

49は脚部である。柱部は中膨らみとなり、他のものに比べて短く径が太い。裾部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。柱部内面は縦指ナデ、裾部内面はハケ目、外面はハケ目後横ヘラミガキ。胎土には砂粒を少し含むが概ね良質な粘土を使用し、色調は黄灰褐色を呈す。西5・6出土。

50～69は鉢である。50は指整形の小型鉢。底部は不明瞭な平底で、体部は内湾しながら開く。内面は比較的丁寧にナデを行い、外面は指ナデが明瞭に残る。胎土に砂粒を若干含み色調は肌色を呈す。南11出土。51は在来系の中型鉢であろう。体部は直立し、口縁部は短く弱く外反する。端部は丸くおさめる。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面は横ヘラケズリ、外面は太い横ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。南8出土。52は尖底気味の底部となる。口縁部は丸くおさめる。調整は内外面ともハケ目調整で、外底部にはタタキが残る。胎土に砂粒を多く含み、色調は黄灰色を呈す。中5出土。

53は丸く深みのある器形をなし、口縁部は上方に立ち上がっている。脚付鉢であろうか。内面はナデ、外面は丁寧な横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙色を呈す。中5出土。54～58はいずれも浅い体部の鉢である。54は内外面とも細かい横ヘラミガキを行う。胎土に砂粒をやや含むものの比



第38图 I区遺構面出土土器実測図④ (1/3)

較的精良で、色調は肌茶色を呈す。中4出土。55は内面ナデ、外面細かい横ヘラミガキ。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。南2出土。56は内外面横ヘラミガキを行い、外面には整形時の指オサエの稜線が見られる。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は橙肌色を呈す。中5出土。57は56よりもやや深い。内外面とも横ヘラミガキを行い、外底部は一定方向のヘラミガキを行う。胎土は比較的精良で色調は肌茶色を呈す。南11出土。58は内外面とも横ヘラミガキを行い、外面には先行する指ナデ痕、タタキが残る。胎土は精良で色調は内面肌茶色、外面橙茶色を呈す。中5出土。

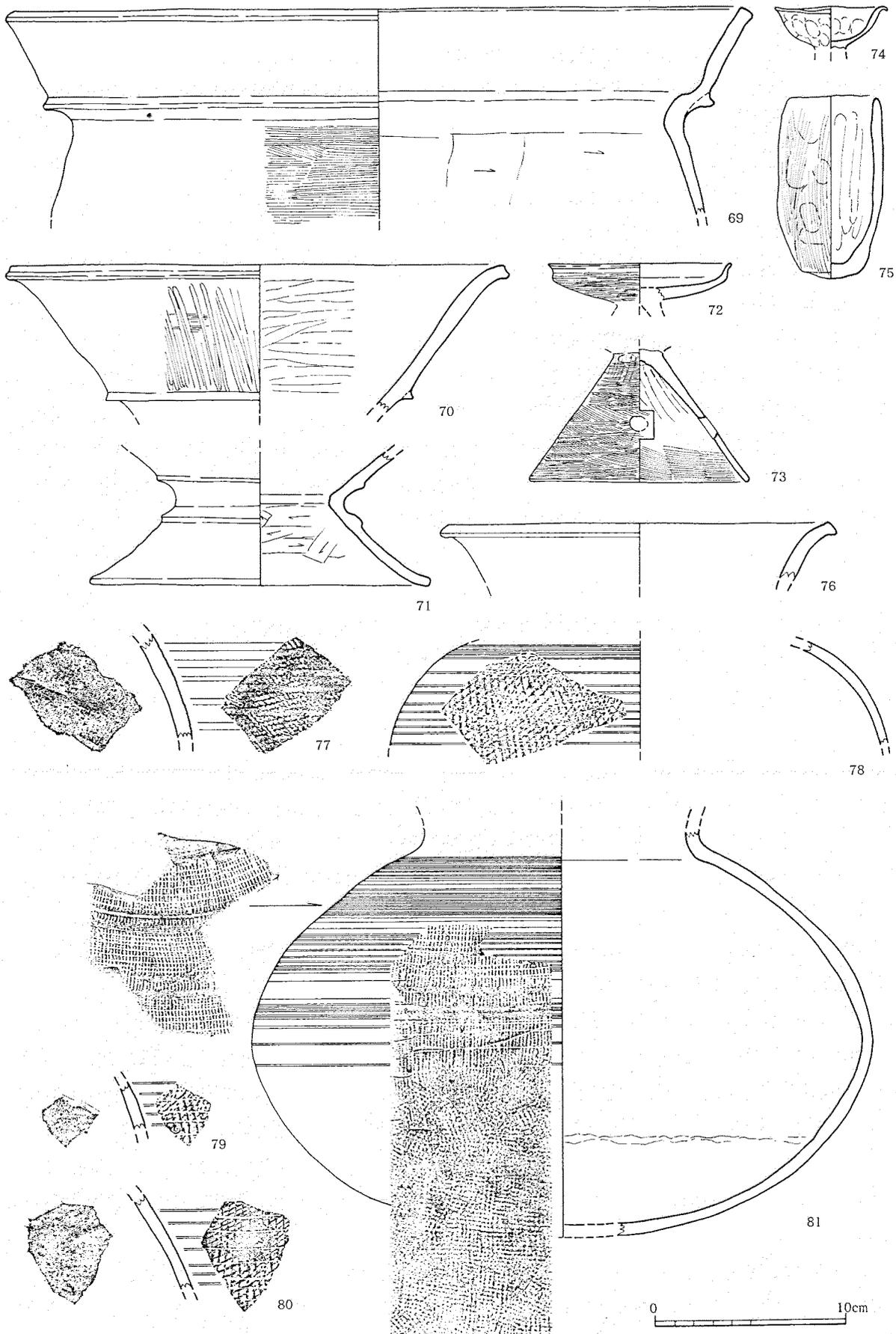
59～66は外反口縁の鉢である。59は屈曲部内面の稜が非常にシャープである。口縁部は直線的に短く開き、端部は尖る。内面はナデ、外面は横ヘラミガキを密に行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。南6出土。60は59同様、屈曲部内面に強い稜をもつ。内面の口縁部と体部下半はナデだが屈曲部下は横ヘラミガキが認められる。外面は横ヘラミガキを行い、先行するハケ目や指圧痕も見られる。胎土には砂粒を若干含み、精製器種の割には粗い。色調は茶色を呈す。中6出土。61も59と似た器形である。調整は全面横ナデを行う。胎土は精良で色調は肌色を呈す。南10出土。62は屈曲部が不明瞭で口縁部はやや内湾している。体部内面は風化が著しく調整不明。口縁部内面は横ハケ目。外面はハケ目後に横ヘラミガキを行う。胎土は比較的精良で色調は肌茶色を呈す。南11出土。63は62よりもやや深い体部となる。屈曲部の内面にはシャープな稜をもつ。口縁部はわずかに内湾する。体部内面はナデ、口縁部内面は横ナデだが先行する横ハケ目が残る。外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。南12出土。

64・65は深い体部のもので、壺或いは64に関しては甕と称しても良いかもしれない。64は体部の最大径が中位よりやや上に位置する。口縁部が若干内湾して開き、内端部をつまみ上げる。体部内面はヘラケズリ、口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面はハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は茶褐色を呈す。南2出土。65は屈曲部内面に明瞭な稜を有し、口縁部は短く直線的に開く。体部内面はナデを行うが、最大形に当たる位置にはヘラ状工具の小口による工具痕が残る。口縁部内面は横ハケ目後横ナデ。外面は縦ハケ目後横ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。南2出土。66は浅い体部の外反口縁鉢だが59～63と比べるとやや大型品である。体部上半は上方に立ち上がり、口縁部はわずかに内湾して大きく開く。端部は尖る。内面は風化が著しく調整不明。外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ。胎土には砂粒を少量含み、精製器種にしては粗い。色調は肌灰色を呈す。中5出土。

67・68は脚付鉢である。67は付け根から緩やかに外反するが内面には稜が認められる。端部は丸くおさめる。調整は全面横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。西5・6出土。68は直線的に裾部が開く。端部は丸くおさめる。内頂部には軸受孔を有す。体部は内外面とも丁寧な横ヘラミガキ、脚部内面は横ナデ、外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌色を呈す。中6出土。

69は山陰系の大型鉢である。一次口縁部は短く外反し、二次口縁部は直線的に開く。端部は面をなす。口縁部は内外面横ナデ、体部は内面ヘラケズリ、外面横ハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。中5出土。

70・71は鼓形器台である。70はやや大型となる器台の受部。端部に不明瞭な沈線を巡らせる。突帯はシャープな三角形を呈す。内面は幅広の横ヘラミガキ、外面は鋸歯文状にヘラミガキを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。南9出土。71は裾部。端部は丸くおさめる。内面は



第39图 I区遺構面出土土器実測図⑤ (1/3)

横ヘラケズリ、外面は横ナデ。中6出土。

72・73は精製小型器台。72は器壁が薄く、立ち上がりは外反し端部は薄く尖る。内面は風化が著しく調整不明。外面は緻密な横ヘラミガキ。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は肌色を呈す。中5出土。73は裾部。付け根から直線的に開き、端部は四角く面をなす。内頂部には軸受孔を有す。内面は裾付近のみ横ハケ目を行い、外面は斜ハケ目の後に疎らな横ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。中5出土。

74は手捏ねのもので、器台であろうか。受部は深く、端部は大きく外反して下方を向く。内外面とも指圧痕が明瞭に見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。西5・6出土。75は飯蛸壺。比較的小型で器高の割に口径が小さい。内面は縦指ナデ、外面は指整形後にハケ目を施す。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。南11出土。

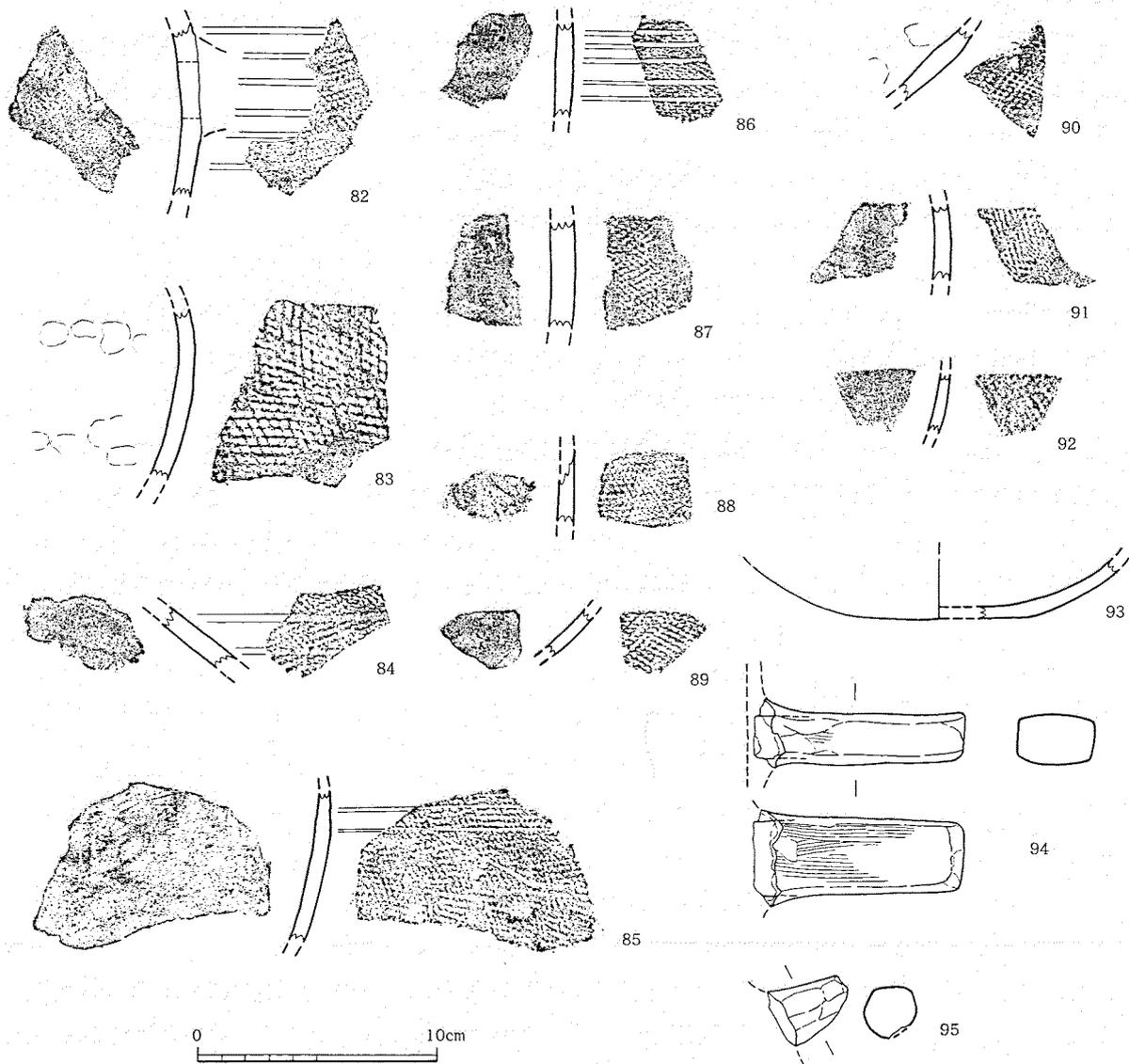
76～95は半島系土器である。76は瓦質焼成の短頸壺口縁部。頸部付け根から外反しながら立ち上がるものである。口縁端部は外側につまみ出される。調整は内外面ともロクロ使用の回転ナデを行う。胎土には粗砂粒を若干含む。色調は表面黒色、断面灰色を呈す。77は壺の肩部片。外面は斜格子タタキの後平行凹線を巡らせる。内面はヘラケズリの後ナデ。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。中5出土。

78は丸味を有した壺肩部。外面は大振りな斜格子タタキの後に螺旋状沈線を密に巡らす。内面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含むが概ね良質な粘土を使用し、焼成は軟質焼成、色調は肌茶色を呈す。西5・6出土。79・80も78と似た斜格子タタキを持ち、同一個体となるかもしれない。79は内面肌茶色、外面黒色、軟質焼成で胎土に砂粒を若干含む。中5出土。80は胎土に粗砂を若干含み色調は黄灰褐色を呈し焼成は軟質焼成。中5出土。

81は扁球形の陶質短頸壺である。最大径は中位よりやや下に位置する。肩部はあまり丸味を持たず、頸部はよく締まる。内面の調整は最大径の位置を境にして上半が横ナデ、下半が不整方向のナデを行っている。下半には接合痕が見られる。頸部は内外面ともロクロ使用の回転ナデ。外面の上半は、まず縦方向の平行タタキを肩部に行い、浅い螺旋状凹線を巡らせた後、狭い範囲で螺旋状沈線を巡らせている。下半は正格子タタキを行うが、これは上半の平行タタキを切っている。胎土には砂粒を若干含み、後期の須恵器よりもやや砂粒が少ないといった感じである。色調は黒灰色を呈す。焼成は陶質焼成で堅緻に焼き上がる。南8・9から破片が最も多く出土したが、それ以外にI区中7暗褐色細砂層、I区南6暗褐色細砂層、溝1上層黒褐色細砂層などからも出土している。

82は壺体部片で、剥離痕より把手が付いていたことが判る。内面はヘラケズリ後ナデ、外面は斜格子タタキ後凹線を巡らせる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色、焼成は軟質焼成である。77とよく似ており、同一個体であろう。83は体部下半の破片である。内面はナデ仕上げだが粘土帯接合の際の指圧痕が見られる。外面は大きめの斜格子タタキを行い下方はナデ消している。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は内面黄茶色、外面暗黄灰褐色を呈す。南8出土。84は器壁が厚く、やや大型のものであろう。内面は横ナデ、外面は斜格子タタキの後に凹線を巡らせる。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。西5・6出土。85は体部中位の破片であろう。内面はヘラケズリの後に横ナデを行い、外面は斜格子タタキの後に上半のみ沈線を巡らせる。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。中5出土。

86の外面は斜格子タタキの後に狭い間隔で平行沈線を巡らせる。内面はナデ。胎土に砂粒を若干



第40図 I区遺構面出土土器実測図⑥ (1/3)

含み色調は黄灰褐色、焼成は軟質焼成である。中5出土。87は器壁が厚く大型品であろう。外面は斜格子タタキの後一部ナデ消しており、下半部にあたる破片と推察される。内面はヘラケズリ後ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。焼成は軟質焼成。中5出土。88は外面斜格子タタキ、内面ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は内面黒色、外面黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成である。中5出土。89は器壁が薄く小型品か。外面斜格子タタキ、内面ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は褐色を呈す。焼成は軟質焼成。北1出土。90は外面斜格子タタキ後一部ナデ消し、内面はナデを行い指圧痕が見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成。中5出土。91は外面斜格子タタキ、内面横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は内面黄灰褐色、外面黒色、焼成は軟質焼成である。中5出土。92は外面正格子タタキ、内面ナデを行う。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、焼成は瓦質焼成、色調は内面黒色、外面灰色を呈す。南8出土。93は陶質壺の底部片。内外面ともナデ仕上げである。胎土に砂粒をわずかに含むが、概ね精良な粘土を使用し、色調は薄灰色、堅緻に焼き上がる。中7出土。

94・95は把手である。94は断面方形を呈し特異である。調整にもハケ目を使用しているが、甑の把手であろうか。指整形の後、恐らく接合の際にハケ目を使用したものと思われる。胎土には砂粒を若干含み、あまり良質ではない。色調は肌茶色を呈し、焼成は軟質焼成で堅く焼きしめる。南9出土。95は瘤状把手。半島系土器の可能性もあるが、山陰系二重口縁壺に時折見られる瘤状把手の可能性もある。円錐形を呈し、やや上方を向いている。上面は平坦な面をなす。整形は全面指ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は暗黄灰褐色、焼成は軟質焼成で焼き上がりも良い。東4出土。

Ⅱ 区遺構面出土土器 (図版17・28、第41・42図)

1は二重口縁壺である。頸部の屈曲は強く、対して口縁部の屈曲は明瞭ではない。二次口縁部の立ち上がり付近は強い横ナデを加えるために器壁が薄くなっている。体部のヘラケズリは屈曲部にまで及ぶ。口縁部内面は横ナデ、外面は横ヘラミガキを行っており、先行する縦ハケ目も見られる。胎土には砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用し、色調は肌色を呈す。南2出土。

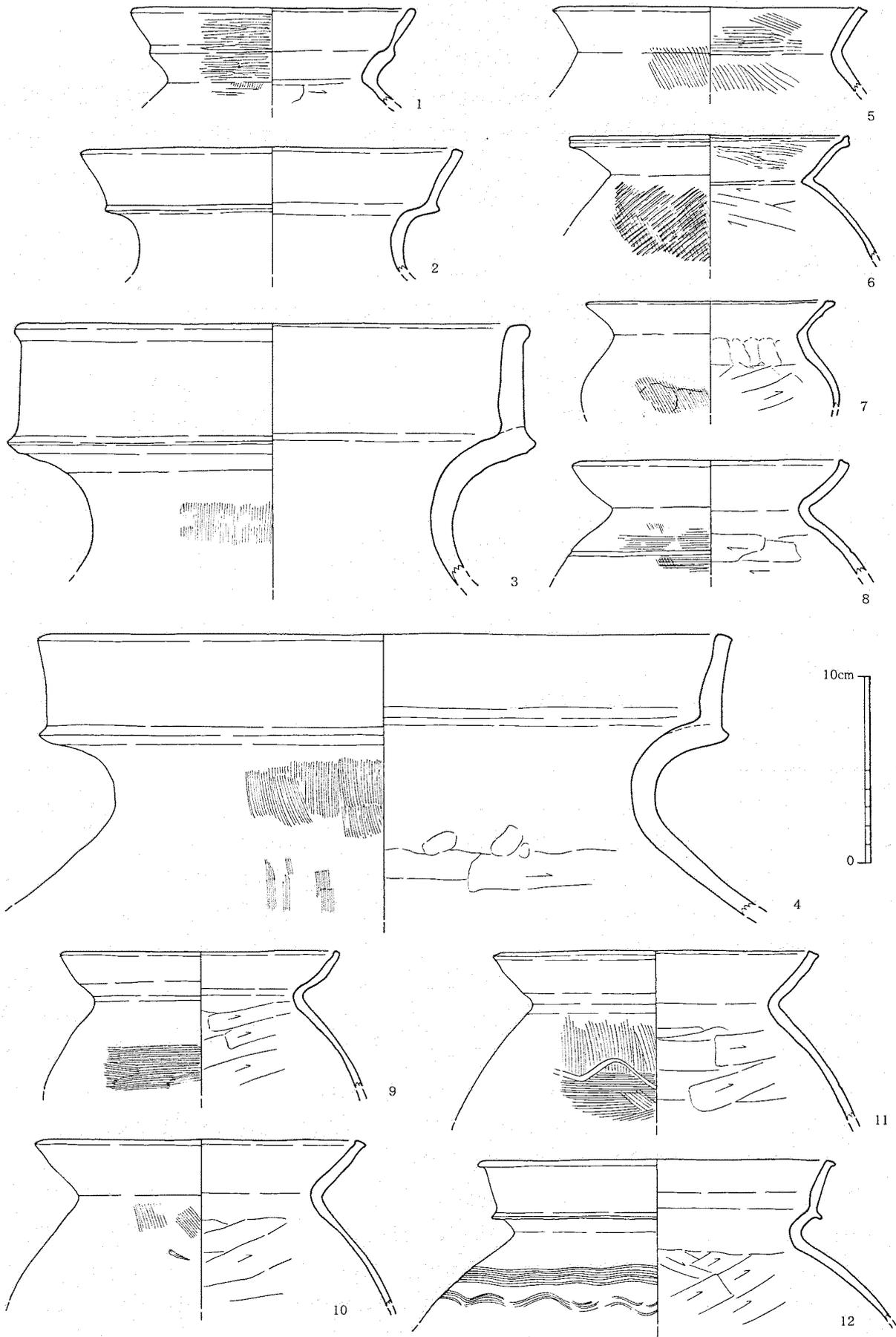
2～4は山陰系の二重口縁壺である。2は短く直立する頸部をもつ。口縁部は直線的に開き、端部は内端を丸く肥厚させる。調整は全面横ナデ調整。胎土に砂粒を若干含み色調は黄褐色を呈す。東7出土。3・4は大型壺である。3は頸部が大きく外反し、口縁部は直立する。端部は外側に大きく肥厚する。調整は内外面とも横ナデを行うが、外面には先行する縦ハケ目が見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。北6出土。4は3に比べて頸部が短い。口縁部はほぼ直立し、端部はやや丸味を帯びた平坦面をなす。外面の横ナデは口縁部のみにとどまり頸部には至っていない。胎土に砂粒を若干含み色調は肌色を呈す。東7出土。

5は在来系の甕である。口縁部は直線的に開き、端部は外側にシャープに尖る。内外面ともハケ目の後に横ナデ調整を行う。胎土に砂粒をあまり含まず比較的良質な粘土を使用し、色調は黄灰褐色を呈す。南2出土。

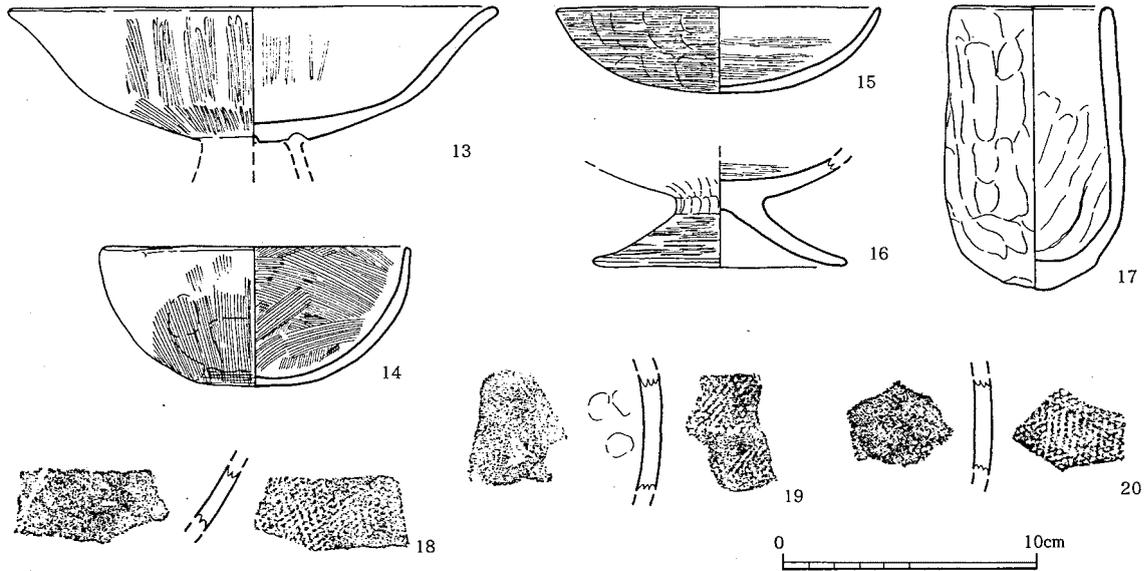
6は庄内系の甕である。肩は丸みを帯び、屈曲部は鋭い稜を有す。口縁部は直線的に開き、端部は上方に肥厚し、また外端面には不明瞭な沈線を巡らせる。口縁部は内外面とも横ナデを行うが、内面には先行する横ハケ目が見られる。体部の内面は横ヘラケズリ、外面は細い左下がりタタキの後にハケ目を行っている。器壁は全体的に薄く、シャープな感じである。胎土には砂粒を若干含み、色調は暗褐色を呈す。東7出土。

7は小型の布留系甕で形状としては鉢に近い。扁球形の体部をなし、肩部は直線的に傾斜し、丸味を帯びていない。口縁部は直線的に開き、端部は平坦面を有し内側が稜を有す。頸部内面には縦方向の指ナデが残る。色調は黄灰褐色を呈す。北7出土。

8～11は布留系の甕である。8は口縁部が内湾して開き、口縁内端を上方につまみ出す。肩部には一条の沈線を巡らせる。北7出土。9も口縁部が内湾しながら開き、端部はわずかに丸く肥厚する。内面のヘラケズリは屈曲部近くにまで行われる。西5出土。10は9に比べて頸部が締まらない器形となる。口縁部は直線的に開き、端部は内端をつまみ出す。肩部の横ナデはかなり下方にまで及んでいる。またこの肩部には列点文が見られるが、細片であるため配置が判らない。西5出土。11は口縁部がわずかに内湾し、端部はシャープな面をなす。外面の横ナデは口縁部のみにとどまり肩部まで及んでいない。また肩部には一条のヘラ描波状文を巡らせている。胎土に砂粒をやや多く含み、色調は黄灰色を呈し他の布留系甕とやや異なる。北2出土。



第41图 II区遺構面出土土器実測図① (1/3)



第42図 II区遺構面出土土器実測図② (1/3)

12は山陰系の甕である。やや肩が張った体部をなし、頸部は短く外反し、口縁部は直線的に伸びる。口縁端部は外側に大きくつまみ出される。また屈曲部の突帯も高くシャープなものである。器壁も他の布留系甕と比べ薄い。肩部には一条の櫛描直線文を巡らせ、その下に櫛描波状文を巡らせる。胎土には砂粒を若干含み、色調は暗褐色を呈す。北6出土。

13は高杯の坏部である。外面にはまったく段をもたない。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸くおさめている。内面には縦方向のヘラミガキがかすかに確認できる。外面は一定の幅で帯状に縦ヘラミガキを行っている。胎土に砂粒を若干含むが比較的精良な粘土を使用し、色調は黄灰褐色を呈す。北8出土。

14・15は直口縁の鉢である。14は半球形状をなす。内面はハケ目を最終調整とし、外面はハケ目後口縁部のみ横ナデを行っている。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。北7出土。15は精製の鉢。内外面とも丁寧な横ヘラミガキを行うが、内面の口縁部付近には行っていないようである。胎土に砂粒を少量含むが概ね良質な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。北6出土。

16は脚付鉢である。脚部は非常に短い柱部をもち、裾部はやや外反しながら開き端部は丸くおさめる。鉢部内底面はヘラミガキ調整を行い、裾部内面は横ナデ、外面はハケ目後に横ヘラミガキを行う。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。東3出土。

17は飯蛸壺である。他のものと比べて若干径が大きい。底部は尖り気味となり、口縁部は直立する。調整は内外面とも指ナデ整形を行い、指圧痕が明瞭に残る。胎土に砂粒を若干含み色調は茶灰色を呈す。北5出土。

18~20は半島系の土器片である。18は外面斜格子タタキ、内面ナデ。胎土に砂粒をあまり含まず、比較的精良な粘土を使用している。色調は黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成で焼き上がりも良い。北5出土。19は斜格子タタキの後に一部ナデ消しを行っており、下半部の破片であろう。内面はナデで指圧痕が残る。胎土に砂粒をやや多く含み、色調は内面黄灰色、外面肌茶色、焼成は軟質焼成で焼き上がりは良い。西5出土。20は外面斜格子タタキ、内面ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は内面黒色、外面黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成で焼き上がりも良い。北7出土。

攪乱等出土土器 (図版17~20・28~31、第43~57図)

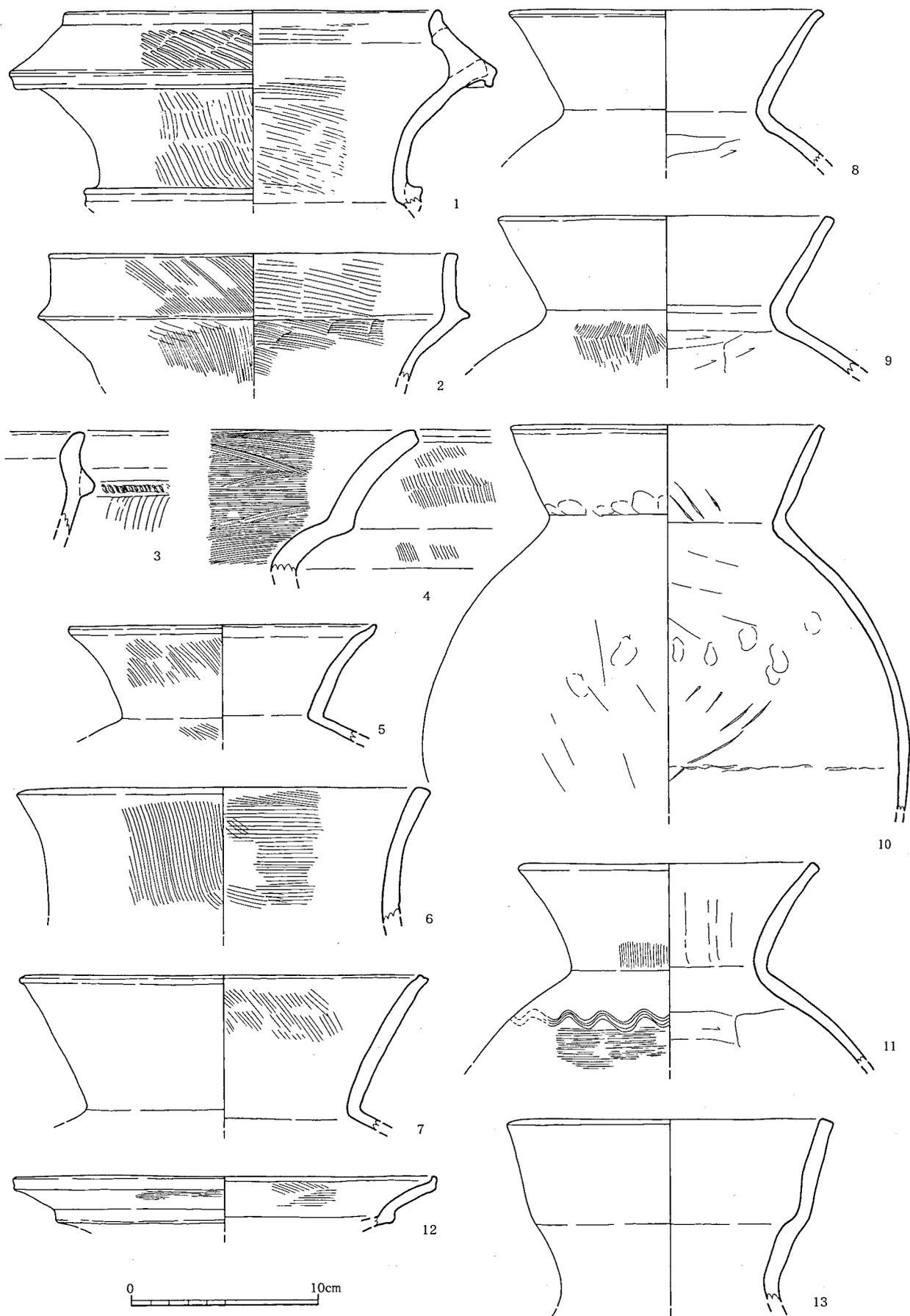
1~48は壺である。1は複合口縁壺である。頸部付け根が強く締まり、二次口縁部が内傾しており古式の様相をもつもの。頸部付け根には高いM字突帯を巡らせ、また口縁屈曲部外面にも粘土を貼付し、垂下した突帯に仕上げる。口縁端部は上方につまみ上げる。頸部の調整は内外面ともハケ目を行い、口縁部内面は横ハケ目後横ナデ、外面は斜タタキを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は肌色を呈す。I区中6攪乱出土。2~4は二重口縁壺である。2は頸部があまり締まらず口縁部は直立する。端部は水平な面をなす。調整にはやはりタタキ・ハケ目を用いる。胎土に砂粒をやや多く含み色調は明茶褐色を呈す。II区北2・3出土。3は屈曲部が不明瞭で、口縁部が短く立ち上がるもの。端部は外側を向き丸味を帯びる。屈曲部外面には丸味を帯びた刻目三角突帯を巡らせる。外面の突帯下は粗いハケ目が見られ、それ以外は横ナデを行う。色調は黄灰褐色を呈す。I区中5攪乱出土。4は大きく外反する口縁部をもつ。内面は細かい横ハケ目を行い、外面は縦ハケ目の後に横ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は内面肌茶色、外面橙茶色を呈す。I区南1の校舎基礎攪乱から出土。

5~11は素口縁の壺である。5は頸部の屈曲がシャープな在来系の壺。口縁部は外反しながら開き、端部は上方に不明瞭につまみ上げる。体部内面は屈曲部付近までヘラケズリを行い、外面はハケ目を行う。口縁部は内外面ともハケ目後横ナデ。色調は黄灰褐色を呈す。I区中5攪乱出土。6は口縁部がわずかに外反しながら上方に立ち上がる在来系の壺。端部は面をなす。内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目。色調は表面が黄灰褐色、断面が黒色を呈す。II区南2攪乱出土。

7~9は畿内系の素口縁壺である。7は口縁部が直線的に開き、端部は外側にやや肥厚し上端に不明瞭な沈線が巡る。内外面とも横ナデ調整だが内面には先行するハケ目が見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。I区中6攪乱出土。8は7よりも頸部が締まる。口縁部はやはり直線的に開き、端部は不明瞭な面をなす。体部内面には横ヘラケズリが見られ、その他は横ナデを行っている。I区南3攪乱出土。9は口縁部が比較的短い。わずかに内湾しながら開き、端部は不明瞭な面をなす。肩部のハケ目には二種類の原体を使用する。色調は黄灰色を呈す。II区南1攪乱出土。10は肩の張らない長胴気味の体部を有し、口縁部は短く直線的に開くものである。端部は外側にわずかに肥厚している。口縁部は内外面とも横ナデを行い、体部も全面ナデを行う。内面にはヘラケズリのものと思われる工具痕が残る。また粘土接合痕も見られる。胎土・色調は山陰系の二重口縁壺に似る。I区中1攪乱出土。11は屈曲部が稜をなさない。頸部はよく締まり口縁部はやや外反しながら開く。口縁部は体部に対して径が小さい。肩部には櫛描波状文を巡らせる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。II区北7の校舎基礎攪乱から出土。

12は東海系二重口縁壺か。口縁部は大きく開き、端部は上方へと大きくつまみ上げる。屈曲部外面と口縁部外面は垂直な面をなす。内外面ともハケ目後横ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。I区南10出土。13は屈曲が不明瞭な二重口縁壺である。頸部は細く筒状をなしあまり開かず、口縁部もほとんど開かない。屈曲部はあいまいで稜をなさない。口縁端部は外傾する面をなす。胎土に砂粒を若干含み色調は肌灰色を呈す。I区東7攪乱出土。

14~28は山陰系の壺である。14は頸部上半が大きく外反し、口縁部は直線的に立ち上がる。屈曲部外面には高い三角突帯を巡らせ、また口縁端部も三角突带状に外側につまみ出す。I区西3校舎基礎攪乱から出土。15は大型品。口縁部の開きが弱い。屈曲部外面には小さくシャープな三角突帯を巡らせ、口縁外端も小さくつまみ出す。色調は黄灰色を呈す。I区南10攪乱出土。16はやや長い頸



第43图 攪乱等出土土器実測图① (1/3)

部を有し、口縁部は直立する。屈曲部外側は不明瞭な三角突帯をなし、口縁外端部も丸くつまみ出す。色調は内面黄褐色、外面茶色を呈し他とやや異なる。Ⅱ区北6校舎基礎攪乱出土。

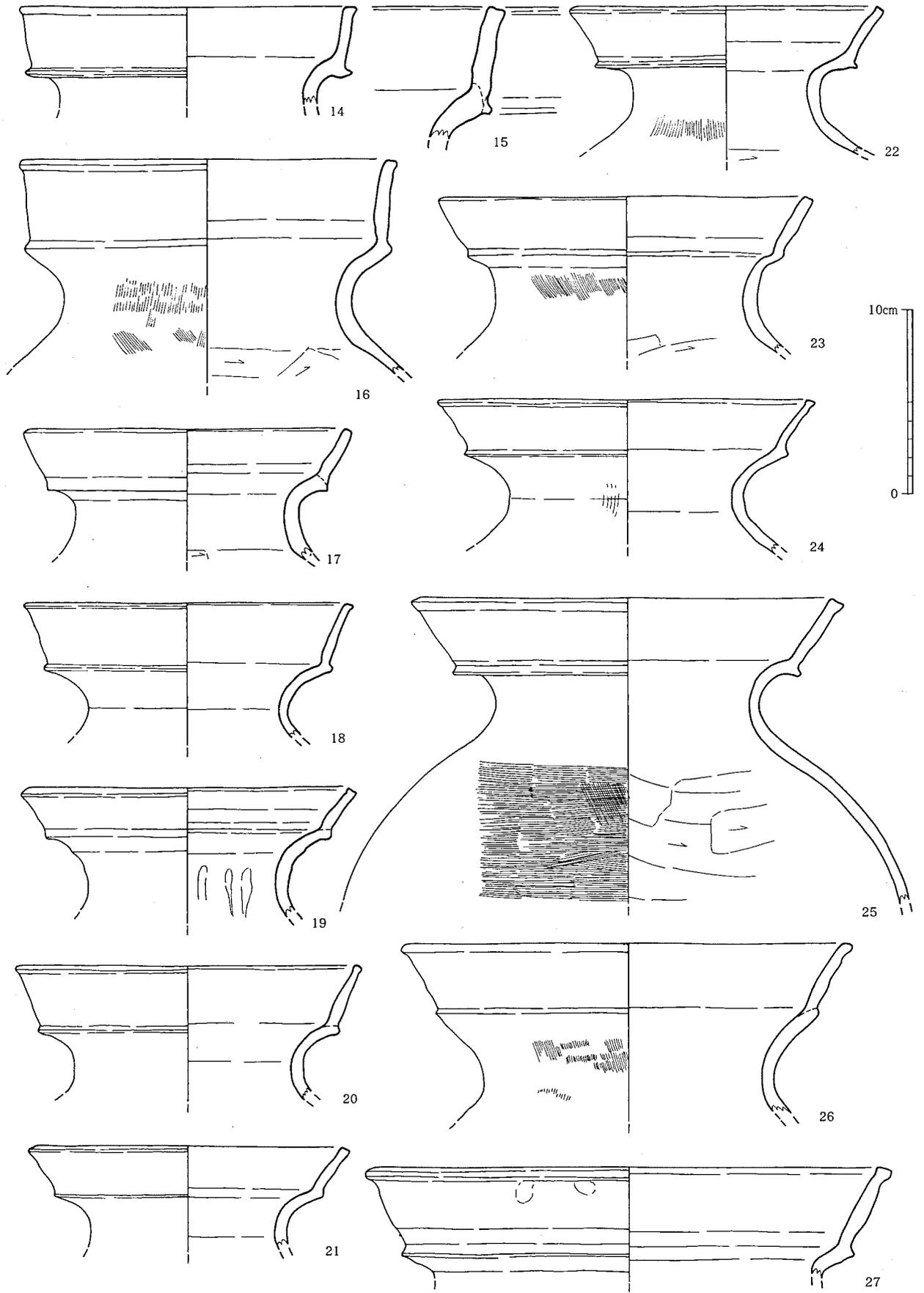
17は頸部の器壁が厚く、対して口縁部の器壁はやや薄い。口縁部は直線的に開き、端部は外傾する面をなす。内面の器表の剥離が著しい。Ⅰ区南3攪乱出土。18は全体的に器壁が薄い。口縁部はわずかに外反しながら開き、屈曲部と口縁外端部は丸くつまみ出される。Ⅰ区中5攪乱出土。19は頸部がよく締まる。口縁部は短く開き、端部は上方につまみ上げる。調整は内外面とも横ナデを行い、頸部内面には整形時の縦指ナデ痕が残る。Ⅱ区北7校舎基礎攪乱出土。20は口縁端部がやや肥厚する。頸部外面には煤が付着しており煮炊きに使用されたものと思われる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅰ区中3校舎基礎攪乱出土。21は筒状の短い頸部を有し、口縁部は直線的に短く開く。端部は面をなす。調整は全面横ナデ。Ⅱ区南1攪乱出土。

22も筒状の短い頸部を有す。口縁部はやや外反気味に開き、内端部をシャープにつまみ出す。また屈曲部外面もシャープな三角突帯を巡らせる。Ⅱ区南3攪乱出土。23もやはり筒状の短い頸部を有すが、22に比べ頸部の締まりが弱い。一次口縁部は短く外反し、二次口縁部は直線的に開く。この二次口縁部は付け根に比べて端部の器壁が厚い。上端はシャープな外傾面をなす。屈曲部外面の稜は不明瞭である。色調は肌茶色を呈し他とやや異なる。Ⅰ区東4攪乱出土。24は口縁内端部がやや肥厚し、また上端が外傾する面をなす。屈曲部は三角突帯状に低くつまみ出される。Ⅱ区南2攪乱出土。

25は丸味を帯びた肩部を有し、頸部は比較的良好に締まる。一次口縁部は短く大きく外反し、二次口縁部は直線的に開く。端部は外側につまみ出され、上面がやや窪んでいる。屈曲部外面には高い三角突帯を巡らせる。体部内面は横ヘラケズリ、外面は縦ハケ目後横ハケ目。口縁部から頸部にかけては横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。Ⅰ区中6攪乱出土。26は一次口縁部の開きが弱く、ほとんど屈曲せずに口縁部へと至っている。屈曲部の外面は三角突帯状に不明瞭につまみ出す。口縁端部は外側に丸く肥厚する。Ⅰ区西7攪乱出土。27は屈曲部外面の三角突帯がシャープである。口縁端部は外側に大きく肥厚し、上端は外傾する面をなす。Ⅱ区南8攪乱出土。

28は大型品である。頸部は丸く外反し、口縁部は直線的に開く。屈曲部の突帯は小さくシャープであり、先端がやや上方を向く。口縁端部は水平な面をなす。口縁部は内外面とも横ナデ、頸部内面は器表が剥離しており調整が見えない。外面はハケ目後に横ナデを行う。Ⅱ区西5攪乱出土。

29～34は頸部が非常に短く、形状が甕に近いもの。いずれも山陰系のもと思われるが31は吉備系の甕かもしれない。29は口縁部がやや外反しながら開く。端部は上方に小さくつまみ出し、また下端部が肥厚する。頸部の器壁に比べて口縁部の器壁が薄い。Ⅱ区南2攪乱出土。30は二次的な被熱の痕跡が全くなく、甕として使用していない。一次口縁部は短く外反し、二次口縁部は直線的に開く。端部は外側に丸く肥厚する。屈曲部外面の突帯はシャープである。口縁部から頸部は内外面とも横ナデ、体部内面はヘラケズリ、外面は縦ハケ目後横ハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区南3攪乱出土。31は小型品である。口縁部が内傾し端部を丸くおさめる。全面横ナデ調整。胎土に砂粒を含むものの粗砂を含まない。色調は灰茶色～黒色を呈す。Ⅰ区中1攪乱出土。32は頸部が強く締まって短く強く外反し、口縁部は直立する。端部は丸くおさめる。体部内面にはヘラケズリを行い、それ以外は全面横ナデが観察される。Ⅱ区東6校舎基礎攪乱出土。33も頸部が強く締まって強く短く反転し、口縁部は内傾する。端部は内側に肥厚し、上端は内傾する面を



第44图 攪乱等出土土器実測図② (1/3)

なす。体部の内面は横ヘラケズリ、外面は横ハケ目が見られ、さらに肩部に櫛描直線文を巡らせる。I区中4校舎基礎攪乱出土。34は二次被熱の痕跡がなく壺として使用したものと思われる。頸部が短く、口縁部は直線的に立ち上がる。端部はやや肥厚し、上端は内傾する面をなす。屈曲部の稜はシャープさに欠ける。II区南1攪乱出土。

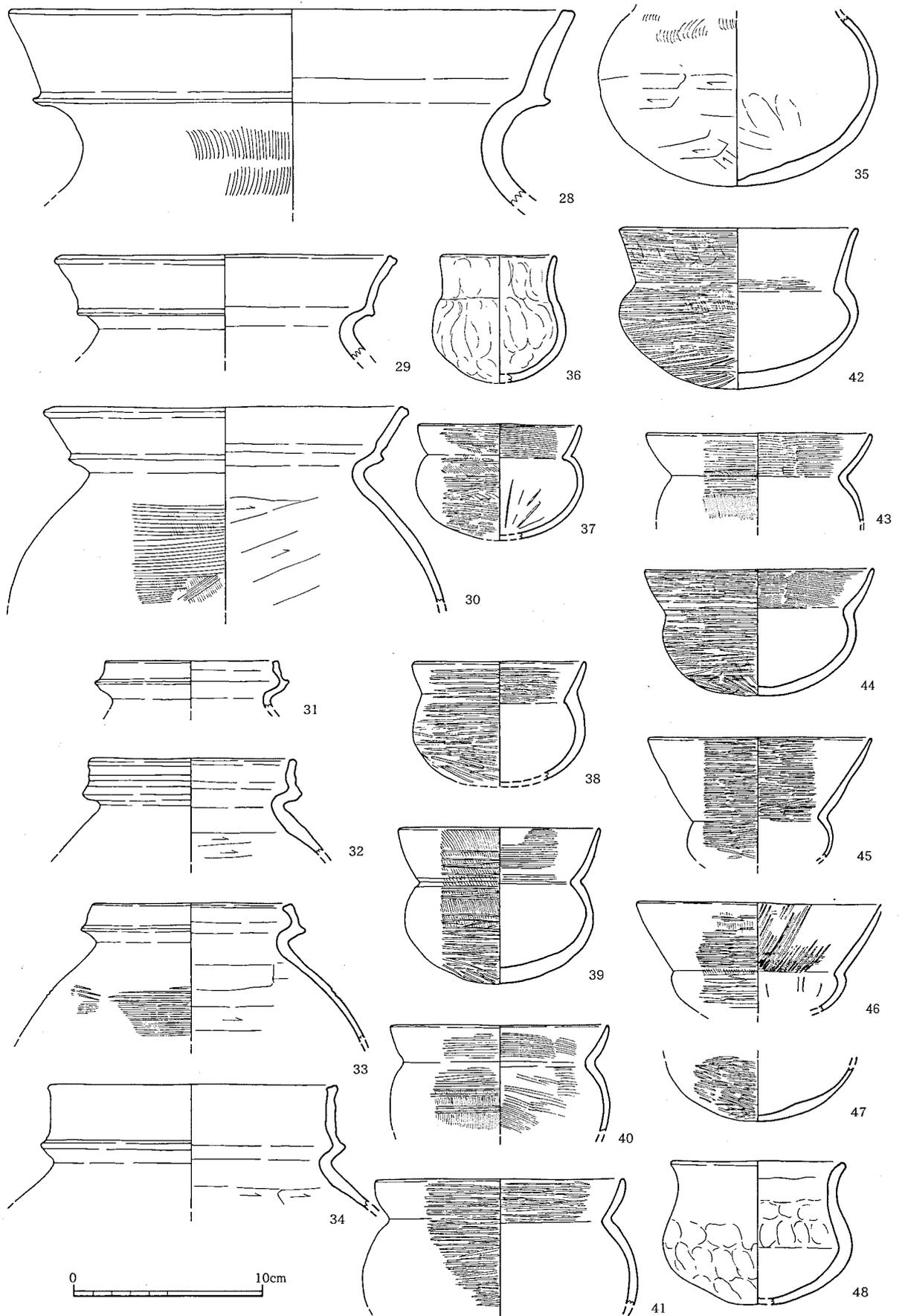
35は畿内系の中型直口壺の体部である。やや扁平な球形をなす。内面はナデ調整で、底部付近には指ナデの稜線が残る。外面の上半はハケ目後ナデ、下半は横ヘラケズリ後ナデ。胎土に砂粒を若干含み、あまり精良ではない。色調は肌灰色を呈す。II区南1攪乱出土。

36は指整形の小型丸底壺である。体部は球形をなし、口縁部は直立する。体部から口縁部へはなだらかに移行し稜線をもたない。内画面とも指ナデの稜線が明瞭に残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。I区中5攪乱出土。

37~47は精製の小型丸底壺である。37は頸部の屈曲が強く、口縁部はやや内湾しながら開く。体部内面はナデ調整で、整形時の工具痕も残る。口縁部内面は横ハケ目。外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ。胎土には砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。I区中1攪乱出土。38は37よりも頸部の屈曲が弱い。口縁部は直線的に短く伸びる。体部内面はナデ、それ以外は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。II区南3攪乱出土。39は扁球形の体部で頸部の屈曲は強い。口縁部はやや内湾し、38よりも長く伸びる。体部内面はナデ、口縁部内面は横ハケ目後に頸部付近のみ横ヘラミガキを行う。外面はハケ目後に横ヘラミガキを疎らに行い、底部は一定方向にヘラミガキを行う。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は黄茶色を呈す。II区北2・3出土。40は頸部の屈曲が弱く内面の稜はシャープさに欠ける。口縁部は短い。内面はハケ目を最終調整とし、ナデを行わない。外面はハケ目後に横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は黄肌色を呈す。II区北2校舎基礎攪乱出土。41は球形の体部を有し、口縁部は短くあまり開かない。端部は丸い。体部内面は横ナデ、それ以外は横ヘラミガキを緻密に行う。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。II区南3攪乱出土。

42は扁球形の体部で最大径がやや上方に位置する。肩部で短く内傾し、口縁部は直線的に開く。屈曲部内面の稜はシャープである。内面はナデ調整を行うが、屈曲部の上には横ハケ目が残る。外面は縦ハケ目後に横ヘラミガキを密に行う。口縁部下には指圧痕が残る。胎土は精良で色調は肌色を呈す。北2・3出土。43は頸部がやや締まり、口縁部は若干内湾しながら開く。体部内面はナデ、口縁部内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目後に横ナデを行う。II区南2攪乱出土。44は半球形の体部をなし、頸部はほとんど締まらない。口縁部は若干内湾しながら開き、屈曲部内面は稜をなす。体部内面はナデ、口縁部内面は横ハケ目、外面は緻密なヘラミガキを行う。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。II区南2攪乱出土。

45は体部が小さな扁球形をなし、頸部は比較的よく締まり内面にシャープな稜をもつ。口縁部は直線的に長く伸びて体部径を大きく上回り、端部は尖らせている。体部内面はナデ、それ以外は全面横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は茶色を呈す。II区北6攪乱出土。46も直線的に長く伸びる口縁部のものだが、45に比べて頸部の締まりが弱い。体部内面は横ナデを行い、整形時の工具痕が残る。口縁部内面は横ハケ目後に放射状のヘラミガキを行う。体部外面はヘラケズリの後に幅広の横ヘラミガキを行い、口縁部外面は縦ハケ目後に細い横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。I区南10校舎基礎攪乱出土。



第45图 搅乱等出土土器实测图③ (1/3)

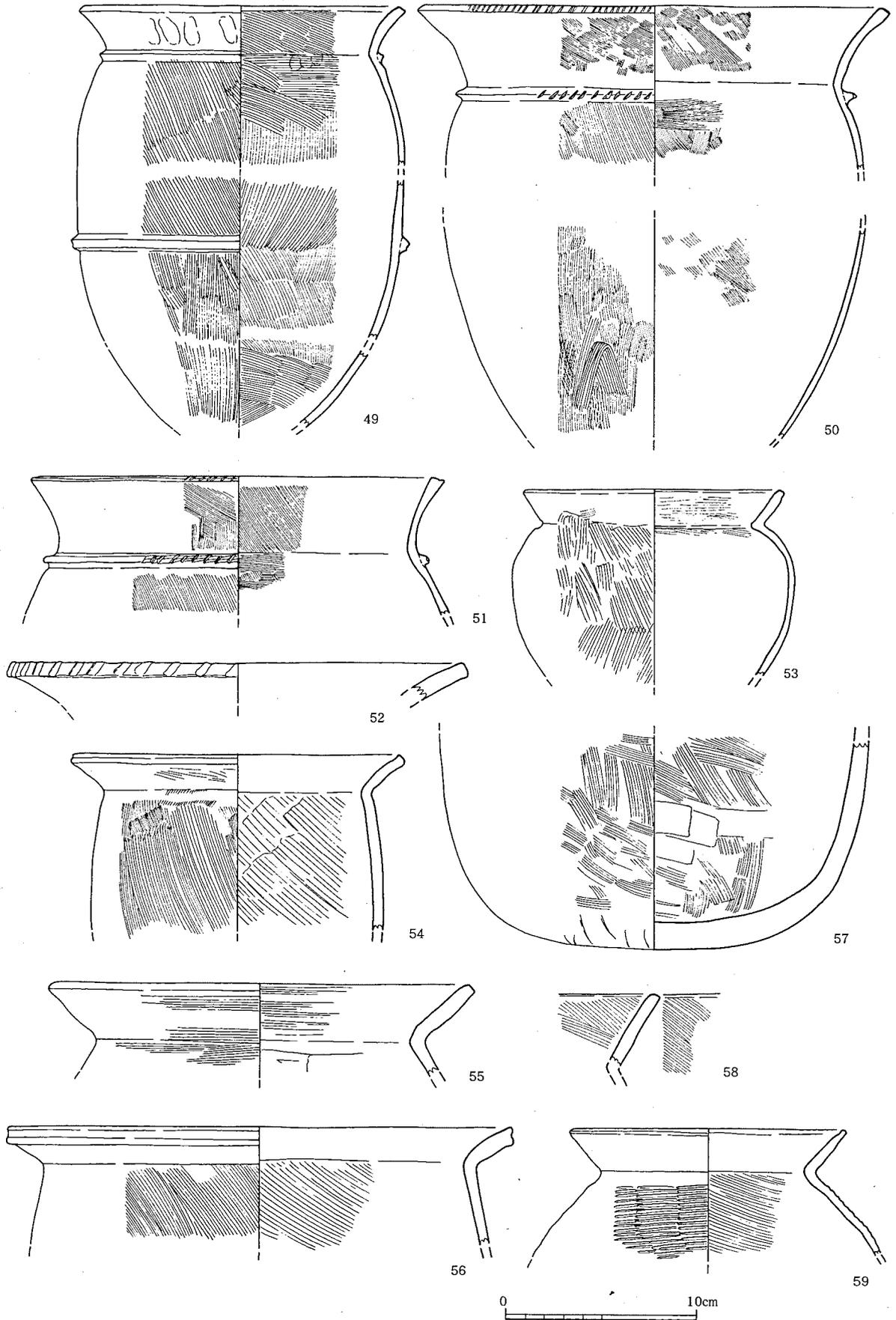
47は丸底壺の底部。内面はナデ、外面は細かいヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。Ⅱ区南2攪乱出土。

48は底部が小さな平底をなし、体部は扁球形で肩部は直線的に内傾している。頸部はあまり締まらず、口縁部は短く外反する。端部は不明瞭な面をなす。内面は下半と口縁部のみ横ナデを行い、肩部の内面は指整形時のままである。外面は指整形の痕跡をナデ消すが、下半は消えずに残っている。胎土に石英・長石を主とした粗砂粒を若干含み、かなり粗い感じを受ける。色調は肌茶色を呈す。Ⅰ区表土掘削時に出土。主として佐賀県を中心に出土する器形のものであるが、胎土、色調などは他と同様である。

49～52は在来系の大型甕である。49は体部が長胴で、ほぼ中位に最大径が位置する。口縁部は外反し端部は面をなす。最大径の位置に台形突帯を巡らせ、また屈曲部には三角突帯を巡らせる。内面はハケ目、外面の口縁部は横ナデ、体部はハケ目だが下半はハケ目後弱いナデを行う。Ⅰ区中4校舎基礎攪乱出土。50は口縁部がやや長く伸び、体部の径を上回る。体部の器壁に比べ口縁端部の器壁が厚くなる。頸部には刻目三角突帯を巡らせ、また口縁端部にも刻目を施す。調整は内外面ハケ目調整。胎土に石英・長石の粗砂を多く含み色調は黄茶色を呈す。Ⅰ区東4攪乱出土。51は口縁部が比較的長く伸びるがあまり開かない。頸部には刻目三角突帯を巡らせ、また口縁端部にも刻目を施す。調整は内外面ハケ目。胎土に粗砂を多く含み色調は肌茶色を呈す。Ⅰ区表土掘削時に出土。52は大きく口縁部が開くもの。口縁端部に幅の広い刻目を施す。風化が著しく調整は不明。胎土に粗砂を多く含み色調は肌茶色を呈す。Ⅰ区中5攪乱出土。

53は肩が丸く張った在来系の甕。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は短く直線的に開いて端部を丸くおさめる。体部内面はナデ、口縁部内面は横ハケ目、外面は横ナデ、体部外面は短い縦ハケ目。胎土に砂粒を若干含むが、他と比べて長石の割合が非常に少ない。色調は黄灰褐色を呈す。Ⅰ区東3基礎出土。54は肩の張りが全く見られない在来系の甕。口縁部は外反気味に開き、端部は横ナデを加えて不明瞭な沈線を巡らせている。口縁部は内外面横ナデを行うが、外面には先行するタタキが見られる。体部内面は板状工具の小口による擦過を行い、外面は縦ハケ目を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅰ区表土掘削時に出土。55は口縁部が直線的に開き、端部は面をなす。体部内面は横ヘラケズリを行い、それ以外は横ハケ目を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。Ⅰ区南2校舎基礎攪乱出土。56は肩部がやや内傾し、口縁部は短く大きく開く。端部は横ナデを加えて不明瞭な沈線を巡らせる。口縁部は内外面横ナデ、体部は内外面ハケ目。Ⅰ区中5校舎基礎出土。57は不明瞭な平底を呈す甕。体部はほとんど垂直に立ち上がっている。内面はヘラケズリの後にハケ目を行い、外面はハケ目後にナデを行う。胎土に粗砂を多く含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区出土。58は直線的に開く在来系甕口縁部片で、端部は丸くおさめられる。調整は内外面ともハケ目。Ⅰ区東4攪乱出土。

59・60は庄内系の甕。59は頸部の屈曲がそれほどシャープではない。口縁部は直線的に開き、端部の内側を横ナデによりわずかに窪ませている。口縁部は内外面とも横ナデ。体部内面は屈曲部付近までハケ目を行った後、弱いナデを行っている。外面はわずかに左側が下がったタタキを行う。胎土に砂粒をやや多く含み、色調は黄灰色を呈す。Ⅰ区東2校舎基礎攪乱出土。60は内面ヘラケズリ、外面タタキを行うもので、器壁は薄い。胎土に砂粒を若干含み色調は黄茶色を呈す。外面には煤が付着する。



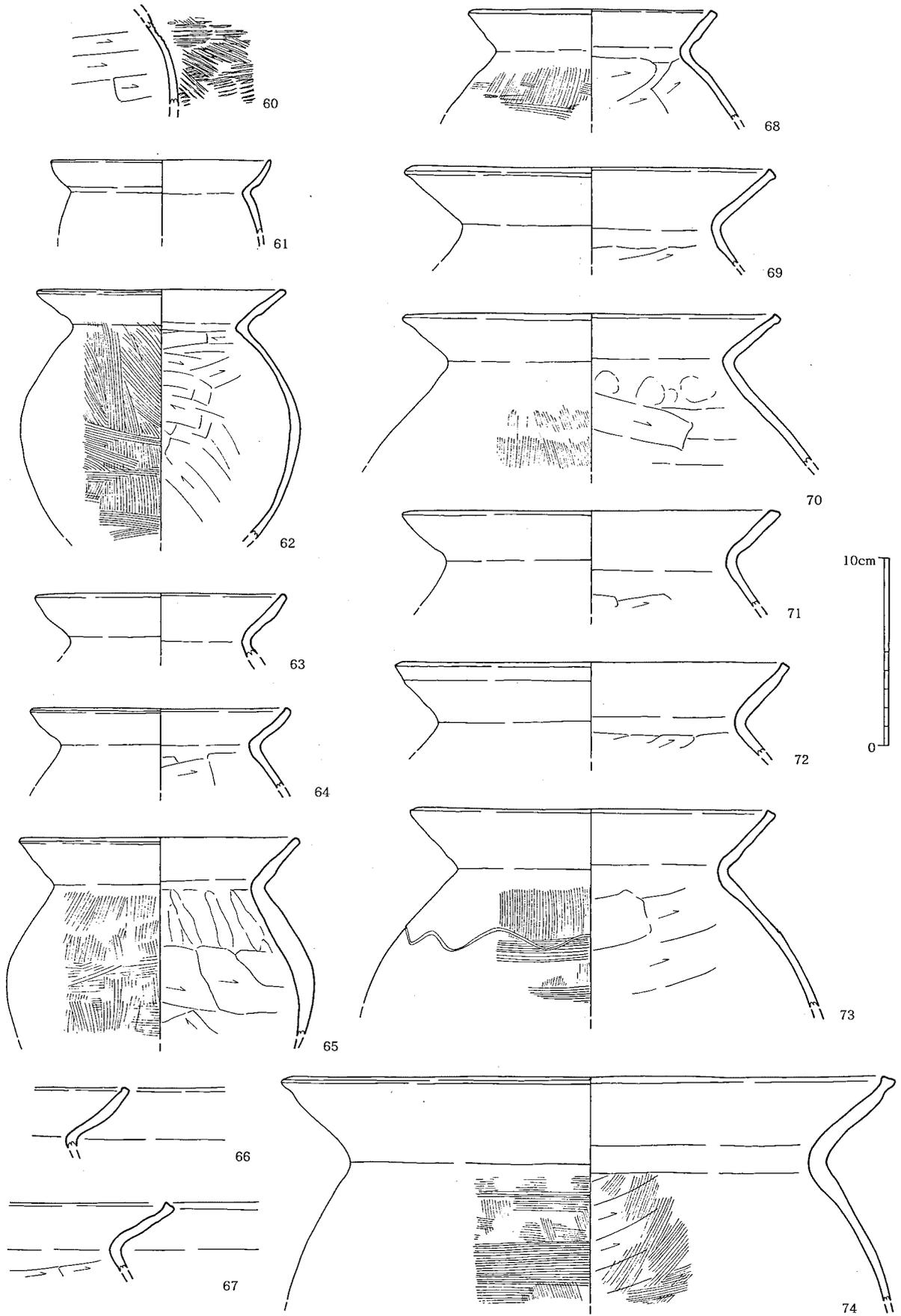
第46図 攪乱等出土土器実測図④ (49~51 : 1/6, 他は1/3)

61～115は布留系の甕である。61は頸部があまり締まらず、口縁部は内湾して立ち気味に開く。端部は丸くおさめる。調整は内外面ともナデ仕上げである。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。I区南3攪乱出土。62は頸部がよく締まり、口縁部は直線的に開いて端部は丸くおさめる。体部内面のヘラケズリは屈曲部近くまで行われ、屈曲部内面に稜を有す。外面は粗い縦ハケ目の後下半に横ハケ目を行い、肩部には横ナデを行っていない。色調は黄灰褐色を呈す。口縁部外面と肩部以下に煤が付着する。I区東4・5出土。63は口縁部が内湾しながら開き端部は丸くおさめる。調整は内外面とも横ナデ。色調は暗褐色を呈す。I区南9校舎基礎攪乱出土。64は内面のヘラケズリを屈曲部近くまで行う。口縁部はわずかに内湾し、端部は丸くおさめる。色調は黄灰色を呈す。口縁部外面にのみ煤が付着しており、肩部には付着していない。I区中6校舎基礎攪乱出土。

65は体部の器壁が非常に厚い。口縁部は直線的に開き端部は丸くおさめる。口縁部は内外面とも横ナデ。体部内面のヘラケズリは最大径の位置までしか行っておらず、肩部内面には縦方向の指ナデが見られる。外面はハケ目後肩部を横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。I区中6校舎基礎攪乱出土。66は口縁部が内湾しながら開き、端部は内側をわずかに窪ませている。調整は全面横ナデ。I区南9校舎基礎攪乱出土。67は直線的に開く口縁部である。内端部をシャープにつまみ上げている。色調は黄灰色を呈す。II区北1攪乱出土。

68は口縁部が直線的に開き、端部は面をなす。肩部には刺突文が一つのみ確認できるが、破片であるため他の部分は不明。肩部の横ナデは行っていない。色調は黄灰色を呈す。外面全面に煤が付着する。I区表土掘削時出土。69は頸部が強く締まり、口縁部は直線的に開きやや長く伸びる。端部は内側をシャープにつまみ上げる。体部の器壁は薄くなる。I区南3攪乱出土。70は肩部が直線的に傾斜し頸部はシャープに屈曲する。口縁部は直線的に開き内端部をシャープにつまみ出す。内面のヘラケズリは屈曲部からかなり下がった位置にまでしか行われず、また浅くしか削らない。屈曲部下には指圧痕が見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄茶灰色を呈す。II区北7校舎基礎攪乱出土。71は口縁端部が水平に近い面をなす。色調は黄灰褐色だが外面は強い二次加熱のため赤変する。I区中5校舎基礎攪乱出土。72は口縁部付け根は内湾せず、端部付近のみやや内湾する。端部はシャープな面をなす。II区南2攪乱出土。73は頸部が比較的良好に締まり、口縁部は直線的に開く。端部は内端をわずかにつまみ出す。体部内面は屈曲部近くまでヘラケズリをおこなっている。外面には一条の波状文を巡らせる。胎土に砂粒を若干含み色調は茶色を呈しており他とやや異なる。I区南1校舎基礎攪乱出土。74はやや大型の甕。頸部は締まりが弱く、口縁部はわずかに内湾しながら開く。端部は外側に若干肥厚し、また端部は外傾する面をなす。体部内面は屈曲部近くまでヘラケズリを行い、その後ハケ目を行っている。外面は縦ハケ目後横ハケ目を行い、頸部付近に横ナデを行う。口縁部は内外面とも横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。II区南1校舎基礎攪乱出土。

75は頸部が締まり、口縁部はやや大きく開き、端部を内側に丸く肥厚させる。色調は肌灰色を呈し他とやや異なる。近世の土坑である2号土坑出土。76は扁球形の体部を有し、口縁部は内湾しながら短く開く。端部は面をなし、内端部下をわずかに窪ませる。内面のヘラケズリは屈曲部近くまで行われる。II区南3攪乱出土。77は球形の体部を有し、口縁部はあまり内湾せずに開く。端部は面をなす。内面のヘラケズリは他のものと比べてかなり下の方までしか行っておらず、頸部の内面には指ナデが見られる。外面は縦ハケ目後に肩部に横ハケ目を行うが、これに先行するタタキ目も



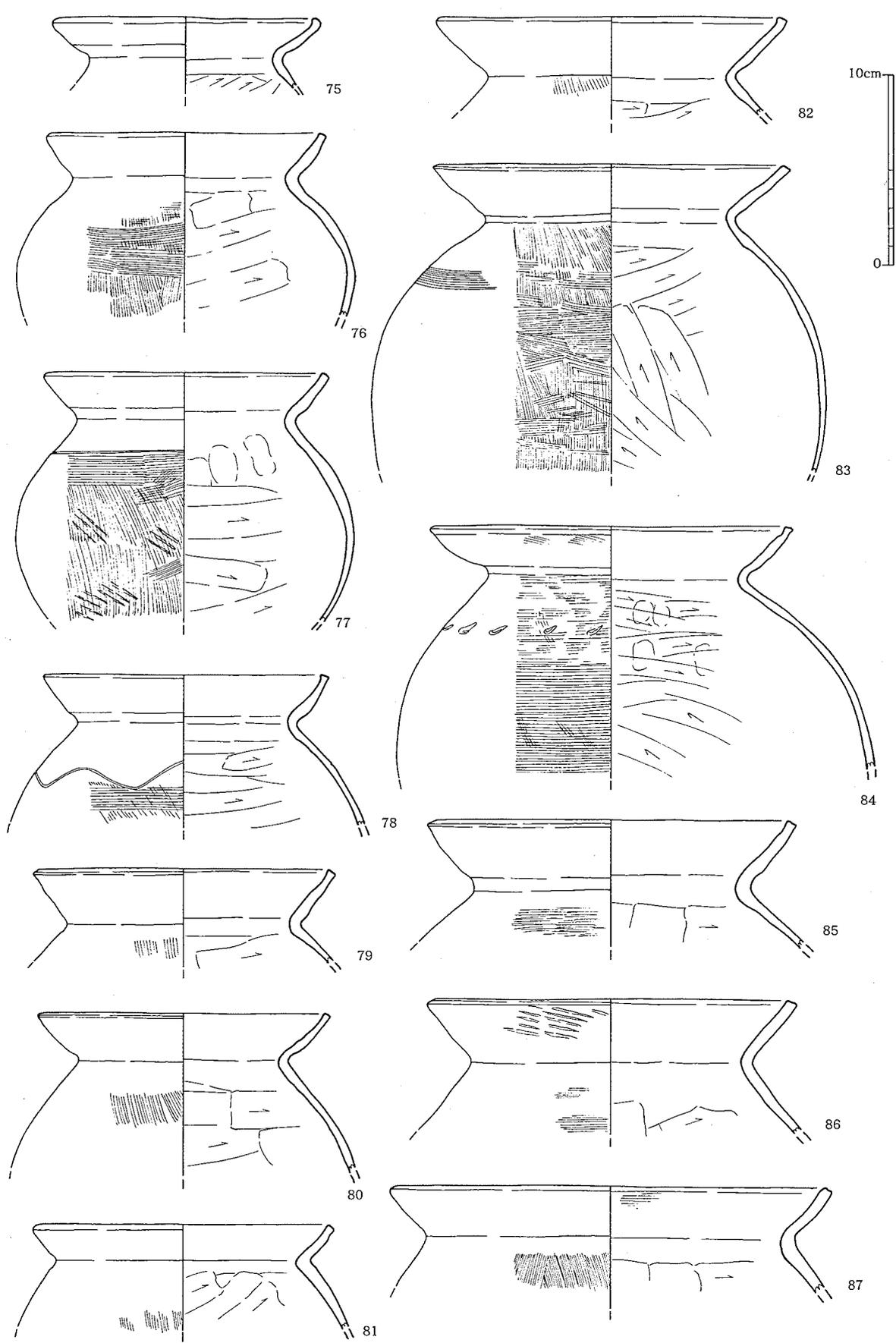
第47图 搅乱等出土土器实测图⑤ (1/3)

残る。また肩部には一条の沈線を巡らせる。外面の肩部以下に煤が付着する。Ⅱ区西8攪乱出土。78は器壁が薄い。肩部は丸味を有し口縁部は内湾しながら立ち気味に開く。端部は面をなし、また内端をシャープにつまみ出す。肩部には一条の波状文を巡らせる。色調は赤茶色を呈し他とやや異なる。Ⅱ区攪乱出土。79は口縁部がほとんど内湾せず直線的に開き、端部は面をなす。内面のヘラケズリは屈曲部近くまで行われる。外面は口縁部から肩部にかけて横ナデを行うが、肩部には先行する縦ハケ目が見られる。Ⅱ区南1攪乱出土。80は肩があまり張らず頸部はよく締まる。口縁部は内湾しながら開き、端部はやや丸味を帯びた面をなす。外面肩部の横ナデはかなり下方にまで及ぶ。Ⅰ区東7攪乱出土。81は頸部の屈曲が強く、口縁部は短い。端部は面をなす。色調は灰褐色を呈す。近世の土坑である9号土坑出土。

82は頸部の屈曲が強く、口縁部は直線的に開く。端部は内側を丸く肥厚させる。Ⅰ区中6出土。83は最大径がやや高い位置にあり、倒卵形の体部になると思われる。頸部はよく締まり、口縁部はあまり内湾せずに開く。端部は外傾する面をなす。肩部には櫛描文を巡らせるが一周していない。Ⅱ区南1攪乱出土。84は体部の器壁が比較的薄い。頸部はよく締まり、口縁部は内湾しながら開く。端部は外傾する面をなし、また外端部をわずかにつまみ出す。内面のヘラケズリは頸部近くまで行われ、外面の横ハケ目はかなり下方にまで及んでいる。また肩部には列点文を巡らせる。Ⅱ区北6攪乱出土。85は口縁部が立ち気味に開き端部は面をなす。Ⅱ区南3攪乱出土。86は頸部が直線的に内傾し、口縁部もまた直線的に開く。端部は面をなし、内端をわずかにつまみ出す。口縁部は内外面とも横ナデを行うが、外面には先行するタタキが見られる。色調は茶灰色を呈す。在来系甕の色彩が濃い。Ⅰ区東6攪乱出土。87は口縁部が短く開き、端部は面をなすがシャープさに欠ける。口縁部は内外面とも横ナデを行が、内面には先行する横ハケ目が見られる。体部の外面には縦ハケ目を行い、その後に横ナデを行っていない。色調は黄灰色を呈す。Ⅱ区南3攪乱出土。

88は肩部の丸味が少なく、口縁部は直線的に開く。端部はシャープな面をなし、また内端を小さくつまみ出す。外面はハケ目に先行するタタキが明瞭に残る。近世土坑の2号土坑出土。89も肩部に丸味を持たず直線的に傾斜する。口縁部の内湾は弱く、端部はほぼ水平な面をなす。Ⅰ区中6出土。90は口縁部の開きが弱く、端部は面をなし、また内端をわずかにつまみ出す。Ⅰ区南2校舎基礎攪乱出土。91は口縁部の器壁が薄い。やや内湾しながら開き、端部は内端が丸く肥厚する。Ⅱ区南2攪乱出土。92は口縁部が内湾しながら立ち気味に開き、端部は水平面をなした外側にわずかに肥厚する。口縁部内面には横ナデに先行する横ハケ目が見られる。Ⅰ区中6出土。93は頸部が比較的よく締まる。口縁部はやや内湾しながら開き、端部はシャープな面をなす。体部内面のヘラケズリは屈曲部近くまで及ぶ。外面の全面に煤が付着する。Ⅱ区南1攪乱出土。94はあまり肩が張らず、長胴気味の器形となる。口縁部は内湾しながら開き、端部は内側に小さくつまみ出す。肩部には櫛描文を巡らせる。Ⅰ区南2校舎基礎攪乱出土。

95は頸部がよく締まり、口縁部は内湾しながら大きく開く。端部は内側にやや肥厚し、また外側がややつまみ出される。内面のヘラケズリは屈曲部近くまで及ぶ。外面は全面横ナデ。外面の口縁部上方のみ煤が付着する。Ⅱ区南2攪乱出土。96は口縁部が立ち気味に開く。端部は面をなし、外側にわずかにつまみ出される。体部内面のヘラケズリは屈曲部近くまで及ぶ。Ⅱ区北6攪乱出土。97は頸部が比較的よく締まり、口縁部は丸くおさめる。肩部には一条の波状文を巡らせる。色調は黄灰白色を呈し異質である。Ⅱ区南2校舎基礎攪乱出土。98は器壁が厚い。口縁部は短いながら

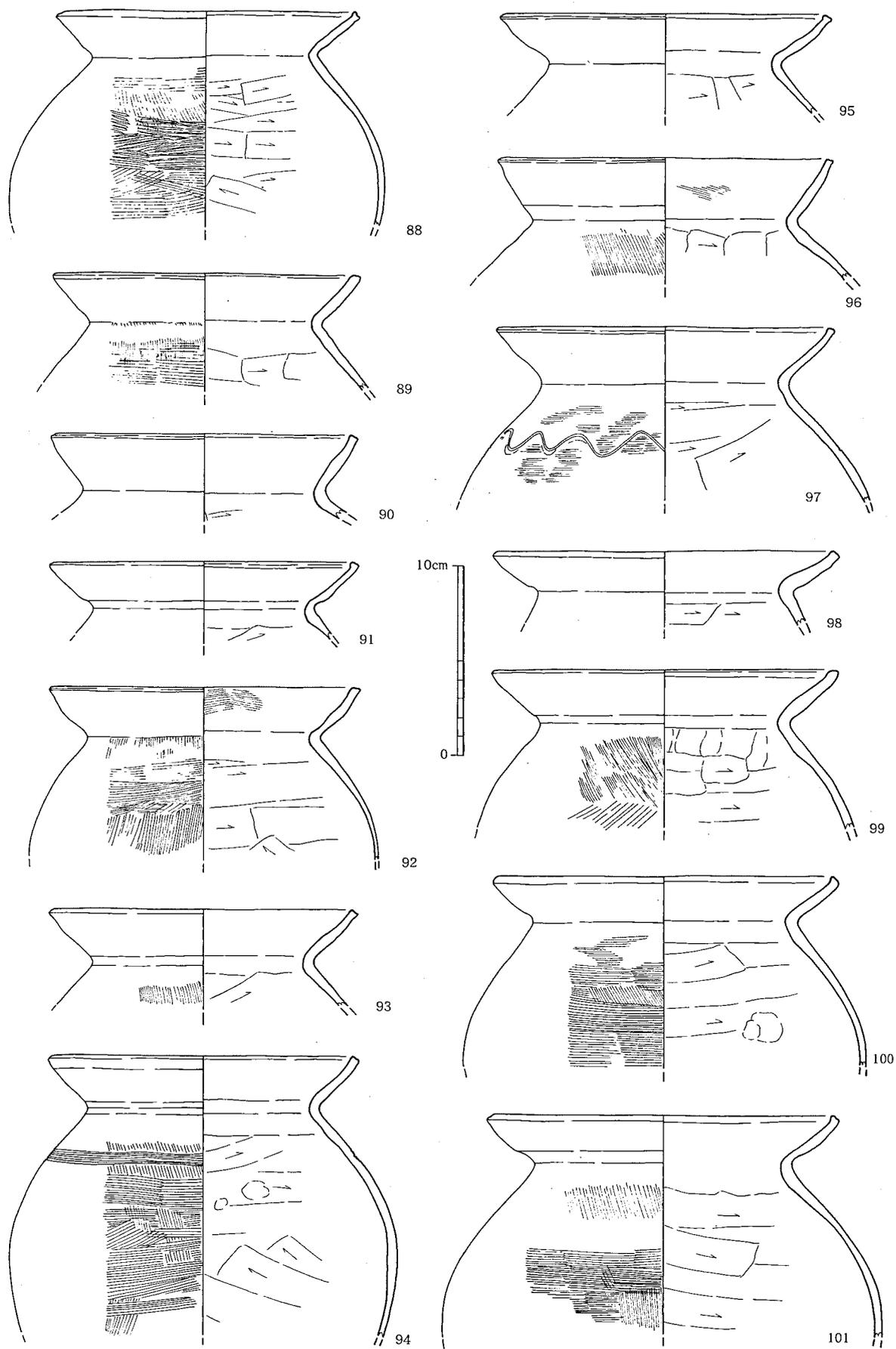


第48图 攪乱等出土土器実測図⑥ (1/3)

も大きく開く。端部は面をなす。内面のヘラケズリは屈曲部近くまで行う。外面は横ナデ。胎土に雲母を特に多く含み、色調は暗灰肌色を呈す。近世の土坑である3号土坑出土。99は体部に比べて口縁部の径が大きい。口縁部は直線的に開き、端部付近のみやや内湾する。端部の作りが特徴的で、水平な面をなし、また内側にやや肥厚する。外面には異なる二種類の縦ハケ目を使用し、横ハケ目は行っていない。口縁部上半と肩部以下に煤が付着する。Ⅱ区南2出土。100は口縁部がやや内湾しながら短く大きく開く。端部は内側をつまみ出す。胎土に砂粒をやや多く含み、色調は灰褐色を呈す。口縁部と肩部以下に煤が付着する。Ⅱ区北6攪乱出土。101は頸部が強く締まり、口縁部は内湾しながら開き内端部をつまみ出す。外面のハケ目には二種類の原体を使用する。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区南3攪乱出土。

102は肩部がやや丸味を帯び、口縁部は内湾しながら開き端部は外側にわずかに肥厚する。体部内面のヘラケズリは屈曲部近くまで及ぶ。口縁部は内外面とも横ナデを行うが、内面には先行する横ハケ目が見られる。Ⅰ区中6出土。103は口縁部が内湾しながら立ち気味に開き、端部は内側に丸く肥厚する。外面の肩部には櫛描文を巡らせる。色調は肌色に近く他とやや異なる。Ⅱ区南2校舎基礎攪乱出土。104は肩部の張りが弱い。口縁部は体部と比べて器壁が薄く、特に端部付近が極端に薄くなる。口縁部は内湾しながら大きく開き端部は外側にわずかに肥厚する。肩部には一条の沈線を巡らせる。Ⅰ区表土掘削時出土。105は肩部が直線的に傾斜し口縁部はあまり内湾せずに開く。端部は丸味を帯び、内側にやや肥厚する。内面の屈曲部下には指ナデが残る。外面には一条の沈線を巡らせる。Ⅱ区北6校舎基礎攪乱出土。106は肩部がやや丸味を帯びる。口縁部はわずかに内湾し、端部は面をなす。器表の風化が著しく調整は不明。Ⅰ区中5攪乱出土。107は肩部が丸味を帯び、頸部は強く屈曲する。口縁部の内湾は弱く、端部は内側に肥厚する。内面のヘラケズリは一般的なものよりも下がった位置までしか行われず、屈曲部下には指圧痕が残る。肩部には櫛描文を巡らせる。Ⅰ区西8攪乱出土。108は口縁部がほとんど内湾せず直線的に開き、端部は外端がシャープな稜をなし、また内側がやや肥厚する。外面肩部にはハケ目後に横ナデを行わない。外面の全面に煤が付着する。色調は肌茶色を呈す。

109は口縁部に比べて体部の器壁が薄い。口縁部はほとんど内湾せず直線的に開き、内端部を上方へとつまみ出す。Ⅱ区南2攪乱出土。110は肩部が直線的に傾斜し、口縁部はゆるやかに内湾しながら立ち気味に短く開く。端部は丸味を帯びる。Ⅱ区南2攪乱出土。111は頸部が比較的よく締まり、口縁部は内湾しながら立ち気味に開く。端部は内外に若干肥厚する。肩部には一条の波状文を巡らせる。口縁部と肩部以下に煤が付着する。Ⅱ区南2校舎基礎攪乱出土。112は肩部が直線的に傾斜し、頸部はよく締まる。口縁部はやや内湾しながら開き、端部は内外にわずかにつまみ出す。外面肩部の横ナデは広い範囲に及ぶ。色調は黄灰色を呈す。Ⅱ区南1攪乱出土。113は肩があまり張らず長胴になると思われ、頸部は比較的よく締まる。口縁部はほとんど内湾せず、端部は若干肥厚する。外面肩部の横ナデは広い範囲に及ぶ。Ⅱ区南2攪乱出土。114は肩が張らない器形で体部に対して口縁部の径が大きい。口縁部は内湾しながら開き、内端部をシャープにつまみ出す。外面は粗い縦ハケ目のみ観察され、横ハケ目は見られない。またその後の横ナデの範囲も非常に狭い。その肩部には一条の緩やかな波状文を巡らせる。色調は黄灰褐色を呈す。Ⅰ区北1攪乱出土。115は球形の体部をなし、頸部は比較的よく締まる。口縁部は内湾しながら開き端部は外側にやや肥厚する。口縁部と体部下半にのみ煤が付着する。Ⅱ区南2出土。



第49图 攪乱等出土土器実測図⑦ (1/3)

116は吉備系甕の口縁部片である。口縁部は直立し、端部は丸くおさめる。口縁部外面には擬凹線が巡らされる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。I区東6攪乱出土。

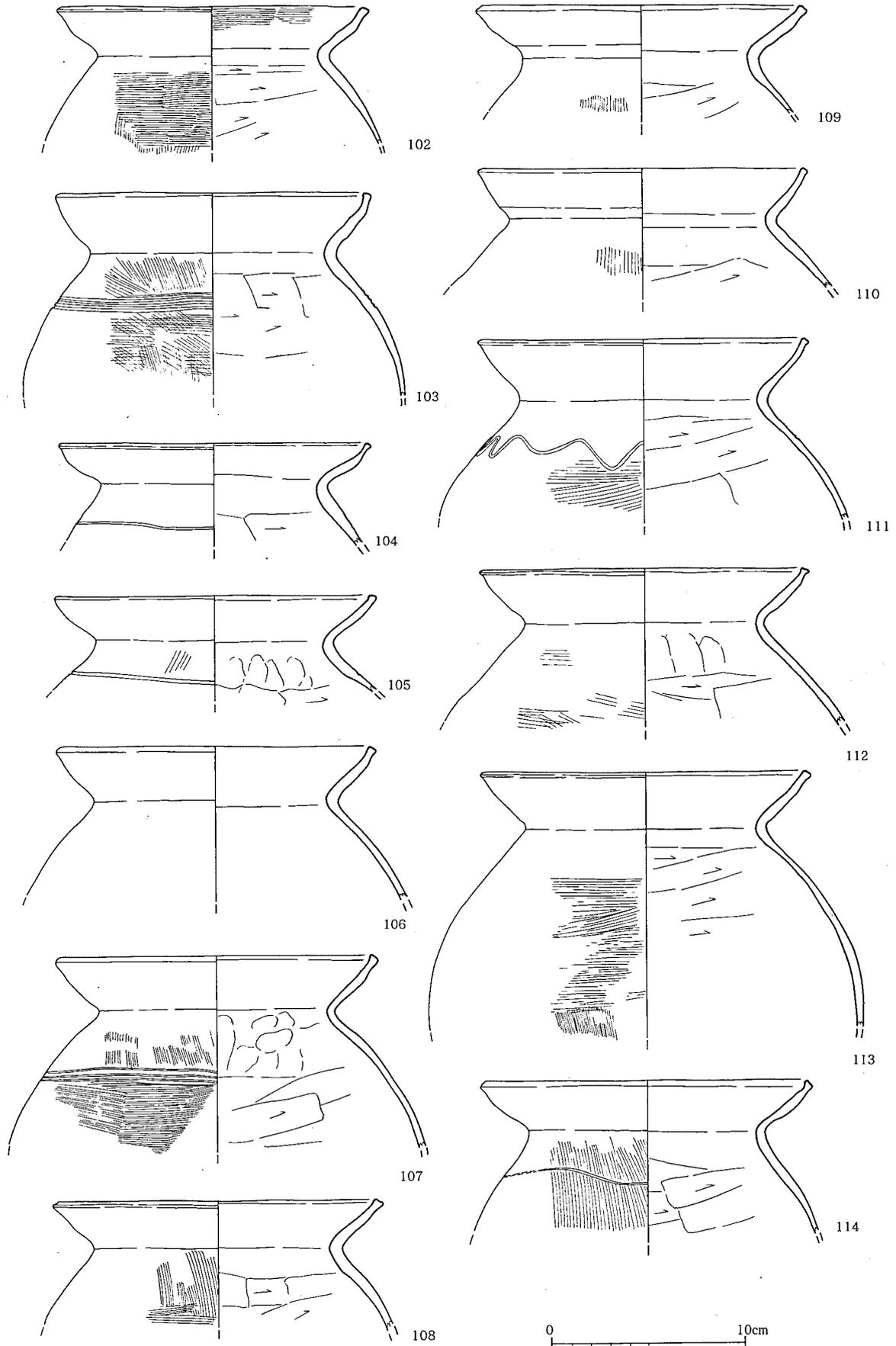
117~127は高坏である。117はやや浅い坏部で、上半が外反しながら大きく開く。内面は放射状のヘラミガキを密に行い、外面は横ヘラミガキを緻密に行う。胎土に砂粒を若干含み、色調は黄灰褐色を呈す。II区南3攪乱出土。

118~127は脚部。118は脚部の付け根から外反して大きく開き、明確な柱部をもたないもの。穿孔は4ヶ所に行う。内面はナデを行い、中位にのみ先行するハケ目が見られる。外面は穿孔のある高さを境にして分割し、やや幅の広い縦ヘラミガキを密に行う。坏部内底面にもヘラミガキが見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。II区南1攪乱出土。119は長くスリムな柱部のもの、在来系高坏であろう。柱部内面はナデを行い裾部内面はハケ目を行う。外面は縦ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。I区南基礎出土。120はスリムで119よりも短い柱部のもの。破片であるため穿孔は1ヶ所しか確認できない。穿孔は屈曲部に位置し径の小さなものである。内面はナデ、外面は短い縦ヘラミガキを密に行う。胎土に砂粒を若干含みあまり良質ではない。色調は茶色を呈す。II区南1攪乱出土。

121は柱部の径が太い。裾部は外反して大きく開き端部は面をなす。穿孔は屈曲部のやや上に位置し、破片であるため1ヶ所しか残らない。柱部内面は縦指ナデ、外面は縦ハケ目後に細かい横ヘラミガキ、裾部は内外面とも横ハケ目。坏内面には放射状のヘラミガキを行う。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。II区南3攪乱出土。122は中膨らみの柱部となり、裾部は大きく開き端部は面をなす。破片なので穿孔は1ヶ所しか残っていない。柱部内面はナデ、裾部内面は横ハケ目、外面はハケ目後横ヘラミガキ。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は肌茶色を呈す。I区中6出土。

123は柱部が中膨らみとならず他と比べてスリムな形状をなす。裾部は大きく開き、端部は小さな面をなす。穿孔は屈曲部のやや上に位置し2ヶ所に行う。柱部内面はナデ、裾部内面は横ハケ目、外面はやや風化が進み、縦ハケ目後の横ヘラミガキがほとんど残っていない。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。I区表土掘削時出土。124は中膨らみの柱部となる。裾部は外反しながら短く開き端部は丸くおさめる。屈曲部に2ヶ所穿孔を行う。柱部内面はナデ、外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ、裾部は内外面とも横ハケ目。胎土に砂粒をあまり含まない比較的精良な粘土を使用し、色調は橙肌色を呈す。II区東7校舎基礎攪乱出土。125は中膨らみの柱部となり、裾部は大きく開き端部は面をなす。屈曲部内面には稜をもつ。穿孔は屈曲部のやや上に行われるが、破片であるため1ヶ所しか残っていない。柱部内面はナデ、裾部内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目後に横ヘラミガキを疎らに行う。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用し、色調は黄灰褐色を呈す。II区南3攪乱出土。126は柱部が中膨らみとならないようである。裾部は大きく開き、端部は尖る。穿孔は屈曲部に行われ、2方向に行っている。穿孔は半乾燥時に外側から行われており内面には剥離痕が残る。内面はナデ、外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。II区南1攪乱出土。127は柱部付け根の径が小さく、柱部は直線的に開いている。裾部は明瞭に屈曲して開く。穿孔は小さな円孔で屈曲部のやや下に3方向行う。内頂部には軸受孔を有す。内面は指ナデ調整、外面は下半のみ横ヘラミガキが見られる。胎土は精良で色調は黄褐色を呈す。I区中1校舎基礎攪乱出土。

128は在来系の大型鉢である。体部上半は直立し、頸部がしまらない。口縁部は直線的に短く開



第50图 搅乱等出土土器实测图⑧ (1/3)

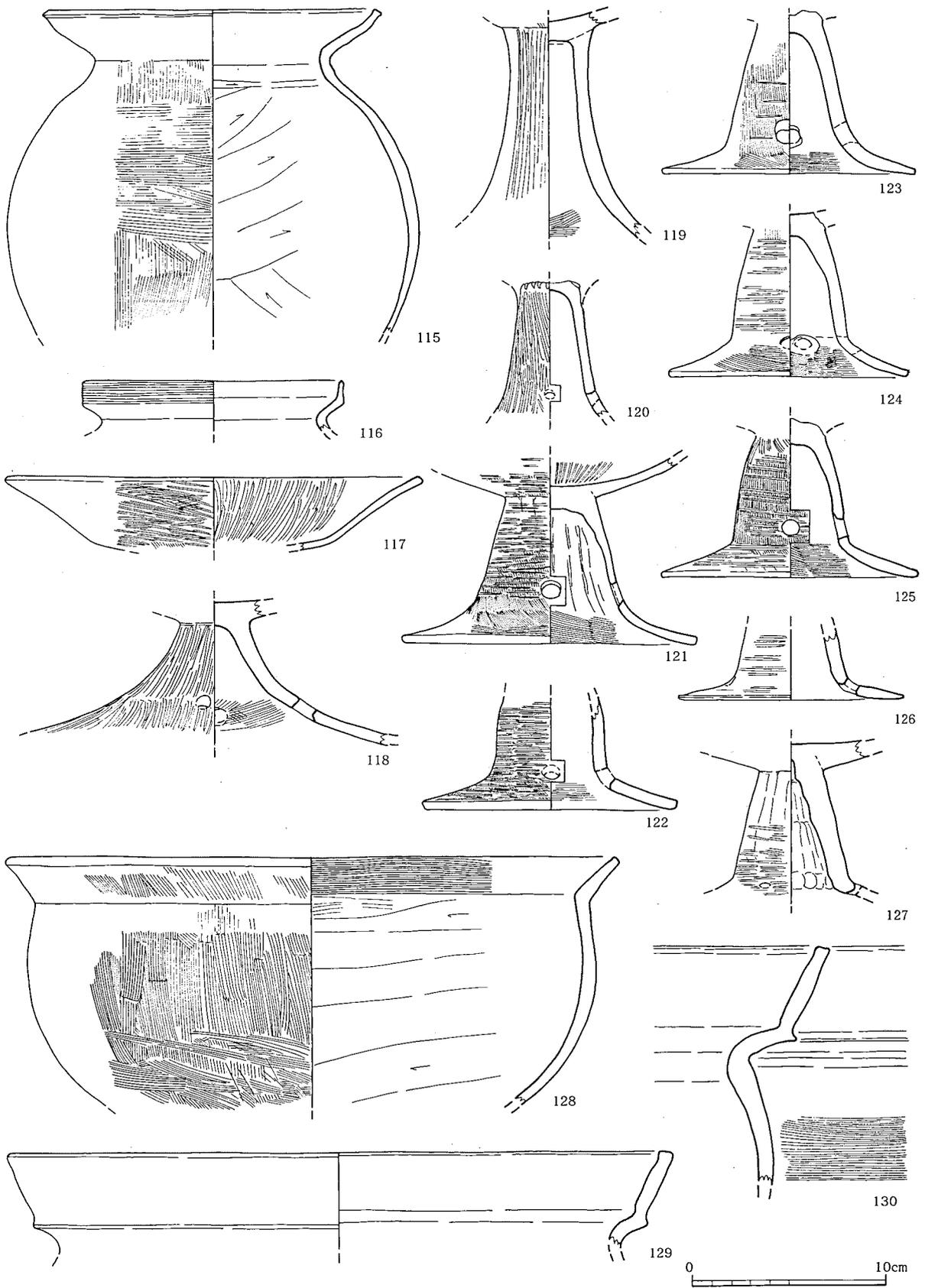
き、端部は面をなす。体部内面は横ヘラケズリ、口縁部内面は横ハケ目、体部外面は縦ハケ目後に下方のみ横ハケ目、口縁部は縦ハケ目後横ナデ。胎土に粗砂をやや多く含み色調は橙茶色を呈す。I区表土掘削時出土。

129～133は山陰系の二重口縁大型鉢である。129はやや器壁が薄く、口径の広い壺または甕となるかもしれない。屈曲部外面は三角形につまみ出し、口縁部は直線的に開く。端部は水平面をなす。胎土に砂粒を多く含み、色調は表面黄茶色、断面黒色を呈す。II区南3攪乱出土。130は頸部がやや内傾し、一次口縁部は強く短く外反する。二次口縁部は直線的に開き、器壁は中央付近がやや中膨らみとなる。端部は外傾する面をなす。屈曲部の突帯はシャープである。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。II区西4・5攪乱出土。131は体部上半から屈曲部付近の器壁が薄い。口縁部はあまり開かず、端部はわずかに外傾する面をなす。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。II区南1攪乱出土。132は口縁部が直立し、端部が水平な面をなす。I区西7攪乱出土。133も131同様口縁部が直立して端部が水平面をなす。屈曲部外面の稜は132よりシャープである。内面はヘラケズリの後部分的にハケ目を行っている。I区西7攪乱出土。

134・135は小型の手握ね鉢である。134は底部がやや尖底気味で深い体部をなし、口縁部は外側を向く。内外面とも指圧痕が明瞭に残る。II区北2清掃時出土。135は134よりもやや浅い体部となる。口縁部は上方を向く。内外面とも指圧痕が明瞭に見られる。II区北6校舎基礎攪乱出土。136もやはり指整形の鉢。下半に比べて口縁部の器壁が極端に厚い。外面には部分的にハケ目が見られる。胎土に粗砂を多く含む。II区西8攪乱出土。

137～143は直口縁の小型粗製鉢。137は半球形の深い体部のもので口縁端部は面をなす。調整は内外面ともナデを行い、外底部には指圧痕が多く見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は暗灰褐色を呈す。II区南3攪乱出土。138は137と比べてやや浅く、底部は平底に近い。口縁部は底部より器壁が薄くなり、端部は上方に立ち上がり小さな面をなす。内面は上半横ナデ、下半ヘラナデ。外面は上半ナデだが指圧痕が明瞭に残り、下半はヘラナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。II区北2清掃時出土。139は尖底気味の底部をなし、体部は丸味を帯びて開き、口縁部は上方を向いて端部を丸くおさめる。内面はナデ、外面はハケ目後に口縁部のみ横ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。I区中6攪乱出土。140は体部の丸味が少なく、底部から直線的に開いて口縁部へと至る。口縁部は水平に近い面をなす。器壁は厚い。内面はナデ調整を行い先行する横ハケ目が見られる。外面もやはりナデ調整だが先行する縦ハケ目が見られる。胎土に砂粒を含まず、特に肌理が細かい粘土を使用しており、他と比べると異質である。色調は暗肌茶色を呈す。II区南1攪乱出土。141は体部が丸味を有しながら開き、口縁部は丸くおさめる。内面はナデ、外面はハケ目後口縁部のみ横ナデ。口縁部から少し下がった位置に小さな円孔を焼成前に穿孔する。胎土に砂粒を若干含み色調は橙茶色を呈す。II区東4攪乱出土。142は140同様、体部が直線的に開く鉢である。口縁端部は面をなす。内面は風化が進むものの口縁部にはハケ目が見られ、また内底面には指圧痕が残る。外面はハケ目後ナデを行い、底部はヘラケズリを行っている。胎土に砂粒を若干含み色調は肌茶色を呈す。I区東7攪乱出土。143は口縁部が直線的に開き、口縁端部の下に強い横ナデを加えて窪ませる。調整は内外面ともナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。I区中3校舎基礎攪乱出土。

144～147は直口縁の小型精製鉢。144～146は浅い体部のものである。144は内面に放射状のへ



第51图 搅乱等出土土器实测图⑨ (1/3)

ラミガキを行う。外面の口縁部には横ハケ目が見られるが下方は風化が著しく調整不明。胎土は精良で色調は茶灰色を呈す。Ⅱ区南3攪乱出土。145は内外面に細かい横ヘラミガキを密に行い、底部には一定方向のヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。Ⅰ区東7攪乱出土。146も内外面横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌色を呈す。Ⅰ区中6攪乱出土。

147は144～146に比べやや大型のもの。体部も若干深くなる。調整は内外面ともヘラミガキを密に行う。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用し色調は橙茶色を呈す。Ⅱ区北1校舎基礎攪乱出土。

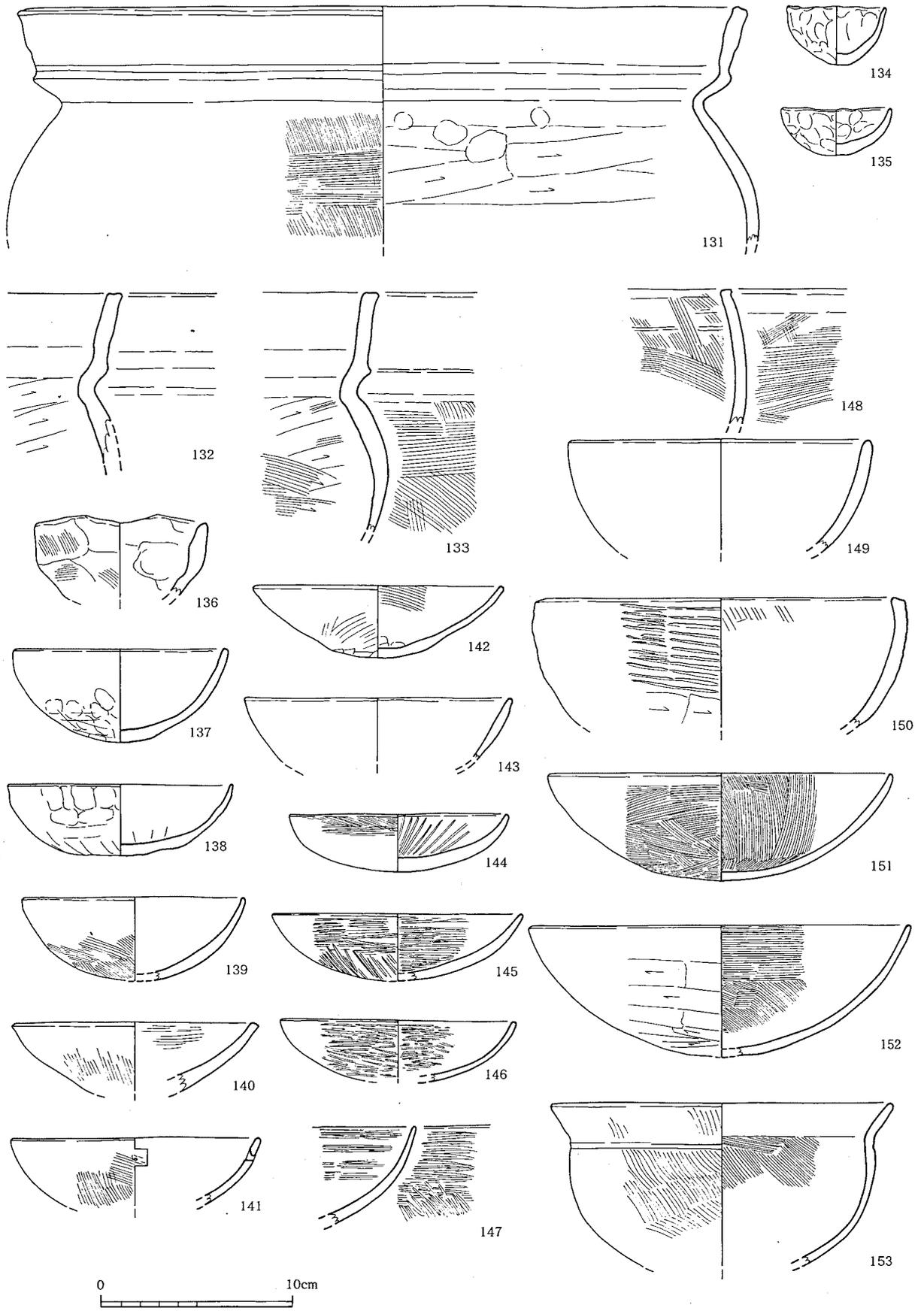
148～152は中型の直口縁鉢である。148は口縁部付近が内傾し、端部は水平面をなす。調整は内外面ともハケ目を行った後に口縁部のみ横ナデを行っている。胎土に砂粒をやや多く含み色調は黄灰色を呈す。Ⅰ区中5校舎基礎攪乱出土。149は口縁部が直立し、端部は丸くおさめる。内面は横ナデ、外面は風化が著しく調整不明。胎土に砂粒をやや多く含み色調は肌茶色を呈す。Ⅰ区東4攪乱出土。150は口縁部が内傾し、端部はわずかに外傾する面をなす。器壁は厚い。内面は粗いハケ目後ナデ、外面は上半がタタキ、下半が横ヘラケズリ。胎土に砂粒を多く含み色調は黄灰色を呈す。Ⅰ区南8校舎基礎攪乱出土。

151・152は浅い体部のもの。151は口縁端部を丸くおさめる。内面は縦ハケ目、外面は横ハケ目調整を行う。胎土に砂粒を若干含み色調は赤茶色を呈す。Ⅱ区北6攪乱出土。152は尖底気味の底部をなし、口縁端部は小さな面をなす。内面はハケ目、外面は横ヘラケズリを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄茶色を呈す。Ⅰ区西8攪乱出土。

153・154は外反口縁の在来系鉢。153の体部は深く、上半は直立する。口縁部は弱く開き端部は丸くおさめる。外面の屈曲部下には一条の浅い凹線を巡らせている。口縁部は内外面とも横ナデで、外面には先行するハケ目が残る。体部内面は上半のみハケ目を行う。下半はナデ。体部外面はハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は淡肌色を呈す。Ⅱ区南3攪乱出土。154も体部の上半が直立し、頸部が締まらない。口縁部は短く開き、端部に強い横ナデを加えて上方に尖らせる。口縁部は内外面とも横ナデ。体部内面は上半が横ヘラケズリ、下半がハケ目。体部外面はハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区西7攪乱出土。

155～163は外反口縁の小型鉢。155は体部上方が直立し、口縁部はわずかに内湾しながら開く。端部は丸くおさめる。内面は口縁部から屈曲部下まで横ヘラミガキを行い、口縁部には先行する横ハケ目が見られる。外面の口縁部は緻密な横ヘラミガキを行い、体部は疎らに横ヘラミガキを行うため先行する縦ハケ目が顕著に見られる。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。Ⅰ区北1出土。156は深みのある体部のもので壺に近い。体部上方はやや内傾し、口縁部は短く開く。口縁端部はわずかに外反し薄く尖る。内面は横ハケ目後ナデ、外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み精製品にしては粗さが目立つ。色調は橙茶色を呈す。Ⅰ区南1校舎基礎攪乱出土。

157はやや小型のもの。体部は半球形を呈し、上方は直立する。口縁部は内湾して短く開く。体部内面はナデ、口縁部内面は横ハケ目で、屈曲部付近のみ横ヘラミガキを行う。外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ。158は扁球形の浅い体部をなし、上方はやや内傾する。口縁部は内湾しながらやや長く伸びる。調整は内外面とも細かい横ヘラミガキを密に行っている。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。Ⅱ区南2攪乱出土。159は浅い体部のものである。口縁部は短



第52图 攪乱等出土土器实测图⑩ (1/3)

く大きく開き、端部は不明瞭な面をなす。屈曲部内面の稜はシャープである。内面は口縁部から屈曲部下まで横ヘラミガキを行い、下半はナデを行う。外面はナデを行い、底部のみヘラケズリを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区南3攪乱出土。

160はやや浅い体部をなし、口縁部はわずかに内湾しながら開く。器壁は薄い。内面は口縁部から屈曲部下まで横ヘラミガキ、下半はナデ。外面はハケ日後横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。Ⅱ区南3攪乱出土。161は浅い体部をなし、口縁部は大きく開き端部は器壁が薄くなる。内外面とも細かい横ヘラミガキを行い、外面には先行するハケ目が見られる。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。Ⅰ区南6校舎基礎攪乱出土。162は体部上方がやや内傾し、口縁部は直線的に開く。端部は器壁が薄くなる。内面は口縁部から屈曲部下まで横ヘラミガキ、下半はナデ。外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。Ⅰ区中6攪乱出土。

163は扁球形の深みのある体部を有し、上半が内傾する。口縁部は大きく開き、端部は上方につまみ上げる。屈曲部内面の稜は鋭い。内面はナデ、外面は縦方向の太いヘラミガキを行っており、口縁部・体部上半・体部下半で分割される。胎土にあまり砂粒を含まず比較的精良な粘土を使用し、色調は肌灰色を呈す。Ⅰ区中6攪乱出土。

164・165は有段口縁の鉢である。164は内外面とも横ヘラミガキを緻密に行い、さらに内面には放射状の暗文を施す。胎土には砂粒を含み、精製器種にはあまり良くない。色調は暗茶色を呈す。Ⅱ区南3攪乱出土。165は内面の上半に横ヘラミガキ、下半にナデを行う。外面は横ヘラミガキを行い、底部は一定方向にヘラミガキを行う。外面には整形時のタタキが残る。胎土は精良で色調は黄茶色を呈す。Ⅰ区中6攪乱出土。

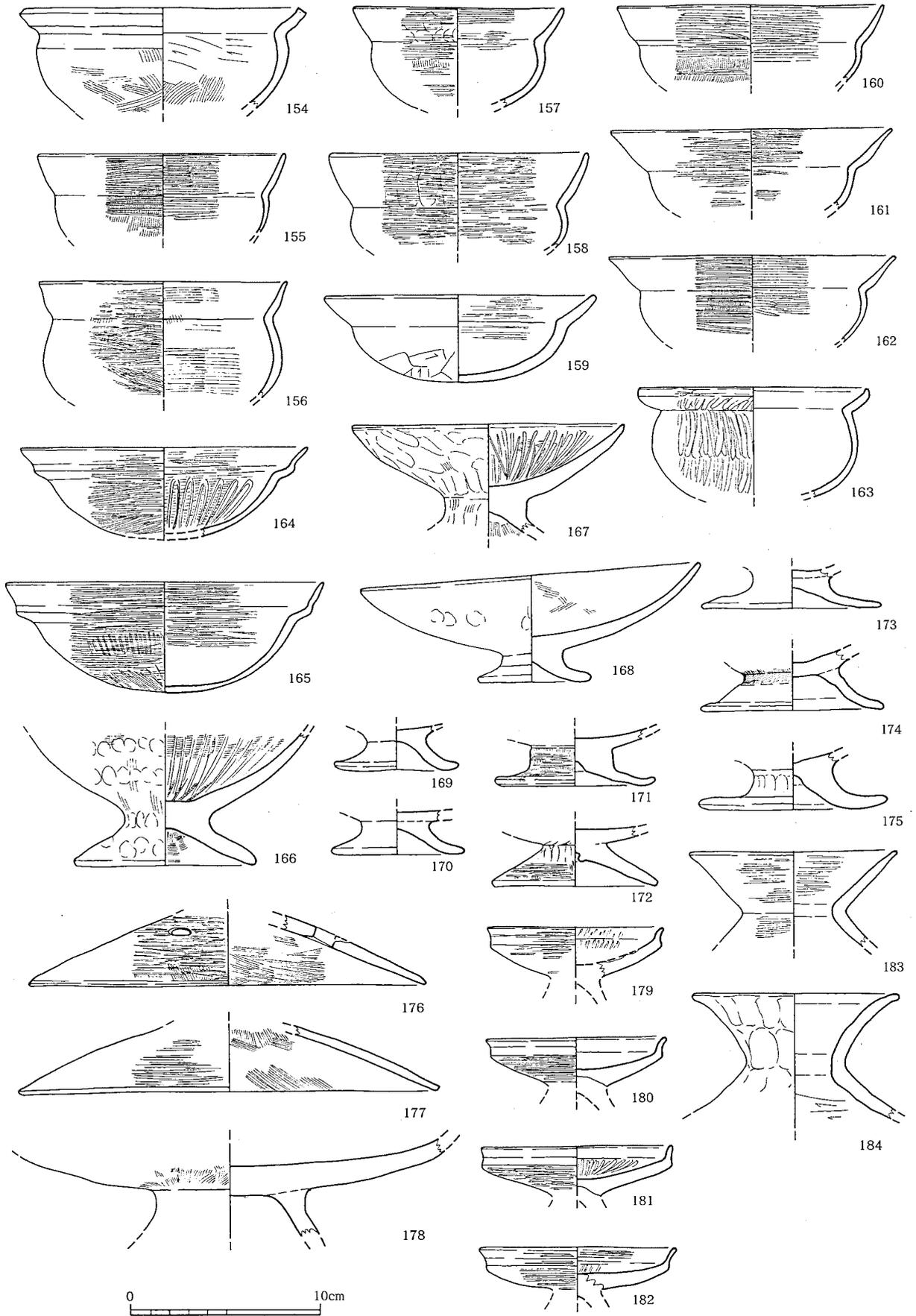
166～178は脚付鉢である。166は深みのある体部をなし、脚部は直線的に開く。全体的に器壁が厚い。鉢部内面は横ハケ目後放射状の暗文を施す。外面は指整形後粗いハケ目を行い、これを雑にナデ消す。脚部内面はハケ目、外面は指オサエ後ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は肌灰色を呈す。Ⅰ区東6出土。167も166と同様雑な作りのものである。鉢部は浅く、口縁部付近は器壁が薄くなる。内面はハケ目後放射状暗文を施す。外面は指整形後粗いハケ目を行い、最後にナデを行う。脚部は短い柱状部を有す。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅰ区東4攪乱出土。

168は浅く大きく開く鉢部となる。内面はハケ目後これをナデ消す。外面は風化が著しく調整が不明瞭だが、わずかに整形時の指圧痕が認められる。脚部は短く大きく開き、端部は丸くおさめる。胎土に砂粒を若干含み色調は肌灰色を呈す。Ⅱ区南3攪乱出土。

169～175は短い脚部。169は裾端部が跳ね上がる。調整は全面横ナデ。Ⅱ区南1攪乱出土。170は裾が外反するが、跳ね上がるまでには至らない。Ⅱ区南2攪乱出土。色調は黄灰色だが外面のみ二次加熱を受け赤茶色に変色している。

171は精製品。短い柱状部を有し、裾部は直線的に開き端部のみ跳ね上げる。内頂部には軸受孔を有す。内面は横ナデ、外面は縦ハケ目後横ヘラミガキ。胎土は砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は橙茶色を呈す。底部に刳圧痕が見られる。Ⅰ区中5清掃時出土。172も精製品である。脚部は付け根から直線的に開き、端部は面をなす。内頂部には軸受孔を有す。内面は横ナデ、外面はハケ目後横ヘラミガキ。鉢部内底面には放射状の工具痕が残る。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。Ⅰ区中5攪乱出土。

173は裾部が大きく直線的に開き端部は水平方向に伸びる。調整は内外面とも横ナデ。胎土に砂



第53图 攪乱等出土土器実測図⑩ (1/3)

粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区南2攪乱出土。174は広い内頂部を有す。脚部は付け根から直線的に開き、端部のみ外反する。内面は横ナデ、外面はハケ目後横ナデ。色調は黄灰褐色を呈す。Ⅰ区東2校舎基礎攪乱出土。175は裾部が大きく開き、端部が跳ね上がる。内頂部には軸受孔を有す。調整は内外面とも横ナデ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。Ⅱ区南1攪乱出土。

176・177は直線的に大きく開く脚部。176は端部の器壁が薄くなり、また小さな面をなす。内面は横ハケ目、外面は縦ハケ目後細かい横ヘラミガキ。穿孔は3ヶ所に行う。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良で、色調は肌茶色を呈す。Ⅱ区東6校舎基礎攪乱出土。177は器壁の厚さが均一で、端部は面をなす。内面はハケ目後横ナデ、外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。近世土坑の3号土坑出土。

178は大型品。内底部は大きな平坦面をなす。脚部は内頂部が広く、付け根から直線的に開いている。脚部は内外面とも横ナデ、鉢部は内面ナデ、外面縦ハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅰ区北3校舎基礎攪乱出土。

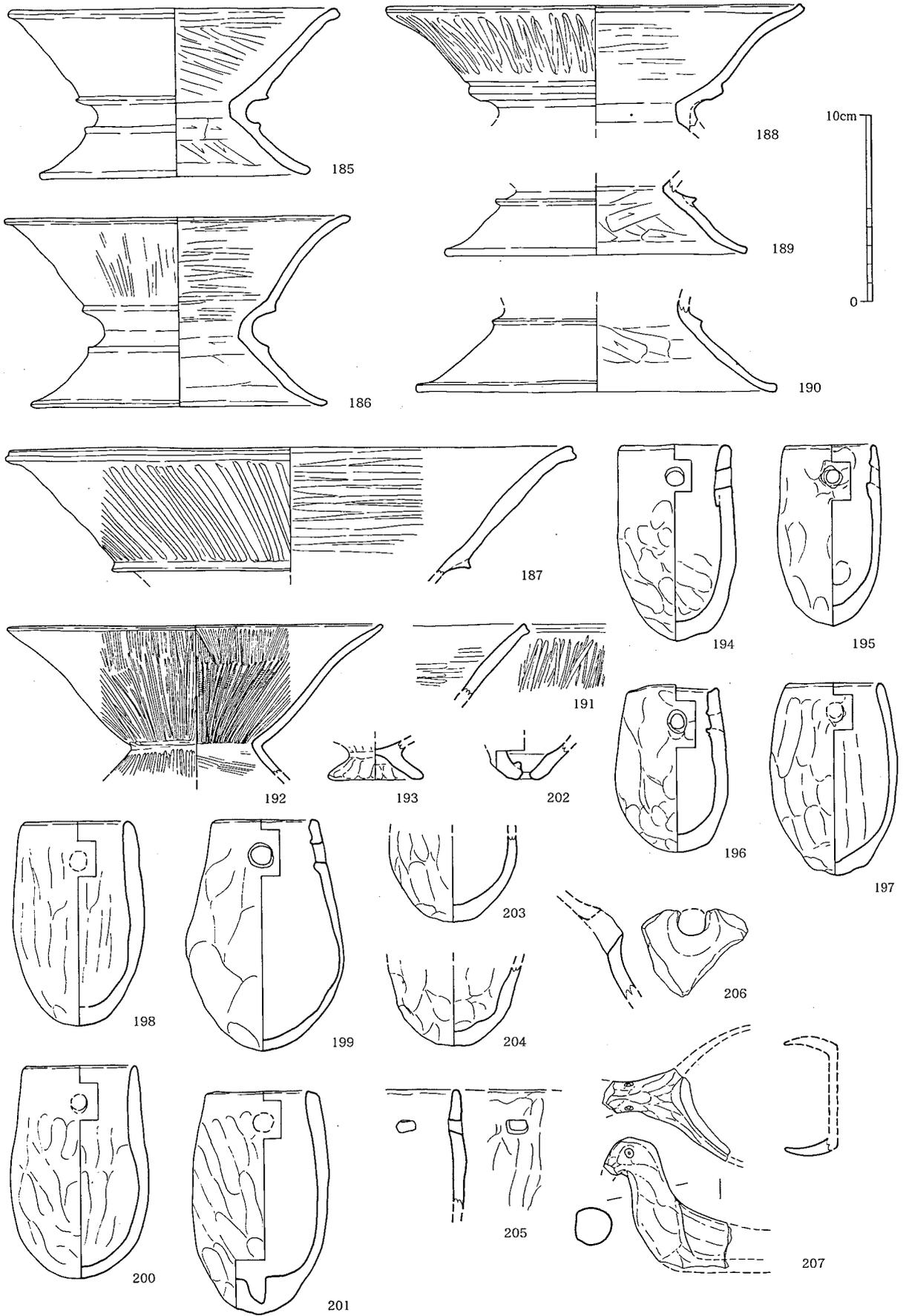
179～182は精製の小型器台。179は立ち上がりが外反し、端部がシャープに尖る。内面は放射状ヘラミガキ、外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は橙茶色を呈す。Ⅰ区表土掘削時出土。180は立ち上がりが外反し、端部は丸くおさめる。内面は風化が著しく調整不明、外面は受部のみ横ヘラミガキを行い、立ち上がりの部分はナデのみである。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。Ⅱ区南1攪乱出土。181は立ち上がりが直立し、端部は丸くおさめる。立ち上がりは内外面とも横ナデ、受部内面は放射状ヘラミガキ、外面は横ヘラミガキ。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。Ⅰ区中1攪乱出土。182は受部に比べ立ち上がりの器壁が薄い。立ち上がりは外反し、端部は丸くおさめる。受部内面は放射状のヘラミガキを行い、それ以外は全面横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。近世土坑の5号土坑出土。

183・184は小型の鼓形器台である。183は屈曲部から端部にかけて直線的に開き、端部は薄く尖る。調整は内外面とも横ヘラミガキを行う。胎土は精良で色調は肌茶色を呈す。Ⅱ区南3攪乱出土。184は外反しながら開く粗製のものである。端部は丸くおさめる。外面は横ナデを行うが、整形時の指圧痕が明瞭に残る。内面の受部は横ナデ、裾部は横ヘラケズリ後軽い横ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は肌茶色を呈す。胎土・色調は在来系土器に近い。

185～191は山陰系の鼓形器台である。185は受部・裾部とも直線的に伸び、端部付近がやや外反する。突帯は高くシャープである。外面は横ナデ、内面の受部は幅広の横ヘラミガキ、裾部はヘラケズリ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。Ⅱ区北2・3出土。186は185と比べて受部、裾部とも開きが少ない。突帯はややシャープさに欠ける。受部は内面横ヘラミガキ、外面縦ヘラミガキ。裾部は内面横ヘラケズリ、外面横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。Ⅰ区東7攪乱出土。

187は大型品。直線的に開き端部付近のみやや外反する。端部は下端をつまみ出し、端面に浅い沈線を巡らせる。内面は幅広の横ヘラミガキ、外面は斜ヘラミガキを暗文状に施す。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。Ⅰ区中1攪乱出土。188は受部がやや外反しながら開く。内面は横ヘラミガキ、外面は鋸歯文状のヘラミガキ。突帯は低くシャープさに欠ける。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区南2攪乱出土。

189・190は裾部である。189は直線的に開き、端部付近のみやや外反する。屈曲部は短い筒状を



第54图 搅乱等出土土器实测图② (1/3)

なさない。端部は不明瞭な面をなす。内面はヘラケズリ、外面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区北1攪乱出土。190もやはり直線的に開き、端部付近のみ外反する。端部は面をなす。内面はヘラケズリ後下半を横ナデ、外面は全面横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区南3攪乱出土。

191も小片だが器台であろう。端部はシャープな面をなし、また下端がわずかに肥厚する。内面は横ヘラミガキ、外面は縦ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅰ区中3校舎基礎攪乱出土。192は異形の鼓形器台。受部下半はやや内湾しながら開き、上半は外反して伸びる。端部は丸くおさめる。屈曲部はシャープな稜をなし筒状部をもたない。受部内面は横ハケ目後縦ヘラミガキを行い、上半と下半とで分割している。外面も縦ヘラミガキを行い、やはり上半と下半とで分割する。裾部内面は横ハケ目、外面は縦ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含み色調は橙茶色を呈す。Ⅱ区南2攪乱出土。

193は製塩土器の裾部である。付け根から直線的に開き、端部は丸くおさめる。内外面に整形時の指圧痕が明瞭に見られる。胎土に砂粒をやや多く含み、二次加熱を受けているため色調は橙茶色を呈す。Ⅱ区南2攪乱出土。

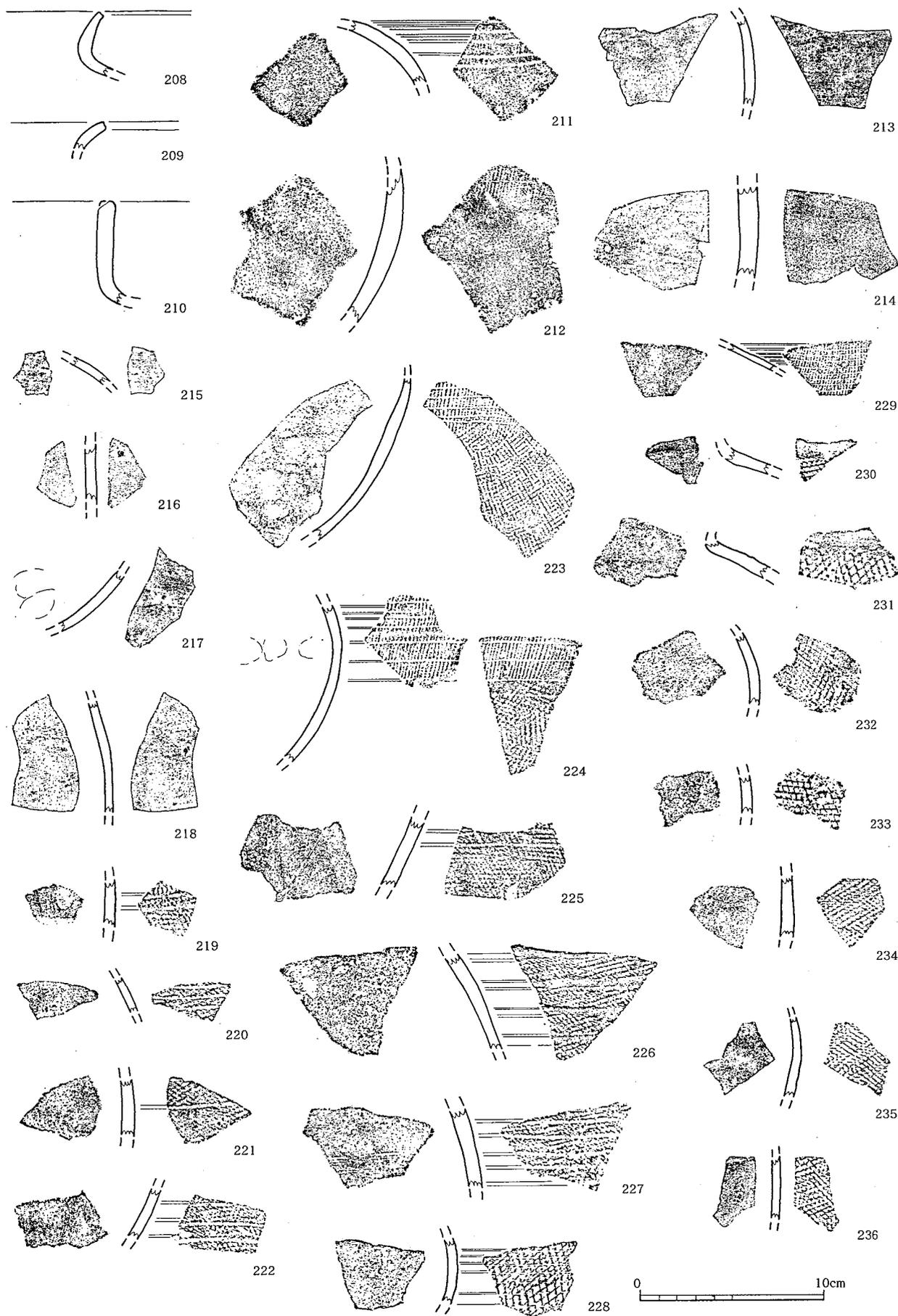
194～205は飯蛸壺である。194は底部がやや尖り、体部上半が直立し、上端部は小さな水平面をなす。体部下半は指ナデを行っており稜線が明瞭に残る。上半は横ナデを行う。胎土に粗砂を含み、色調は肌茶色を呈す。Ⅰ区表土掘削時に出土。195もやはり底部が尖り体部は直立する。口縁端部は水平面をなす。調整は内外面とも指ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は暗茶色を呈す。Ⅱ区南2攪乱出土。196は他よりやや小型のもの。重心が下位にあり、体部上半は内傾する。口縁端部は内傾する面をなす。内面は丁寧なナデを行い稜線を残さない。外面は指ナデの稜線が残る。胎土に砂粒を若干含み色調は茶褐色を呈す。Ⅱ区南2攪乱出土。197は最大径が中位にある。上半はやや内傾し、口縁端部は丸くおさめる。内外面とも割と丁寧な指ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区南2出土。

198は口縁部が直立し端部を丸くおさめる。調整は内外面とも縦方向の指ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区南3攪乱出土。199は重心が下方にあり、上半は直線的に内傾する。端部は面をなす。内面は丁寧なナデを行い指ナデの痕跡を残さない。外面は大きめの指ナデの稜線が残る。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰白色を呈す。Ⅱ区南3攪乱出土。200は中位でやや内傾し、口縁部は直立して端部は上方に尖る。口縁部は横ナデし、体部は内外面とも縦方向の指ナデの稜線が残る。Ⅱ区南3攪乱出土。201は体部上半がやや内傾し、口縁端部は外傾する面をなす。内底部には穿孔途中の孔が見られる。内面は丁寧なナデを行い指ナデの稜線を残さない。外面は斜方向の指ナデ。Ⅰ区中5校舎基礎攪乱出土。

202～204は飯蛸壺の底部片。202は穿孔を行う。色調は黄灰褐色を呈す。近世土坑の5号土坑出土。203は丸く整った形の底部。内面は丁寧なナデを行い、外面は指ナデの稜線が残るものの比較的丁寧な調整を行っている。Ⅰ区南校舎基礎攪乱出土。204は内外面に指ナデの稜線が目立つ。Ⅱ区北7校舎基礎攪乱出土。

205は飯蛸壺の口縁部片。通常の円孔と異なり四角形の孔を穿孔している。内外面ともナデ調整で外面には指ナデの稜線が残る。胎土に砂粒を若干含み色調は暗茶灰色を呈す。Ⅱ区南2攪乱出土。

206は器形がよく判らない土器片。内側から外側へと円孔を穿孔する。把手付土器の把手が剥離



第55图 攪乱等出土土器実測図⑩ (1/3)

した痕跡かとも考えたが、明確な剥離痕は確認できない。内外面ともナデ調整を行い外面は二次加熱のため赤変している。胎土に砂粒をやや多く含み、あまり良質ではない。色調は内面黄灰褐色、外面赤肌色を呈す。Ⅱ区南3攪乱出土。

207は鳥の頭部を型取った土器である。体部は一部しか遺存していないが、恐らく船形の体部になると思われる。内面にわずかに残る屈曲から底部は平底になると思われ、また体部は丸く内湾しながら立ち上がっている。頭部は嘴を欠失する。顔は両側から強くつまんで窪ませており、目は竹管の刺突による。調整は全面指ナデ調整。胎土に粗砂を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区南1攪乱出土。

208～284は半島系の土器である。208～210は短頸壺の口縁部。208は頸部が外反して短く開き、口縁端部はシャープな稜を有し浅く窪ませる。調整は内外面ともロクロ使用の回転ナデ。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は暗灰色を呈す。焼成は陶質焼成で堅緻に焼き上がる。Ⅰ区中2攪乱出土。209は瓦質焼成の小型壺口縁部片である。外反する口縁部で、やはり端部はシャープな稜を持ち浅く窪ませている。調整は回転ナデ。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は薄灰色を呈す。Ⅰ区北3攪乱出土。

210～212は同一個体である。210は短く直立し、上端は部分的に欠失するものの、水平面をなすようである。調整は内外面ともロクロ使用の回転ナデ。211は肩部片。丸味を有し大きく張った器形となる。外面は縦方向の平行タタキ後に沈線を巡らせる。内面は横ナデを行う。212は中位よりやや下の破片。平行タタキと螺旋状沈線は最大径の位置までしか行わない。下半はヘラケズリの後ナデ消している。内面はナデ。胎土には砂粒をやや多く含み、色調はくすんだ灰白色を呈す。瓦質焼成だがやや甘く、軟質に近い。また器表の風化が著しい。破片はいずれもⅠ区中2校舎基礎攪乱から出土している。

213～218は内外面ともナデを行う陶質土器片である。213は外面横ナデ、内面はナデ上げている。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は暗灰色を呈す。Ⅰ区北3校舎基礎攪乱出土。214は器壁が厚く大型品であろう。調整は内外面ともナデを行う。胎土に砂粒をわずかに含むが概ね良質な粘土を使用し、色調は内面暗灰色、外面は若干自然釉がかかり灰白色、断面は紫茶色を呈す。Ⅰ区東6攪乱出土。215は器壁が薄く小型品であろう。内外面ともロクロ使用の回転ナデを行っており、肩部片と思われる。胎土に砂粒を含まず精良で色調は暗灰色を呈す。Ⅰ区北2攪乱出土。216も器壁が薄く小型品であろうが、全く湾曲していないので平底鉢底部かもしれない。調整は内外面ともナデを行う。胎土に細砂をわずかに含むが概ね良質な粘土を使用し、色調は薄灰色を呈す。Ⅰ区東5攪乱出土。217は内外面横ナデを行うが、内面にはタタキの際の当て具もしくは指圧痕と思われる浅い窪みがあり、外面もロクロを使用しない横ナデを行うことから壺の下半部と推測される。胎土に砂粒を含まず極めて精良な粘土を使用し、色調は灰色を呈す。Ⅰ区中5攪乱出土。218は内面横ナデ、外面の上半は横ナデ、下半はナデ。壺中位から下半にかけての破片であろう。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は灰色を呈している。Ⅰ区北2校舎基礎攪乱出土。

219～229は沈線または凹線を巡らす破片である。219は斜格子タタキの後に沈線を浅く巡らせる。内面はナデだが指圧痕と思われる浅い窪みが見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。焼成は軟質焼成である。Ⅰ区南4攪乱出土。220も斜格子タタキの後に沈線を巡らせる。内面はナデ。器壁が薄い。胎土に砂粒を若干含み色調は外面黄茶色、内面くすんだ黄灰色を呈す。焼成は軟質焼

成。I区東7攪乱出土。221は斜格子タタキの後に狭い凹線を巡らせる。内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。焼成は軟質で堅く焼き締まる。I区中1攪乱出土。222は斜格子タタキの後に狭い凹線を巡らせる。外面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。I区中攪乱出土。

223は壺体部の中位片。上半は縦方向のタタキの後に平行沈線を巡らせ、下半は正格子タタキを行い上下をタタキ分ける。内面は横ナデを行うが、最大径に当たる部分には横方向に連続する指圧痕が見られる。胎土に砂粒をわずかに含み、色調はくすんだ灰色を呈す。焼成は陶質焼成で堅緻に焼き上がる。I区中6・中5攪乱出土。224もやはり壺の中位片である。上半は縦平行タタキの後に平行沈線を巡らせ、下半は斜格子タタキを行う。胎土に砂粒を若干含み、焼成は軟質に近い瓦質焼成である。色調は内面黄灰褐色、外面黒灰色を呈す。II区北1攪乱出土。225は斜格子タタキの後上方のみ凹線を巡らせている。内面は縦方向のナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は暗黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。I区南1攪乱出土。226は斜格子タタキの後に幅広の凹線を巡らせる。内面は横ナデ。胎土に砂粒をあまり含まず比較的良質な粘土を使用する。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は暗黄灰褐色を呈す。I区南8校舎基礎攪乱出土。227は斜格子タタキの後に狭い凹線を密に巡らせる。内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は明肌茶色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。II区南1攪乱出土。228は強く湾曲しており、壺の体部でも最大径に当たる部位の破片であろう。大振りの斜格子タタキ後に平行沈線を密に巡らせる。内面は横ナデ。胎土に砂粒をあまり含まず比較的良質な粘土を使用し、色調は内面肌茶色、外面黒色を呈す。焼成は軟質焼成で焼き上がりは良い。I区中2攪乱出土。229は壺の肩部片である。器壁が非常に薄い。外面は縦方向タタキの後に平行沈線を等間隔で密に巡らせる。内面はナデ。胎土に砂粒を含まず精良な粘土を使用し、色調は内外面とも表面が黒灰色、断面は灰色を呈す。焼成は瓦質焼成で焼き上がりも良い。II区北7校舎基礎攪乱出土。

230・231は斜格子タタキをもつ壺の肩部片である。230は頸部と内面に横ナデを行う。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用し、色調は内面灰色、外面明黄灰色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き上がる。I区東5攪乱出土。231は大きめの斜格子タタキを行うもの。頸部および内面は横ナデを行う。胎土に砂粒をやや多く含み、特に石英・長石の粗砂粒が目立つ。色調は肌灰色を呈す。焼成は軟質焼成。I区中1校舎基礎攪乱出土。

232~246は斜格子タタキを持つ体部破片である。232は外面大きめの斜格子タタキ、内面横ナデ。胎土に砂粒をやや多く含み色調は黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成。壺として考えたが、外面に強い二次加熱を受けることから深鉢の可能性もある。I区東5攪乱出土。233は外面やや大きめの斜格子タタキ、内面横ナデ。胎土に砂粒をやや多く含み、色調は赤肌色~黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成。強い二次加熱を受けることからやはり深鉢の可能性が高い。234は外面小さめの斜格子タタキ、内面ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。I区東7攪乱出土。235は外面細かい斜格子タタキ、内面横ナデ。器壁は薄い。胎土に砂粒をほとんど含まず比較的精良な粘土を使用し、色調は内外面黄灰色を呈す。焼成は瓦質焼成だが軟質に近く、堅く焼き締まる。II区南1攪乱出土。236も外面に細かい斜格子タタキ、内面に横ナデを行い、器壁が薄い。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用し、色調は内面黒灰色、外面暗黄灰色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。I区東7攪乱出土。

237は外面斜格子タタキ、内面ナデ。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用し、色調は内面くすんだ灰色、外面黒灰色を呈す。焼成は瓦質焼成。I区東6攪乱出土。238は外面に大きめの斜格子タタキ、内面は横ナデを行い指圧痕と思われる浅い窪みも見られる。胎土には砂粒を若干含み、色調は内外面とも黄灰色を呈す。焼成は瓦質焼成。I区東6攪乱出土。同一個体と思われる破片が他に数点出土している。239は外面斜格子タタキ、内面ナデ。器壁が厚く、大型品になると思われる。胎土には砂粒を若干含み色調は黄灰色を呈す。焼成は瓦質焼成だが軟質に近い焼き上がりとなる。I区北2攪乱出土。240の外面は斜格子タタキを行った後、下半部をナデ消している。内面はナデを行うが、粗い砂粒の移動が見られ、ヘラケズリを行った後にナデ消したものと思われる。胎土に砂粒を若干含み色調は内面黄灰褐色、外面灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。I区中2攪乱出土。

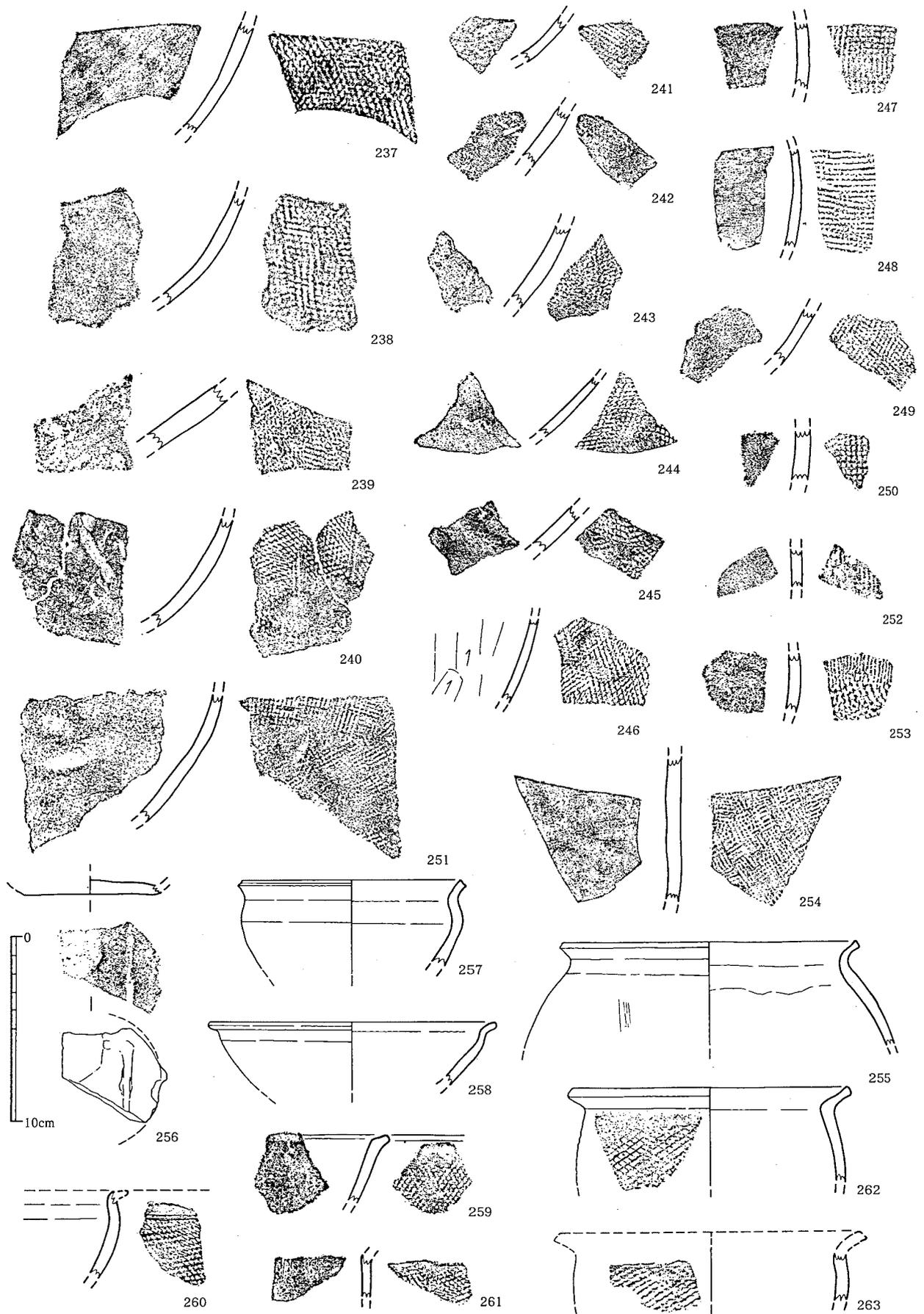
241は斜格子タタキの後下半部をナデ消している。内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は内面明黄灰色、外面黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。I区東4校舎基礎攪乱出土。242もやはり斜格子タタキの後ナデ消しを行っている。内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は内面黄灰色、外面黒色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。II区廃土中から出土。243は器壁に厚みがあり、大型品となるであろう。外面は斜格子タタキの後ナデ消し、内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は明黄灰色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。II区南2攪乱出土。244は外面斜格子タタキの後下方をナデ消し。内面ナデ。胎土に砂粒をあまり含まず比較的精良な粘土を使用し、色調は明黄灰色を呈す。焼成は軟質に近い瓦質焼成で堅く焼き締まる。I区廃土中出土。245もやはり斜格子タタキの後ナデ消し。内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は薄灰色を呈す。焼成は軟質焼成で焼き上がりは良い。I区廃土中出土。

246は外面斜格子タタキ、内面縦方向のヘラケズリを行う。器壁は薄い。内面黄灰色、外面黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。西新町遺跡出土の布留系甕と非常に似た質感を持っており、内面にヘラケズリを行う点からも、タタキ調整の布留系甕であった可能性がある。II区南1攪乱出土。

247～251は正格子タタキを行うもの。247は正格子タタキの後ナデ消し。内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰白色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。II区東6攪乱出土。248は陶質焼成である。外面は正格子タタキだが斜めに重なり合う部分が見られる。内面は横ナデ。胎土に砂粒をあまり含まず比較的良質な粘土を使用する。色調は内外面とも黒灰色、断面は紫茶色を呈す。焼成は良好で堅緻に焼き上がる。I区西7攪乱出土。249は外面小さな正格子タタキ、内面ナデ。胎土に細砂粒を多く含み色調は内面黒色、外面黄茶灰色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。I区表土掘削時に出土。250は外面正格子タタキ、内面ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は内面明黄灰色、外面黒色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。II区東6校舎基礎攪乱出土。

251は小さな正格子タタキの後ナデ消し、内面は横ナデを行い指圧痕が見られる。胎土には砂粒を若干含み陶質土器にしては粗い。色調は灰色を呈す。焼成は陶質焼成で堅緻に焼き上がる。I区中6攪乱出土。

252・253は縦平行タタキを行う破片。252は磨滅が著しく外面のタタキはほとんど見えない。内面はナデ。胎土に砂粒を若干含み焼成は瓦質焼成だが軟質に近く、堅く焼き締まる。色調は灰色を呈す。I区廃土中出土。253は上半が縦平行タタキ、下半が正格子タタキを行うもの。内面はナデ。



第56图 攪乱等出土土器実測图⑭ (1/3)

胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は内面黄灰色、外面は二次加熱を受けたように見られ赤茶色を呈す。

254は網代状のタタキを行う陶質土器。内面は不整方向にナデを行っており、下半部の破片と思われる。胎土には砂粒をあまり含まず比較的良質な粘土を使用し、色調はくすんだ灰色を呈す。焼成は良好で堅緻に焼き上がる。Ⅱ区南2攪乱出土。

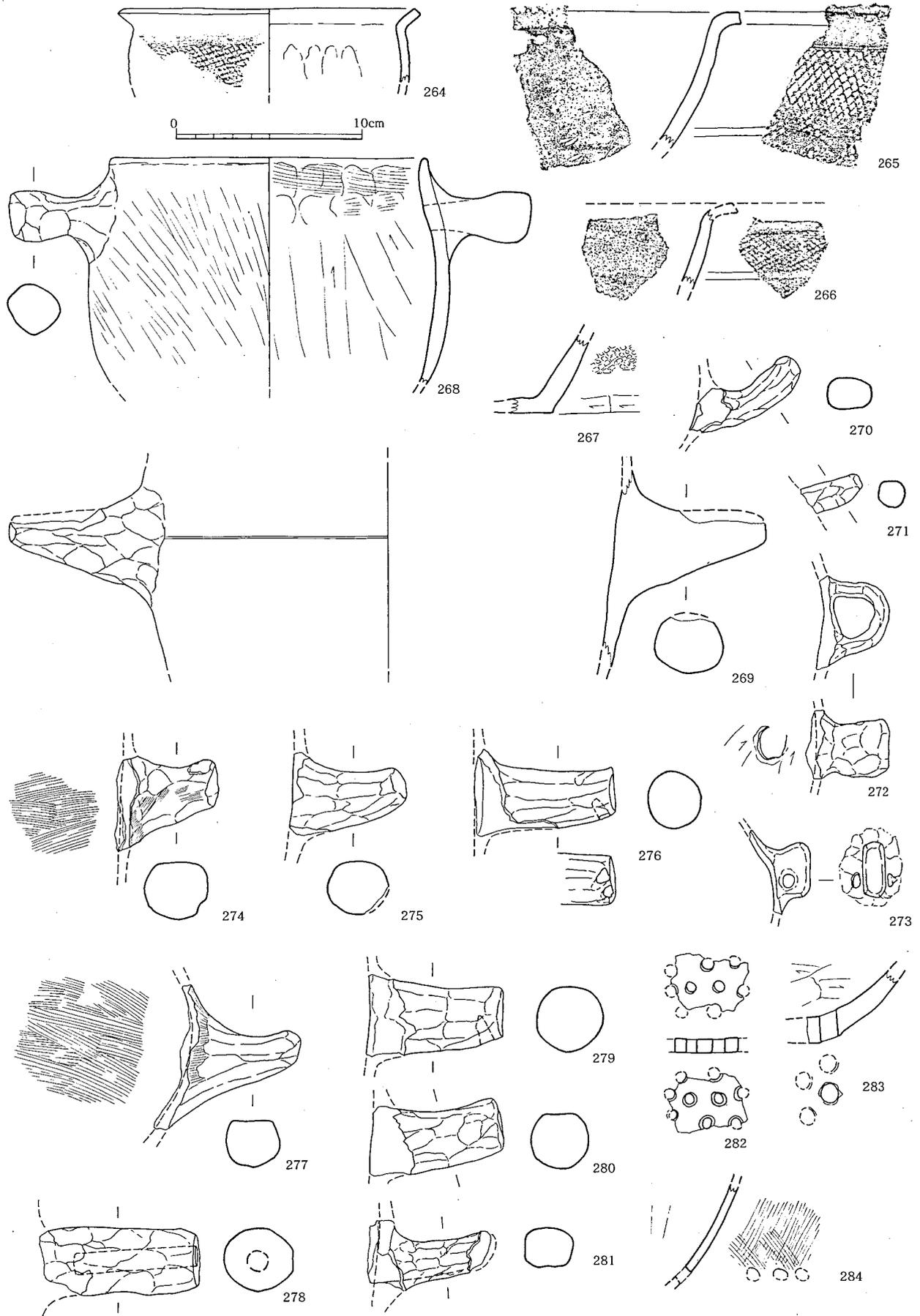
255は深鉢に近い形状となる短頸壺である。肩部は丸味を有し頸部はあまり締まらない。口縁部は短く外反し端部は面をなす。口縁部は横ナデ、体部内面はナデ、外面はハケ目後にナデ消しを行っている。胎土に砂粒を若干含むが概ね精良である。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は橙茶色を呈す。Ⅰ区東1攪乱出土。

256～260は浅鉢である。256は平底の浅鉢底部。底面には井桁状のロクロ圧痕が見られる。内底面はロクロ使用の回転ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は内面暗肌色、外面黒灰色。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。Ⅰ区東5攪乱出土。257は体部が屈曲する浅鉢。口縁部は短く開き端部の稜線はシャープに尖り、また端面に沈線を巡らせる。調整はロクロ使用の回転ナデを行う。焼成は陶質だがやや甘く、瓦質に近い。胎土には砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、色調は黄灰色を呈す。Ⅰ区中2攪乱出土。258は体部が浅く開き、口縁部は短く外折する。端部は面をなすもののシャープさにやや欠ける。調整は全面ロクロ使用の回転ナデ。胎土には砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、焼成は陶質だがやや甘く瓦質に近い。色調はくすんだ灰色を呈す。Ⅰ区東7校舎基礎攪乱出土。259は深鉢形となるかもしれない。体部の開きが弱く、口縁部は短く外折し、強いナデを加えるため上端が窪む。口縁部から体部内面にかけては横ナデ、外面の口縁部下は小さな斜格子タタキを行う。胎土に砂粒を若干含み、焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は黄灰褐色を呈す。Ⅰ区中3校舎基礎攪乱出土。260も深鉢の可能性もある。口縁部下が緩く内傾し、口縁部は強く外反する。口縁部と体部の内面は横ナデ、外面の口縁部下は小さな斜格子タタキ。胎土に砂粒を若干含み、焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は内面黄肌色、外面黄灰色を呈す。Ⅰ区東6攪乱出土。

261～267は深鉢である。261は口縁部下が直立する。外面は斜格子タタキ、内面は縦方向の擦過の後に横ナデを行う。胎土に砂粒を若干含み、焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は黄灰色を呈す。Ⅱ区南2攪乱出土。262は口縁部下がやや内傾し、口縁部は強く外折する。口縁の中位を強く上下からナデているため器壁が薄くなる。端部は面をなす。口縁部から体部の内面にかけては横ナデ、体部外面は大きめの斜格子タタキ。胎土に砂粒を若干含み色調は黄灰褐色を呈す。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。外面が強い二次加熱を受けたものと思われ、著しく赤変した部分があり、また器壁が荒れる。Ⅰ区中5出土。263は口縁部下がわずかに内傾している。内面はナデ、外面は斜格子タタキ。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は黄灰褐色を呈す。Ⅰ区東7校舎基礎攪乱出土。

264は体部上半が直立し、口縁部下のみわずかに内傾している。口縁部は短く直線的に開き、端部はシャープな面をなす。口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面はナデており指ナデの稜線も見られる。外面は斜格子タタキを行う。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は暗黄灰褐色を呈す。外面が二次加熱を受ける。Ⅰ区東5攪乱出土。

265は大型の深鉢である。体部がやや開き、口縁部は外反し短く水平に伸びる。端部はシャープな面をなす。口縁部から体部の内面にかけては横ナデを行う。外面には大きめの斜格子タタキを行



第57图 攪乱等出土土器実測図⑤ (1/3)

う。胎土に粗砂を若干含み、焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は内面肌茶色、外面黄灰褐色を呈す。I区中4校舎基礎攪乱出土。266も開き気味の体部をなす。外面は斜格子タタキ後凹線を巡らせる。内面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み、焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は内面黒色、外面灰褐色を呈す。I区南8校舎基礎攪乱出土。

267は底部片。底面はほぼ水平で、端部はシャープな稜をなす。体部下端には横ヘラケズリを巡らせる。その上方はナデ後斜格子タタキを行っている。内面はナデ。胎土に石英・長石の粗砂粒を多く含み、焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は内面黄灰色、外面は強い二次加熱を受け赤褐色を呈す。I区中5攪乱出土。

268は甑であろう。268は体部下半の湾曲から丸底に近い浅い体部をなすものと思われる。上半はやや内傾し、口縁部は素口縁となる。把手は口縁部にかなり近い位置に取り付けられる。体部内面は縦ヘラケズリ、口縁部内面は横ハケ目を行った後に指オサエを行う。口縁部外面は横ナデ、体部外面は幅の狭い板状の小口を使用したナデを行う。把手は指整形で、体部の内面には把手接合痕が残る。胎土に砂粒を若干含み、焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は黄灰褐色を呈す。胎土・色調などは土師器に近い。II区南2攪乱出土。

269は筒状の体部をなすと思われる甑体部片である。把手が取り付けられる位置には一条の沈線が巡らされる。把手は体部に対して上面が垂直になるよう接合されており、形状は裁頭円錐形をなす。内面は縦方向のナデ、外面は横ナデ。把手は指整形による。胎土に砂粒をほとんど含まず精良な粘土を使用し、焼成は軟質焼成だが瓦質に近く、堅緻に焼き上がる。色調は薄黄灰色を呈す。I区東7攪乱出土。

270～281は把手である。270はやや細い牛角状の把手。壺の把手であろう。断面は横方向に長い楕円形をなす。整形は全面指ナデによる。胎土に砂粒を若干含み、焼成は軟質焼成、色調は黄灰色を呈す。I区中3校舎基礎攪乱出土。271は裁頭円錐形の小さな把手であり、やはり壺の把手であろう。整形は全面指ナデによる。胎土に砂粒を若干含み、粗さが目立つ。焼成は軟質焼成で色調は黄肌色を呈す。近世土坑の7号土坑出土。

272は半環状の把手である。断面は縦に長い楕円形を呈す。体部内面には接合痕が明確に残る。内面の調整はヘラケズリを行っており、或いは山陰系の土器に付けられたものかも知れない。把手の調整は全面指ナデによる。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。II区南3攪乱出土。

273は水平方向に円孔を穿孔した長方形の把手。壺に付けられていたものであろう。調整は全面指ナデ。胎土に砂粒を若干含み、焼成は軟質に近い瓦質調整である。色調は黄灰色を呈す。I区中6校舎基礎攪乱出土。

274～281はいずれも甑の把手であろう。274は短い裁頭円錐形をなし、やや上方を向く。整形は指ナデによるが接合後はハケ目を内外面とも行っている。胎土に砂粒をやや多く含みあまり良質ではない。焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。色調は黄灰褐色だが部分的に黒色を呈す。I区東5・6出土。275は短い裁頭円錐形をなし、やや上方を向く。整形は全面指ナデによる。胎土に粗砂をやや多く含み、焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。近世土坑の5号土坑出土。276は整った形の裁頭円錐形をなし、ほぼ水平方向に伸びるもの。断面もほぼ正円形をなす。整形は丁寧な指ナデによる。下端部には2つの支え孔がある。胎土に砂粒を若干含み、焼成は軟質焼成で堅く焼き締まる。

色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区表土掘削時に出土。277は古墳時代後期以降の甑把手に似た牛角形をなす。断面は円形に近いが上方が水平面を形成する。整形は丁寧な指ナデによって行われ、接合後は内外面ともハケ目を行う。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区南1攪乱出土。278は水平方向に長く伸びる柱状の把手。整形はやや雑な指ナデによるが、端部は板状工具により平坦に仕上げられ、その端部から基部近くにまで円孔があげられる。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は肌茶色を呈す。Ⅰ区東2校舎基礎攪乱出土。279はわずかに上方を向く円柱状をなすもの。整形はやや粗い指ナデによる。端部近くに下方からの支え孔がある。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。Ⅰ区中1校舎基礎攪乱出土。280もやや上方を向く円柱状の把手。断面は円形に近いが上方が面をなす。整形は比較的丁寧な指ナデによる。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。Ⅱ区西7攪乱出土。281は小さな牛角形をなす把手。断面は隅丸長方形に近い。整形は雑な指ナデによる。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色だが下面は黒灰色を呈す。Ⅱ区南1攪乱出土。

282～284は甑の底部片である。282は径6～7mmの円孔を穿孔するもの。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は黄灰褐色を呈す。Ⅰ区東6攪乱出土。283は体部下端の破片。底部は抹角平底をなすようである。蒸気孔は径8mm程度の円孔を穿孔する。器面の調整は内面へラケズリ、外面ナデ。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は内面黒色、外面黒黄灰色、断面黄灰褐色を呈す。Ⅰ区表土掘削時出土。284は器壁が非常に薄い。内面はへラケズリ後ナデ、外面はハケ目。底部は丸底となるようである。胎土に砂粒を若干含み焼成は軟質焼成、色調は暗黄灰褐色を呈す。Ⅰ区南6攪乱出土。

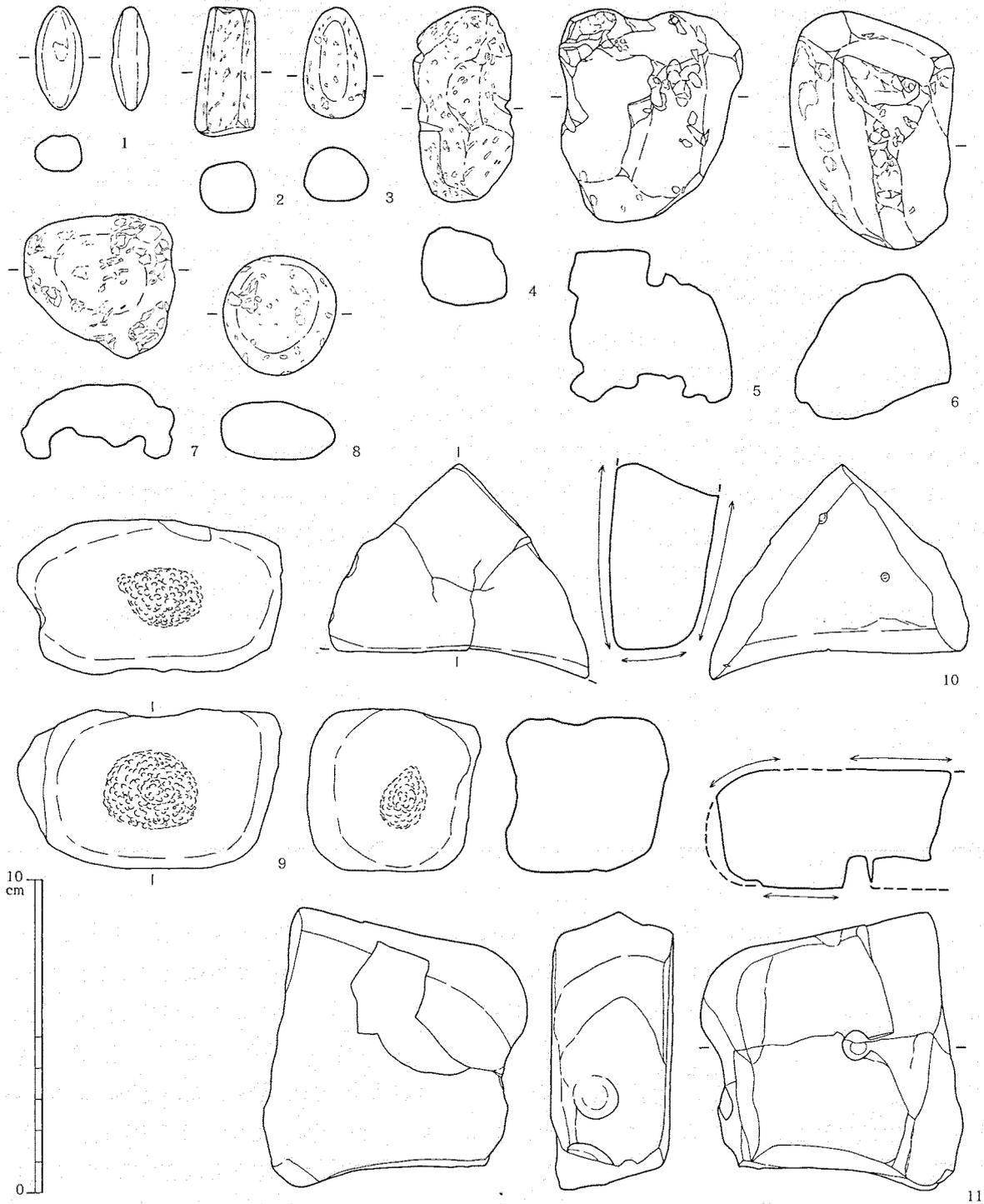
4. 古墳時代の石器・鉄器・土製品

石製品 (図版32、第58～60図)

1は12号土坑出土で、小型の石錘の未成品と考えられる。完成品に近く、整った形状を呈す。擦痕等は認められず、表面は平滑である。全長3.3cm、幅1.5cm、厚さ1.2cm、重さ7.8gで滑石製。

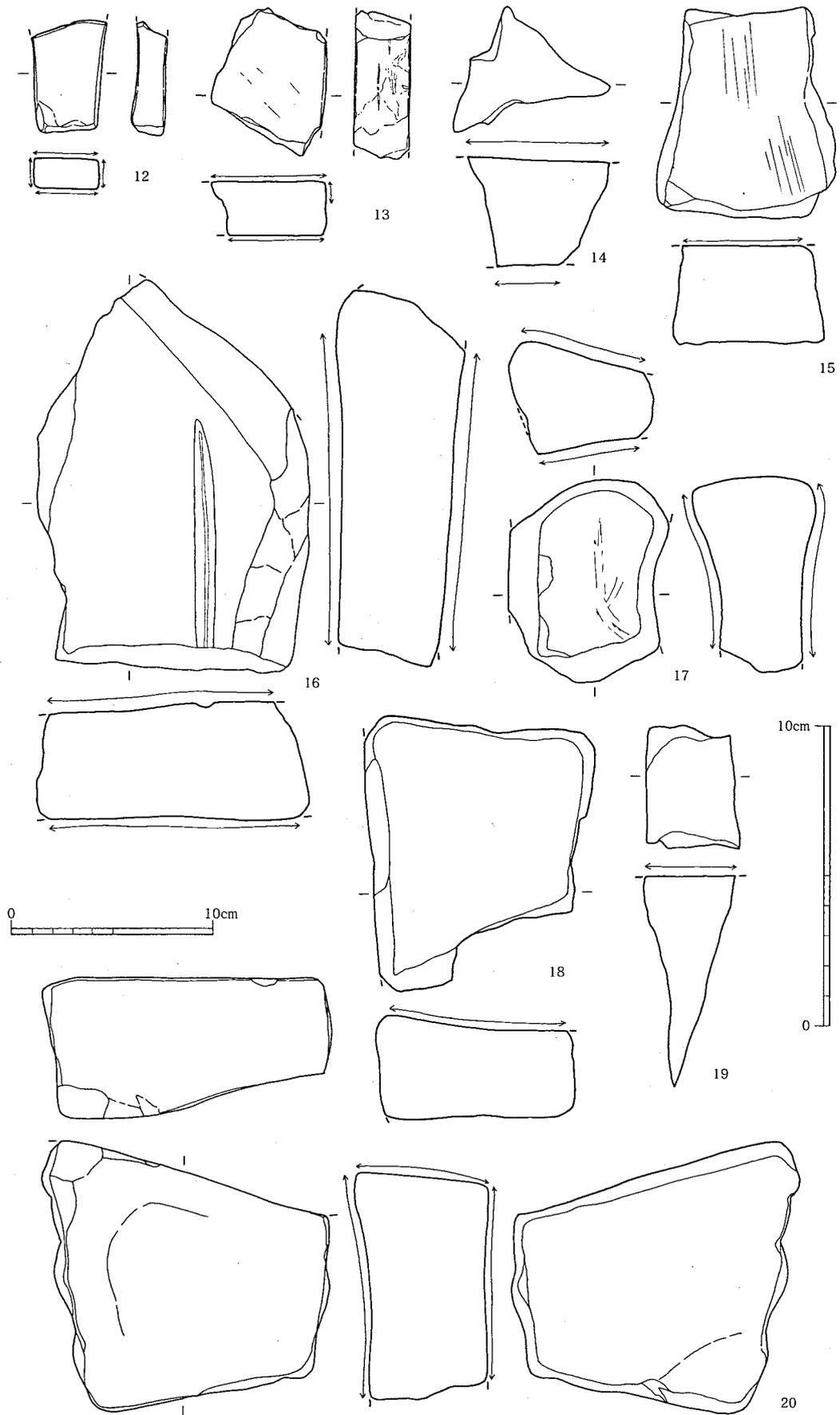
2～8は軽石である。2は1号落ち込み表層出土で、平坦な面を有し整った形態を為しており、人為的な加工が窺われる。全長4.3cm、幅2.0cm、厚さ1.6cm、重さ3.2gである。3はⅠ区北7遺構面出土で、表面は平滑に仕上げられており人為的な加工を受けていると考えられる。全長3.5cm、幅2.0cm、厚さ1.7cm、重さ1.8gである。4はⅠ区南3包含層出土で、側縁に抉り込みがあり、緊縛用に人為的に施されたものと思われる。全長6.2cm、幅3.1cm、厚さ2.5cm、重さ10.4gである。5はⅠ区北6攪乱出土で、平滑な面をもつほか、鋭利な工具で削ったと考えられる痕跡を有している。全長6.8cm、幅5.7cm、厚さ4.9cm、重さ35.6gである。6はⅠ区南1包含層出土で、表面は全体的に非常に平滑であり、人為的な加工を受けていると考えられる。全長7.6cm、幅5.2cm、厚さ4.6cm、重さ26.8gである。7はⅡ区中4暗褐色細砂出土で、表面は一部平滑であり人為的な加工の可能性はある。全長4.6cm、幅4.7cm、厚さ2.4cm、重さ10.7gである。8はⅠ区西4清掃時の出土で、全体的に表面は平滑であり、人為的に整形されていると考えられる。長さ3.9cm、幅3.6cm、厚さ1.9cm、重さ5.6gである。

9はⅡ区南6暗褐色細砂出土の凹石である。角柱状の形態で凹み部は3面に1ヶ所ずつ計3ヶ所認められる。全長8.2cm、幅5.2cm、厚さ5.1cm、重さ312.0gで花崗岩製。



第58図 石製品実測図① (1/2)

10～26は砥石である。10はⅡ区北1包含層出土で、欠損しているが、残存する表裏面と側面は使用により平滑である。表面には2ヶ所に小孔が穿たれている。現存長8.2cm、厚さ3.5cm、重さ153.7gで細粒砂岩製である。11は10と同一個体と考えられ、出土地点も10と同様にⅡ区北1包含層である。欠損が著しく、接合されているが、欠落部位が多い。表裏面と側面は使用により、平滑になっており、穿孔した痕跡が表面に1ヶ所、側面に2ヶ所認められる。現存長8.9cm、厚さ3.8cm、重さ289.5gで細粒砂岩製である。10・11は砥石ではなく、表面の研磨は整形の結果で、



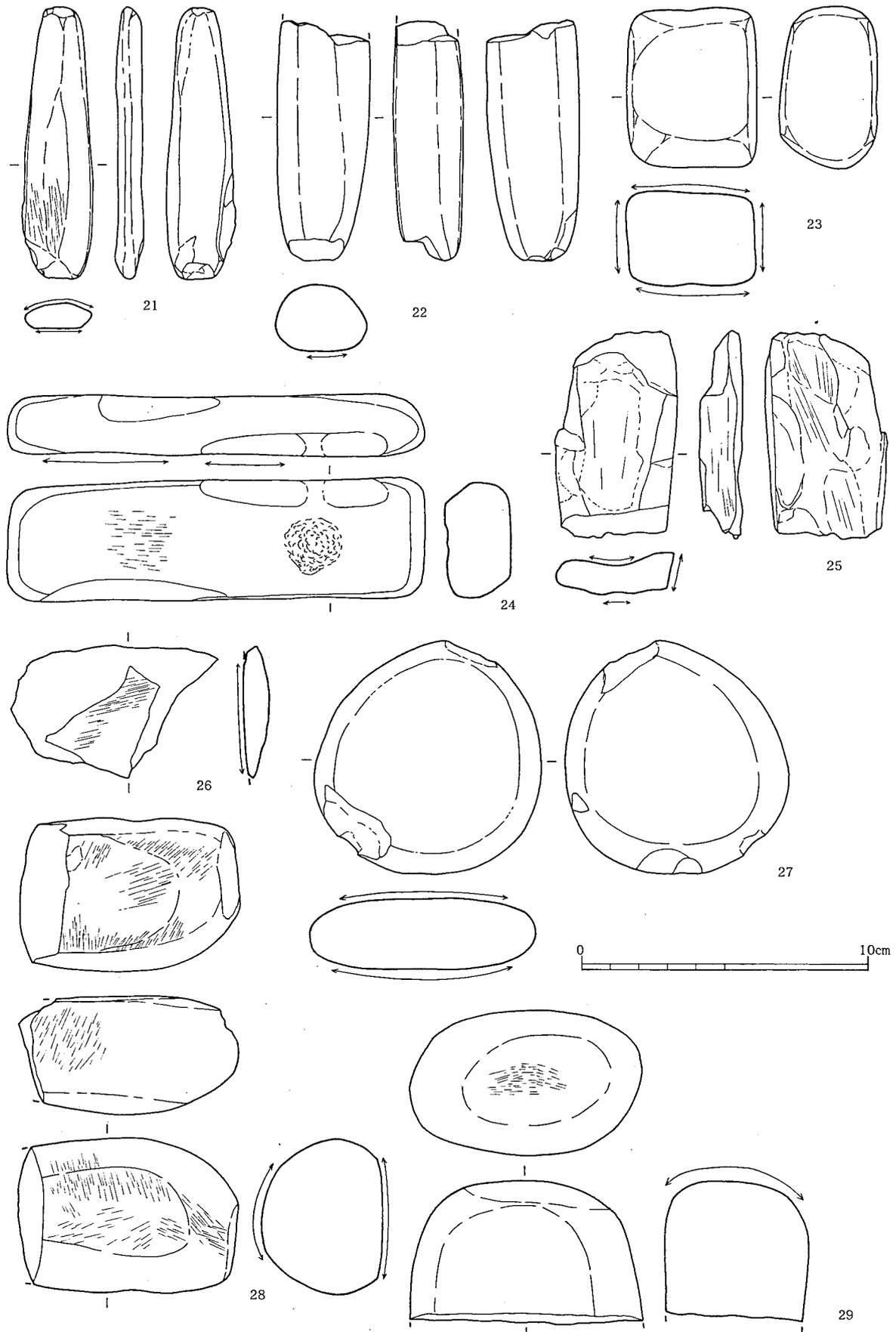
第59図 石製品実測図② (20 : 1/3, 他は1/2)

他の用途に用いた可能性も考えられる。

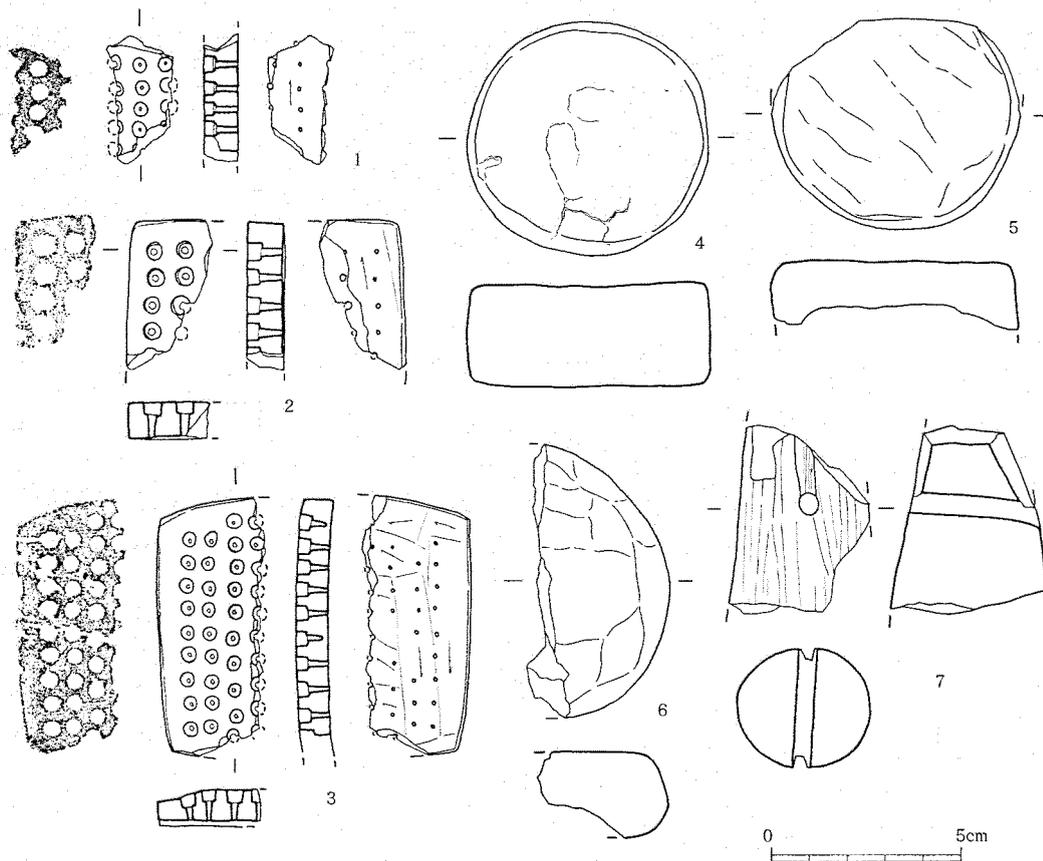
12は44号竪穴住居跡出土のものであり、本来は昨年度報告すべきものである。表裏面と左右側面は使用されているが、特に表面はわずかに凹んでおり、著しく平滑である。欠損しており、現存長3.8cm、幅2.5cm、厚さ1.0cm、重さ16.4gでシルト岩製。13は近世の土坑である1号土坑出土だが、恐らく古墳時代のものであろう。欠損が著しい。残存する表裏面と側面はともに使用されているが、表裏面が非常に平滑であるのに対し、側面の使用はわずかである。現存長4.9cm、厚さ1.8cm、重さ45.4gで花崗岩製。14はⅡ区北2包含層出土で、欠損が著しくわずかに残存する表裏面はともに平滑である。現存長4.2cm、厚さ3.7cm、重さ38.4gで細粒砂岩製。15はⅠ区南1攪乱出土で、欠損が著しい。残存する一面はよく使用され平滑である。現存長7.0cm、重さ212.3gで砂岩製。16はⅡ区北1遺構面出土の玉砥石である。欠損しておりまた裏面はある程度摩滅しているが、表裏両面を使用したと考えられる。特に表面は著しく平滑であり、また断面U字状の溝が一条通っている。現存長13.0cm、厚さ4.0cm、重さ828.1gで花崗岩製。17はⅡ区南2遺構面の出土で、側面も一部わずかに使用されているが、表裏両面の使用が著しくともに凹みが強い。現存長5.3cm、厚さ4.1cm、重さ173.3gで細粒砂岩製。18はⅠ区中3包含層出土で、残存している側面の使用はわずかであるが、表面はよく使用されておりわずかに凹んでいる。裏面は摩滅しているが使用された可能性があり、また火を受けたためか若干変色している。現存長9.1cm、厚さ2.5cm、重さ291.5gで砂岩製。19はⅡ区中5出土で、著しく欠損しており砥面は一面認められるのみである。重さ103.1gでシルト岩製。20はⅠ区南2攪乱出土で、表裏両面と残存する側面の使用が認められる。砥面は平滑で表裏面はともにやや凹んでいる。欠損面に楔を打ち込んだような痕跡が数ヶ所あり、意図的にうち割った可能性が考えられる。現存長14.2cm、厚さ6.5cm、重さ1666.8gで砂岩製。

21はⅡ区西4包含層出土で、扁平で細長い形態である。表面裏面ともに使用しており、裏面は稜がやや強くなっているが、顕著な平滑面はない。全長9.5cm、幅2.4cm、厚さ0.9cm、重さ30.1gでシルト岩製。22はⅡ区南5遺構面の出土で、裏面の平滑な平坦面が使用部位と考えられる。現存長8.4cm、幅3.2cm、厚さ2.4cm、重さ116.9gで片岩製。23はⅡ区中6遺構面の出土で、全面を使用しており稜は緩やかである。そのため面は平坦だが、全体的に丸みのある形態となっている。全長5.7cm、幅4.6cm、厚さ3.4cm、重さ161.0gで細粒砂岩製。24はⅡ区西1遺構面出土で、摩滅が激しいが砥面は表面のみと考えられる。同一面に一部打撃によって凹んだような箇所があるが、使用によるものか偶然欠けたものかは判然としない。なお、両側面をはずかい状に対になるように面取りを行っている。全長14.5cm、幅4.2cm、厚さ2.2cm、重さ260.0gで砂岩製。25はⅡ区中7暗褐色細砂出土で、欠損しており一側面が使用により非常に平滑であるが、表裏面ともに使用は部分的で凹凸を多く残している。現存長7.3cm、幅4.1cm、厚さ1.5cm、重さ59.5gでシルト岩製。26はⅠ区北7包含層出土で、扁平な形状である。表面は剥落が著しいが、わずかに残存する部分では擦痕が目立ち平滑となっている。現存長7.0cm、厚さ0.9cm、重さ28.3gで片岩製。

27～29は磨石である。27はⅡ区北1包含層出土で、扁平な円形に近い形状である。表裏両面使用しているようであるが、その痕跡は顕著ではない。縁辺部が数ヶ所剥離しているが、人為的に施したものは思われない。全長8.2cm、幅7.9cm、厚さ2.6cm、重さ303.0gでシルト岩製。28はⅡ区北3包含層出土で、欠損している。ほぼ全体的に使用されており、擦痕がよく残っている。特に裏面の使用が顕著で、面が平坦に近くなり縁辺部の稜がやや強く、また光沢を発している。残存長



第60图 石製品実測図③ (1/2)



第61図 土製品実測図 (1/2)

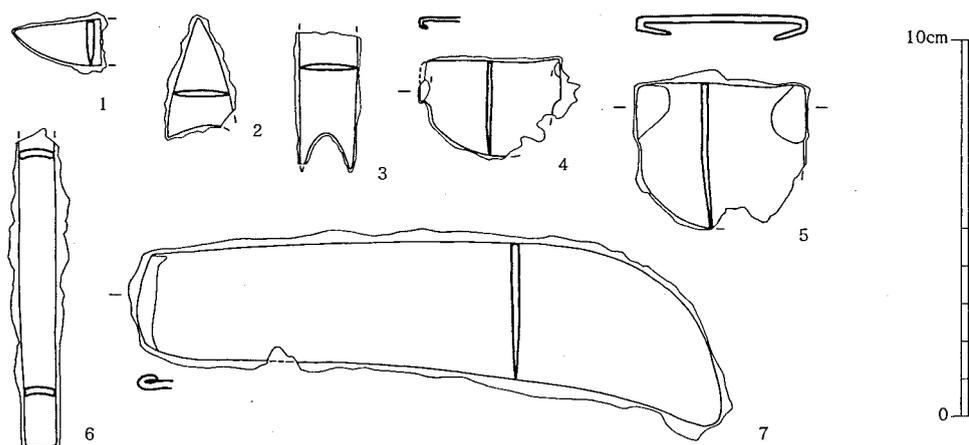
7.6cm、幅5.5cm、厚さ4.2cm、重さ243.5gで玄武岩製。29はⅡ区南2暗褐色細砂出土で、欠損している。表裏両面の使用は認められるものの顕著ではなく、端面の使用が著しく光沢を発している。現存長5.1cm、幅8.1cm、厚さ5.1cm、重さ334.7gで花崗岩製。

土製品 (図版33、第61図)

1～3はガラス小玉鑄型である。いずれも欠損している。1は44号竪穴住居跡、2はⅡ区中5包含層、3はⅠ区南1攪乱よりの出土である。表面の小玉形のくぼみは1・3が径0.3～0.4cmであるのに対し、2は径0.4～0.5cmと1・3に比べやや大きい。また小玉形のくぼみの中央部にある小孔も1・3が0.1cm程であるのに対し、2は0.2cm程とやや大きい。この小孔は1～3ともに裏面側へと先細りとなっており、1・2は完全に裏面まで貫通しているものばかりであるが、3では貫通しないものも含まれている。2では小玉形のくぼみ、小孔ともに黒色に変色しており、3は欠損部から小孔が一部変色しているのが確認できるため、使用に供したと考えられるが、1では明らかな変色等は確認できない。胎土は1・3が淡黄茶褐色であるのに対し2は淡黄灰褐色であるがいずれも精良で、焼成も良好である。1～3すべてにおいて裏面はケズリで仕上げしており、2・3では側面にもケズリを施している。さらに3は表裏面ともに中央部が高く周辺が低くなる弧状の断面形となる点が見てとれる。

上記のように、小玉形のくぼみの法量や胎土の特徴から2は1・3と異なる特徴を有している。

1は現存長3.4cm、厚さ0.9cmである。2は現存長4.0cm、厚さ1.0cmである。3は現存長6.9cm、厚さ0.9cmである。



第62図 鉄製品実測図 (1/2)

4～6は用途不明の土製品である。近世窯道具のハマと形態が非常に似ているが、胎土や焼成が明らかに異なっており、また4の出土位置から考えてもハマではなく、古墳時代のものである。

4は完形で円盤状の形態であり、5・6も欠損しているが同様の形態になると考えられる。4は20号竪穴住居跡カマド袖部付近出土で、胎土は暗褐色で細砂をやや多く含有し、焼成は良好である。径6.2cm、厚さ2.7cm、重さ139.1gである。5はⅡ区西包含層出土で、胎土は淡黄褐色で砂粒は非常に少なく精良である。接合部から分離したような欠損のあり方である。径6.5cmである。6はⅡ区西1遺構面出土で、胎土は黄灰褐色で細砂をやや多く含有し、焼成は良好である。径は7.5cm程度に復元でき、厚さ2.2cmである。以上の三点はともにナデによって表面を仕上げている。

7は表採の土錘で欠損している。孔が一箇所残存し、そこから紐かけ用の溝も続いており、そのような特徴から石錘を模倣した土錘と考えられる。胎土は暗茶褐色で、砂粒は非常に少なく精良である。表面は縦方向のミガキによって全面仕上げられており、また一部黒班が残存している。現存長5.0cm、幅3.5cm、厚さ4.0cmである。

鉄製品 (図版32、第62図)

1は18号竪穴住居跡出土の刀子の先端部である。現存長2.5cm、幅1.3cm、厚さ0.2cmである。

2・3は鉄鏃である。2はピット、3はⅡ区中6攪乱の出土である。ともに扁平な素材を鑿で切って加工したものと思われる。3は錆膨れがやや進行している。2は全長3.3cm、厚さ0.2cmで、3は現存長3.7cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmである。

4・5は側縁を小さく折り曲げ、平面形が鋤先に類似した小型の鉄器で小型鍛造鉄刃と呼ばれるものである。どちらもピットから出土。4は折り返し部が大きく欠損している。これらは12次調査の出土例と同様に明確な刃部が認めがたい。4は全長2.8cm、幅3.7cm、厚さ0.1cmで、5は全長3.9cm、幅4.5cm、厚さ0.2cmである。

6はⅡ区北1包含層出土で、ヤリガンナの茎と考えられ断面はやや弧状を呈す。また、錆膨れが進行している。現存長8.6cm、幅1.0cm、厚さ0.2cmである。

7はⅡ区中5出土の鉄鎌である。錆膨れが大きく進行し、劣化が著しい。先端部がわずかに反る点特徴的で、基部は折り返されている。刃部は先端と比較して基部の方が狭く作られる。全長15.3cm、幅4.2cm、厚さ0.2cmである。

第4節 古墳時代以外の遺構と遺物

1. 弥生時代の土坑と出土土器

13号土坑 (図版7、第63図)

I区中1の25号竪穴住居跡床面で検出した土坑である。北東隅と北西隅を校舎基礎によって攪乱されるが、ほぼ全体の形状が把握できる。軸が南北方向と平行し、一辺200cmの正方形プランを呈す。壁は比較的緩やかに立ち上がる。床面は南北155cm、東西175cmを測り、やや東西に長い長方形プランとなる。検出面からの深さは約20cm。

出土遺物は完形に復元できる甕・鉢など比較的良好な遺物が出土している。当調査区の中では唯一の弥生時代の遺構である。

出土土器 (図版20、第64図)

1は完形に復元される甕である。底部はレンズ状に近い平底をなし、体部の中位に最大径が位置する。体部の上半は内傾し、口縁部は短く開く。口縁端部は強い横ナデにより面をなす。内面の口縁部から体部上半にかけては横ハケ目、下半は縦ハケ目を行う。外面は全面縦ハケ目を行い、下半には先行する横方向の工具痕が見られる。胎土に砂粒を若干含み色調は薄茶灰色を呈す。

2は丸味を帯びた体部をなす甕。口縁部は短く外反し、屈曲部内面は稜をなす。口縁端部は強い横ナデを行い直立する面をなす。内面の口縁部は横ハケ目、体部は縦ハケ目を行う。外面の口縁部は縦ハケ目後横ナデ、体部上半は縦ハケ目、下半はヘラケズリに近い板ナデを行う。胎土には粗砂を若干含み色調は肌茶色を呈す。

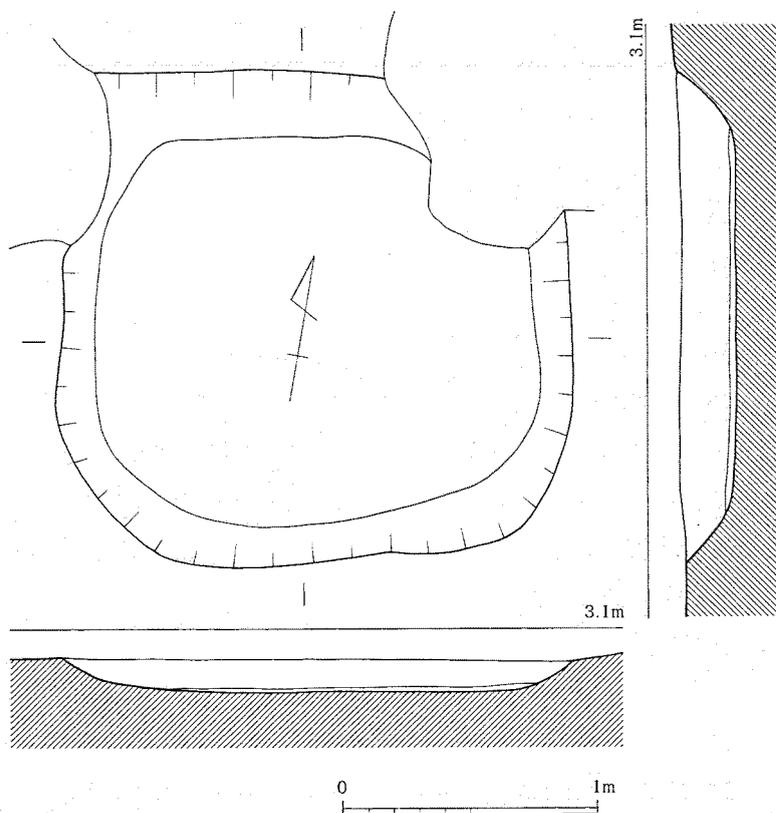
3は脚付甕の脚部である。やや外反しながら開き、端部は丸くおさめる。体部の内底部は工具によるナデ、外面は縦ハケ目。脚部内面は横ハケ目、外面は横ナデ。胎土に砂粒を若干含み色調は肌茶色を呈す。

4は小型の鉢である。底部はわずかにレンズ状をなす平底で、体部は半球形に近く、口縁部は上方へと立ち上がる。端部は水平面をなす。調整は内面横ハケ目、外面縦ハケ目。胎土に砂粒を若干含み色調は橙茶色を呈す。

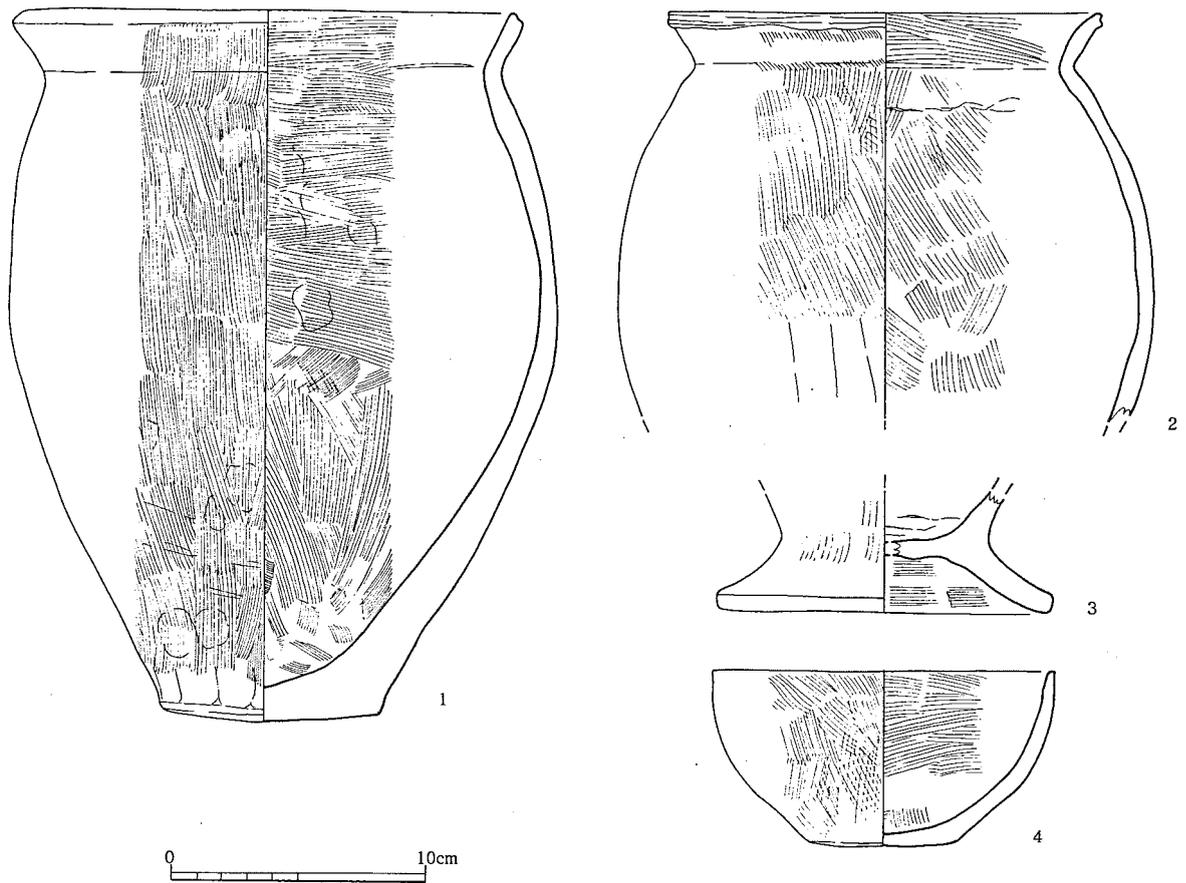
2. その他の弥生時代・古墳時代後期の遺物

弥生時代・古墳時代後期の土器 (第65図)

1・2は突帯文土器である。1



第63図 13号土坑実測図 (1/30)

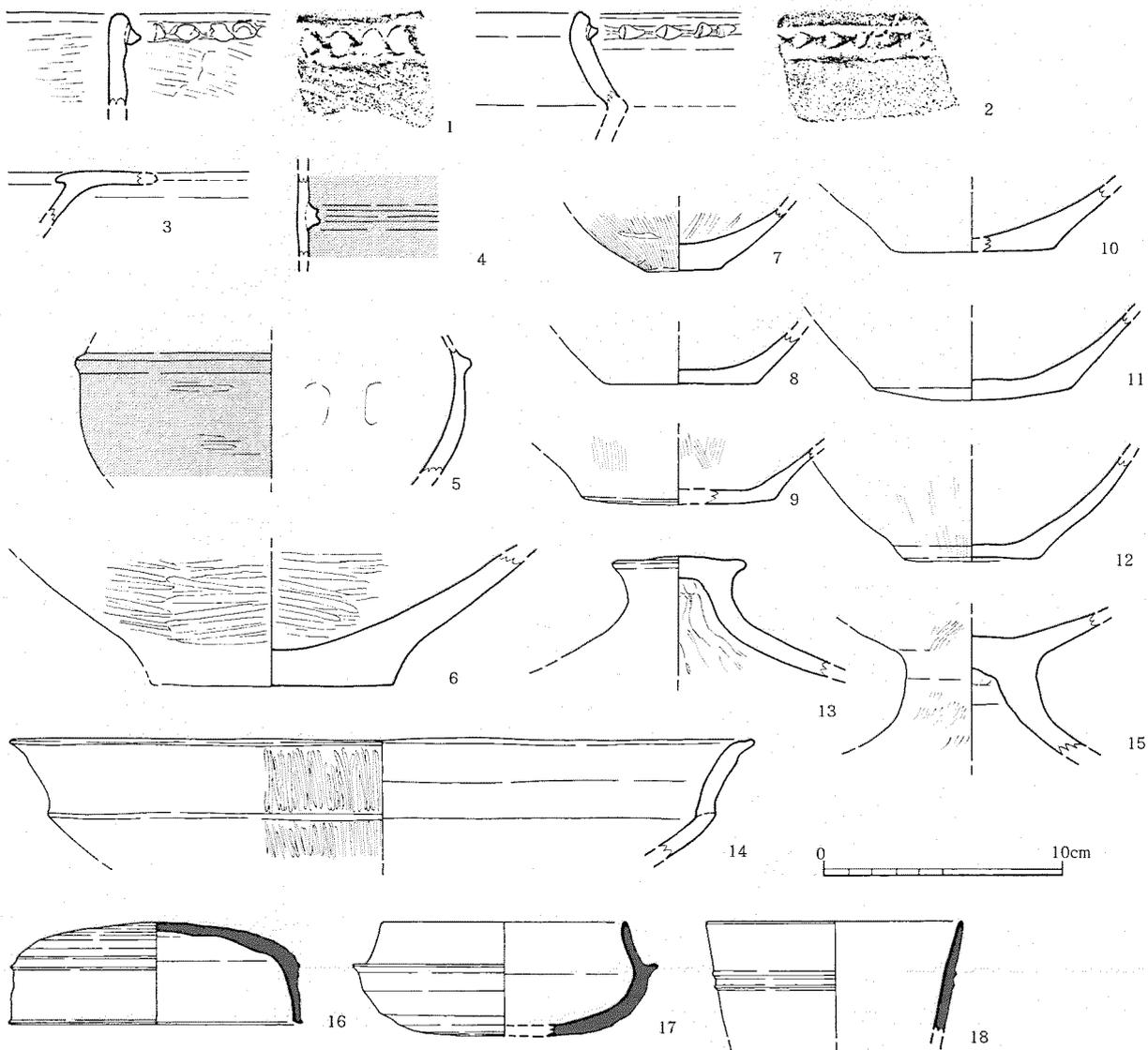


第64図 13号土坑出土土器実測図 (1/3)

は直立する口縁部で、外面の口縁部下に三角形の刻目突帯を貼付する。壁面の調整は内面横擦過後横ナデ、外面横方向の擦過。胎土に石英・長石・雲母を多く含み、色調は明茶肌色を呈す。焼成は良好。I区中5校舎基礎攪乱出土。2は内傾する口縁部で、外面の口縁部下に小さな刻目突帯を貼付する。調整は内外面とも横ナデを行っている。胎土に石英・長石の細砂粒を多く含み、色調は黄灰褐色～黄灰茶色を呈す。I区南5包含層出土。

3は弥生時代中期の壺口縁部。水平に長く伸びる鋤先口縁をなす。かなりローリングを受けており調整不明。胎土に砂粒をあまり含まない。色調は肌灰色を呈す。1号溝上層の黒褐色細砂層出土。4はM字突帯を巡らせる壺または甕。外面に丹塗りをを行う。胎土にあまり砂粒を含まず比較的精良。I区西5・6包含層出土。5は台形状の突帯を巡らせる壺。外面に丹塗りをを行う。内面の調整はナデを行い、指圧痕も見られる。外面は横ヘラミガキ。I区西1包含層出土。6は壺の底部。内外面とも横ヘラミガキを行う。胎土に砂粒を若干含む。I区北3攪乱出土。

7は小さな平底をなす甕または鉢の底部。内面はハケ目後ナデ、外面は縦ハケ目を行う。胎土に砂粒をやや多く含み色調は黄灰褐色を呈す。廃土中から出土。8は平底となる甕底部。胎土に砂粒を多く含み色調は茶褐色を呈す。I区中5遺構面出土。9は平底で内外面ハケ目を行う甕底部。色調は内面黒灰色、外面灰黄褐色を呈す。I区中2攪乱出土。10は平底となるもので、壺の底部か。内面はナデ、外面は風化が著しく調整不明。II区南3包含層出土。11はわずかにレンズ状の丸味を有す甕底部。内面はナデ、外面は板状工具によるナデ。I区中2校舎基礎攪乱出土。12は平底で器壁が薄い甕底部。内面は風化が著しく調整不明。外面は縦ハケ目。色調は黄茶色を呈す。I区東4攪乱出土。



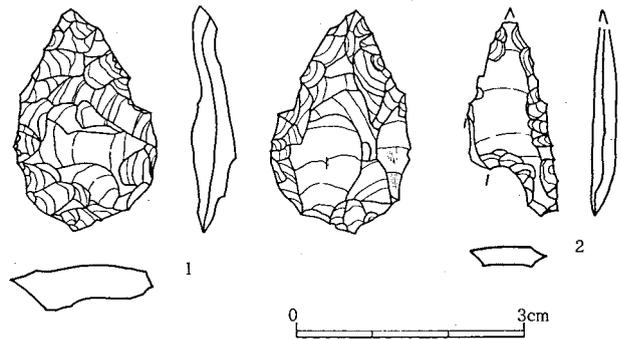
第65図 その他の弥生時代・古墳時代後期土器実測図 (1/3)

13は甕の蓋である。調整は内外面ともナデを行い、内面には指ナデの稜線が明瞭に残る。色調は白黄褐色を呈す。I区中1清掃時出土。14は高坏の口縁部。破片からの復元径なので径にやや不安が残る。屈曲部より上は短く外反し、端部は薄く尖る。内面はヘラミガキを行うと思われるが風化が著しく見えない。外面は縦ヘラミガキ。胎土に砂粒を若干含みあまり良くない。色調は黄肌色を呈す。I区中6校舎基礎攪乱出土。15は内面ナデ、外面ハケ目を行う高坏。胎土に砂粒を多く含み色調は黄灰褐色を呈す。I区中4遺構面出土。16~18は須恵器である。16は坏蓋。端部の内面がシャープな稜をなす。径12.2cm、高4.3cm。胎土は精良で色調は黒灰色を呈す。天井部に「昭和六年・・・」と墨書がある。恐らく学校に陳列されていたものが廃棄されたものであろう。17は立ち上がりか内径してやや長く伸び、端部は直立する。受け部径12.8cm、器高4.8cm。18は破片からの復元径なので径に自信がないが、平瓶の口縁部か。外面に二条の突帯を巡らせる。

弥生時代の石製品 (図版33、第66図)

1は黒曜石製石鏃でII区中2包含層の出土である。不純物が少なく良質な素材を用いている。両

面ともに主要剥離面を残しつつ主に側縁部に粗い剥離調整を行っている。また微細剥離が若干認められる。全長3.0cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm、重さ2.5gである。2は表採による凹基式の黒曜石製打製石鏃で、端部が一部欠損している。不純物が少なく良質な素材を用いている。表裏面ともに大きく主剥離面を残し、縁辺部のみ調整剥離を行っている。現存長2.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.8gである。



第66図 弥生時代の石製品実測図 (1/1)

3. 近世・近代の遺構と遺物

1号土坑 (図版3、第67図)

I区南7で検出した土坑である。規模は長軸140cm、短軸110cmを測り、南北に長い不整楕円形プランを呈し、北側よりも南側が若干広くなる。壁の立ち上がりは緩やかである。底面は中央より西側に寄っており、検出面からの深さは35cmを測る。南北に長い楕円形をなし、長軸75cm、短軸30cmを測る。東側には南北に長いテラスを有しており、深さ15cm、長軸85cm、短軸30cmを測る。

覆土は第1層、第2層に分かれ、上層の第1層はよく締まった暗褐色細砂層で炭を多く含み、下層の第2層はやや締まりのある茶褐色細砂層でやはり炭を若干含む。

出土遺物は図示した土師器小皿以外に若干の近世陶磁器が出土した。また第89図2のトチンも出土した。

出土遺物 (図版34、第68図)

1・2は土師質の小皿である。1は口径8.2cm、器高1.4cm、底径6.4cm。底部糸切り。口縁部に油煙が付着する。2は口径8.4cm、器高1.2cm、底径6.8cm。底部糸切り。全面に油煙が付着する。

2号土坑 (図版3、第67図)

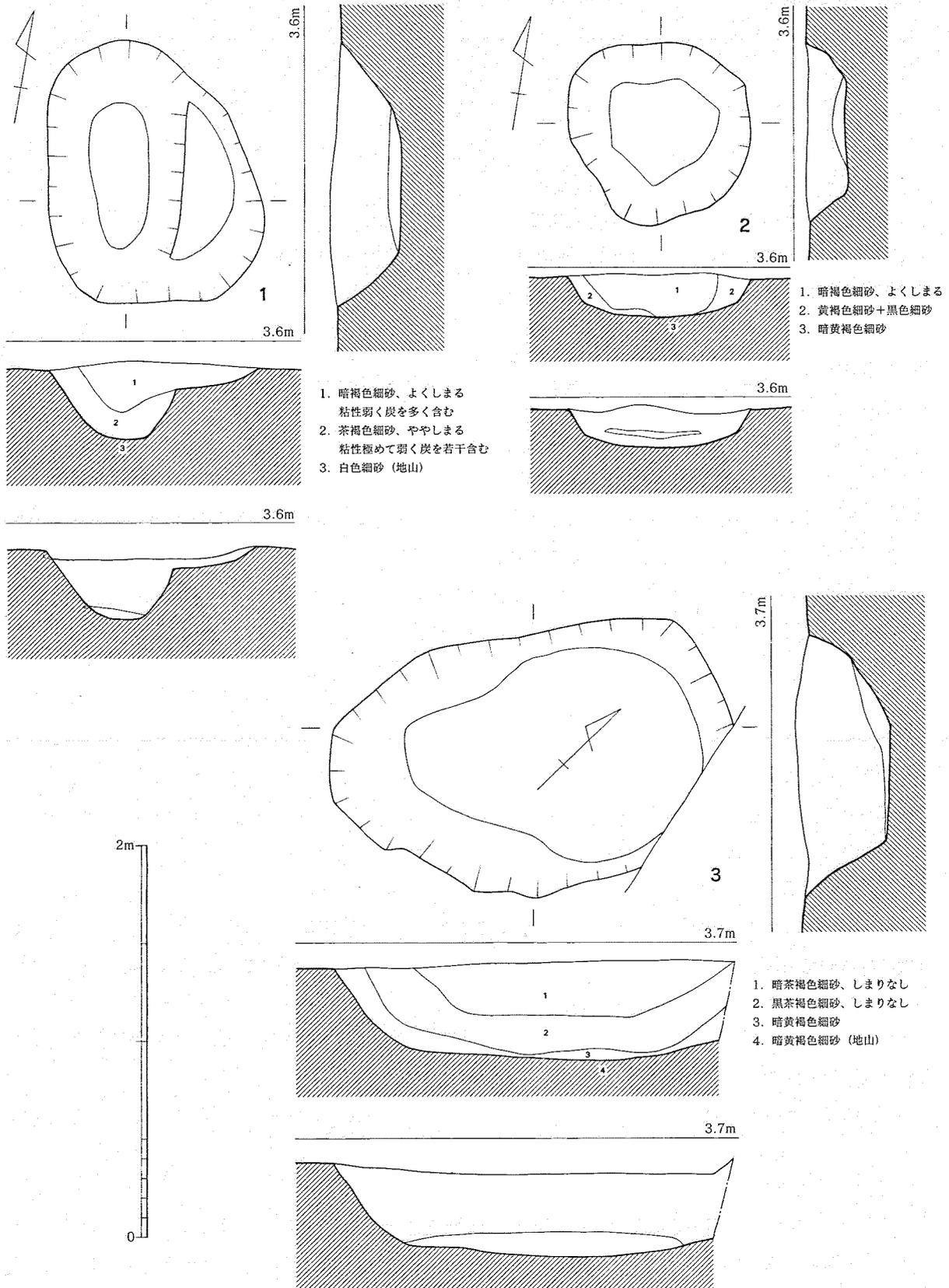
I区南6で検出した土坑で、1号土坑の南西に位置する。18号竪穴住居跡に切り込んでいる。平面形は径90cm前後の不整円形プランとなる。壁の立ち上がりは緩やかである。底面も平面形に合わせて径50cm前後の不整円形を呈す。検出面からの深さは約20cm。

覆土は第1層・第2層に分かれ、第1層が大半を占める。第1層は締まりのある暗褐色細砂層、第2層は壁際に堆積し、黄褐色細砂と黒色細砂とが混じった層である。

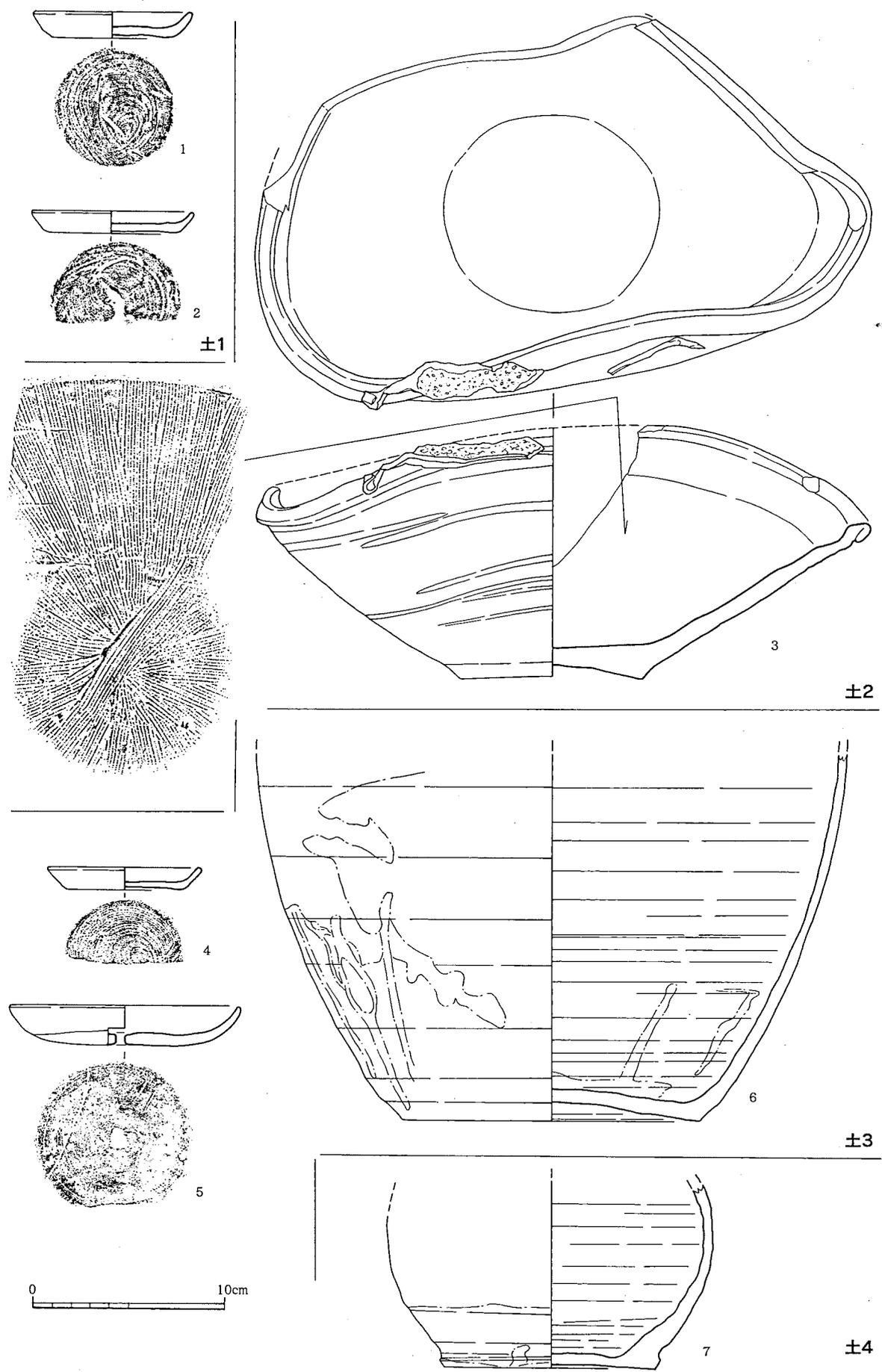
出土遺物は図示した陶器播鉢以外には細片しか出土していない。図示した播鉢は明らかに焼き損じ品であり、付近に雑器を生産した窯の存在を予想させる。

出土遺物 (図版34、第68図)

3は著しく焼け歪んだ陶器播鉢である。全面に鉄釉を塗布する。播目は11本を1単位とするもので、隙間なく施文する。口縁部には、藁灰釉にナマコ釉を流し掛けた、恐らく甕と思われるものの破片が付着する。



第67図 1~3号土坑実測図 (1/30)



第68图 1~4号土坑出土陶磁器等实测图 (1/3)

3号土坑 (図版3、第67図)

2号土坑同様 I 区南6で検出した土坑で、2号土坑の北側に位置する。東側が校舎基礎によって失われる。長軸200cm、短軸130cmを測り、北東-南西方向に長い楕円形プランを呈す。北側の方が南側に比べてやや幅広い。壁の立ち上がりは南西側が緩やかで、北東側はこれよりもやや急になる。底面は平面形同様不整楕円形プランを呈し、長軸150cm、短軸110cmを測る。深さは約45cm。

覆土は第1層~第3層に分かれ、レンズ状に堆積しており自然堆積の状況にある。第1層は暗茶褐色細砂層で締まりがない。第2層は黒茶褐色細砂層でやはり締まりがない。第3層は最下層に薄く堆積する暗黄褐色細砂層である。

出土遺物 (図版34、第68図)

4は土師質の小皿である。口径6.0cm、器高1.2cm、底径5.9cm。底部糸切り。遺存する部分では油煙は見られない。5は土師質の皿である。底部には焼成後の穿孔を行う。口縁部内面に油煙が付着する。胎土は比較的精良で色調は黄灰色を呈す。6は陶器甕。底部はやや上げ底で、胴部は1ヶ所窪みがある。外底面を除く全面に藁灰釉を施釉し、外面にはその上からナマコ釉を流し掛けする。胎土は黄灰色を呈し非常に緻密である。

4号土坑 (図版4、第69図)

I 区東3で検出した土坑である。平面形は径120cmの円形プランを呈す。壁の立ち上がりはほとんど垂直に近い。底面は径95cm、深さは125cmを測る。底面は中央が最も深く、周辺がやや浅くなる。出土遺物は少ない。

出土遺物 (第68図)

7は陶器壺の下半部片である。釉は底部を除く外面に施釉され、木灰釉の上から藁灰釉を二重掛けする。胎土は砂粒を若干含み、黒灰色を呈す。

5号土坑 (図版4、第69図)

I 区中5で検出した土坑である。平面形は東西に長い長方形プランを呈し、長軸165cm、短軸85cmを測る。壁はやや急な立ち上がりとなる。底面は長軸130cm、短軸60cmを測り、ほぼ平面形に沿った形状をなす。

土坑内には多量の陶磁器・貝殻等が堆積していた。廃棄土坑として使用されたものであろう。出土遺物は図示した陶磁器などの他、第89図11の窯道具が出土した。

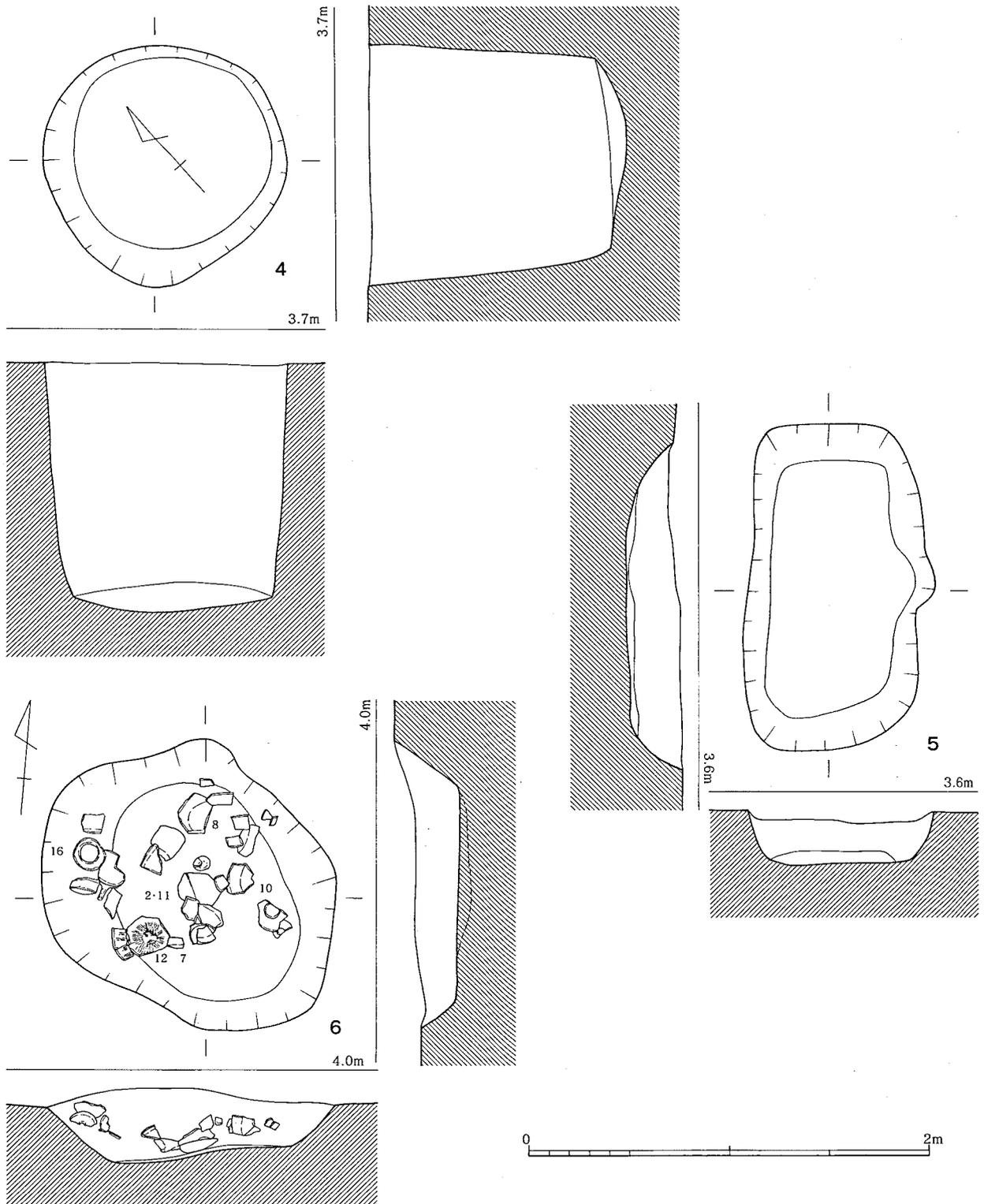
出土遺物 (図版34・35、第70・71図)

1・2は端反の小杯である。1は外面に圏線と笹葉をあしらったもの。内面は無文。鮮やかなコバルトブルーに発色する。高台は薄く、暈付は露胎。2は蛇の目高台となる。外面には笹文、蓮花文、吉祥句、高台には櫛歯文を描く。内面は無文。鮮やかなコバルトブルーに発色する。

3~5は小丸碗。3は内面無文、外面枯枝文。4は内面無文、外面幅広の圏線と蕨状草文。5は3・4と比べて高台が小さい。内面見込みに崩れた形の五弁花文、外面には圏線と竹笹文を描く。

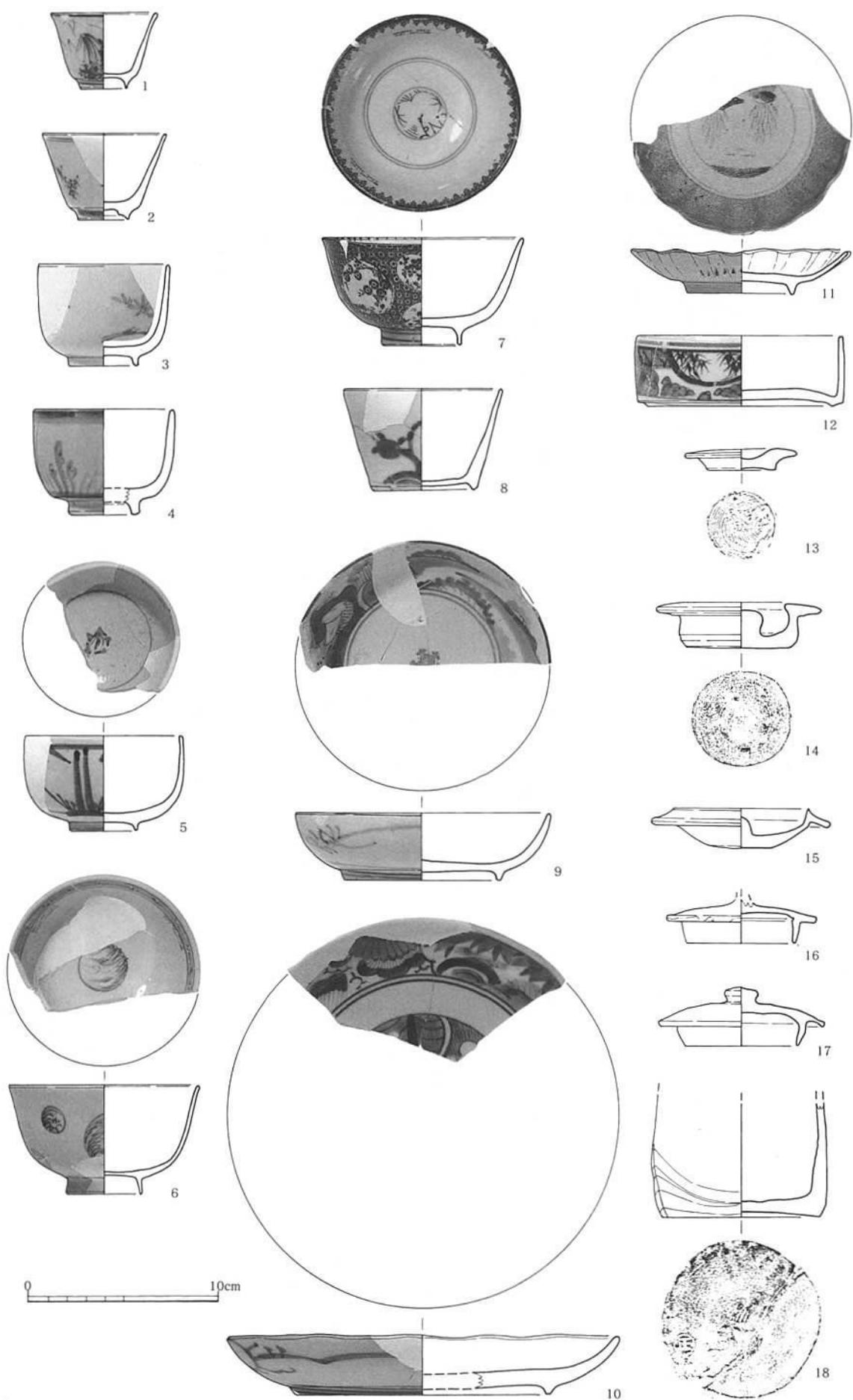
6・7は碗。6は口縁部内面に雷文、見込みと外面には丸にススキを描く。7は内面見込みに圏線と草木文を手書きで描き、外面と内側面は印判による施文を行う。

8はいわゆる蕎麦猪口。外面には圏線と椿に似た草花文を描く。

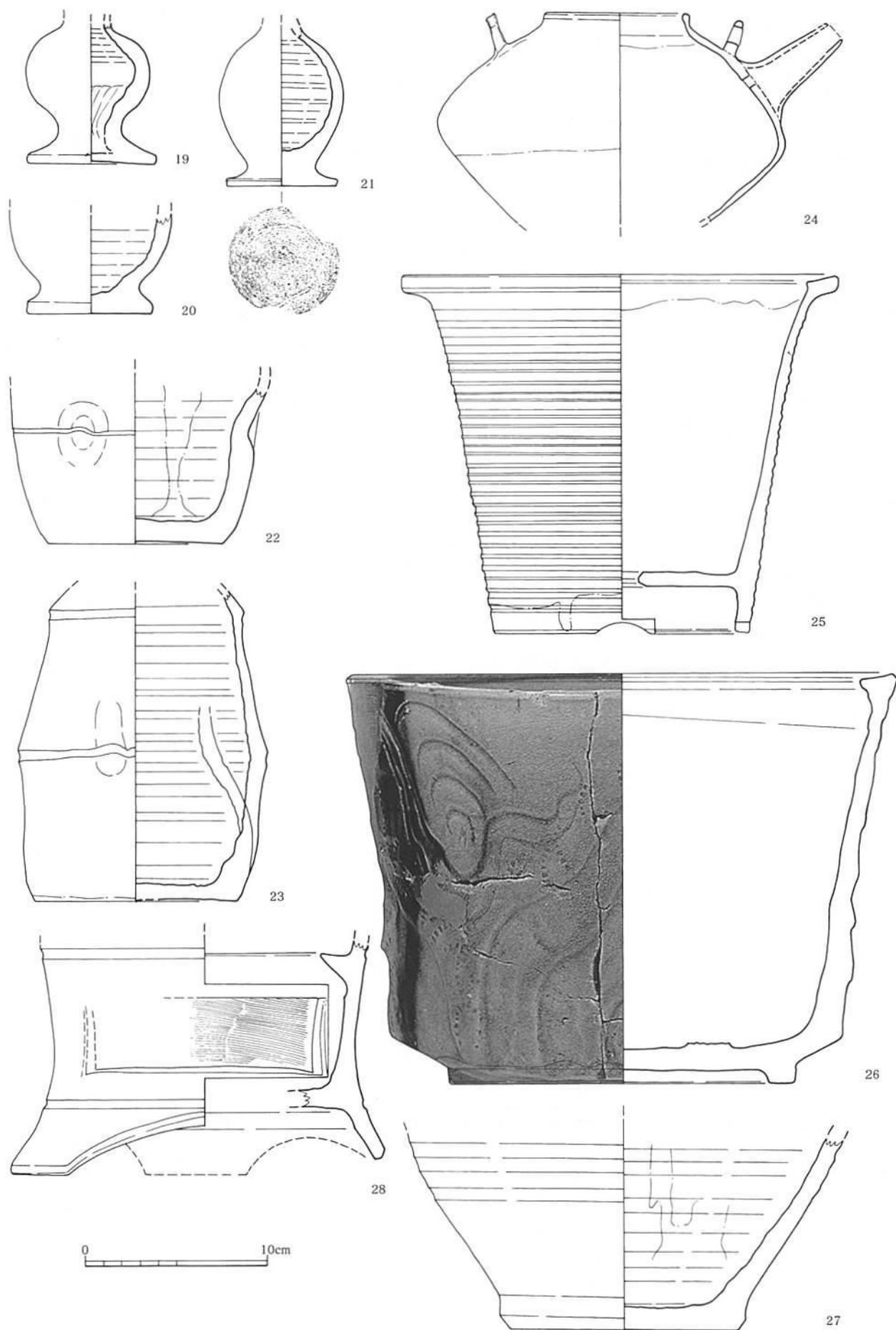


第69図 4~6号土坑実測図 (1/30)

9~11は皿である。9は口縁部には口紅を施し、内面見込みには五弁花文、内側面には草花文、外側面には唐草文と圏線を描く。外底面には「□□年製」とある。10は内側面に笹・花文を描き、外側面には唐草文を描く。外底面には目跡が1ヶ所認められる。11は型打ちの鎬蓮弁皿。内面の口縁部は濃み、見込みには草文、外面には列点文。発色が悪い。



第70图 5号土坑出土陶磁器等实测图① (1/3)



第71图 5号土坑出土陶磁器等实测图② (1/3)

12は体部が直立する鉢。外側面に松竹梅をあしらい、口紅を施す。

13～17は陶器の蓋である。13はツマミが無いもので、壺の蓋か。上面にのみ鉄釉を施釉する。径6.0cm、器高1.1cm。14は擬宝珠ツマミがつくもので、やはり壺の蓋か。ツマミは中心からずれた位置にある。上面には藁灰釉を施釉する。底面はヘラケズリにより平滑に器壁を整える。胎土は精良。15～17は土瓶の蓋であろう。15は半球形のツマミを有し、上面に無色釉を施釉する。胎土は精良で砂粒を含まない。16は藁灰釉で、梅枝文の鉄絵を描く。17は低平な擬宝珠ツマミを持つ。釉は鉄釉。胎土の粗さが目立つ。

18は壺か。底部は円形だが体部は方柱状となる。底面を除く全面に藁灰釉を施釉する。底面には丸に「正」の印刻がある。

19～21は陶製の仏花生である。19は球状の体部をなし、底部付け根のくびれが著しい。外面に透明釉を施釉するが焼きが悪くガラス化していない。底部は糸切り。20は鉄釉を施釉するもの。21も鉄釉のもので、体部は縦長の球形をなす。くびれはあまり強くない。底面は糸切り。

22・23は「ぺこかん徳利」と呼ばれる、体部を窪ませた徳利である。22は体部に一条の沈線を巡らせる。鉄釉を施釉するが発色が悪く、失敗品であろう。23も鉄釉のもので、やはり体部に一条の沈線を巡らせる。窪みは3ヶ所に見られる。

24は土瓶である。体部は算盤形をなし、上半に青緑釉を施釉する。

25は植木鉢である。口縁部は折り返され、四角く肥厚する。外面には藁灰釉が施釉され、体部は薄緑色に、口縁部は白色に発色する。

26は大型の瀬戸系鉢である。体部は外反しながら上方に立ち上がっており、口縁部は内側に三角形に肥厚する。外面には流水文を半肉彫りする。釉は底部を除いて全面に施釉され、藁灰釉にナマコ釉を流し掛けている。内面の5ヶ所に目跡がある。27は鉄釉の甕底部である。底径13.5cm。

28は土師質の七輪である。脚部は三方にくり込みを持つ。内面は横ハケ目、外面は横ナデを行い、体部と脚部の境には広い凹線を巡らせる。

6号土坑 (図版4、第69図)

I区北2で検出した土坑である。平面形は北西—南東方向に長い不整楕円形を呈し、長軸145cm、短軸120cmを測る。壁は比較的緩やかに立ち上がる。底面はやはり楕円形を呈し、長軸120cm、短軸85cmを測る。深さは西側が最も深く35cm、東側は25cmを測る。

覆土は黒褐色細砂の単一層で、覆土内からは遺物がまとまって出土した。いずれも底面からはやや浮いた状況である。完形のもの無く、破碎されているものばかりである。

出土遺物 (図版35・36、第72・73図)

1は磁器碗である。外面の下半部以下は露胎となる。発色が悪く透明感に欠ける。

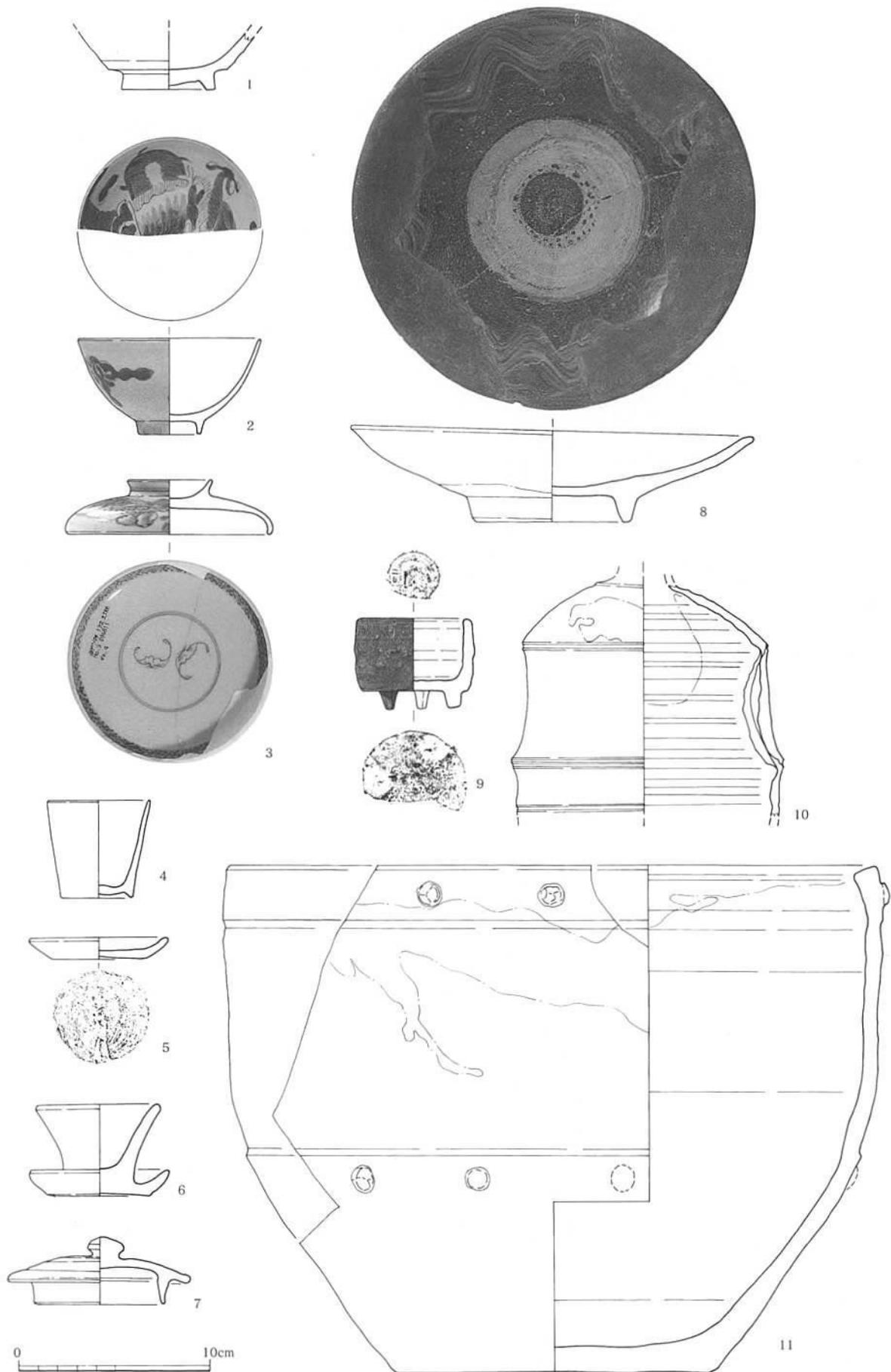
2は染付の小碗。内外面に龍を描く。3は蓋付碗の蓋である。内面見込みは圈線と蝶、口縁付近は四方禳、外側面には牡丹と蝶、頂部には「太明年製」と記す。

4は蕎麦猪口形の小型の杯。染付は無い。

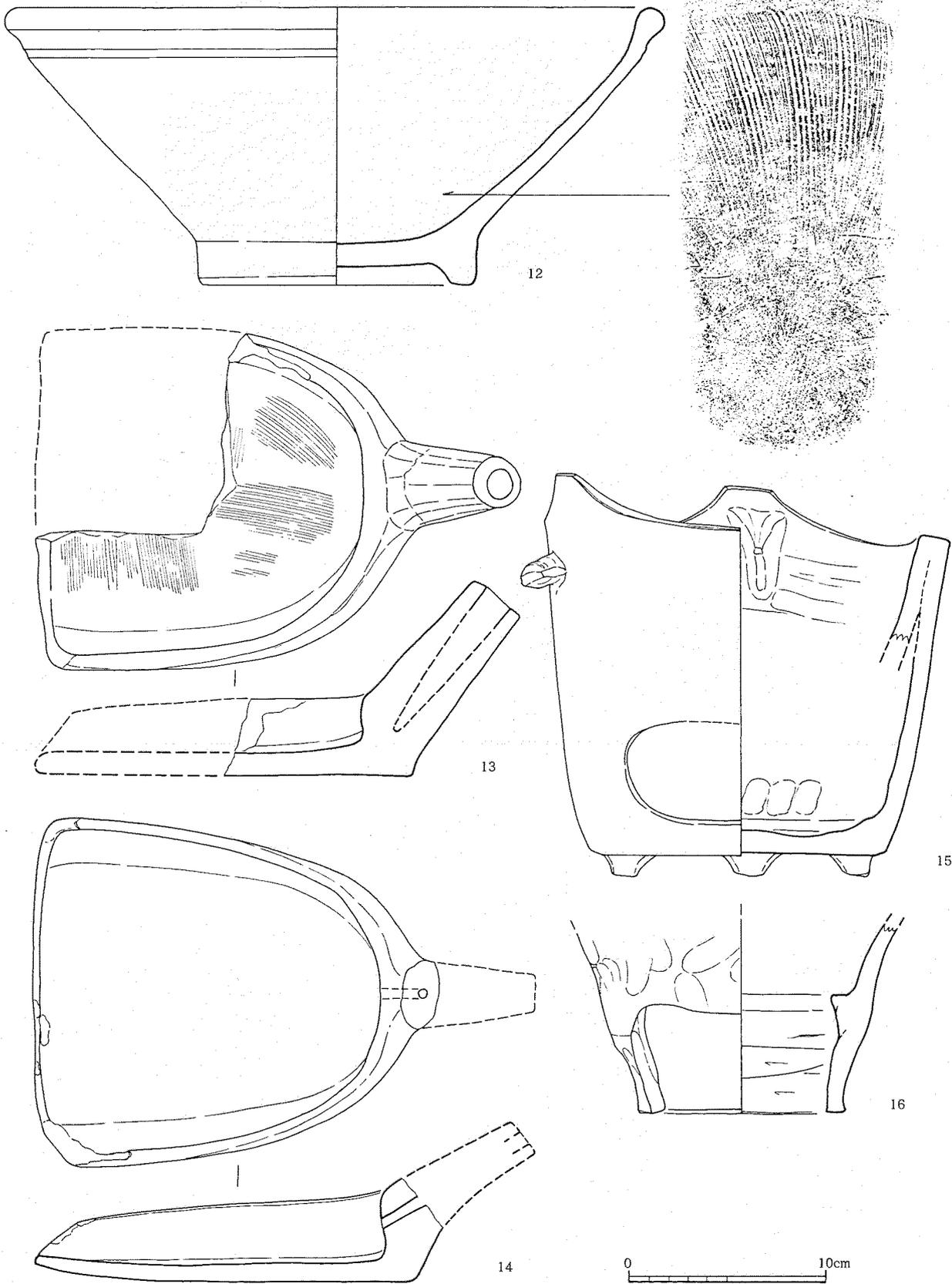
5は土師質の皿。口径7.2cm、器高1.2cm、底径4.9cm。油煙は無い。底部糸切り。

6は土師質の油受け皿。口径6.5cm、器高4.9cm、底径5.3cm。口縁部に油煙が付着する。

7は土瓶の蓋である。ツマミは擬宝珠形をなす。釉は鉄釉で上面にのみ施釉される。胎土は茶褐色



第72图 6号土坑出土陶磁器等实测图① (1/3)



第73图 6号土坑出土陶磁器等实测图② (1/3)

を呈し砂粒を若干含む。上面には重ね焼きの目跡が残る。

8は陶器の皿。藁灰釉を施釉し、ハケ目による波状文を描く。内面見込みは釉掻き取り。

9は三足付の香炉か。外面に藁灰釉を施釉する。外側面と内面見込みに菊花文と方渦文を印刻する。底面には線刻文字が見られるが、判読できなかった。胎土は非常に精良である。

10はぺこかん徳利。釉は鉄釉地に藁灰釉を流し掛けている。肩部、体部中位、その下位の3ヶ所に沈線を巡らせる。

11は大型の鉢。体部中位で屈曲し、上半は直立する。口縁部はやや肥厚し上端が面をなす。体部中位と口縁部下に段があり、それぞれ円形の粘土を貼付する。また体部には線刻文様が施される。釉は口縁部のみ施釉され、鉄釉の上から灰釉を流し掛ける。

12は播鉢である。口縁部は丸く肥厚する。内面の播目は7本を1単位とし、密に施文される。釉は鉄釉を施釉しているが、焼き上がりが悪くガラス化していない。

13・14は土師質の十能である。13は平行タタキによる叩き締めを行った後、ハケ目による最終調整を行う。把手は筒状をなし、指ナデ整形である。表面、裏面とも煤が付着する。胎土は黄灰色を呈し砂粒を若干含む。14は全面ナデ調整によるもの。把手は欠損する。裏面にのみ煤が付着する。胎土に砂粒を若干含む色調は肌茶色を呈す。

15・16は土師質の七輪である。15は三足を持ち口縁部は三方にくり込みを入れている。調整は内外面とも丁寧なナデを行う。内面の上方のみ煤が付着する。胎土に砂粒を若干含む色調は茶色を呈す。16は非常に雑な作りのもの。内面には横方向のヘラケズリが見られ、外面は指圧痕が明瞭に認められる。内面の上半に煤が付着する。

7号土坑 (図版5、第74図)

I区南8で検出した土坑である。東側が校舎基礎によって攪乱を受けるが、ほぼ旧状を知りうる。平面形は東西に長い不整楕円形を呈し、長軸230cm、短軸150cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、特に南側に比べて北側が緩やかである。底面はやはり東西に長い楕円形を呈し、長軸200cm、短軸90cmを測る。深さは西側が最も深く70cm、東側は55cmを測る。

覆土の堆積は上層の第1～第6層と、下層の第7層～第10層とに大きく分かれる。第11層は地山の黄灰白色細砂層で掘りすぎたもの。上層には炭を多く含む。出土遺物は図示した陶磁器などの他に第89図10の窯道具が出土した。

出土遺物 (図版36、第75図)

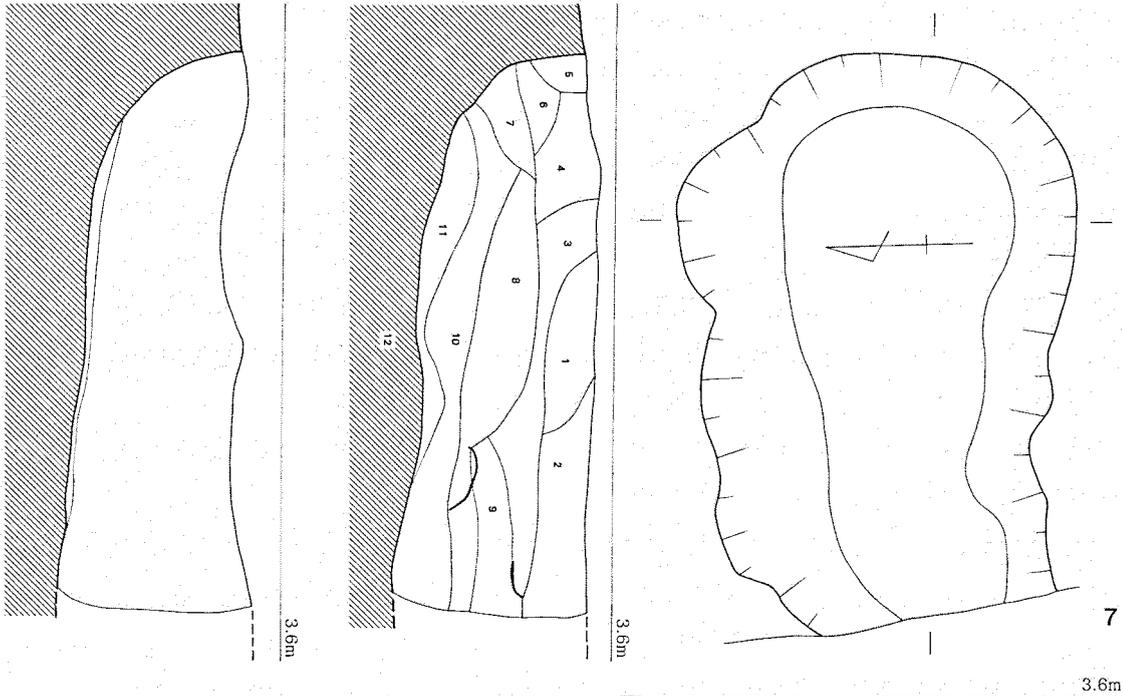
1は紅皿である。深みのある体部をなし、口縁部は薄く尖る。

2は深みのある磁器碗。高台畳付のみ露胎となる。釉は灰白色に発色する。

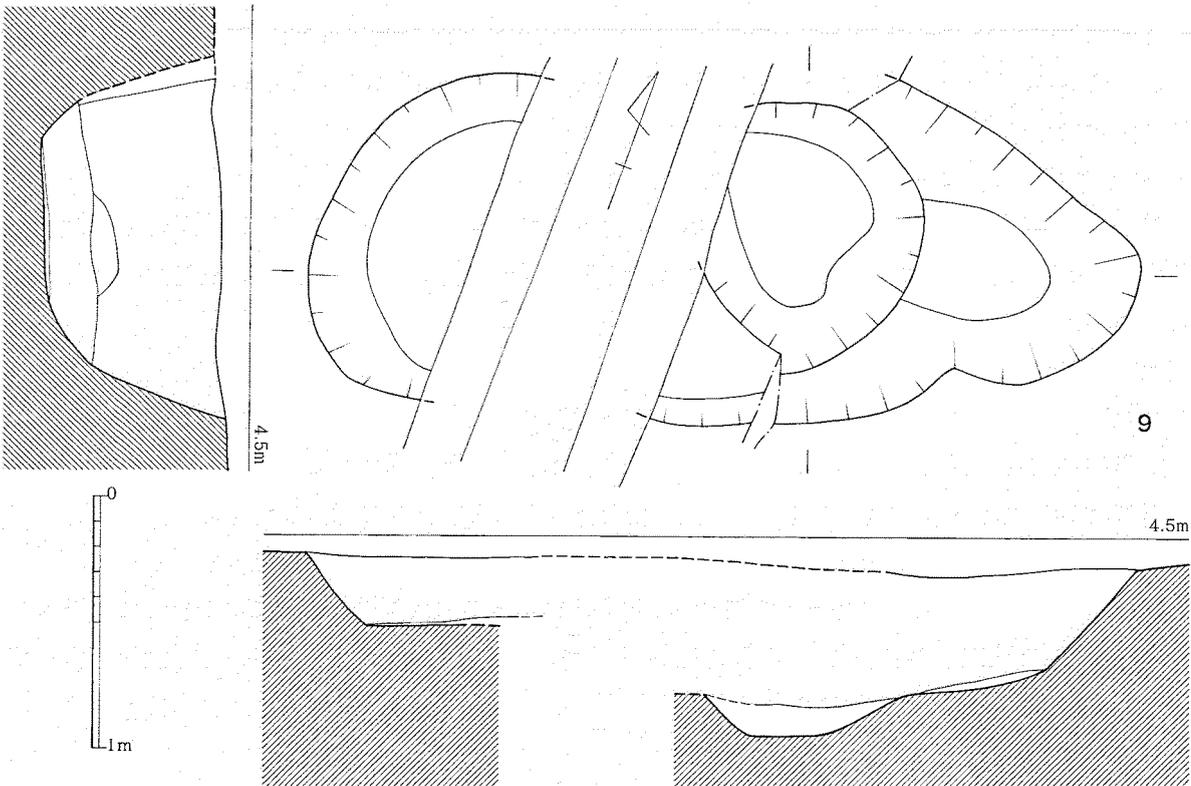
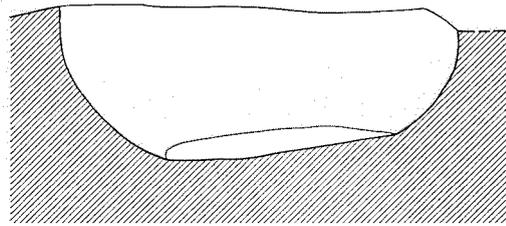
3は陶器碗。浅い丸形の体部をなす。高台付近は露胎となる。内面には鉄絵の花文を描く。

4は陶器壺。体部上半に櫛描沈線を巡らせ、外面の底部以外に藁灰釉を薄く施釉する。

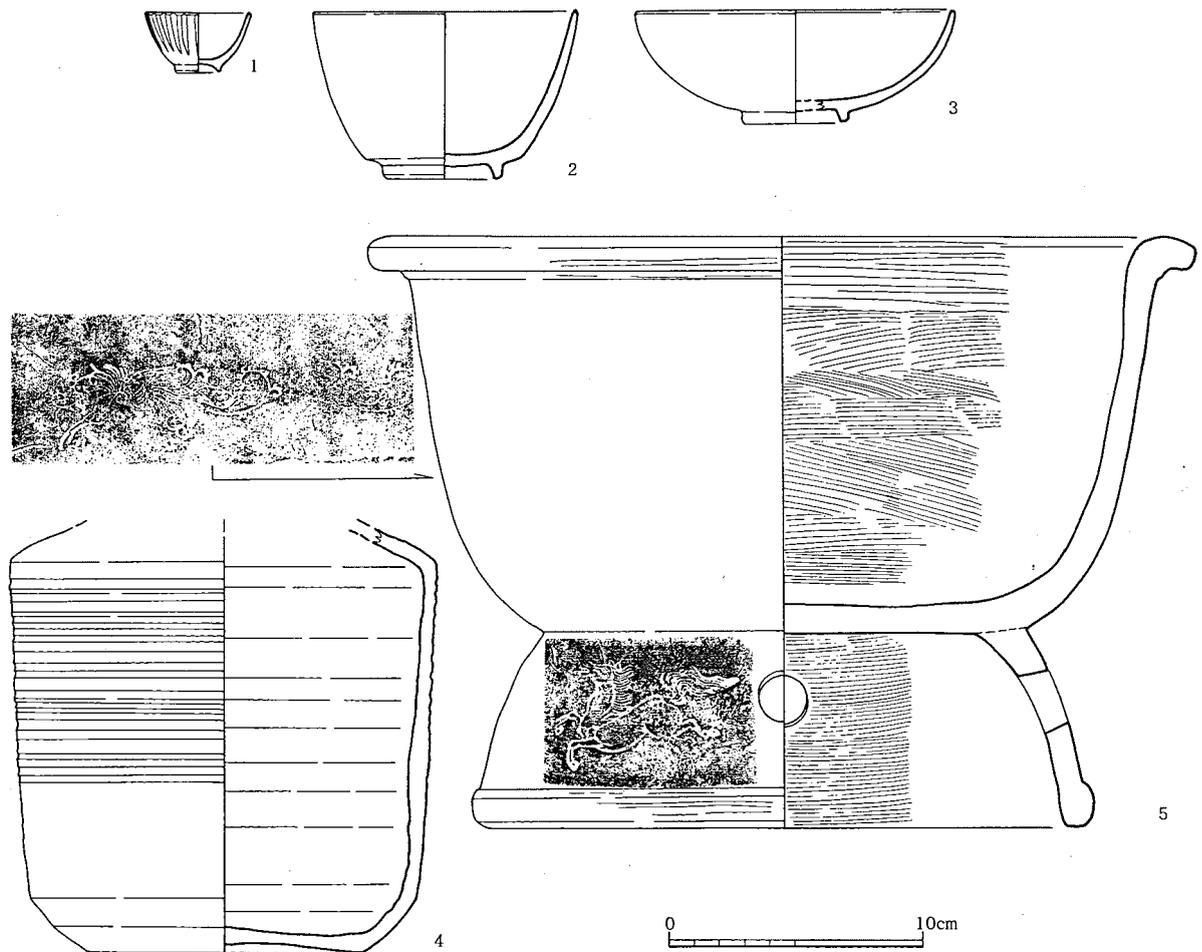
5は瓦質の火鉢である。口縁部は外側に短く折り曲げられる。体部外面にはスタンプによる草花文を巡らせる。裾部はやや内湾し、端部は外側に丸く肥厚する。裾部のほぼ中位には円孔が4方向に配され、またスタンプによる麒麟を陰刻する。体部、裾部とも内面は横方向のハケ目調整を行う。器表は蒸されて黒色を呈す。



1. 暗黒褐色細砂、やや締る、炭若干含む
2. 明褐色細砂、やや締る
3. 褐色細砂、やや締る、炭若干含む
4. 2とほぼ同
5. 黄灰白色細砂、締りなし（地山）
6. 3とほぼ同
7. 6より若干明るい
8. 茶褐色細砂、炭含まない
9. 黒色細砂、やや締る
10. 8よりやや明るい
11. 黄灰白色細砂、締りなし（地山）
12. 地山



第74図 7・9号土坑出土実測図 (1/30)



第75図 7号土坑出土陶磁器等実測図 (1/3)

9号土坑 (図版5、第74図)

I区南8・9で検出した土坑で7号土坑の北東に位置する。中央のやや西側を基礎によって大きく切られている。平面形は東西に長い不整楕円形プランを呈し、長軸330cm、短軸140cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。底面は中央北側が最も深く、検出面からの深さは70cm、径約65cmの不整円形プランを呈す。また東・西・南側にそれぞれテラスを有しており、東側は深さ45cm、西側は30cm、南側は45cmを測る。

遺物は非常に少なく、細片が若干出土したのみである。

1号埋甕 (図版8、第76図)

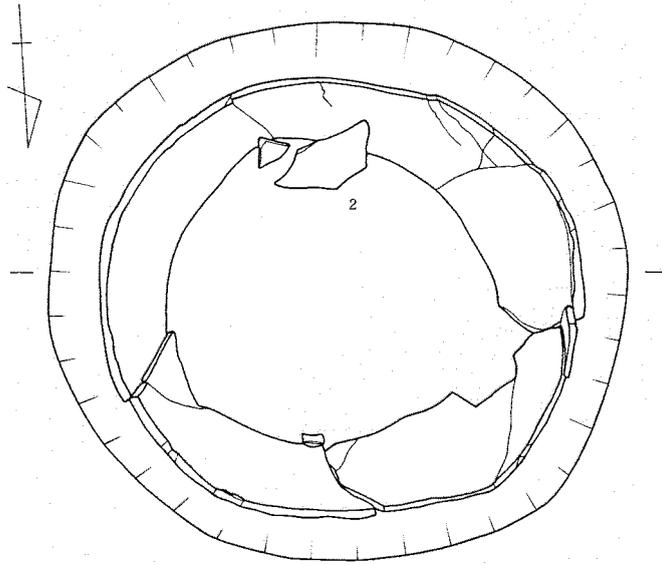
I区東7で検出した。掘り方は径150cmの円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は径100cmの円形を呈す。この掘り方のほぼ中央に、底部を打ち欠いた甕を据え置く。甕は本来はもっと深かったと思われるが、上部は削平されている。

甕の中に落ち込んだ状態で、半島系陶質土器片が出土している。明らかに混入品であり埋没過程で落ち込んだものであろう。

出土遺物 (図版42、第77図)

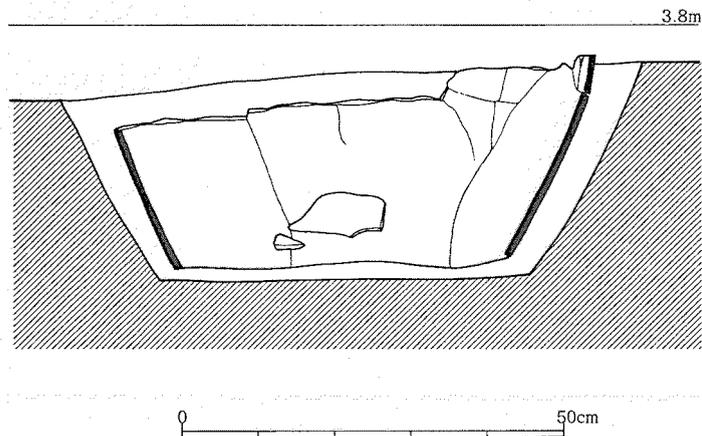
1は瓦質の大型甕である。外面は器表が完全に剥落しており調整は不明である。内面はハケ目調整を行うが、整形時の指圧痕が粘土接合部に沿って多く残る。胎土には粗砂が多く含まれる。

2は半島系の壺片である。内面はナデ、外面は正格子タタキを行うが、どちらも方向が一定していない。底部かそれに近い部位のものであろう。器壁は非常に厚く、1cmを超える。胎土には砂粒を少量含むが概ね良質な粘土を使用する。色調は内外面とも黒灰色を呈し、断面は紫茶色を呈す。陶質に焼成され、堅緻に焼き上がる。



1号旧校舎基礎 (図版9、第78図)

1区西4で検出した遺構である。明治30年頃から建設が開始された旧制中学修猷館の校舎基礎である。ほぼ東西に伸びる東西列と、この列の東端で直角に曲がり南北に伸びる南北列とがある。東西列の西側、南北列の南側は調査区外へと続いている。それぞれコーナー部までを含めた長さでは、東西列長420cm、幅60~80cm、高さ40cm、南北列長



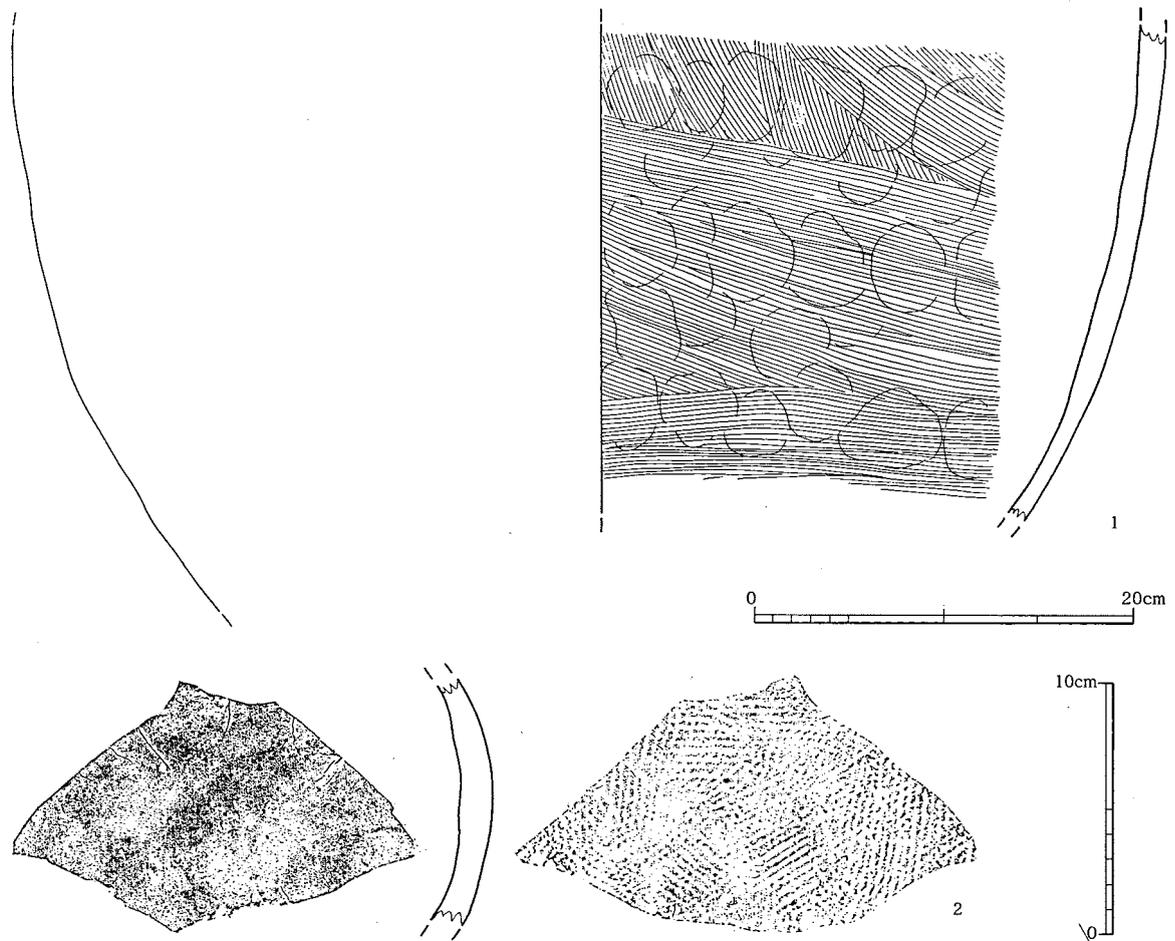
第76図 1号埋甕実測図 (1/10)

320cm、幅55~70cm、高さ40cmを測る。石の積み方は、まず大振りな石を並べ、その隙間に小振りな石を詰め込んでいる。コーナー部は特に大きな石を中心にして、他のところよりもやや幅広く石を積み上げる。

石材は付近で産出する砂岩の割石を使用しており、切り出す際のノミ痕が残るものも少なからず見られる。

2号旧校舎基礎 (図版9、第78図)

やはり明治30年頃に建設された旧制中学修猷館の校舎基礎である。1区南1で検出した遺構で、ほぼ東西に伸びる。すぐ南側に近世の大型ピットがあり、この上に一部懸かって営まれている。東西両端が校舎基礎によって切られており、遺存する部分では長さ240cmを測る。幅は55~70cm、高さは40cmを測る。構築方法や石材は1号旧校舎基礎と同様である。この基礎の東側には、この基礎と軸を合わせて溝が伸びている。本来は2号旧校舎基礎の延長で石列が続いていたのではないかと思われる。



第77図 1号埋甕・出土土器実測図 (1:1/4, 2:1/3)

3号旧校舎基礎 (図版9、第79図)

Ⅱ区南1・2で検出した遺構である。位置からすれば大正3年に開設された旧制中学修猷館時代の書庫と図書閲覧室にあたる。南北に伸びる石敷と、東西に長く伸びる石列とからなる。南北の石敷は幅200cm、長さ180cmを測る。さらにこの石敷の西端から伸びる石列は130cmを測り、本来はこの石列が続く位置まで石敷があったものと推察される。石敷は30~50cm程の扁平な割石を平らに敷き詰めている。東西両端の石は、面を揃え一段高く積み上げられる。東西に長く伸びる石列は、長さ900cm、幅50cmを測る。使用する石材は1・2号旧校舎基礎と同様、割石の砂岩を使用する。切り出す際のノミ痕が残るものも少なくない。

4. ピット、遺構面、攪乱出土の近世・近代陶磁器等

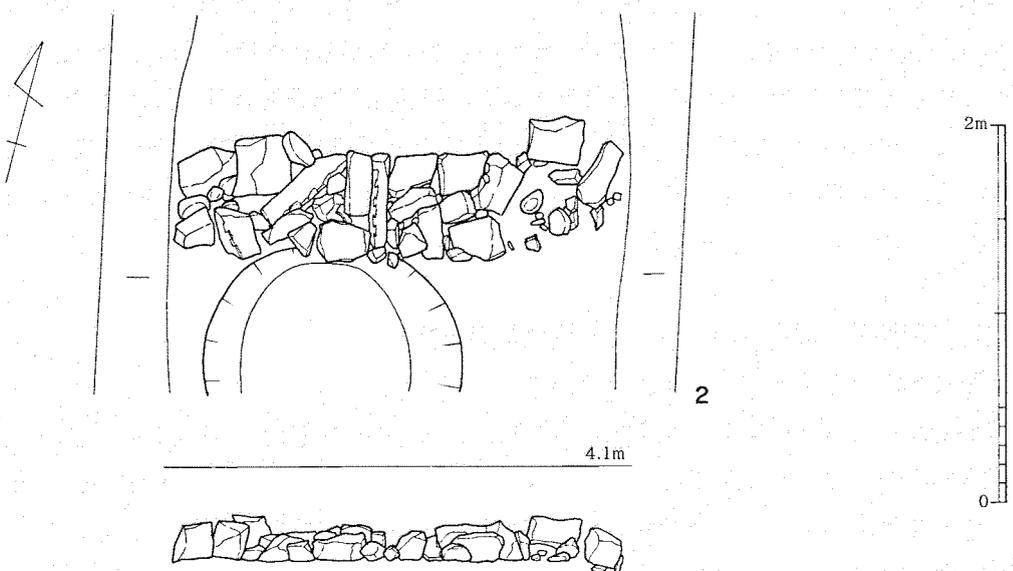
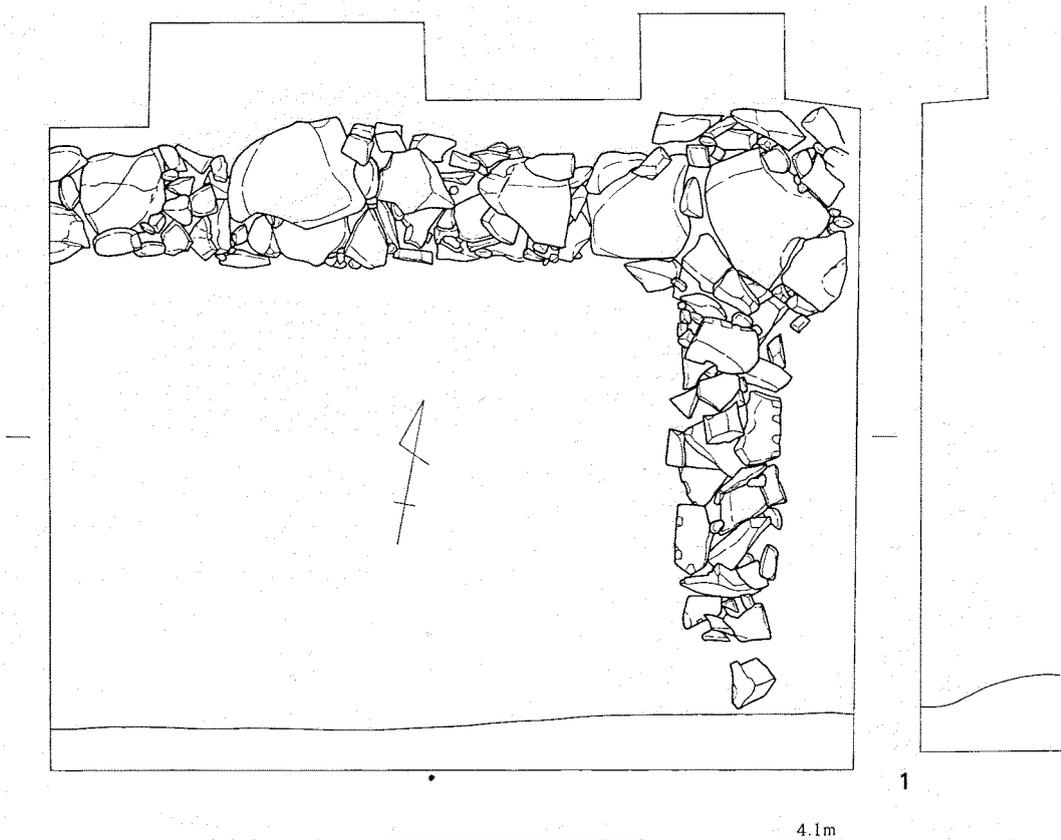
ピット出土陶磁器等 (図版36~38、第80・81図)

1~4は紅皿である。いずれも浅い体部で、口縁部には広い平坦面をもつ。1は釉色が悪い。

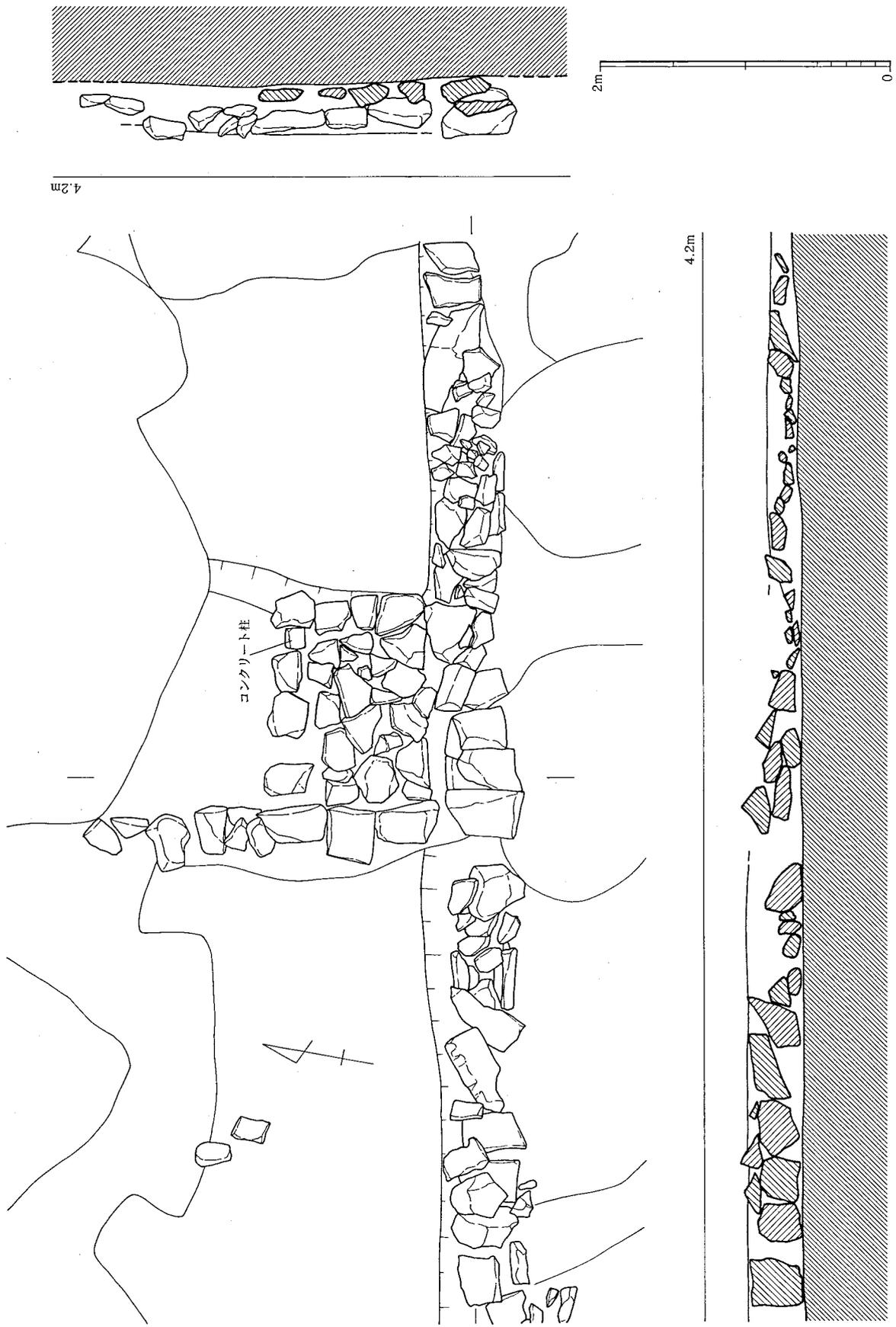
5・6は染付端反碗の蓋。5は内面に菊一輪、外面に菊と蝶をあしらう。6は外面に盃、「壽」字、鯛、小槌などからなる宝尽くし文、内面口縁には櫛歯文、見込みには宝をあしらったものである。

7は白磁の小杯である。高台畳付は丸く尖り接地面は狭い。体部は直線的に立ち上がっている。

8は体部が丸味を帯び口縁部がやや内傾する小碗。外面に梅枝と扇とをあしらう。9は丸碗形の湯呑碗。釉が分厚く染付の発色も悪い。外面には笹文を施す。



第78图 1·2号旧校舍基础实测图 (1/40)



第79図 3号旧校舎基礎実測図 (1/40)

10は高台径がやや小さいくわんか碗。内面見込みに源氏香文、外面には圈線と草花文、同心円文をあしらう。11は端反碗。内面に透明釉、外面に鉄釉を施釉する。

12～18は土師質小皿である。12～17は径6.2cm～7.6cm、器高1.0～1.1cm、底径3.8～5.6cm。底部は糸切り。18は底径が小さく体部が丸味を帯びるもの。口径7.8cm、器高1.7cm、底径4.0cm。底部糸切り。

19～21は陶器小皿。いずれも内面の口縁部以下に藁灰釉を施釉したものである。底部端の稜はシャープで、体部は丸味を帯びる。胎土は精良。19は口径6.2cm、器高1.9cm、底径3.6cm。20は口径6.7cm、器高1.9cm、底径3.9cm、21は口径7.4cm、器高1.8cm、底径4.1cm。

22～24は受け皿部の器高が低い油受け皿である。いずれも内面の口縁部下より内側にのみ藁灰釉を施釉する。体部下半から底面はヘラケズリ調整を行い、底部は若干上げ底となる。胎土は精良。

25は内側の受け皿が筒状に高くなる油受け皿。筒状部の外側と皿部の内側にのみ三彩釉を施釉する。口縁部には油煙が付着する。

26は把手付の油受け皿で灯芯の受け部をもつもの。全面に鉄釉を施釉する。

27～31は蓋である。27は三彩釉を施釉するもので、土瓶の蓋であろう。カエリをもたないタイプである。ツマミは円柱状をなす。28～31はいずれもカエリをもつタイプの土瓶の蓋。28は藁灰釉の上に鉄絵を描くものである。胎土はやや粗い。29は上面に藁灰釉を施釉するもの。胎土には砂粒を多く含み灰褐色を呈す。30は上面に飴釉を施釉するもの。胎土に砂粒を多く含み茶灰色を呈す。31は上面に藁灰釉を施釉するものだが、焼成が悪くガラス化していない。

32は陶器小碗。鉄釉を施釉するものである。胎土は肌理が細かく上質である。33は体部が直立する小型の陶器碗。高台は断面三角形となる。藁灰釉を施釉する。胎土は肌理が細かく上質である。34は丸形の陶器碗。口縁部は内傾する。全面に透明釉を施釉した後、外面に朱色の笹葉文を描く。

35は土瓶形の小型品。肩部には亀甲文を陰刻し、その上に三彩釉を施釉する。36は行平鍋形の小型鉢。肩部にはトビガンナを施文し、その上から鉄釉を施釉するが、口縁部と体部下半は露胎。

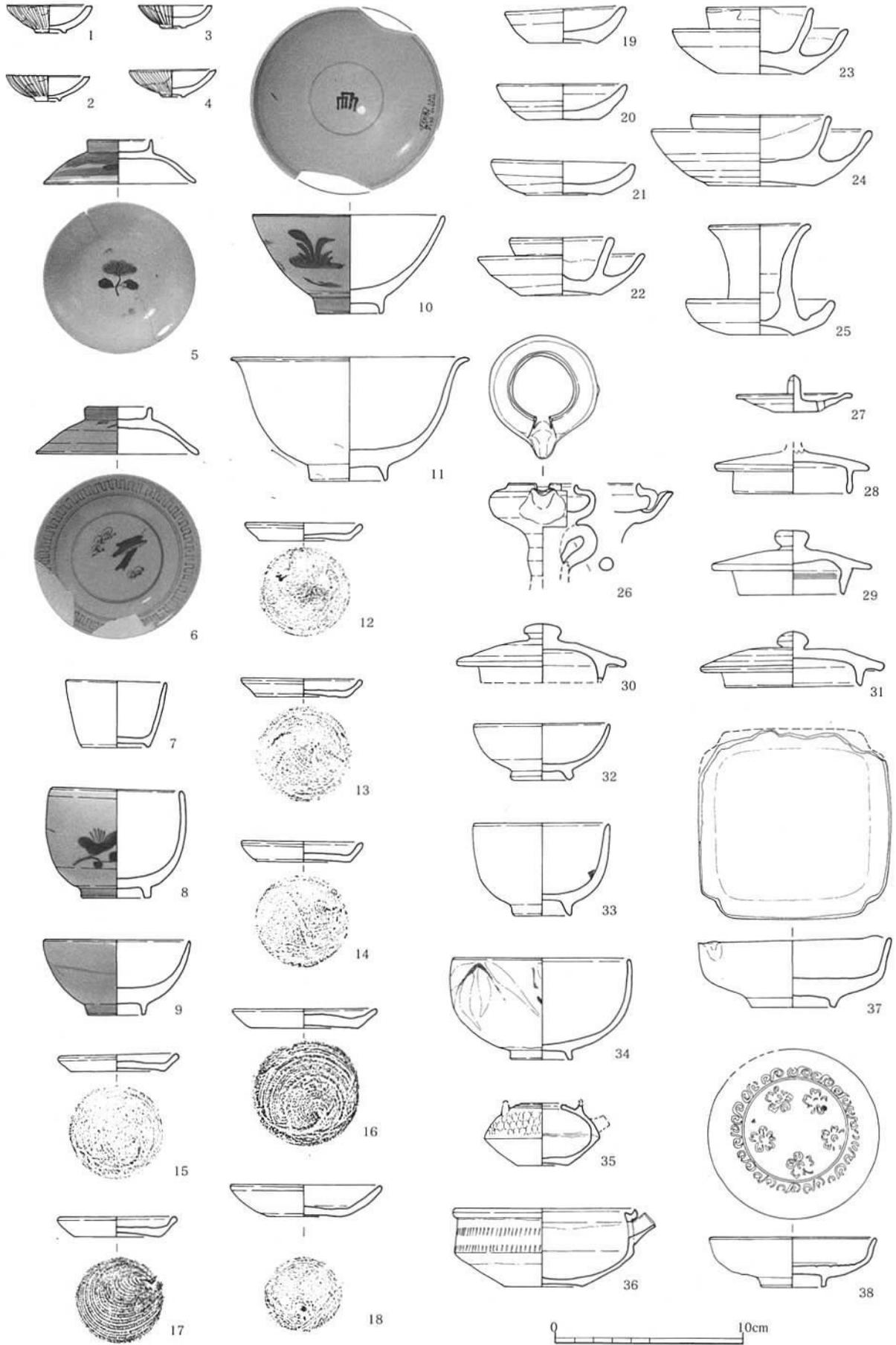
37は形押し整形の陶器皿。方形を呈し、四隅は内側に押し込まれる。藁灰釉を施釉し、高台内側は露胎となる。

38は三島手の鉄釉皿。内面には5つの梅花文があり、その回りを渦文が帯状に取り巻く。この見込み部には重ね焼きの目跡が3ヶ所残る。

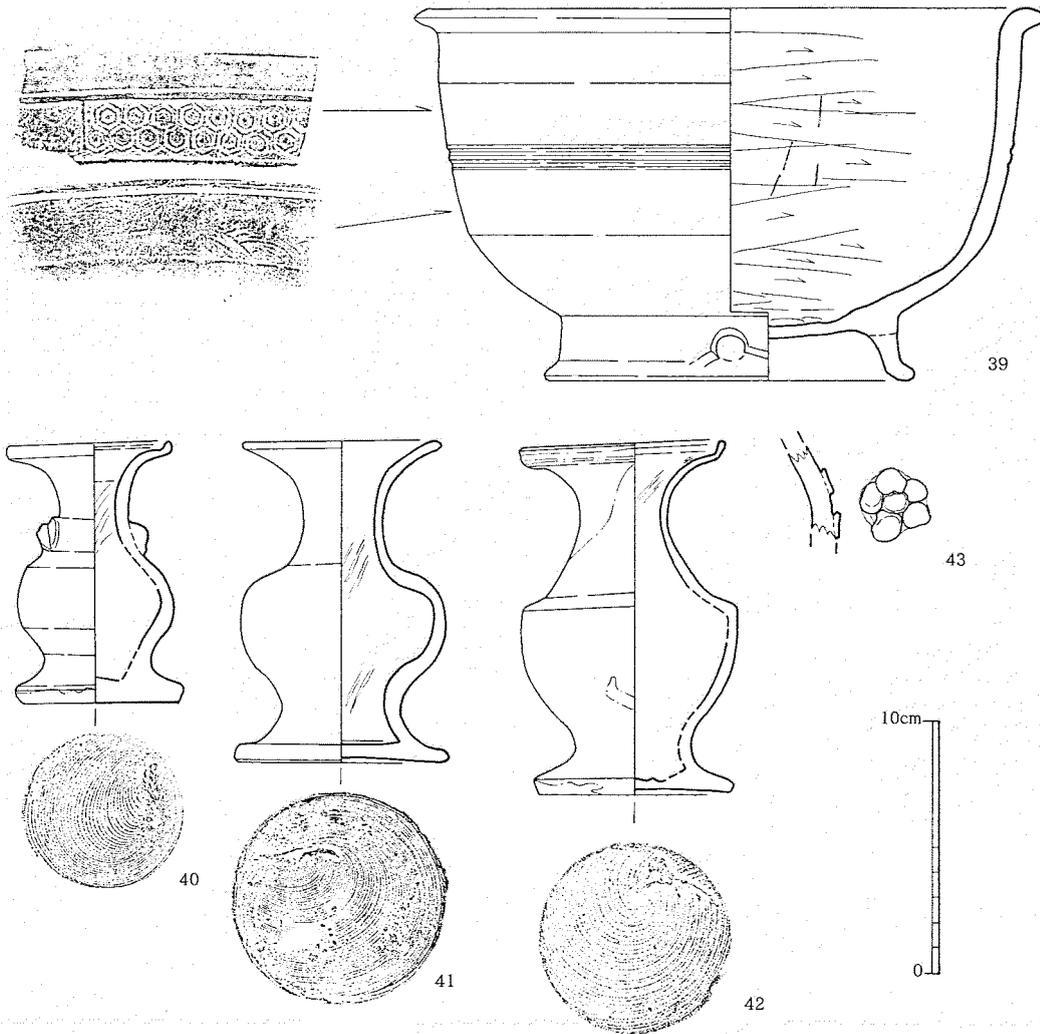
39は瓦質の焜炉である。脚部は短く、端部は外側に短く折れる。脚部の1ヶ所に円形のくり込みを入れる。体部は深い椀形をなし、口縁部は短く外反する。鉢部の内面は横ヘラケズリ、外面はほぼ中位に2条の沈線を巡らせ、その上位には型押しによる亀甲文、花菱文を、下位には重弧文を巡らせる。その他の部分は横ナデ。

40～42は仏花生である。40は肩部に把手状の装飾を貼付するもの。口縁部は朝顔形に開き、端部は上方に立ち上がる。全面に藁灰釉を施釉した後、上半にのみ鉄釉を施釉する。底部は糸切り。41は扁球形の体部のもの。口縁部は朝顔形に開く。全面に鉄釉を施釉する。42は半球形の体部をなし、頸部は反転するもの。口縁部は朝顔形に開き、端部は上方に立ち上がる。藁灰釉の上に灰釉流し掛け。口縁部内側には4ヶ所の目跡が見られる。

43は土師質の貼花文破片。



第80図 ピット出土陶磁器等実測図① (1/3)



第81図 ピット出土陶磁器等実測図② (1/3)

その他出土陶磁器等 (図版38~42、第82~88図)

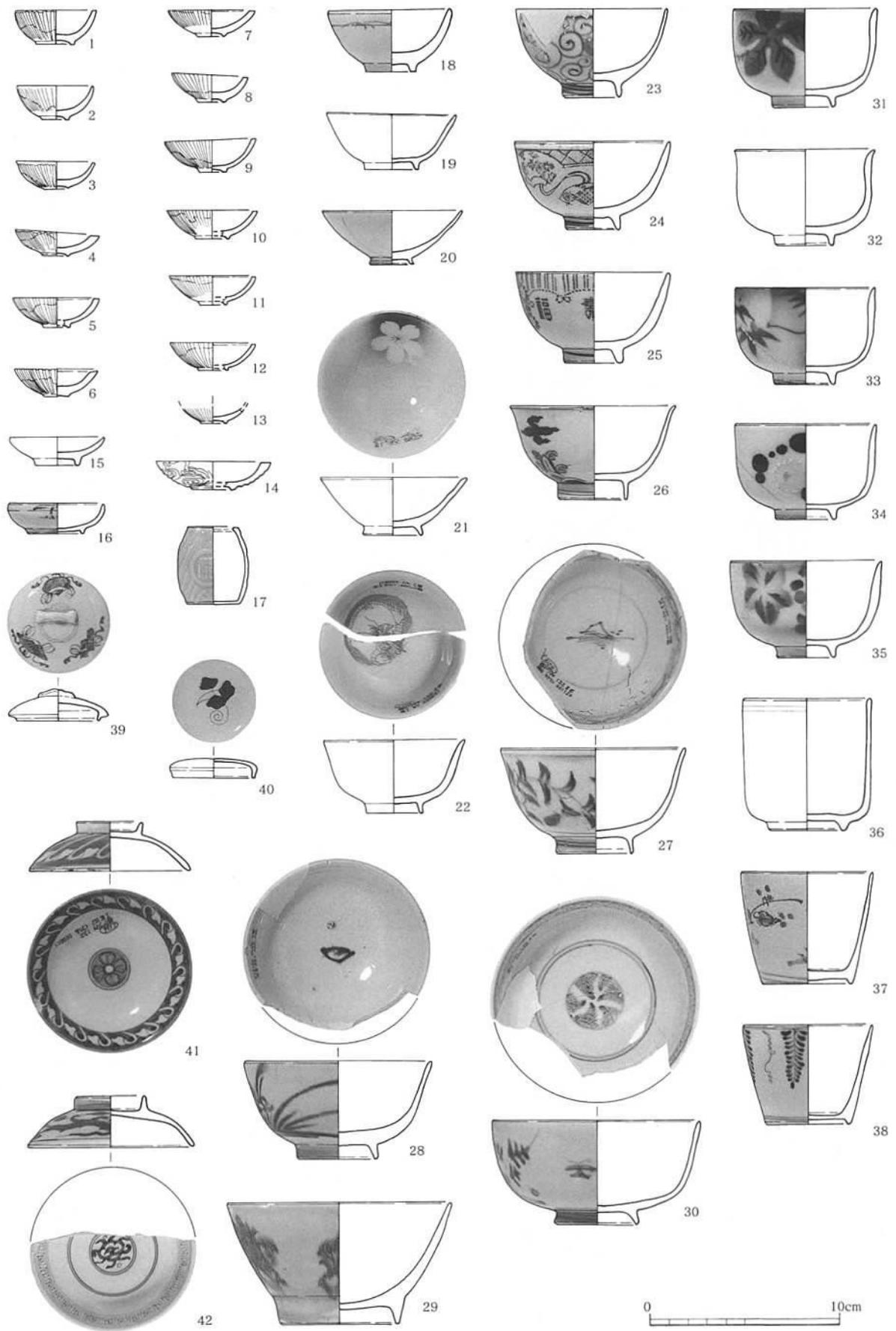
1~14は紅皿である。1~3は口縁部があまり開かず、また口縁部の平坦面も狭い古相のもの。4~13は口縁部が大きく開き、端部が広い平坦面をなすものである。14は蛸唐草文を配したもの。口径は他のものよりもやや大きい。

15・16も紅皿か。15は浅い碗状のもので、口縁端部は尖る。16は口縁部が立ち上がり上方を向くもので、外面には笹葉文を1つだけあしらう。

17は樽形の小型品。型押し整形のもので、外面には丸に「福」と波斜線が刻される。全面に黄色釉が施釉される。

18~22は小型の碗。18は口縁外面に1ヶ所のみ笹葉文をあしらったもの。体部は丸味を帯びる。19は文様を持たない白磁。腰折れ気味で体部は直線的に開く。20は高台外面に櫛歯文を巡らせるもの。高台径が小さい。21も体部が直線的に開く。内面に印判型抜きで梅花文をあしらう。22は深みのある体部をなすもの。外面は青濃みでコバルトブルーに発色、内面は朱で龍をプリントする。

23~25は丸形の碗。23は外面に唐草と松をあしらったもの。コバルトブルーに発色する。24は雑な印判を施すもの。口縁部には四方禳、その下には扇子、高台には圈線を巡らせる。25は外面に菊花文や「壽」、「福」などの吉祥句をプリントするもの。



第82図 その他出土陶磁器等実測図① (1/3)

26~28は端反り碗。26は内面口縁に二重の圏線、外面に麒麟、波、楼閣をあしらう。27は外面に草花文と圏線、内面見込みには富士をあしらうもの。28は内面見込みに晴明桔梗、外面に草花文をあしらう。

29はくらわんか手の碗。外面に草花文を描くが流れている。30~35は丸形で体部が直立する碗。30は内面見込みに圏線と若松、側面は四方襷を帯状に巡らせる。外面は蝶、草、車輪をあしらう。やや暗い色に発色する。31は外面にコバルトブルーと赤色で葉と実とをプリントするもの。32は端反となる。外面には釉の上から蜂と吉祥句とをプリントする。底面には「有田」と書かれる。33は型紙印判で赤と青の竹をあしらったもの。34は朱・青・白で草花文をあしらったもの。35は外面に深緑色で葉と実をプリントしたもの。

36は筒形の杯。外面の口縁部に二重圏線を巡らせる。底部には四角に「青」を書く。

37・38は蕎麦猪口。37は外面に竹・梅をあしらう。38は外面に藤蔓をあしらったもの。

39・40は小型の蓋。39は棒状のツマミを貼付するもの。上面に圏線と宝尽くし文をあしらう。40は合子の蓋か。上面に蔓草を描く。

41~44は碗ものの蓋。41は内外面にねじ花文、見込みに草蔓をあしらう。コバルトブルーに発色する。42は外面に龍、内面見込みに雲と圏線、内面口縁部に雷文をあしらう。43は内外面とも藤、鶴、圏線をあしらったものである。44は内面の口縁に雷文、外面には直線と鋸歯文を放射状に描き、周縁に鋸歯文を巡らせる。また外面の口縁部やや内側には鉄釉による直線文を一条描く。

45・46は輪花形芙蓉手の小皿。杖を持ち帽子をかぶった西洋風の人物を四方に配す。外面は唐草文。47は形押し整形の鎬蓮弁白磁小皿。口紅を施す。

48は内面の見込みを釉剥ぎし、側面に圏線と笹文をあしらったものである。49・50は印判もの。内面の見込みには松竹梅を円形に配し、側面には雷文を巡らせる。口縁部には口紅を施す。呉須はコバルトブルーに発色する。51は内面に緑と青で千鳥をプリントするもの。52は外面に圏線と唐草文を、内面に草花文を描く。

53は腰折れ端反りの皿。内面に草花、鳳凰を印刻した後、上から呉須を着色する。色調は悪い。

54は外面唐草文、内面は線描きと濃みとで草花文、圏線をあしらったもの。55は端反りでやや浅い体部の青白磁。型押し整形で内面には円文、菱文を浮彫し、その周囲には四方襷を巡らせる。

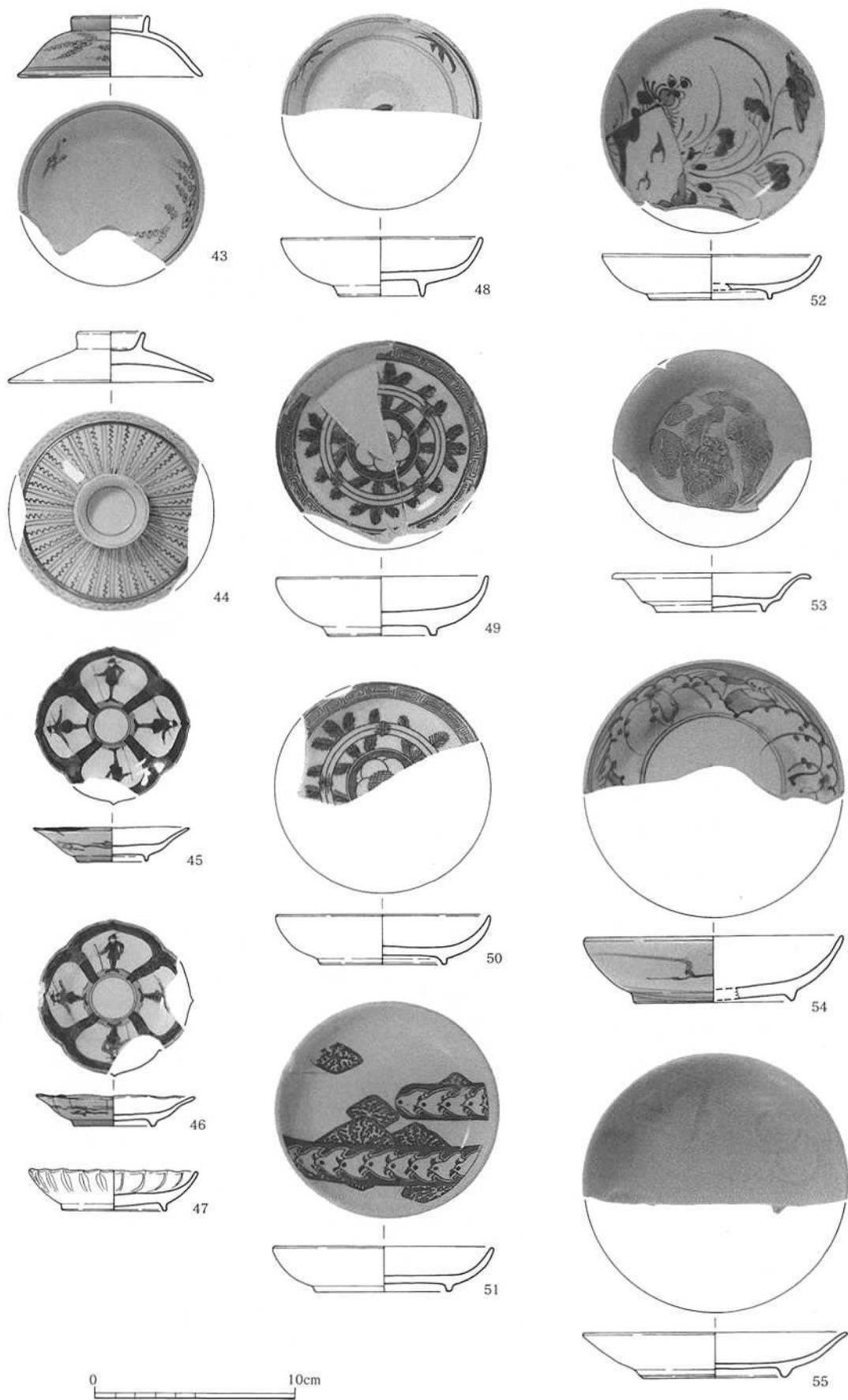
56は輪花形の皿で蛇の目凹形高台のもの。内面には海岸風景を描き、外面は草文を巡らせる。57は形押し整形の皿で、内面は印判の鳳凰、桜花文をあしらう。口縁部は口紅を施す。58は舟形の皿。型紙印判で内面口縁に雷文、内面に山水と吉祥句、外面には草花文をあしらう。外底面には「林山」の落款がある。

59は鉢である。内面の口縁部に緑色で二重圏線が巡る。

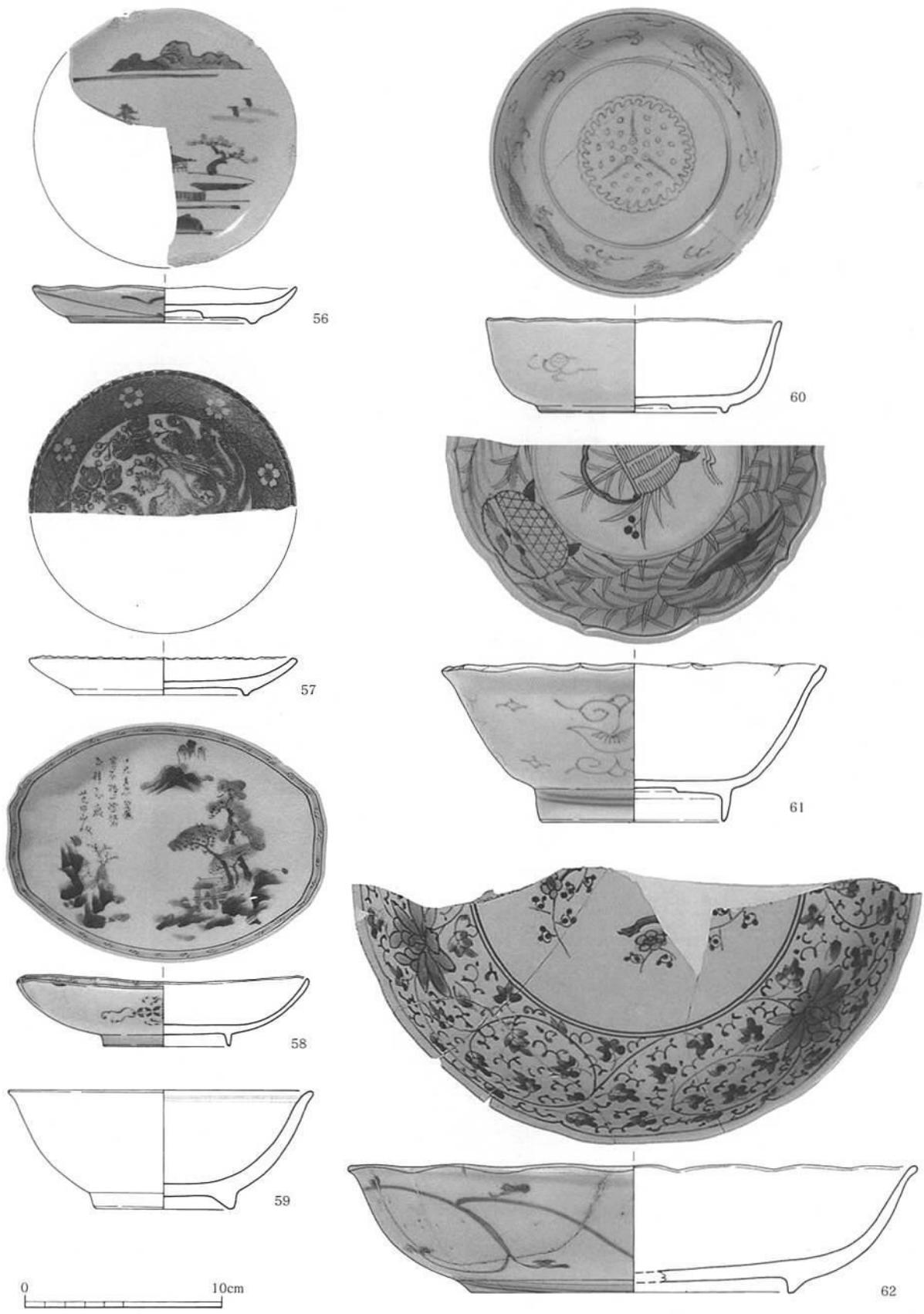
60・61は輪花の鉢。60は蛇の目凹形高台をなす。外面には飛雲と圏線、内側面は龍と飛雲、見込みには雲気文をあしらう。61は高台が高く、やはり蛇の目凹形高台をなす。外面に花唐草、内面には篋、雲雀、草文をあしらう。

62は輪花大皿。内面見込みに梅文、内側面に牡丹唐草文、外面に唐草文をあしらう。高台内落款は渦「福」。焼き継ぎを行っている。

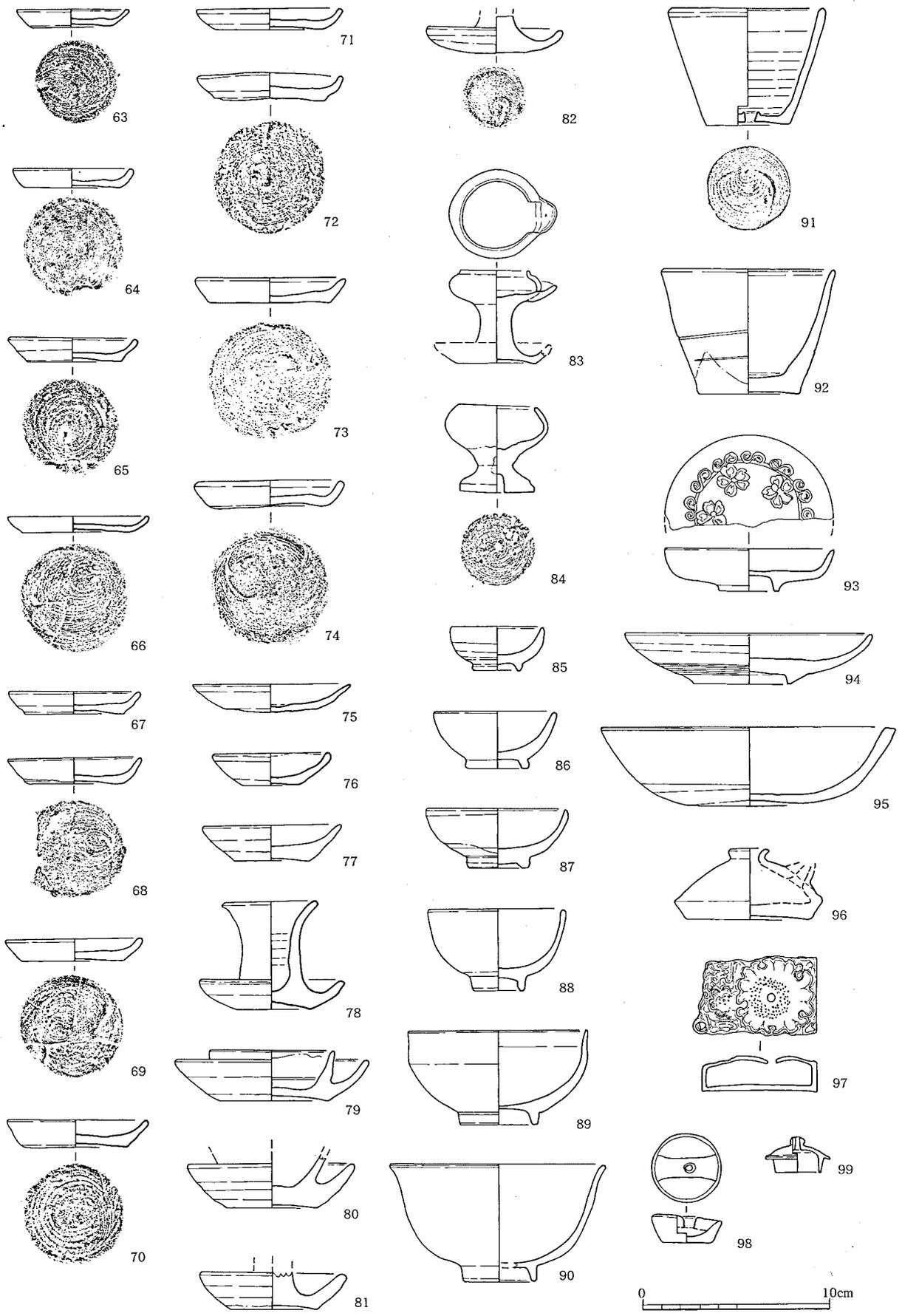
63~84は灯明具である。63~74は底部糸切りの土師質小皿。口縁部に油煙が付着するものが多い。口径6.9cm~7.05cm、器高0.9cm~1.4cm、底径4.4cm~6.5cm。75は底部ヘラ切り。口径



第83図 その他出土陶磁器等実測図② (1/3)



第84図 その他出土陶磁器等実測図③ (1/3)



第85図 その他出土陶磁器等実測図④ (1/3)

8.4cm、器高1.4cm。油煙の付着は見られない。

76・77は陶器灯明皿。どちらも内面に藁灰釉を施釉する。胎土は肌理が細かく良質である。76は口径6.3cm、器高1.75cm、底径2.9cm。77は口径7.4cm、器高1.9cm、底径4.0cm。

78は筒状の長い受け部の油受け皿で、二彩施釉を行う。79・80は低い受け部の油受け皿で、どちらも内面のみ藁灰釉を施釉する。胎土が良く良質である。

81は長い柱状部をもつ油受け皿の裾部。藁灰釉を施釉する。82は底部端の稜がシャープさを欠く。鉄釉を施釉する。

83は受け部の一端を切り込み灯芯受けを作ったもの。藁灰釉を施釉する。84は扁球形の受け皿に短い脚部がつくもの。鉄釉を施釉するが焼きが悪くガラス化していない。

85～88は陶器小碗。85は特に小型のもの。内外面とも透明釉を施釉するが、焼きが悪い。86も透明釉を施釉しており、胎土は極めて精良。87は飴釉施釉のものだが発色が悪い。88は青緑釉を施釉する。

89は体部中位に屈曲部をもつ碗。口縁部は直立する。鉄釉を施釉した後ナデによる装飾を加える。90は鉄釉の端反り碗。

91・92は高台を持たず、体部が直線的に伸びる鉢形のもの。91は施釉せず焼き締めのものである。底部に穿孔がある。胎土は良い。92は藁灰釉施釉のもの。口縁部口禿げ。体部下半には沈線が巡る。

93は三島手の皿。内面に梅花と渦文を配す。94は透明釉陶器皿。内面見込みの釉を掻き取る。見込みに五弁花文、側面に花文をあしらう。外面下半には櫛目文を巡らす。95は焼き締めの鉢。口縁部は広い面をなす。胎土は精良で砂粒を含まない。回転ナデ整形を行い、底部はヘラケズリ後横ナデを行う。

96は油壺形だが注口をもつ小型品。藁灰釉施釉。97は染付の水滴。上面に形押しによる菊花、梅花をあしらう部分的に呉須をたらす。底面は布目圧痕が観察される。

98は上面にのみ透明釉を施釉する陶器。釣瓶形の灯明具か。

99は小型の蓋。頂部には穿孔を行う。胎土が極めて精良で器壁も薄い精良品。表面は明茶色、断面は黒色を呈す。

100～114は蓋である。100・101はツマミを持たないもの。壺蓋であろうか。100は飴釉施釉。101は100よりも器高が低い。鉄釉施釉。

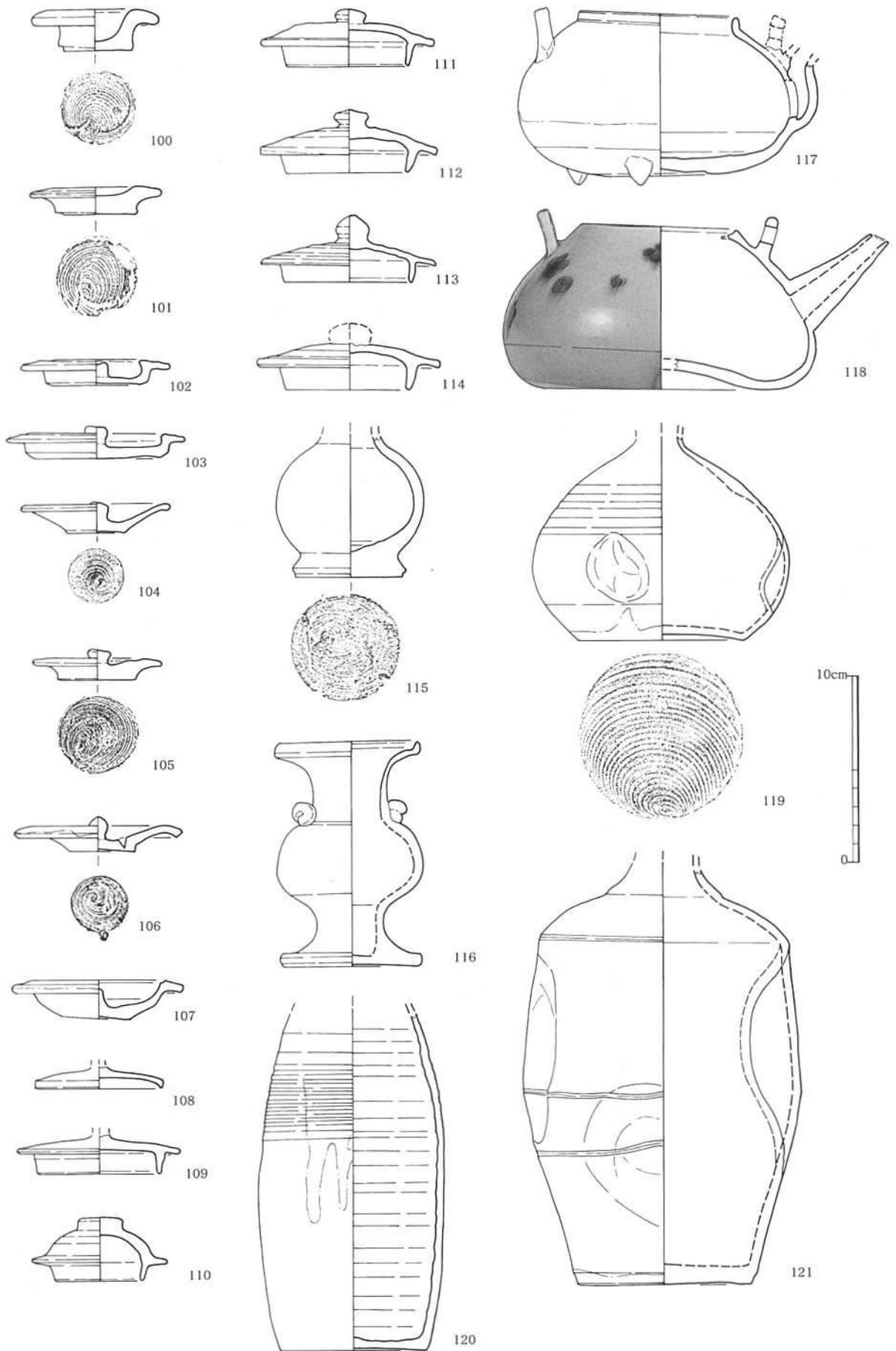
102・103は水注の蓋か。102は半球形のツマミを持ち、中心からややずれた位置に付けられる。藁灰釉施釉で胎土は精良。103は鉄釉施釉で胎土は精良。ツマミは押しつぶした擬宝珠様をなす。

104は藁灰釉施釉の土瓶蓋。胎土は黄灰色を呈す。105は壺蓋か。胎土には砂粒を含まず精良で、釉は藁灰釉を施釉する。106は三彩釉施釉の土瓶蓋。上方から穿孔を行うが貫通していない。ツマミは宝珠形をなす。107は柿色釉の土瓶蓋。

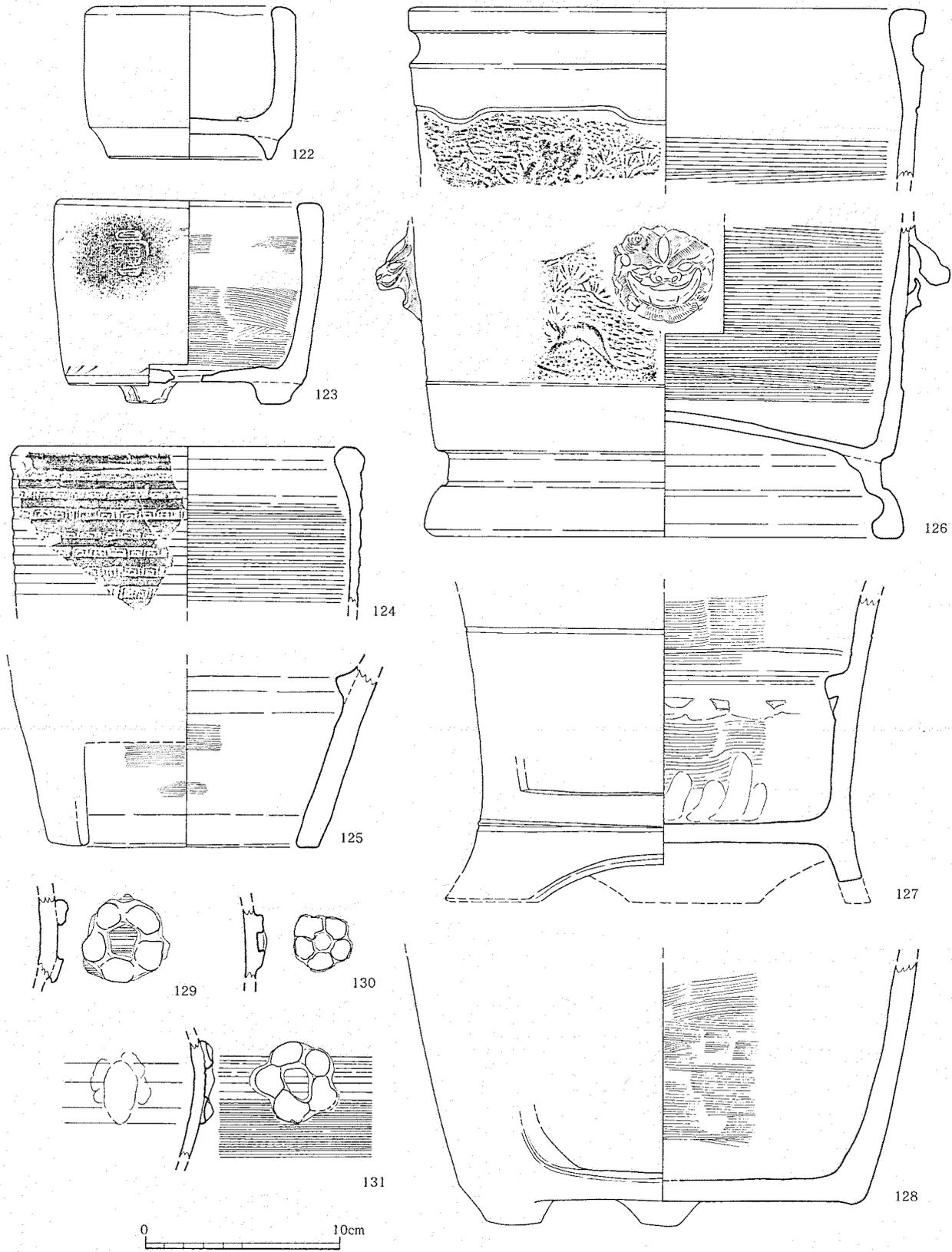
108は小型で器壁も薄い。三彩施釉。急須の蓋か。109は藁灰釉に鉄絵で梅花を描く土瓶の蓋。110は鉄釉施釉のもので、壺蓋か。胎土は暗褐色を呈す。

111は藁灰釉施釉の土瓶の蓋。ツマミは鉞状をなす。112は飴釉施釉。胎土はやや肌理が粗い。113は透明釉施釉。胎土は肌色を呈す。ツマミは宝珠形をなす。114は飴釉施釉。

115・116は仏花生。115は球形の体部をなす。釉は鉄釉。胎土に砂粒を多く含み黒灰色を呈す。116は扁球形の体部をなし、口縁部は朝顔形に開き端部は上方に立ち上がる。頸部付け根にはリボ



第86図 その他出土陶磁器等実測図⑤ (1/3)



第87図 その他出土陶磁器等実測図⑥ (1/3)

ン状の装飾を貼付する。薄い黄緑色の釉を全体に施釉し、口縁部のみ藁灰釉を流し掛ける。

117・118は土瓶。117は三足付の土瓶で藁灰釉を施釉する。胎土は肌理が粗い。118は染付の土瓶。梅花を外面に散らす。

119は舟徳利に近い形状のぺこかん徳利。鉄釉施釉。120は柱状のスリムな器形の徳利。全面に鉄釉を施釉し、肩部以上はハケ目で横方向に掛けられる。胎土は砂粒を含まず肌理が細かく、色調は暗灰色を呈す。121はぺこかん徳利。肩部に1条、体部中位に2条の沈線を巡らせる。鉄釉施釉。胎土は緻密で色調は灰色を呈す。

122・123は火入。122は土師質のもので底部に高台を持つ。胎土に粗砂を多く含み色調は暗茶灰色を呈す。123は瓦質のもので、外面は黒く光沢を帯びる。底部には三足を持つ。内面は横ハケ目後上方のみナデ消し。外面の上半には印刻を6ヶ所に行う。底部の中心に焼成後穿孔を行う。

124は瓦質火鉢で型押し整形のもの。外面に陰刻の雷文を数条巡らせる。内面はカキ目、口縁部内面は横ナデ、外面は丁寧なミガキ。125は土師質の七輪である。内面はハケ目後ナデ、外面はヘラナデを最終調整とし、雑な作りのもの。

126は土師質火鉢。外面を蒸しており瓦質に近い。外面の把手は型押しの獅子頭を貼付する。獅子頭の口に穿孔があるのは貼付時に支え棒を差し込んだためであろう。また外面には松、砂、海、人家、灯籠など型押し模様を巡らせる。高台は内外面とも横ナデ、体部の内面は横ハケ目、口縁部は内外面とも横ナデ。

127は土師質の七輪。脚部は三方に弧形のくり込みをもつ。内面はハケ目、外面はナデ調整で、内外面とも一条の沈線が見られる。胎土は粗い。128も土師質の七輪。台形状の足を三方にもつ。内面はハケ目、外面はミガキ。胎土に砂粒をあまり含まず作りも比較的丁寧なものである。

129～131はいずれも貼花文の破片である。130は透明釉施釉のもの、それ以外は無釉のもの。

132は土師質の焙烙。両耳にはそれぞれ二つの穿孔があるが、そのうちの一つは貫通していない。内面は横ナデ、外面はハケ目、底面はハケ目後ナデ。

133は筒形の鉢。無色釉に青緑釉と鉄釉を流し掛ける。底面のみ露胎となる。

134は体部の上方が内傾し、口縁部は丸く肥厚する鉢。把手は型押し整形の獅子頭を貼付する。目の部分は深さ1.8cmの穿孔を行っている。釉は飴釉を外面に施釉した後、口縁部から肩部にかけて藁灰釉を流し掛ける。内面は露胎。口縁部と底部は横ナデ、体部は内外面ともカキ目調整を行っている。高台は1ヶ所のみ円孔を穿孔する。

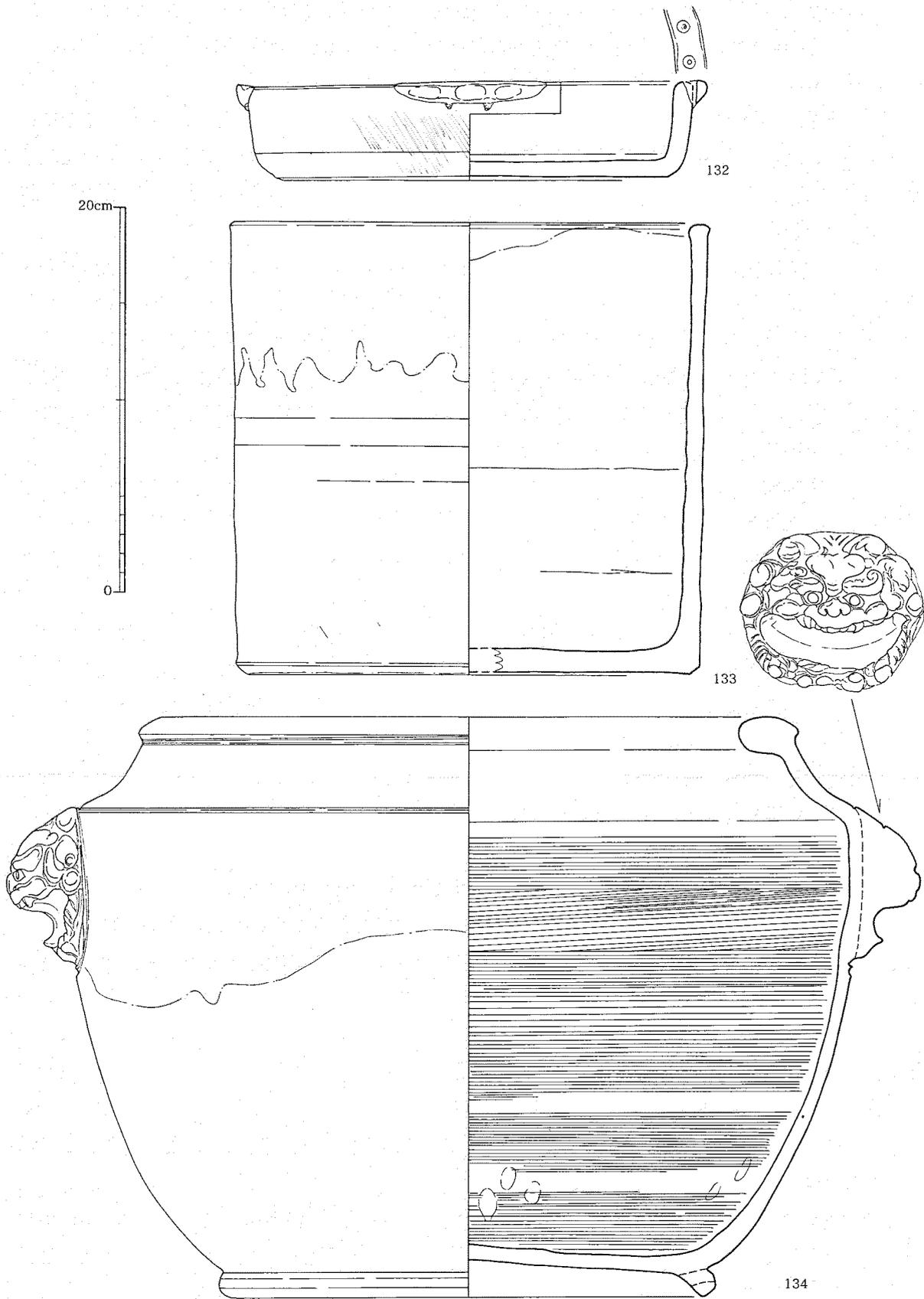
5. その他の近世・近代遺物

窯道具 (図版43・44、第89・90図)

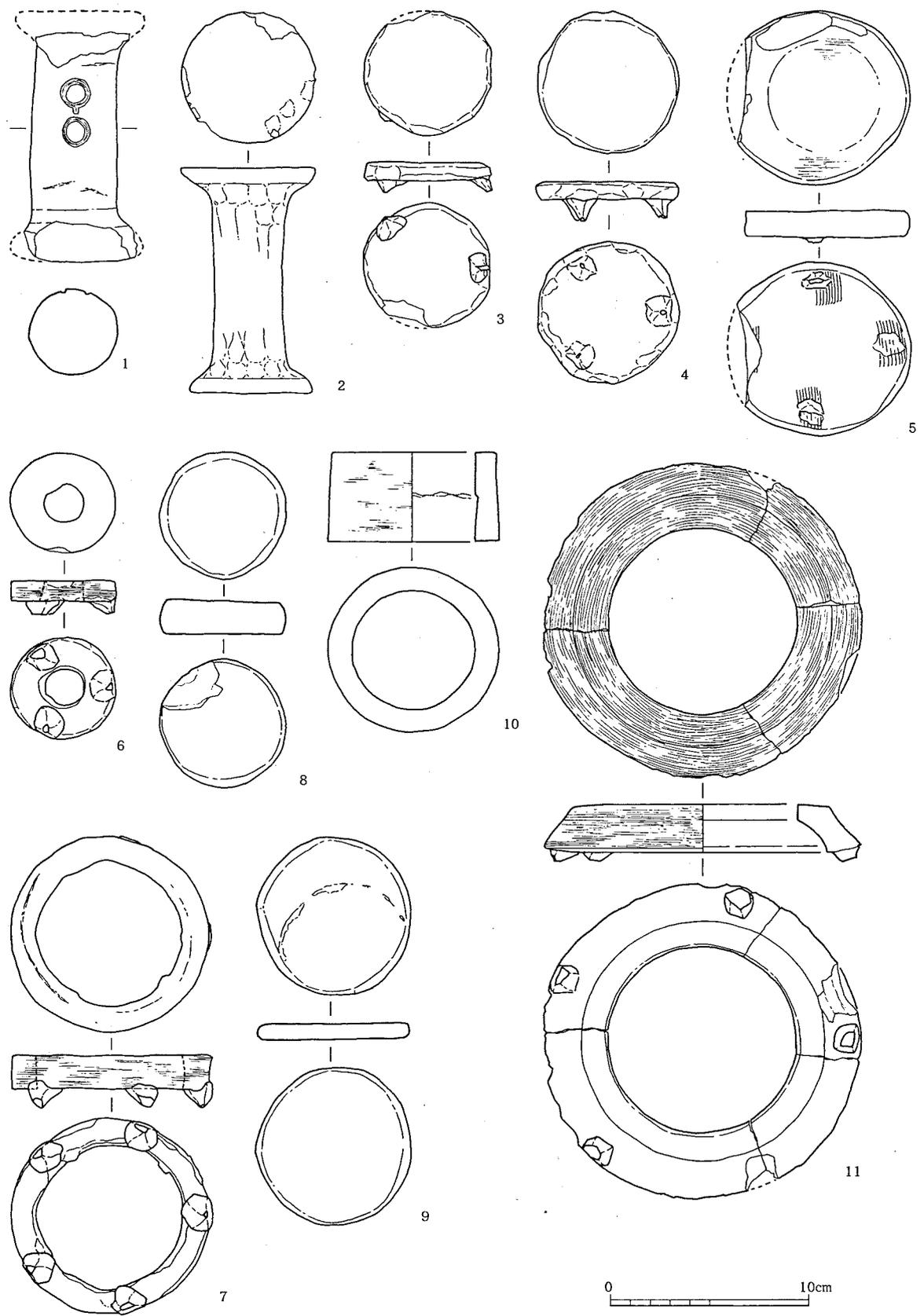
1・2はトチンである。1は全面に鉄釉を施釉し、2つの竹管状スタンプをもつ。2は比較的丁寧な作りのもので、上面は3ヶ所に目跡が見られる。1号土坑出土。

3～5は足付きハマ。3・4は三方に足が付くもので、褐色の釉がわずかに付着している。5は接合部にハケ目を行う。足は四方。6・7は足付きの環状ハマ。どちらも型押し整形による。6は三足のもので、わずかに褐色の釉が付着する。7は五足のもので、やはり褐色の釉が付着する。

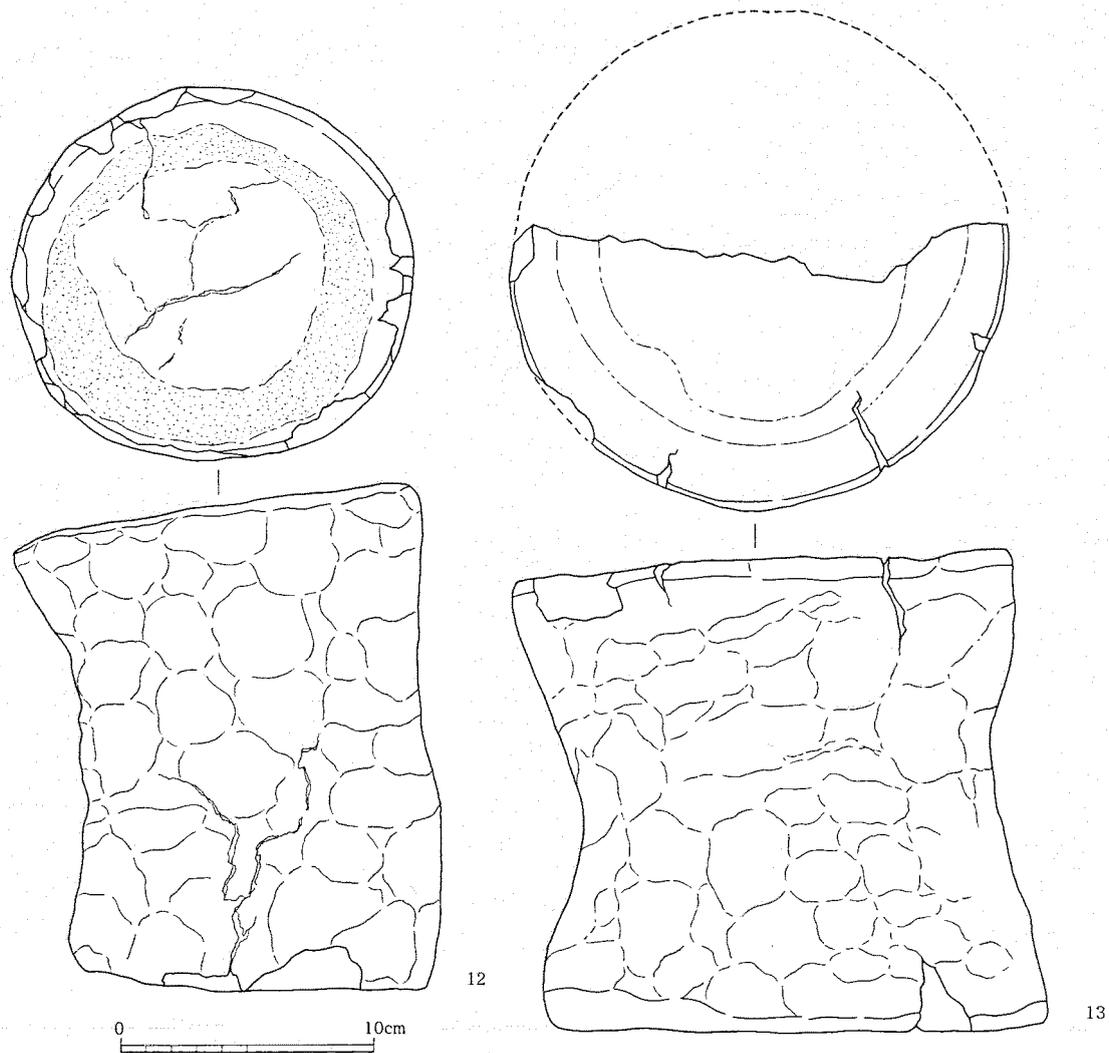
8・9はハマ。8は二次加熱で片方の面のみ表面が荒れる。9は高台痕が残る。10は筒状の窯道具。胎土に砂粒が少なく赤茶色を呈す。7号土坑出土。11は足付きの環状ハマ。足は五足。外面はカキ



第88図 その他出土陶磁器等実測図⑦ (1/3)



第89図 窯道具実測図① (1/3)



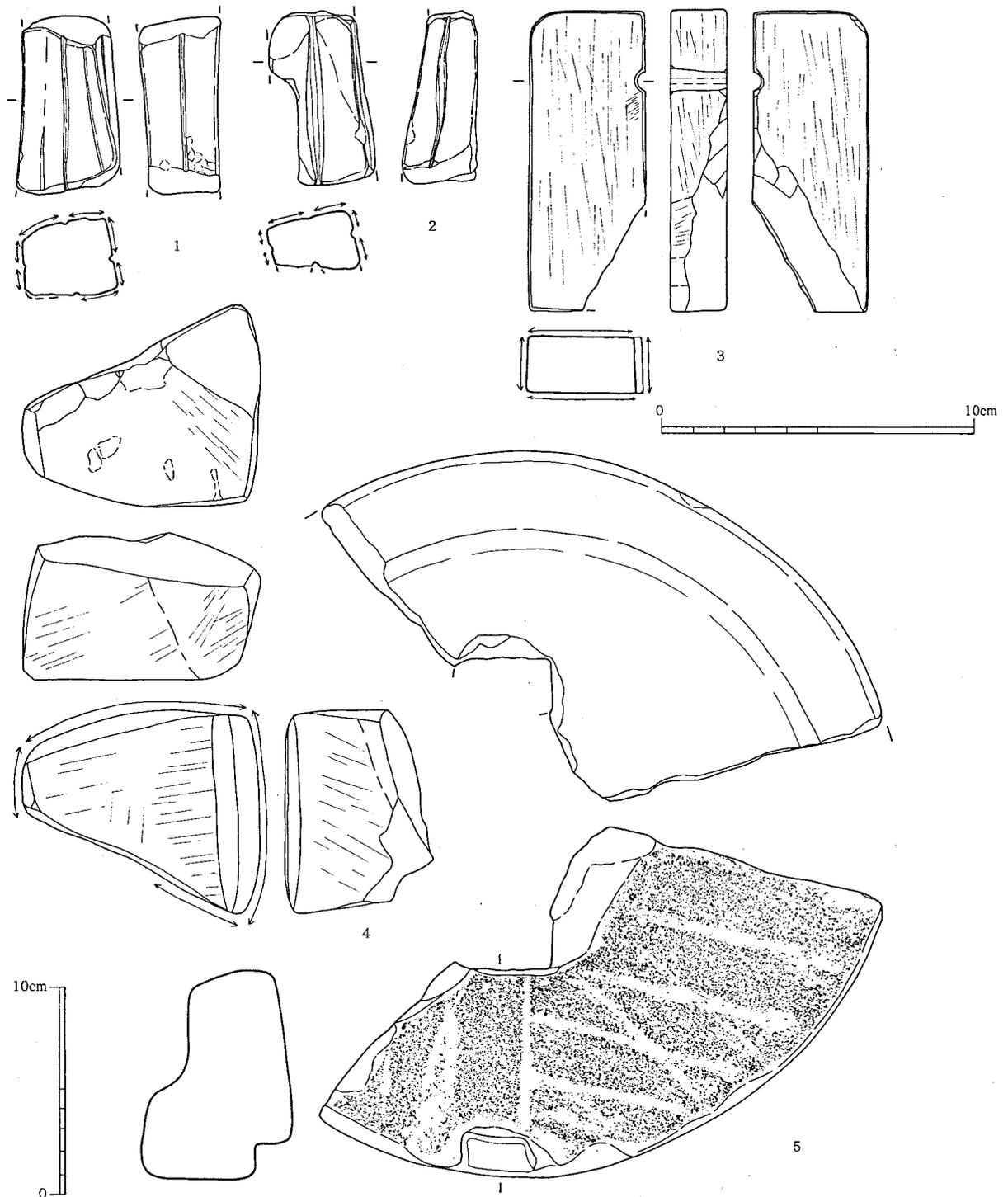
第90図 窯道具実測図② (1/3)

目調整。

12・13は大型の焼き台。12は接地面に砂目を置く。整形は指整形で圧痕が多く見られる。13は高台の跡がわずかに窪んでいる。やはり整形は指整形による。

近世以降の石製品 (図版44、第91図)

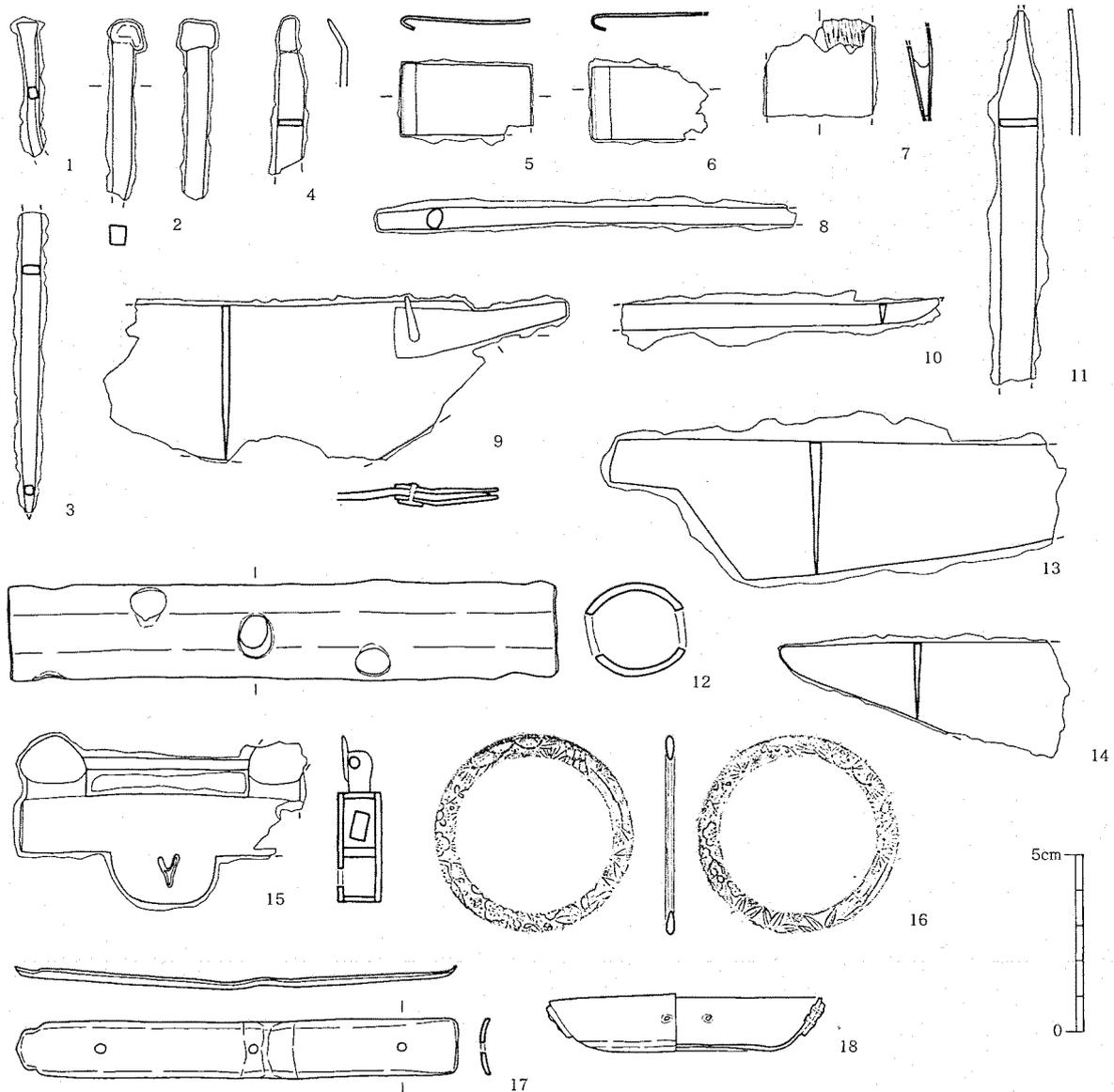
1・2は砥石である。1は5号土坑出土で、一部欠損があるものの表裏面と左右側面が使用により平滑になっている。その4面ともに断面V字状の溝が長軸の向きに通り、また表面には段が生じている部分がある。現存長5.7cm、幅3.5cm、厚さ2.5cm、重さ70.2gで砂岩製。2は1と非常に類似しており、同様に5号土坑の出土である。1に比して欠損が大きく裏面は劣化しているが、4面の砥面がありそれぞれに溝が通る点は共通していたと考えられる。ただ、溝断面の傾斜は緩やかである。現存長5.5cm、幅2.0cm、厚さ1.8cm、重さ46.3gで砂岩製。3はI区南2包含層出土の温石である。表面は極めて平滑であるとともに全体に無数の擦痕を残している。欠損しているが、欠損面に一部再加工して平滑となった部分が認められる。また、残存する三つの角うちの二ヶ所が丸く仕上げられている点と側面に一箇所半円状の抉りが設けられている点が特徴的である。全長9.7cm、



第91図 近世以降の石製品実測図 (5 : 1/3, 他は1/2)

幅3.8cm、厚さ1.8cm、重さ135.6gで滑石製。4はⅡ区南1旧校舎攪乱出土の砥石である。ほとんどの面を使用しているため全体的に平滑になっている。全長6.9cm、幅6.4cm、厚さ4.7cm、重さ287.3gで花崗岩製。

5はⅡ区西4包含層出土の石臼で、大型で扁平な上臼である。大きく欠損し全体の1/3程度のみとなっているが、ものいれ・回し棒用の差し込み孔が残存している。差し込み孔は側面の下端に設けられ、完全な孔とはなっていない。擦り目は6分割になっていると考えられる。直径は36cm程度



第92図 近世以降の金属製品実測図 (1/2)

に復元され、高さ7.2cm、重さ3060gで花崗岩製。

金属製品 (図版44・45、第92図)

1から3は鉄釘である。1はⅡ区南2遺構面出土で、先端部を欠損する。頭部付近がやや大きくなり、断面はやや歪んだ方形である。現存長3.8cm、幅0.3cm、厚さ0.3cmである。2はピット出土で、先端部を欠損する。頭部はやや膨らみ一部折り曲げたような形状となる。断面は方形である。現存長5.3cm、幅1.0cm、厚さ0.6cmである。3もピット出土で、先端部および頭部を欠損する。断面は先端部付近が正方形に近いが、頭部に近づくにつれ横長になる。現存長8.4cm、幅0.5cm、厚さ0.3cmである。

4から8は使用用途が不明の鉄器である。4は7号土坑出土で、細長い板状をしており、端部付近は幅を減じ折れ曲がっている。現存長4.4cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmである。5はピット出土で、方形の板状で片方の端部が折れ曲がっている。全長3.7cm、幅2.0cm、高さ0.4cmで素材の厚さは

0.1cmである。6もピット出土で、欠損しているが5と同様な鉄製品と考えられる。現存長3.3cm、幅2.1cm、高さ0.5cmで素材の厚さは0.1cmである。7もピット出土で、平面鋤先状の鉄製品であるが、厚さが非常に薄く古墳時代のものとは思えず近世のものとして判断した。大きく欠損し、詳細な全体形と用途は不明である。内部には一部に木質部が残存している。現存長2.8cm、幅3.0cmで素材の厚さは0.05cmである。8はⅡ区北2遺構面出土で、棒状の形態でやや曲がっており、断面は不整な円形である。現存長11.7cm、径0.6cmである。

9は5号土坑出土で、把手のついた刃器である。把手部は本体を別の部材で挟み込み、鋌を打ち込み押圧して固定している。欠失しているもう一方の側にも把手がつくか否かは不明である。現存長13.0cm、厚さ0.2cmである。

10は1号土坑出土で、刀子である。基部は欠損しており、錆膨れが大きく劣化が著しい。現存長8.9cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmである。

11は5号土坑出土で、ヤリガンナに形状が類似している。先端部がわずかに反り上がるが、断面が弧状ではなく、また刃部も認められないため、ヤリガンナとは異なる可能性が高い。現存長10.6cm、幅1.2cm、厚さ0.2cmである。

12はⅡ区中6旧校舎攪乱出土で、筒状の鉄製品である。孔が計10ヶ所にあるが、表裏で2つずつが対になっており、同時に穿孔されたと考えられる。全長15.4cm、径2.8cm、厚さ0.2cmである。火管と呼ばれる、葉囊を大砲に込める際に使用するものの一部である可能性がある。

13・14は包丁である。13はⅡ区西5遺構面出土で、先端部を欠失し錆膨れが著しい。現存長12.7cm、幅4.0cm、厚さ0.2cmである。14はピット出土で、基部を欠失する。現存長7.1cm、厚さ0.2cmである。

15はⅡ区北3基礎出土の錠で、一部が欠失する。全長4.7cm、厚さ1.2cmである。

16はⅠ区南2出土で、環状の青銅製品である。蚊帳吊り金具と考えられる。表裏ともに松竹梅の文様が鋳出されている。径5.6cm、厚さ0.25cm、重さ15.5gである。

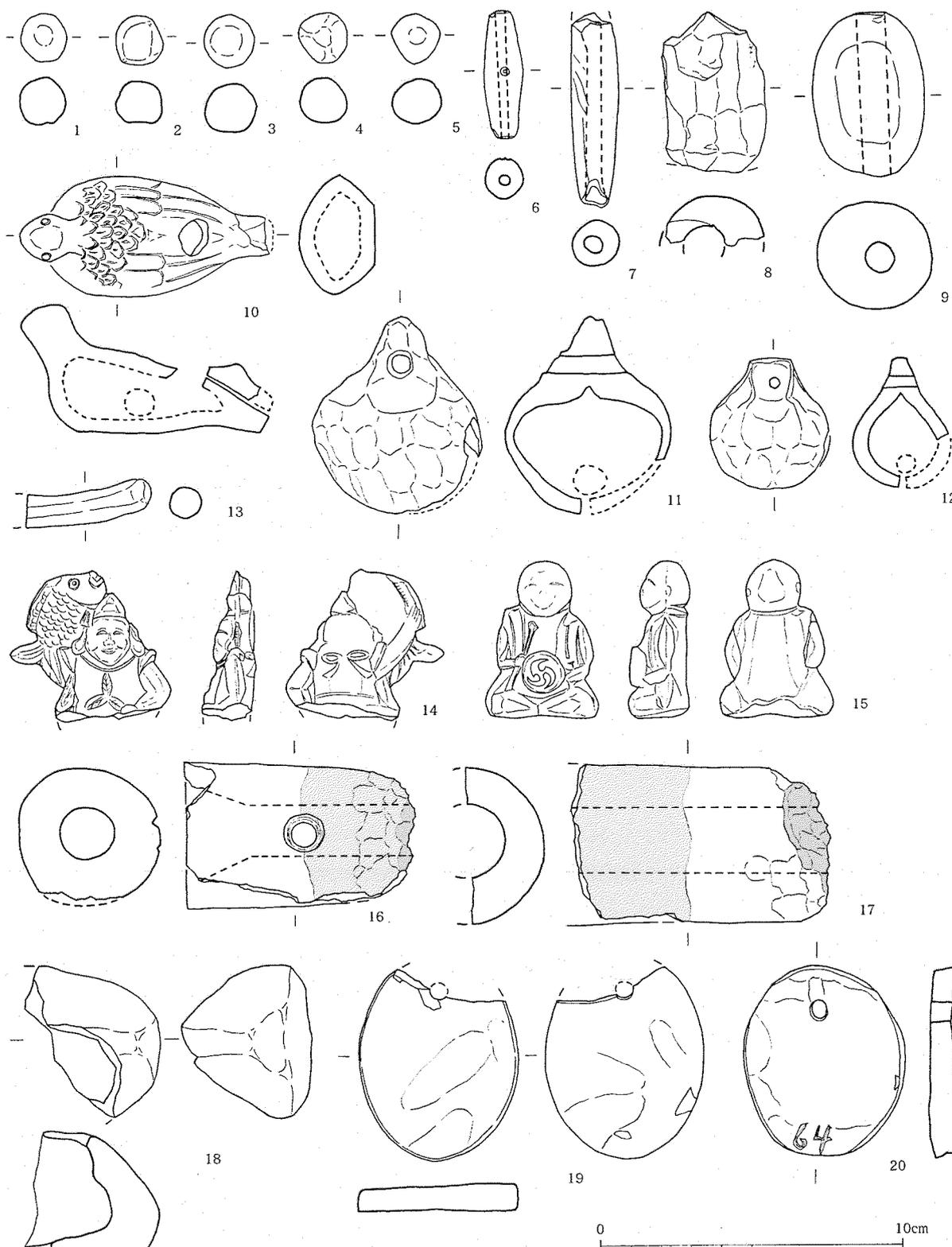
17はⅠ区南2北側攪乱出土で、飾り金具の一種と考えられる。3ヶ所に穿孔され、中心の孔の付近が屈曲している。また、断面は弧状を呈す。全長12.4cm、幅1.6cm、厚さ0.15cm、重さ23.4gである。

18はⅡ区南1旧校舎配石出土で、皿状の青銅製品である。外面に一ヶ所突出部があるが、鋌止めによって本体に固定されている。反対側にも2孔あり同様に突出部が固定されていたと考えられる。また直行する軸上にも対称に1ヶ所ずつ内面から外面に向けて穿孔されている。天秤用の秤皿の可能性が考えられる。口径7.5cm、器高1.6cm、重さ24.0gである。

近世以降の土製品 (図版45、第93図)

1～5は土玉である。いずれも指整形の圧痕を残す粗製品で、恐らく土鈴の玉であろうと思われる。1はⅡ区東5包含層出土で、径1.6cmである。2はピット出土で、径1.7cmである。3はⅠ区南1攪乱出土で、径1.7cmである。4はⅠ区南3遺構面出土で、径1.8cmである。5はピット出土で、径1.7cmである。これらは全て淡褐色を呈し、焼成は良好である。

6～9は土錘である。6はⅡ区西8攪乱出土で、小型の土錘である。焼成は良好で、胎土は砂粒が非常に少なく暗褐色から灰褐色を呈す。表面には竹管状のスタンプ文が一ヶ所施されている。全長



第93図 近世以降の土製品実測図 (1/2)

4.3cm、最大径1.3cm、重さ6.3gである。7はⅡ区中1攪乱出土で、欠損している。焼成は良好で、胎土は砂粒が非常に少なく褐色を呈す。現存長6.5cm、最大径1.6cmである。8はⅠ区南2中央攪乱出土で、大きく欠損している。焼成は良好で、胎土は砂粒を少量含み暗灰黄褐色を呈す。表面には強いナデのあとが残り、また内面から軸に巻き付け接合した痕跡が窺われる。現存長5.4cmである。9はⅡ区東4旧校舎基礎攪乱出土で、焼成は良好であり、胎土は砂粒が非常に少なく暗褐色を

呈す。全長5.5cm、最大径3.8cm、重さ72.0gである。

10はⅡ区東2基礎出土の土製鳩笛で、吹口となる尾の部分がわずかに欠損している。背の中央部分に径1cmの円孔を開けている。内部は空洞になっており、径1cm程度の土玉が入る。緑と黄色の二彩で上面のみの施釉である。全長8.2cm、幅4.0cm、高さ4.3cmである。

11・12は土鈴である。11はⅡ区中2攪乱出土で、腹部の半分が欠失している。土師質で砂粒は少なく黄橙褐色を呈す。つまみ部には孔が一つ開いており、全体をナデ仕上げしている。高さ6.6cm、腹部径5.6cm、孔径0.5cmである。12はⅠ区南2北側攪乱出土で、腹部の半分を欠失している。土師質で砂粒は非常に少なく黄白褐色を呈す。つまみ部は茶巾包み状に襷が入り、孔が一つ開く。また全体はナデ仕上げされている。高さ4.3cm、腹部径3.9cm、孔径0.4cmである。

13はⅠ区南2攪乱出土の棒状土製品。全体的にやや反った棒状の形態で、断面形は丸い。欠損しており、全体の形状及び用途等は不明である。暗褐色を呈し、非常に硬質に焼成されている。砂粒は少ないが石英片等特定の混和材を用いている可能性が強い。現存長4.1cm、径1.1cmである。

14・15は土製人形。14は鯛を肩に担いだ笑顔の恵比須像で、遺構面出土である。型合わせによる製作で、下半を欠損している。現存高5.0cm、幅5.2cm、厚さ1.8cmである。15は太鼓を打ち鳴らす日蓮聖人像で、1号土坑出土である。型合わせによる製作で、全高5.3cm、幅3.7cm、厚さ2.0cmである。

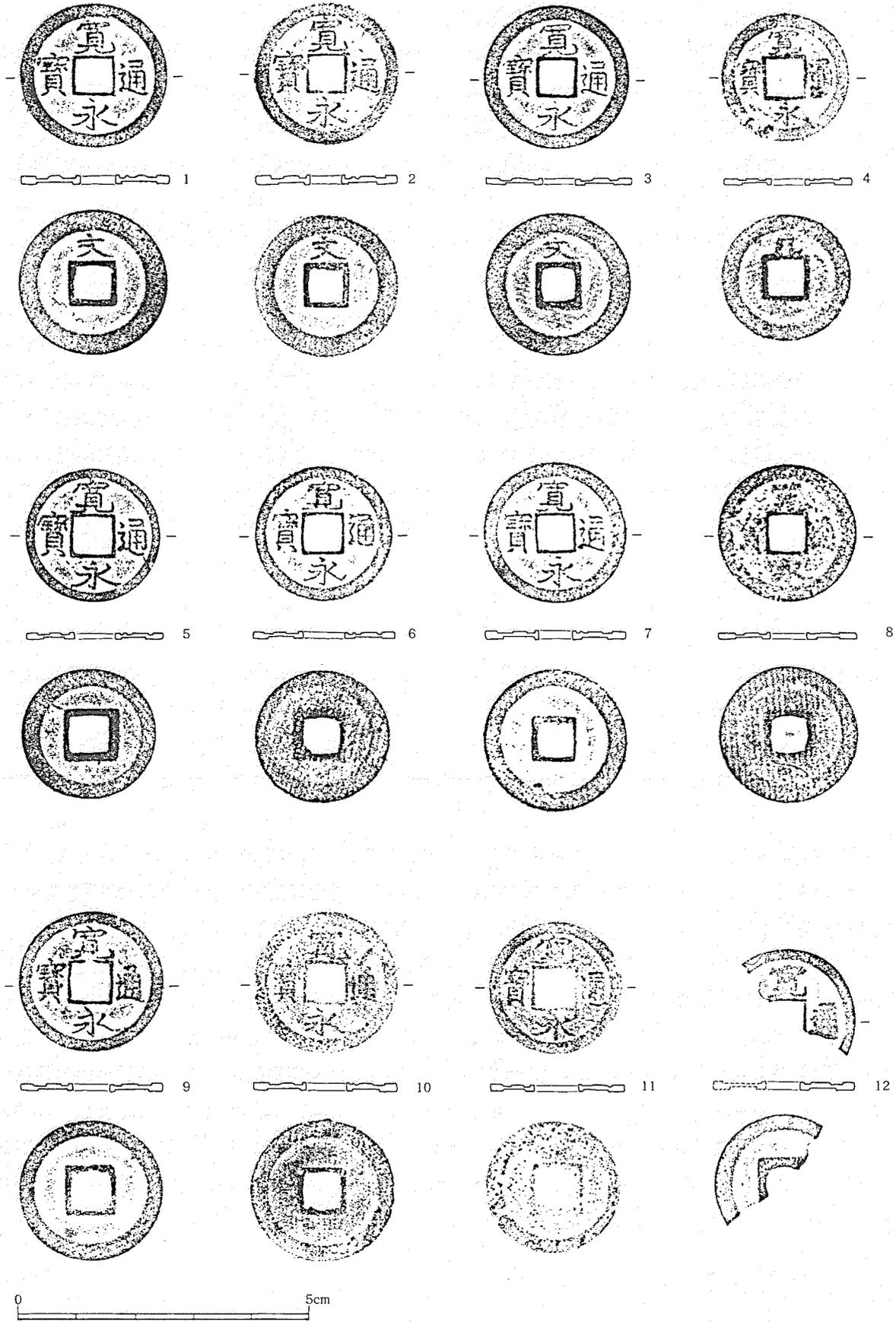
16・17は鞆の羽口である。16はⅠ区西8攪乱出土で、下部が剥離して欠損している。茶褐色を呈すが、先端近くは被熱して赤変しており鉄滓が付着する。胎土は石英、長石、雲母を多量に含み、粗砂を若干含んでいる。焼成は非常に堅緻である。また、円形のスタンプが一ヶ所に認められる。全長11.6cm、径6.9cmである。17はピット出土で、大きく欠損している。黄灰褐色を呈すが、弱い被熱のため基部側が黒変し、また先端には鉄滓が付着している。胎土は石英、長石、雲母をやや多く含み、粗砂を若干含んでいる。焼成は非常に堅緻である。現存長12.8cmで径は7.5cm程度に復元できる。

18はⅡ区中5遺構面出土で、三つの面を有し、端部が丸い三角錐状の土製品と考えられる。ただ欠損が大きく、詳細な全体形や用途については不明である。外面は茶褐色で内面は暗橙褐色を呈し、焼成は良好である。砂粒は非常に少ないが、橙褐色の混和材を多く含む。現存長4.4cmである。

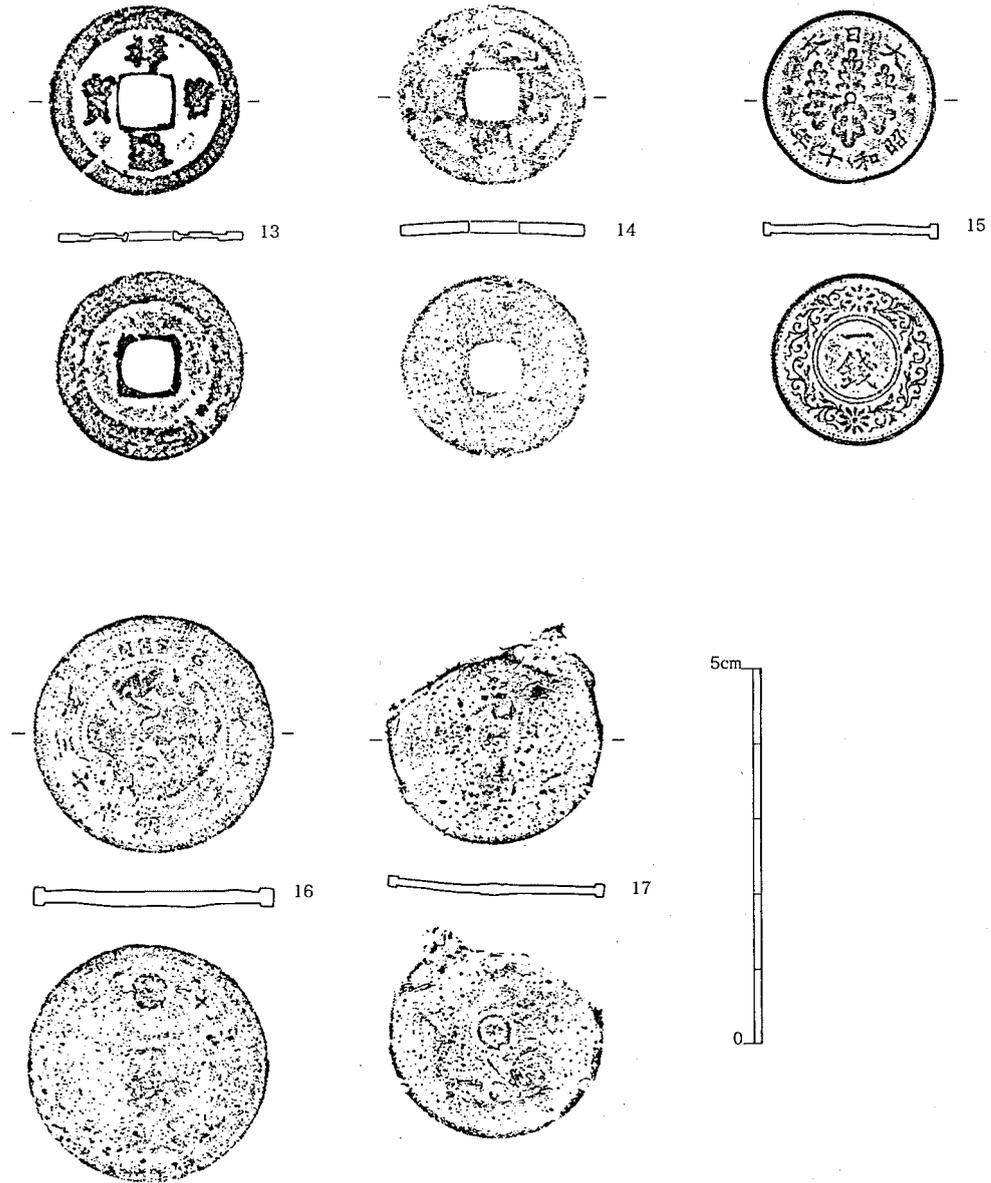
19はⅡ区北3攪乱の出土で、一部が欠損しているが全体形は楕円形になる札状の陶製品である。焼成は良好で非常に硬質であり、灰褐色から暗褐色を呈し、施釉されていない。胎土は極めて砂粒が少なく、表面は丁寧にナデ仕上げされている。孔が一部残存しているが、焼成後の穿孔と考えられる。現存長6.4cm、幅5.2cm、厚さ1.0cmである。20はⅠ区南1攪乱出土で、19と同様の札状の陶製品である。焼成は良好で、表面は灰黄褐色であるが、表面以外は施釉され暗茶褐色となる部分がある。胎土は極めて砂粒が少なく、表面は丁寧にナデ仕上げされている。孔が一ヶ所あり、表面の孔付近がわずかにくぼみ、紐ずれ痕とも考えられる。また表面にはアラビア数字で「64」と刻まれている。全長6.4cm、幅5.7cm、厚さ0.8cmである。

貨幣 (図版46・第94・95図)

1から12は寛永通寶である。1はⅠ区西8攪乱出土で、背面に「文」の字が鑄込まれる。径25mm、厚さ1.3mm、重さ3.6gである。2はⅡ区中1攪乱出土で、背面に「文」の字が鑄込まれる。



第94圖 貨幣實測圖① (1/1)



第95図 貨幣実測図② (1/1)

径24.5mm、厚さ1.3mm、重さ3.5gである。3はI区南2北側攪乱出土で、背面に「文」の字が鋳込まれる。径25mm、厚さ1.2mm、重さ3.6gである。4はI区南1攪乱出土で、背面に「元」の字が鋳込まれる。径22mm、厚さ1.0mm、重さ1.8gである。5は、I区西8攪乱出土で、径23mm、厚さ1.0mm、重さ2.4gである。6はピット出土で、径24mm、厚さ1.1mm、重さ2.6gである。7はI区南2出土で、径24mm、厚さ1.3mm、重さ3.1gである。8はI区北2・3包含層出土で径24mm、厚さ1.1mm、重さ2.7gである。9はピット出土で、径24mm、厚さ1.3mm、重さ2.7gである。10は表採で、径24.5mm、厚さ1.3mm、重さ2.7gである。11はII区東3旧校舎基礎攪乱出土で、径23mm、厚さ1.1mm、重さ2.8gである。12はI区南2北側攪乱出土で、欠損している。径は24mmに復元でき、厚さ1.3mmである。

13はI区東2基礎出土で、摩滅により判読しにくいだが、宋銭である祥符通寶と考えられる。径24mm、厚さ1.0mm、重さ2.8gである。14はII区西1包含層出土で、摩滅が著しく最初の「元」

の字が確認できるのみである。径24mm、厚さ1.5mm、重さ4.0gである。15はI区南2北側攪乱出土で、一銭硬貨である。昭和10年の発行であることが確認できる。径23mm、厚さ1.4mm、重さ3.7gである。16はII区東1攪乱出土で、二銭硬貨である。明治13年の発行であることが確認できる。径31.5mm、厚さ2.4mm、重さ14.4gである。17はII区北1包含層出土で、20世紀初頭に清で製作された光緒元寶である。切斷・折り曲げなどにより欠損しており、発行年等は確認できない。径28mm、厚さ1.1mm。

ガラス瓶 (図版46・47、第96・97図)

いずれも明治期～昭和初期のもので、旧制中学修猷館に関連すると思われるものが多い。

1～17は型打ちのガラスインク瓶である。1～9はほぼ同型となる。1～3は小型のもの。いずれも無色透明である。径3.6cm、器高3.4cm。1・2の底面には「SSS」、3には「SIMCO」と陽刻される。4～7は中型品。いずれも薄水色である。4は円の中に「M」、5は「M」の下に点を一つ、6・7は「SSS」の下に点を三つ陽刻する。8・9は大型のもの。どちらも無色透明である。8は円の中に「M」と点を二つ、9は円の中に「M」、円の外側に点を一つ、また肩部には「MARUZEN'S ATHENA INK」と記される。

10は無色透明のもの。インク瓶ではない可能性もある。11はフラスコ形のもの。底面には三角形の中に「NB」を陽刻するが不鮮明である。12は方柱状のインク瓶で底部の型がずれている。厚さも不均一で歪つな作りのものである。13も方柱状のインク瓶。薄水色透明で、体部に「CHAMPION INK」と陽刻される。

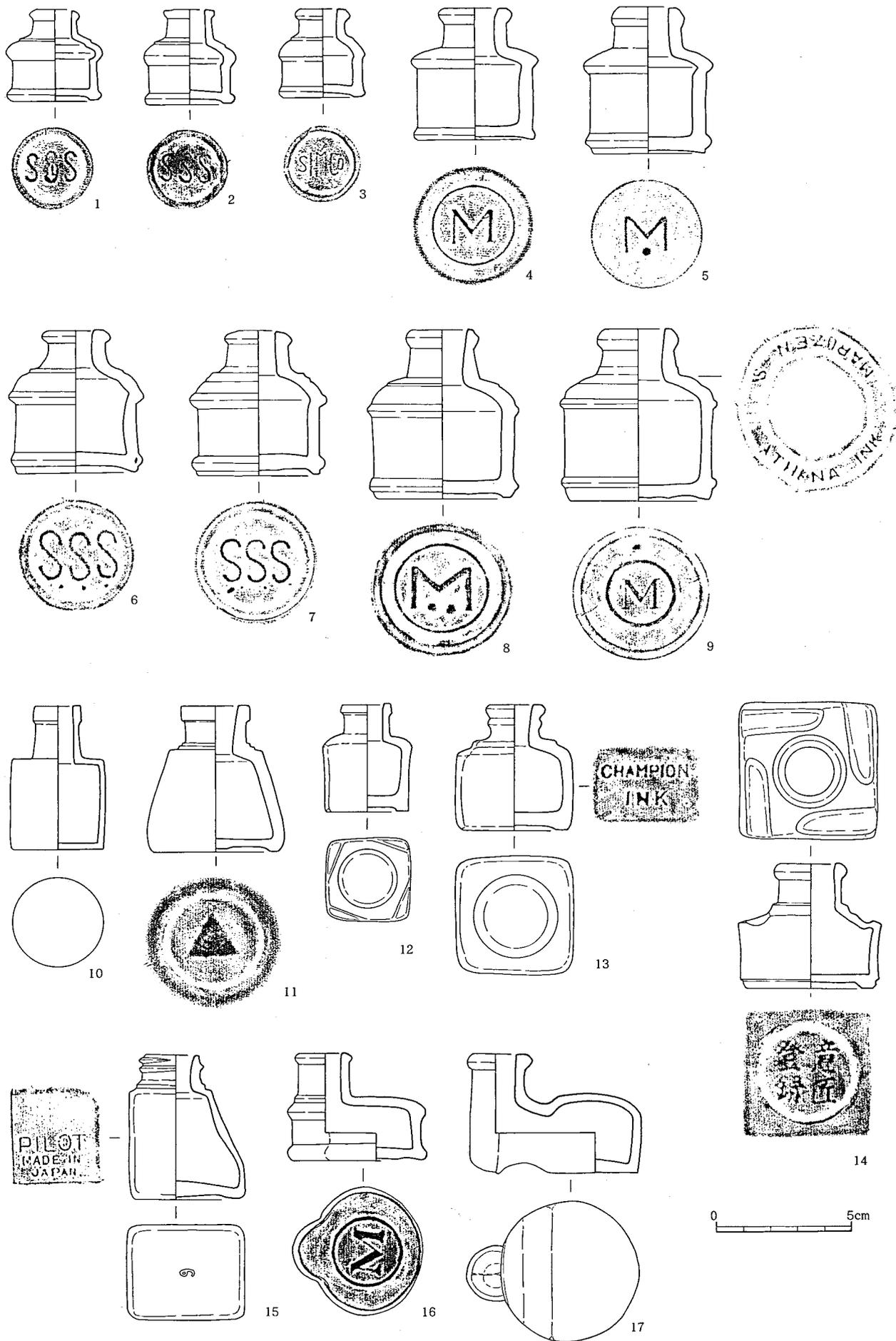
14は肩部の四方に筆置きをあしらったもの。底面に「意匠登録」と陽刻する。無色透明。15は肩部の一方を斜めにカットした形状をなすもので、最も広い側面に「PILOT MADE IN JAPAN」と記される。底面には「6」と記される。薄水色透明。昭和24年頃製造。

16・17は口縁部が一方に寄ったもの。16は丸の中に「M」を陽刻する。薄水色透明。17は無色透明。底面には何の文字も記されていない。

18～22は筒状のもの。18～21は低い筒状を呈す。18は体部が10角形をなす。口縁部にはねじ山が切られる。無色透明。19・20はほぼ同型。19は水色透明。底面には何も記されていない。20は19よりもやや大型となる。底面には「フェキ」と陽刻される。明治30年以降昭和35年まで製造されたもの。昭和36年からプラスチックに変わったという。水色透明。19・20は澱粉糊の瓶であろう。21は低平な円柱状をなす。無色透明。化粧瓶か。22は器高がやや高くなるもの。無色透明。22はどのような用途に使用されたのか不明。

23は体部に「米山商店」とある。無色透明。24も無色透明。内部には内容物が固化したものが残る。25は細身の瓶。体部に「TRADE MARK トンボ印」の文字とトンボの陽刻がなされる。無色透明でガラス内の気泡が目立つ。26は底部に「A」、「S」、菱形の陽刻があり、体部には「GANGY」と記される。修正液の瓶か。

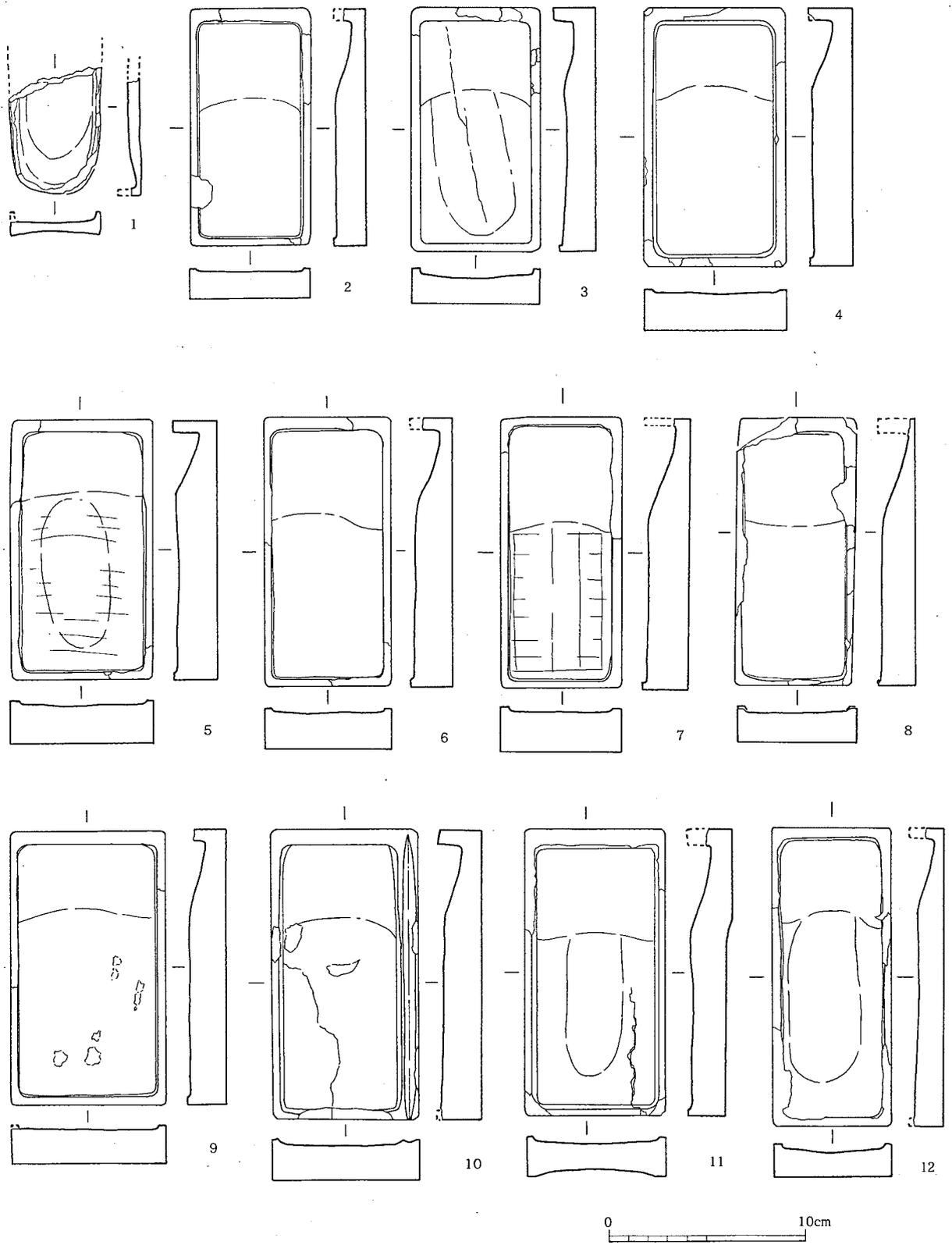
27は褐色で透明度の低い薬瓶。28は断面長方形をなす無色透明の瓶で、体部に「HOLBEIN OSAKA JAPAN」とある。油絵の溶き油用の瓶。底部には「35cc」とある。29は断面楕円形、無色透明の薬瓶で、体部に「小川医院」の文字と目盛が陽刻される。30はやや器高が高い無色透明の瓶。肩部に段をもつ。用途不明。



第96図 ガラス瓶実測図① (1/2)



第97図 ガラス瓶実測図② (1/2)



第98图 硯実測图 (1/3)

31は断面が楕円形に近い形状をなす褐色半透明の瓶。底部に「酒の精」と陽刻がある。32は底面に六芒星の陽刻を行う薄水色の瓶。33は断面が楕円形に近い。側面の一方に「KOBAYASHI TAMUSHITINCTURE」とある。現在でも著名なタムシチンキの瓶である。無色透明。1894年から戦前まで製造されていた。

硯 (図版47、第98図)

1は楕円形に近い形状をなすと思われる硯。石材は赤間関。近世のものか。2～12は旧制中学修猷館で使用されたと思われる長方形の硯である。2・3はほぼ同型。2は黒色石材使用。あまり使用しておらず裏面に線刻もない。3は黒灰色の石材使用。かなり使い込んでおり陸部中央が窪んでいる。裏面には「昭和二年四月 喜多村大作」と線刻される。4～6はほぼ同型。4はそれほど顕著な使用痕は見られない。裏面には「赤間関」の線刻がある。赤間関製。

5は赤間関製。陸部には故意に付された横方向の平行線刻が見られる。裏面には「岸田哲雄」と線刻される。6は黒色の石材使用。それほど使い込んではいない。裏面には「三年二組 徳重佑」と線刻される。7・8は幅が若干狭いもの。7は黒色の石材を使用する。陸部には格子状の線刻を行うが、使用のため中央の線刻が消える。裏面には「明治四十四年買求 代貸八錢 預科一□ 同一ノ墨代貸貳二錢 大田泰治」と線刻される。8は黒灰色の石材使用。裏面には「明治二十九年九月二十一日」と小さく線刻され、その上から「智組 筋田有」と大きく線刻がなされる。

9はやや幅広のもの。黒色の石材を使用する。使用痕はほとんど見られず、また裏面の線刻も見られない。10は赤間関製。右端に筆置きのための溝が彫られる珍しい例である。裏面には「修猷 汐見」と線刻がある。11はやや大型となるもの。赤間関製。裏面には「赤間関」「二十三□ 福岡」と線刻がある。12はかなり細長いもの。黒色の石材使用。使用痕顕著で陸部が顕著に窪む。裏面には「柴田正」と線刻がなされる。



砲弾

発掘調査が終了し、現場を工事側に明け渡して一ヶ月後の3月17日午後3時過ぎ、発掘調査区である校舎建設現場において不発弾が発見され、現場作業員により福岡西署に通報された。その後佐賀県三田川町の陸上自衛隊第四師団目達原駐屯地の不発弾処理隊が出動、同駐屯地に運ばれた。

この一件は西新町という市街地の中での出来事であり、新聞やテレビなど各マスコミによって大きく報道され、調査担当者らの知る所となった。発掘作業中に爆発事故が起きなかったのは幸いであつたと胸を撫で下ろしたが、砲弾は戦時資料と



砲弾1

しても貴重な文化遺産であり、西新町遺跡出土品として歴史的に重要な意義を持つものであるため、考古資料として当方に保管させて頂くよう不発弾処理隊に依頼した。

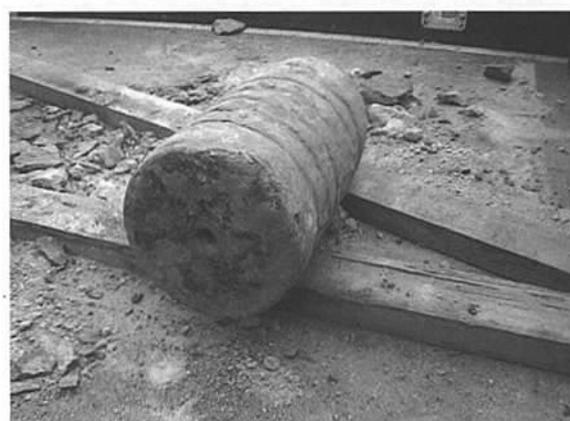
残念ながらその依頼は叶わず、砲弾は爆破処理されることとなったが、処理隊の方のご厚意により写真をご送付頂いたので、ここで報告する次第である。

報道された砲弾は1発だったが、駐屯地に運ばれた砲弾は2発であった。

1は長さ約49cm、直径15cmを測る。腹部に1条の凹線が縦方向に走る。先端には円孔が見られる。底部は平坦である。火薬は入っていたが、信管は遺存していなかったとの事であった。2は1に比べて径が大きく、長さがやや短いように見える。直径は20cmを測る。腹部には凹線が螺旋状に巡り、見る限りでは5条確認出来る。また底部には小円孔が認められる。これもやはり火薬は詰まっているものの信管は無いとのことであった。

この2発の砲弾の写真を防衛研究所図書館の方に見ていただいたが、残念ながら一致する資料は無いとの事であった。しかし2に関しては明治期、ほぼ日清・日露戦争当時のものであろうとの御教示をいただいた。何故この学校敷地内から出土したかという点については、当時戦勝記念品として払い下げ品を学校に展示していたのではないか、というご意見を一つの可能性として頂いた。

さて、これら2発の砲弾のうち1発は、新聞報道によると現場の中央付近の約1.5mの地中から発見されたという事である。中央付近には多くの攪乱坑があり、その中でも第5図に示した攪乱坑は最も深く、発掘調査の段階では攪乱の深さが遺構の遺存する深さよりもはるかに深いと判断したため底部まで掘り下げなかった所である。思い返してみれば、この攪乱掘削中に大きな棒状の鉄塊が出土した事を記憶しているが、まさか砲弾とは考えてもおらず、全体の形状を確認しないまま埋め戻してしまった。今考えると恐ろしくもあり、また貴重な文化遺産を調査する機会を逸してしまった事が残念でもある。以後は十分配慮を配りながら発掘調査に望みたいと思った次第である。



砲弾2

第4章 自然科学系の分析

第1節 西新町遺跡第12次調査出土のイヌ遺体

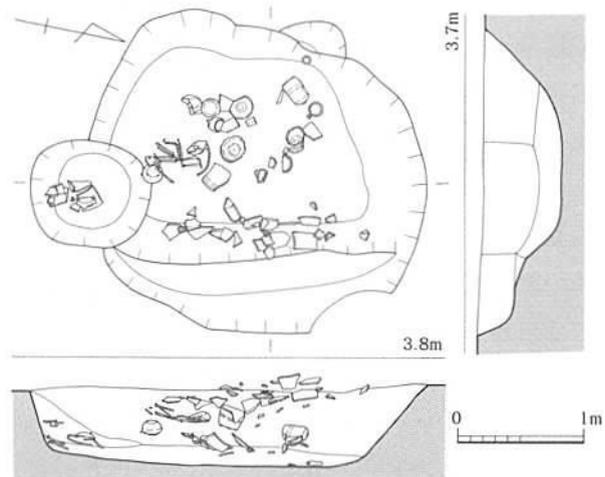
西中川 駿・小山田 和央

(鹿児島大学獣医学科解剖学教室)

はじめに

イヌは最も早くから家畜化された動物で、わが国でも縄文早期から飼育されてきたと言われている。一方、中世になると中型犬も検出されるようになり、江戸時代の遺跡からは小型犬から大型犬まで、伴侶動物として飼育されるようになってきている。江戸時代のイヌの出土例については、東京都では金子や茂原らにより、数多くの遺跡で報告されているが、九州では極めて少ない。最近では北九州市の小倉城跡から多くの動物遺体が出土しており、中でもイヌが大量に検出されている。また、長崎市の出島遺跡からは、超小型犬から大型犬までいろいろな体形のイヌが出土し、和蘭商館を遺した人々が愛玩動物として飼っていたことが報告されている。

西新町遺跡は、福岡市早良区西新にあり、修猷館高等学校校舎改築のため、平成10年4月22日～12月28日まで福岡県教育庁文化財保護課の指導の下に第12次調査が行われ、時期は18世紀後半～19世紀代である。資料（一頭分の遺体）は発掘後当教室に持ち込まれたものであり、ここではイヌの遺体についてその概要を報告する。



第99図 第12次調査 2号土坑実測図 (1/60)

出土状況と出土骨の概要 (第99・100図)

イヌの遺体は、江戸時代の廃棄土坑（2号土坑）から、多数の陶磁器片と共に出土し、出土状況を写真や図面からみると、陶磁器に囲まれるようにして頭を腹方に曲げ、背中を丸めた形で、前足はごく自然に、後足は膝関節を前足に近付けてそこで曲げた状態で検出されている。出土状態からこのイヌは投棄されたものではなく恐らく死後埋葬されたものと思われる。

出土した骨は胸椎や四肢の肢端を除く殆どの骨が出土しているが、当教室へ持ち込まれたものは、頭蓋骨、下顎骨、第三～七頸椎、第一胸椎、第一～七腰椎、第一仙椎、肩甲骨、上腕骨、前腕骨、中手骨、寛骨、大腿骨、脛骨および足根骨などであり（第100図の1～20参照）、完全な骨はなく総重量337.4gである。各骨共に非



2号土坑イヌ遺体出土状況 (北西から)

常に脆いために硬化剤（パラロイド）で補強をして検索に供した。

頭蓋骨は切歯骨、側頭骨、鼻骨の一部などの欠損した標本で（第100図の1参照、以下同じ）、右側の歯は、犬歯、第一前臼歯から第二後臼歯まで備えているが、各歯は磨耗が激しく老齢である。計測可能な部位は少なく、臼歯列長は51.91mm、眼窩間幅（ent-ent）34.10mm、口蓋最大幅66.96mmなどである。

下顎骨は、両側共に切歯部、筋突起、角突起は破損しており（2・3）、右側の関節突起からの保存全長は、136.48mmで、臼歯列長は67.47mmであり、第一後臼歯の歯冠長と幅は19.76、7.48mmである。頸椎、腰椎、仙椎は完形骨はなく、計測も不可能である。

肩甲骨は遠位部のみがあり、右側の遠位端径は28.65mm、関節面幅は17.84mmである。上腕骨、大腿骨、脛骨は両側共に近位端、遠位端の一部が欠損しており、橈骨は右側のみが計測可能で（11）、その最大長は157.95mmである。寛骨は両側の寛骨臼の部位と左側の腸骨体のみである（13・14）。

本遺跡出土のイヌの各骨の計測値（19部位）から、筆者ら方法で骨長を推定し、山内や筆者らの方法で体高を求めると、 50.42 ± 2.67 cmとなり、これは現生の四国犬や薩摩犬とほぼ同じ体高で、中型犬に属する。また、歯の磨耗状態から、10歳以上の老齢犬で、犬歯の大きさから雌と推測される。

考察

イヌは縄文早期から当時の人々に飼われていたといわれ、その証拠として愛媛県上黒岩岩陰遺跡から埋葬例が報告されている（江坂）。茂原らはわが国のイヌの遺体の出土状況を調査し、全国で365ヶ所からの出土例を報告し、そのうち九州では10ヶ所から検出されている。筆者らの最近の調査では九州の遺跡からは、少なくとも60ヶ所以上からイヌ遺体が出土している。

江戸時代のイヌは、中世以降西洋種が導入され、特に関東の遺跡からは大型から小型まで様々な大きさのイヌの遺体が出土し、当時色々な犬種が飼われていたことが報告されている（金子、茂原ら、加藤ら）。九州では最近、長崎市の出島遺跡や小倉城跡から大小様々な大きさの四肢骨が出土し、特に近世の小倉城代米御蔵跡から推定個体数117体分の四肢骨が検出され、これらの骨の計測値から体高を推定すると、33～57cmであり、その中で41～47cmの中型犬が多いことが報告されている（西中川ら）。本遺跡のイヌは、推定体高 50.42 ± 2.67 cmであり、これは現生の四国犬や薩摩犬とほぼ同じ大きさで、中型犬に属する。

縄文時代の埋葬例について、山崎は全国で22ヶ所をあげ、その埋葬法について報告している。江戸時代のイヌの埋葬例については、東京都内の遺跡から数多く出土しているが、九州では検出されていない。本遺跡のイヌは、狭い土坑内に背中を丸めて埋葬されており、山崎の報告と類似する。また、本遺跡のイヌは、臼歯の磨耗状態から10歳以上の老齢犬で、犬歯、臼歯の大きさから雌イヌと推測され、当時の人々によって飼われていたイヌが老衰のため死亡し、丁寧に埋葬されたものと考えられる。

イヌが食用に利用されていたことは、弥生遺跡の原ノ辻遺跡などで報告されており（茂原、松井）、また、江戸時代においても食肉や鷹餌として利用されていた可能性が報告されている（金子、松井）。本遺跡のイヌは解体痕など刀傷のないこと、骨格が埋葬時の状態で検出されていることから、飼い主により死後埋葬されたものと考えられる。

まとめ

福岡市西新町遺跡（第12次調査）出土の18世紀後半から19世紀代のイヌの遺体について調査した。

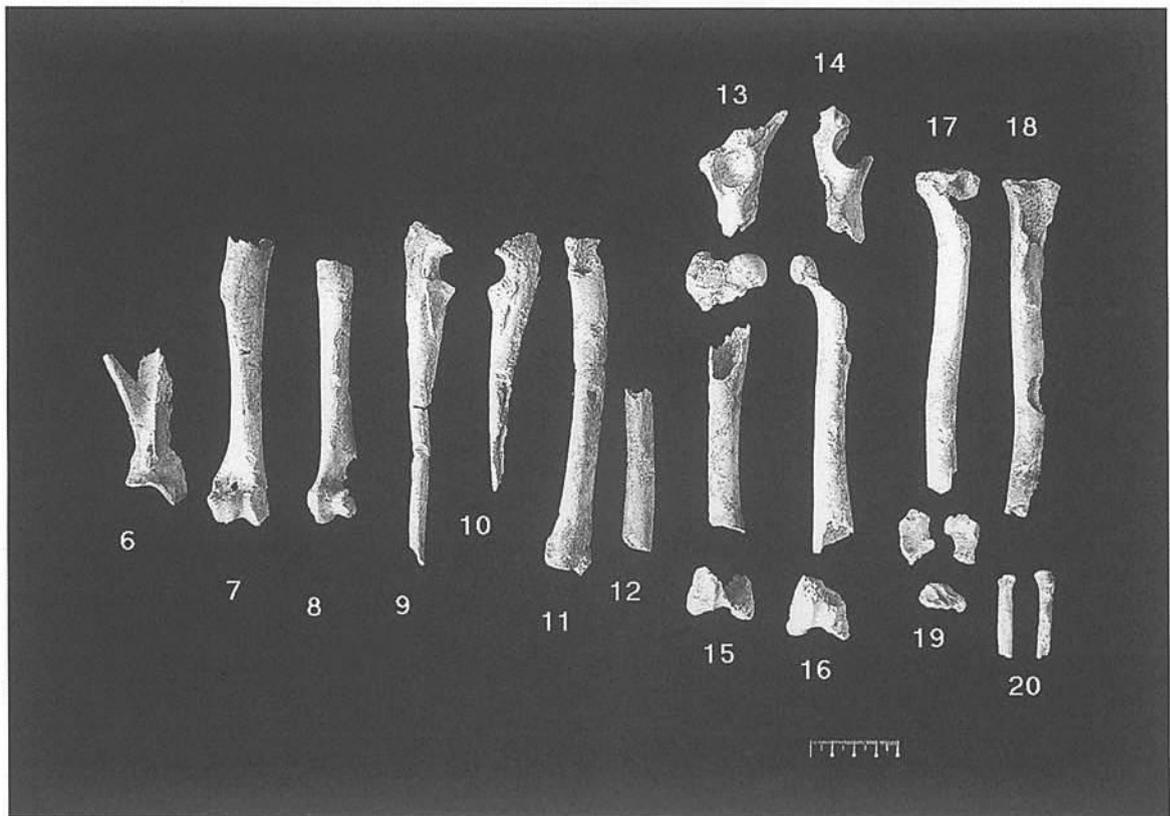
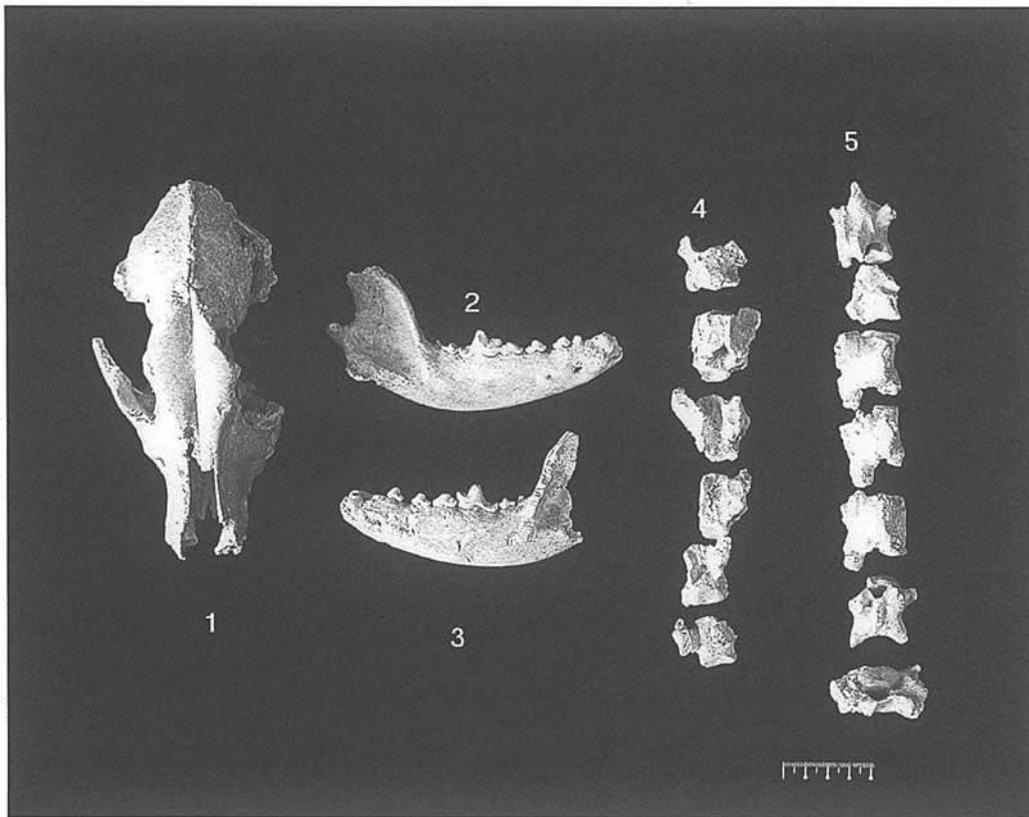
1. 第12次調査区から出土したイヌは、土坑内に1体みられ、背中を丸め首を腹方へ曲げた状態で出土し、総重量337.4gである。
2. 出土した骨は、頭蓋骨、下顎骨、頸椎、腰椎、および肢端を除く前肢骨、後肢骨などである。ほぼ完全な橈骨の最大長は、157.95mmであり、これと他の骨の計測値（19部位）から体高を推定すると、 50.42 ± 2.67 cmとなる。また、臼歯の磨耗状態、犬歯の大きさから、10歳以上の雌イヌと推測される。
3. このイヌには解体痕や刀傷のないこと、土坑内での骨格の配置が自然であることなどから、当時の人々により飼われていて、死後丁寧に埋葬されたものであると考えられる。

参考文献

- 江坂輝弥：縄文時代における犬の埋葬骨格、考古学ジャーナル、40、56（1970）
- 金子浩昌：葛西城址Ⅳ・Ⅴ区濠出土の動物遺体、青戸・葛西城趾調査報告Ⅲ、p197-260（1975）
- 金子浩昌：西新宿三丁目遺跡出土のウマ及びその他の動物遺体、西新宿三丁目遺跡、p73-93（1993）
- 金子浩昌：出島オランダ商館跡出土の動物遺存体、長崎出島の食文化、p87-96（1993）
- 北九州市芸術文化振興財団：小倉城米御蔵跡Ⅱ、北九州市埋蔵文化財調査報告書、272、p167-181（2002）
- 松井 章：草戸千軒町遺跡第36次調査出土の動物異遺存体、草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ、p343-364（1994）
- 松井 章：考古学からみた犬、部落解放、11、7-25（1999）
- 茂原信生：古代家犬の系統と移動に関する研究、文部省科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書、p1-61（1985）
- 茂原信生：日本犬に見られる時代的形態変化、国立歴史民族博物館研究報告、29、89-107（1991）
- 茂原信生・松井 章：原の辻遺跡出土の動物遺存体、原の辻遺跡、189-207（1995）
- 山内忠平：犬の骨長から体高の推定法、鹿大農学術報告、7、125-131（1958）

第100図 図版の説明

- 1、頭蓋骨 2、右下顎骨 3、左下顎骨 4、上から第一頸椎、第三頸椎～第七頸椎 5、第二腰椎～第一仙椎 6、右肩甲骨 7、右上腕骨 8、左上腕骨
- 9、右尺骨 10、左尺骨 11、右橈骨 12、左橈骨 13、左寛骨 14、右寛骨
- 15、右大腿骨 16、左大腿骨 17、右脛骨 18、左脛骨 19、右足根骨 20、右第四、第五中手骨



第100図 西新町遺跡第12次出土イヌ遺体

第2節 西新町遺跡第13次調査出土土器の土器の蛍光X線分析

大谷女子大学 三辻利一

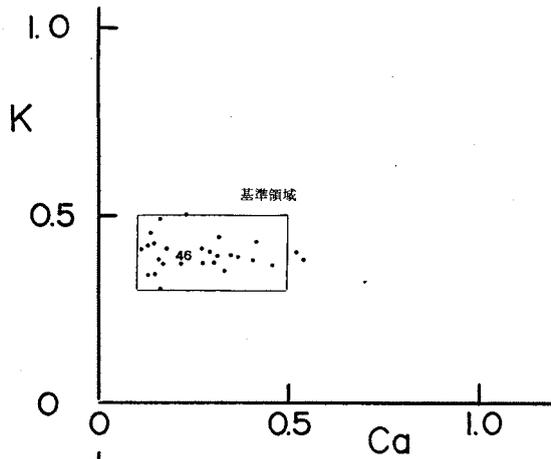
弥生時代末から古墳時代初めにかけての軟質土器は形式的に庄内系、布留系、半島系、在地系などと分類されているが、土器形式と土器胎土との関係は未だ明らかにはされていない。須恵器のように窯跡から大量の破片が出土する場合には、窯跡出土須恵器の分析データをベースにして、生産地である窯跡を分類、整理することは可能であった。窯跡が残っていない軟質土器の場合、何をベースに元素分析のデータを整理するか、また、その方針が固まっていない状態である。とりあえず、窯跡出土須恵器の分析化学的研究で地域差を有効に表す元素であることが見つけだされたK、Ca、Rb、Srの4元素を使って形式分類の結果に対応させてみることにした。

分析値は第2表にまとめてある。全分析値は標準試料として使った岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って試料の各元素の蛍光X線強度を標準化した値で表示してある。この結果は必ず、K-Ca、Rb-Srの両分布図にプロットされ定性的にデータを理解し、その後、データ解読の方針をたてるのが筆者の常套手段である。

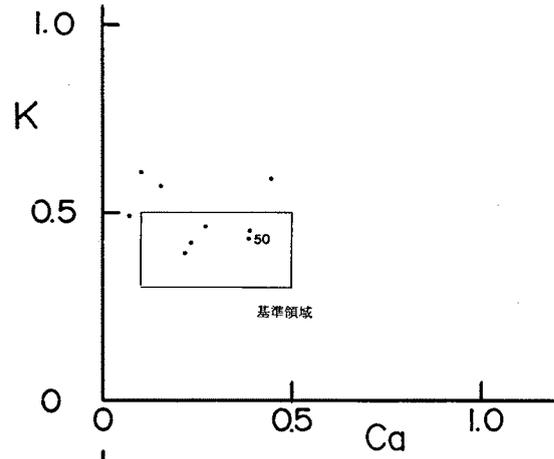
第101図には西新町第13次調査出土の布留系土器の両分布図を示す。No.46の試料は少しずれるが、他の試料は比較的まとまりがよい。それで、ほとんどの布留系土器を包含するようにして基準領域を描いてみた。この広がりには1基の窯跡出土須恵器の広がりには比べると、かなり大きい。一つの窯群の須恵器の広がりには相当する。通常、1基の住居跡から出土する土師器を分析しても、この程度の広がりがある。このことは土師器は須恵器のように土を選択し、集中的に窯で焼成したような生産方式をとらなかったことを示唆している。一つの地域内のあちこちで製作したと推察される。そう考えると、これらの布留系土器は一ヶ所ではなくても、同じ地域内の何ヶ所かで作られたものであると考えられる。そして、これらが果たして、畿内で作られた布留式土師器と同じ胎土をもつかどうかはわからない。かりに、これらの布留系土器が同じ地域内で作られた土器であると仮定して、ここでは他の形式の土器の胎土と比較してみた。

第102図には在地系土器の両分布図を示す。比較のために、第101図で描いた基準領域をここでも描いてある。No.50は基準領域を大きくずれるが、No.47、49、51、54の4点の試料は基準領域に分布し、布留系土器と同じ胎土をもつことを示している。他方、Sr量が異常に多いNo.50と、Ca量が少ないNo.52、53の試料は別胎土をもつと考えられる。これら3点の試料は他の在地系試料とは異なり、別の地域で作られた土器である可能性が高い。つまり、搬入品である。このうち、No.52、53の2点の試料は全因子で類似しており、同じ所で作られた土器である可能性が高い。このように考えると、4点の在地系土器も布留系土器と同じ胎土をもち、他に、少なくとも二種類の胎土の在地系土器があることになる。

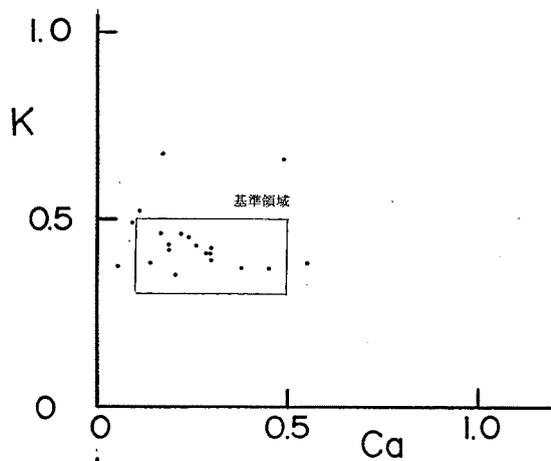
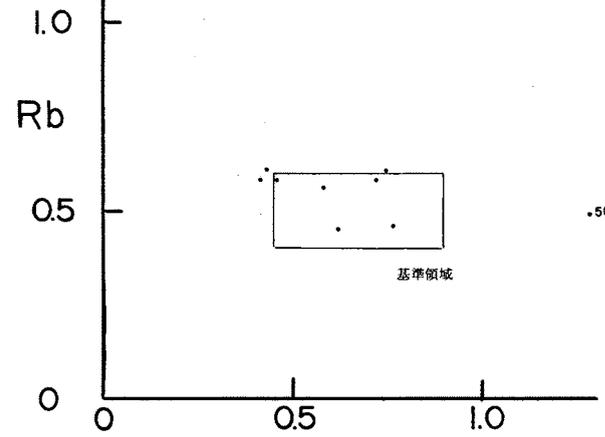
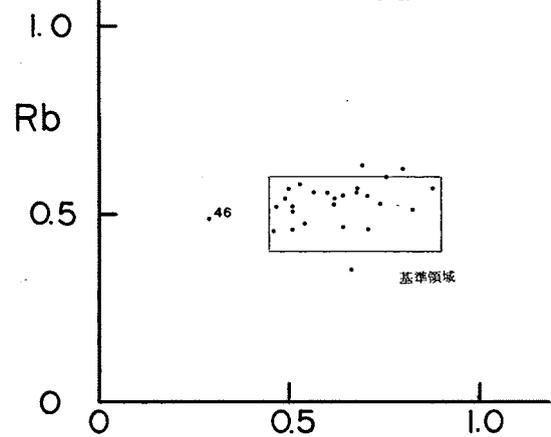
第103図には半島系土器の両分布図を示す。K-Ca分布図では大部分の試料は基準領域に分布するものの、逆に、Rb-Sr分布図ではずれてしまう。このことは半島系土器の胎土は布留系土器の胎土とは別であることを示す。半島系土器も両分布図を見ている限り、少なくとも二種類はあるようにおもわれる。韓式土器の胎土については朝鮮半島内の軟質土器をもっと数多く分析しない限り、土器胎土の特徴は把握できない。今回分析した試料の中に韓式土器が含まれているかどうかは目下のところ判断の仕様がなない。



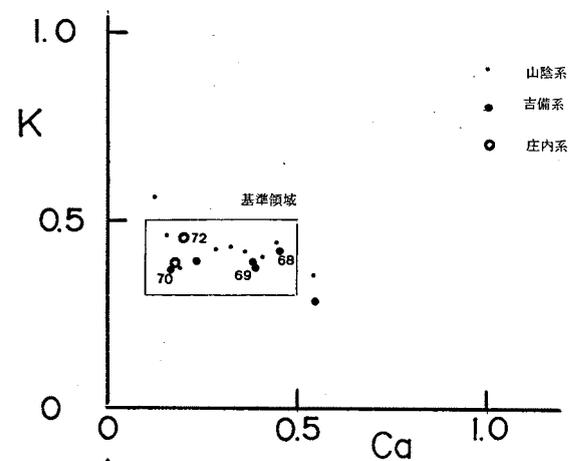
第101図 第13次調査区出土布留系土器の両分布図



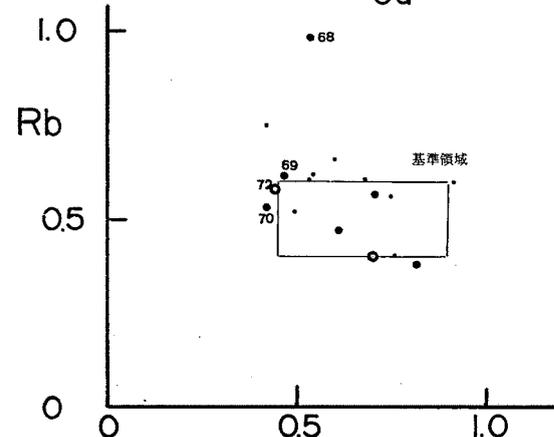
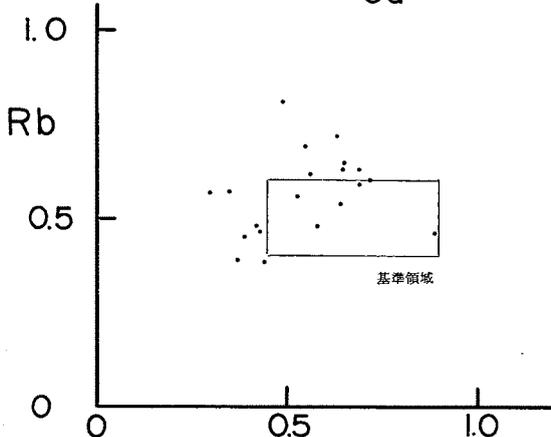
第102図 第13次調査区出土在地系土器の両分布図

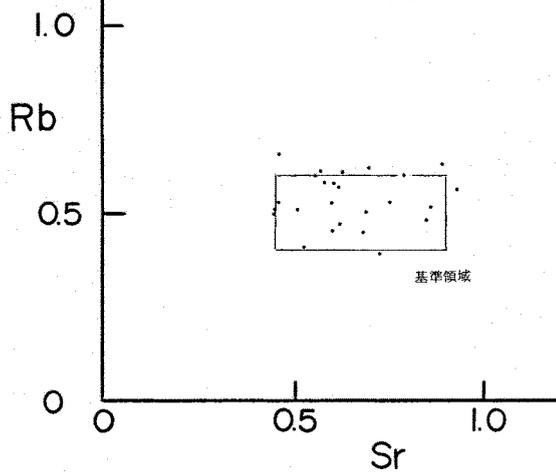
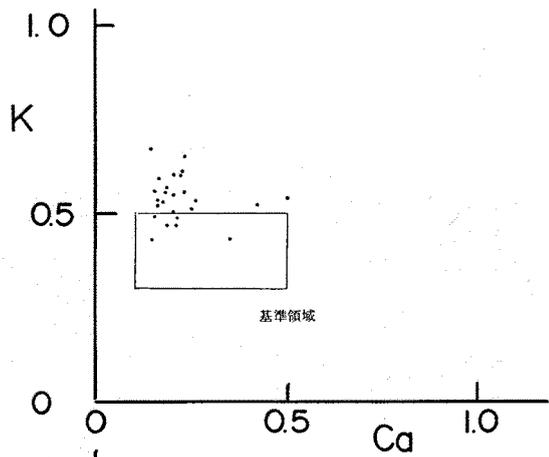


第103図 第13次調査区出土半島系土器の両分布図

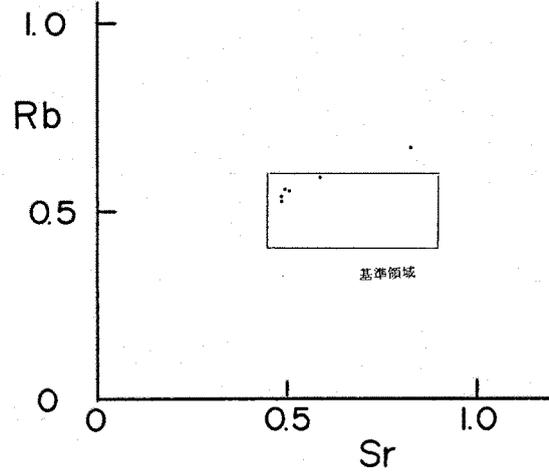
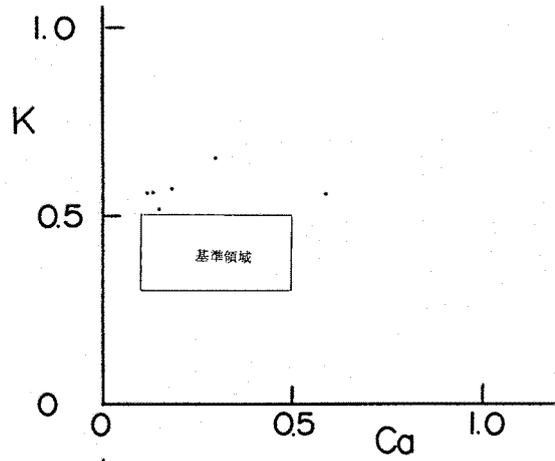


第104図 第13次調査区出土山陰系・吉備系・庄内系土器の両分布図

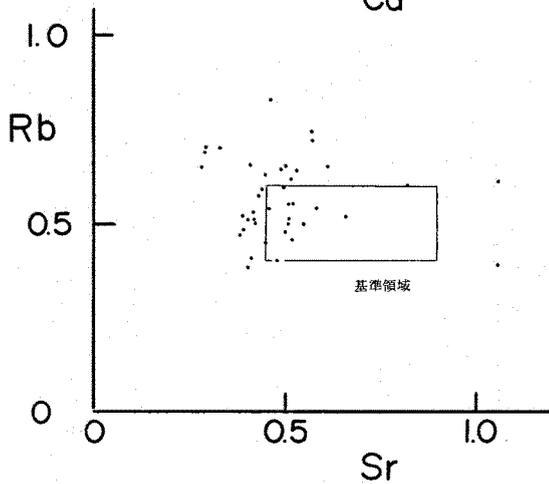
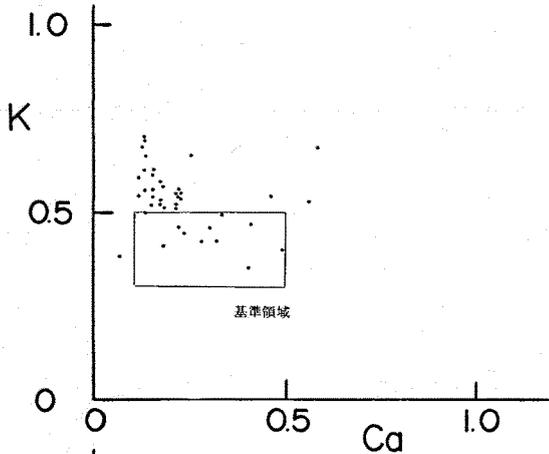




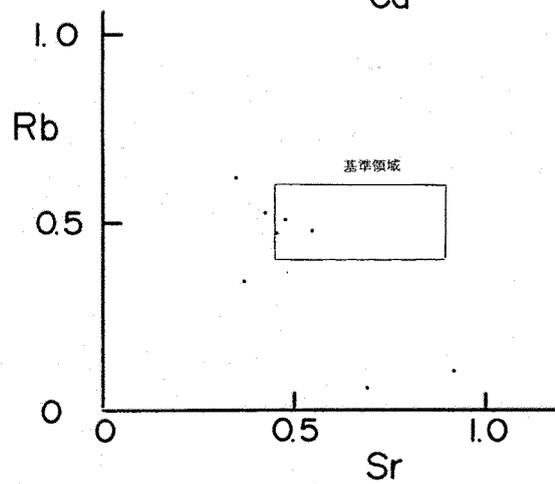
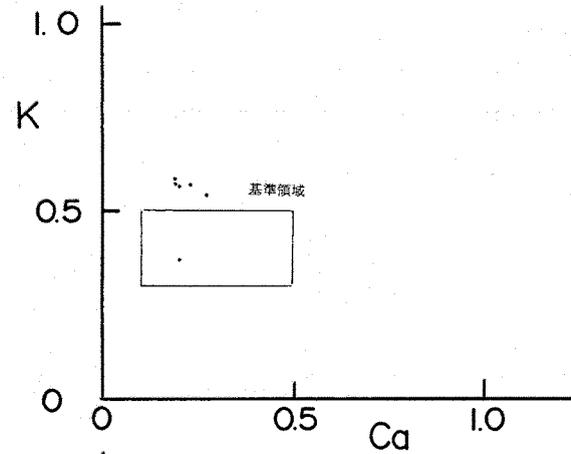
第105図 第12次調査区出土布留系土器の両分布図



第106図 第12次調査区出土在地系土器の両分布図



第107図 第12次調査区出土半島系土器の両分布図



第108図 第12次調査区出土山陰系・吉備系・庄内系土器の両分布図

第104図には他の形式の土器の両分布図をまとめて示してある。山陰系土器については、No.60以外はすべて、ほぼ、基準領域に対応し、布留系土器と同じ胎土をもつと考えられる。吉備系土器も同じ住居跡から出土したNo.65、66、69の3点の試料は基準領域内に分布し、布留系土器と同じ胎土をもつと考えられる。しかし、Rb量が異常に多いNo.68は別胎土である。No.70はむしろ、庄内系土器No.72と類似した胎土をもつ。庄内系土器は今回は2点しか分析されていないが、両者はRb-Sr分布図では離れて分布しており、別胎土である可能性が高い。

このようにみえてくると、今回分析した試料の大半は基準領域内に分布し、同じ地域内で作られた土器である可能性が高い。そうであれば、これらの土器こそ、在地産の軟質土器である可能性が高くなる。大量に外部地域から搬入する理由が考えられないからである。さらに、在地系、半島系、山陰系、吉備系、庄内系土器の胎土が一種類ではないことである。多数派の布留系土器を在地産と考えるほうが、理解し易いのではないだろうか？

このように、大量に出土する土器の胎土が在地産の土器であるという考え方は何か特別の事情がないかぎり、常識的な考え方であろう。もし、そうであれば、昨年分析した西新町第12次調査区出土の軟質土器についてもこのような考え方は成り立つであろう。そこで、昨年分析した軟質土器の両分布図を再度、点検してみた。第105図には西新町第12次調査区出土の布留系土器の両分布図を示す。比較のために、第101図で描いた基準領域を描いてある。第105図をみると、Rb-Sr分布図ではほとんどの試料が基準領域に分布し、在地産の可能性あることを示唆したが、K-Ca分布図では少し領域をずれる。このことは第13次調査区の布留系土器と第12次調査区の布留系土器の胎土が少し異なることを示している。第106図には第12次調査区出土の在地系土器の両分布図を示す。第105図・第106図を比較すると、布留系土器と在地系土器の胎土はよく似ていることがわかる。このことは第12次調査区でも布留系土器と在地系土器は同じ地域内で作られた可能性が十分あることを示している。第107図には第12次調査区出土の半島系土器の両分布図を示す。大部分のものは基準領域をずれることがわかる。このことは半島系土器は布留系土器、在地系土器とは胎土が異なり、別の地域で作られた土器であることを示唆している。また、同じ半島系土器の胎土を第13次調査区と第12次調査区間で比較すると、すなわち、第103図と第107図を比較すると、Rb-Sr分布図では類似するようみえるが、K-Ca分布図では全く異なることがわかる。形式的には同じ半島系土器でもその胎土は第13次調査区と第12次調査区では異なる訳である。これがもし、形式通り、半島産であれば、第13次調査区と第12次調査区へは朝鮮半島の別地域から軟質土器を持ち込んだことになる。第108図には第12次調査区から出土した庄内系土器の両分布図を示してある。K、Rb量がきわめて少なく、逆に、Ca、Sr量が異常に多い2点の試料は他には見られない特徴をもつ胎土であり、外部地域からの搬入品と推定される。他の6点の試料のうち5点は類似した胎土をもっており、同じ地域内の製品と考えられる。これらは図4に示した庄内系土器のNo.72と類似した胎土をもっており、第13次調査区と第12次調査区では庄内系土器は大部分が同じ胎土をもつということになる。No.71は別胎土の可能性が一層深まったことになる。

以上のようにみえてくると、第13次調査区においても、第12次調査区においても、布留系土器と在地系土器の胎土は同じであり、これらこそ在地産の軟質土器の胎土である可能性が深まった。しかし、第13次調査区と第12次調査区とはこれらの土器胎土が少し異なるところから、同じ地域内の別場所の製品の可能性が指摘されよう。他方、半島系の土器の胎土は第13次調査区と第12次調査区

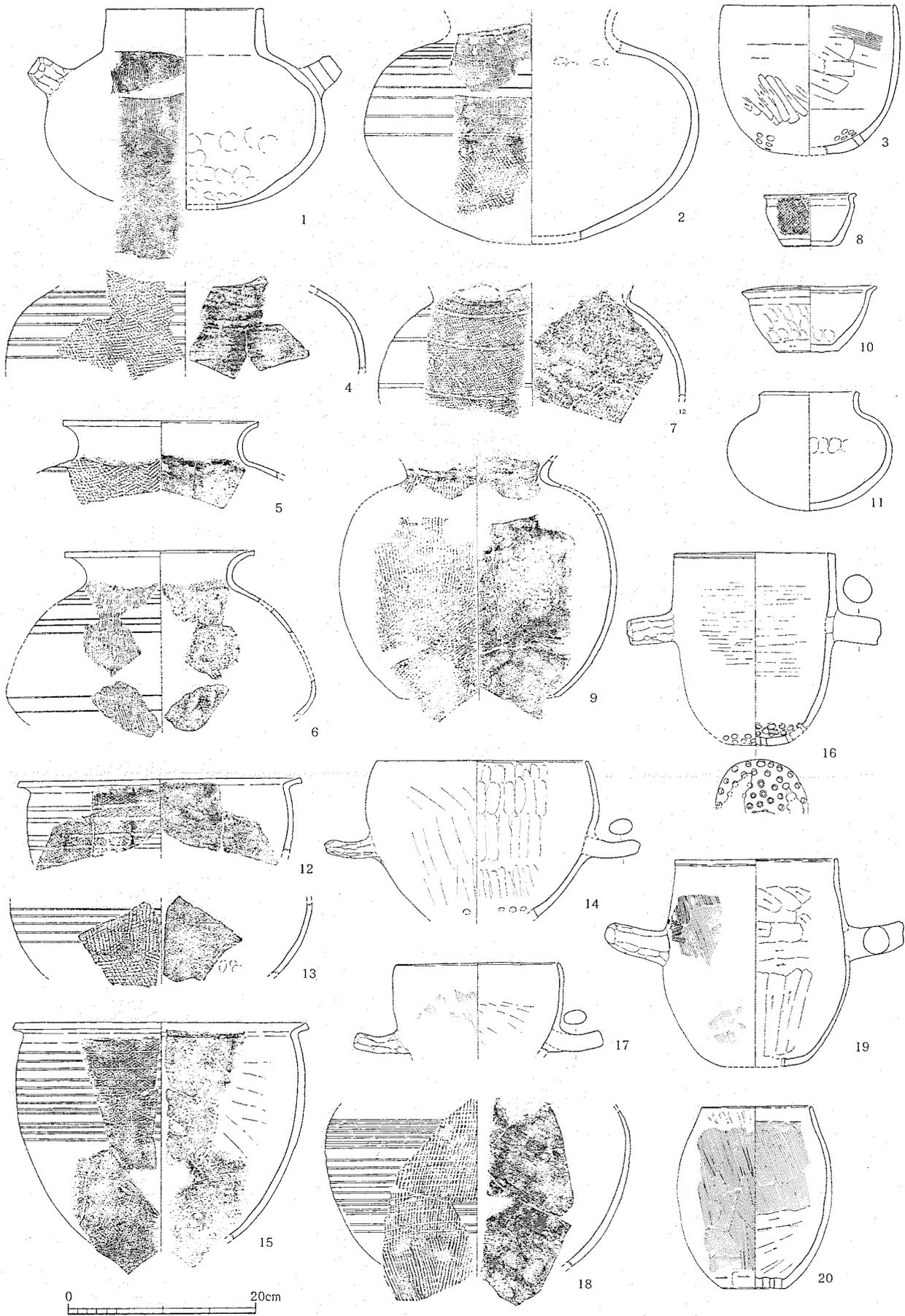
では異なることがわかった。しかも、複数の胎土があることもわかった。果たして、朝鮮半島からの搬入品なのか疑わしい。今後の研究の発展を待って結論を出した方が無難である。

今回は西新町遺跡を中心に軟質土器の胎土を比較したが、他の地域の遺跡でもこのような検討は必要であろう。加えて、一つの地域内の土器胎土については元素分析のみならず、鉍物分析の検討も必要であろう。今回のデータ解読の結果は鉍物分析の結果とどのように対応するかも興味深いところである。もし、結果が一致するとすれば、両方法の併用は今後、軟質土器の胎土研究の一つの方法となろう。このように、軟質土器の胎土の分類ができていない状態なので、つまり、母集団の設定ができていないので、判別分析にかけるまでには至らなかった。クラスター分析で分類するという方法もあるが、土器の生産地は多数あって、しかも、その分布の様相は複雑であることが予想されるので、単純にクラスター分析にかけて分類するよりも、両分布図で種々の形式の土器胎土を比較して考察を進めていったほうが将来の研究の発展には、より有効であろうと筆者は考えている。

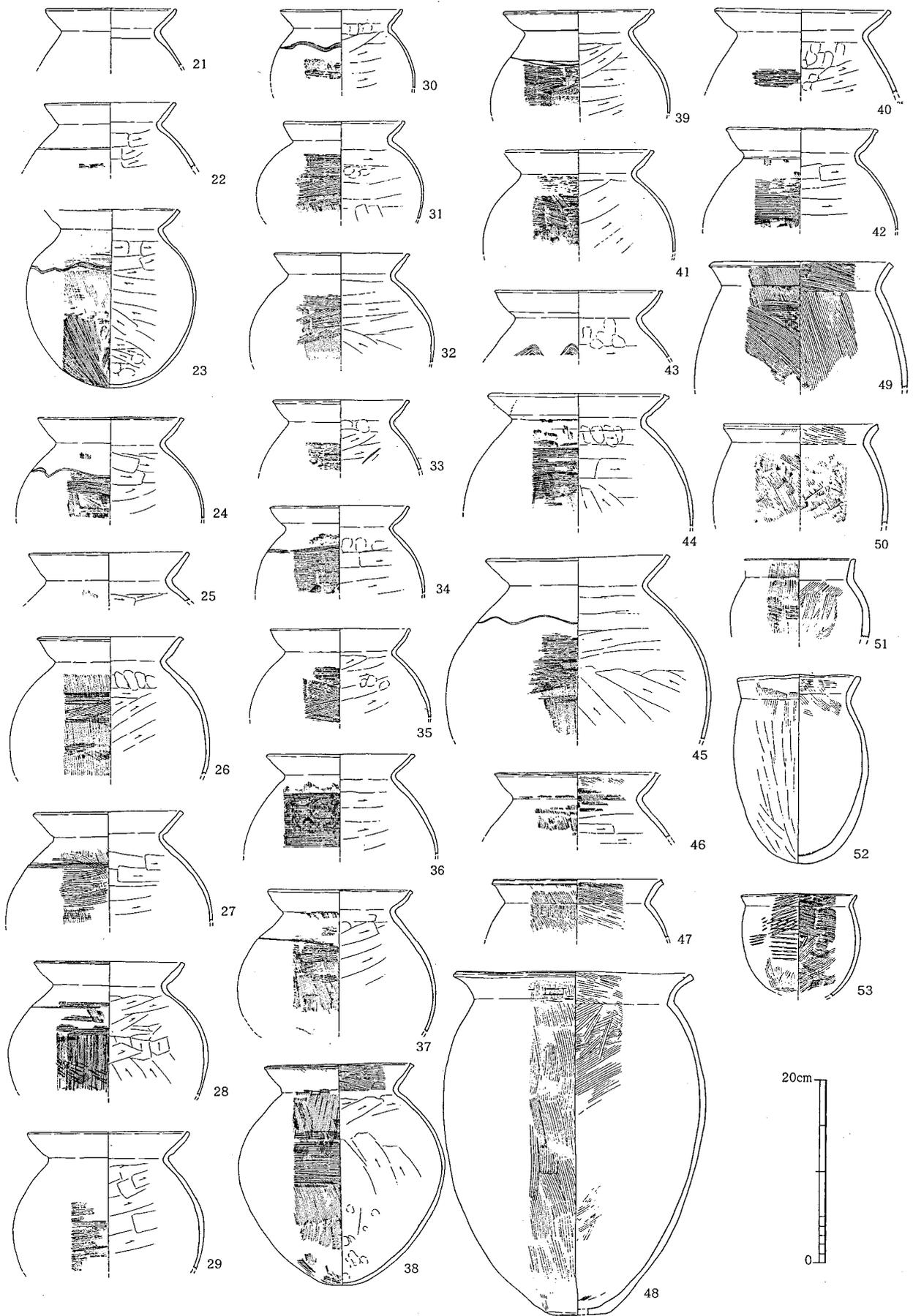
第2表 西新町遺跡第13次調査出土土器の分析データ

番号	種類	出土位置	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	掲載番号	備考
1	半島系壺	I区東4包含層	0.524	0.107	1.730	0.722	0.625	0.155	V 第30図107	陶質
2	半島系壺	I区東4包含層	0.448	0.242	1.730	0.479	0.583	0.247	V 第30図109	瓦質
3	半島系甌	1号竪穴住居跡	0.381	0.553	1.570	0.458	0.892	0.207	IV 第10図8	軟質
4	半島系壺	2号竪穴住居跡	0.420	0.189	2.420	0.627	0.646	0.222	IV 第13図45	陶質
5	半島系壺	4号竪穴住居跡	0.426	0.192	2.430	0.628	0.686	0.212	IV 第17図28	陶質
6	半島系壺	10号竪穴住居跡	0.666	0.166	2.420	0.689	0.549	0.176	IV 第28図25	陶質
7	半島系壺	20号竪穴住居跡	0.372	0.052	0.763	0.388	0.369	0.070	IV 第50図12	軟質
8	半島系鉢	23号竪穴住居跡	0.658	0.491	3.430	0.806	0.489	0.169	IV 第59図12	軟質
9	半島系壺	26号竪穴住居跡	0.408	0.300	1.410	0.542	0.643	0.104	IV 第67図14	瓦質
10	半島系鉢	27号竪穴住居跡	0.455	0.224	2.080	0.478	0.417	0.201	IV 第72図51	陶質～瓦質
11	半島系壺	27号竪穴住居跡	0.483	0.088	3.290	0.567	0.298	0.099	IV 第72図53	陶質
12	半島系鉢	27号竪穴住居跡	0.352	0.205	0.739	0.378	0.442	0.077	IV 第72図57	軟質
13	半島系壺	37号竪穴住居跡	0.391	0.295	2.210	0.472	0.434	0.164	IV 第87図12	軟質
14	半島系甌	40号竪穴住居跡	0.431	0.261	1.270	0.615	0.563	0.159	IV 第92図6	軟質
15	半島系鉢	40号竪穴住居跡	0.375	0.140	0.754	0.451	0.394	0.056	IV 第92図9	軟質
16	半島系甌	42号竪穴住居跡	0.365	0.381	1.460	0.599	0.719	0.208	IV 第96図7	軟質
17	半島系甌	48号竪穴住居跡	0.412	0.286	1.540	0.641	0.654	0.219	IV 第110図48	軟質
18	半島系壺	48号竪穴住居跡	0.457	0.165	3.890	0.567	0.351	0.084	IV 第110図51	陶質
19	半島系甌	78号竪穴住居跡	0.424	0.304	1.390	0.591	0.689	0.222	IV 第178図80	軟質
20	半島系甌	78号竪穴住居跡	0.366	0.454	1.840	0.562	0.531	0.148	IV 第178図81	軟質
21	布留系甕	27号竪穴住居跡	0.370	0.459	2.980	0.351	0.660	0.231	IV 第70図21	
22	布留系甕	27号竪穴住居跡	0.419	0.134	1.530	0.571	0.504	0.201	IV 第70図22	
23	布留系甕	27号竪穴住居跡	0.407	0.111	1.570	0.525	0.621	0.188	IV 第70図23	
24	布留系甕	27号竪穴住居跡	0.374	0.168	1.790	0.528	0.744	0.200	IV 第70図24	
25	布留系甕	27号竪穴住居跡	0.447	0.136	1.760	0.520	0.511	0.194	IV 第70図25	
26	布留系甕	27号竪穴住居跡	0.377	0.539	1.860	0.459	0.713	0.169	IV 第70図26	
27	布留系甕	27号竪穴住居跡	0.381	0.405	2.030	0.522	0.467	0.152	IV 第70図27	
28	布留系甕	27号竪穴住居跡	0.433	0.416	1.650	0.539	0.621	0.199	IV 第70図28	
29	布留系甕	27号竪穴住居跡	0.385	0.367	1.760	0.462	0.645	0.188	IV 第70図29	
30	布留系甕	78号竪穴住居跡	0.374	0.302	1.730	0.505	0.826	0.207	IV 第174図15	
31	布留系甕	78号竪穴住居跡	0.444	0.313	1.390	0.570	0.884	0.252	IV 第175図16	
32	布留系甕	78号竪穴住居跡	0.385	0.351	1.840	0.567	0.677	0.191	IV 第175図17	
33	布留系甕	78号竪穴住居跡	0.422	0.142	2.010	0.506	0.574	0.166	IV 第175図18	
34	布留系甕	78号竪穴住居跡	0.298	0.158	1.220	0.447	0.458	0.085	IV 第175図19	
35	布留系甕	78号竪穴住居跡	0.488	0.164	1.960	0.541	0.489	0.133	IV 第175図20	

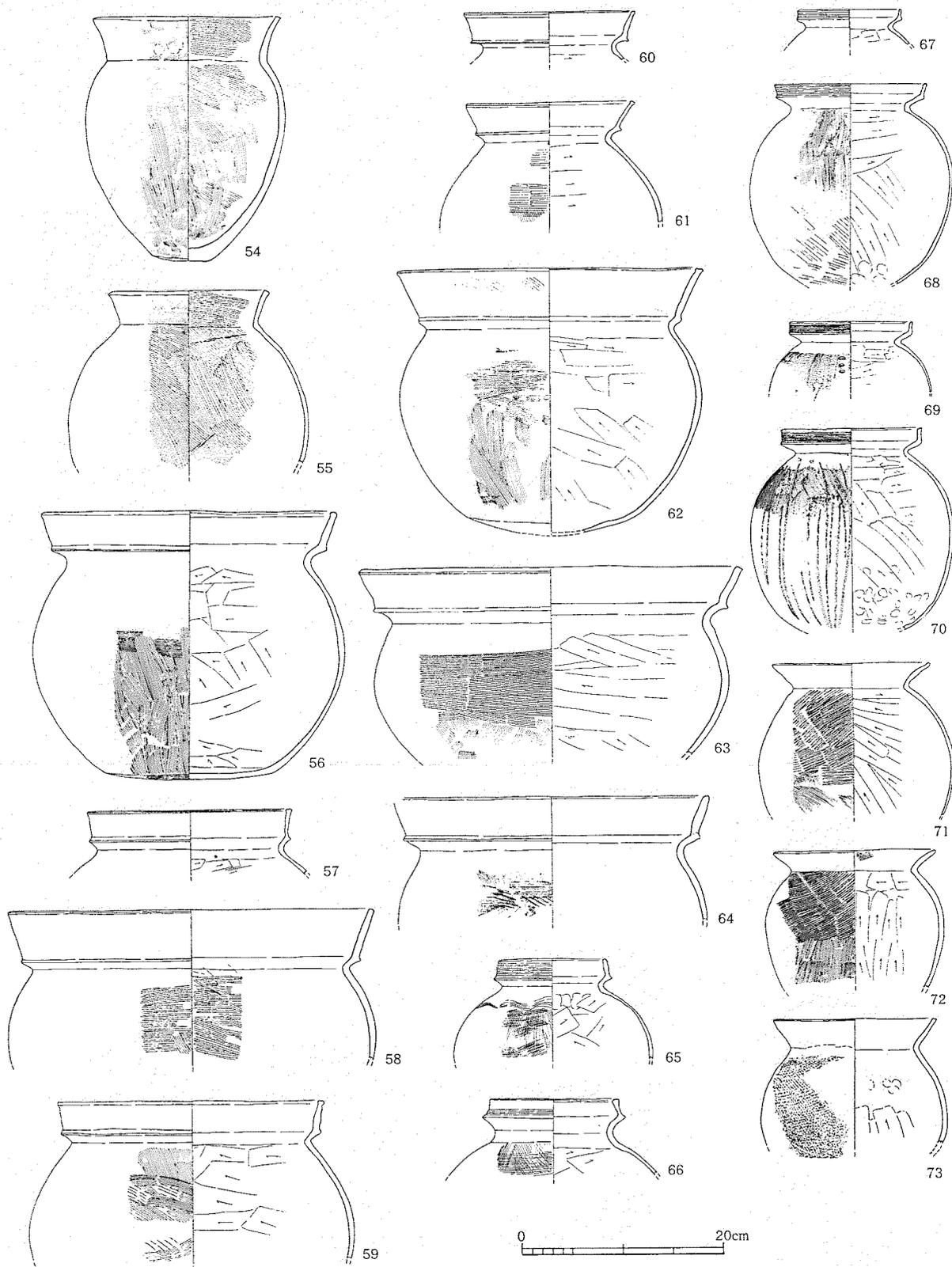
36	布留系甕	78号竖穴住居跡	0.354	0.332	1.390	0.562	0.599	0.181	IV	第175図21	
37	布留系甕	78号竖穴住居跡	0.414	0.272	1.660	0.551	0.638	0.201	IV	第175図22	
38	布留系甕	78号竖穴住居跡	0.342	0.128	1.040	0.461	0.510	0.070	IV	第175図23	
39	布留系甕	78号竖穴住居跡	0.369	0.271	1.250	0.566	0.675	0.154	IV	第175図24	
40	布留系甕	78号竖穴住居跡	0.401	0.291	1.530	0.546	0.711	0.221	IV	第175図25	
41	布留系甕	78号竖穴住居跡	0.408	0.182	1.980	0.576	0.531	0.179	IV	第176図26	
42	布留系甕	78号竖穴住居跡	0.390	0.311	1.230	0.598	0.759	0.225	IV	第176図27	
43	布留系甕	78号竖穴住居跡	0.496	0.231	1.270	0.626	0.692	0.175	IV	第176図28	
44	布留系甕	78号竖穴住居跡	0.402	0.520	1.340	0.619	0.799	0.235	IV	第176図29	
45	布留系甕	78号竖穴住居跡	0.377	0.164	1.630	0.560	0.574	0.168	IV	第176図30	
46	布留系甕	78号竖穴住居跡	0.369	0.216	1.000	0.494	0.287	0.050	IV	第176図31	
47	在地系甕	4号竖穴住居跡	0.388	0.215	2.220	0.453	0.622	0.199	IV	第16図8	
48	在地系甕	4号竖穴住居跡	0.570	0.149	1.050	0.605	0.745	0.194	IV	第16図9	
49	在地系甕	18号竖穴住居跡	0.447	0.377	2.280	0.458	0.774	0.244	IV	第44図22	
50	在地系甕	25号竖穴住居跡	0.434	0.385	1.440	0.486	1.280	0.318	IV	第64図14	
51	在地系甕	26号竖穴住居跡	0.589	0.435	2.920	0.561	0.578	0.189	IV	第67図2	
52	在地系甕	57号竖穴住居跡	0.491	0.072	1.000	0.614	0.430	0.125	IV	第124図7	
53	在地系甕	57号竖穴住居跡	0.598	0.102	1.970	0.584	0.455	0.150	IV	第124図8	
54	在地系甕	64号竖穴住居跡	0.460	0.273	1.820	0.581	0.717	0.254	IV	第137図20	
55	在地系甕	78号竖穴住居跡	0.418	0.233	1.130	0.576	0.411	0.060	IV	第174図13	
56	山陰系鉢	18号竖穴住居跡	0.463	0.146	1.100	0.563	0.752	0.195	IV	第45図33	
57	山陰系鉢	20号竖穴住居跡	0.398	0.405	4.010	0.395	0.761	0.295	IV	第49図9	
58	山陰系鉢	23号竖穴住居跡	0.438	0.439	1.810	0.515	0.491	0.179	IV	第59図7	
59	山陰系鉢	25号竖穴住居跡	0.373	0.188	1.680	0.608	0.531	0.151	IV	第64図30	
60	山陰系甕	29号竖穴住居跡	0.563	0.118	1.570	0.754	0.423	0.236	IV	第76図27	
61	山陰系甕	44号竖穴住居跡	0.354	0.538	1.480	0.607	0.677	0.209	IV	第102図13	
62	山陰系鉢	50号竖穴住居跡	0.420	0.283	1.560	0.655	0.603	0.185	IV	第115図21	
63	山陰系鉢	73号竖穴住居跡	0.416	0.358	0.978	0.599	0.916	0.213	IV	第159図20	
64	山陰系鉢	75号竖穴住居跡	0.427	0.316	1.290	0.616	0.539	0.122	IV	第165図17	
65	吉備系壺	25号竖穴住居跡	0.366	0.388	3.150	0.468	0.610	0.197	IV	第63図8	
66	吉備系壺	25号竖穴住居跡	0.387	0.226	1.420	0.566	0.708	0.265	IV	第63図9	
67	吉備系甕	25号竖穴住居跡	0.276	0.546	2.770	0.383	0.818	0.218	IV	第64図13	
68	吉備系甕	27号竖穴住居跡	0.417	0.448	2.560	0.977	0.535	0.173	IV	第71図33	
69	吉備系甕	75号竖穴住居跡	0.382	0.392	2.150	0.622	0.456	0.195	IV	第164図10	
70	吉備系甕	75号竖穴住居跡	0.368	0.168	2.140	0.528	0.420	0.200	IV	第164図11	
71	庄内系甕	4号竖穴住居跡	0.368	0.180	1.680	0.404	0.697	0.133	IV	第16図10	
72	庄内系甕	68号竖穴住居跡	0.447	0.199	2.040	0.582	0.440	0.137	IV	第147図3	
73	布留系甕	I区東5包含層	0.335	0.151	1.860	0.473	0.543	0.173	V	第27図66	斜格子タタキ 軟質



第109図 西新町遺跡第13次調査出土 胎土分析対象土器① (1/6)



第110図 西新町遺跡第13次調査出土 胎土分析対象土器② (1/6)



第111図 西新町遺跡第13次調査出土 胎土分析対象土器③ (1/6)

第5章 西新町遺跡第13次調査のまとめ

第1節 古墳時代の遺構と遺物

1. 集落について

過去12回にわたる西新町遺跡の発掘調査の結果、検出された弥生時代終末期から古墳時代前期の竪穴住居跡は250棟を超える。これに今回の第13次調査区で検出された古墳時代前期の竪穴住居跡86棟を加えると、総数約350棟を数えるに至る。これまで西新町遺跡は玄界灘沿岸の古墳時代集落の中でも最大級の規模を誇る集落として知られていたが、遺跡の範囲もさることながら、検出された竪穴住居跡の数の上でも最も多い遺跡の一つとして挙げられる。

この竪穴住居跡の帰属時期と位置関係などから、これまで西新町遺跡の集落については幾つかの考察が行われ（田崎1983、溝口1989、武末1996、重藤2001）、既に明らかにされている点も少なくないが、ここではこれらの成果をもとに、第13次調査によって得られた新たな知見を加えて、西新町遺跡における弥生時代終末期から古墳時代前期の集落変遷を検討したいと思う。

竪穴住居跡の時期を比定する際その大きな根拠となるのは住居跡から出土した土器であるが、北部九州の弥生時代終末から古墳時代前期の土器については既に幾つかの優れた研究が行われており、また中には西新町遺跡の出土品を取り扱ったものもある。今回集落変遷を検証するにあたっては、隣接する第12次調査の成果をもとに西新町遺跡の土器編年を行った、重藤輝行の土器編年観（福岡県教育委員会『西新町遺跡Ⅲ』2001 p208-p211）を基本とし、他の研究成果も援用しつつ竪穴住居の時期比定を行った（第3表、第112図）。

まず最初に13次調査区での様相を見てみると、竪穴住居跡はほぼ調査区全面に広がるものの、東端や南端は若干密度が薄くなる傾向が窺える。これに対して第12次調査区で最も高密度に分布していた区域と隣接する、調査区の中央から西側にかけてはやはり高密度で住居跡が広がっている。北西側はもともとかなりの密度で住居跡が広がっていたと思われるが、攪乱によってほとんど破壊されているため残念ながら旧状を把握できない。

時期別に見てみると、本調査区においては3式前半以前に遡る住居跡は見当たらない。3式後半の住居跡はほぼ全域に及んでいる。4式前半の住居跡も広い範囲に及んでいるが、3式後半と比べるとやや西側に偏って分布する傾向が窺え、東端までには広がらないようである。4式後半も前半同様全体的に西側に偏る傾向にあるようである。

次に、これまでの発掘調査の成果を含め、西新町遺跡全体の変遷を見てみたい。

1～3式前半の竪穴住居跡は、第2次調査区の西側、第5～10次、第12次の南西側で検出されている。既に明らかにされているように、この段階の竪穴住居跡は西新町遺跡の中でも主に西側に分布する。第12次調査区では南西側に集中しており、これに対して12次調査区の東側から13次調査区にかけてはこの時期の住居跡が全く検出されていない所を見ると、1～3式前半の集落は12次調査区南西を境にして南西に広く展開すると考えてよいだろう。また第5次調査区でもこの時期の住居跡が見つかったが、他の同時期の住居群とは大きくかけ離れた位置にあり、立地状況から見て南西側とは異なる群を想定した方が良いように思われる。

3式後半段階の竪穴住居跡は第2次調査区東側の一部、第3～5次調査区、第12・13次調査区で検出されている。これまでと住居群の分布域が異なり、大きく北東へと移動していることが判る。特

に第12次調査区の南西側で数多く重複しており、このあたりが中心域となるようである。これに対し、第2次調査区の住居群は疎らにしか存在しておらず、この付近に分布域の境界が想定される。また第12次調査区の北東側も密度が薄くなっており、これより北側にはほとんど広がらない事が予測される。

続く4式前半の竪穴住居跡は第2次調査区の東端、第3～5・12・13次調査区で検出されている。特に第12・13次調査区に住居跡が集中する傾向が窺え、また住居跡の重複も著しいものとなる。中でも特に第12次調査区東側から第13次調査区西側の一带に高密度で分布している。先に少しふれたが、第13次調査区の東端にはこの時期の住居跡が広がっておらず、第4・5次調査区の住居群とは別の群構成を想定した方が良いように思われる。

4式後半の竪穴住居跡は第2次調査区には無く、第3～5次、第12・13次調査区で検出されている。この時期の集落中心域も4式前半同様、第12次調査区東側から第13次調査区の西側に当たる区域が想定され、やはり顕著な重複が認められる。これに続く時期の住居跡は見つかっておらず、集落は廃絶を迎えている。

これらの事をまとめると、西新町遺跡の弥生時代終末期から古墳時代前期の集落は、従前より検証が行われていたとおり、古い段階の集落は主に南西側（西側）に分布し、新しい段階の集落は北東側（東側）に分布している。この立地面での画期は3式前半と後半の間にあり、3式後半以降は住居跡の密集度もそれまでとは異なって非常に高く、この事は第12・13次調査区において顕著である。一方、第4・5次調査区には1・2式段階から4式後半段階まで継続して竪穴住居が営まれており、南西側の住居群とは異なる変遷を辿る別の群となることが予想され、また4式前半・後半の段階においても第4次調査区と第13次調査区との間に立地上の空闲地が認められる。したがってこの境界から西側の住居群と東側の住居群というように、異なる住居群の構成が想定される。

つまり、西新町遺跡における弥生時代終末期から古墳時代前期の集落は、南西側には1・2式から3式前半まで継続する住居群、第3・12・13次調査区には3式後半から4式後半まで継続する住居群、そして第4・5次調査区には1・2式から4式後半まで継続する住居群、というように立地や継続時期の違いから3つの異なる群構成が想定されるのである。

2. カマドについて

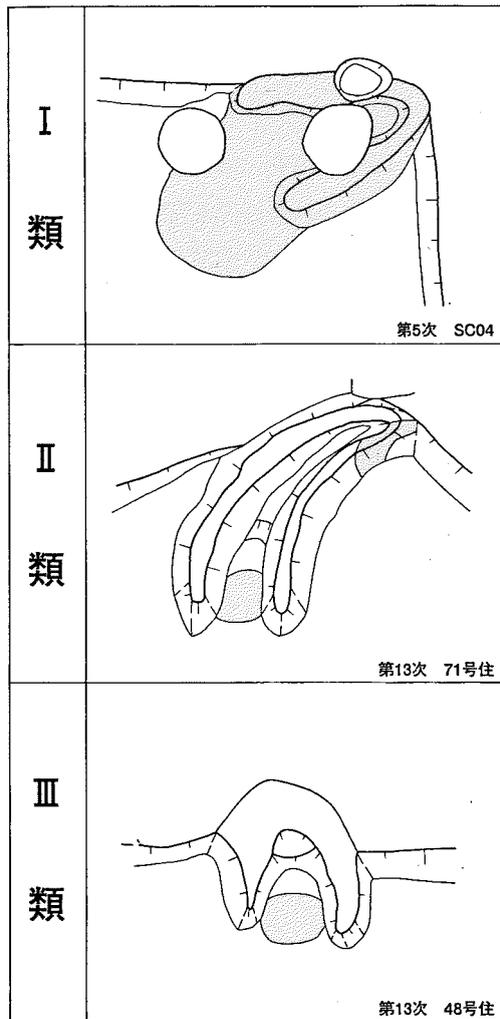
過去西新町遺跡第2次調査において、古墳時代前期に属する2棟のカマド付設竪穴住居跡が検出されて以来、西新町遺跡は他にさきがけて非常に古い段階にカマドを設置する遺跡の一つとして耳目を集めてきた。当初はこれを疑問視する向きもあったが、第4次、第5次調査を経てその存在と重要性は確実なものとなった。またカマド発生の系譜については、自国で発生したとする見解と、半島から伝来したとする見解とがあったが、西新町遺跡においては半島系の土器が共伴するという事実も含め、先学の研究により半島から伝来したとする見解が定着を見ることとなった（西谷1985、武末1996など）。

第12次・13次調査ではカマドを付設した竪穴住居跡が数多く検出された。これらは決して一様ではなく、その形態や設置される位置によって分類することが可能である。従ってここではカマドの類型化を試み、西新町遺跡のカマドについて現段階での整理を行っておきたいと思う。

カマドの類型化に際しては、住居跡内におけるカマドの位置と煙道の長さに注目し、大きく次の3



第112図 西新町遺跡東半部 堅穴住居跡変遷図 (1/1,000)



第113図 西新町遺跡のカマド分類

つの型式に分類した(第113図)。更なる細分も可能であるが、大まかな動向を検討したいと考えたので敢えて細分は行っていない。

I 類：カマド本体が住居のコーナー部に直接付設され、煙道は無い、もしくは非常に短いもの。カマドの主軸は住居の対角線に沿って斜め45度を向くもの、あるいは一方の袖が住居の壁に沿うもの等がある。我が国の5世紀以降のカマドに類似例がある。

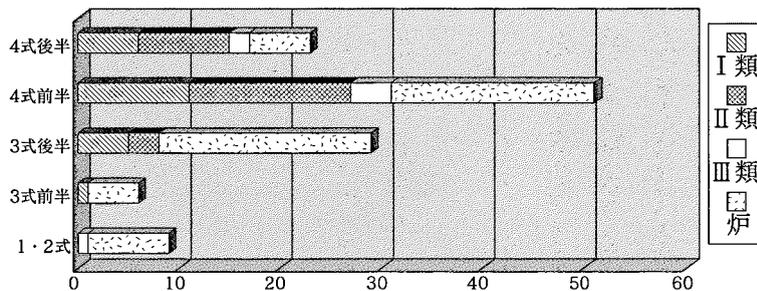
II 類：カマド燃焼部が住居跡の壁から離れた内側にあり、煙道が住居跡の隅に向かって長く伸びるもの。横煙道、祖形炕とも称されるタイプである。5世紀のカマド普及期以降我が国において散見され、朝鮮半島との関係が指摘されているものに類似するが、燃焼部の主軸が壁に直交せず、住居の対角線に沿って斜め45度を向くものが多いという点では異なっている。煙道は住居跡の壁に沿ってコーナー部に向かって伸びるものと、煙道が壁に沿わずに長く伸びて煙出しのみコーナー部に取り付くものがある。

III 類：壁のほぼ中央に付設されるもの。煙道は無い、もしくは非常に短い。我が国における普及期以降一般化するカマドに類似する。カマド本

体が壁から突出するものとそうでないものがある。

これらは一様に黄灰色の粘土を突き固めて構築され、補強用の石は一切使用せず、まれに土器片を壁体に混入させる例が見られる。支脚は扁平な石を使用するものも多く見られるが、土師器飯蛸壺を使用する例もある。また第12次調査区128号竪穴住居跡や第13次調査区10号竪穴住居跡では2個の石製支脚が検出されているが、焚口の狭さや支脚間の狭さを考慮すると二つ掛けの状況は想定し難く、一つ掛けに二つの支脚を使用したと考えた方が良いでしょう。

現在西新町遺跡で見つかっているカマド付住居跡の一覧表にカマドの類型を加え(第4表)、それ



第114図 西新町遺跡のカマド・炉の推移

をもとにカマド付設竪穴住居跡の分布状況と時期毎の推移を表したのが第114・116図である。第114図には比較のために、同時期で検出された炉の数も付け加えている。

まず類型毎の数を比較すると、検出されたカマドの数で

最も多いのはⅡ類であり、次いでⅠ類となる。これら二つのものに比べてⅢ類は非常に数が少ない。この事は我が国の普及期以降のカマドのあり方と比べると対称的であり興味深い。

次に時期別の推移を見てみると、1・2式段階には1例だけカマドを持つものがある。第5次調査で検出されたSC09のカマドで、カマドの類型ではⅢ類に属する。西新町遺跡の中でも特に古い時期に属するカマドとしてかねてからよく知られていたが、この状況はカマド検出例が増加した現段階でも変わっておらず、西新町遺跡におけるカマド導入の先駆的な特異例として位置付けられる。この段階、他の住居は炉を使用している。

3式前半にも1例だけⅠ類のカマドを設置するものが見られる。第2次調査F地区第1号竪穴住居跡のカマドである。この時期も依然として他の住居跡にはカマドを設置せず、炉を使用している。

3式後半段階になると、カマドを付設する類例が若干増加する。西新町遺跡におけるカマドの本格的普及期はこの段階と考えてよい。しかしながら未だ炉を設置する住居が過半数を占め、カマドを付設する住居は少数派である。この時期に見られるのはⅠ類が多く、次いでⅡ類であり、Ⅲ類は今の所見つかっていない。

4式前半段階では炉を設置する住居も多く見られるものの、カマドを設置する住居が過半数を占めるようになる。類型別ではⅡ類が最も多く、次いでⅠ類となる。Ⅲ類は非常に少ない。

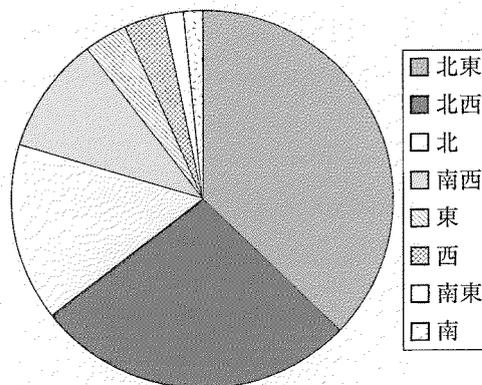
4式後半段階ではカマドを設置する住居が大多数を占めるものの、依然として炉を設置する住居も少なからず見られる。この事はこの段階以降の我が国の生活体系に長らくカマドが設置されなかったという事実を考える上で示唆的である。類型別ではⅡ類が多く、次いでⅠ類となる。Ⅲ類はやはり少ない。

以上の事をまとめると、1・2式段階、3式前半段階にそれぞれ1例ずつカマドを付設する例が見られるものの例外的な存在であり、カマドの本格的導入は3式後半段階からである。以降時期が下るに従いカマドが炉を席卷していくが、最も新しい段階の4式後半でも引き続いて炉が使われており、炊飯形態が炉からカマドへと完全に移行したという訳ではない。

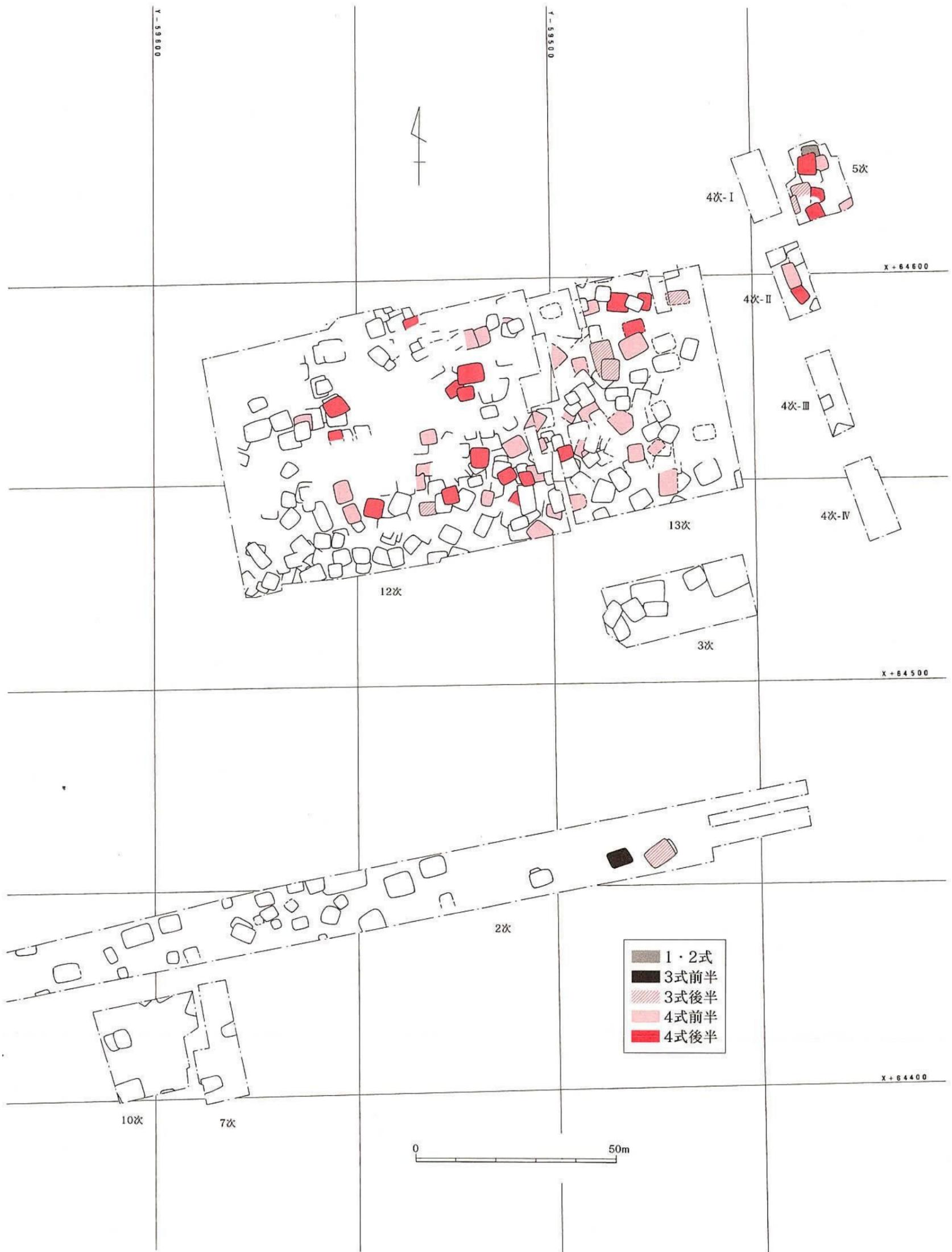
類型別に見ると、1・2式段階ではⅢ類が1例、3式前半段階ではⅠ類が1例、3式後半段階ではⅠ・Ⅱ類がありⅢ類は無い。4式前半・後半はⅠ類・Ⅱ類が多く見られるのに比べ、Ⅲ類は少ない。現段階ではそれぞれのカマド類型毎の時期的な増減は判断し難い状況であり、全時期を通して見た場合にⅠ・Ⅱ類が多くⅢ類が少ない、という傾向を指摘するに留めておきたい。

一方第115図は竪穴住居内におけるカマドの方位について表したものである。北東が最も多く、次いで北西、北となる。それ以外は非常に少ない。全体的傾向としてカマドは北側を意識して設けられることが多かったようである。なお類型別に特に方向が偏るといった傾向は見られない。また第117図は集落内におけるカマド類型別の分布図だが、特に類型別にまとまるような傾向は窺えないようである。

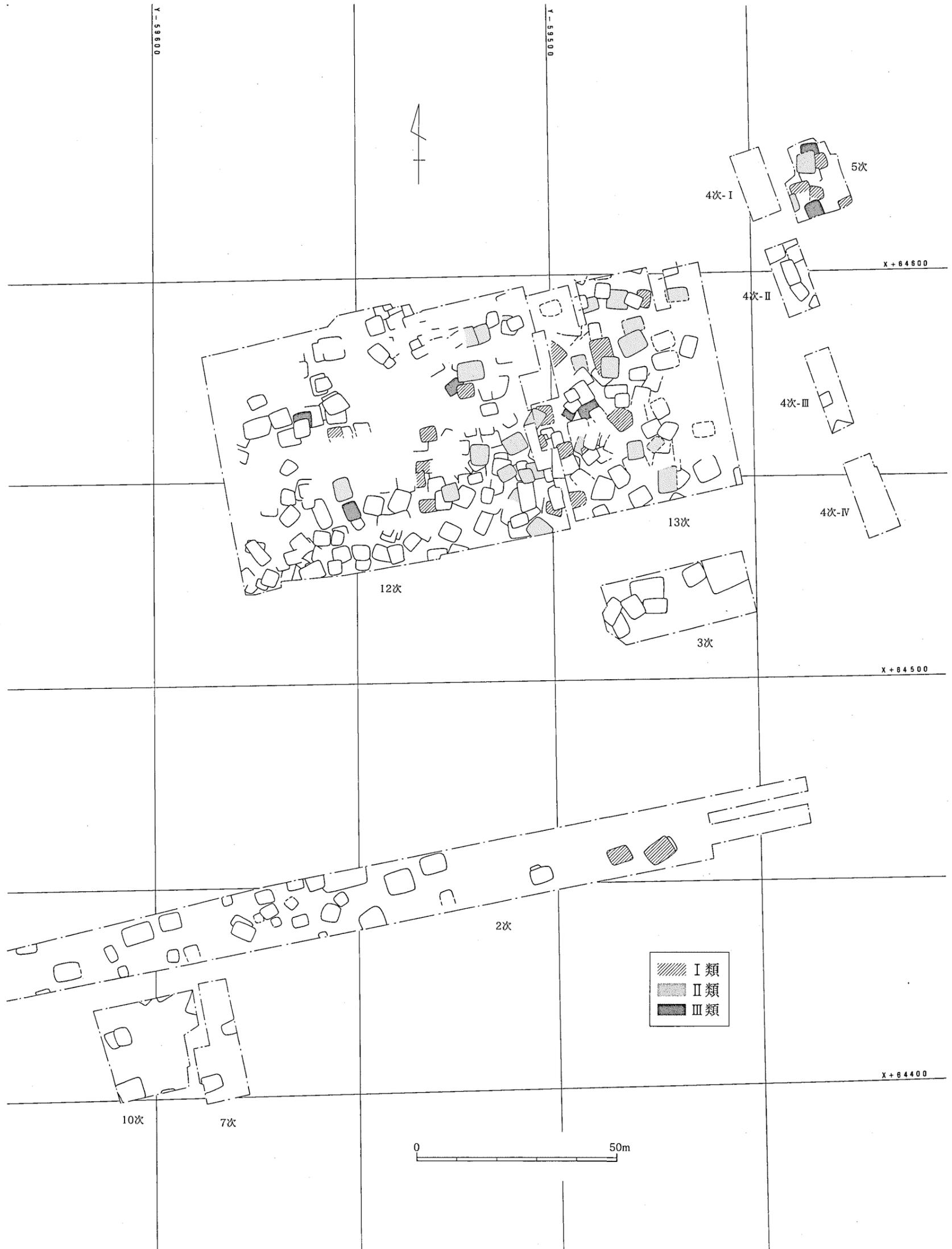
さて、これらのカマドの故地である朝鮮半島の情勢は非常に興味深いところであるが、目下の所朝鮮



第115図 カマドの方位



第116図 西新町遺跡のカマド付堅穴住居跡変遷図 (1/1,000)



第117図 カマド類型別分布図 (1/1,000)

半島での検出事例が少なく比較検討が困難な状況にある。少ないながらも類例を幾つか挙げてみると、慶尚南道居昌郡大也里遺跡では原三国時代に属する楕円形住居跡からカマドが見つかっている。いずれも煙が長く伸びないタイプのものであり、西新町遺跡でのⅠ・Ⅲ類に近い。

全羅南道務安郡良将里遺跡や同じく全羅南道の昇州郡大谷里道弄遺跡では原三国～三国期の竪穴住居跡が多数発見されており、カマドを付設するものも多い。カマドの構造が不明なものも少なくないが、Ⅰ類、Ⅲ類は確実に存在するようである。やはり全羅南道の光州雙村洞遺跡の住居跡のカマドは長く壁沿いに伸びる煙道を持っており、Ⅱ類に近い。忠清南道舒州郡松内里遺跡や同道天安市斗井洞遺跡では、原三国時代の竪穴住居跡からカマドが検出されており、どちらの遺跡からもⅠ・Ⅱ類に類似したカマドが検出されている。なお、松内里遺跡にはⅢ類に類似するものがあるが、横方向に煙道が伸びてゆくようでありⅡ類になるのではないかと思われる。

こうして見ると、煙道が長く伸びるⅡ類のカマドは全羅道や忠清道に多く、慶尚道では煙道が長く伸びないⅠ・Ⅲ類が多いように思われるが、特に慶尚道での集落遺跡の調査例が少ないので、現段階での判断は控えるべきであろう。また同じ全羅南道でも良将里遺跡や大谷里道弄遺跡のようにⅠ・Ⅲ類が見られる遺跡と、雙村洞遺跡のようにⅡ類の見られる遺跡とがあり、やはりカマドの類型に地域的な特徴を見いだすのはかなり難しいようである。Ⅰ・Ⅱ類のカマドが主体をなす忠清南道松内里遺跡や斗井洞遺跡には西新町遺跡のカマドの在り方との共通性がうかがえるが、まだ類例が少ない現段階では地域性を検討するには無理がある。従って、西新町遺跡で見たように、一つの集落でも複数の類型のカマドを付設するような状況が半島の集落遺跡にも見られるということを経時点でのまとめとし、今後半島での集落遺跡調査例が増加し、時期的、地域的な傾向が明確になった時点で、より深い検討を行った方が良いように思われる。

3. 半島系土器について (第118～121図)

西新町遺跡から数多くの半島系土器が出土することはかねてからよく知られていたが、今回の調査区においても予想に違わず相当数の朝鮮半島系土器が出土した。ここではこれらの半島系土器について若干まとめておきたい。

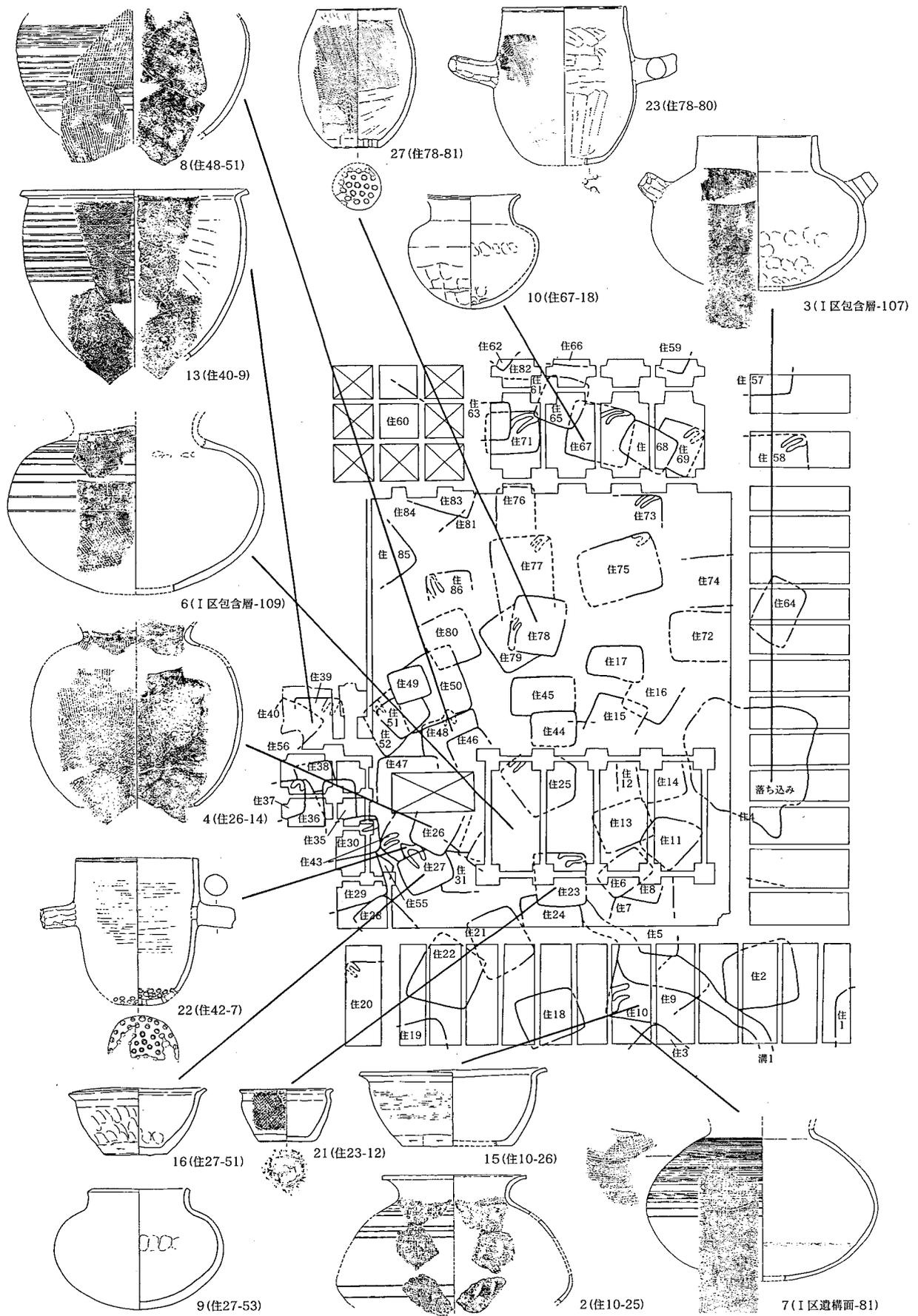
タタキ文短頸壺 (第119図1～8)

丸底で体部が球形または扁球形をしたタタキ文短頸壺は、今回の調査区の中では最も数多く出土したものである。

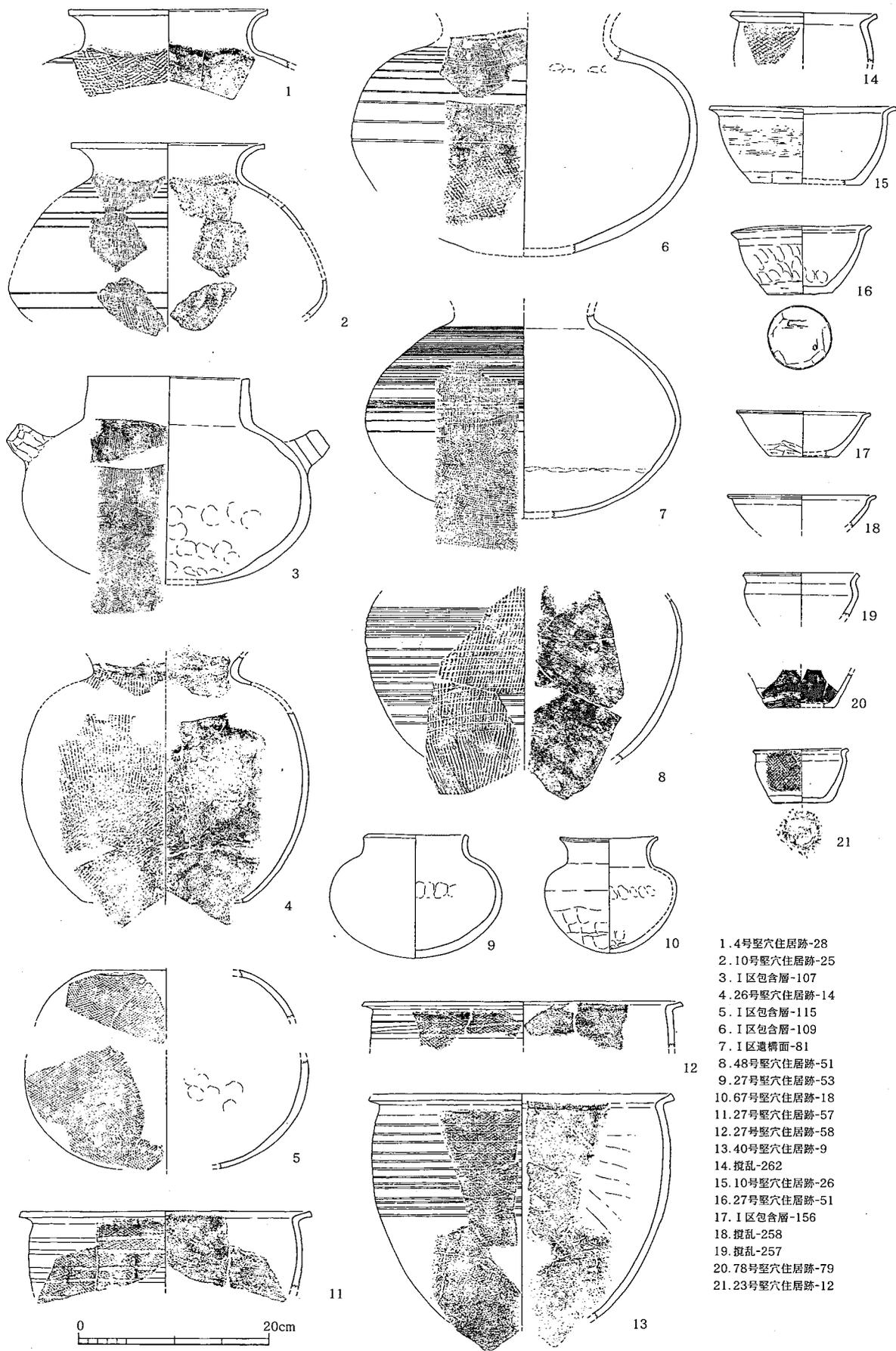
口縁部は4号竪穴住居跡28 (1) や10号竪穴住居跡25 (2) のように丸く外反するものと、Ⅰ区包含層107 (3) の両耳付短頸壺のように直立するものがある。端部調整は陶質焼成のものは例外無く非常にシャープな面を形成する。瓦質焼成のものは丸味を帯びたものが多い。

体部の調整は、タタキ文の後に螺旋状の沈線・凹線を巡らせるものが多いが、3や26号竪穴住居跡14 (4)、Ⅰ区包含層115 (5) のように沈線を巡らせないものも少なからず見られる。凹線を巡らせるものは軟質焼成で胎土に砂粒を含んだ粗製品に限られるようである。

タタキ目は縦平行タタキ、斜格子タタキが多く、正格子タタキは少ない傾向にある。縄蓆文タタキはほとんど見られない。Ⅱ区南2攪乱出土 (第56図254) の網代状タタキを持つものも珍しいが、第12次調査でも出土している (第375図347)。半島でも類型が非常に少ないが、全羅南道寶城郡金坪遺跡で出土例がある (第121図1)。

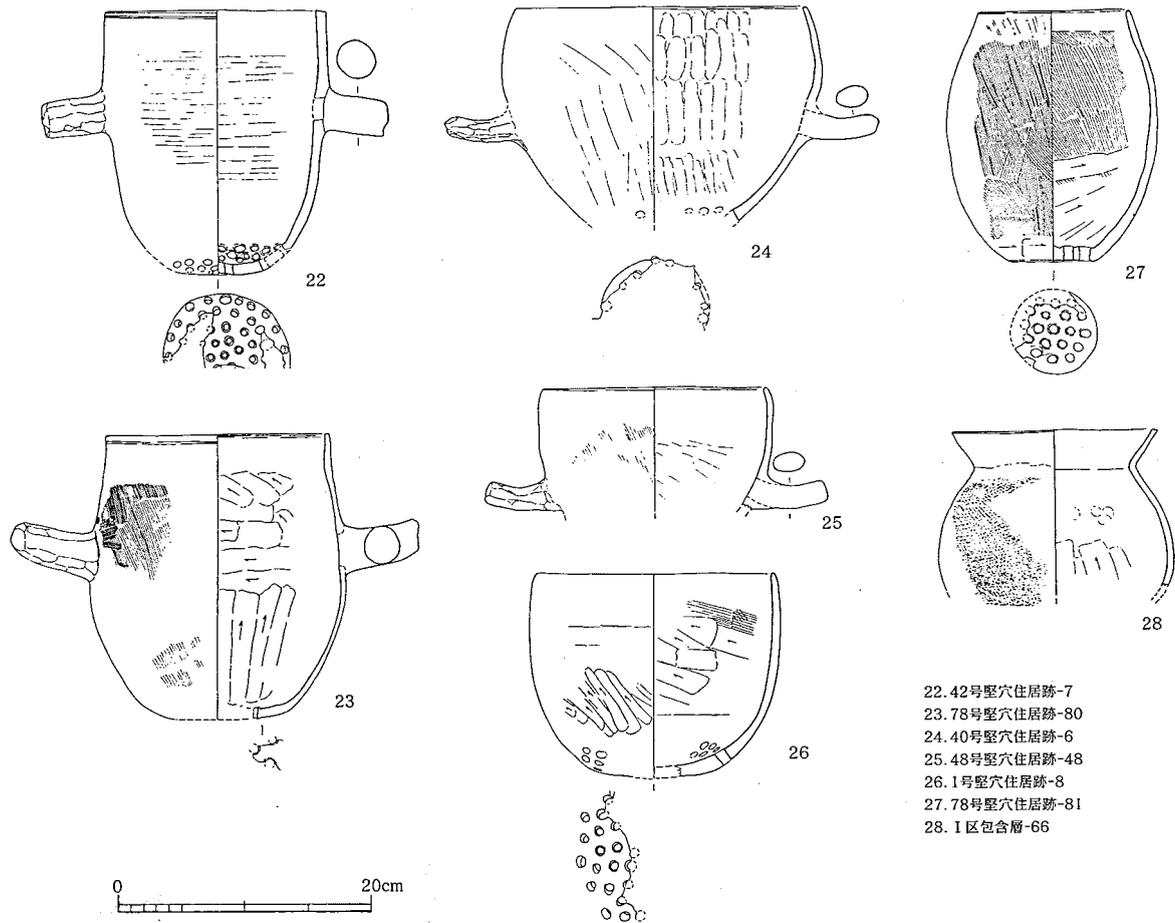


第118図 西新町遺跡第13次調査区出土半島系土器分布図



- 1. 4号壑穴住居跡-28
- 2. 10号壑穴住居跡-25
- 3. I区包含層-107
- 4. 26号壑穴住居跡-14
- 5. I区包含層-115
- 6. I区包含層-109
- 7. I区遺構面-81
- 8. 48号壑穴住居跡-51
- 9. 27号壑穴住居跡-53
- 10. 67号壑穴住居跡-18
- 11. 27号壑穴住居跡-57
- 12. 27号壑穴住居跡-58
- 13. 40号壑穴住居跡-9
- 14. 攪乱-262
- 15. 10号壑穴住居跡-26
- 16. 27号壑穴住居跡-51
- 17. I区包含層-156
- 18. 攪乱-258
- 19. 攪乱-257
- 20. 78号壑穴住居跡-79
- 21. 23号壑穴住居跡-12

第119図 西新町遺跡第13次調査区出土半島系土器① (1/6)



- 22. 42号竪穴住居跡-7
- 23. 78号竪穴住居跡-80
- 24. 40号竪穴住居跡-6
- 25. 48号竪穴住居跡-48
- 26. 1号竪穴住居跡-8
- 27. 78号竪穴住居跡-81
- 28. I区包含層-66

第120図 西新町遺跡第13次調査区出土半島系土器② (1/6)

体部全体の様相が判る例を見てみると、5のように体部が球形のもの、I区包含層109 (6) のように扁球形で最大径が中位より高い位置にあるもの、4や48号竪穴住居跡51 (8) のように張りが弱くやや長胴気味になるもの、2やI区遺構面81 (7) のように最大径が下方にあって弱い稜をもち、たまねぎ形をなすものなどがある。2・6・7などのように上半を縦平行タタキ、下半を斜格子または正格子タタキというようにタタキ分けを行っているものも少なからず見られる。

これらタタキ文短頸壺については(寺井2001)により朝鮮半島での傾向がまとめられており、これによると口縁部が直立気味のもの忠清道に多く、慶尚道・全羅道では外反気味のものが多くという。また底部に異なる原体を用いてタタキ分ける場合にはほぼ100%の割合で下半分が格子タタキで仕上げられ、この傾向は全羅道・忠清道に多く慶尚道に少ないという点も指摘されている。また(金鍾萬1999)によると、孔が縦方向に穿たれた耳をもつ両耳付短頸壺は全羅道・忠清道に多く分布するという。

これらの事からすれば、3の縦方向に孔のある両耳付短頸壺は全羅道・忠清道に系譜を求めることが出来、また上半と下半とをタタキ分けるものも全羅道、忠清道に由来する可能性が高い。更に上半と下半とをタタキ分け、口縁部が外反する2は全羅道を中心とした地域にその系譜が求められるようである。またたまねぎ形の体部をもつものは全羅道・忠清道を中心に分布し、どちらかと言えば2は全羅道、7は忠清道に多く見られるようである。なお、口縁部を欠失する6は二重口縁となる可能性もある。

両耳付短頸壺については全羅南道の大谷里遺跡などで器形が類似するものが出土しているが、大きさや調整が異なる。清州松節洞遺跡出土例は口縁部の形態が若干異なるが、大きさの点では類似する。一方、タタキ分けていない短頸壺については慶尚道地域に関連性が求められるであろう。

無文短頸壺 (第119図9・10)

無文の短頸壺は、27号竪穴住居跡53 (9) や67号竪穴住居跡18 (10) が全体の器形が判る好例である。

9は、肩の張った扁球形の体部をなし、頸部はあまり締まらず口縁部は短く直立する。口縁端部は外傾し、角がシャープな稜をなす。調整には轆轤使用の回転ナデを上半に行い、下半は静止ナデで仕上げる。胎土は砂粒を含まず極めて精良であり、焼成は陶質と軟質の間くらいで黄色味を帯びるが堅緻に焼き締まっている。慶尚南道馬山縣洞遺跡14号土墳墓から、肩が張り口縁部が短く直立する類似例が出土している (第121図2) が、頸部の長さや最大径の位置は異なる。全羅道付近にも類似した器形のものがあるようである。

10は肩の位置が高く肩の張った器形となる。頸部は直立し、口縁部は外反する。端部は横ナデによりシャープに仕上げられ、また浅く不明瞭な沈線を巡らせる。調整は上半に轆轤使用の回転ナデ、下半に静止ナデを行う。胎土は精良で陶質に焼成され、暗赤紫色で堅緻に焼き上がる。慶尚南道昌原三東洞遺跡5号石棺墓から、暗赤色ないし黒灰色を呈し器形が類似する例が出土しており (第121図3)、また比較的器形の近いものが慶尚南道で広く見られるようである。

鉢 (第119図11~21)

鉢には大型深鉢、小型深鉢、小型平底浅鉢がある。

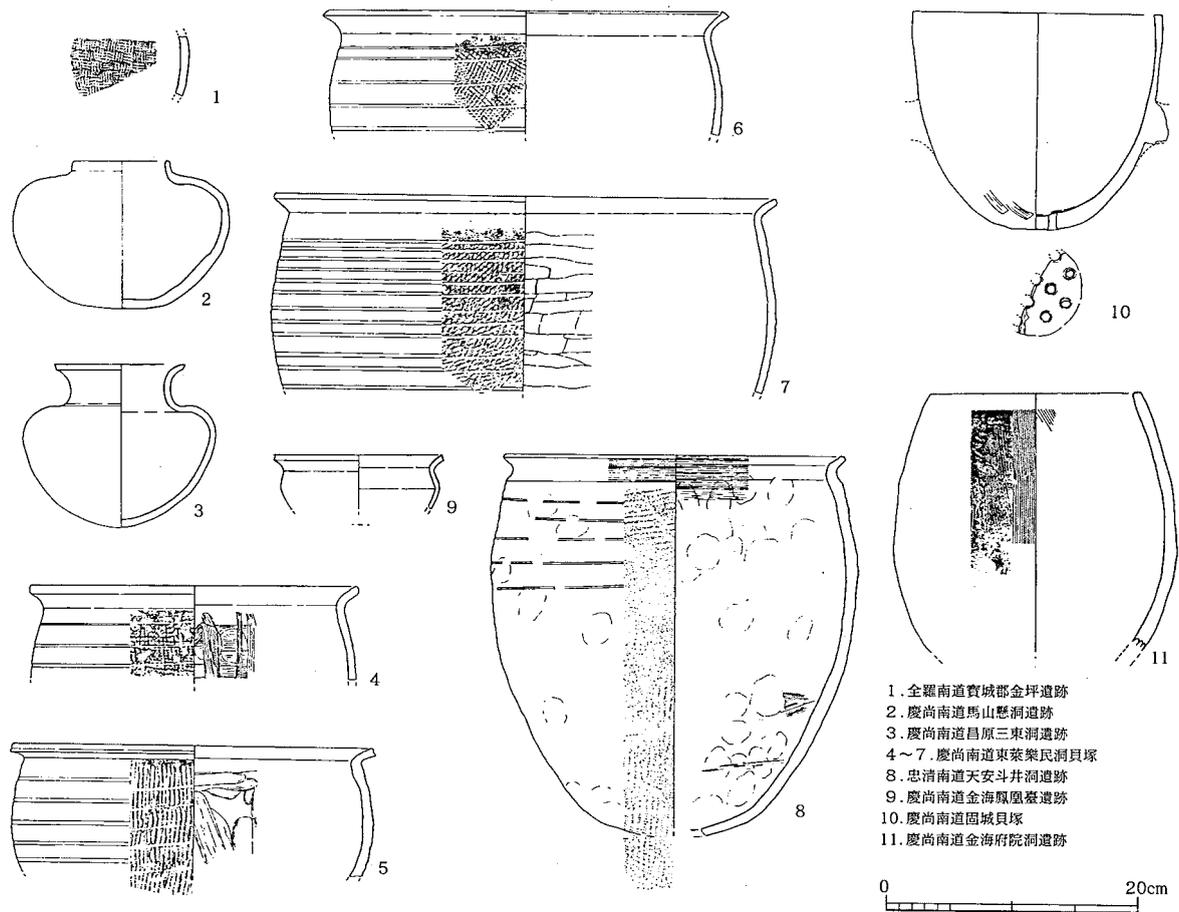
粗製の大型深鉢は27号竪穴住居跡57・58 (11・12)、40号竪穴住居跡9 (13) が器形が判断できる好例である。

底部の形態は不明だが、体部上半は直立またはわずかに内傾し、口縁部は短く外に折り曲げられる。端部の内側に強い横ナデを加えるために器壁がやや薄くなる。端部にも強い横ナデを加えており、シャープな面を形成する。体部内面はナデ仕上げ、外面は斜格子タタキの後、11・12は凹線、13は沈線を螺旋状に巡らせ、下半部の判る13では上半のみに施される。第12次調査68号竪穴住居跡出土例 (Ⅱ：第123図21) のように片口をもつ可能性もある。また他に第57図265・266のように上半が開き、浅い体部をなすと思われるものや、67号竪穴住居跡出土例 (Ⅳ：第145図19) のように口縁部が面を形成せず丸味を帯びる片口鉢もある。これらの深鉢に比較的近い形状のものは慶尚南道東萊樂民洞貝塚で数例出土しているが (第121図4~7)、一方で忠清南道天安斗井洞遺跡6号住居跡からも類似する器形のもの出土しており (第121図8)、今の所明確な地域的特徴は窺えない。

小型深鉢は全体の器形が把握出来る好例が無く、破片資料から推定せざるを得ない。本調査区出土品はいずれも軟質焼成で胎土に砂粒を多く含むものである。胴部上半は第56図263のように直立するもの、攪乱出土262 (14) のように内傾するもの、第56図259のように外傾するものがある。第56図259は浅鉢になるかもしれない。

口縁部は短く外側に折り曲げられる。口縁部は端部のやや内側に上下から強い横ナデを加えるため器壁が薄くなり、また端部が面を持ち上下端ともシャープな稜を形成するなど、大型の深鉢と同じ傾向にある。外面には斜格子タタキが行われ、沈線を巡らせるものも多い。

底部は第57図267のように平底で端部がシャープな稜を有し、胴部の下端に横方向のヘラケズリ



第121図 朝鮮半島の類似例 (1/6)

※図は各報告書より転載

を一周させるものが出土している。

また上げ底状の底部で下端にヘラケズリを行わない23号竪穴住居跡出土例 (IV:第59図11) や、ヘラケズリを一周させる53号竪穴住居跡出土例 (IV:第121図9)、底面にゲタ状の轆轤設置痕跡が残る第56図256は、浅鉢か深鉢か明確ではない。

小型平底浅鉢はこれまでの調査では出土していなかったが、今回の調査区では全体の器形が把握出来る好例が数点出土している。

10号竪穴住居跡26 (15) は平底の底部をなし、端部は稜をなす。体部の開きは弱く、上半は直立する。口縁部は短く外側に折り曲げられ、端部は明瞭な面をなす。調整は内外面とも轆轤使用の回転ナデが行われ、特に外面にはナデの条線が明瞭に残る。外面の下端部は横方向のヘラケズリが一周する。胎土は比較的精良、瓦質焼成で器表は黒灰色、断面は灰色を呈す。

27号竪穴住居跡51 (16) は底部に轆轤設置痕跡を残す。本来は方形状にあったと思われるが整形時にヘラで削り取ったらしく一部にしか確認できない。体部は丸味を帯びて開き、やはり口縁部は短く外折する。口縁部に上下から強い横ナデを加えるため上面がやや窪み、また外側にも横ナデを行い明瞭な面を形成する。内面は轆轤使用の回転ナデにより平滑になるが、外面は口縁部下までしか及んでおらず、これより下は弱い静止ナデしか行っていないため整形時の指圧痕が残る。下端はヘラケズリを一周させる。胎土は精良で焼成は陶質だが硬質ではなく、瓦質に近い。

I区包含層156 (17) は端部の稜はシャープである。体部の湾曲は弱く、大きく開いている。口縁部は短く外折し、端部には一条の沈線を加え上下端ともシャープな稜をなす。内外面とも轆轤使

用の回転ナデ調整で、外下端部のみ横ヘラケズリが行われる。胎土は比較的精良で焼成は瓦質焼成である。類似する器形のものに攪乱から出土した258 (18) があるが、これは口縁部がやや丸味を帯び、焼成は瓦質に近い陶質である。

攪乱出土の257 (19) は体部上方が内傾し、肩部が稜をなすものである。口縁部はやはり短く外折し、端部に沈線を巡らせる。内外面とも回転ナデ調整、胎土は精良で焼成は瓦質に近い陶質焼成である。類似するものにI区包含層出土の第33図160があるが、これは口縁部が非常に短い。瓦質焼成である。金海鳳凰台遺跡2トレンチ出土品に類似例があるが、これは小型の瓦質焼成壺形土器として報告されている (第121図9)。

78号竪穴住居跡79 (20) は陶質に焼成され非常に堅緻に焼き上がる。底部は平底で端部がシャープな稜をなし、体部の調整は内外面とも回転ナデ、外下端部には横方向のヘラケズリが巡る。体部が湾曲せず直線的に伸びている。

これらはいずれも陶質或いは瓦質焼成で轆轤による回転ナデを行う精製品だが、軟質焼成でタタキ調整のものも出土している。23号竪穴住居跡12 (21) は平底で端部が稜をなすものの、上記のものと比較するとシャープさに欠ける。体部はあまり湾曲せずに関き、口縁部下はわずかに内傾している。口縁部は短く外折し端部は丸味を帯びる。内面は轆轤を使用しない横ナデ、外面は斜格子タタキを施し、外下端には横ヘラケズリを一周させる。胎土には砂粒を多く含む粗製品である。

これらの浅鉢は焼成や調整において差があるものの、いずれも外反口縁という点で共通しており、直立口縁の浅鉢が多く認められる京畿道との関連は薄い。外反口縁の浅鉢は忠清道・全羅道・慶尚道で出土しており、(寺井2002) によれば特に4世紀代のものに関しては、全羅南道地域に最も多く出土しているという。また近年の調査によって忠清道でも類例が増加しているようであり、今回の調査区で出土したこれらの浅鉢の故地についても、全羅南道を中心にした忠清道、全羅道地域に求めておきたい。

甑 (第120図22~27)

西新町遺跡から出土する甑については、第2次調査区F区2号竪穴住居跡出土の甑は在来系の甑と器形・調整が類似する点から北部九州で生産された可能性が指摘され (武末1996)、その一方で伽耶系の可能性を考慮する必要性も説かれている (重藤2001)。また第12次調査区の22・81号竪穴住居跡などから出土した甑は、その形態的特徴の一致から全羅道地域から搬入された可能性が高いという (武末2000、重藤2001)。

本調査区では全体の器形が判るものだけでも数個体の甑が出土しており、把手や底部破片など明らかに甑と判断出来るものを含めると相当数にのぼる。

42号竪穴住居跡7 (22) は平底だが端部が稜をなさず、抹角平底となる。蒸気孔は小円孔を同心円状に配置しており、底部だけでなく体部にまで及んでいる。体部は直立し、口縁部は直口縁で上面がシャープな平坦面をなす。外面の口縁部下には沈線が巡るが把手の位置には巡っていない。把手は円柱状をなし、やや下がり気味に取り付けられる。調整は内外面とも轆轤使用の回転ナデを行うようだが、通常のナデと異なりヘラ状の工具を使用しているようである。胎土は精良で焼成は瓦質に近く、暗黄灰色を呈す。

78号竪穴住居跡80 (23) は平底だが端部が丸く稜をなさない抹角平底である。蒸気孔は小円孔を多数配置する。体部は若干丸味を帯びて中位よりもやや下方に重心を持ち、上半はわずかに内傾し

ている。口縁部は直口縁で、上面に小さな平坦面をなすがシャープさに欠ける。把手は円柱状でやや上方を向いて取り付けられる。外面はハケ目、内面はヘラケズリ。胎土には砂粒を若干含み焼成は軟質焼成で黄灰褐色を呈す。類似例として、第3次調査2号住居跡出土例が挙げられる。全体の器形はよく似るが、蒸気孔が体部にまで及ぶ点、把手の位置に沈線が巡らされる点、内面調整でヘラケズリをナデ消して仕上げる点で異なる。

40号竪穴住居跡6 (24) は今までに見られなかった器形の甑である。底部は欠失するが、丸底に近い平底になると思われる。蒸気孔は小円孔を配置する。底部の径に対して体部が大きく開くが器高は低い。最大径はかなり上方にあり、口縁部付近は内傾する。端部は直口縁で丸くおさまられる。把手は牛角形に上方を向き、最大径の位置よりも若干下に取り付けられる。調整は内面指ナデ、外面ヘラナデを行う。胎土には砂粒を若干含み、焼成は軟質で淡黄褐色を呈す。胎土や焼成は土師器とよく似ている。同様の器形のものが48号竪穴住居跡から出土している (25)。これは底部を失うものの、器形的類似から同種の甑として良いだろう。ただし外面にハケ目調整を行う点では異なる。

これと比較的近い器形のものに、攪乱出土の第57図268がある。先の2例と比較すると、把手が口縁部に近い位置にある点、そして内面がヘラケズリとハケ目、外面が幅の狭い板状工具によるナデを行う点で異なる。底部を欠くので甑か否かは不明である。

1号竪穴住居跡8 (26) も今までに見られなかった器形である。底部は丸底で蒸気孔は小円孔を同心円状に配置するようである。器高は低く、半球形に近い体部をなす。口縁部は直口縁で上方にまっすぐ立ち上がり、端部は丸く仕上げる。内面はヘラケズリとハケ目、外面はナデとヘラナデ。把手の有無は不明。胎土に砂粒を若干含み、焼成は軟質焼成で淡黄褐色を呈す。

78号竪穴住居跡81 (27) は把手を全く持たないか、もしくは一本しか把手を持たないものである。底部は平底で端部に明瞭な稜を有す。蒸気孔は小円孔を同心円状に配置する。体部は縦長で最大径が中位に位置し、ちょうどラグビーボールのような器形をなす。内面はハケ目とヘラケズリ、外面はハケ目調整を行い、外下端部にはヘラケズリを一周させる。胎土には砂粒をあまり含まないものの生地の肌理は粗く、軟質焼成で肌茶色～茶褐色をしており北部九州の在来系土師器とよく似た質感である。

朝鮮半島の甑については、(酒井1998) や (寺井2002) によって地域性の検討が行われ、それぞれの地域での特徴がかなり明らかになっている。これらによると、口縁部が直立するものは全羅道に多く、外反するものは慶尚道に多いという。底部が平底のものは全羅道に多く、丸底のものは慶尚道に多い。蒸気孔が小円孔のものは全羅南道から慶尚南道にあり、細長い蒸気孔をもつものは主に慶尚道に分布するという。また、その中間に位置する慶尚南道西部地域には、それぞれが混在するようである。

12次調査出土で出土した22号竪穴住居跡出土例 (Ⅱ：第57図-9)、81号竪穴住居跡出土例 (Ⅱ：第155図-87)、89号竪穴住居跡出土例 (Ⅱ：第168図-52) のように、口縁部が直立し、平底の底部に小円孔の蒸気孔を配した甑は全羅南道に深い関わりを持つ点が既に指摘されており、今回出土した42号竪穴住居跡7もその可能性が高い。全羅南道海南郡の郡谷里貝塚出土例に体部が筒状をなし底端部が稜をもたない類似品がある。78号竪穴住居跡78のように口縁部が直立し、底部が稜をもたない平底で小円孔を配した甑は、朝鮮半島での類例が見られないものの、それぞれの特徴が混在する慶尚南道西部地域に由来する可能性が最も高いのではないと思われる。その一方で、胎土や調

整に土師器との共通点が認められ、我が国において朝鮮半島の甑を真似て製作された可能性も捨てきれない。出土例を待ちたい。24や25のように、器高が低く浅い鉢形となるものは慶尚南道固城貝塚第2次調査Ⅲ層出土品に類似例がある（第121図10）。26は把手の有無が不明だが、これも同類のものとして現時点では扱っておきたい。

27は、底部を欠質しているので甑かどうか不明ではあるが、金海府院洞遺跡B地区出土赤褐色土器の中に、やはり内外面をハケ目調整し器形が類似するものがある（11）。

こうして見てみると、全羅南道に由来すると思われる甑はその系譜が明確であるが、対して慶尚道に類似性の求められそうな甑は、まだ資料が乏しく類例の比較検討が困難な状況にある。西新町遺跡で出土した甑は破片も含めると相当数にのぼるが、いまだ細長い蒸気孔をもつものが無い点を考慮すると、このような甑が主に分布する慶尚北道や慶尚南道東部地域の影響は薄いのではないかと思う。固城貝塚や府院洞遺跡の例はどちらも慶尚南道では一般的ではない器形であり、地域性としては認めがたい。やはり類例の増加を待ちたい。特に慶尚南道西部地域の資料の増加が期待される。

斜格子タタキ文布留系甕（第120図28）

I区包含層出土66（28）は、全体的な器形や外面以外の調整、胎土、焼成は布留系甕に近いが、外面に半島系土器の指標としてきた斜格子タタキを施しており、注目すべき資料である。西新町遺跡でも他に類例を見ない。またそれ以外の布留系甕と異なる点として、内面のヘラケズリが肩部まで及んでおらず、肩が張らない器形となる点が指摘される。胎土や焼成からすると恐らくは在地で生産されたものであろうが、半島との折衷形態をなすものとして興味深い。近い時期でやはり格子タタキを持つ布留系甕の出土例として、佐賀市の御手水遺跡I区SD183出土例が挙げられる。これは正格子タタキを使用し、タタキの後にハケ目を行う点で異なる。

4. まとめ

以上、西新町遺跡第13次調査の結果から、集落、カマド、半島系土器についてまとめを行った。

集落については、これまで存続時期や出土遺物の面から大きく東西に二分される点が指摘されていたが、今回の調査により第4次調査区と第13次調査区との間に集落の境界を想定することが出来、結果として大きく3つの群に分かれる可能性を指摘した。

カマドについては、その形状から大きく3種類に類型化し、時期的な変遷や集落内での分布状況を検討したが、I・II類が多くIII類が少ないという全体的な傾向以外、特に顕著な傾向は認められなかった。また朝鮮半島においてもI～III類に類似するカマドを確認することは出来たが、類例が少ない事もあって地域性を比較検討するまでには至らなかった。

半島系の土器については従来の指摘どおり、慶尚道に由来するものと、全羅道・忠清道に由来するものの両者を今回の調査でも確認することができた。特に平底の浅鉢や甑については新たな資料を得ることができ、結果としてやはり慶尚道域、全羅道・忠清道域の双方に類似品が求められ、両者との深い関わりを再確認することとなった。

しかし、残された検討課題も多い。集落については特に第4・5次調査区周辺の調査が進んでおらず、群として成立するか否か曖昧なままであり、今後の検討が必要である。さらに想定した3つの群の存続時期はともかく、それぞれの性格については不明な点が多い。カマドについてもさらに細かく類型化した上で集落内での分布や半島との比較検討を行えば、新たな見解が導き出せるのかもし

れない。朝鮮半島系土器も主に器形の面から類似性を指摘しただけにすぎず、技法や胎土の問題、集落内における分布上の問題、さらには搬入品か在地生産かといった重要な問題には検討を加えていないままである。これらの点については今後の課題としておきたい。

参考・引用文献

- 大貫静夫編 2001 『韓国の竪穴住居とその集落』日本文化班資料集3
- 久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX pp62 - 143
- 国立中央博物館 1992 『固城貝塚』
- 国立中央博物館 1998 『東萊楽民洞貝塚』
- 酒井清治 1998 「日韓の甑の系譜から見た渡来人」『榑崎彰一先生古希記念論文集』榑崎彰一先生古希記念論文集刊行会
- 佐賀市教育委員会 1994 『御手水遺跡』
- 成正鏞 1999 「3～5世紀の錦江流域における馬韓・百濟墓制の様相」『古文化談叢』第43集 九州古文化研究会 pp125～174
- 昌原大学博物館 1990 『馬山縣洞遺跡』
- 全南大学校博物館 1989 『住岩ダム水没地域 文化遺跡発掘調査報告書 (VI)』
- 全南大学校博物館 1998 『寶城金坪遺跡』
- 全南大学校博物館 1999 『光州雙村洞住居址』
- 武末純一 1996 「西新町遺跡の竈」『碩晤尹容鎮教授停年退任紀念論叢』 pp599 - 615
- 武末純一 2000 「北部九州の百濟系土器 - 4・5世紀を中心に -」『福岡大学総合研究所報』第240号 pp99 - 114
- 田崎博之 1983 「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』第120集 九州大学文学部
- 忠清埋蔵文化財研究院 2001 『天安斗井洞遺跡 C・D地区』
- 忠清埋蔵文化財研究院 2001 『舒川松内里遺跡』
- 常松幹雄 1994 「北部九州における庄内式期の土器」『庄内式土器研究』Ⅷ pp1 - 29
- 寺井誠 2001 「古墳出現前後の韓半島系土器」『3・4世紀 日韓土器の諸問題』釜山考古学研究会・庄内式土器研究会・古代学研究会 pp194 - 213
- 寺井誠 2002 「韓国全羅南道に系譜が求められる土器について」『大阪城跡Ⅴ』大阪市文化財協会 pp.51 - 56
- 東亜大学校博物館 1981 『金海府院洞遺跡』
- 西谷正 1983 「加耶地域と北部九州」『大宰府古文化論叢』上巻 九州歴史資料館 pp36 - 46
- 福岡県教育委員会 1985 『西新町遺跡』(第3次調査)
- 福岡県教育委員会 2000 『西新町遺跡Ⅱ』(第12次調査 - 1)
- 福岡県教育委員会 2001 『西新町遺跡Ⅲ』(第12次調査 - 2)
- 福岡県教育委員会 2002 『西新町遺跡Ⅳ』(第13次調査 - 1)
- 福岡市教育委員会 1982 『西新町遺跡』(第2次調査)
- 福岡市教育委員会 1989 『西新町遺跡』(第4次調査)
- 福岡市教育委員会 1994 『西新町遺跡3』(第5次調査)
- 福岡市教育委員会 1996 『西新町遺跡4』(第6・7次調査)
- 福岡市教育委員会 2001 『西新町遺跡7』(第10次調査)
- 釜山女子大学博物館 1984 『昌原三東洞甕棺墓』
- 釜山大学校博物館 1998 『金海鳳凰台遺跡』
- 溝口孝司 1989 「古墳出現前後の土器相 - 筑前地方を素材として -」『考古学研究』第35巻第2号 考古学研究会 pp90 - 118
- 木浦大学校博物館 1987～1989 『海南 郡谷里貝塚Ⅰ～Ⅲ』
- 李在賢 1999 「韓国の3世紀代の土器様相」『庄内式土器研究』XVIII、XIX 庄内式土器研究会 XVIII : pp54 - 70、XIX : pp31 - 42
- 柳田康雄 1982 「3・4世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古希記念 古文化論集』森貞次郎博士古希記念論文集刊行会 pp869 - 922

第2節 近世の遺物について

今回の第13次調査区においては、近世以降の遺物も相当数出土している。ここでは隣接する第12次調査の成果も含め、若干の成果と今後の課題を示しておきたい。

近世の出土品として、紅皿、染付碗、皿、鉢などの磁器類、灯火具類、碗、皿、土瓶、徳利、仏花生、甕、鉢、播鉢などの施釉陶器類、七輪、火鉢、火入、十能、焙烙などの無釉（一部施釉）土師質・瓦質雑器類、そして窯業生産に関連するトチン、ハマなど窯道具類が挙げられる。

染付については宝暦年間（1751～63）頃開始され明治期まで継続した須恵焼、明和・天明年間（1764～1788）頃の短い期間に生産されたという能古焼（註1）など、同じ筑前領内で生産された染付磁器が相当数含まれると思われるが、須恵焼、能古焼の詳細な実態は未だ明らかにされていない点が多く、加えて当時の一大生産地である肥前窯の影響を少なからず受け、その製品も肥前磁器の変遷と共通する点も多く見られる。

碗には筒形碗、腰の張った丸碗、小丸碗、広東碗、端反碗、筒丸碗、直線的に開く碗などがある。量的には端反碗、直線的に開く碗、丸碗、筒丸碗が多い。文様は内面見込みに印判の五弁花文、葉文、丸に若松、草木文、昆虫文、源氏香文などを配したものがある。口縁内面には四方禪、雷文を巡らせたものはいくつか見られ、また内外側面の文様は草花文が多い。

皿は口縁部を輪花にするものが少なからず見られる。また蛇の目凹形高台のものも少なくない。見込みを蛇の目釉剥ぎした小皿もある。文様は内面見込みに印判の五弁花文、円形の松竹梅を配したものがある。内面の文様はやはり草花文を基調としたものが多いが、小・中型の皿には風景や幾何学文、花鳥文、口縁部に雷文を巡らせるものもある。裏文様は唐草文がやはり多い。高台内銘款は「大明年製」、「大明成化年製」、渦「福」などが見られる。

鉢は出土数があまり多くない。内面見込みに印判の五弁花文、内側面には唐草と四方禪、草花文、花鳥文、雲龍文、外面に唐草文、蛸唐草と松竹梅、高台内銘款に渦「福」を配したものがある。

紅皿は体部が浅く、口縁部の平坦面が幅広い貝殻状のものが大半を占める。一部器高が高く丸味を帯び、口縁部の平坦面が狭い古手のものや、外面に蛸唐草をあしらったものもある。

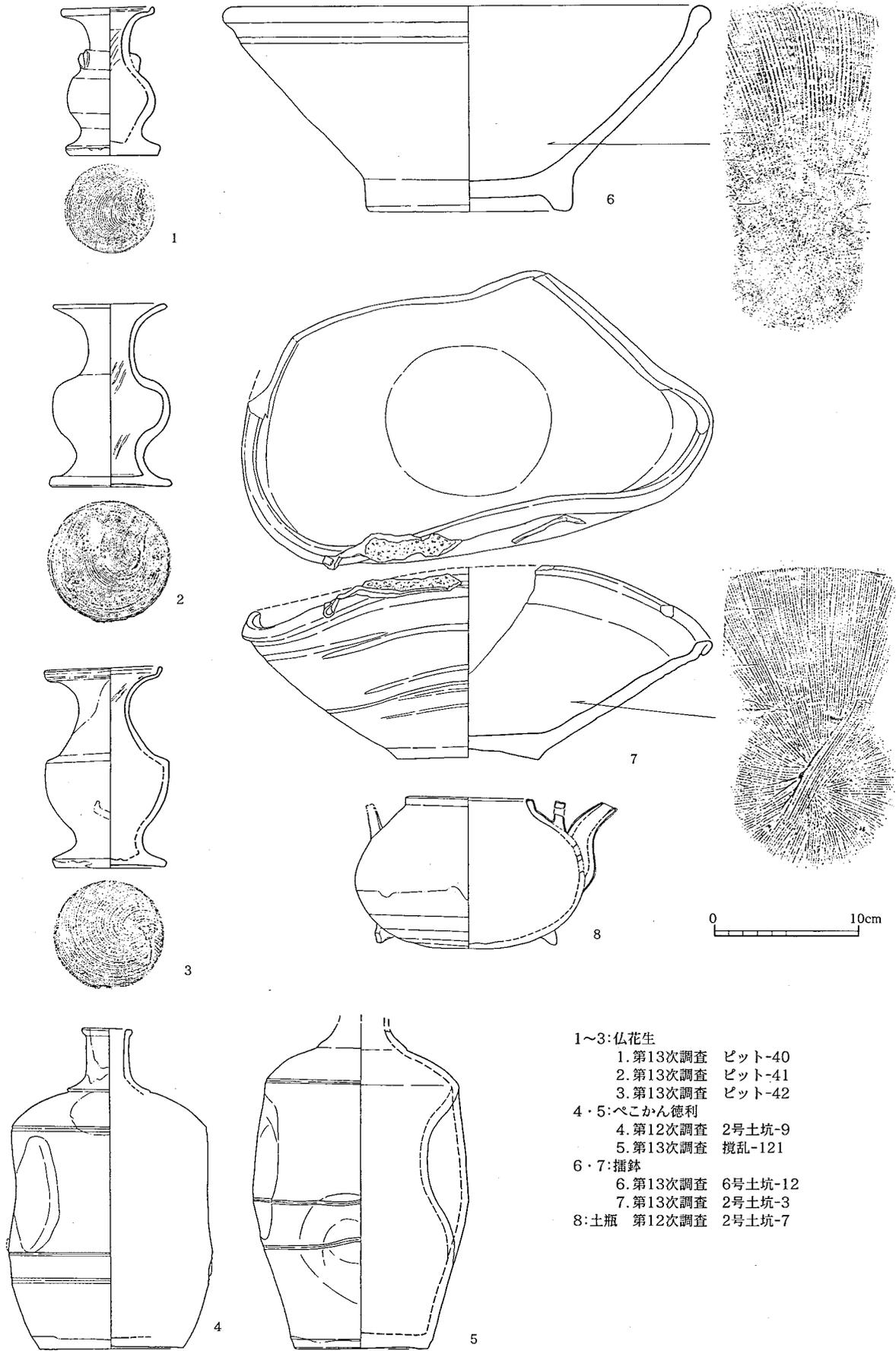
これら染付磁器を総じて見てみると、全て18世紀後半から19世紀代の時期におさまるものであり、これ以前に遡る可能性のあるものは見当たらないようである。このことは本遺跡のある西新町新屋敷に集落が成立した時期が、18世紀後半の明和六年（1769）であると記す近世の文献と問題なく符合する。この区域において近世集落が成立するのは18世紀後半と考えて良いようである。

陶器については、近隣に享保元年（1716）に開窯され、主に茶陶や置物を生産した東皿山窯、やや離れた所に寛保元年（1741）に開窯され日常雑器を生産していた西皿山窯があり、出土した日常雑器の大半がこの二つの藩窯と関連する事は想像に難くない。

ところで第12・13次調査区では、日常生活に使用されていた陶器類とともに、焼け歪みの生じた製品や焼成の悪い製品、器種構成に著しい偏りが見られるもの、加えて数種類の窯道具が少なからず出土しており、当区域での窯業生産を想定させる。

少し詳細に出土品の内容を見てみたい。まず出土した陶器の中で量的に目立つのが、口縁部が朝顔形に開く仏花生と、胴部を数カ所窪ませた「ぺこかん」徳利である。

仏花生は通常、一般の集落遺跡からはそれ程多くは出土しない器種である。また焼成が悪く明らかに不良品と思われるものもあることから、この場所で生産された可能性は高いと言えるだろう。



- 1~3: 仏花生
 1. 第13次調査 ピット-40
 2. 第13次調査 ピット-41
 3. 第13次調査 ピット-42
 4・5: べこかん徳利
 4. 第12次調査 2号土坑-9
 5. 第13次調査 攪乱-121
 6・7: 播鉢
 6. 第13次調査 6号土坑-12
 7. 第13次調査 2号土坑-3
 8: 土瓶 第12次調査 2号土坑-7

第122図 生産された可能性の高い製品 (1/4)

体部は球形または扁球形を呈したものが多く、肩部に明瞭な稜をもつ半球形のものもある。脚部は大きく開き、付け根は強くくびれる。底面は糸切りの平底である。口縁部は朝顔状に大きく開き、端部を上方につまみ上げるものが多い。頸部にリボン状の双耳が付くものもある。釉は鉄釉を施釉したものが最も多く、薄黄緑色の釉口縁のみ藁灰釉を流し掛けたものや透明釉のものも見られる。

徳利は同時期の遺跡であれば比較的多く出土する器種だが、本調査区出土品は大半が同形のぺこかん徳利に限定され、かつ釉の発色が悪く不良品と思われるものもあることから生産されたものと考えて良いだろう。

胴部は筒状をなし、細く短い頸部が付く。肩部に一条、胴部に二条の沈線を巡らせるが胴部は一条のものもある。頸部境には一条の段を巡らせる。胴部の上半と下半にそれぞれ2ヶ所窪ませるのを通例とする。釉は鉄釉を全面に施釉するものが多く、鉄釉に藁灰釉を流し掛けるものもある。

上記以外に、明らかに不良品と判断できるものもある。形の上で不良品と推定される12次調査区2号土坑出土の土瓶、大きく焼け歪みが生じた13次調査区2号土坑出土の搦鉢、釉の発色が極めて悪くガラス化していない6号土坑の搦鉢などがそれである。土瓶は三足付で飴釉施釉のものである。搦鉢は口縁端部を小さな玉縁状に丸く肥厚させるものである。これらは当区域で生産され、使用に堪えないため廃棄処分されたものであろうが、現在のところ個体数がそれ程多くなく、果たして普遍的に生産された器種であるのかどうかまではよく判らない。

窯道具について言えば、トチン、ハマ、足付きハマ、大型の焼き台など大小各種の製品に使われたと思われる窯道具が出土している。上記の製品以外にも大型品、小型品を含め多くの器種が生産されたのであろう。

これら当区域で生産されたと思われる器種のうち、仏花生と徳利は他の器種との共伴関係から、廃藩後の民陶時代の製品ではなく19世紀前半頃のものである。土瓶も徳利との共伴からこの頃のものと考えても問題はないだろう。即ち江戸時代後期の19世紀前半には当該地で日常雑器の生産が行われていたこととなる。鉄釉を主体に、透明の藁灰釉や釉の流し掛けが多く見られる点も、かねてから指摘されている東皿山窯の特徴と一致する。

近隣に位置する東皿山窯では茶陶や置物を生産していたが、時代が漸しくなるにつれ、茶陶以外にも茶碗、皿、水指、甕、鉢、花瓶などを生産したという。第12・13次調査区では江戸時代後期の雑器生産が確認され、東皿山窯の推定分布範囲を広げて考える必要性も生じてきた。

しかし一方で、東皿山窯の特徴、即ち茶陶、置物を生産した痕跡が顕著ではない点、そして丸「高」の印文をもつ製品、陶工名を記した製品が見られないという点にも注目したい。当区域の窯業生産は東皿山窯の歴史の中では新しい時代に属し、その生産体制とは異なり日常雑器のみを生産していた所であったのかどうか、今後の調査の進展に期待したい。

参考・引用文献

- アンディー・マスキ 1994 「東皿山窯物原の試験的な調査」 『法哈噠』第3号 博多研究会
小畑弘己 1994 「〈補説〉アンディー・マスキ氏採集遺物について」 『法哈噠』第3号 博多研究会
九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
佐賀県立九州陶磁文化館 1992 『福岡の陶磁展』平成4年度特別企画展図録
東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡調査研究年報2』

第3表 西新町遺跡第13次調査竪穴住居跡一覧

番号	調査区	挿図番号	平面プラン	規 模			炉/カマド	時 期	備 考
				長軸(m)	短軸(m)	総床面積 (m ²)			
住1	I区南13	第9図	方形	3.6				3式後半	大半が調査区外
住2	I区南10~12	第9図	方形	6.0	4.6	29.7		3式後半	
住3	I区南8・9	第14図	方形?						大半が調査区外
住4	I区東2・3	第14図	方形?					3式後半	床面のみ遺存
住5	I区南9	第18図	方形?						竪穴住居跡?
住6	I区中3・6	第18図	長方形	4.2	2.9	12.2	カマド	4式前半	
住7	I区中6	第21図	方形?					4式前半	遺存状態悪い
住8	I区中6	第22図	方形?					3式後半~4式前半	遺存状態悪い
住9	I区南9・10	第22図	方形		3.9		炉?	3式後半~4式前半	
住10	I区南8	第24図	方形				カマド	4式前半	南壁際粘土塊 北側焼土塊
住11	I区中4	第29図	不整形				炉	3式後半	
住12	I区中3	第29図						4式後半	遺存状態悪い
住13	I区中3	第32図	方形?						遺存状態悪い
住14	I区中3・4	第29図	方形?						遺存状態悪い
住15	I区北3	第32図	方形		4.3			3式後半	
住16	I区北3	第37図	不整形?		3.7			3式後半	遺存状態悪い
住17	I区北3	第37図	不整形	4.0	3.5	14.0	炉	4式前半	
住18	I区南5~7	第42図	方形	4.4	3.7	16.3		3式後半	
住19	I区南2・3	第42図	方形?					4式前半	大半が調査区外
住20	I区南1	第48図	方形?				カマド	4式前半	遺存状態悪い
住21	I区南4・5、中6	第51図	不整形	5.2	3.8	20.7		3式後半~4式前半	南西壁際粘土塊
住22	I区南2~4	第54図	不整形					3式後半	
住23	I区中2・6	第57図	方形	4.0	3.9	18.2	カマド	4式前半	
住24	I区中6	第60図							粘土塊 焼土坑 遺存状態悪い
住25	I区中1・2	第61図	不整形	4.8	3.7		炉・カマド	4式前半	複数棟が重複?
住26	I区中5	第66図	方形		2.8			4式後半	南壁際土坑
住27	I区中5	第66図	方形	3.9	3.0	11.7	炉?	4式後半	南東壁際粘土塊
住28	I区西4・中5	第73図	長方形	3.0			炉	4式前半?	
住29	I区西3・4	第73図	方形?					4式後半	屋内中央土坑
住30	I区西2・3	第78図	長方形		2.8		カマド	4式後半	
住31	I区中5	第81図	方形				炉	4式後半	
住32	I区中5	第81図	方形?					4式後半	遺存状態悪い
住33	I区中5	第81図	方形?					4式前半	遺存状態悪い
住34									欠番
住35	I区西1・2・5・6	第84図	長方形	3.4	2.6	8.8		4式前半	
住36	I区西6	第84図	方形?					4式前半	遺存状態悪い
住37	I区西5・6	第84図	方形		2.9		カマド	4式前半	遺存状態悪い
住38	I区西5	第88図	方形	3.3			炉	3式後半	
住39	I区西7・8	第88図	方形?				カマド		遺存状態悪い
住40	I区西8	第88図	方形?				カマド	4式前半	12次調査住88
住41	I区中5	第93図	方形?						遺存状態悪い
住42	I区中5	第95図					カマド	4式前半	遺存状態悪い
住43	I区中5	第97図	方形?		3.6		カマド	4式前半	
住44	I区北2	第99図	方形	3.5	2.8	9.8	炉・カマド	4式前半	
住45	I区北2	第99図	長方形	5.4	3.3	17.7	炉	4式前半	南壁際土坑
住46	I区中1	第104図	方形		3.0				遺存状態悪い
住47	I区中1	第104図	方形	5.0					遺存状態悪い
住48	I区北1	第106図	方形	5.5			カマド	4式前半	南壁際土坑
住49	I区北1	第111図	方形	3.0	2.6	8.3		4式後半	住居跡ではない可能性もある
住50	I区北1	第113図	方形	5.8	5.7	33.1	炉	4式前半	南東壁際にも焼土あり
住51	I区北1	第116図	方形	3.4	3.1	11.1		4式前半~4式後半	
住52	I区北1	第118図	方形	4.3	3.6	15.5	カマド	4式前半	
住53	I区西5・6	第120図	方形				カマド	3式後半~4式前半	遺存状態悪い
住54	I区北2	第120図						3式後半	遺存状態悪い
住55	I区中5	第122図							遺存状態悪い
住56	I区西5	第88図							遺存状態悪い
住57	II区東1	第122図	方形				炉	3式後半	大半が調査区外
住58	II区東2	第125図	方形?				カマド	3式後半	
住59	II区北4	第129図	方形?						遺存状態悪い
住60	II区西4・5	第129図							遺存状態悪い
住61	II区北1	第129図						3式後半	遺存状態悪い
住62	II区北1	第129図							遺存状態悪い
住63	II区北5	第132図	方形		3.0			4式前半	大半が調査区外
住64	II区東5~7	第134図	長方形	4.8	3.4	17.4	炉	3式後半	
住65	II区北2・5・6	第134図	方形	4.0	3.7	14.4		4式前半	

住66	Ⅱ区北2	第134図						3式後半	遺存状態悪い
住67	Ⅱ区北6・7	第143図	方形	5.4	4.6	24.4	カマド	4式後半	
住68	Ⅱ区北7・8	第146図	長方形	4.3	3.0	13.4	炉	4式後半	
住69	Ⅱ区北8	第146図	方形	4.0	3.7	14.6	カマド	4式後半	
住70	Ⅱ区北3	第150図							遺存状態悪い
住71	Ⅱ区北5	第151図	長方形	4.3	3.4	14.6	カマド	4式前半	
住72	Ⅱ区南3	第155図	長方形		4.0				
住73	Ⅱ区南3	第155図						4式後半	遺存状態悪い
住74	Ⅱ区南3	第160図					炉	4式前半	遺存状態悪い
住75	Ⅱ区南3	第160図	長方形	6.7	5.0	33.5	カマド	4式前半	
住76	Ⅱ区南2	第166図							遺存状態悪い
住77	Ⅱ区南2	第168図	長方形				カマド	3式後半	
住78	Ⅱ区南2	第173図	長方形	5.0	4.2	20.7	カマド	3式後半	東壁際粘土塊
住79	Ⅱ区南2	第179図	方形	4.6				3式後半	
住80	Ⅱ区南1	第179図	方形	4.3	4.0	17.9			
住81	Ⅱ区南1	第182図							遺存状態悪い
住82	Ⅱ区北1	第182図							遺存状態悪い
住83	Ⅱ区南1	第182図						3式後半	遺存状態悪い
住84	Ⅱ区南1	第182図						3式後半	遺存状態悪い
住85	Ⅱ区南1	第185図					カマド	4式前半	遺存状態悪い
住86	Ⅱ区南1	第186図	方形		3.7		カマド	4式前半	

第4表 西新町遺跡 カマド付設竪穴住居跡一覧

調査次数	番号	竪穴住居跡	カマド		時 期	朝鮮半島系土器	備 考
第2次	F区住1	平面プラン 長方形	類型 I	主軸方位 北	3式前半		
	F区住2	長方形	I	北	3式後半	軟質甌	
第4次	SC-16	長方形			4式前半	軟質甌把手	
	SC-31	長方形		北西	4式後半		
第5次	SC01		I?		4式前半		
	SC02		Ⅲ	北	4式後半		板状鉄斧出土
	SC03		Ⅱ?	北東?	3式後半		
	SC04		I	北東	3式後半	格子タタキ陶質土器片	
	SC06	長方形	Ⅱ?	南西	4式後半	格子タタキ陶質短頸壺・擬格子タタキ陶質土器片	カマド対面に粘土塊
	SC07		I?	北東	4式前半	縄蓆文タタキ陶質土器片	
	SC08		I	北西	4式後半		
	SC09		Ⅲ	北	1・2式		西新町遺跡最古例
	第12次	住6	長方形	Ⅲ	北	4式前半	斜格子タタキ軟質鉢
住21		方形	不明	南西	4式後半	無文陶質壺・軟質両耳付壺・無文陶質壺片・平行タタキ軟質壺片・格子タタキ陶質壺片・平行タタキ瓦質壺片	カマド?
住22			I	北東	4式後半	軟質甌	
住30			I	北東	4式後半	平行・格子タタキ瓦質壺・格子タタキ瓦質壺片・斜格子タタキ陶質壺片2・平行タタキ陶質壺片・縄蓆タタキ陶質壺	住居跡平面プラン?
住38			Ⅱ	北東	4式前半		
住39			I	北西	4式後半	陶質壺片	
住40		長方形	Ⅱ	北東	4式後半	平行タタキ軟質壺片・格子タタキ陶質壺片	
住42			Ⅲ	北西	4式後半	縄蓆タタキ陶質壺片・軟質小形平底鉢	
住44			I?	北		平行・格子タタキ陶質壺片	カマド平面プラン?
住52			Ⅱ	北東	4式前半		カマド近くに補修用粘土塊
住53			Ⅱ	南東?	4式前半		
住64			Ⅱ	北西	4式前半	平行タタキ瓦質壺片・瓦質鉢片・軟質甌把手	
住72		長方形	Ⅱ	北西	4式前半	陶質直口壺口縁部片・格子タタキ陶質壺片・格子タタキ軟質壺片・斜格子タタキ軟質壺片・平行タタキ瓦質壺片	カマド対面に粘土塊
住75 b		長方形	Ⅱ	北西	4式後半		
住77		長方形	Ⅱ?	北西	4式後半	平行タタキ瓦質壺片3・無文瓦質壺片・格子タタキ瓦質壺片	
住78			Ⅱ?	北西?	4式前半		カマド煙道のみ
住81		方形	Ⅱ	北	4式前半	軟質甌・格子タタキ陶質壺片・瓦質壺口縁部片	
住88			Ⅱ	北東?	4式前半	平行タタキ軟質壺片	カマド煙道のみ
住89		方形	I	南西	4式前半	平行タタキ陶質壺片5・格子タタキ軟質壺片2・陶質無文壺片・軟質甌	
住97		方形	Ⅱ	北西?	4式後半	平行タタキ陶質壺片・平行タタキ瓦質壺片・陶質無文壺片	カマド煙道のみ
住110		方形	Ⅲ	東	4式前半		南西隅に粘土塊
住111		方形			4式後半		袖の一部のみ
住114		方形	Ⅱ				南東に伸びるカマド?
住125		方形	I?	北東	3式後半		煙道の形態が特異
住128		長方形	Ⅱ	北西	4式後半	陶質無文壺片・斜格子タタキ軟質壺片	2つ掛け?
住130			I	北東	4式前半		
住131			I	西	4式前半		
住155		I?	南	4式前半	格子タタキ軟質壺片		
住157		Ⅱ	北西	4式後半			
第13次	住6	長方形	Ⅱ	北東	4式前半		袖の一部のみ
	住10		Ⅱ	南西	4式前半	平行・格子タタキ陶質壺片・瓦質浅鉢	南壁際に粘土塊
	住20		I	北西	4式前半	斜格子タタキ軟質壺片2	
	住23	方形	Ⅱ	北	4式前半	格子タタキ軟質浅鉢・軟質鉢底部片	
	住25	不整形	I?	北東	4式前半	無文陶質壺片	袖の一部のみ
	住30	長方形	I	東	4式後半	瓦質二重口縁壺口縁部片・軟質斜格子タタキ壺片3	
	住37	長方形?	I	北東	4式前半	軟質斜格子タタキ壺片	
	住39		I	北東			袖の一部のみ
	住42		I・Ⅱ?	北西	4式前半	軟質甌・軟質鉢口縁部片・軟質斜格子タタキ壺片	掘り間違えた可能性あり
	住43	長方形	Ⅱ	南西	4式前半		
	住48	方形	Ⅲ	北西	4式前半	軟質甌・陶質縄蓆文タタキ壺片・軟質縄蓆文タタキ壺片	
	住52	方形	Ⅲ	北西	4式前半		Ⅱの可能性もある
	住53				3式後半~4式前半	軟質斜格子タタキ壺片・軟質平底鉢底部片	焼土のみ
	住58		Ⅱ	北東	3式後半	軟質格子タタキ土器片	
	住67	方形	Ⅱ	北東	4式後半	陶質無文壺・軟質斜格子タタキ片口鉢口縁部片・瓦質斜格子タタキ土器片・軟質斜格子タタキ土器片	
	住69	方形	I	北東	4式後半	瓦質斜格子タタキ土器片・瓦質無文土器片・軟質甌把手	袖の一部のみ
	住71	長方形	Ⅱ	北東	4式前半		カマド対面に粘土塊
	住73		Ⅱ	北東	4式後半		
	住75	長方形	Ⅱ?	北東?	4式前半	軟質斜格子タタキ土器片	一部のみ
	住77	長方形?	I?	北東	3式後半	軟質斜格子タタキ土器片	一部のみ
住78	方形	Ⅱ	南西	3式後半	軟質甌2・陶質縄蓆タタキ壺片・陶質斜格子タタキ壺片・陶質平底鉢底部片	カマド対面に粘土塊	
住85		I?	北?	4式前半	軟質斜格子タタキ土器片	一部のみ	
住86		Ⅱ	西	4式前半			

第5表 西新町遺跡第13次調査出土石製品・土製品・金属製品一覧

石製品										
報告書	挿図番号	種類	出土遺構	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	
IV	188-1	石錘	2号竪穴住居	滑石	(6.8)		2.0	67.9		
IV	188-2	石錘	25号竪穴住居	滑石	9.7	6.0	3.1	254.1		
IV	188-3	石錘	25号竪穴住居	滑石	9.4	5.1	3.6	291.4		
IV	188-4	石錘	50号竪穴住居	滑石	4.9	1.4	1.4	13.2		
IV	188-5	石錘	59号竪穴住居	砂岩	(5.3)	2.5	1.6	21.6		
IV	188-6	石錘	2号竪穴住居	滑石	8.0	2.5	2.5	90.9		未製品
IV	188-7	石錘	78・79号竪穴住居上層	滑石	7.1	2.3	1.2	34.2		未製品
IV	188-8	軽石	25号竪穴住居		7.9	6.3	3.0	49.3		
IV	188-9	軽石	58号竪穴住居		10.4	8.3	5.0	81.9		
IV	188-10	軽石	60号竪穴住居		3.5	2.9	2.2	4.3		
IV	188-11	軽石	69号竪穴住居		4.1	3.4	2.2	6.4		
IV	188-12	軽石	74号竪穴住居		4.9	3.6	3.5	11.8		
IV	189-13	砥石	2号竪穴住居	砂岩	(4.3)		1.2	18.6		
IV	189-14	砥石	11号竪穴住居	ヒン岩	7.4	3.4	4.0	178.4		
IV	189-15	砥石	26号竪穴住居	砂岩	10.4	2.5	1.7	89.9		
IV	189-16	砥石	29号竪穴住居	砂岩			3.5	131.9		
IV	189-17	砥石	29号竪穴住居	層灰岩	(12.4)	2.9		268.1		
IV	189-18	砥石	41号竪穴住居上層	砂岩			1.4	18.5		火の影響か赤変あり
IV	189-19	砥石	41号竪穴住居下層	砂岩	(3.9)		1.8	39.6		
IV	189-20	砥石	47号竪穴住居	シルト岩	(9.7)	2.0		21.3		
IV	189-21	砥石	48号竪穴住居	粘板岩	(8.6)	2.0		143.8		
IV	189-22	砥石	50号竪穴住居	硬質砂岩	(5.6)	2.1		61.2		
IV	189-23	砥石	57号竪穴住居	砂岩	7.9	6.4	3.6	308.2		
IV	189-24	砥石	64号竪穴住居	泥岩				73.4		
IV	189-25	砥石	67号竪穴住居	粘板岩	(6.2)	1.1		47.3		
IV	190-26	砥石	68号竪穴住居	泥岩	21.7	5.2	3.4	626.8		
IV	190-27	砥石	68号竪穴住居	細粒砂岩	(3.8)	1.6	1.2	14.6		
IV	190-28	砥石	71号竪穴住居	細粒砂岩	(4.5)	1.6	1.0	15.1		
IV	190-29	砥石	75号竪穴住居	片岩	(7.5)		1.1	93.0		
IV	190-30	砥石	75号竪穴住居	シルト岩	(5.9)		1.4	24.7		
IV	190-31	砥石	78号竪穴住居	砂岩	14.4	6.7	2.8	458.2		
IV	190-32	砥石	82・83号竪穴住居	シルト岩	(5.8)			91.3		
IV	190-33	砥石	85号竪穴住居	シルト岩	(11.1)		4.8	270.4		
IV	191-34	台石	48号竪穴住居	砂岩	34.9	24.1	9.4	14200		
IV	191-35	台石	72号竪穴住居	凝灰岩	23.4	21.5	10.4	8600		
IV	192-36	凹み石	10号竪穴住居	凝灰岩	12.7	6.7	4.4	615.0		磨製石斧の転用
IV	192-37	砥石	74号竪穴住居	シルト岩	(5.4)		1.0	10.1		表裏両面に擦り切り溝あり
IV	192-38	磨石	67号竪穴住居	花崗岩	(11.1)	9.2	6.0	979.7		
IV	192-39	支脚	78号竪穴住居粘土高まり内	砂岩	13.8	6.4	4.7	579.1		熱により変色する
IV	192-40	玉原石	86号竪穴住居	蛇紋岩	2.5	1.2	0.4	5.7		
IV	192-41	玉原石	86号竪穴住居	蛇紋岩	1.2	2.0		1.0		
IV	192-42	剥片	67号竪穴住居	黒曜石	2.8	3.5	0.5	3.3		石鏃の可能性あり
IV	192-43	剥片	80号竪穴住居	黒曜石	2.9	1.3	0.2	1.3		側面に微細剥離あり
IV	192-44	剥片	86号竪穴住居	黒曜石	3.2	1.8	0.9	4.5		微細剥離あり
V	66-1	石鏃	I区中2包含層	黒曜石	3.0	1.9	0.6	2.5		未製品か 微細剥離あり
V	66-2	石鏃	表採	黒曜石	2.4		0.3	0.8		
V	58-1	石錘	12号土坑	滑石						未製品
V	58-2	軽石	落ち込み1表層		4.0	2.0	1.6	3.2		
V	58-3	軽石	II区北7遺構面		3.5	2.0	1.7	1.8		
V	58-4	軽石	II区南3包含層		6.2	3.1	2.5	10.4		
V	58-5	軽石	II区北6攪乱		6.8	5.7	4.9	35.6		
V	58-6	軽石	II区南1包含層		7.6	5.2	4.6	26.8		
V	58-7	軽石	I区中4暗褐色細砂		4.6	4.7	2.4	10.7		
V	58-8	軽石	II区西4清掃時		3.9	3.6	1.9	5.6		
V	58-9	凹み石	I区南6暗褐色細砂	花崗岩	8.2	5.2	5.1	312.0		
V	58-10	砥石	I区北1包含層	細粒砂岩	(8.2)		3.5	153.7		穿孔あり 57と同一個体
V	58-11	砥石	I区北1包含層	細粒砂岩	(8.9)		3.8	289.5		穿孔あり 56と同一個体
V	59-12	砥石	44号竪穴住居	シルト岩	(3.8)	2.5	1.0	16.4		
V	59-13	砥石	1号土坑	花崗岩	(4.9)		1.8	45.4		
V	59-14	砥石	I区北2包含層	細粒砂岩	(4.2)		3.7	38.4		
V	59-15	砥石	II区南1攪乱	砂岩	(7.0)			212.3		
V	59-16	砥石	I区北1遺構面	花崗岩	(13.0)		4.0	828.1		溝か1条あり
V	59-17	砥石	I区南2遺構検出中	細粒砂岩	(5.3)		4.1	173.3		
V	59-18	砥石	13号竪穴住居南側ベース土	砂岩	(9.1)		2.5	291.5		
V	59-19	砥石	I区中5包含層	シルト岩				103.1		

V	59-20	砥石	Ⅱ区南2攪乱	砂岩	(14.2)		6.5	1666.8	
V	60-21	砥石	I区西4包含層	シルト岩	9.5	2.4	0.9	30.1	
V	60-22	砥石	I区南5遺構検出中	片岩	(8.4)	3.2	2.4	116.9	
V	60-23	砥石	I区中6遺構検出中	細粒砂岩	5.7	4.6	3.4	161.0	
V	60-24	砥石	I区西1遺構面	砂岩	14.5	4.2	2.2	260.0	
V	60-25	砥石	I区中7暗褐色細砂	シルト岩	(7.3)	4.1	1.5	59.5	
V	60-26	砥石	Ⅱ区北7包含層	片岩	(7.0)		0.9	28.3	
V	60-27	磨石	I区北1包含層	シルト岩	8.2	7.9	2.6	303.0	
V	60-28	磨石	I区北3包含層	玄武岩	(7.6)	5.5	4.2	243.5	
V	60-29	磨石	I区南2暗褐色細砂	花崗岩	(5.1)	8.1	5.1	334.7	
V	91-1	砥石	5号土坑	砂岩	(5.7)	3.5	2.5	70.2	
V	91-2	砥石	5号土坑	砂岩	(5.5)	2.0	1.8	46.3	
V	91-3	温石	Ⅱ区南2包含層	滑石	9.7	3.8	1.8	135.6	欠損部に再加工あり
V	91-4	砥石	I区南1旧校舎配石	花崗岩	6.9	6.4	4.7	287.3	
V	91-5	挽臼	I区西4包含層	花崗岩			7.2	3060	上臼

土製品

報告書	挿図番号	種類	出土遺構	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
IV	194-1	土錘	17号竪穴住居		5.5	2.4	2.4	31.8	
IV	194-2	不明	29号竪穴住居		(4.2)	2.9	1.8		断面形態は割竹形
V	61-1	ガラス小玉鑄型	44号竪穴住居		(3.4)		0.9		裏面にケズリを施す
V	61-2	ガラス小玉鑄型	I区中5包含層		(4.0)		1.0		裏面・側面にケズリを施す
V	61-3	ガラス小玉鑄型	Ⅱ区南1攪乱		(6.9)		0.9		裏面・側面にケズリを施す
V	61-4	不明	20号竪穴住居		6.2		2.7	139.2	
V	61-5	不明	I区西包含層		6.5				
V	61-6	不明	I区西1遺構面				2.2		
V	61-7	土錘	表採		(5.0)	3.5	4.0		表面をミガキ仕上げする
V	93-1	土玉	I区東5包含層		1.6				
V	93-2	土玉	ピット38		1.7				
V	93-3	土玉	Ⅱ区南1攪乱		1.7				
V	93-4	土玉	Ⅱ区南3遺構面		1.8				
V	93-5	土玉	ピット83		1.7				
V	93-6	土錘	I区西8攪乱		4.3	1.3		6.4	円形スタンプが残る
V	93-7	土錘	I区中1攪乱		(6.5)	1.6			
V	93-8	土錘	Ⅱ区南2中央攪乱		(5.4)				
V	93-9	土錘	I区東4基礎		5.5	3.8		72.1	
V	93-10	土笛	I区東2基礎		8.2	4.0	4.3		緑と黄色の二彩
V	93-11	土鈴	I区中2攪乱		6.6	5.6			
V	93-12	土鈴	Ⅱ区南2北側攪乱		4.3	3.9			
V	93-13	棒状土製品	Ⅱ区南2攪乱		4.1	1.1			
V	93-14	土製人形	清掃時出土		(5.0)	5.2	1.8		恵比須
V	93-15	土製人形	1号土坑		5.3	3.7	2.0		弘法大師
V	93-16	羽口	Ⅱ区西8攪乱		11.6	6.9			円形スタンプが残る
V	93-17	羽口	ピット82		(12.8)	7.5			
V	93-18	不明土製品	I区中5遺構面		(4.4)				
V	93-19	札状土製品	I区北3攪乱		(6.2)	5.4	1.0		
V	93-20	札状土製品	Ⅱ区南1攪乱		6.4	5.7	0.8		表面に「64」の数値を刻印

金属製品

報告書	挿図番号	種類	出土遺構	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
IV	193-1	鉄鏃	2号竪穴住居		(3.4)				
IV	193-2	鉄鏃	48号竪穴住居床面直上		(4.2)				
IV	193-3	鉄鏃	53号竪穴住居		4.2	2.4	0.2		
IV	193-4	鉄鏃	60号竪穴住居		4.9	1.8	0.1		木質部残存
IV	193-5	鉄鏃	31号竪穴住居		4.1	1.9	0.2		手鏃
IV	193-6	鉄鏃	48号竪穴住居		(14.2)	3.8	0.2		基部を折り返す
IV	193-7	鉄鏃	64号竪穴住居		(8.2)	3.3	0.2		基部を折り返す
IV	193-8	刀子	21・22号竪穴住居		(4.1)	1.0	0.2		木質部残存
IV	193-9	刀子	24号竪穴住居		(8.6)	1.0	0.2		
IV	193-10	刀子	50号竪穴住居		(9.7)	1.1	0.4		
IV	193-11	刀子	57号竪穴住居		10.1	1.6	0.3		
IV	193-12	刀子	27号竪穴住居		(5.0)	1.6	0.2		
IV	193-13	ヤリガンナ	29号竪穴住居		(3.4)	1.2	0.3		
IV	193-14	不明	23号竪穴住居		(6.1)	1.0	0.1		中空で円柱状の形態
IV	193-15	鉄釘	21・22号竪穴住居		4.0	0.6			混入の可能性あり
IV	193-16	鉄釘	23号竪穴住居カマド		(5.6)	5.5	0.3		混入の可能性あり
IV	193-17	鉄釘	77号竪穴住居		(3.2)	0.5			混入の可能性あり
IV	193-18	鉄釘	77号竪穴住居		(2.3)	0.3			混入の可能性あり
IV	193-19	鉄釘	77号竪穴住居		(4.3)	0.4			混入の可能性あり

IV	193-20	鉄釘	79号竪穴住居		(5.2)	0.6			混入の可能性あり
IV	193-21	不明	48号竪穴住居		3.5	1.6	0.9		混入の可能性あり
IV	193-22	不明	78号竪穴住居				0.3		
IV	193-23	鉄滓	77号竪穴住居						
V	62-1	刀子	18号竪穴住居		(2.5)	1.3	0.2		
V	62-2	鉄鏃	ピット83		3.3		0.2		
V	62-3	鉄鏃	I区中6攪乱		3.7		0.2		
V	62-4	不明	ピット32		2.8	3.7	0.1		
V	62-5	不明	ピット83		3.9	4.5	0.2		
V	62-6	ヤリガンナ	I区北1包含層		(8.6)	1.0	0.2		
V	62-7	鉄鏃	I区中5		15.3	4.2	0.2		基部を折り返す
V	92-1	鉄釘	I区南2遺構面		(3.8)	0.3	0.3		
V	92-2	鉄釘	ピット87		(5.3)	1.0	0.6		
V	92-3	鉄釘	ピット32		(8.4)	0.5	0.3		
V	92-4	不明	7号土坑		(4.4)	0.7	0.2		
V	92-5	不明	II区西8攪乱		3.7	2.0	0.1		
V	92-6	不明	ピット91		(3.3)	2.1	0.1		
V	92-7	不明	ピット95		(2.8)	3.0			木質部残存
V	92-8	不明	I区北3攪乱		(11.7)	0.6			
V	92-9	不明	5号土坑		(13.0)		0.2		
V	92-10	刀子	1号土坑		(8.9)	0.7	0.2		
V	92-11	ヤリガンナ?	5号土坑		(10.6)	1.2	0.2		
V	92-12	筒状製品	I区中6基礎		15.4	2.8	0.2		10ヶ所に穿孔あり
V	92-13	包丁	I区西5遺構面		(12.7)	4.0	0.2		
V	92-14	包丁	ピット87		(7.1)		0.2		
V	92-15	錠	I区北3基礎		4.7		1.2		
V	92-16	環状製品	II区南2	青銅	5.6		0.25	15.50	
V	92-17	飾り金具	II区南2北側攪乱	青銅	12.4	1.6	0.15	23.40	
V	92-18	皿状製品	I区南1旧校舎配石	青銅	径7.5	高1.6		24.0	

貨幣

報告書	挿図番号	種類	出土遺構	径 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
V	94-1	寛永通寶	II区西8攪乱	25	1.3	3.6	背面に「文」が鑄込まれる
V	94-2	寛永通寶	I区中1攪乱	24.5	1.3	3.5	背面に「文」が鑄込まれる
V	94-3	寛永通寶	II区南2北側攪乱	25	1.2	3.6	背面に「文」が鑄込まれる
V	94-4	寛永通寶	II区南1攪乱	22	1.0	1.8	背面に「元」が鑄込まれる
V	94-5	寛永通寶	II区西8攪乱	23	1.0	2.4	
V	94-6	寛永通寶	ピット33	24	1.1	2.6	
V	94-7	寛永通寶	II区南2	24	1.3	3.1	
V	94-8	寛永通寶	II区北2・3包含層	24	1.1	2.7	
V	94-9	寛永通寶	ピット27	24	1.3	2.7	
V	94-10	寛永通寶	表採	24.5	1.3	2.7	
V	94-11	寛永通寶	I区東3基礎	23	1.1	2.8	
V	94-12	寛永通寶	II区南2北側攪乱			1.3	欠損
V	95-13	祥符通寶	II区東2基礎	24	1.0	2.8	摩滅が激しい
V	95-14	?	I区西1包含層	24	1.5	4.0	最初の「元」のみ確認
V	95-15	一銭	II区南2北側攪乱	23	1.4	3.7	昭和10年発行
V	95-16	二銭	I区東1攪乱	31.5	2.4	14.4	明治13年発行
V	95-17	光緒元寶	I区北1包含層	28	1.1		切断・折り曲げにより欠損

第6章 おわりに

西新町遺跡は北部九州の弥生終末期土器の標識遺跡として古くから著名であるばかりでなく、国内各地からの搬入系土師器の豊富さ、そして半島系土器やカマドに見られる朝鮮半島との関係の深さなどから、国内外で大いに注目を浴びている遺跡である。

第3・4・12次調査の成果から、今回は調査前より古墳時代前期のカマドをもつ住居跡群、そして多量の土師器や半島系土器の出土が予想されたが、調査の結果、その予想に違わず多くのカマド付竪穴住居跡、土師器、半島系土器という貴重な資料を得ることができた。ただ残念な事に、攪乱が著しく検出された遺構に不明瞭な点が多く、それに加えて調査担当者の力量不足も手伝い、多くの曖昧な部分を残す結果となってしまった。しかし報告した遺構・遺物はこれらを補って余りある貴重な成果である。

この貴重な成果をもとに、第13次調査のまとめとして若干の検討を加えたが、これ以外にも西新町遺跡の包括する課題は多い。例えば土師器に関する問題、これについては遺構の時期や遺跡の性格付けを行う上で根本的な検討課題であるが、担当者の怠慢から今回は全くふれる事ができなかった。特に外来系土師器の普及過程や、在地生産品と搬入品との関連、土器編年などは重要であり、今後の検討課題として残す結果となった。

また、かねてから注目されている西新町遺跡の生業についても大きな検討課題である。例えば多種多量の漁労具の出土からは玄海灘を舞台にした活発な漁業を連想させるし、第5次調査で出土した板状鉄斧や第12次調査で出土した韃の羽口からは鉄生産が想定される。また第4・12・13次調査出土の玉砥石、第12次調査出土のガラス勾玉鋳型、石製玉原石や未製品、第12・13次調査出土のガラス小玉鋳型は、ガラスや石を材料とした装飾類の生産を裏付ける。さらに国内外からの搬入系土器の豊富さに加え、博多湾沿岸に位置するという地理的環境から幅広い交易活動が想定され、西新町遺跡を「市」として見る向きもある。このような西新町遺跡の生業関連についても深く追求する必要がある。

そして、今まで顧みられることがほとんど無かった近世黒田藩の窯業生産に関する課題もある。筑前高取焼東皿山窯、西皿山窯は存続期間が長かったにもかかわらず、その実態については不明な点が多い。今回検討を行った陶器類は、これまで東皿山窯では生産されていないと思われていたものだけに、その意義は重要な意味をもつものである。文献や伝世品からの追求だけでなく、出土品からのアプローチも今後は必要であろう。

このように、西新町遺跡に残された課題は多いが、幸いにして修猷館高校改築に伴う西新町遺跡の発掘調査は今後もまだ続く予定であり、それによって得られた新たな知見はこうした課題を解明する糸口となるに違いない。

最後になりましたが、調査・報告書作成では多くの方々から多大なるご助言、ご協力を賜り、あらためてここでお礼を申し上げるとともに、こうした皆様のご期待に添えない結果となってしまった事に調査担当者としての力量不足を痛感し、その不備を深くお詫び申し上げます。また今回の報告について多くの方々からの忌憚なきご叱正をお願い致します。

圖 版



1. 調査区遠景 (南西から)



2. 調査区全景 (南から)



1. I区全景空中写真（南から）



2. II区全景空中写真（東から）



1. 1号土坑 (南から)



2. 2号土坑 (南から)



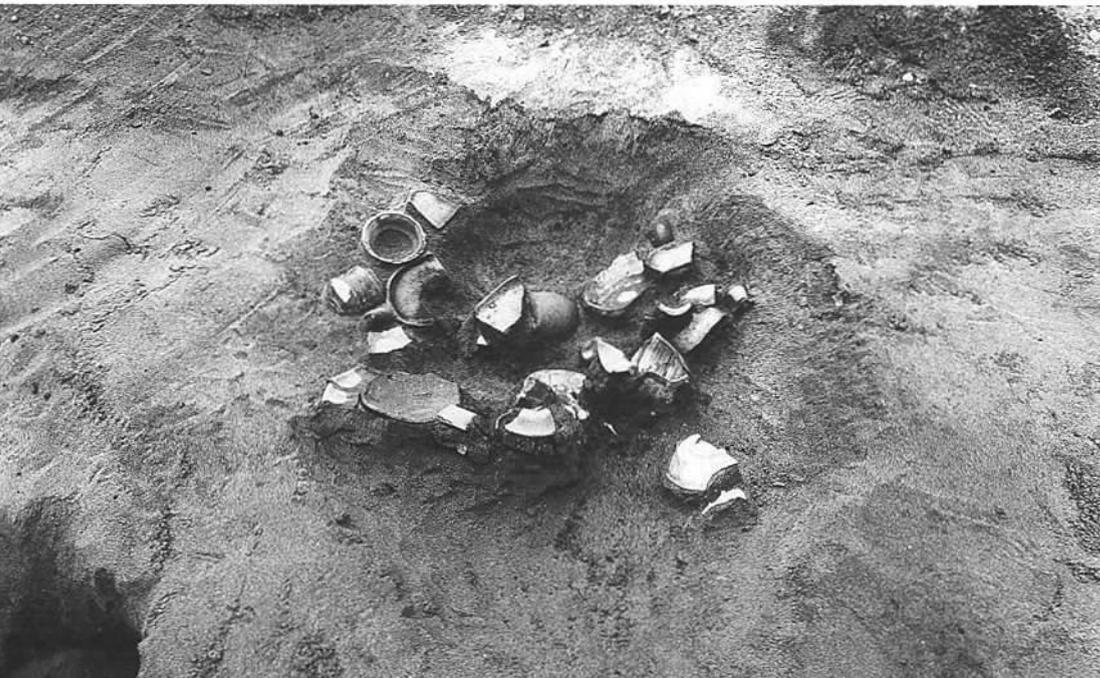
3. 3号土坑 (西から)



1. 4号土坑（東から）



2. 5号土坑（北から）



3. 6号土坑（南から）



1. 7号土坑 (東から)



2. 8号土坑 (北から)



3. 9号土坑 (北から)



1. 10号土坑 (南東から)



2. 11号土坑 (東から)



3. 12号土坑 (北西から)



1. 13号土坑 (東から)



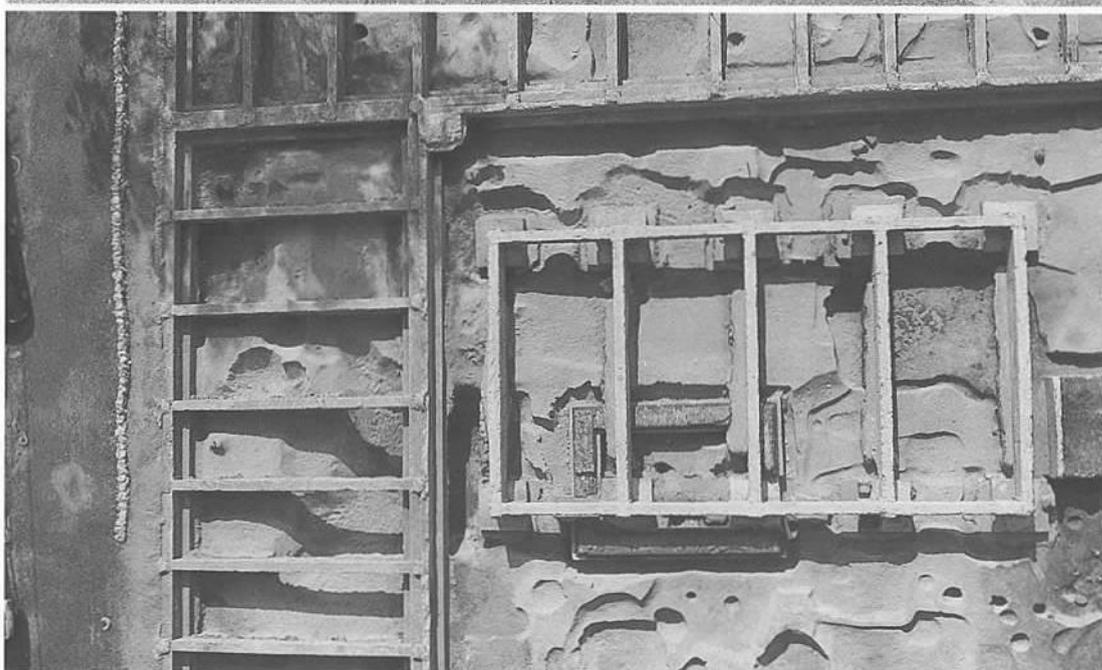
2. 1号溝 (南から)



3. 1号溝断面土層
(東から)



1. 1号埋甕 (東から)



2. 1号落ち込み (上空から)



3. 1号落ち込み
I区東5西壁土層 (東から)



1. 1号旧校舎基礎 (西から)



2. 2号旧校舎基礎 (南から)



3. 3号旧校舎基礎 (北から)



土坑、沟出土土器



1号溝-18



1号溝-26



1号溝-19



1号溝-29



1号溝-21



トレンチ-2



1号溝-22



トレンチ-4

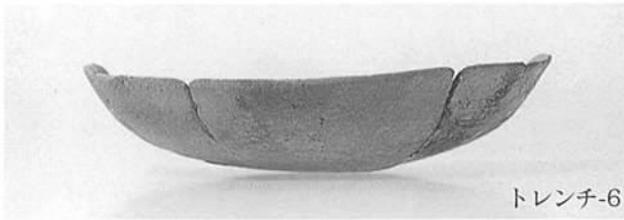


1号溝-25



トレンチ-5

溝、I区南9西壁トレンチ出土土器



溝、落ち込み、ピット、I区包含層出土土器



I 区包-15



I 区包-25



I 区包-16



I 区包-27



I 区包-17



I 区包-46



I 区包-23



I 区包-47



I 区包-24



I 区包-63



I 区包-65



I 区包-89



I 区包-70



I 区包-91



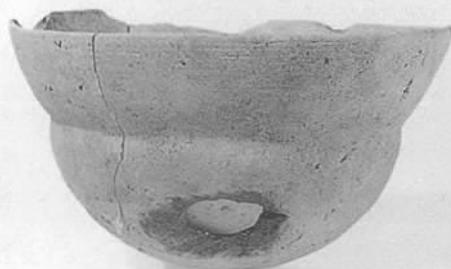
I 区包-82



I 区包-96



I 区包-83



I 区包-84



I 区包-98



I 区包-85



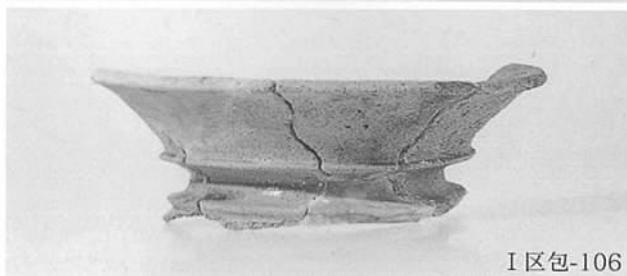
I 区包-99



I 区包-100



II 区包-11



I 区包-106



II 区包-16



I 区包-107



II 区包-20



I 区包-109



II 区包-23



II 区包-10



II 区包-24



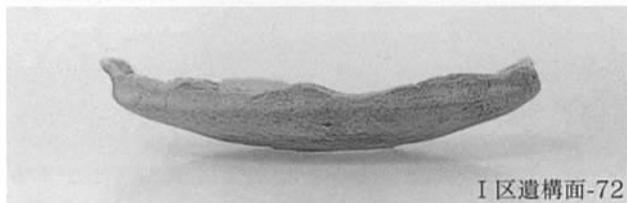
I 区遺構面出土土器



I 区 遗构面-71



II 区 遗构面-9



I 区 遗构面-72



II 区 遗构面-12



I 区 遗构面-73



II 区 遗构面-15



I 区 遗构面-74



II 区 遗构面-17



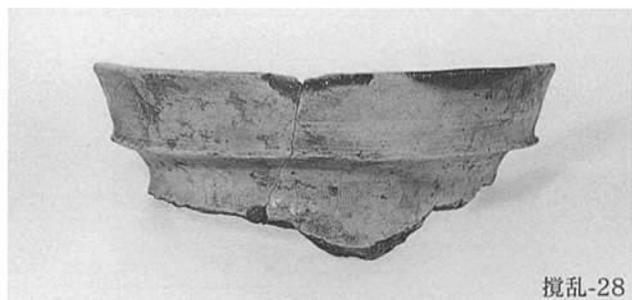
I 区 遗构面-81

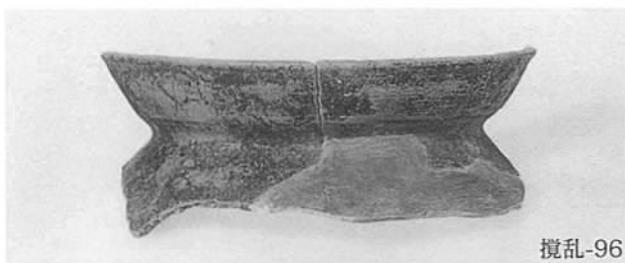


搅乱-10



II 区 遗构面-6





搅乱-96



搅乱-144



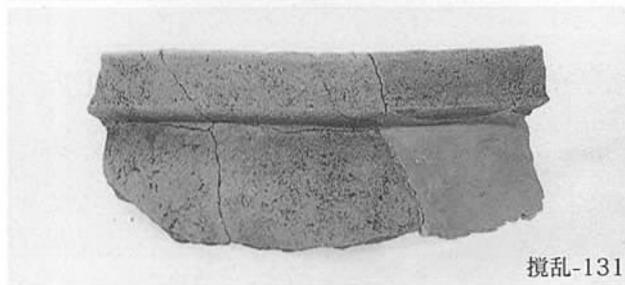
搅乱-123



搅乱-151



搅乱-152



搅乱-131



搅乱-163



搅乱-134



搅乱-168



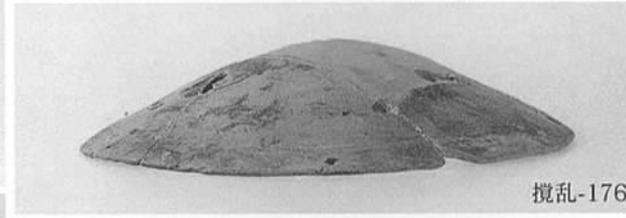
搅乱-135



搅乱-172



搅乱-137



搅乱-176



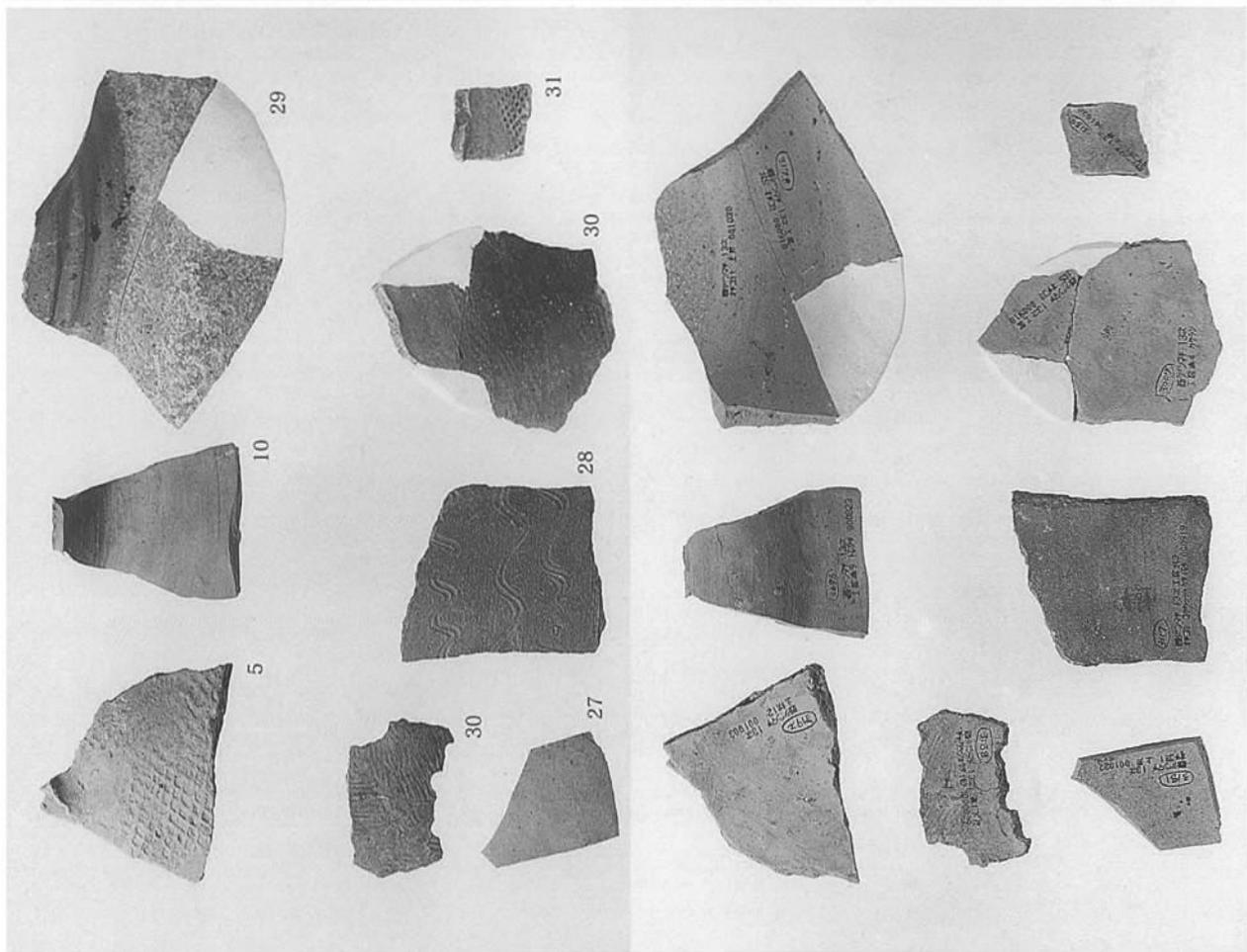
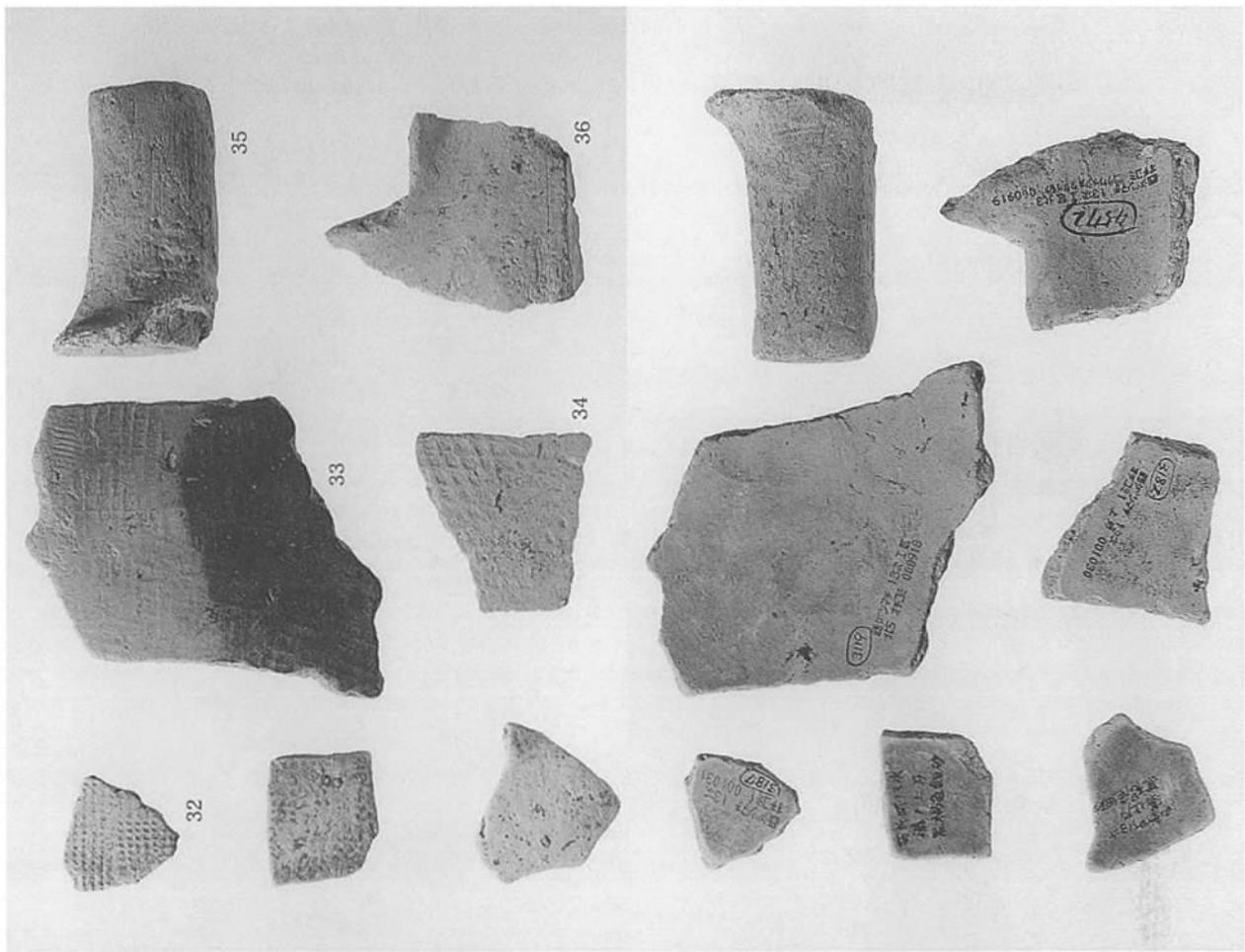
搅乱-138



搅乱-180

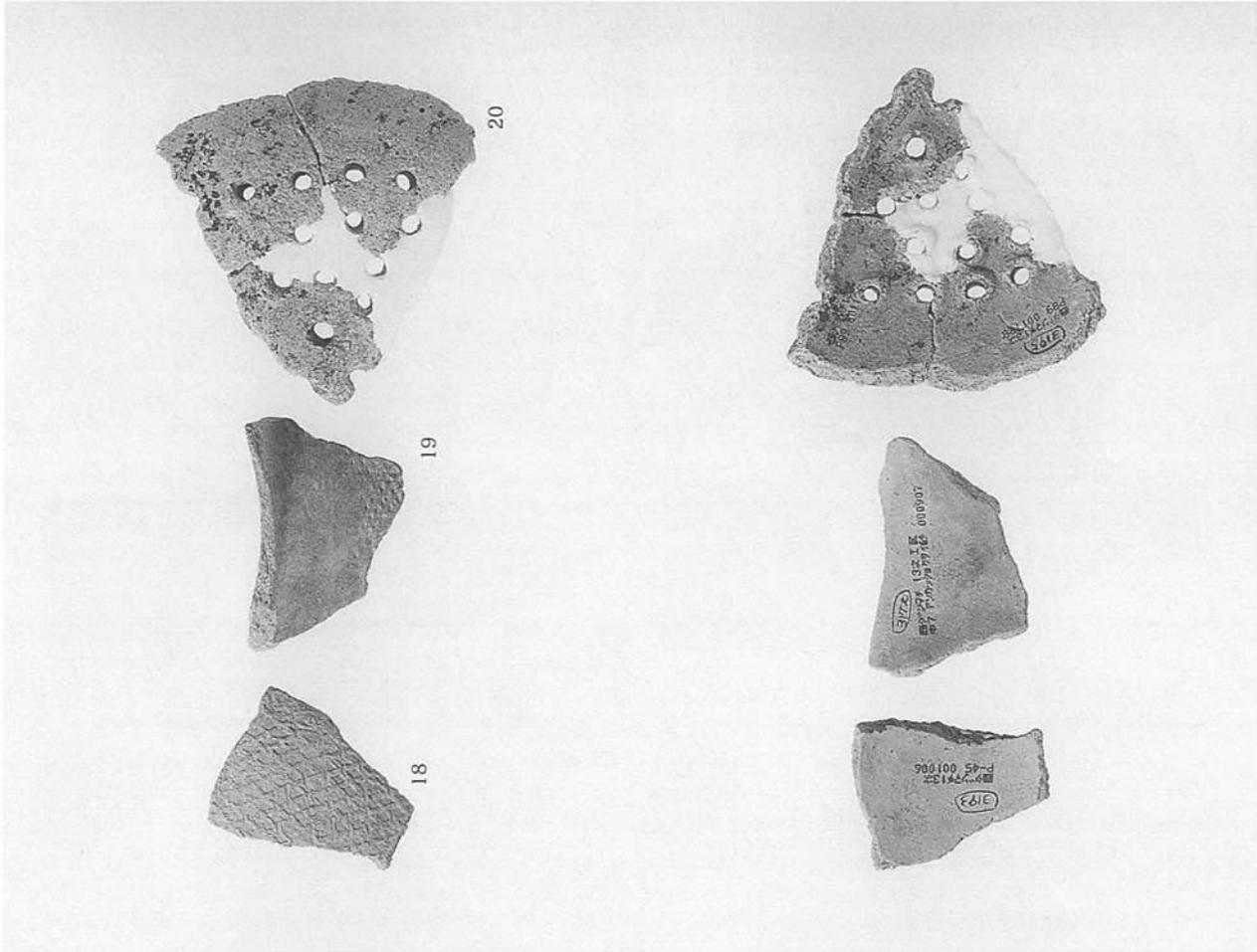


攪乱等、弥生時代土坑出土土器

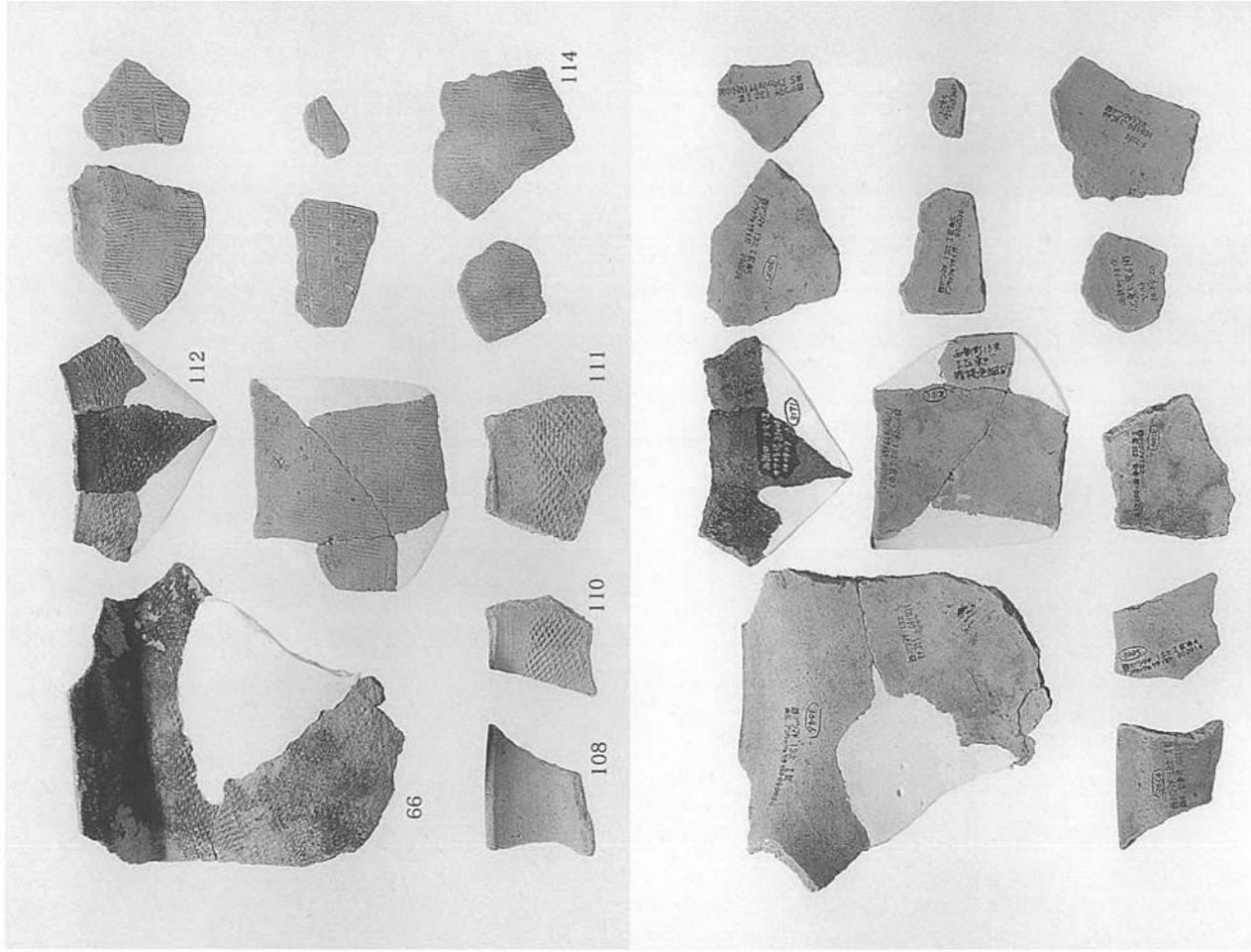


1. 土坑、溝、落ち込み出土半島系土器

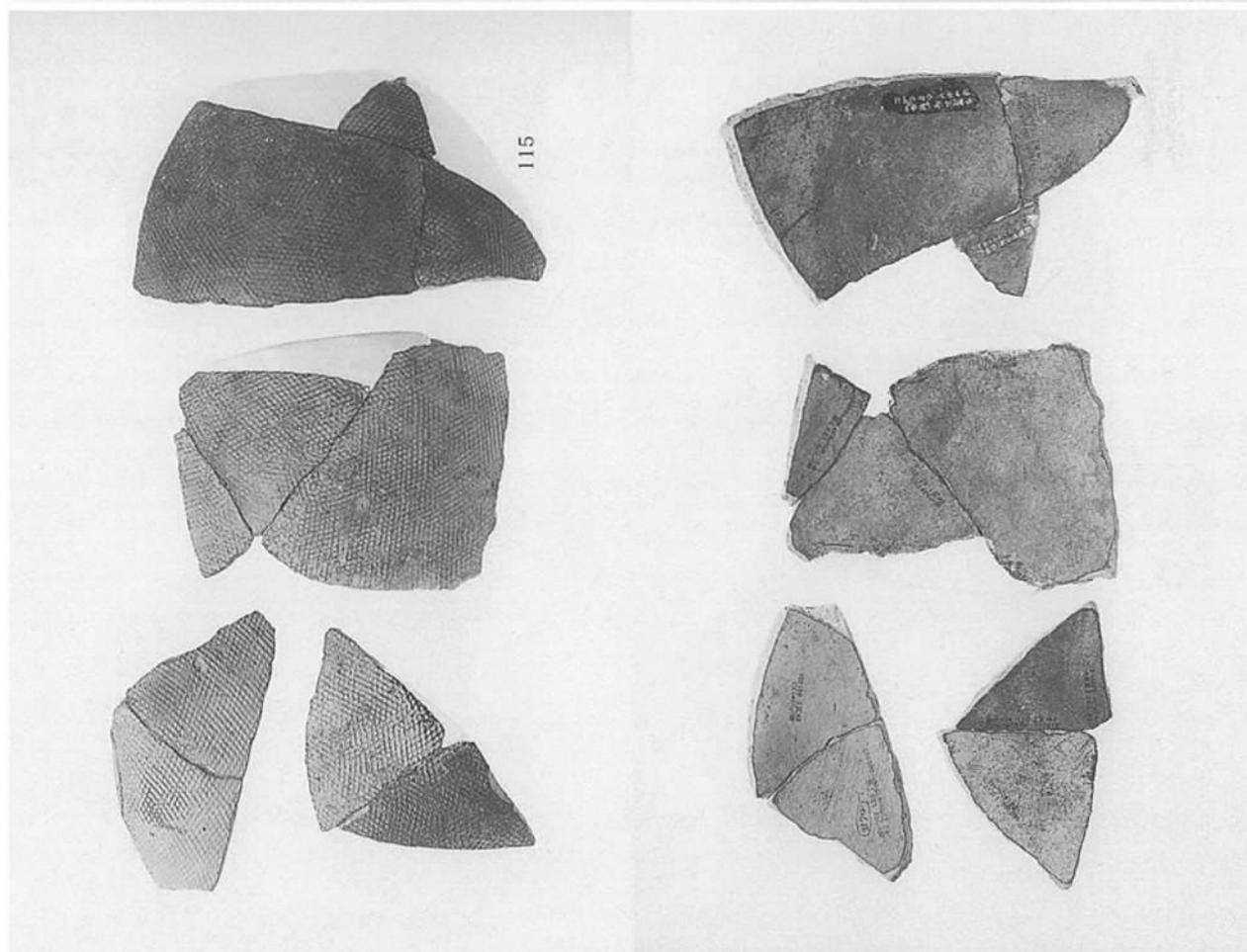
2. 落ち込み出土半島系土器



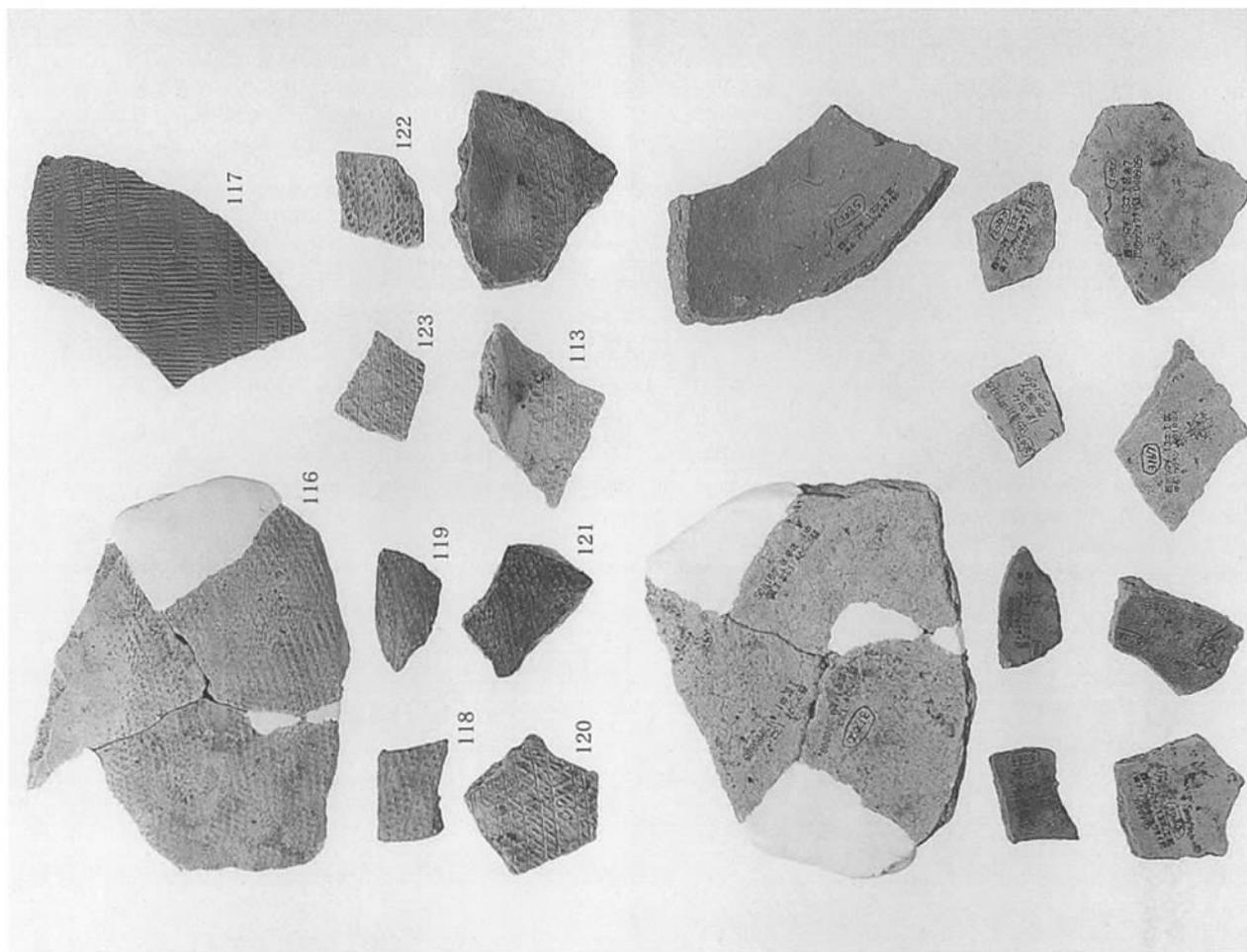
1. ビット出土半島系土器



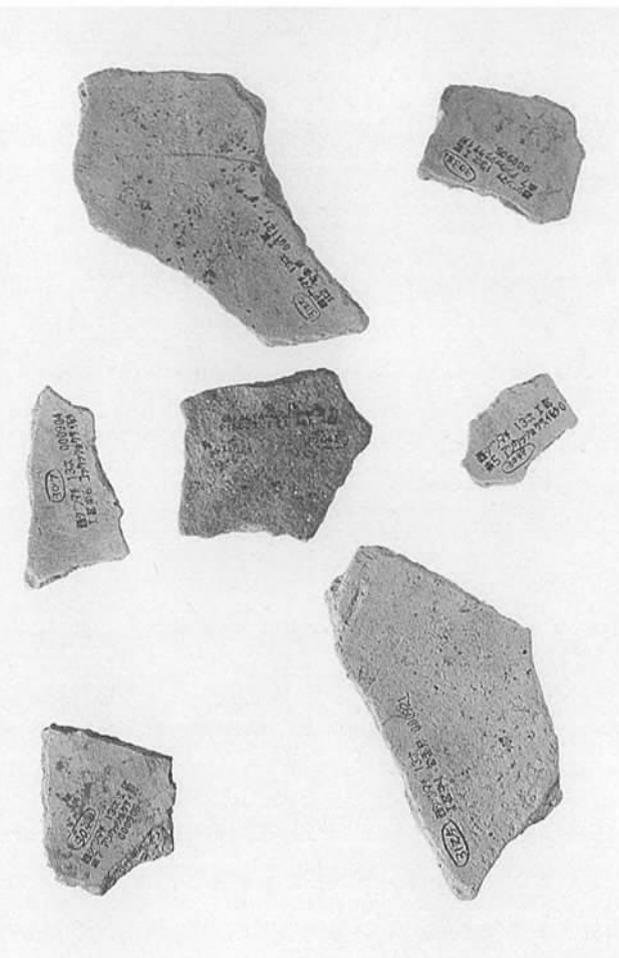
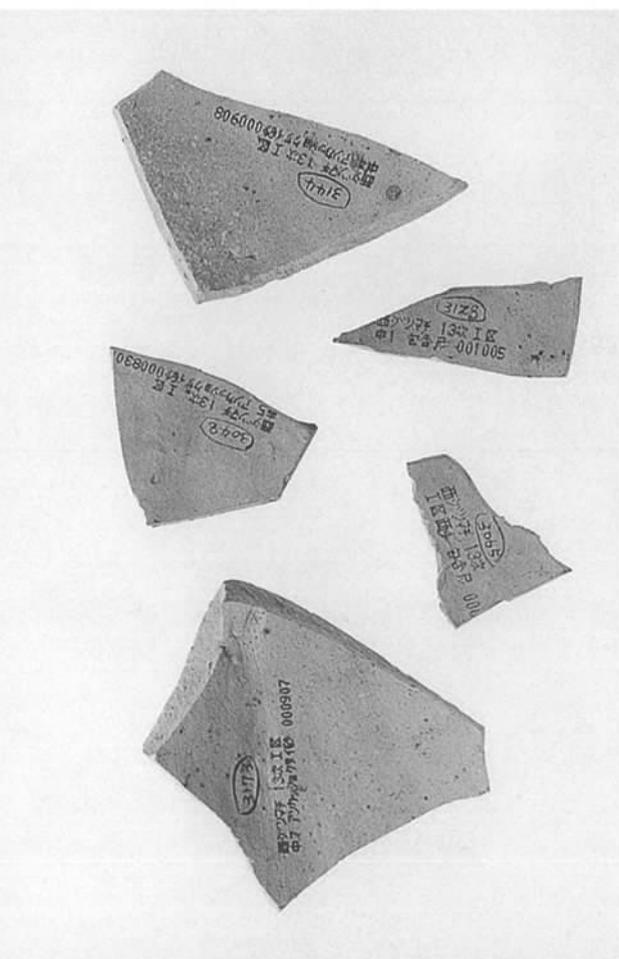
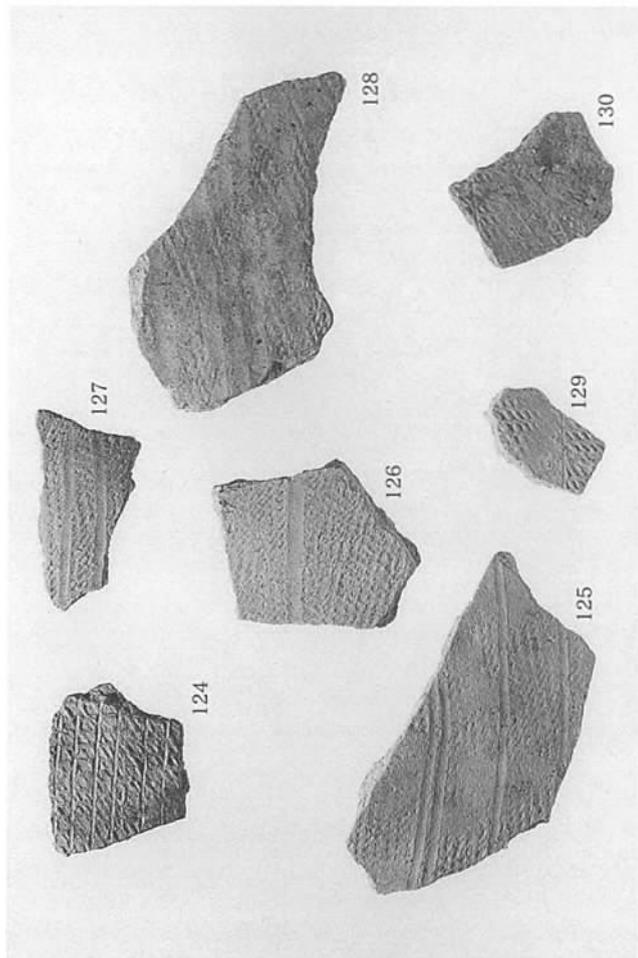
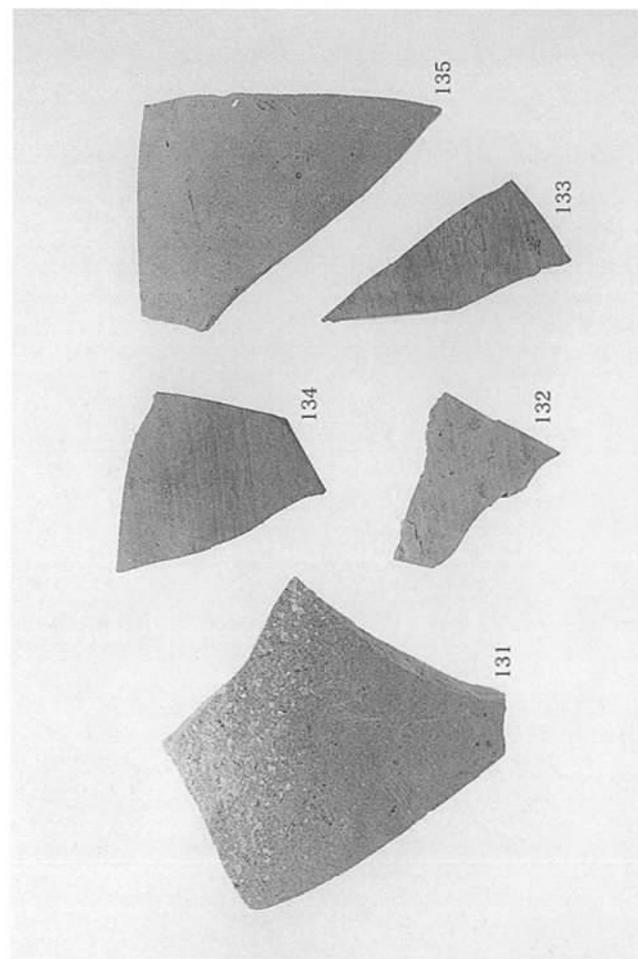
2. I区包合層出土半島系土器①



1. I 区包含层出土半島系土器②

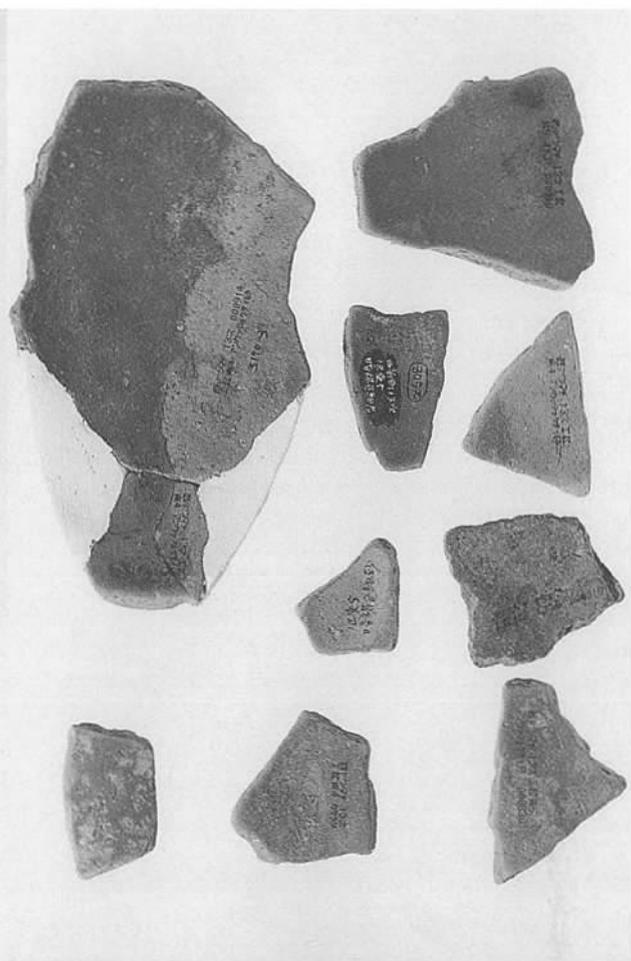
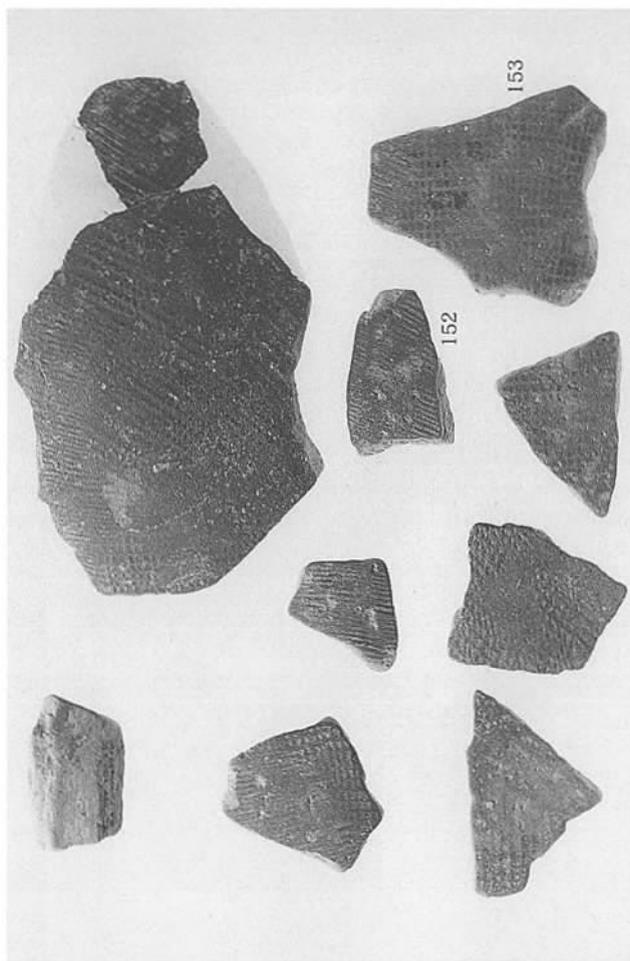


2. I 区包含层出土半島系土器③

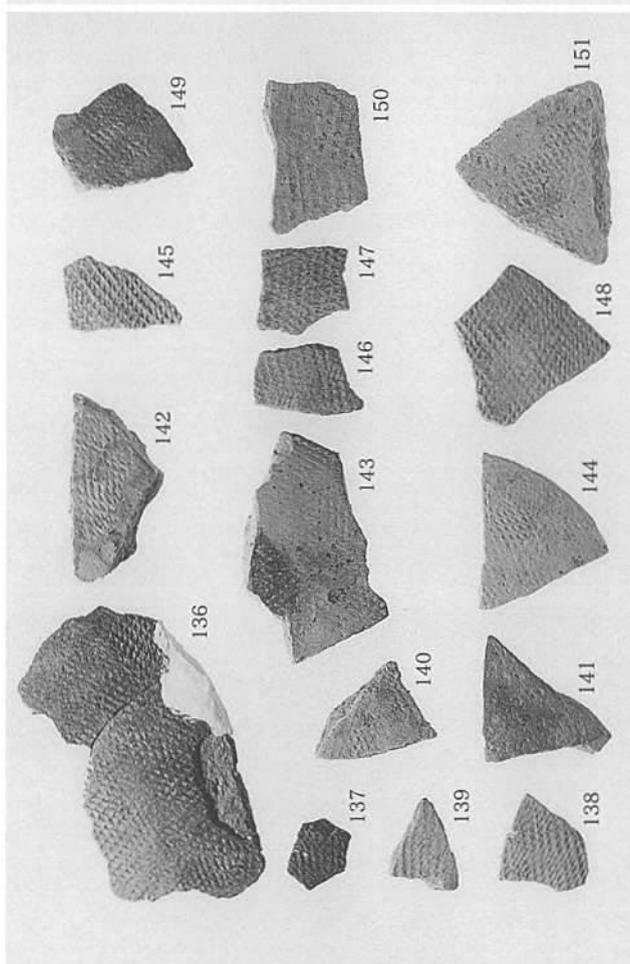


2. I 区包含層出土半島系土器⑤

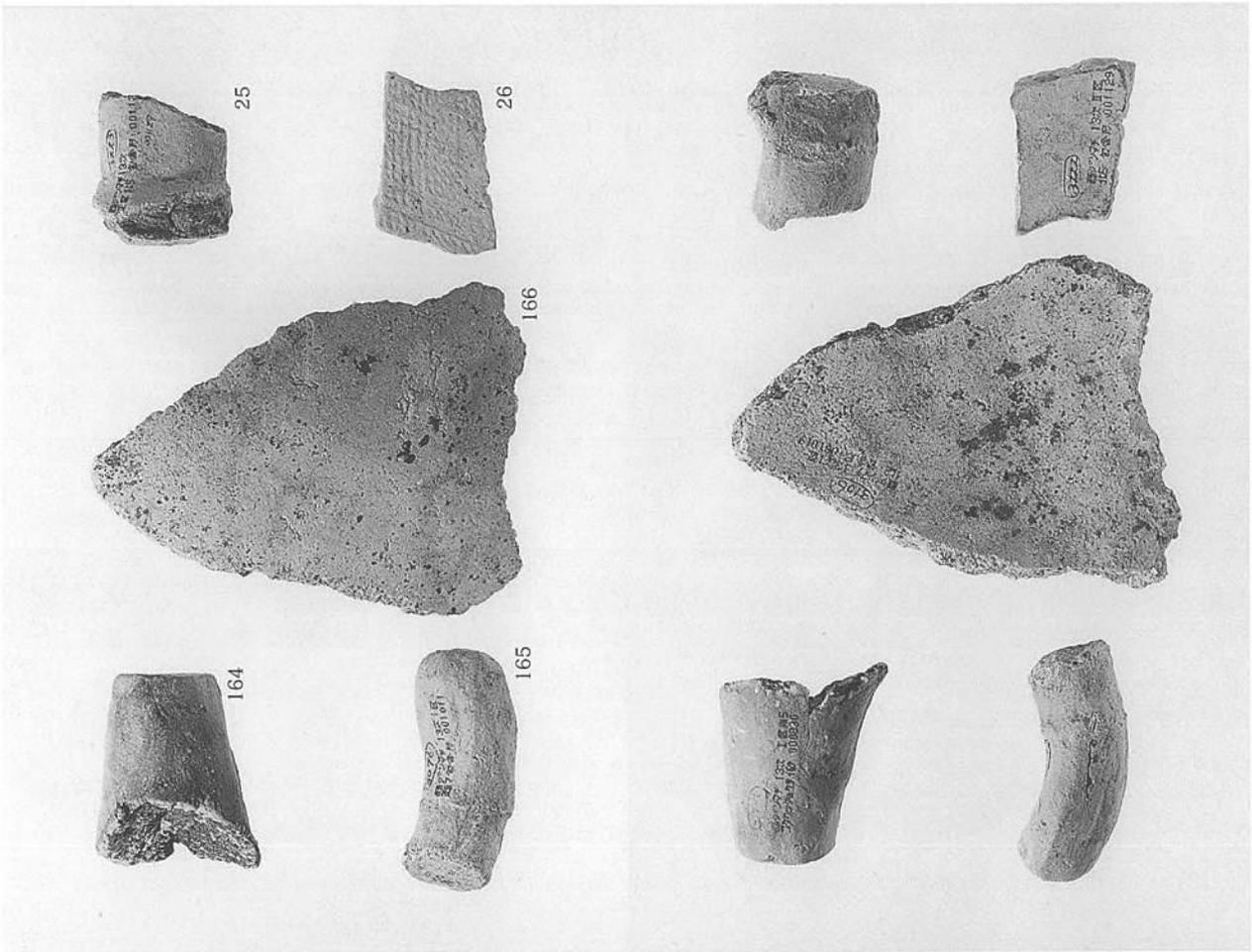
1. I 区包含層出土半島系土器④



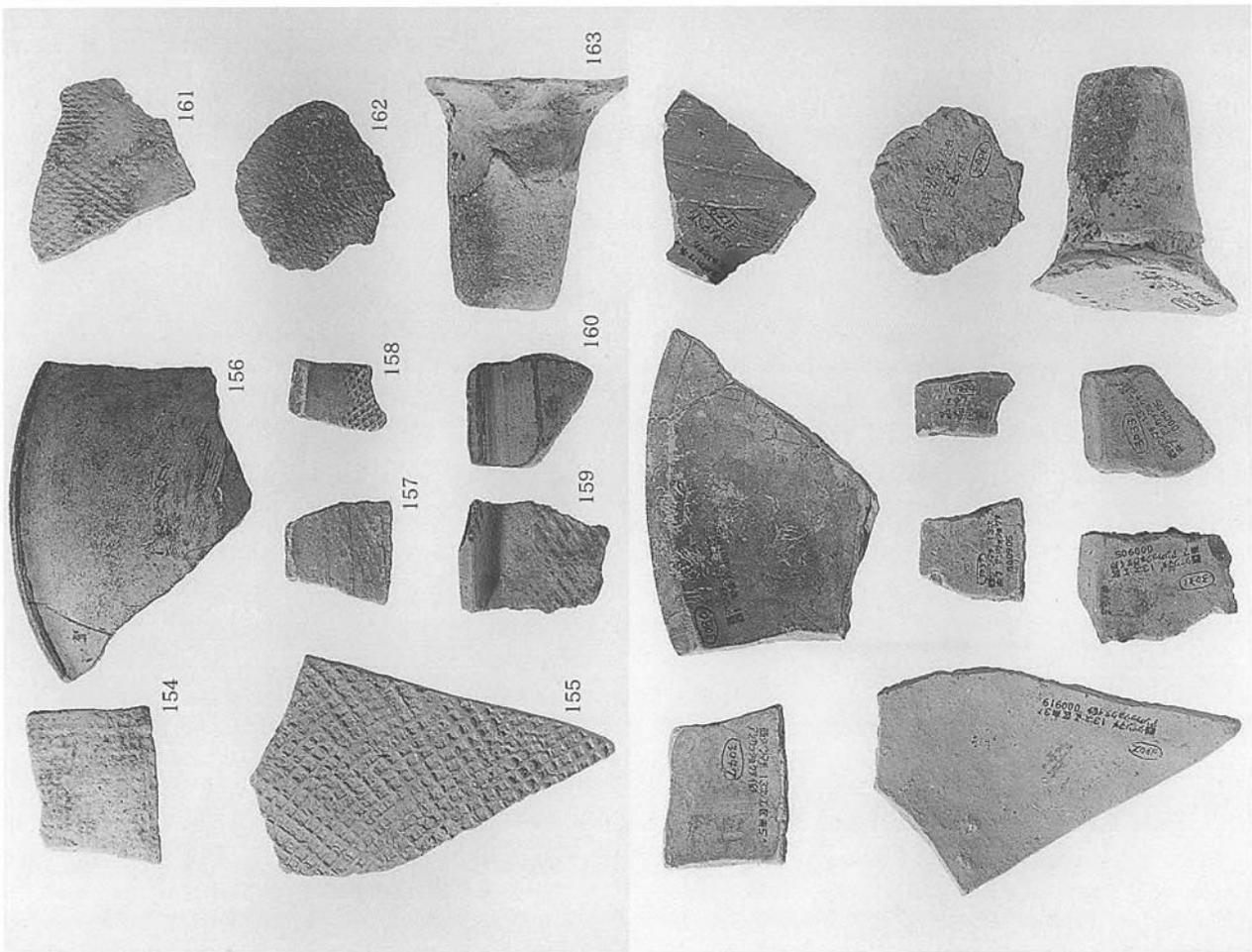
2. I区包含層出土半島系土器⑦



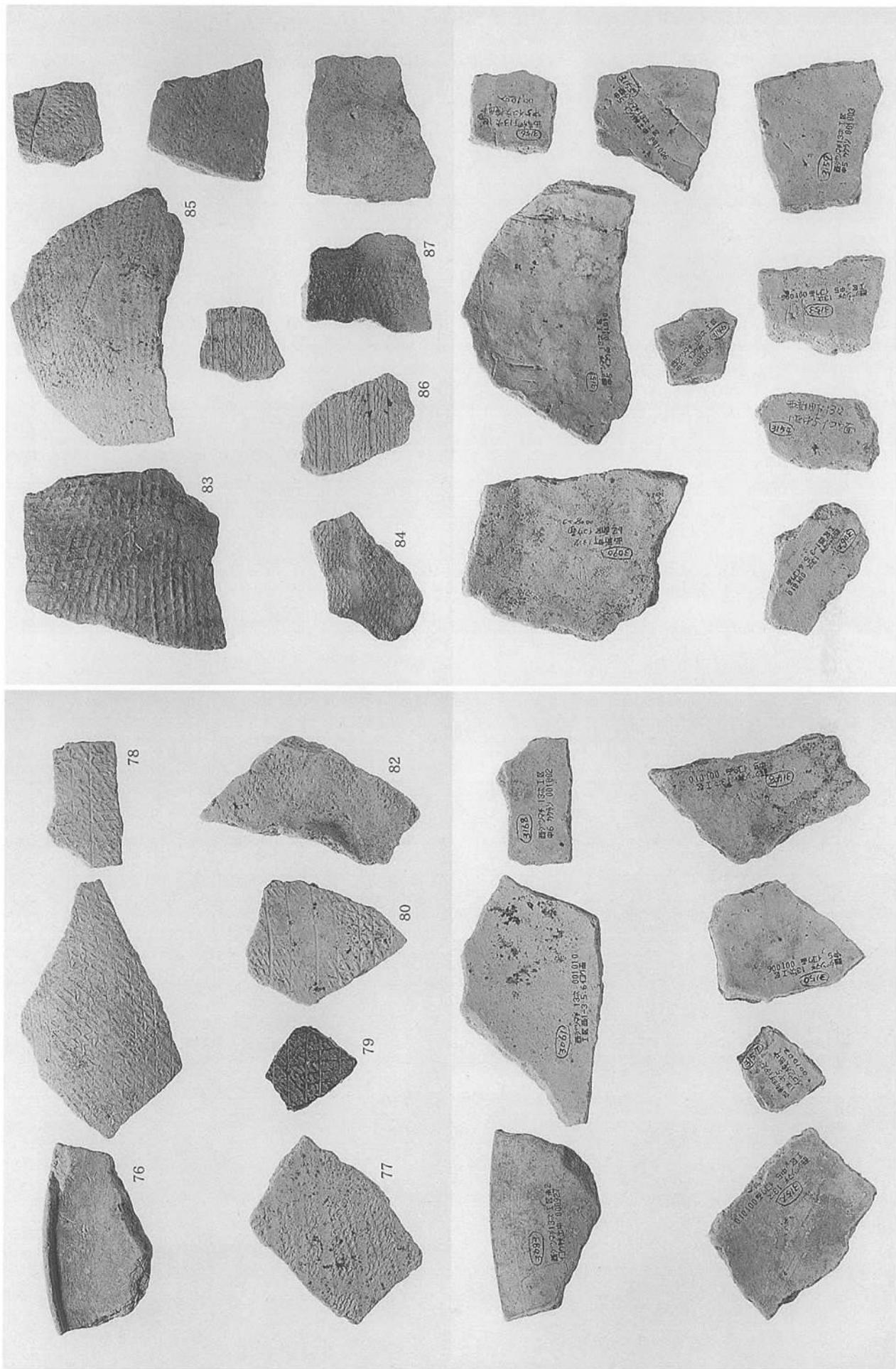
1. I区包含層出土半島系土器⑥



2. I·II区包含層出土半島系土器

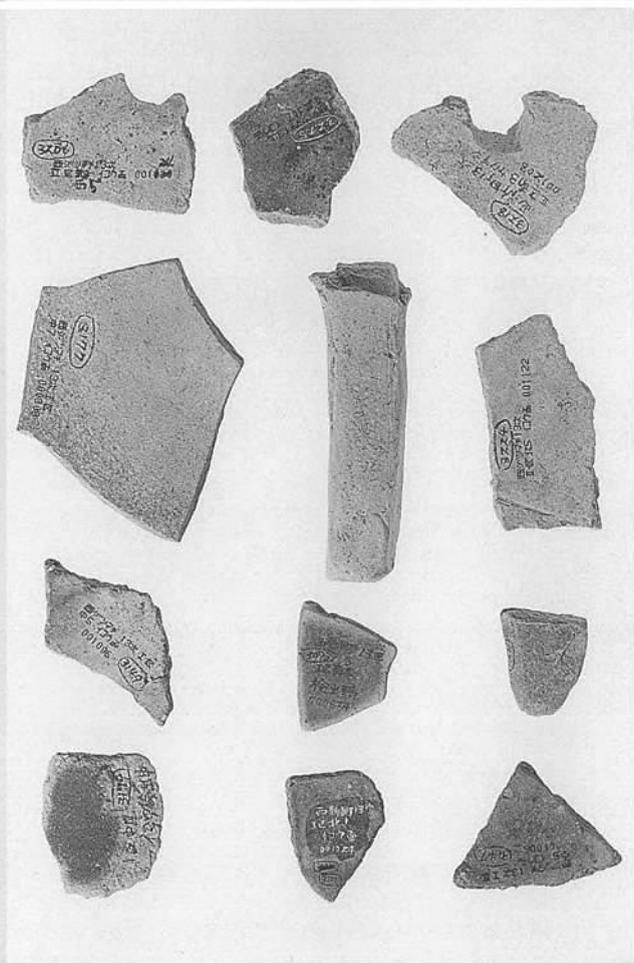
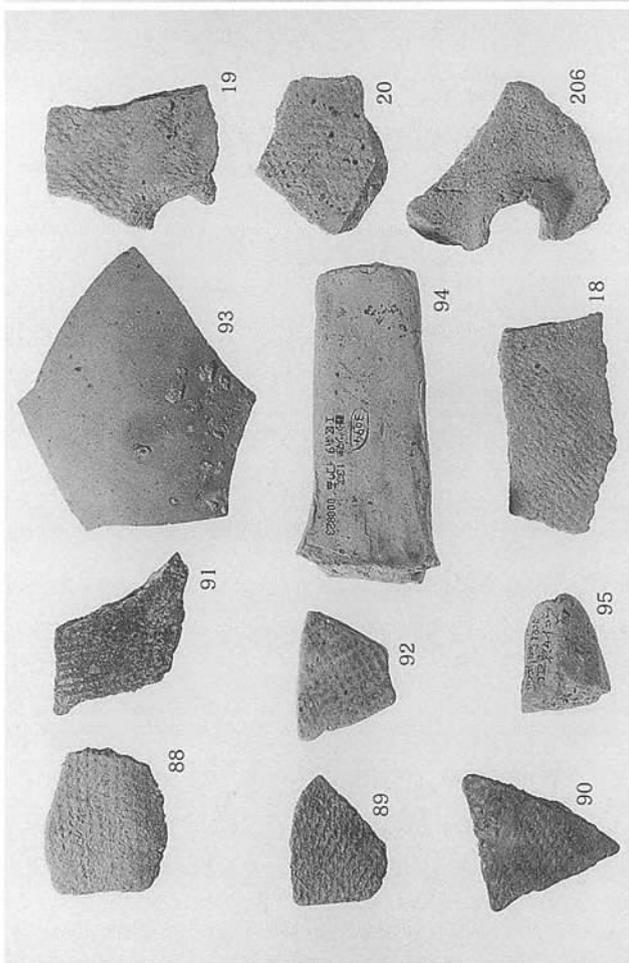
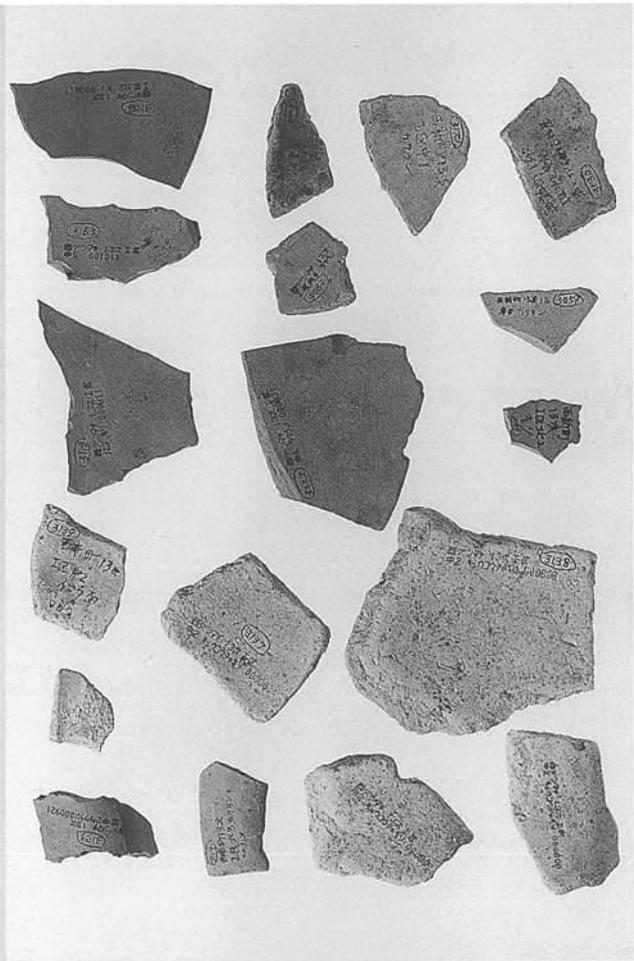
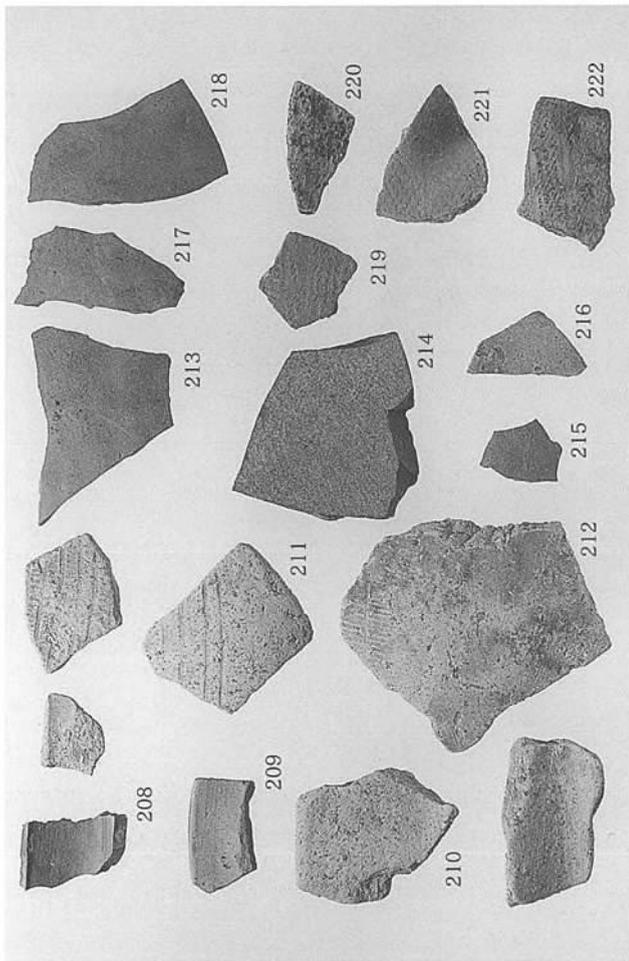


1. I区包含層出土半島系土器⑧



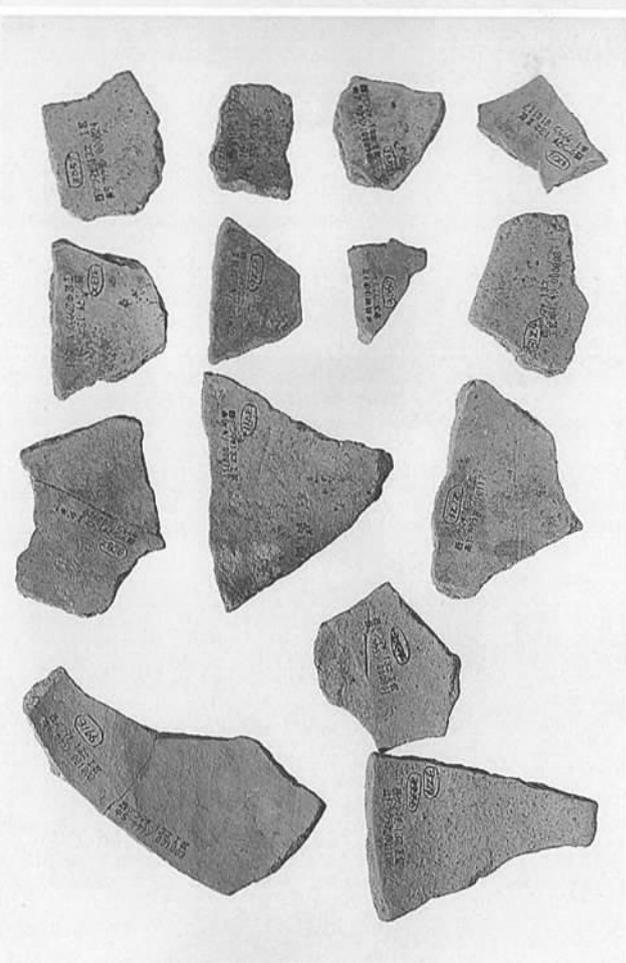
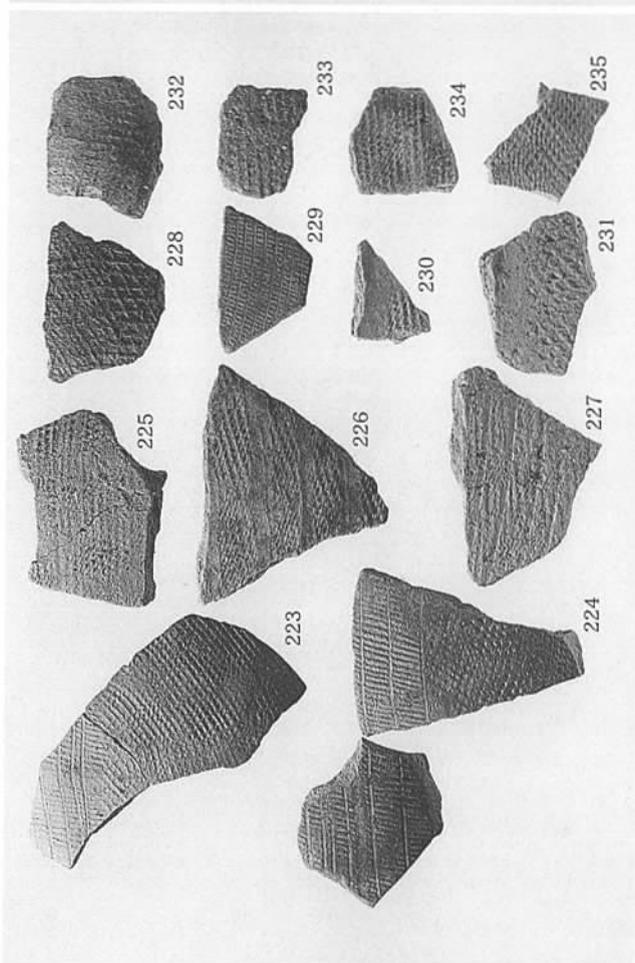
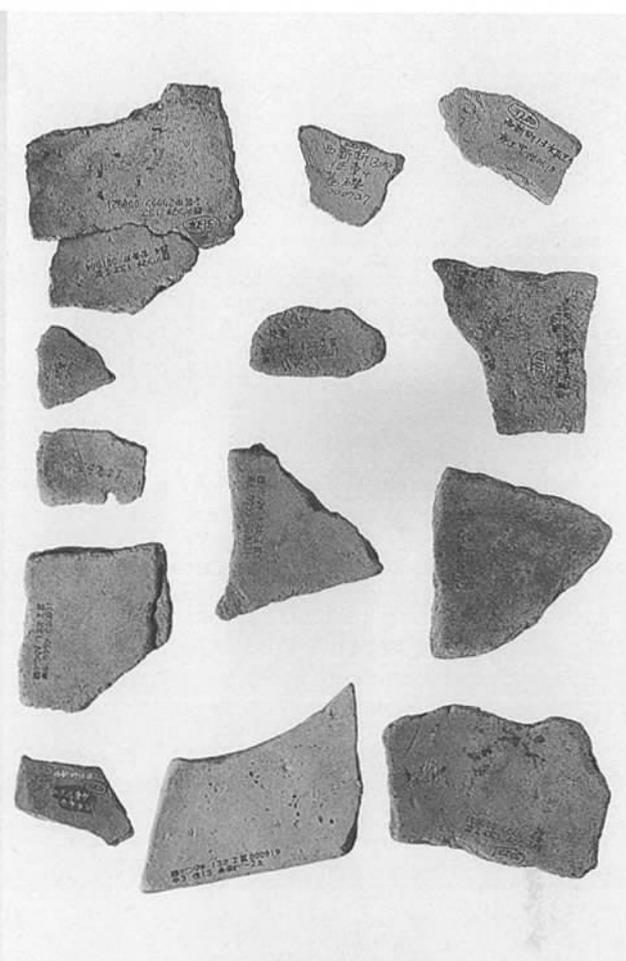
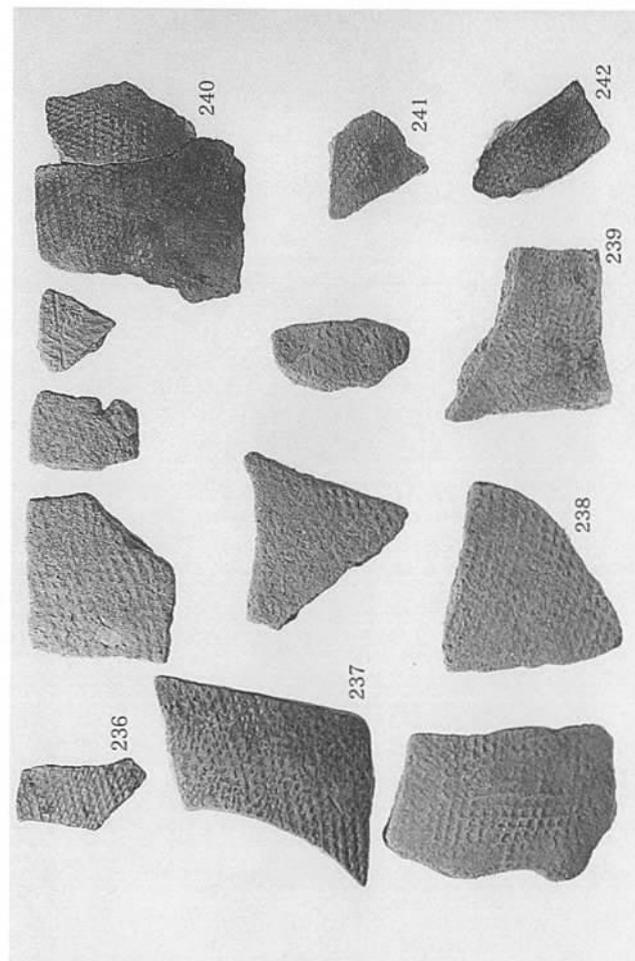
2. I 区遺構面出土半島系土器②

1. I 区遺構面出土半島系土器①



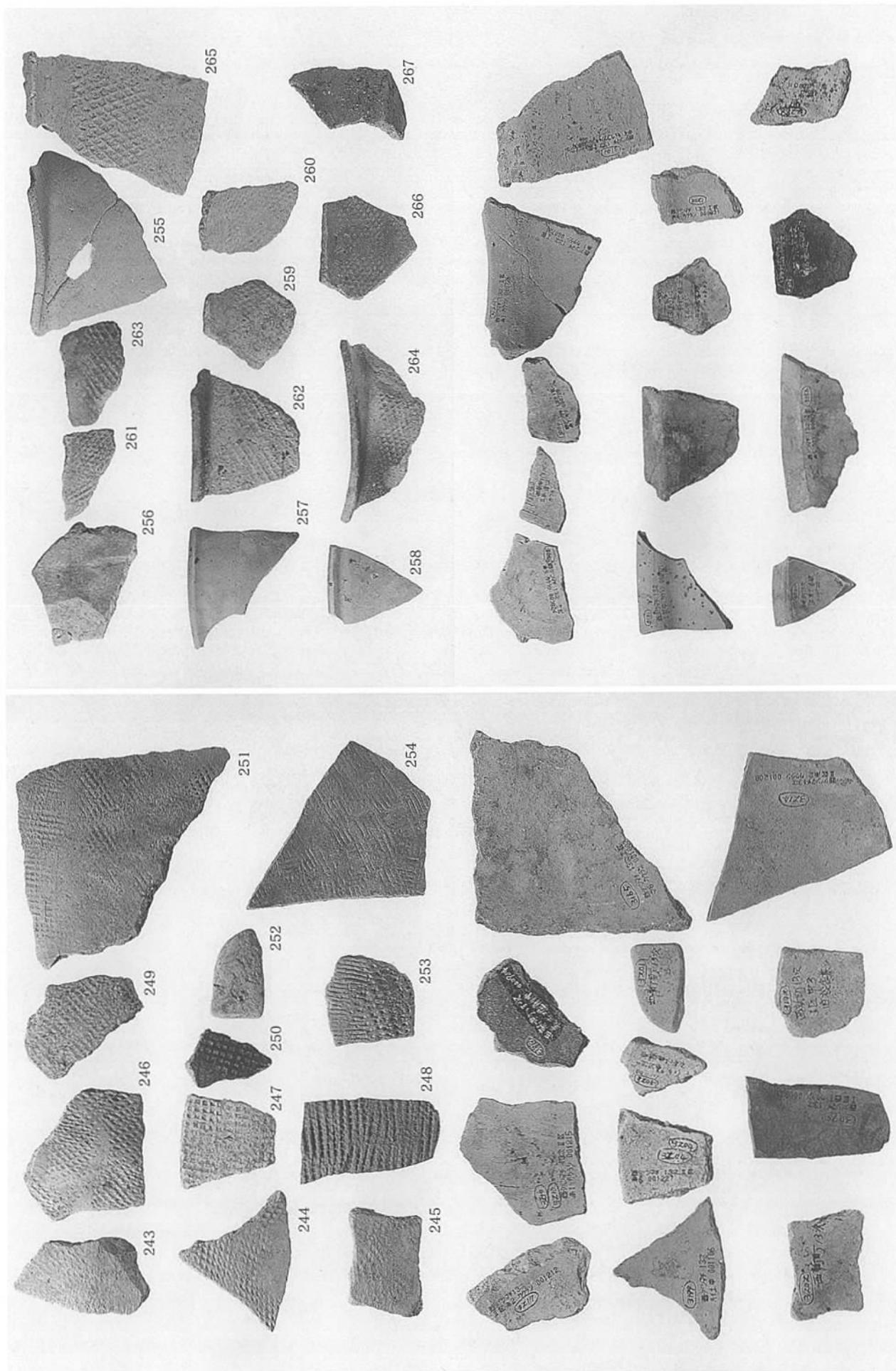
1. I·II区遺構面、攪乱等出土半島系土器

2. 攪乱等出土半島系土器①



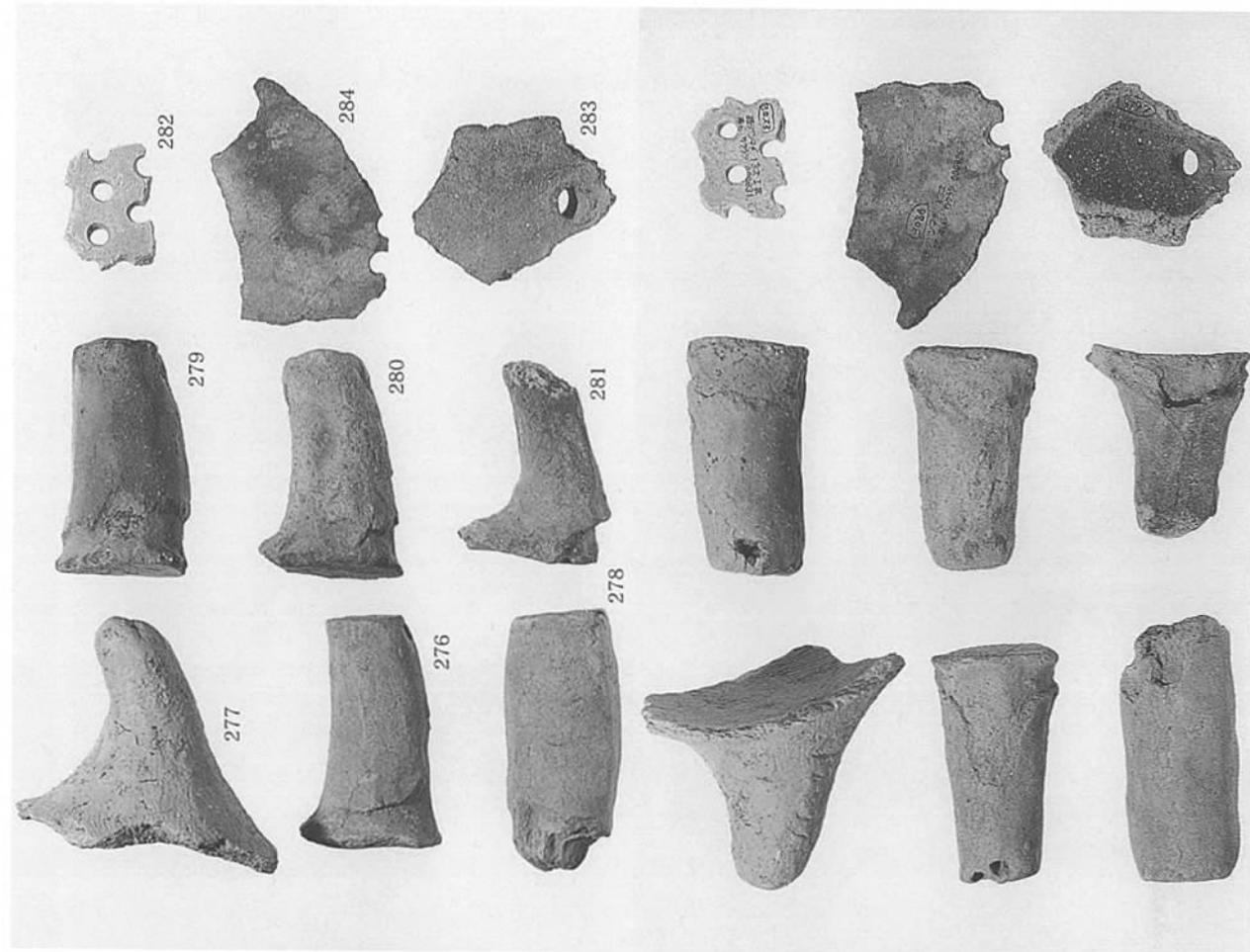
2. 攪乱等出土半島系土器③

1. 攪乱等出土半島系土器②

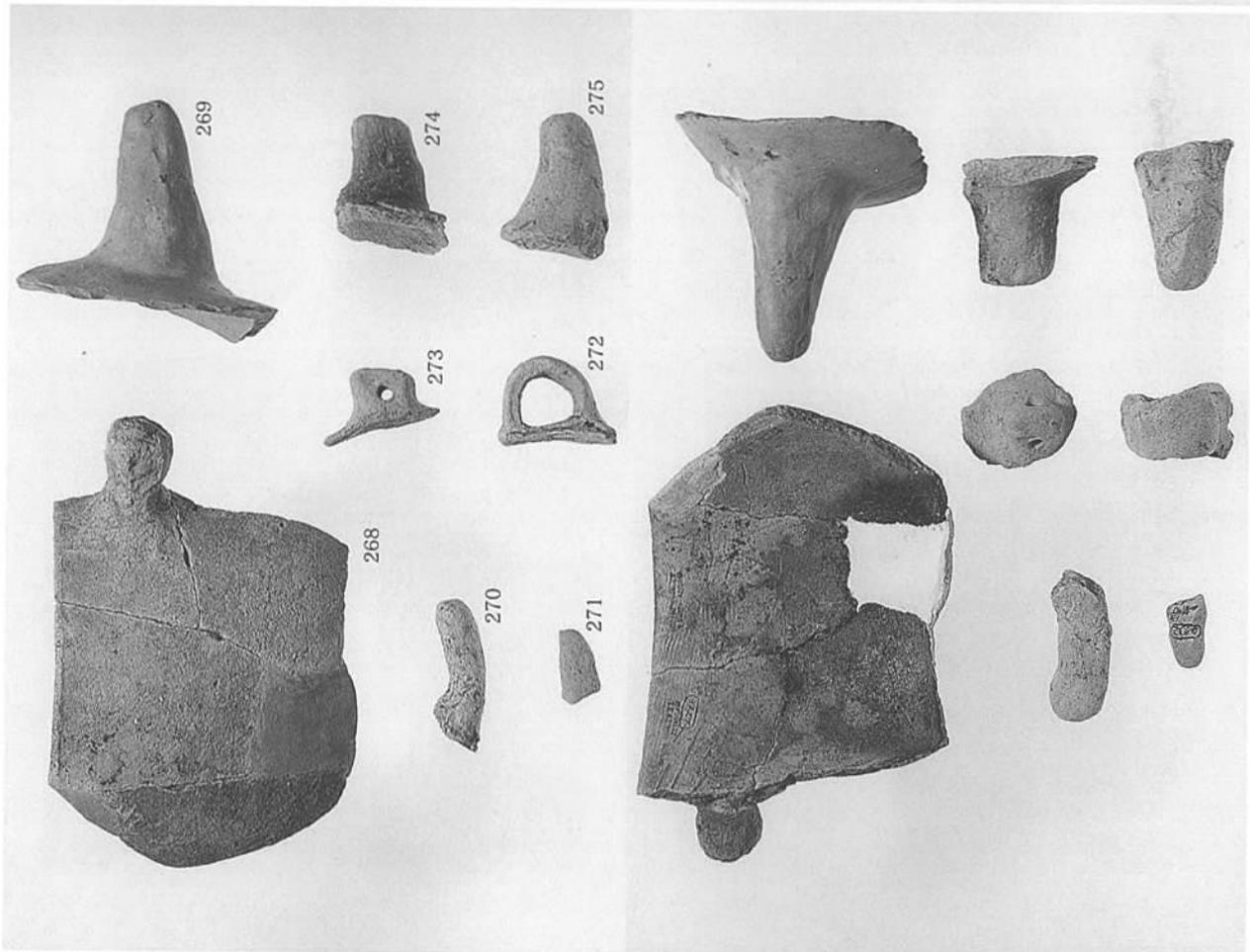


1. 搅乱等出土半島系土器④

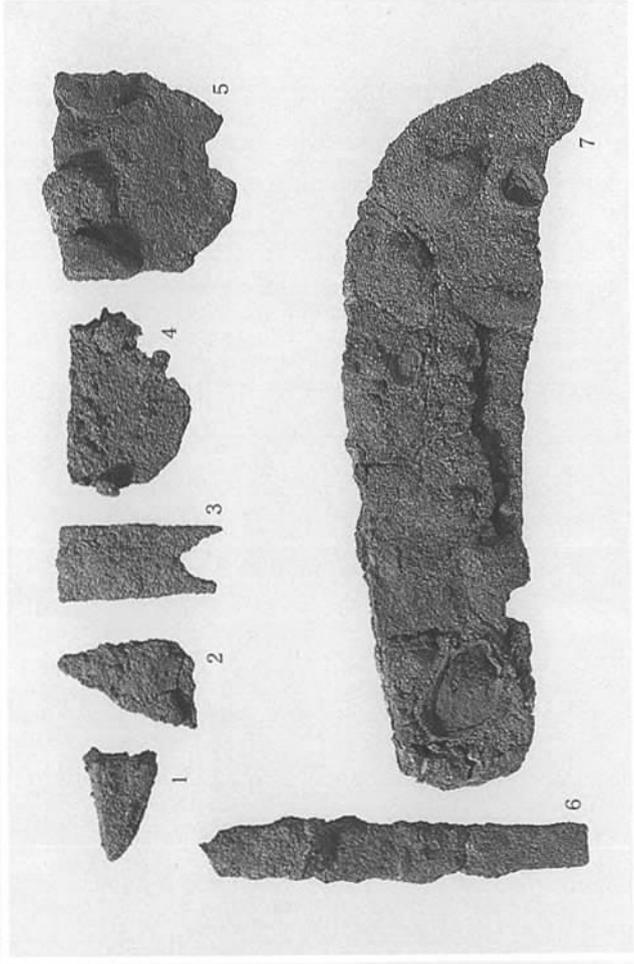
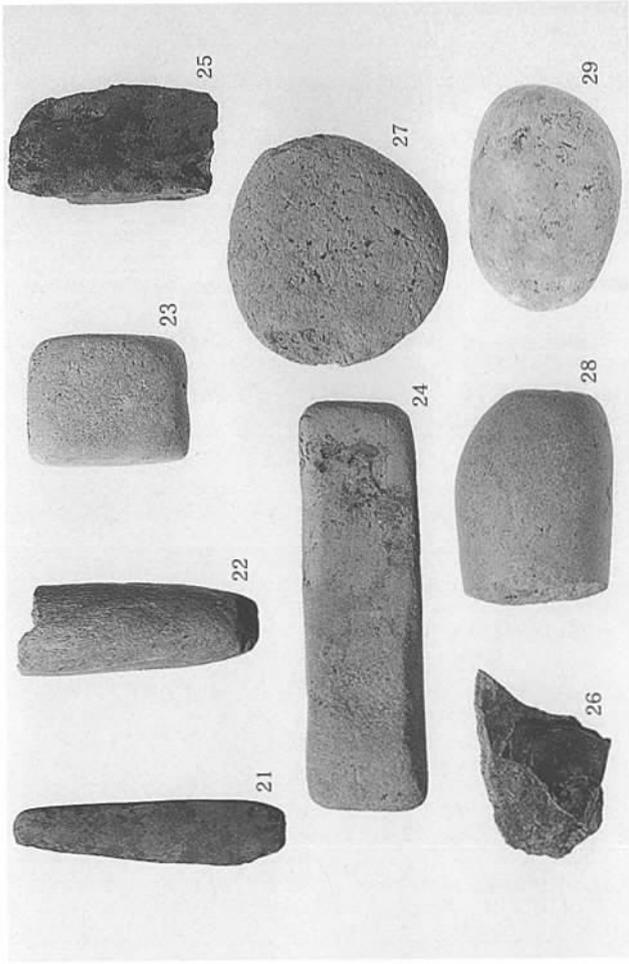
2. 搅乱等出土半島系土器⑤



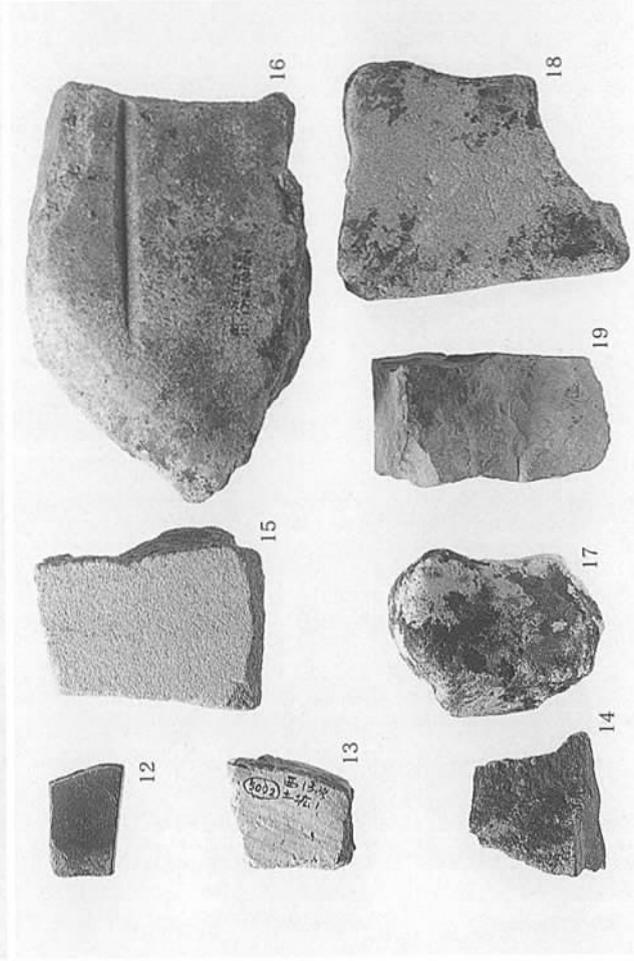
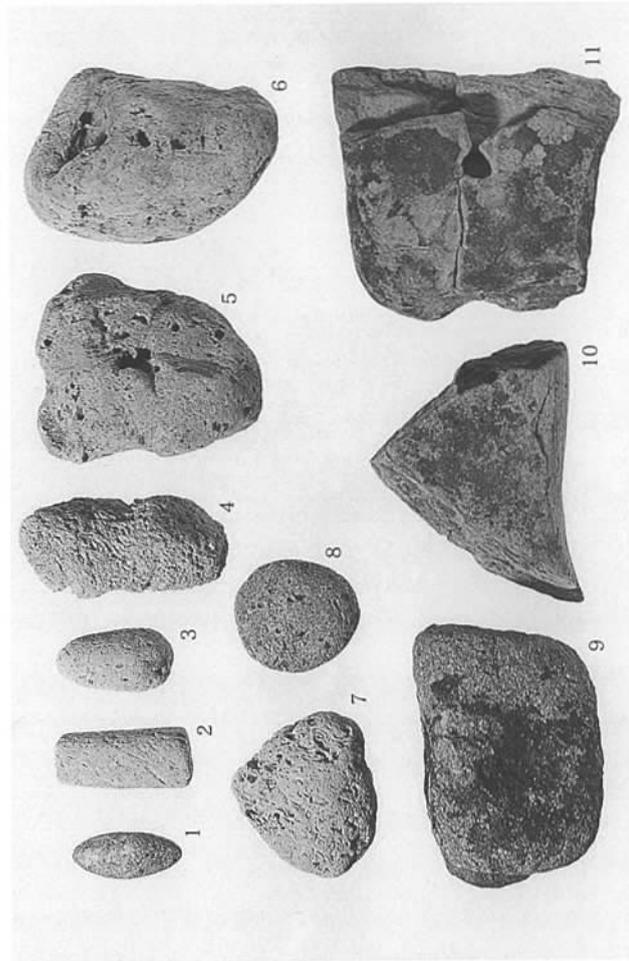
2. 攪乱等出土半島系土器⑦



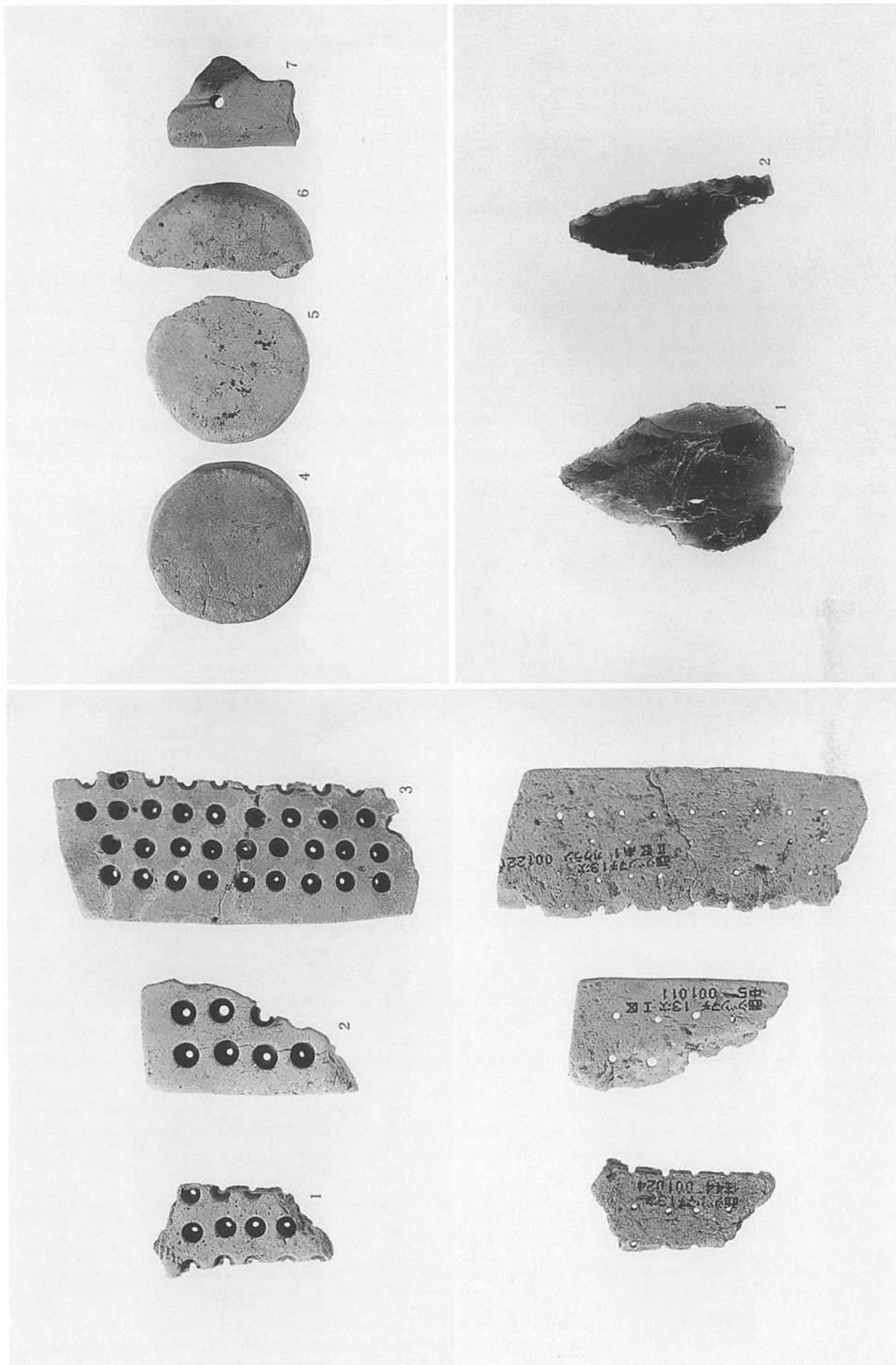
1. 攪乱等出土半島系土器⑥



3. 石製品③
4. 鉄製品

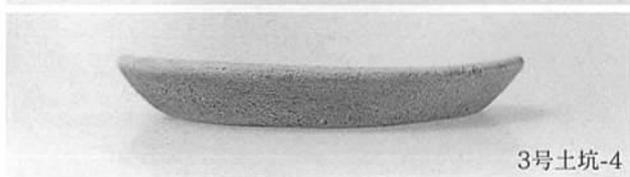
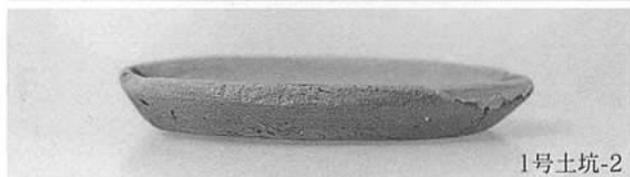
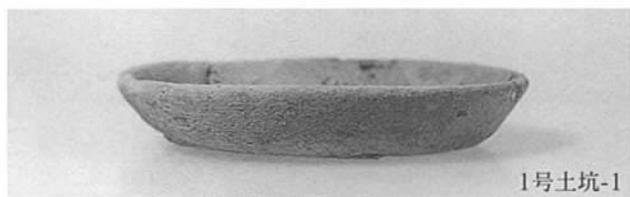


1. 石製品①
2. 石製品②



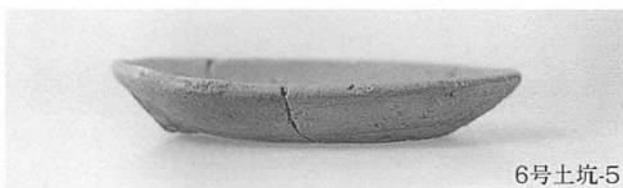
1. 土製品①

2. 土製品②
3. 弥生時代の石製品





5号土坑-26



6号土坑-5



6号土坑-2



6号土坑-6



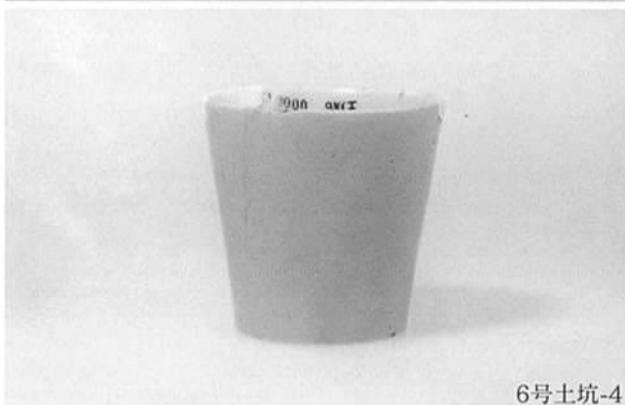
6号土坑-8



6号土坑-3



6号土坑-9



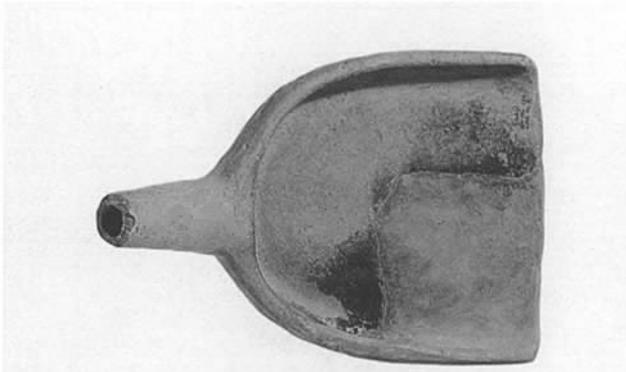
6号土坑-4



6号土坑-11



6号土坑-12



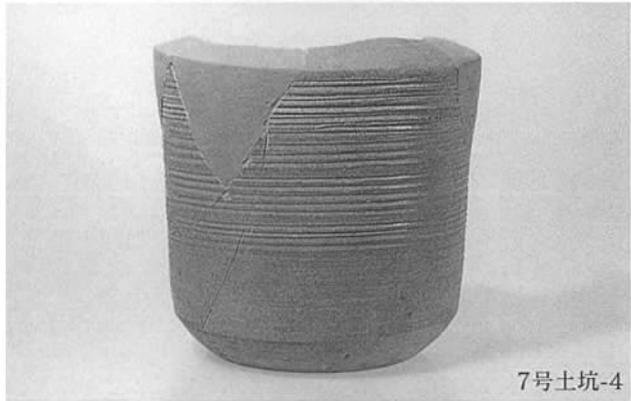
7号土坑-2



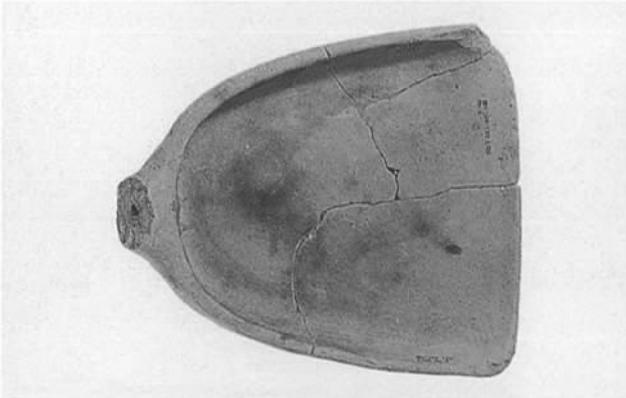
6号土坑-13



7号土坑-3



7号土坑-4



6号土坑-14



7号土坑-5



6号土坑-15



ピット-1



ピット-4



ピット-6



ピット-7



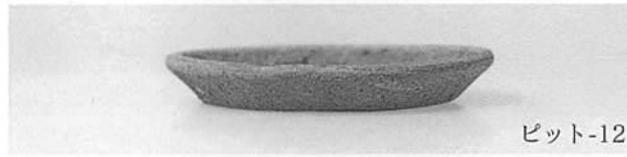
ピット-8



ピット-9



ピット-10



ピット-12



ピット-13



ピット-14



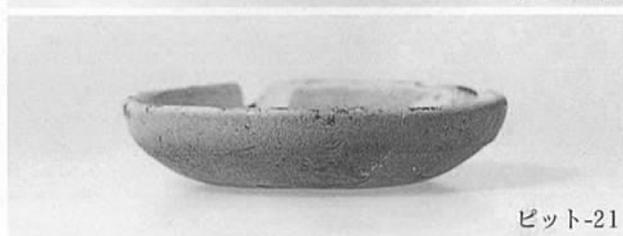
ピット-15



ピット-18



ピット-19



ピット-21



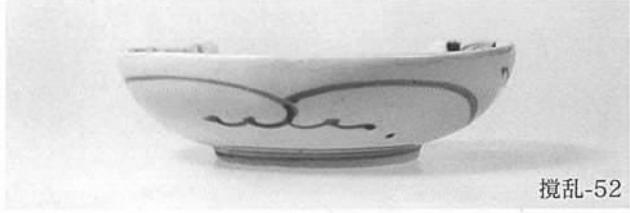
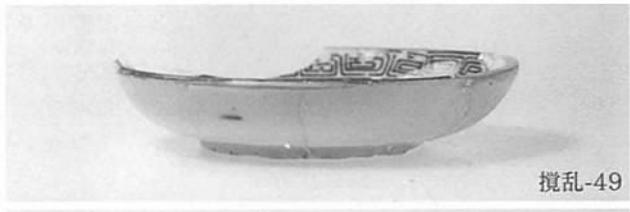
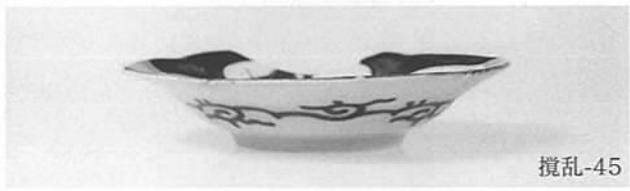
ピット-37



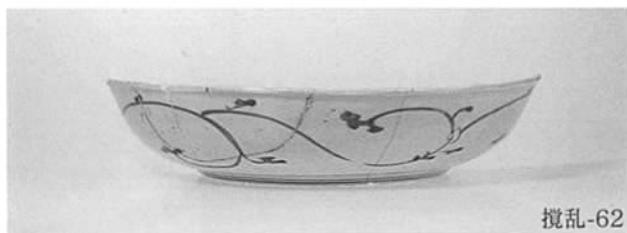
ピット-38



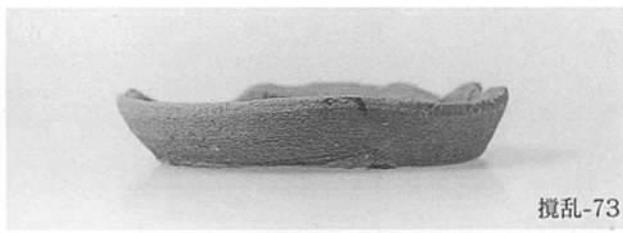
ピット-41



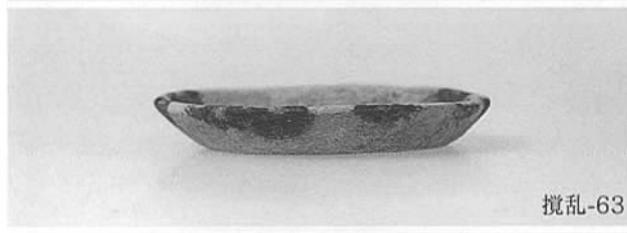
ピット、その他出土陶磁器等



攪乱-62



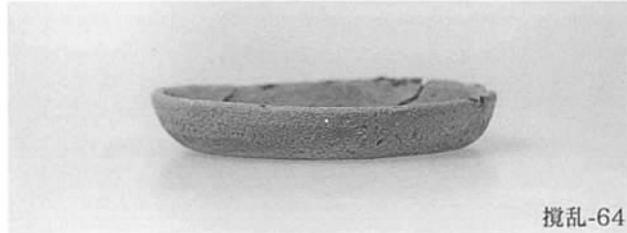
攪乱-73



攪乱-63



攪乱-74



攪乱-64



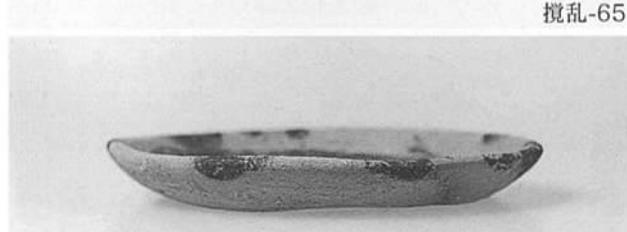
攪乱-76



攪乱-65



攪乱-77



攪乱-66



攪乱-78



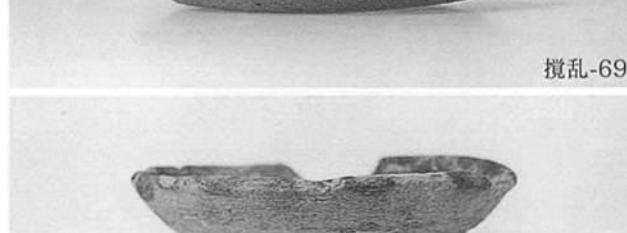
攪乱-68



攪乱-81

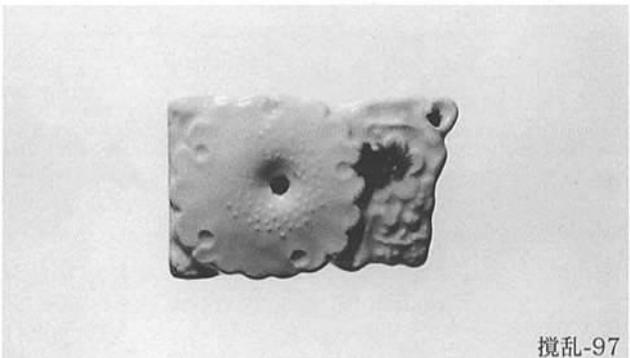


攪乱-69



攪乱-70







攪乱-107



攪乱-98



攪乱-112



攪乱-101



攪乱-116



攪乱-102



攪乱-118



攪乱-104



攪乱-105



攪乱-119



攪乱-106



攪乱-120



攪乱-133



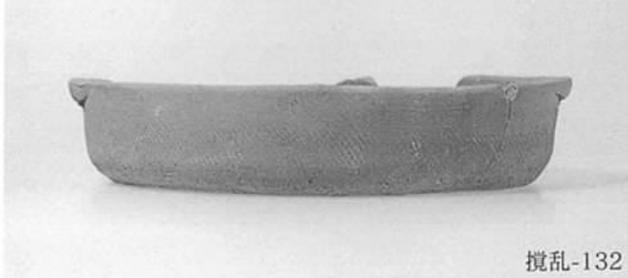
攪乱-121



攪乱-123



攪乱-134



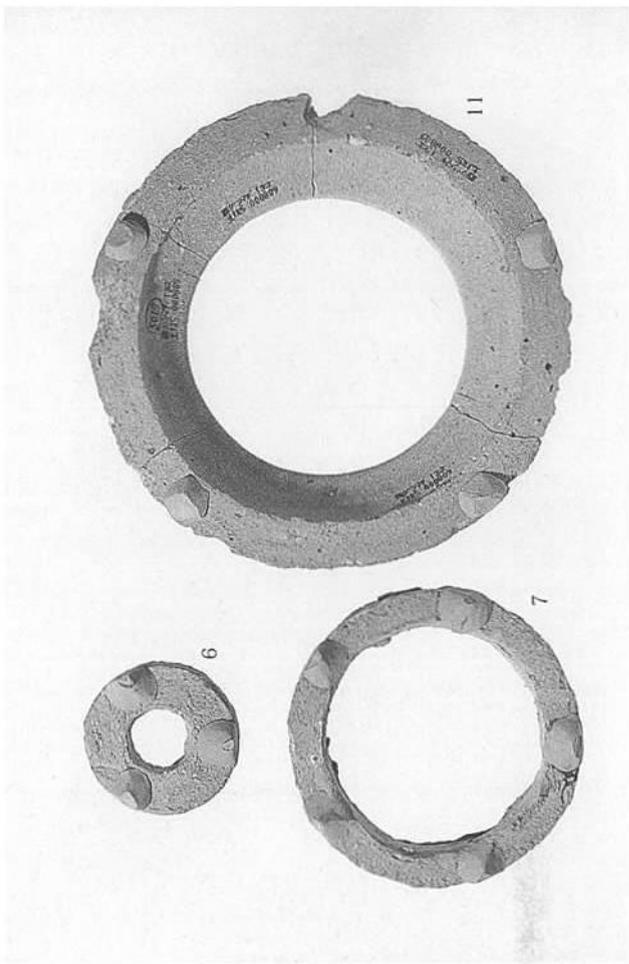
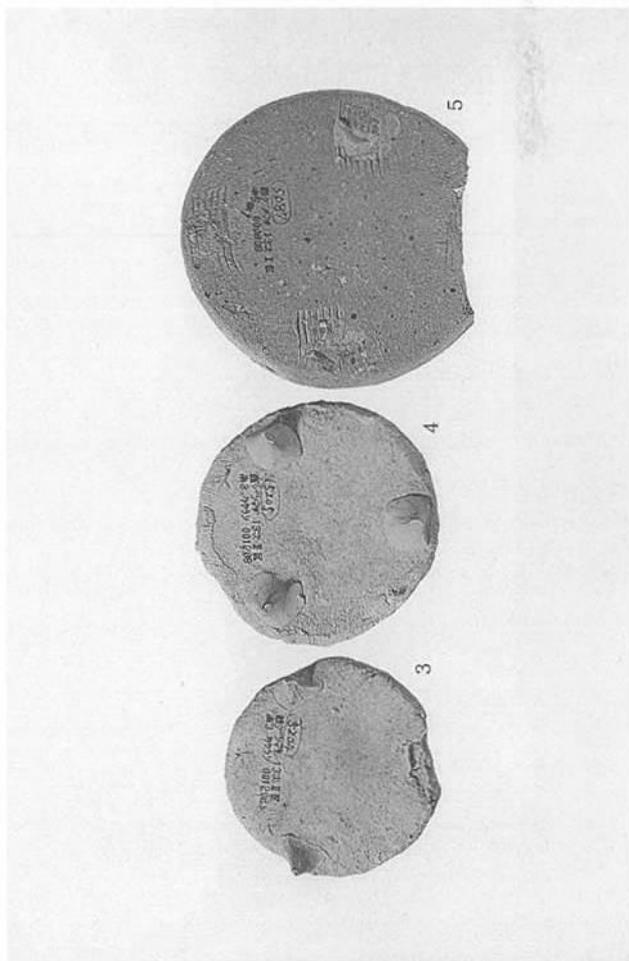
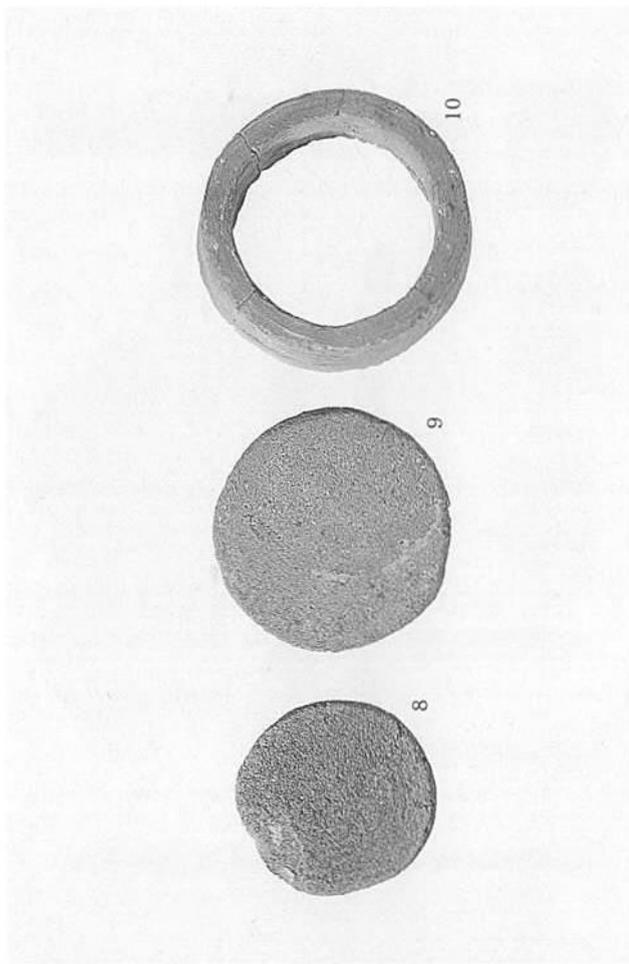
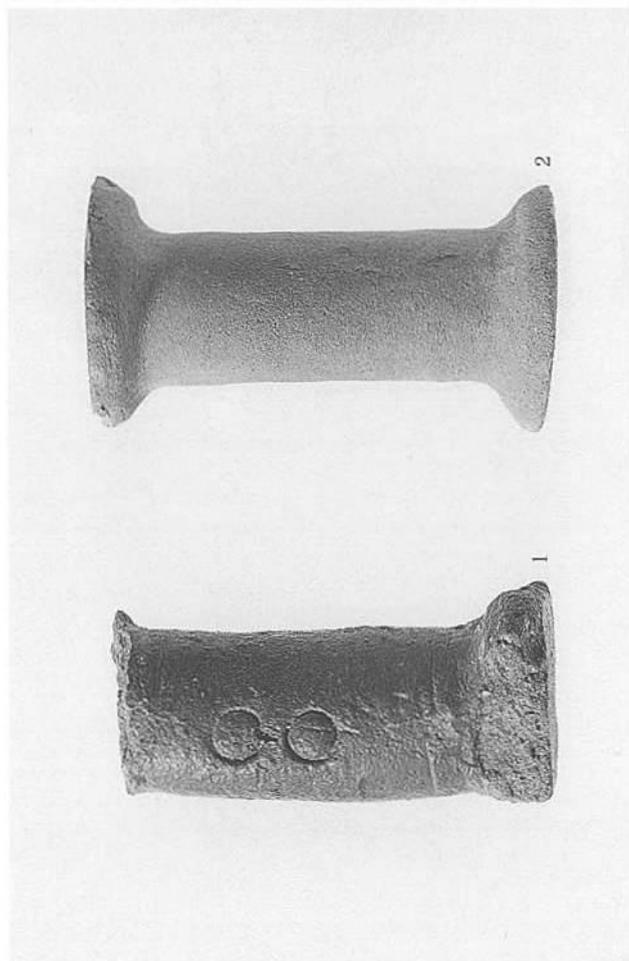
攪乱-132



1号埋甕

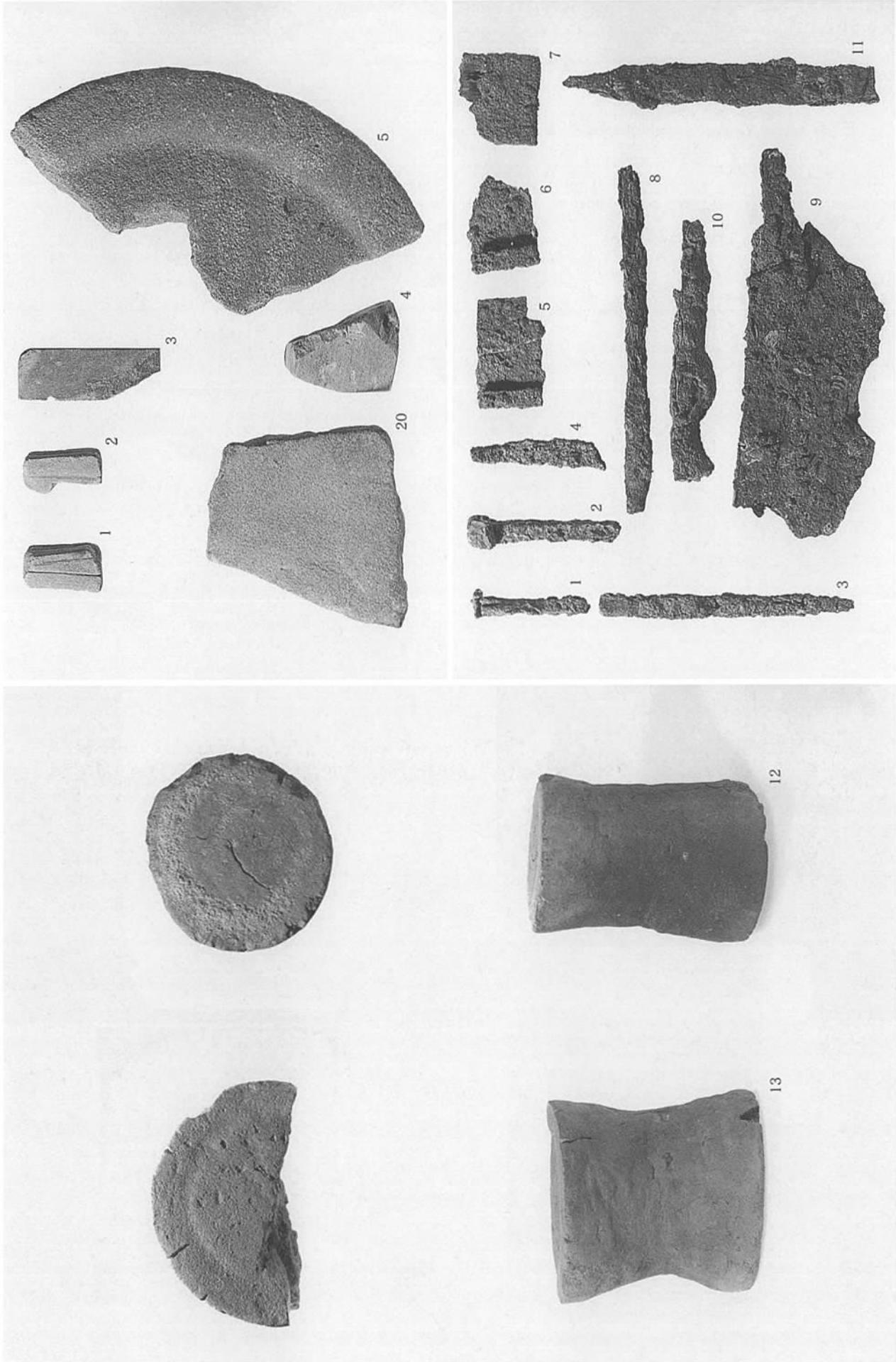


近世土製品-10



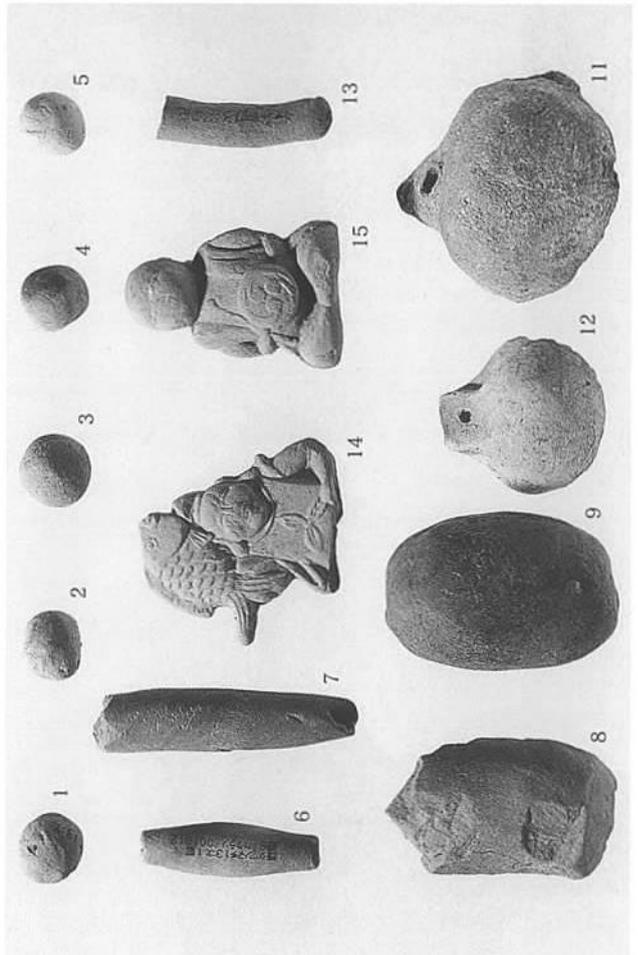
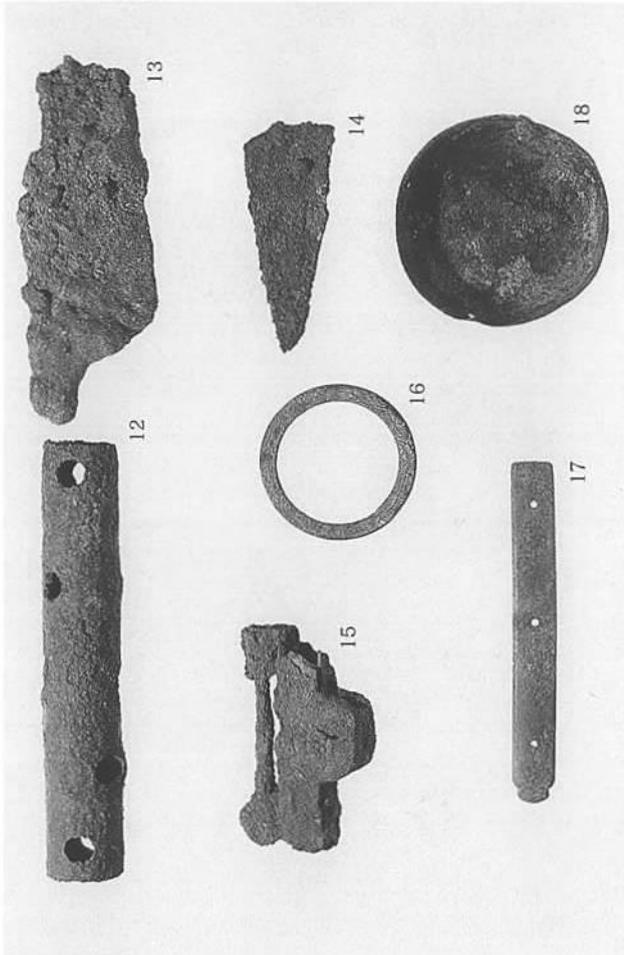
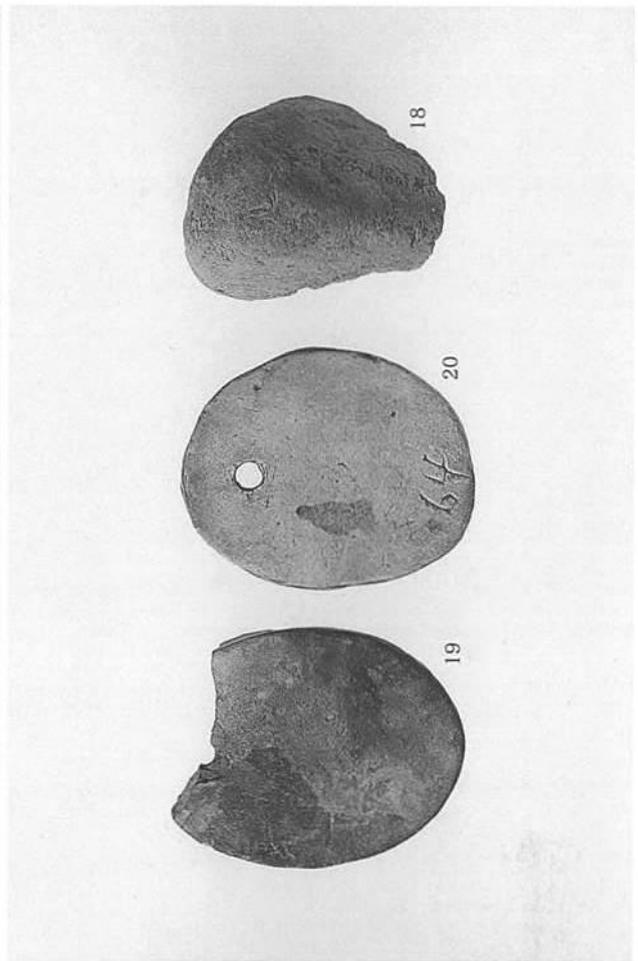
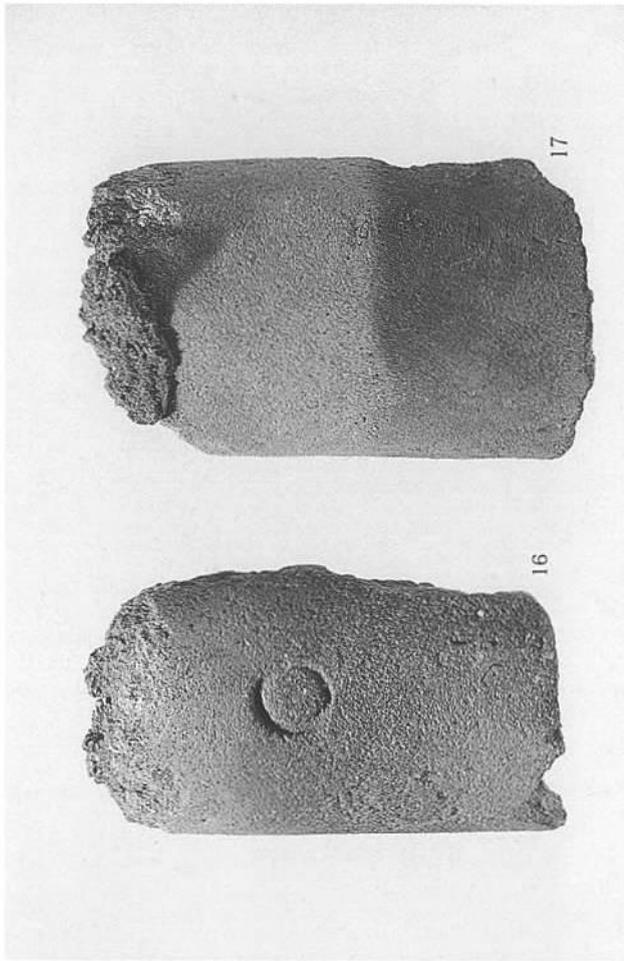
1. 窯道具①
2. 窯道具②

3. 窯道具③
4. 窯道具④



1. 窯道具⑤

2. 古墳時代、近世以降の石製品
3. 近世以降の金属製品

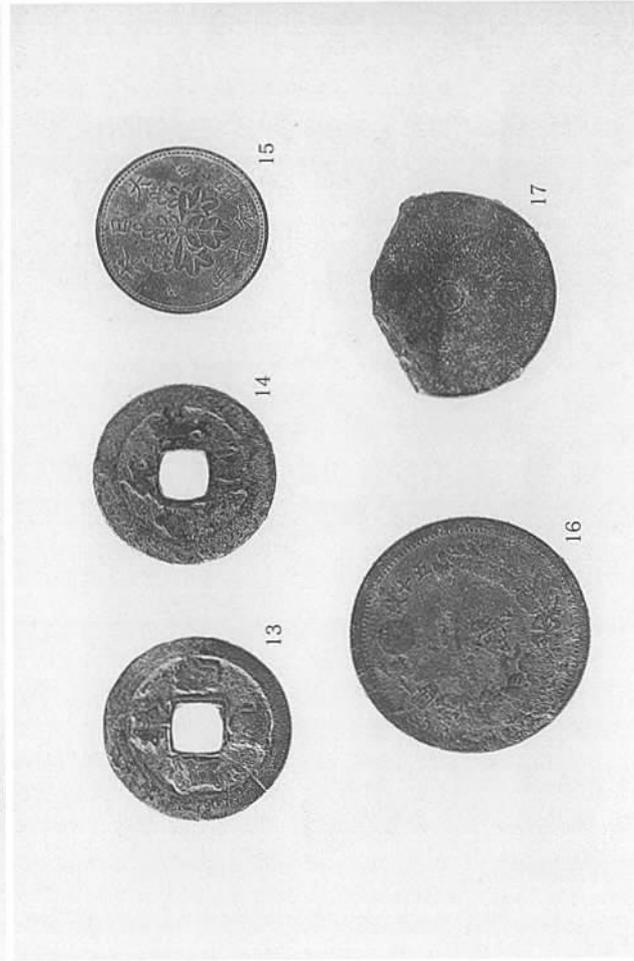
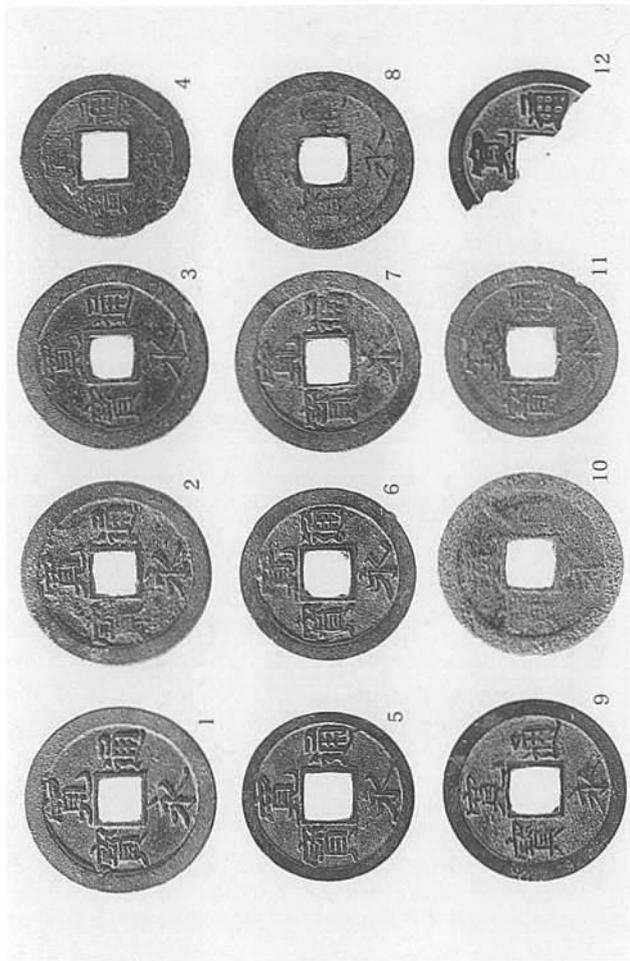


3. 近世以降の土製品②
4. 近世以降の土製品③

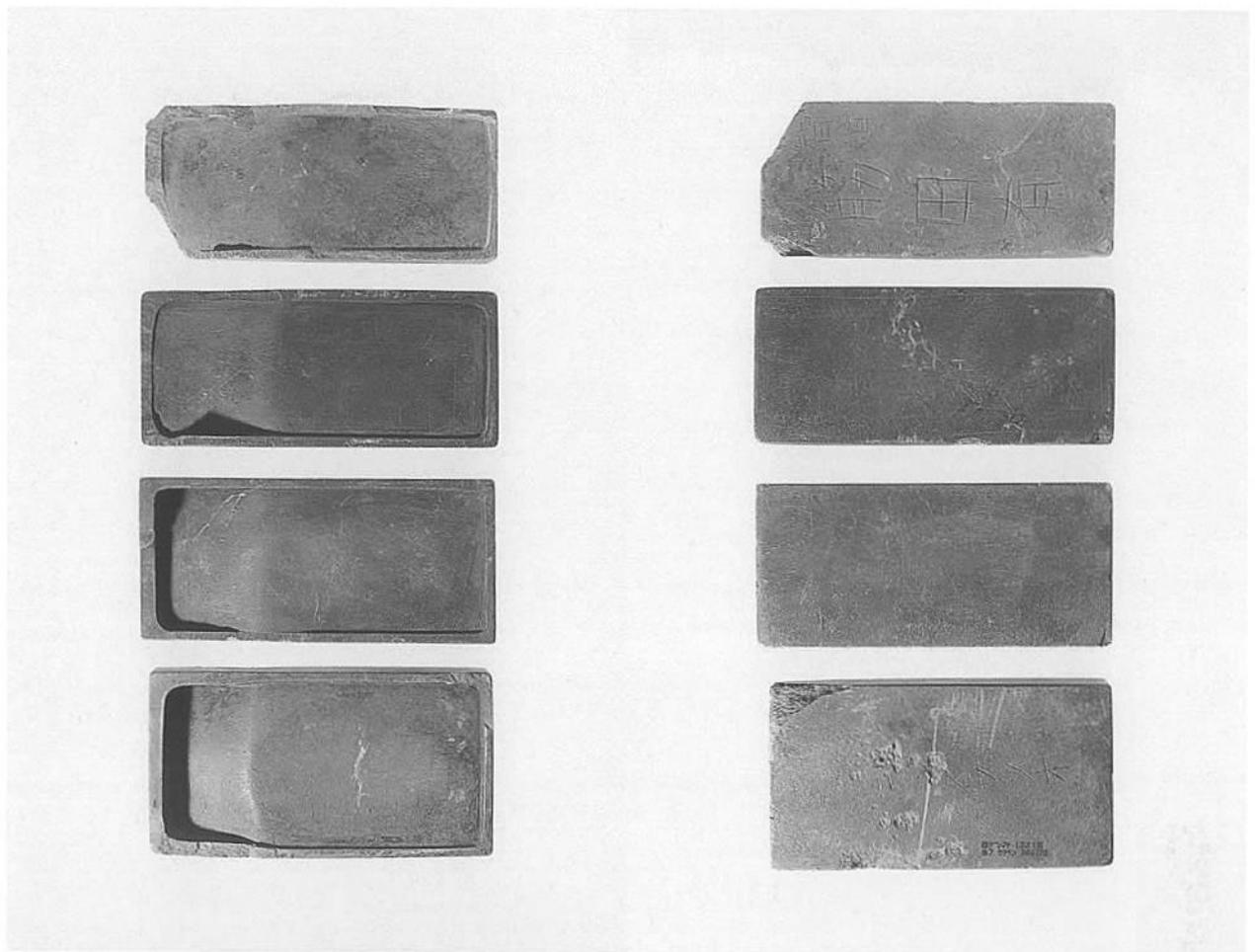
1. 近世以降の金属製品②
2. 近世以降の土製品①



3. ガラス瓶①
4. ガラス瓶②



1. 貨幣①
2. 貨幣②



3. 硯



1. ガラス瓶③
2. ガラス瓶④

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしじんまちいせき							
書名	西新町遺跡V							
副書名	県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告4							
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第178集							
編著者名	吉田東明・坂元雄紀							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 。 。	東経 。 。 。	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしじんまちいせき 西新町遺跡 13次	ふくおかし 福岡市 さわらくにしじん 早良区西新 6-1-10	401307	0240	33°	130°	20000703	2,043.9	学校改築
				34′	21′	20010216		
				50″	30″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西新町遺跡 13次	集落	古墳 近世 近代	土坑 溝 落ち込み		土器 陶磁器 石製品 土製品 金属製品		多数の半島系 遺構・遺物 近世窯業関連遺物	

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 15	登録番号 7

西新町遺跡 V

福岡県文化財調査報告書 第178集

平成15年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社 チューエツ福岡工場
福岡市博多区東比恵2-9-1